

茨城県教育財団文化財調査報告第285集

うえ の ふる や しき
上野古屋敷遺跡1

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ

上 卷

平成 19 年 3 月

独立行政法人 都市再生機構茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団



上野古屋敷遺跡遠景（筑波山・小田城方面を望む）



円筒埴輪棺出土状況（第1号墳周溝内土壕1から）

序

つくば市は、日本における科学技術の研究開発の中核として、さらに国際交流の拠点としてふさわしい街づくりを進めております。この新しい街づくりの一環として、つくば市と独立行政法人都市再生機構茨城地域支社は、市と東京圏を直結する「つくばエクスプレス」の整備と同時に、鉄道敷設とその沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団つくば開発局（現独立行政法人都市再生機構茨城地域支社）から開発地内の埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け、平成8年4月から平成14年3月にかけて中根中谷津遺跡、東岡中原遺跡、金田西遺跡、金田西坪B遺跡、九重東岡廃寺、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡の調査を実施してまいりました。その成果はすでに当財団の文化財調査報告第139・155・159・170・182・195・209・251集として報告したところであります。

本書は、上野古屋敷遺跡の平成12・13年度における調査の成果を収録したものであります。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として広く活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査及び本書の刊行に至るまで、委託者である独立行政法人都市再生機構茨城地域支社から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人見 實 徳

例 言

1 本書は、都市基盤整備公団茨城地域支社（現独立行政法人都市再生機構茨城地域支社）の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成12年7月から平成12年10月までと、平成13年4月から平成14年3月まで発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字上野字石塔251番地の2ほかに所在する上野古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調査 第1次 平成12年7月1日～平成12年10月31日 第2次 平成13年4月1日～平成14年3月31日

整理 平成14年3月1日～平成14年3月31日及び平成17年4月1日～平成19年3月31日

3 当遺跡の発掘調査は、調査第二課長鈴木美治の指揮のもと、以下の者が担当した。

平成12年度

首席調査員兼班長	瓦吹 堅		
主任調査員	村上 和彦	主任調査員	小竹 茂美
主任調査員	長谷川 聡	副主任調査員	宮田 和男

平成13年度

首席調査員兼班長	森野谷 悟	平成13年4月1日～平成14年3月31日
首席調査員	鯉淵 和彦	平成13年4月1日～平成13年8月31日 平成13年10月1日～平成14年3月31日
首席調査員	山口 厚	平成14年3月1日～平成14年3月31日
主任調査員	三谷 正	平成13年4月1日～平成14年3月31日
主任調査員	白田 正子	平成13年5月1日～平成13年6月6日
主任調査員	小竹 茂美	平成13年4月1日～平成13年6月6日 平成13年11月1日～平成14年3月31日
主任調査員	横倉 要次	平成14年2月1日～平成14年3月31日
主任調査員	成島 一也	平成13年4月1日～平成13年4月30日
主任調査員	島田 和宏	平成14年3月1日～平成14年3月31日
主任調査員	鴨志田祐一	平成13年10月1日～平成14年3月31日
主任調査員	飯泉 達司	平成13年6月1日～平成13年6月30日
主任調査員	近藤 恒重	平成14年1月4日～平成14年1月31日
副主任調査員	駒沢 悦郎	平成13年10月1日～平成13年11月30日 平成14年2月1日～平成14年3月31日
調査員	鹿島 直樹	平成13年12月1日～平成14年3月31日
調査員	越田真太郎	平成13年4月1日～平成14年3月31日

4 整理及び本書の執筆・編集は、平成13年度においては整理第二課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

主任調査員 大塚 雅昭 第3章第3節第1号～4号住居跡、第1～6・8号溝跡、
第2～256号土坑

平成17・18年度においては整理第一課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

首席調査員 三谷 正 第1～3章第3節1～7(2)、(7)・(8)、(3)・(4)、9、第4節
調査員 桑村 裕 第3章第3節7(3)～(6)、(9)～(12)、8

5 本書の作成にあたり、第1号墳の周溝内土壁から出土した埴輪棺については独立行政法人東京国立博物館保存修復室主任研究員古谷毅氏に、出土した陶磁器については財団法人出光美術館主任学芸員荒川正明氏に御指導いただいた。また、出土した漆器・鳥形木製品の保存処理・樹種同定については、株式会社京都科学に委託した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅳ系座標を原点とし、 $X = +12,880\text{m}$ 、 $Y = +26,080\text{m}$ の交点を基準点 (A 1a) とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を()を付して併記した。
- 3 遺構・遺物・土層の実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI - 住居跡 SB - 掘立柱建物跡 SK - 土坑 SE - 井戸跡 SD - 堀跡・溝跡 WT - 水溜遺構
SP - 方形竈穴遺構 UP - 地下式坑 DP - 廃棄土坑 SF - 道路跡 PG - ビット群 SA - 欄跡
TM - 古墳 TD - 古墳周溝内土壌 ST - 墓坑 CP - 火葬土坑 P - 柱穴 FP - 炉跡
SX - 不明遺構

遺物 P - 土器・陶器・磁器 TP - 拓本記録土器 DP - 土製品 Q - 石器・石製品 M - 金属製品
W - 木製品 T - 瓦





土層 K - 攪乱

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

- 6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は400分の1、遺構実測図は原則60分の1とし、遺構の規模に応じて縮尺で掲載した。
- (2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺を表示した。
- (3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

 焼土・赤彩・施軸・道路	 炉・火床面(赤変)・繊維土器断面
 竈部材・粘土範囲・炭化物範囲・黒色処理・漆	 柱痕跡・油煙・煤・灰
●土器 ○土製品 □石器・石製品 △金属製品 ▲木製品 ☆骨片 ★歯 ■瓦 ----- 硬化面	

- 7 遺物観察表及び遺構一覧表の作成方法については、次の通りである。

- (1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
- (2) 計測値の単位はcm及びgで示したが、大きさにより異なる場合もありそれらについては個々に単位を表示した。
- (3) 遺物観察表及び遺構一覧表とも()は現存値、[]は推定値であることを示している。
- (4) 備考欄には、土器の現存率及び写真図版番号の他に、必要と思われる事項を記した。
- 8 「主軸」は、竈(炉)を持つ竈穴住居跡については竈(炉)を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

抄 録

ふりがな	うえのふるやしきいせき							
書名	上野古屋敷道跡1							
副書名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第285集							
編著者名	三谷 正 大塚 雅昭 桑村 裕							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行年月日	2007(平成19)年3月23日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡	所在地							
上野古屋敷道跡	茨城県つくば市 おおあずまのあざまき 大学上野字石塔 251番地の2ほか	08220 1 510	36度 7分 1秒 (36度 6分 50秒)	140度 7分 24秒 (140度 7分 36秒)	242 ~ 28.1m	20000701 ~ 20001031 20010401 ~ 20020331	45,044㎡ 2,166㎡ 42,878㎡	中根・金田 台特定土地 区画整理事 業に伴う事 前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上野古屋敷道跡	包蔵地 集落跡	旧石器 縄文	石器出土地点 竪穴住居跡 土坑	1か所 8軒 22基	剥片 縄文土器(鉢・深鉢)・土製 品(土版)・石器・石製品(磨 石・凹石・打製石斧・磨製石 斧・鎌)・剥片		帆立貝式の前 方後円墳1基が 確認されており、 古墳の周溝を掘 り込む土壌から は円筒埴輪が 確認されている。	
		弥生	竪穴住居跡	11軒	弥生土器(壺)・石器(砥石カ)			
		古墳	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑	54軒 1棟 2基	土師器(碗・埴・器台・炊 器)・高坏・壺・甕・瓶・ミニ チュア土器)・土製品(球状 土錘・紡錘車)・石器・石製 品(砥石・磨石・敲石・紡錘 車・有孔円板)			
		奈良	竪穴住居跡	7軒	土師器(坏・甕)・須恵器(坏 ・蓋・甕)・土製品(支脚)・鉄 製品(紡錘車軸カ)			
		平安	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡 土坑	27軒 2棟 2条 2基	土師器(坏・高台付坏・高台 付碗・皿・甕)・須恵器(坏・ 蓋・甕・甕・瓶・瓶・有耳 壺・円面硯)・灰輪陶器(短 頸壺)・土製品(紡錘車)・石 器・石製品(磨石・砥石・支 脚)・鉄器(刀子)			

	中世	掘立柱建物跡	44棟	土師質土器(皿・内耳鍋・香炉・甕・播鉢・火鉢)、瓦質
		欄跡	3列	土器(火鉢)、陶器(碗・皿)
		ピット群	48か所	播鉢・片口鉢・甕・花瓶・瓶
		溝跡	200条	子・水注・水滴、磁器(皿)、
		道路跡	11条	青磁(碗・皿)、白磁(小坏・
		井戸跡	47基	皿)、石器(磨石・砥石・石
		水溜遺構	21基	臼・鍋・硯)、石塔(五輪塔・
		廃棄土坑	1基	宝篋印塔・六地藏石幢)、鉄
		方形堅穴遺構	12基	器・鉄製品(釘・鑿・鏝・火
		地下式坑	15基	打金・鋤先・踏)、金属器・
土坑	110基	金属製品(鏝・煙管・古銭)、		
土坑群	2か所	瓦(軒丸瓦・平瓦)、木器・		
				木製品(漆器碗・槽・蓋・つ
				け木・下駄・柱材)
	近代以降・ 時期不明	溝跡	13条	土師質土器(皿・内耳鍋)、陶
		道路跡	8条	器(碗・皿・瓶)、磁器(碗・
		土坑	536基	皿)、土製品(埴輪)
		塚跡	1基	
		不明遺構	3基	
葛城跡	古墳	古墳	1基	土師器(碗・甕)、須恵器
		古墳周溝内土坑	2基	(甕)、石製品(双孔円板)、
				土製品(埴輪)
	中世	墓坑	27基	土師質土器(皿・内耳鍋)、陶
		火葬土坑	6基	器(甕)、青磁(皿)、金属製
	近世	墓坑	20基	器碗)
				土師質土器(皿)、陶器(碗)、
				石器(硯)、金属製品(古銭・
				不明)、木製品(鳥形木製品)
生産遺構	近現代	炭焼遺構	1基	
その他	遺物包含層		1か所	縄文土器、弥生土器、土師器、
				須恵器、土師質土器、陶器、
				石炭、礫
要約	<p>当遺跡名が示すように、当城は現在の上野地区の故地と言われ、調査区には古屋敷の字名が残る区域である。調査の結果から、縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中期、奈良・平安時代、中世後半と断続的に集落が営まれた旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡であることが判明した。</p>			

目 次

— 上 卷 —

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 旧石器時代の遺構と遺物	11
(1) 調査の概要と方法	11
(2) 石器出土地点	11
2 縄文時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居跡	12
(2) 土坑	24
3 弥生時代の遺構と遺物	31
竪穴住居跡	31
4 古墳時代の遺構と遺物	48
(1) 竪穴住居跡	48
(2) 掘立柱建物跡	147
(3) 古墳	149
(4) 古墳周溝内土壇	154
(5) 土坑	156
5 奈良時代の遺構と遺物	157
竪穴住居跡	157
6 平安時代の遺構と遺物	172
(1) 竪穴住居跡	172
(2) 掘立柱建物跡	226
(3) 溝跡	229
(4) 土坑	231
7 中世の遺構と遺物	232
(1) 掘立柱建物跡	232

(2) 欄跡	279
(3) ビット群	281
(4) 井戸跡	305
(5) 水溜遺構	354
(6) 廃棄土坑	366

— 中 卷 —

(7) 溝跡	373
(8) 道路跡	572
(9) 方形竪穴遺構	574
00 地下式坑	583
01 墓坑	600
02 火葬土坑	617
03 土坑	622
04 土坑群	635
8 近世の遺構と遺物	644
墓坑	644
9 その他の遺構と遺物	655
(1) 溝跡	655
(2) 道路跡	658
(3) 土坑	659
(4) 炉跡	668
(5) 炭焼遺構	669
(6) 不明遺構	669
(7) 遺物包含層	673
(8) 遺構外出土遺物	679
第4節 まとめ	684

付図

— 下 卷 —

写真図版

遺構 PL1～PL94

遺物 PL95～PL126

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

つくば市は、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりを進めている。その一環として取り組んでいるのが、平成17年8月開業の「つくばエキスポレス」の建設とそれに伴う沿線の開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に名称を変更）を事業主体として、土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局長から茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は平成7年5月15日～6月8日に現地踏査を行い、上野古屋敷遺跡については平成11年8月10～12日、9月30日、11月26・29・30日、12月1・15日、平成12年1月14・17～19日に試掘調査をそれぞれ実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年2月15日、茨城県教育委員会教育長は、都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに、事業地内に上野古屋敷遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成12年3月、都市基盤整備公団茨城地域支社長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3の第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更による現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成12年3月12日、都市基盤整備公団茨城地域支社長から、茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成12年3月24日、茨城県教育委員会教育長は、都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに上野古屋敷遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、都市基盤整備公団茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成12年7月1日から平成13年3月31日まで、上野古屋敷遺跡の発掘調査（10,979㎡）を実施することとなり、発掘調査を開始した。しかしながら、同期同時に調査を実施していた同区画整理事業地内の上野陣場遺跡の業務量が当初の計画を超えると判断されたため業務量の見直しが行われ、平成12年度の発掘調査（調査終了面積2,166㎡）は平成12年10月31日までとなった。

平成13年3月、改めて都市基盤整備公団茨城地域支社長から、茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。茨城県教育委員会教育長は、都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに上野古屋敷遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、都市基盤整備公団茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成13年4月1日から平成14年3月31日まで、上野古屋敷遺跡の発掘調査（前年度分の8,813㎡を含む42,878㎡）を実施することとなり、発掘調査を開始した。

第2節 調査経過

平成12年度の調査は、平成12年7月1日から平成12年10月31日までの4か月間にわたって実施した。

平成13年度の調査は、平成13年4月1日から平成14年3月31日までの12か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	12年度				13年度												
	7月	8月	9月	10月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
調査準備 表土除去 道構確認	■				■			■	■								
道構調査		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
補足調査 撤収																	■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上野古屋敷遺跡は、茨城県つくば市大字上野字石塔251番地の2ほかに所在している。

つくば市は茨城県の南西部に位置し、東方約5kmには霞ヶ浦、北端には筑波山がある。つくば市域の地勢は、筑波山の南西麓を南下する桜川の低地と、市の西側を南下する小貝川の低地及びそれらに挟まれた標高が25～26mのほぼ平坦な台地からなっている。この台地の両端を流れる桜川と小貝川によって大きく開折された流域には、標高約5mほどの沖積低地が形成され、台地との標高差は約20mである。また、この二つの河川間の台地には、花室川、蓮沼川、東谷田川、西谷田川など中小河川が南流して、台地縁部を樹枝状に開折している。そのため、谷津や低地が南北に細長く発達し（第1図）、北から南に細長く延びる舌状台地が形成されている。

この台地は筑波・稲敷台地と呼ばれ、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であり、地質的には、新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積している。下層は成田層及びびんヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、その上に関東ローム層が堆積し、最上部は腐植土層となっている¹⁾。関東ローム層は、新期ロームに属し、武蔵野ローム、立川ロームに比定され、軽石層の分布をみると、富士・箱根火山群の活動に由来するものと考えられる。

当遺跡は、つくば市の東部（旧新治郡桜村）、桜川を望む桜川右岸の標高25～28mの舌状台地上に立地している。北西側と東側に幅の狭い谷津が入り込み、その低位面との比高は約10mほどである。谷津を挟んだ約100m北西の台地上には上野陣場遺跡、約1km南西の台地上には柴崎遺跡が所在している。

当遺跡とその周辺の土地利用の現状は、台地上の縁辺部の一部が雑木林・杉林のほか、主として畑地として利用されている。また、遺跡の位置する舌状台地を挟むように入り込む谷津は水田または休耕田であり、桜川流域の低地は水田として利用されている。

第2節 歴史的環境

上野古屋敷遺跡は、古墳時代前・中期と中・近世を中心とした旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。ここでは、桜川と花室川流域（旧新治郡桜村）の同時代の遺跡を中心に分布の概要について述べる²⁾。

旧石器時代の遺跡数は他の時代と比べて極めて少ない。ナイフ形石器や尖頭器は桜川左岸の北条中台遺跡、花室川左岸の柴崎遺跡〈2〉、東国中原遺跡〈3〉、蓮沼川左岸の菊間神田遺跡〈4〉から出土している。東国中原遺跡では10か所の石器集中地点が確認され、3か所の石器集中地点から、ナイフ形石器、掻器、楔形石器、尖頭器、石核、石刃、剥片などが多数出土している。

縄文時代になると、当流域では遺跡の存在が数多く確認されている。桜川右岸だけでも、柴崎遺跡（早期～前期、後期）〈2〉、上野天神遺跡（中期）〈5〉、花室遺跡（中期～晩期）〈6〉、金田西坪B遺跡（中期～晩期）〈7〉、上境旭古貝塚（後期～晩期）〈8〉、中根中谷津遺跡（後期～晩期）〈9〉など、多くの遺跡が所在し、下流域では国指定史跡の土浦市上高津貝塚〈10〉がある³⁾。

弥生時代の遺跡は他の時代と比べて少なく、当遺跡周辺では9遺跡が確認されている。隣接する上野陣場遺跡〈13〉では住居跡5軒、土坑1基、当遺跡から北西1.5kmの地点に位置している玉取向山遺跡〈11〉では

住居跡4軒、玉取遺跡(45)では住居跡1軒が確認されている。

古墳時代の遺跡は、当流域では61遺跡が確認されている。北条中台遺跡では堅穴住居跡100軒のほか、古墳65基と、方形周溝墓2基が確認され、居住域と墓域の複合地域であったことが判明している。また、小田小田橋遺跡(12)では、6～7世紀の堅穴住居跡9軒が確認されている。本跡から谷津を挟んで100mほど北西に位置する上野陣場遺跡(13)では、堅穴住居跡80軒や掘立柱建物跡3棟が確認されており、前期の小集落と後期の6世紀後葉から7世紀前葉にかけての大集落が確認されている。その他、栗原中台遺跡(14)、栗原大山遺跡(15)、上境作ノ内遺跡(16)などの包蔵地が数多く所在している。古墳・古墳群では、当遺跡に隣接して当地域最大の全長80mの前方後円墳上野天神塚古墳(17)、上野定使古墳群(18)がある。その他、栗原愛石塚古墳(19)、栗原十日塚古墳(20)をはじめ、桜川を望む右岸台地上縁辺に玉取古墳群(21)、円筒埴輪・人物埴輪・動物埴輪が出土した上境縄の古古墳群(22)、埴輪片・石棺破片が出土している横町古墳群(23)、前方後円墳2基・円墳1基から構成される松塚古墳群(24)などが位置している。

奈良・平安時代、当該地は筑波郡に境を接しながら河内郡菅田郷に属し、12世紀には田中の庄に属していた。この時代の遺跡は、流域内で62遺跡が確認されている。なかでも、当遺跡の南々東約2kmに位置している国指定史跡の金田西(25)・金田西坪A(26)・金田西坪B遺跡(7)、九重東岡庵寺跡(27)が目される。九重東岡庵寺跡からは、礎石、瓦塔、蔵骨器などが出土しており、これまでの確認調査で、基壇の一部と溝、堂宇と想定される掘立柱建物跡が検出されたほか、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などが瓦溜め土坑から出土している⁴¹⁾。金田西・西坪B遺跡では、1959年に桜中学校校庭の拡張工事に伴い表土を除去したところ、倉庫跡と考えられる3間×4間で総柱の掘立柱建物跡3棟が確認され、炭化米も多量に出土したと記録されている⁴²⁾。2002年には、金田西遺跡、金田西坪A・B遺跡、九重東岡庵寺の確認調査が実施され、郡衙正倉城の確認をはじめ、大まかな遺構群の変遷と各施設や区域の性格などが把握され、台地の下に広がる桜川低地に条集が遺存していたことなどを含めて、河内郡の郡衙跡と推定された⁴³⁾。この両遺跡に隣接している東岡中原遺跡(3)は、これら郡衙城とはほぼ同時期に展開し密接に関係する集落跡と考えられている。また、桜川の上流左岸には、筑波郡衙及び郡寺である国指定史跡平沢官衙遺跡や筑波廃寺(中台庵寺)跡も所在している。他にも、160軒以上の堅穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された柴崎遺跡(2)、70軒の堅穴住居跡や11棟の掘立柱建物跡や氷室状遺構と考えられる大形円形土坑3基が確認されている上野陣場遺跡(13)、九重庵寺系軒平瓦と筑波庵寺系軒丸瓦が出土した下大島遺跡(28)などが位置している。

中・近世以降の遺跡は、近年の調査で数多く確認され、中世54遺跡、近世50遺跡を数える。当遺跡に隣接している柴崎遺跡(2)では、中世の遺構として方形堅穴遺構が95基確認され、12～13世紀の集落跡と想定されている。また、栗原古塚遺跡(39)、栗原沼向遺跡(40)、栗原白旗遺跡(41)、栗土器屋遺跡(52)などの包蔵地も確認されている。この他では、城館跡も多く、桜川左岸には小田氏の居城であった国指定史跡小田城跡(29)、田土部館跡(30)があり、桜川右岸には方徳故城跡(31)、金田城跡(32)、花室城跡(33)、上ノ室城跡(34)などが位置している。当地域は鎌倉時代から室町時代にかけては小田氏、戦国時代においては小田氏と佐竹氏の支配下となり、中世末まで上野地区は上境・中根・土器屋・松塚・横町・柴崎地区で一郷を構成し、筑波郡と境を接することから境郷とも呼ばれていた。江戸時代は上野・栗原地区は堀氏玉取藩の知行地であったが、旧桜村の多くは土浦藩に属することになり、明治4年(1871年)の廃藩置県に至ることとなる。さらに仏教関連では、筑波山の南、三村山麓一帯には中世寺院群が位置し、つくば市三村山清冷院薬師寺跡(35)には、13世紀半ば、大相の高僧忍性が来住して、布教に努めたと伝えられている。

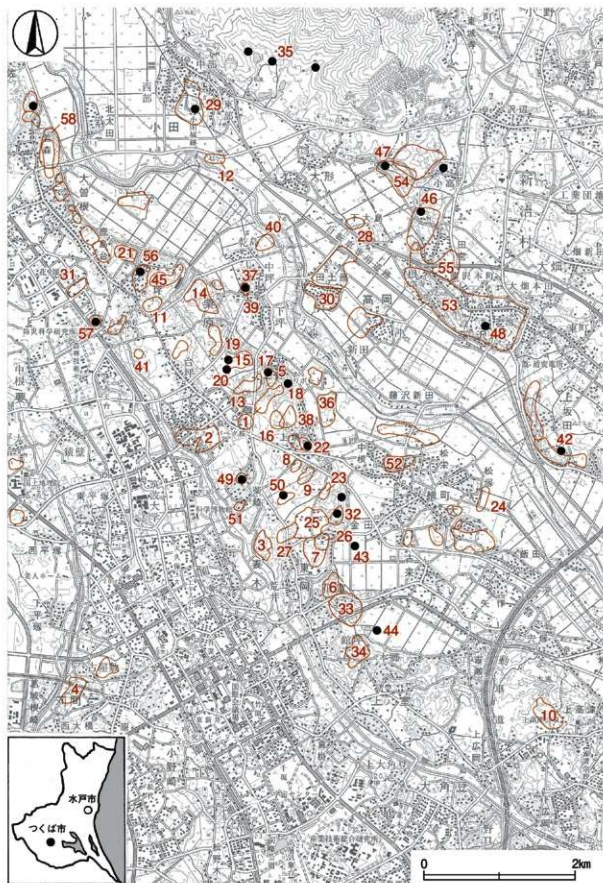
当該地は当遺跡の名称「上野古屋敷」が示すように、現在のつくば市大字上野地区の集落が中世後半に所在

したと言われている故地であり、遺跡内に小字で「古屋敷」の地番が残るところである。この上野地区の南東に隣接する上境地区にも、桜川沿いの微高地に小字で「古屋敷」の地名が残る区域があり、上境古屋敷遺跡(36)と確認されている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

註

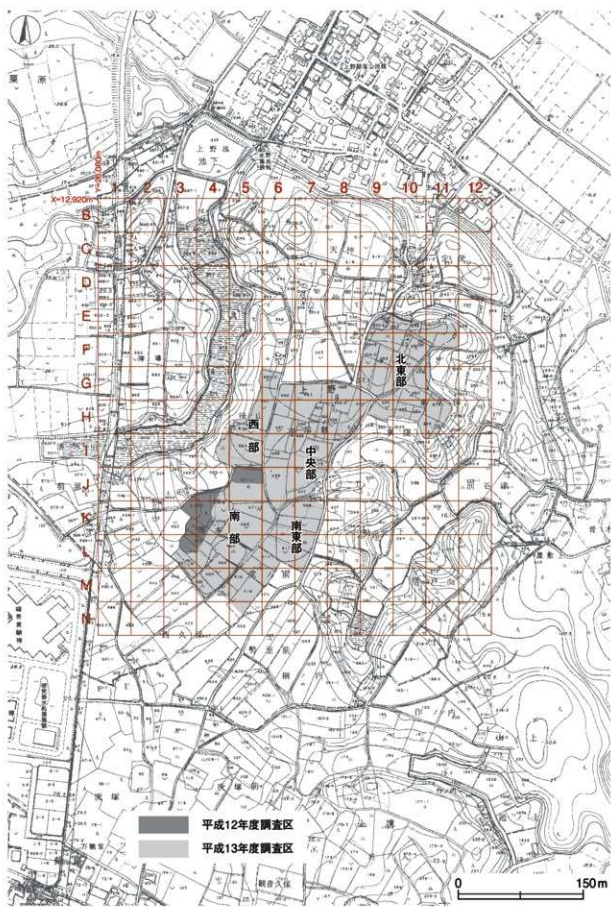
- 1) 大森昌術・蜂須紀夫「茨城の地質をめぐって」『日曜の地学』8 築地書館 1979年9月
- 2) a 茨城県教育庁文化課「茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)」茨城県教育委員会 2001年3月
 b 茨城県つくば市教育委員会「つくば市遺跡分布調査報告書 -谷田部地区・桜地区-」2001年3月
 c つくば市教育委員会「つくば市遺跡地図」2001年7月
 d 石橋光・関口友紀「玉取遺跡-火葬場建設に伴う発掘調査報告」つくば市教育委員会 2000年3月
 e 筑波町史編纂専門委員会「筑波町史 上巻」つくば市 1991年3月
 f 宮崎報恩会版「新編常陸国誌」1979年12月
 g 斎藤弘道「一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 田宮古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第57集 1990年3月
 h 土生朗治「研究学園都市計画板桜崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 桜崎遺跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第72集 1992年3月
 i 萩野谷悟「研究学園都市計画板桜崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 桜崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集 1994年9月
 j 吉川明宏・新井聡・黒澤秀雄「(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集 1997年12月
 k 川村廣博「中谷津遺跡1(仮称)中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集 1998年9月
 l 成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 中原遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集 2000年3月
 m 白田正子・高野節夫・仲村浩一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原遺跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
 n 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第182集 2002年3月
 o 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「金田西・西坪B遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第195集 2002年3月
 p 駒沢悦郎「東岡中原遺跡4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第251集 2004年3月
 q 財団法人茨城県教育財団「年報25」2005年7月
- 3) 佐藤孝雄・大内千年編「国指定史跡上高津貝塚A地点-史跡整備に伴う発掘調査報告書-」土浦市教育委員会 1994年3月
- 4) 九重庵寺遺跡調査団「東岡遺跡-九重庵寺跡調査報告-」桜村教育委員会 1984年3月
- 5) 桜村史編さん委員会「桜村史 上巻・下巻」桜村教育委員会 1982年3月
- 6) 白田正子「金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東岡庵寺 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集 2003年3月



第1図 上野古屋敷道路周辺遺跡分布図（国土地理院5万分の1「土浦」）

表1 上野古屋敷遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
①	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	30	田土部館跡(土浦市)							○	
2	柴崎遺跡	○	○	○	○	○	○	31	方徳故城跡							○	○
3	東岡中原遺跡	○	○	○	○	○	○	32	金田城跡							○	
4	苜間神田遺跡	○	○	○	○	○	○	33	花室城跡		○	○	○	○	○	○	
5	上野天神遺跡		○	○	○	○		34	上ノ室城跡		○			○	○	○	
6	花室遺跡		○		○			35	三村山清冷院極楽寺跡							○	
7	金田西坪B遺跡		○		○			36	上埴古屋敷遺跡					○	○	○	
8	上埴旭台貝塚		○		○			37	栗原古塚古墳				○				
9	中根中谷津遺跡	○	○			○	○	38	上埴作ノ内古墳群				○				
10	上高津貝塚(土浦市)	○						39	栗原古塚遺跡						○	○	
11	玉取向山遺跡		○	○		○	○	40	栗原沼向遺跡				○	○	○	○	
12	小田小田橋遺跡				○	○		41	栗原白旗遺跡		○			○	○	○	
13	上野陣場遺跡		○	○	○	○	○	42	武者塚古墳				○				
14	栗原中台遺跡		○	○	○	○	○	43	金田本田遺跡(条里)						○	○	
15	栗原大山遺跡				○	○	○	44	上ノ室条里						○		
16	上埴作ノ内遺跡			○	○	○		45	玉取遺跡				○	○	○	○	
17	上野天神塚古墳				○			46	田宮須恵器窯跡(土浦市)						○		
18	上野定使古墳群				○			47	小高須恵器窯跡(土浦市)						○		
19	栗原愛宕塚古墳				○			48	藤沢城跡(土浦市)							○	
20	栗原十日塚古墳				○			49	柴崎片岡上館跡						○	○	
21	玉取古墳群				○			50	柴崎大堀遺跡							○	
22	上埴遠の台古墳群				○			51	柴崎南遺跡		○	○	○	○	○	○	
23	横町古墳群				○			52	栄土器屋遺跡						○	○	
24	松塚古墳群				○			53	岡の宮遺跡(土浦市)		○	○	○				
25	金田西遺跡		○		○	○	○	54	高崎山古墳群(土浦市)					○			
26	金田西坪A遺跡					○		55	田宮古墳群(土浦市)					○			
27	九重東岡庵寺跡				○	○		56	玉取城跡							○	
28	下大島遺跡				○			57	玉取一の矢古墳群					○			
29	小田城跡					○		58	大曾根松原遺跡		○	○	○	○	○	○	



第2図 上野古屋敷道路グリッド設定図(独立行政法人 都市再生機構茨城地域支社 中根・金田台地区現況調査土地図2500分の1)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

上野古屋敷遺跡は、つくば市の東部に位置し、桜川右岸の標高25.2～27.9mの舌状台地上に立地している。調査前の現況は、畑地及び平地林であり、平成12・13年度の調査面積は、45,044㎡である。

調査の結果、当遺跡は、旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡であることが判明した。旧石器時代の石器出土地点1か所、縄文時代の竪穴住居跡8軒、土坑22基、弥生時代の竪穴住居跡11軒、古墳時代の竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡1棟、古墳1基、古墳周溝内土壇2基、土坑2基、奈良時代の竪穴住居跡7軒、平安時代の竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡2条、土坑2基、中世の掘立柱建物跡44棟、欄跡3列、ピット群48か所、溝跡200条、道路跡11条、井戸跡47基、水溜遺構21基、廃棄土坑1基、方形竪穴遺構12基、地下式坑15基、墓跡27基、火葬土坑6基、土坑110基、土坑群2か所、近世の墓坑20基、その他、近代以降・時期不明の溝跡13条、道路跡8条、炉跡1基、炭焼遺構1基、土坑536基、不明遺構3基、及び遺物包含層1か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に280箱出土している。主な出土遺物は、旧石器時代は剥片であり、縄文時代は縄文土器片（鉢・深鉢）、石器・石製品（磨石・凹石・打製石斧・磨製石斧・鏃）、土製品（土版）、剥片などが出土している。弥生時代は弥生土器片（壺）、石器（砥石カ）、古墳時代は土師器（椀・埴器台・埴器台・高杯・壺・甕・瓶・ミニチュア土器）、土製品（埴輪、球状土鍾、紡錘車）、石器・石製品（磨石・砥石・有孔円板・紡錘車）、奈良時代は土師器（杯・甕）、須恵器（杯・蓋・甕）、平安時代は土師器（杯・高台付杯・高台付碗・皿・壺）、須恵器（杯・盤・蓋・甕・瓶・長頸瓶、有耳瓶、円面硯）、土製品（紡錘車）、鉄器（刀子）、中世は土師質土器（皿、内耳鍋・香炉・甕・播鉢・火鉢）、瓦質土器（火鉢）、陶器（碗・皿・甕・播鉢・片口鉢・瓶子・花瓶・水注・水滴）、磁器（染付皿）、石器・石製品（磨石・砥石・石臼・茶臼・鉢・硯）、石塔（五輪塔・宝篋印塔・六地藏石幢）、鉄器・鉄製品（釘・鑿・鋸・火打金・鋤先・蹄）、金属製品（鍾・煙管・古銭）、木器・木製品（椀・槽・下駄・つけ木・柱材）、近世は土師質土器（皿）、陶器（碗・皿）、磁器（碗・皿・甕）、石器（硯）、金属製品（古銭）、木製品（鳥形木製品・棺材）などである。

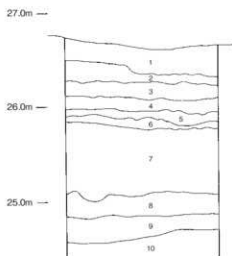
第2節 基本層序

調査区の南東部（K7b5）にテストピットを設定して、基本土層の観察を行った（第3図）。

第1層は暗褐色を呈する現耕作土で、ローム粒子を中量、パミス粒子を微量含んでいる。粘性・締まりとも普通で、層厚は20～27cmほどである。

第2層はローム粒子を極めて多量含み、パミス粒子を微量含む褐色を呈するローム層である。粘性は普通で、締まりは極めて強く、層厚は8～23cmである。

第3層はローム粒子を多量含み、パミス粒子を少量含む灰黄褐色を呈するローム層である。粘性は強く、締まりは極めて強



第3図 基本土層図

く、層厚は15～18cmである。

第4層はローム粒子を極めて多量含み、バミス粒子を微量含むにぶい黄褐色を呈するローム層である。粘性は強く、締まりは極めて強く、層厚は14～16cmである。

第5層はローム粒子を極めて多量含み、バミス粒子多量、黒色スコリア粒子を微量含むにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。始良 Tn 火山灰 (AT) を含む層の下に確認された黒色帯であることから第2黒色帯 (BB II) 上部に対比される。粘性・締まりとも極めて強く、層厚は5～15cmである。

第6層はローム粒子を多量含み、黒色スコリア粒子を少量、バミス粒子を微量含む褐色を呈するハードローム層である。第2黒色帯 (BB II) 下部に対比され、層厚は4～14cmである。

第7層は灰白色を呈する粘土層で、粘性・締まりとも極めて強い。常態粘土層にあたり、層厚は66～82cmである。

第8層はにぶい黄褐色を呈する砂質粘土層で、鉄分を多く含む層である。粘性・締まりとも極めて強く、層厚は18～24cmである。

第9層は明褐色を呈する砂質粘土層で、スコリアを極微量含む層である。粘性・締まりとも極めて強く、層厚は15～28cmである。

第10層以下はにぶい褐色を呈する砂質粘土層である。粘性・締まりとも極めて強い。

当遺跡では、標高が比較的高い区域 (27m以上) はローム層である第3・4層が厚く、住居跡等の遺構が数多く確認されている。また、標高が低い区域 (26m以下) ではローム層が薄く、古代以前の遺構が少ない。

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺構と遺物

(1) 調査の概要と方法

表採及び遺構確認作業において、数点の剥片が確認された北部（G9区内）と南東部の北側（K7区内）の2か所に調査区を設定し、調査を行った。

調査の結果、南東部調査区では確認面に近い位置で細片が1点確認されただけであるが、北部調査区では、剥片13点、細片5点が確認された。北部調査区を第1号石器出土地点として報告する。

(2) 石器出土地点

第1号石器出土地点（第4・5図）

位置 調査区北部のG9c4～G9e5区で、標高27～28mの台地上の当遺跡で最も標高の高い平坦部に確認された。

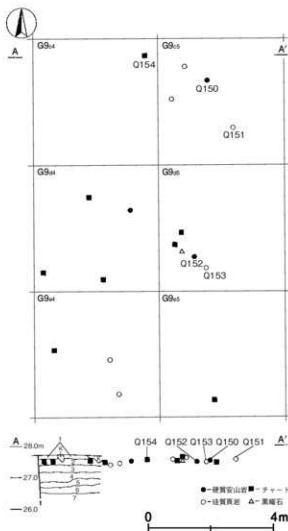
調査土層 縄文時代の遺構調査面下の土層で、7層に細分層される。第1層は基本層の第4層、第2層が第5層、第3層が第6層にそれぞれ対応している。

土層解説

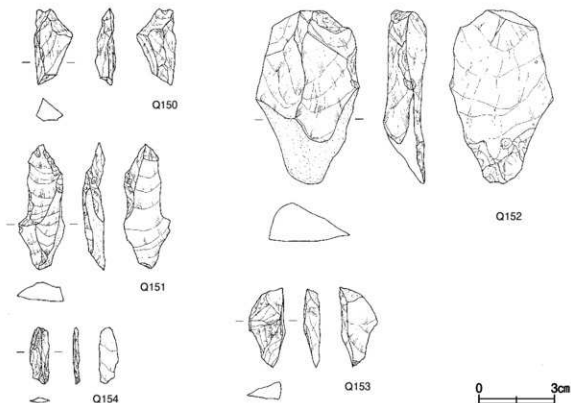
- | | | |
|---|-------|---------------------------------|
| 1 | にぶい褐色 | ローム粒子多量、赤色粒子・ガラス質火山灰微量（AT層に相当） |
| 2 | にぶい褐色 | ローム粒子多量、赤色粒子・黄褐色粒子微量（BBⅡ上部層に相当） |
| 3 | にぶい褐色 | ローム粒子多量、黄褐色粒子微量（BBⅡ下部層に相当） |
| 4 | 褐色 | ローム粒子多量、黄褐色粒子・青色粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子多量、黄褐色粒子微量 |
| 6 | 灰褐色 | ローム粒子多量、黄褐色粒子微量 |
| 7 | にぶい褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 調査面積は96㎡である。剥片は、散在した状態で覆土の第2層中から出土し、18点中8点がG9d4・G9d5区内に集中している。出土品は、剥片13点（硬質安山岩3、頁岩4、チャート5、黒曜石1）、細片5点（頁岩2、チャート3）であり、図示したQ152が最大で、その他はいずれも小片である。

所見 硬質安山岩の剥片は、縄文時代前期の住居跡からも5点確認されており、当遺跡で採集されている剥片でも多く認められる石材である。本地点は、極短期間に小規模な剥片剥離が行われた地点と考えられ、不要の剥片や細片がそのまま廃棄された場所と考えられる。



第4図 第1号石器出土地点実測図



第5図 第1号石器出土地点出土遺物実測図

第1号石器出土地点遺物観察表(第5図)

番号	器種	長さ	口径・幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q150	剥片	3.1	1.6	0.9	3.3	硬質安山岩	縦長剥片 側縁部に調整痕	G 9 c5区	PL120
Q151	剥片	5.0	1.8	0.9	5.0	珩質頁岩	自然面を残す縦長剥片 両側面に調整痕	G 9 c5区	PL120
Q152	剥片	6.9	4.2	1.8	39.2	硬質安山岩	自然面を残す縦長剥片 両側面に調整痕	G 9 d5区	PL120
Q153	剥片	3.2	1.3	0.7	2.3	珩質頁岩	自然面を残す縦長剥片 側面に調整痕	G 9 d5区	PL120
Q154	剥片	2.3	0.8	0.3	0.4	チャート	薄い縦長剥片 側縁部に調整痕	G 9 c1区	PL120

2 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡8軒、土坑22基が確認されている。これらの遺構は、調査区北東部から中央部にかけて標高26～28mほどの台地上を中心に展開しており、北西部に隣接している縄文時代中期の遺跡と想定されている上野天神遺跡まで広がっているものと考えられる。

(1) 竪穴住居跡

第30号住居跡(第6・7図)

位置 調査区北東部のF 9 13区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.67m、短軸2.89mの楕円形に近い隅丸長方形で、主軸方向はN-11°-Eである。壁高は7～10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められているが、壁際はやや軟質である。

覆土 2層に分層される。層厚が薄いため堆積状況の判断は困難であるが、壁際からレンズ状に堆積している

ことから自然堆積と考えられる。

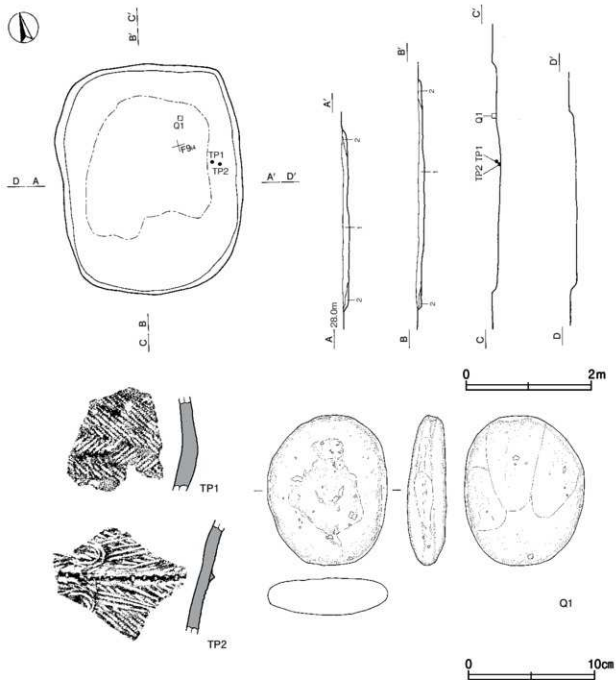
土層解説

1 陶 色 ローム粒子多量、焼土粒子微量

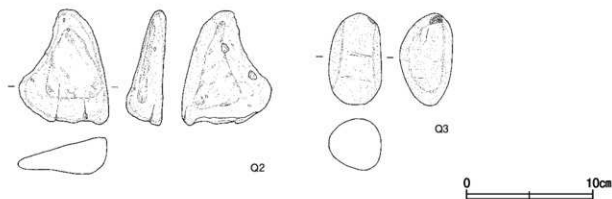
2 暗 陶 色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片169点、石器3点（磨石）、礫55点（火熱を受け赤変しているもの21）が覆土上層から床面にかけて出土している。縄文土器片はほとんどが細片である。TP 1・TP 2は東壁際の覆土下層と床面、Q 1は東部の床面から出土している。Q 2・Q 3は覆土中から出土している。この他、攪乱により混入した土師器片24点、須恵器片3点が覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第6図 第30号住居跡・出土遺物実測図



第7図 第30号住居跡出土遺物実測図

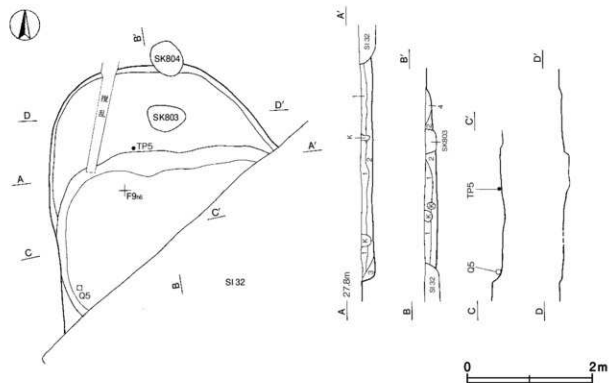
第30号住居跡出土遺物観察表 (第6・7図)

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP 1	陶文土器	深鉢	—	(7.5)	—	長石・繊維	にぶい褐	普通	羽状縄文	覆土下層	PL30
TP 2	陶文土器	深鉢	—	(9.1)	—	長石・雲母・繊維	にぶい黄褐	普通	珠帯土に灰体網目文 特及蓋に土文 単線縄文	床面	PL30

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	礫石	120	9.5	3.0	4336	凝灰岩	全面に硝礫痕 磨面4面	床面	PL26
Q 2	礫石	9.1	7.1	3.0	(1990)	流紋岩	磨面3面 一部欠損	覆土中	
Q 3	礫石	7.3	4.3	4.1	1788	安山岩	全面に硝礫痕 磨打面1面	覆土中	

第39号住居跡 (第8・9図)

位置 調査区北東部のF 9 g6区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。



第8図 第39号住居跡実測図

重複関係 南部を第32号住居、北部を第803・804号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 重複により遺存状況は不良であるが、遺存する壁から長径3.80m、短径2.89mの楕円形と推定され、主軸方向はN-36°-Wと推定される。壁高は4～18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 中央部がわずかにくぼみ踏み固められているが、壁際はやや軟質である。

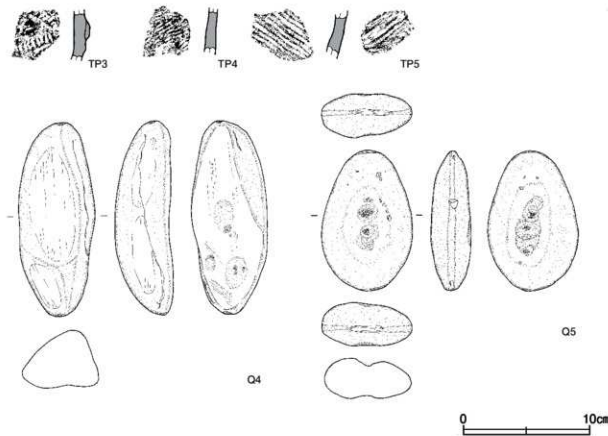
覆土 4層に分層される。層厚が薄いため堆積状況の判断は困難であるが、含有物などから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子少量
 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片28点、石器2点（磨石、凹石）が出土している。土器片はほとんどが小破片である。この他、竪20点も出土しており、うち5点が火を受けて赤変しもろくなっている。TP 3・TP 4とQ 4は覆土中、TP 5は北部床面、Q 5は西壁際のほぼ床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第9図 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP 3	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	長石・石英・繊維	にぶい・黒	普通	無節々	覆土中	PL95
TP 4	縄文土器	深鉢	—	(3.7)	—	長石・石英・繊維	にぶい・赤黒	普通	短沈線による文様と0段多葉形L	覆土中	PL95
TP 5	縄文土器	深鉢	—	(3.2)	—	長石・石英・ 骨片・繊維	にぶい・黄褐	普通	表0段多葉形L 黄条縦文	床面	PL95

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	磨石	154	6.0	4.5	5104	流紋岩	磨面5面 敲打面2面	覆土中	
Q 5	門石	112	7.2	3.2	3083	安山岩	両面に門 鑿面に磨面	床面	P1.06

第42号住居跡 (第10図)

位置 調査区北東部のF1014区で、標高27mほどの台地上の緩斜面に位置している。

重複関係 南西部を第23号住居に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平と重複関係から遺存状況は不良である。遺存している壁と床面から長軸3.77m、短軸2.55mの隅丸長方形で、主軸方向はN-38°-Wと推定される。壁高は2cmほどで、壁の立ち上がりは判然としない。

床 ほほ平坦で、壁際はやや軟質である。

炉 中央部からやや北西部の壁寄りに付設されており、長軸43cm、短軸27cmの不整長方形である。炉床部は床面とは同じ高さの地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。

ピット 5か所。P2・P4・P5は深さ20～37cmで、規模から主柱穴の可能性が高い。P1・P3は深さ6cm・9cmで規模的に補助柱穴の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

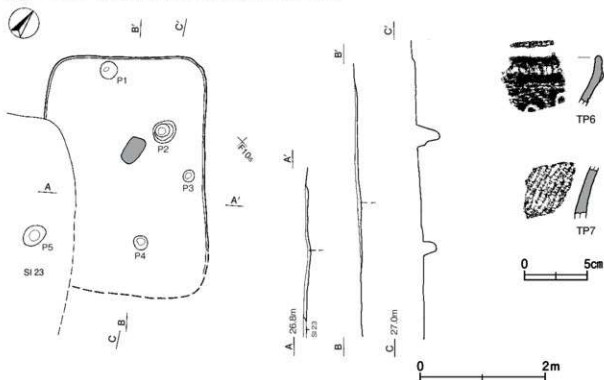
覆土 単一層で層厚が薄く、堆積状況は不鮮明である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片13点、礫1点が覆土中から細片で出土している。TP6・TP7は、北西部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第10図 第42号住居跡・出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表 (第10回)

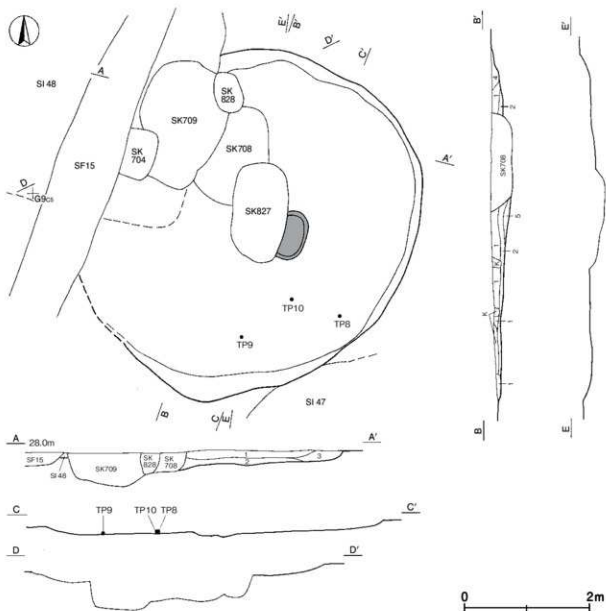
番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP 6	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	長石・雲母・繊維	橙	普通	帯文に刺状文と円形片管文	覆土中	
TP 7	縄文土器	深鉢	—	(4.1)	—	長石・石英・雲母・繊維	にぶい黄褐色	普通	LRの単純縄文	覆土中	PL95

第46号住居跡 (第11・12回)

位置 調査区北東部のG9c5区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 南東部で第47号住居跡を掘り込み、中央部から北西部にかけて第48号住居、第704・708・709・827・828号土坑、第15号道路に掘り込まれている。

規模と形状 重複が激しいため、遺存状況は不良である。確認された壁から長径5.60m、短径5.25mの円形と推定され、主軸方向はN-20°-Eである。確認された壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。



第11回 第46号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、特に踏み固められた痕跡は認められない。

炉 ほぼ中央部、やや東壁寄りに付設されている。一部が第827号土坑に掘り込まれているが、長径81cm、短径48cmほどの楕円形と推定され、床面を5cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面の中心部は火を受けて硬化している。

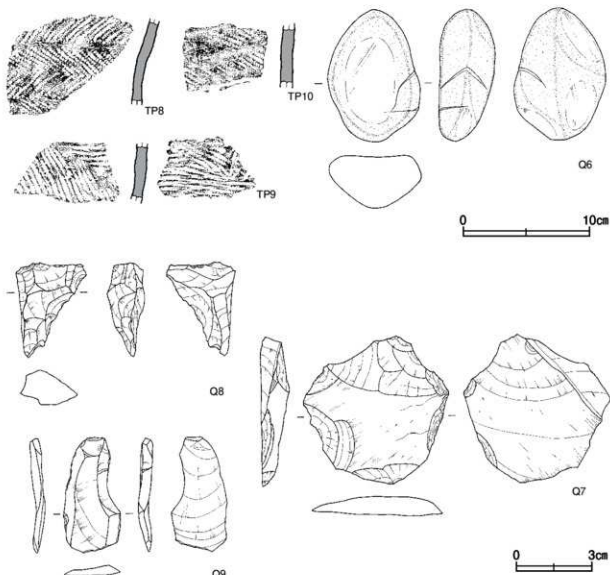
覆土 5層に分層される。不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土ブロック微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片177点、石器1点（磨石1）、剥片3、礫98点（火熱を受け赤変しているもの41）が出土している。TP 8～TP10はいずれも床面、Q 6～Q 9は覆土中から出土している。その他、視乱により混入した土師器片34点（甕類）、須恵器3点（坏2、甕）が小片で出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第12図 第46号住居跡出土遺物実測図

第46号住居跡出土遺物観察表 (第12回)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴	出土位置	備考
TP8	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	長石・石英・雲母・繊維	橙	普通	羽状縄文	床面	PL95
TP9	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	—	長石・石英・雲母・小礫・繊維	暗紺	普通	表0段多条 羽状縄文 裏条痕文	床面	PL95
TP10	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英・雲母・繊維	にぶい黒	普通	紅の単節縄文	床面	PL95

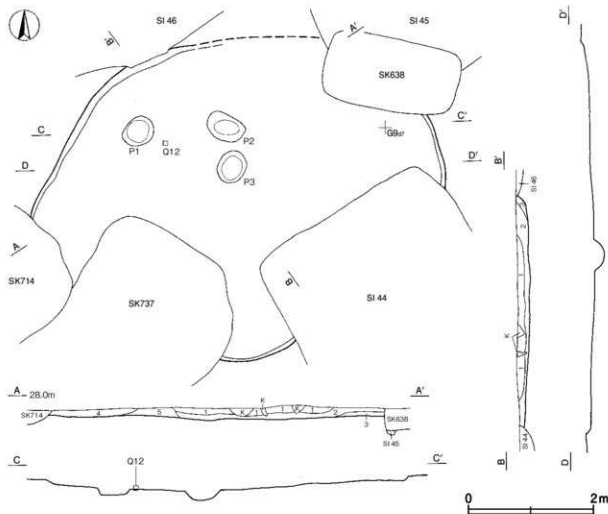
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	磨石	10.5	7.4	4.5	405.5	安山岩	磨面5面	覆土中	
Q7	潤片	5.9	5.8	1.2	29.9	硬質安山岩	楕長潤片 側縁部に潤磨調整	覆土中	PL96
Q8	潤片	3.7	2.8	1.5	10.4	硬質安山岩	厚みのある楕長潤片 側面部に潤磨調整	覆土中	PL96
Q9	潤片	4.5	2.3	0.5	3.5	硬質安山岩	薄い楕長潤片 両側縁に調整を施す	覆土中	PL96

第47号住居跡 (第13・14回)

位置 調査区北東部のG9d6区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第44・45・46号住居、第638・714・737号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため遺存状況は不良である。遺存する壁から、長径6.20m、短径5.05mの楕円形と推定され、主軸方向はN-58°-Eである。確認できる壁高は8cmほどで、外傾して立ち上がっている。



第13回 第47号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。

ピット 3か所。深さは11～19cmで、掘り方は緩やかにくぼんでいる。位置と規模から柱穴の可能性も考えられるが明確ではなく、性格も不明である。

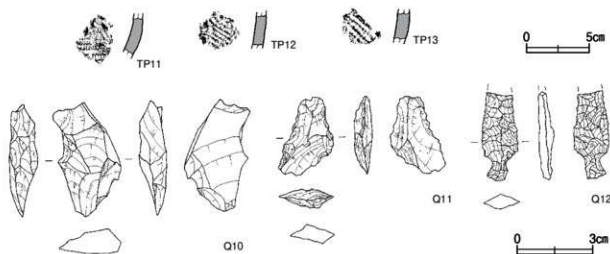
覆土 5層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 縄文土器片97点、石器1点（鉄）、剥片2、礫12点（火熱を受け赤変しているもの5）が覆土上層から床面にかけて出土している。Q12は床面、TP11～TP13、Q10～Q11は、いずれも覆土中から出土している。その他、攪乱により混入した土師器片6点（鏝）も出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第14図 第47号住居跡出土物実測図

第47号住居跡出土物観察表（第14図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP11	縄文土器	深鉢	—	(37)	—	長石・石英・雲母・繊維	明赤褐	普通	0段多葉?	覆土中	
TP12	縄文土器	深鉢	—	(32)	—	長石・石英・雲母・繊維	赤褐	普通	RLの単葉縄文	覆土中	
TP13	縄文土器	深鉢	—	(30)	—	長石・石英・雲母・繊維	赤褐	普通	LRの単葉縄文	覆土中	

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	剥片	4.5	2.6	1.1	10.1	硬質安山岩	縦長剥片 両側縁部に調整調整	覆土中	P1.96
Q11	剥片	3.1	2	0.7	3.6	硬質安山岩	縦長剥片 側縁部に調整調整を施す	覆土中	P1.96
Q12	石礫	(3.5)	1.5	0.6	(2.5)	硬質頁岩	有茎 先端部欠損 両面調整 側片部に細密な調整加工	床面	P1.96

第48号住居跡（第15図）

位置 調査北区の西部G 9 b5区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 南東部で第46号住居跡を掘り込み、その他、第630・704・709・828号土坑と第15号道路に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため遺存状況は不良である。遺存する壁と床面から長軸4.05m、短軸3.68mの隅丸長方形と推定され、主軸方向はN-84°-Wである。壁高は2~8cmで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存する部分から、ほぼ平坦であったと推測され、硬化面は確認されていない。

炉 南西壁寄りに付設されている。長径53cm、短径48cmの楕円形で、床面を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

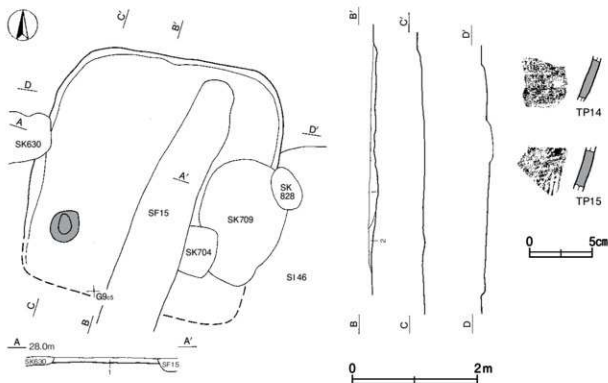
覆土 2層に分層される。層厚が薄いため堆積状況は不鮮明であるが、粒子が壁際から流れ込むように堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ローム粒子中量(細まりは強い)

遺物出土状況 縄文土器片20点、礫5点が出土している。TP14・TP15は、覆土中から出土している。その他、攪乱により混入した土師器片6点(粟)、須恵器片1点(粟)も出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期と考えられる。



第15図 第48号住居跡・出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器形	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP14	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	石英・雲母・繊維	にじみ赤褐色	普通	壁際のため不鮮明 磨痕*	覆土中	
TP15	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	石英・雲母・繊維	赤褐色	普通	無彫の羽状縄文	覆土中	

第49号住居跡 (第16・17図)

位置 調査区北東部のG 9 e4区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 南東部を第700号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.65m、短軸3.60mの隅丸方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は3~8cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径78cm、短径72cmの不整楕円形で、床面を25cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面はそれほど赤変しておらず、わずかに焼土が確認されただけである。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 (締まりは強い) | 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| | 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 (締まりは強い) |

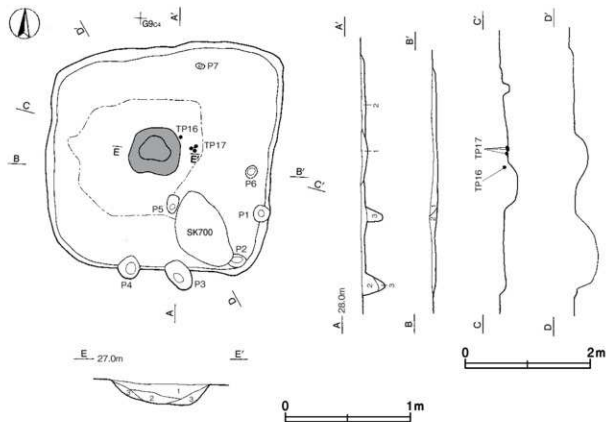
ピット 7か所。P1~P4は深さ25~38cmで、壁柱穴の可能性はあるが、詳細は不明である。P5~P7は深さ10~32cmであるが、性格は不明である。

覆土 3層に分層される。層厚が薄く堆積状況の判断が難しいが、不規則な堆積状況から人為堆積の可能性が考えられる。

土層解説

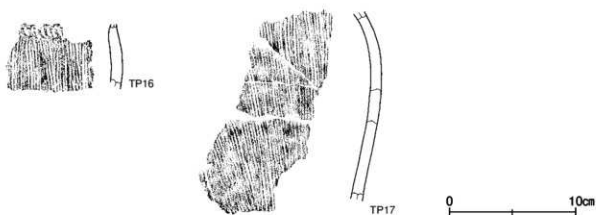
- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 (締まりが強い) | 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 (締まりが強い) |
| | 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片63点、礫22点が覆土上層から床面にかけて出土している。TP16・TP17は、炉の周



第16図 第49号住居跡実測図

辺の床面から出土している。その他、攪乱により混入した土師器片17点(甕類)も出土している。
 所見 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。



第17図 第49号住居跡出土遺物実測図

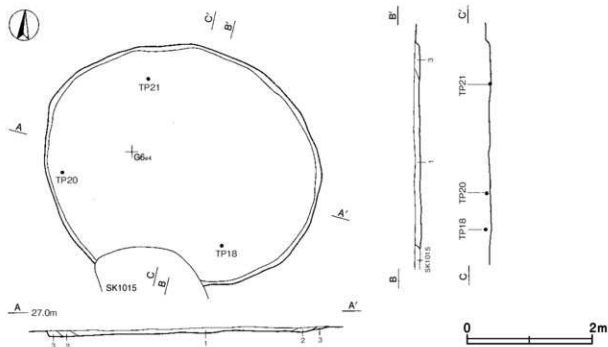
第49号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP16	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英・雲母	にふい橙	普通	半截竹管の刺突文	床面	PL95
TP17	縄文土器	深鉢	—	(15.0)	—	長石・石英・雲母	にふい濁	普通	縦位の条織文	床面	TP16と同一個体、PL95

第104号住居跡 (第18・19図)

位置 調査区西部のG6e4区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第1015号土坑に掘り込まれている。



第18図 第104号住居跡実測図

規模と形状 長径4.56mで、短径3.87mの楕円形で、主軸方向はN-67°-Wである。確認された壁高は5～9cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、硬化面は確認されていない。

覆土 3層に分層される。壁際から粒子が流れ込むように堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 3 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片29点、礎48点（火熱を受け赤変しているもの3）が覆土中から出土している。縄文土器片のほとんどは細片であり、TP18は覆土上層、TP19は覆土中、TP20は覆土中層、TP21は床面からそれぞれ散在して出土している。その他、攪乱により混入した土師器片3点（欠）も出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第19図 第104号住居跡出土遺物実測図

第104号住居跡出土遺物観察表（第19図）

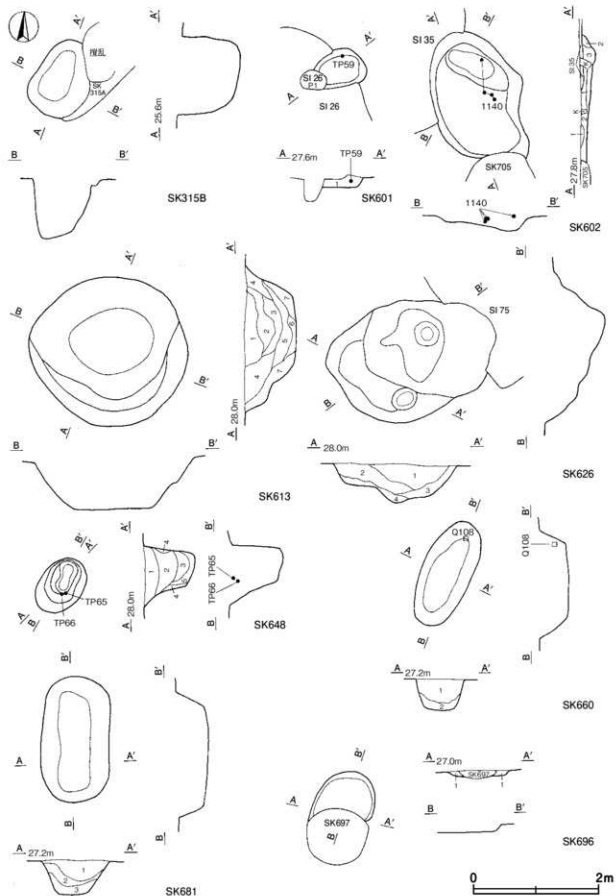
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP18	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	摩耗のため不明 平截竹管文	覆土上層	
TP19	縄文土器	深鉢	—	(3.7)	—	長石・雲母	土に近い橙	普通	平截竹管による有筋文	覆土中	
TP20	縄文土器	深鉢	—	(3.2)	—	長石・繊維	土に近い橙	普通	無筋縄文	覆土中層	
TP21	縄文土器	深鉢	—	(2.7)	—	長石・雲母・繊維	橙	普通	平截竹管による斜突文	床面	

表2 縄文時代住居跡一覧表

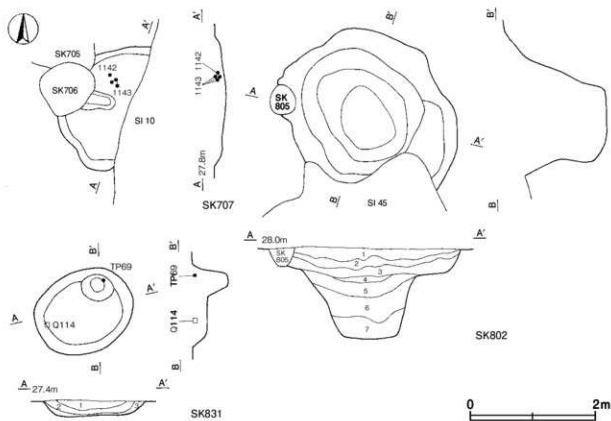
番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
							竪穴	土坑	土間	土室			
30	F 9 13	N-11°-E	隅丸長方形	3.67 × 2.89	7~10	平	—	—	—	—	自然	縄文土器、石器(磨石)、礎	
39	F 9 05	N-36°-W	[楕円形]	3.80 × (2.80)	4~18	平	—	—	—	—	人	縄文土器、石器(磨石・凹石)	本跡→SK22、SK803-804
42	F 10 14	N-38°-W	[隅丸長方形]	3.77 × 2.55	2	平	—	—	5	0	不明	縄文土器	本跡→SI23
46	G 9 05	N-20°-E	[円形]	5.60 × (3.25)	10	平	—	—	—	—	人	縄文土器、銅片、礎	SI 07・本跡→SI 08、SK701-708-709-827-828、SF15
47	G 9 06	N-58°-E	[楕円形]	6.20 × (3.05)	8	平	—	—	3	—	人	縄文土器、石器(銅片・石鏝)	本跡→SI 44-45-46、SK638-714-727
48	G 9 05	N-84°-W	[隅丸長方形]	4.05 × 3.68	2~8	平	—	—	—	0	自然	縄文土器、礎	SI 06・本跡→SK630-701-709-828、SF15
49	G 9 04	N-2°-W	隅丸方形	3.65 × 3.00	3~8	平	—	—	7	0	人	縄文土器、礎	本跡→SK700
104	G 6 04	N-67°-W	楕円形	4.56 × 3.87	5~9	平	—	—	—	—	自然	縄文土器、礎	本跡→SK1015

(2) 土坑

縄文時代と考えられる土坑は、22基が確認されている。ここでは、遺物を取り上げた土坑について、実測図と土層解説、及び図示した遺物と出土遺物観察表を記載した。その他は、全測図と一覧表で紹介した。



第20图 土坑实测图(1)



第21図 土坑実測図(2)

第601号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

第602号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ロームブロック多量
3 黒褐色 ロームブロック中量

第613号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
6 暗褐色 ローム粒子少量
7 暗褐色 ローム粒子少量

第626号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物, 焼土粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子少量
4 褐色 ローム粒子中量

第648号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
2 褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子少量
3 暗褐色 ロームブロック多量, 砂粒微量
4 褐色 ローム粒子多量
5 褐色 ローム粒子多量, 砂粒微量

第660号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第681号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

第696号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第802号土坑土層解説

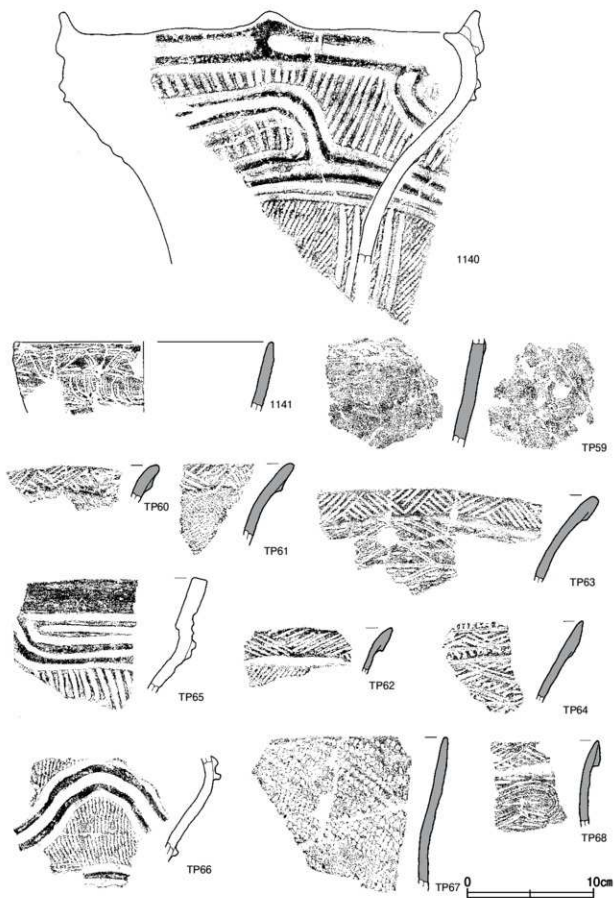
- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色 ローム粒子中量
6 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
7 褐色 ローム粒子多量

第831号土坑土層解説

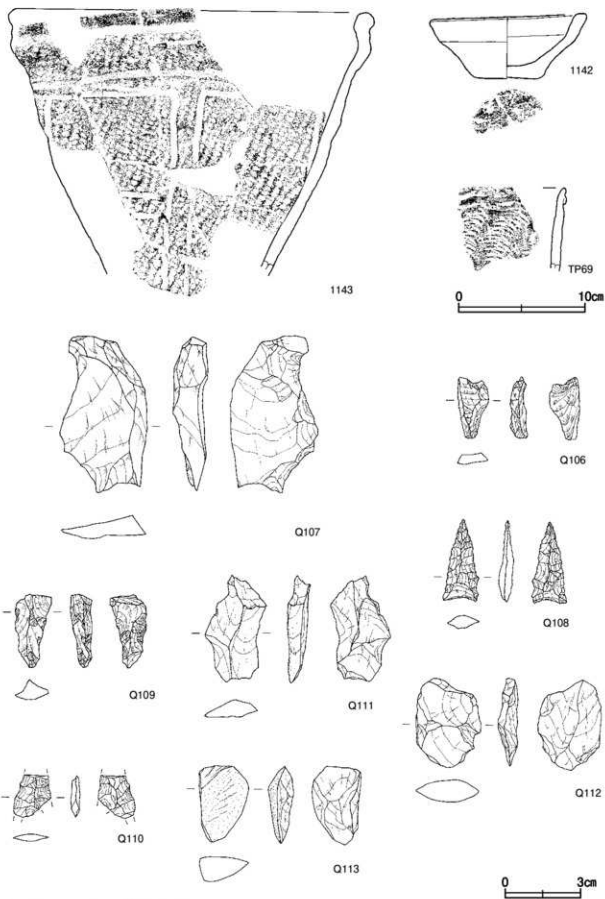
- 1 暗褐色 ロームブロック, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第315B号土坑出土遺物観察表 (第23図)

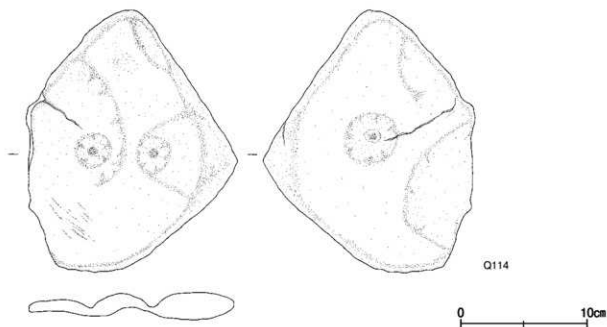
番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q106	銅片	29	1.3	0.7	1.3	黒曜石	縦長銅片 調整部に調整痕	覆土中	P1.96
Q107	銅片	6.3	3.5	1.4	23.5	硬質安山岩	縦長銅片 調整部に調整痕	覆土中	P1.96



第22图 土坑出土遗物实测图1)



第23図 土坑出土遺物実測図(2)



第24図 土坑出土遺物実測図(3)

第601号土坑出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP59	縄文土器	深鉢	—	(8.6)	—	長石・石英・雲母・繊維	にがい・赤褐色	普通	摩耗のため不明 条痕 a	覆土中層	芋田 P1.95

第602号土坑出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1149	縄文土器	深鉢	(33.0)	(20.1)	—	石英・雲母	にがい・赤褐色	普通	口辺部に隆帯と沈線による文様帯。胴部はRの単筋縄文を地文に無垂文を施す。	覆土上・中層	加賀科目 P1.95

第613号土坑出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1141	縄文土器	深鉢	(20.4)	(5.6)	—	長石・雲母・繊維	赤褐色	普通	平截竹管による沈線を施す。	覆土中	花畑下層 P1.95
TP60	縄文土器	深鉢	—	(2.8)	—	長石・石英・小粒・繊維	褐色	普通	口辺部沈線文。胴部懸垂圧痕文施文	覆土中	花畑下層 P1.95
TP61	縄文土器	深鉢	—	(6.1)	—	長石・石英・繊維	褐色	普通	口辺部沈線文。胴部懸垂圧痕文施文	覆土中	花畑下層 P1.95

第626号土坑出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP62	縄文土器	深鉢	—	(3.7)	—	長石・石英・繊維	にがい・褐色	普通	口辺部沈線文。胴部R縄文施文	覆土中	花畑下層 P1.95
TP63	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	長石・石英・繊維	褐色	普通	口辺部沈線文。胴部懸垂圧痕文施文	覆土中	花畑下層 P1.95
TP64	縄文土器	深鉢	—	(6.5)	—	長石・石英・繊維	にがい・褐色	普通	口辺部沈線文。胴部懸垂圧痕文施文	覆土中	花畑下層 P1.95

第648号土坑出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP65	縄文土器	深鉢	—	(9.1)	—	長石・石英・雲母	にがい・橙	普通	口辺部は沈線と区画し、隆帯を施す。	覆土上層	加賀科目 P1.96
TP66	縄文土器	深鉢	—	(8.3)	—	長石・石英・雲母	にがい・橙	普通	単筋縄文しを地文とし、沈線文と隆帯文を施す。	覆土上層	P1.96

第660号土坑出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q108	石鏃	32	1.4	0.5	1.3	硬質頁岩	両面押圧調整 基部の長り口浅い 鏃片部に鋭利な調整加工	覆土中層	PL96

第681号土坑出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q109	剥片	29	1.5	0.9	2.9	黒曜石	縦長剥片 側辺部に調整痕	覆土中	PL96

第696号土坑出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q110	石鏃	(1.7)	(1.5)	0.3	(1.1)	硬質頁岩	基部 先端部と側部片側欠損 両面押圧調整 側辺部に鋭利な調整加工	覆土中	PL96

第707号土坑出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1142	縄文土器	鉢	12.2	5.3	5.0	石英・雲母	にぶ・赤褐	普通	摩耗のため不鮮明 磨痕*	覆土中層	90% 中期 PL95
1143	縄文土器	深鉢	[27.7]	(21.1)	—	長石・雲母	赤褐	普通	口辺部沈線文に沈線の懸垂区陶文を施す。	覆土中層	加吉利口

第802号土坑出土遺物観察表 (第22・23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TI97	縄文土器	深鉢	—	(12.3)	—	長石・石英・雲母・燧石	明褐	普通	口Lの単純陶文を施す。	覆土中	黒沢 PL96
TI98	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	長石・石英・雲母・燧石	にぶ・赤褐	普通	口辺部沈線文。側部懸垂区陶文を施す。	覆土中	花積下層 PL96

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q111	剥片	4.2	2.4	0.9	6.7	硬質安山岩	薄い縦長剥片 先端部欠損 側縁に調整を施す。	覆土中	
Q112	剥片	3.5	2.6	0.9	8.2	硬質安山岩	薄い縦長剥片 先端部欠損 側縁に調整を施す。	覆土中	
Q113	剥片	3.1	1.9	1.0	6.4	硬質安山岩	縦長剥片 上部からの打撃による割傷	覆土中	

第831号土坑出土遺物観察表 (第23・24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TI99	縄文土器	深鉢	—	(6.6)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	貝殻緑文を施す。	覆土上層	浮島 PL96

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q114	凹石	2.1	16.8	2.2	918.0	雲母片岩	薄い板状 凹部表面2ヶ所 裏面に1ヶ所	覆土上層	

表3 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m, 深さ12cm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
315B	K 4c4	N-10°-E	[不整形円形]	1.25 × (0.91)	98	外傾	皿状	自然	剥片(黒曜石)	本跡→SS315A 隔七穴
601	F 9 f 9	N-65°-E	[楕円形]	(0.70) × 0.60	12	垂直	平頂	人為	縄文土器	本跡→SD26

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m, 深さ42cm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
602	G 9 a9	N-20'-W	不整楕円形	(2.05) × 1.52	22	縦傾	皿状	人為	縄文土器	本跡→SK35-SK705
613	F 9 b2	N-72'-W	円形	2.55 × 2.37	82	外傾	平坦	自然	縄文土器	
625	F 10 j6	N-8'-W	楕円形	0.97 × 0.85	64	外傾 一部傾斜	平坦	自然	縄文土器	本跡→S122
626	G 9 e2	N-75'-E	不定形	(2.56) × 1.86	85	縦斜・外傾	凸凹	自然	縄文土器、礎	本跡→S175
648	G 9 b4	N-35'-E	楕円形	0.95 × 0.69	85	外傾	傾斜	人為	縄文土器	陥し穴+
660	H 10 a1	N-25'-E	長楕円形	1.75 × 0.82	34	外傾	平坦	人為	縄文土器、石礫、酒片、礎	陥し穴+
672	H 9 a9	N-32'-E	円形	1.43 × 1.42	15	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SE57
681	H 10 b3	N-2'-W	楕丸長方形	2.00 × 1.08	35	外傾	平坦	自然	縄文土器、黒曜石	陥し穴+
695	G 9 b7	N-23'-E	不整楕円形	1.96 × 0.96	52	縦斜・外傾	平坦	人為	縄文土器	
696	H 10 b4	N-29'-E	[楕円形]	0.93 × 0.65	11	縦斜	皿状	自然	縄文土器、石礫片	本跡→SK697
707	G 9 b9	N-19'-E	[楕円形]	2.10 × 0.82	18	縦斜	平坦	人為	縄文土器	本跡→S110- SK705-706
727	G 9 f4	N-11'-W	不定形	2.75 × 2.18	58	縦斜	皿状	人為	縄文土器、礎	SK738→本跡→S178→ SK739→S1107
738	G 9 e4	N-89'-W	不整円形	1.71 × 1.63	71	縦斜	皿状	人為	縄文土器	本跡→SK727→SK83→ S1107
744	G 9 a3	N-20'-E	[楕円形]	(0.58) × 0.62	30	縦斜	皿状	人為	縄文土器、礎	本跡→SK727→SK83→ S1107
751	H 10 b6	N-33'-E	楕円形	1.10 × 0.67	34	縦斜・外傾	平坦	人為	縄文土器、礎	
801	G 10 a2	N-5'-E	楕丸長方形	3.05 × 1.05	30	縦斜	皿状	人為	縄文土器	本跡→SE37
802	G 9 b7	N-41'-W	不整楕円形	2.97 × 2.49	145	縦斜・外傾	皿状	人為	縄文土器、酒片、石礫	本跡→S145、SK805
831	G 9 j0	N-32'-E	楕円形	1.60 × 1.32	24	縦斜	平坦	人為	縄文土器、円石	
1021	G 6 b9	N-53'-W	不整楕円形	2.40 × 1.33	71	縦斜・外傾	平坦	自然	縄文土器	本跡→S1105
1047	G 6 j9	N-54'-E	不整楕円形	1.78 × 1.10	64	縦斜・外傾	皿状	人為	縄文土器	

3 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡11軒が確認されている。これらの遺構は、調査区北東部と中央部及び西部の標高26～27mの台地の縁辺部を中心に位置している。

竪穴住居跡

第2号住居跡 (第25図)

位置 調査南部のK 3 e7区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置し、大部分は調査区域外へ延びている。

規模と形状 確認できたのは東西軸4.60m、南北軸は1.48mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-45'-Wである。壁高は24～46cmで、ほぼ直立している。

床 確認された部分は平坦で、全体的に踏み固められている。

ピット 3か所。コーナー部寄りに位置しているP 1・P 3は深さ22cm・38cmで、位置的に支柱穴と考えられる。P 1とP 3のほぼ真中間で壁際位置しているP 2は深さ16cmで、配置から出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

覆土 4層に分層される。ブロック状の堆積状況と遺物の出土状況から、人為堆積と考えられる。

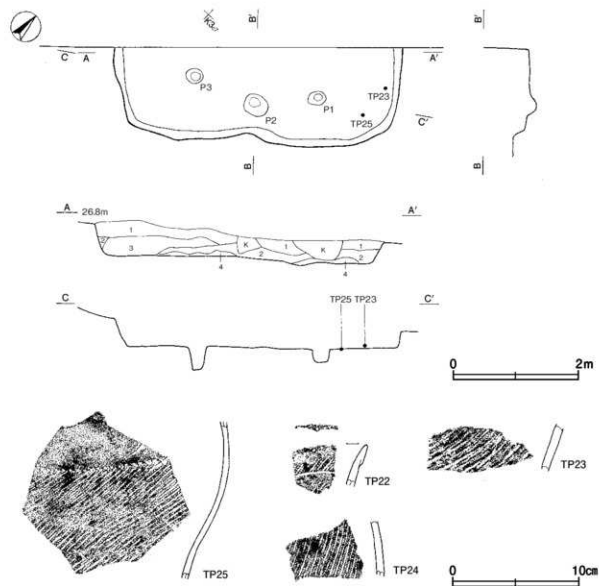
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片32点(壺類)が、覆土中層から床面にかけて出土している。いずれも体部の破片で、形状を復元できるような遺物はないことから、廃絶後に投棄されたものと考えられ、TP22・TP24は覆土中、TP23・TP25は南東部の覆土下層と床面から出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片37点、礎3点、掘

乱により混入した土師器片24点(甕類)、須恵器片1点、陶磁器片1点も覆土上層から出土している。

所見 遺構の一部のみの調査であり、良好な遺物が確認されていないことから時期判断は難しいが、弥生土器片が床面から出土していることや方形または長方形の住居の形状から、弥生時代後期と推測される。



第25図 第2号住居跡・出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP22	弥生土器	壺	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	に灰・赤褐	普通	有り無し(口部・頸部外面 附加糸一種(附加2条)口部部に瓦体押圧)	覆土中	P1.97
TP23	弥生土器	壺	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	に灰・黄褐	普通	頸部附加糸一種(附加2条)	覆土下層	P1.97
TP24	弥生土器	壺	—	(4.4)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	頸部附加糸一種(附加2条)	覆土中	P1.97
TP25	弥生土器	壺	—	(12.6)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	頸部無文 頸部附加糸一種(附加2条)	床面	P1.97

第5号住居跡 (第26・27図)

位置 調査区北東部の最北端E111区で、標高26mほどの台地上の緩斜面に位置している。北半分は調査区域外に延びている。

重複関係 第32号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸5.1m、南北軸は3.8mで、隅丸長方形と推定され、主軸方向は南北方向と考えられN-7°-Eと推測される。確認できた壁高は30cmほどで、緩やかに立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、壁際は軟質で硬化面は認められなかった。

ピット 2か所。P1・P2は深さ4cm・20cmで、性格は不明である。

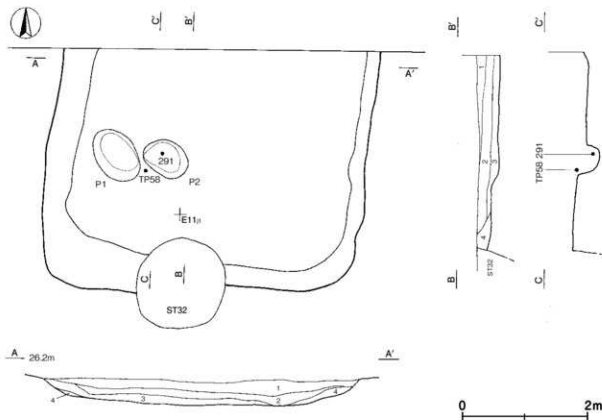
覆土 4層に分層される。壁際から粒子が流れ込むように堆積状況していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

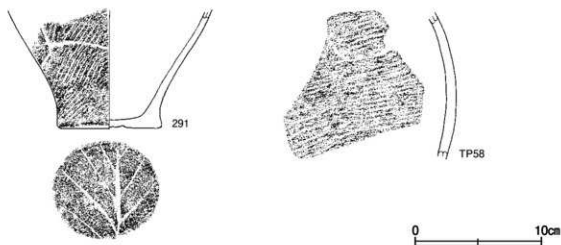
- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子多量、粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 弥生土器片58点(壺類)、土師器片63点(埴12、甕類51)、埴輪片221点(円筒179、形象42)が出土している。291は、同一固体と考えられる複数の割部破片と共にP2の覆土下層から、TP58も床面の高さから、それぞれ出土している。覆土上層から多数確認されている土師器と埴輪の小片は、隣接して所在していると推測される古墳から、後世の擾乱によって混入したものと推察される。その他、流れ込んだ縄文土器片49点、礫49点も出土している。

所見 本跡は桜川沿いの低地に面した台地突端部に位置している。突端部の標高の最も高い所は古墳の埴丘跡と推測され、現況は墓石をもつ墓が設置されている。時期は当遺跡の西部に位置する第102号住居跡と規模と主軸方向が類似しており、出土土器から弥生時代後期と考えられる。



第26図 第5号住居跡実測図



第27図 第5号住居跡出土遺物実測図

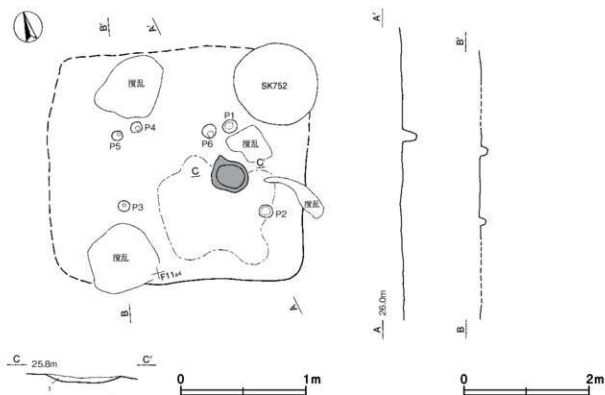
第5号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考	
291	弥生土器	壺	—	(9.4)	8.4	長石・石英・灰分多量	橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)	底部木炭痕	P 2 覆土下層	15%
TP58	弥生土器	壺	—	(11.6)	—	長石・石英・灰分・赤色粒子	橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)		床面	P1.97

第11号住居跡 (第28図)

位置 調査区北東部の東端E11j4区で、標高26mほどの台地縁辺部の緩斜面に位置している。

重複関係 北東部を第752号土坑に掘り込まれている。



第28図 第11号住居跡実測図

規模と形状 柱穴と遺存する床面から長軸4.15m、短軸3.71mの長方形と推定され、主軸方向はN-75°-Wである。

床 はほぼ平坦で、炉の周辺から南東コーナー部にかけて踏み固められている。

炉 中央部の南東コーナー部寄りに付設されており、長径58cm、短径46cmの不定形で、床面を4cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は径15～20cm、深さ9～23cmで、配置的に主柱穴と考えられる。P4に隣接しているP5、P1に隣接しているP6はそれぞれ深さ10cmと23cmで、配置から補助柱穴とも考えられるが不明である。

覆土 床面が露出した状況で確認されたうえ、樹木による攪乱のため、堆積状況は不鮮明である。

遺物出土状況 弥生土器片9点（壺）、土師器片5点（器台1、甕4）が出土している。いずれも細片のため、図示できない。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期と推測される。

第68号住居跡（第29・30図）

位置 調査区北東部のH10d0区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.57m、短軸4.44mの長方形で、主軸方向はN-36°-Wである。壁高は3～14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、炉の周辺が踏み固められているが、壁際の床質は軟質である。壁溝が南東部と北部の一部を除いて巡り、幅12～30cm、深さ6～8cmで断面形はU字状である。

炉 2か所。北壁寄りに付設されている炉1は長径40cm、短径30cmの楕円形で、床面とはほぼ同じ高さの地床炉である。中央部に付設されている炉2は長径51cm、短径37cmの楕円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉1・炉2とも、炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉2は中央部の貼床を外した後に検出されたもので、炉2から炉1への移設が行われたことが確認されている。

炉1・2土層解説（共通）

1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量 3 濃い赤褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 に近い赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 11か所。P1～P4は深さ20～28cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は南壁際の中央部に位置し、深さは21cmで主軸線上にあることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。南壁際に並んで位置しているP6～P11は、深さ10～15cmで、壁柱穴と考えられる。

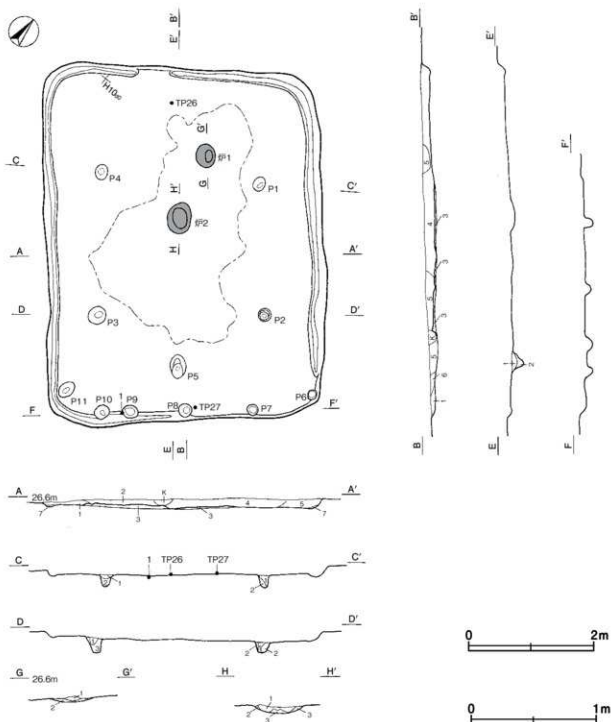
ピット土層解説（共通）

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

覆土 7層に分層される。不規則な堆積状況を呈し、第4・5層から多量の礫が出土していることから人為堆積と考えられる。第3層は貼床の構築層であり、第7層は壁溝の覆土である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量（糊まりが強い） 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量（糊まりが弱い）
4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量

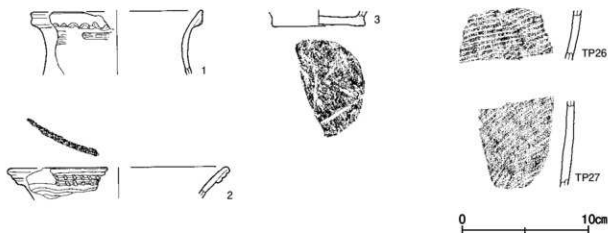


第29図 第68号住居跡実測図

遺物出土状況 弥生土器の小片35点(壺類)が出土している。1は南部の壁溝内、2・3は北東部の覆土中から出土している。TP26は北壁際の中央部、TP27は南壁際中央部の床面からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片105点、礫98点や、攪乱により混入した土師器片83点(甕類)も出土している。土師器片は、いずれも細片で確認面及び覆土上層から出土したものである。

所見 隣接する第72・74号住居跡と同様に南北に長い長方形の形態を呈し、主軸方向もほぼ同じでN-32～36°-Wに収まっている。また、出土土器の傾向も同様であることから、同時期に同じ集団を構成していたも

のと想定することができる。なお、谷津を挟んで隣接する上野陣場遺跡第10・38号住居跡と住居形態と時期がほぼ同時期であり、出土土器から弥生時代後期と考えられる。



第30図 第68号住居跡出土遺物実測図

第68号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	甕	〔13.5〕	(5.0)	—	石英・雲母	褐色	普通	折り返し11道部指面押圧 胴部輪面状土器無文	壁溝内	
2	弥生土器	甕	〔17.4〕	(2.5)	—	長石・雲母	褐色	普通	口内北縁部押圧 折り返し11道部2条の押圧文 胴部輪面状土器無文	覆土中	
3	弥生土器	甕	—	(1.2)	7.4	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	外面ナメ 底部本巻押圧後ナメ	覆土中	
TP26	弥生土器	甕	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	胴部指状に附加条一種(附加2条)	床面	PL97
TP27	弥生土器	甕	—	(6.9)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種(附加2条)	床面	PL97

第72号住居跡 (第31図)

位置 調査区北東部のH11d3区で、標高26mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 北部を第71号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.50m、短軸3.92mの長方形で、主軸方向はN-32°-Wである。確認された壁高は1~7cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、P4から炉の周辺にかけて踏み固められている。壁溝が確認された壁際を巡っており、全周していたものと考えられる。規模は幅4~16cm、深さ3~10cmで断面形はU字状である。

炉 長軸42cm、短軸40cmの不定形でほぼ中央部に付設されており、床面とほぼ同じ高さの地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

ピット 4か所。P1~P3は深さ22~34cmで、配置から支柱穴と考えられる。P4は南壁際の中央部に位置し、深さ24cmで主軸線上にあることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

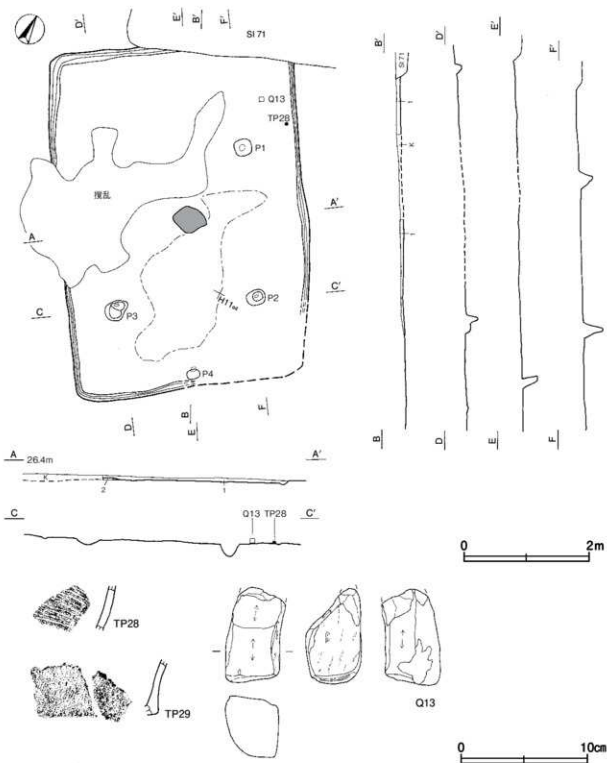
覆土 層厚が薄く、単一層のため堆積状況は不鮮明である。第2層は貼床の構築層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量、機土粒子微量(粘まりが強い)

遺物出土状況 弥生土器片4点(甕)、石器1点(砥石カ)が出土している。TP28は北東部の壁際、Q13は北東部の床面からそれぞれ出土している。TP29は覆土中から出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片12点、礫11点、混入した土師器片24点(甕類)が確認面を中心に出土している。

所見 隣接する第68・74号住居跡と同様な形態と主軸方向を示していることから同じ集団を構成していたと推測され、時期は弥生時代後期と考えられる。



第31図 第72号住居跡・出土遺物実測図

第72号住居跡出土遺物観察表 (第31図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴	出土位置	備考
TP28	弥生土器	壺	—	(35)	—	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)	床面	PL97
TP29	弥生土器	壺	—	(45)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)一部摩滅	覆土中	PL97

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q13	砥石 ^a	(7.5)	4.7	4.4	(188.8)	泥岩	端部欠損 砥面3面 磨面1か所 磨石との兼用 ^a	床面	

第74号住居跡 (第32・33図)

位置 調査区北東部のH10h0区で、標高26mほどの台地の緩斜面に位置している。南西部は調査区域外に延びている。

重複関係 西部を第73号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.56m、短軸3.38mの長方形で、主軸方向はN-34°-Wである。確認された壁高は6cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 南部が攪乱を受けている。それほど踏み固められた状況は見られず、壁際は軟質である。

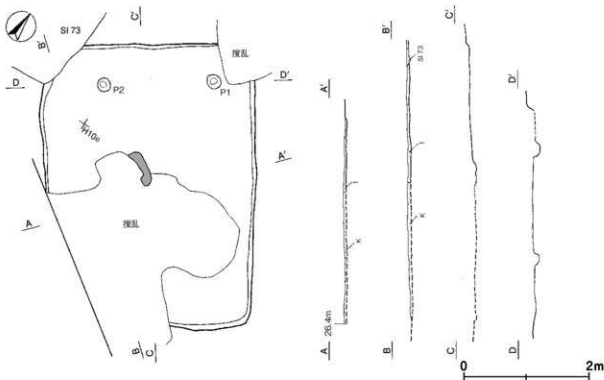
炉 中央部のやや北壁寄りに付設されている。半分ほどが攪乱を受けているが、長径57cm、短径30cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉と考えられる。火床面の焼土は確認されているが、硬化はそれほど認められない。

ピット 2か所。深さは11cm・10cmで、配置から支柱穴と考えられる。

覆土 単一層で層厚が6cmほどと薄いため、堆積状況については不鮮明である。

土層解説

- 1 麻褐色 土ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量



第32図 第74号住居跡実測図



遺物出土状況 弥生土器片2点(壺)が出土している。TP30は、北東部の覆土中から出土している。その他は、ほとんどが細片のため図示できない。また、流れ込んだ縄文土器片2点、礫2点や混入した土師器片17点(甕類)も出土し、土師器片は主に確認面上で検出されている。

第33図 第74号住居跡出土遺物実測図

所見 住居跡の形態と出土土器から、隣接する第68・72号住居跡と同時期に同じ集団を構成していたものと推測され、時期は弥生時代後期と考えられる。

第74号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP30	弥生土器	壺	—	(21)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加糸一種(附加2条)	覆土中	P1.97

第77号住居跡 (第34・35図)

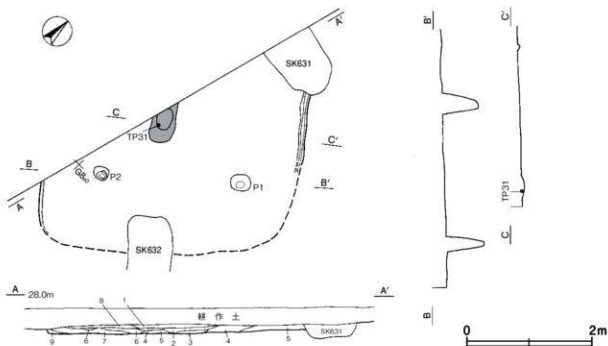
位置 調査区北東部のG 8 d0区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。西北部は調査区域外に延びている。

重複関係 第631・632号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認された壁と床面から東西軸4.02m、南北軸3.16mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-34°-Wである。壁高は7cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存状況は南東部が耕作による削平を受けて不良ではあるが、平坦でそれほど踏み固められていない。壁溝が北東部の壁際に確認され、幅9～12cm、深さ4～5cmで断面形はU字状を呈している。

炉 住居跡の形態から中央部に付設されていると推測される。確認されたのは半分ほどで、長径57cm、短径40cmの楕円形と推定され、床面を4cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。



第34図 第77号住居跡実測図

ピット 2か所。深さは59cm・61cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 9層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。第2・3層は炉の土層である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 遺存状況が不良のため、検出された遺物は弥生土器片2点(壺)だけである。TP31は炉内、TP32はP2内からそれぞれ出土している。

所見 隣接する第131号住居跡と形態と主軸方向がほぼ同じであり、同じ集団を構成していたものと考えられる。また、本跡から東方90mに位置している第68・72・74号住居跡と形態と主軸方向が類似していることから、同時期に集落を構成していた集団と考えられる。時期は住居形態と出土土器から、弥生時代後期と考えられる。



第35図 第77号住居跡出土遺物実測図

第77号住居跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	種類	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP31	弥生土器	壺	—	(33)	—	長石・石英、 雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	頸部脚面状工具(5本脚面)による波状文	炉内	PL97
TP32	弥生土器	壺	—	(40)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	頸部附加条一種(附加2条)	P2覆土中	PL97

第102号住居跡 (第36・37図)

位置 調査区西部のG6d4区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。北半分は調査区域外に延びている。

規模と形状 東西軸5.16m、南北軸は3.40mで、隅丸長方形と推定され、主軸方向はN-5°-Eと推測される。確認できた壁高は5~10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、南壁中央部から炉の周辺にかけて踏み固められている。

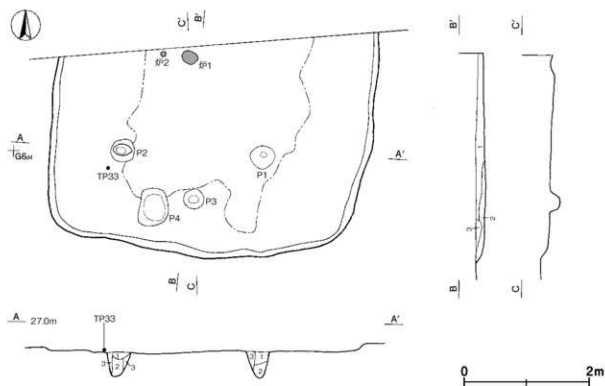
炉 2か所。ほぼ中央部に付設されている炉1は長径24cm、短径20cmの楕円形で、床面とほぼ同じ高さの地床炉である。炉1の西側に位置している炉2は、径9cmほどの楕円形で、床面と同じ高さの地床炉である。共に炉床面は火を受けて赤変硬化しており、使用された痕跡に差は認められず、ほぼ同時期に使用されていたものと推察される。

ピット 4か所。P1・P2は深さ43cm・37cmで、位置と規模から主柱穴と考えられる。南壁際の中央部に位置しているP3は深さ17cmで、主軸線上にあることから出入り口施設にかかわるピットと考えられる。P3の西側に隣接しているP4は、貯蔵穴の可能性も考えられるが、深さが5cmと浅く、性格は不明である。

ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	3 黒褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック中量		

覆土 3層に分層される。壁際から粒子が流れ込むように堆積状況していることから、自然堆積と考えられる。



第36図 第102号住居跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
 2 黒褐色 ローム粒子少量
 3 黒褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 弥生土器片17点（壺類）、土師器片6点（甕）が出土している。炉床内から弥生土器片と土師器片の細片が1点ずつ出土しているが、いずれも細片で図示できない。TP33は南西部の覆土中層、TP34～TP37は東部の覆土中から散在して出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片34点、礎19点も出土している。

所見 時期は、住居跡の形態と出土土器から弥生時代後期と考えられる。



第37図 第102号住居跡出土遺物実測図

第102号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP33 ～ TP37	弥生土器	壺	—	(30) ～ (67)	—	石英-雲母-赤色 粘土	にぶい赤 褐色、赤褐色 にぶい青	普通	附加条一種（附加2条）	覆土中層 （TP33） 覆土中（TP34 ～TP37）	同一製体系

第122号住居跡（第38図）

位置 調査区中央部のH 8 f8区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第1528号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.44m、短軸3.37mの隅丸方形で、主軸方向はN-31°-Wである。壁高は3～8cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、炉の周辺を中心に中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北壁寄りに付設されている。長径103cm、短径48cmの不整形円形で、床面を4cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変している。

炉土層解説

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量 | |

ピット 3か所。P1・P2は深さ21cm・7cmで、配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ15cmであるが、性格は不明である。

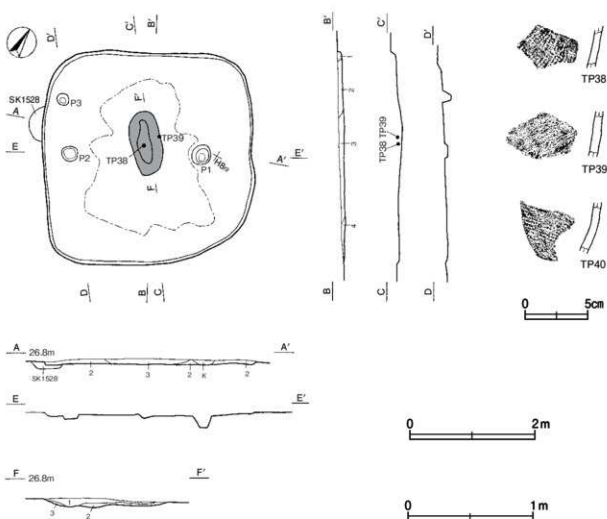
覆土 4層に分層される。不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片10点（壺）が出土している。TP38・TP39は炉内、TP40は覆土中からそれぞれ出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片7点、礫1点、混入した土師器片8点（甕類）も出土している。

所見 検出された土器は細片で少量である。時期は、住居形態や出土土器から、弥生時代後期と推測される。



第38図 第122号住居跡・出土遺物実測図

第122号住居跡出土物観察表 (第38図)

番号	種類	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP38	弥生土器	壺	—	(34)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加糸一種(附加2条)	B内	PL97
TP39	弥生土器	壺	—	(37)	—	長石・石英	黒黒	普通	胴部附加糸一種(附加2条) 一部字線	B内	PL97
TP40	弥生土器	壺	—	(40)	—	長石・石英・雲母	にぶ黄橙	普通	胴部附加糸一種(附加2条)	覆土中	PL97

第128号住居跡 (第39・40図)

位置 調査区中央部のH 8 c7区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 南西部を第125号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.65m、短軸3.83mの長方形で、主軸方向はN-9°-Wである。確認された壁高は2~4cmで、外周して立ち上がっている。

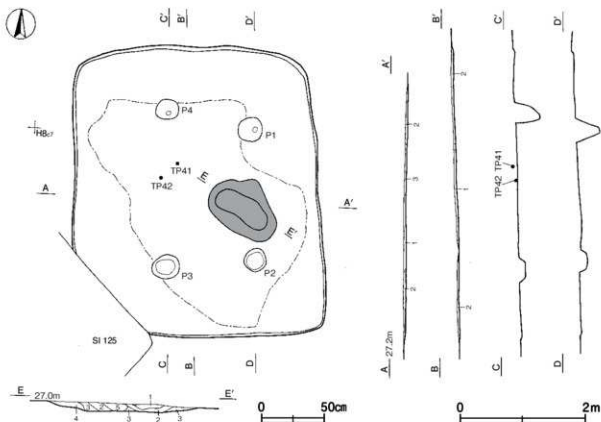
床 ほぼ平坦で、炉を中心に中央部全体が踏み固められている。

炉 中央部の南東コーナー部寄りに付設されている。長径120cm、短径87cmの不整楕円形で、床面を5cmほど楕円形に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けてわずかに赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 | 4 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | |

ピット 4か所。P1・P4は共に深さ40cm、P2・P3は共に深さ10cmで、いずれも配置から柱穴と考えられる。



第39図 第128号住居跡実測図

覆土 3層に分層される。層厚が4cmと薄いため、堆積状況は判然としない。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒少量
3 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片2点(壺)が出土している。TP41は中央部の覆土下層、TP42は床面からそれぞれ破片で出土している。その他、視乱により混入した土師質土器片1点も出土している。

所見 出土遺物が少なく時期判断が難しいが、時期は住居跡の形態や出土土器から、弥生時代後期と推察される。



第40図 第128号住居跡出土遺物実測図

第128号住居跡出土遺物観察表(第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP41	弥生土器	壺	—	(27)	—	長石・小礫	橙	普通	頸部脚面状工具による縷状文	覆土下層	
TP42	弥生土器	壺	—	(31)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	頸部附加条一種(附加2条)	床面	

第131号住居跡(第41・42図)

位置 調査区中央部のG 8 h7区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第132号住居、第1195・1600号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.32m、短軸4.48mの長方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は5~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、草の周辺を中心に踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径112cm、短径56cmの不整楕円形で、床面を8cmほど掘りくぼめられた地床炉である。火床面は極わずかに赤変しているだけで、締まりは弱い。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量

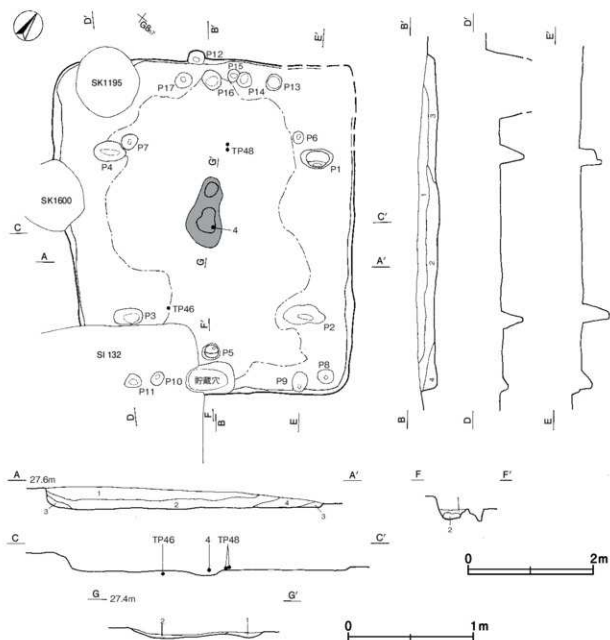
ピット 17か所。P1~P4は深さ35~45cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ21cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。P6・P7は深さ7cm・11cmで、それぞれP1とP4に隣接していることから、補助柱穴の可能性が考えられる。その他は深さ7~20cmで、配置から壁柱穴の類と考えられる。

貯蔵穴 南壁際のP5に隣接して付設されている。長径82cm、短径52cmほどの楕円形で、深さ19cmである。底面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。堆積状況は自然堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
2 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

覆土 4層に分層される。ローム粒子が壁際から流れ込むような堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。



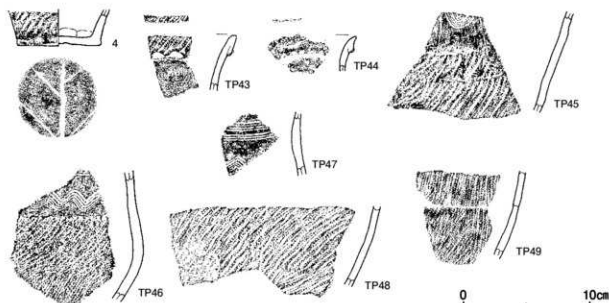
第41図 第131号住居跡実測図

土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量 | 3 黒褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片89点(壺類)が出土している。4は炉の上面, TP46は中央部の南西コーナー部寄りの床面, TP48は中央部の北壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。TP43～TP45・TP47・TP49は、すべて覆土中から出土している。これらの中でTP43・TP45～TP47・TP49は、同一個体とも考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片171点、礫62点、混入した土師器片35点、須恵器片3点も散在して出土している。流れ込みや混入した遺物は、重複及び耕作による攪乱のためと考えられる。

所見 近接している第77号住居跡と主軸方向や住居形態が類似していることから、同じ集団を構成していたものと考えられる。時期は住居形態や出土遺物から、弥生時代後期と考えられる。



第42図 第131号住居跡出土遺物実測図

第131号住居跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	種類	器種	口徑	器高	底徑	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
4	弥生土器	甕	—	(2.9)	6.5	長石・石英・雲母	にじい・黄褐色	普通	胴部附加条一種(附加2条)内面十字紋部木葉状	甕土面	
TP43	弥生土器	甕	—	(4.1)	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口内縁部・唇下縁に11道部附加条一種(附加2条)、口辺縁部下部指押痕付	甕土中	PL97
TP44	弥生土器	甕	—	(2.9)	—	長石・石英・雲母	にじい・黄褐色	普通	口内縁部・唇下縁に11道部附加条一種(附加2条)、口辺縁部木葉状	甕土中	PL97
TP45	弥生土器	甕	—	(8.0)	—	長石・石英・雲母・小礫	暗褐色	普通	胴部輪面状土具(5本輪面)による表状文様、胴部附加条一種(附加2条)	甕土中	PL97
TP46	弥生土器	甕	—	(10.5)	—	長石・石英・雲母	にじい・褐色	普通	胴部輪面状土具による表状文、胴部附加条一種(附加2条)	甕土面	PL97
TP47	弥生土器	甕	—	(5.1)	—	長石・石英・雲母	にじい・褐色	普通	胴部輪面状土具による表状文、輪面状土具(5本輪面)による出筋文様	甕土中	PL97
TP48	弥生土器	甕	—	(6.4)	—	長石・石英・雲母	にじい・褐色	普通	胴部附加条一種(附加2条)	甕土下層	PL97
TP49	弥生土器	甕	—	(6.7)	—	長石・石英・雲母	褐色	普通	胴部附加条一種(附加2条)	甕土中	PL97

表4 弥生時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	高さ (cm)	床面	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)			
							柱穴	土坑	土台	土壇						
2	K 3c7	N-65°-W	方形(床方)	460 × (1.80)	21~60	平	2	—	—	—	人瓦	弥生土器(甕)、土師器(甕)				
5	E 11.11	N-7°-E	隅丸床方	516 × (3.80)	30	平	—	—	2	—	—	自然	弥生土器(甕)、土師器(埴土・甕)、埴輪	本跡→ST32		
11	E 11.14	S-10°-E	[方形]	(415) × (371)	—	平	—	—	4	—	2	埴	—	不明	弥生土器(甕)、土師器(甕・石)	本跡→SK752
68	H 10.09	N-36°-W	長方形	557 × 444	3~14	平	全周	4	1	6	埴	—	人瓦	弥生土器(甕)、土師器(甕)		
72	H 11.03	N-32°-W	長方形	550 × 392	1~7	平	[直]	3	1	—	—	—	不明	弥生土器(甕)、土師器(甕・石)石(埴土)	本跡→S171	
74	H 10.09	N-34°-W	長方形	456 × 338	6	—	—	—	2	—	—	—	不明	弥生土器(甕)、土師器(甕)	本跡→S173	
77	G 8.09	N-34°-W	方形(床方)	(402) × (316)	7	平	一部	2	—	—	—	—	人瓦	弥生土器(甕)	本跡→SK631-632	
102	G 6.04	N-5°-E	方形(床方)	516 × (3.80)	5~10	平	—	2	1	1	埴	—	自然	弥生土器(甕)、土師器(甕)		
122	H 8.18	N-19°-W	方形	344 × 337	3~8	平	—	2	—	1	埴	—	人瓦	弥生土器(甕)、土師器(甕)	SK1328→本跡	
128	H 8c7	N-9°-W	長方形	465 × 383	2~4	平	—	4	—	—	—	—	不明	弥生土器(甕)	本跡→S125	
131	G 8.b7	N-35°-W	長方形	532 × 448	5~24	平	—	4	1	12	埴	1	自然	弥生土器(甕)、土師器、埴土土器	本跡→S132, SK1195-1600	

4 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡1棟、古墳1基、古墳周溝内土壇2基、土坑2基が確認されている。これらの遺構は、調査区北東部から中央部、南東部にかけての標高26～28mの台地上を中心に位置している。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡（第43図）

位置 調査区南部のK3d9区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.40m、短軸3.28mの方形で、主軸方向はN-34°-Eである。壁高は10～17cmで、ほぼ直立している。

床 確認された部分はほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

ピット 6か所。各コーナー部寄りに位置しているP1～P4は深さ15～36cmで、規模と位置的に主柱穴と考えられる。南東壁寄りに位置しているP5は深さ29cmで、配置から出入り口に施設に伴う柱穴の可能性がある。東コーナー部に位置しているP6は深さ24cmで、P1の側に配置しているが性格不明である。

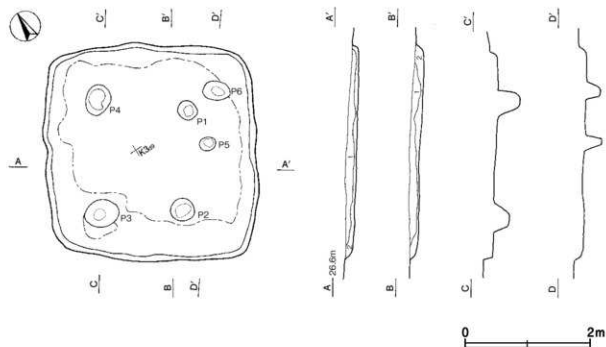
覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況と遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 層 褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量 2 層 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2点（堯）、縄文土器片27点、竈2点が出土している。出土した土器片はいずれも小破片であり、竈1点を除き覆土上層から出土したものである。これらの遺物は、埋め戻された時に混入したものと考えられる。

所見 出土している遺物の多くは、覆土上層からのもので本跡に伴うものと考えにくい。本跡は当遺跡の住居跡の傾向から、古墳時代前・中期の住居跡または倉庫的な機能を持つ竪穴遺構と推察される。



第43図 第3号住居跡実測図

第10号住居跡 (第44・45図)

位置 調査区北東部のG9b0区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第707号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.15m、短軸は4.52mの隅丸長方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は15～26cmで、外傾して立ち上がっている。

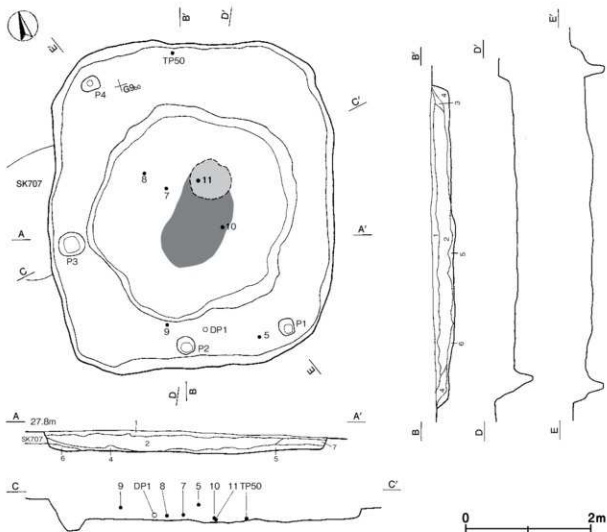
床 中央部がわずかに窪み、凸凹が見られ、それほど踏み固められていない。中央部に径62cm、厚さ3cmほどの円形に近い焼土の塊が確認されている。当初、炉として調査をしたが、赤変硬化しておらず、焼土の南側に炭化物が薄く広がっていることなどから、炉ではなく一時的に何かを燃やした跡と判断した。

ピット 4か所。壁際に半円状に並ぶP1～P4は、深さ21～30cmほどである。覆土から柱穴なのは確実であるが、配列的に不明な点が多い。

覆土 7層に分層される。各層とも土器片が数多く確認でき、埋土とともに廃棄された状況で出土しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

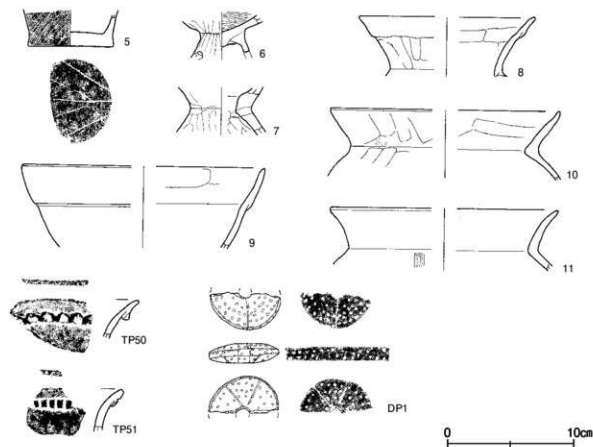
- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|--------------------|
| 1 黒暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量 | | |



第44図 第10号住居跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片30点（広口壺30）、土師器片534点（炉器台2、高坏6、甕類526）、土製品1点（紡錘車）が覆土中層から下層にかけてに散在するように出土している。いずれも破片で、器形全体をうかがえるものは少なく、本跡廃絶時に廃棄されたものと考えられる。5は南東部コーナー寄り覆土上層、9・DP1は南部の壁寄りの覆土中層から出土している。6・TP51は共に南東部の覆土中、7・8・10・11は中央部の覆土下層、TP50は北壁際の底面から、それぞれ破片で散在して出土している。その他、埋没時に流れ込んだものと考えられる縄文土器片113点、礫16点も覆土上層の第1・2層から出土している。

所見 炉が確認されておらず、柱穴の配列が不規則であること、床面があまり平坦ではなく凸凹が見られることなどから、本跡は極めて短期間に使用した住居跡か倉庫的な堅穴状の遺構の可能性が考えられる。時期は、出土遺物が弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器片が出土していることと遺構の種類などから、古墳時代前期初頭と考えられる。



第45図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	弥生土器	壺	—	(29)	6.8	長石・石英・雲母	にぶい・黒	普通	付加糸一種(付加2条)の縄文施文 底面 木炭灰	覆土上層	
6	土師器	器台	—	(3.8)	—	長石・石英・赤色 粘土	にぶい・黄橙	普通	内面ナデ、磨り上げナデ 内面へラナデ、磨り上げナデ	覆土中	20%
7	土師器	器台	—	(3.8)	—	長石・雲母	にぶい・黒	普通	体部外面へラ磨り、体部内面丁寧ナデ 脚部内面へラナデ	覆土下層	10%
8	土師器	壺	[14.2]	(4.7)	—	長石・雲母	橙	普通	磨り上げ口辺部外面横ナデ 内面へ ラナデ 下層へラナデ	覆土下層	
9	土師器	鉢	[19.4]	(6.5)	—	長石・雲母	橙	普通	磨り上げ口辺部外面横ナデ 内面へラ ナデ	覆土中層	
10	土師器	甕	[18.2]	(5.4)	—	長石・雲母・赤色 粘土	にぶい・黄橙	普通	口辺部外面ハナ目調整ナデ 内面へラナ デ 体部外面ハナ目調整ナデ 内面ナ デ	覆土下層	

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
11	土師器	甕	180	49	—	石英・雲母	橙	普通	口辺部内外面獅子牙 体部外面ハケ目・普通 内面ナデ	覆土下層	
TP50	弥生土器	甕	—	32	—	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口辺部内外面ナデ 口縁部下層部状の工具により押圧	床面	
TP51	弥生土器	甕	—	30	—	長石・雲母	に灰・橙	普通	口辺部内外面ナデ 口縁部に縄文施文 口縁部下層部状の工具により押圧	覆土中	

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 1	楊漆平	5.6	09	1.6	28.4	土製	表面4分磨。裏面6分磨。棒状工具による削突	覆土中層	45% P1,122

第12号住居跡 (第46図)

位置 調査区北東部のF10c6区で、標高26mほどの台地上の緩斜面に位置している。

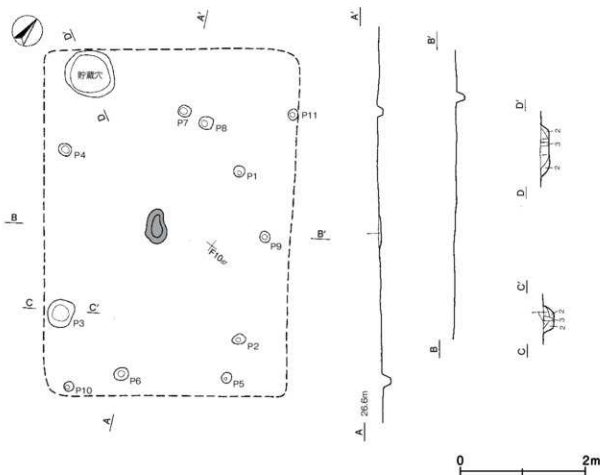
規模と形状 耕作による削平のため、遺存状況は不良である。柱穴と考えられるピットと遺存する炉と床面から、長軸5.50m、短軸4.00mの長方形と推定される。炉の中心を通る軸線からみた主軸方向は、N-38°-Wである。壁は削平されているため、確認されなかった。

床 ほほ平坦である。軟質ではないものの、特に踏み固められているところは認められなかった。

炉 ほほ中央部に付設されている。長径54cm、短径34cmの不定形である。床面を2cm掘りくぼめた地床炉で、炉床面はわずかに赤変し硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子微量



第46図 第12号住居跡実測図

ピット 11か所。炉を巡るように位置しているP1～P9は、深さ6～15cmで、配置からP1～P4が主柱穴と考えられる。P10・11は、形状と位置から壁柱穴の可能性もあるが、明確ではない。

ピット3土層解説

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 灰褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 2 暗褐色 ロームブロック・砂質粘土ブロック中量 |
| | 3 灰褐色 砂質粘土ブロックの塊 |

貯蔵穴 西コーナー部寄りに付設されている。上端長径80cm、短径76cmほどの楕円形で、深さ13cmである。底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は締まりが弱い。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------|------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 3 灰褐色 砂質粘土ブロックの塊 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | |

覆土 床面が露出した状態で検出されたため、堆積状況は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器片10点(堿)が貯蔵穴の覆土中から出土している。いずれも細片であり、図化できない。その他、流れ込んだ縄文土器片3点も出土している。

所見 遺存状況が不良で出土遺物も少ないため、時期判定が困難である。出土遺物と隣接する住居跡との関連から、廃絶されたのは古墳時代前期頃と推定される。

第13号住居跡 (第47・48図)

位置 調査区北東部のF10c2区で、標高26mほどの台地上縁辺部の緩斜面に位置している。

規模と形状 耕作により、北東コーナー部から北西壁にかけて削平されている。遺存する南東コーナー部や北西コーナー部までの計測値から長軸5.22m、短軸4.48mの長方形と推定される。主軸方向は、N-41°-Wである。確認できた壁の壁高は18～32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、出入り口施設にかかわるピットと考えられるP5から炉にかけて踏み固められている。壁溝は幅9～22cm、深さ18～32cmで、確認された壁下に巡っている。

炉 中央部から北西部の壁寄りに付設されている。長径95cm、短径77cmの不定形であり、床面を5cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面には硬化している部分が認められた。

ピット 9か所。P1～P4は深さ33～50cmで、位置と規模から主柱穴と考えられる。P5は深さ17cmで、南壁際の中央にあり、出入り口施設にかかわるピットと考えられ、P6はP5に隣接しているため出入り口施設にかかわるピットの可能性がある。P7は深さ18cmであるが、性格は不明である。他は壁柱穴の類である。

ピット土層解説 (共通)

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子多量、ロームブロック微量 | 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | |

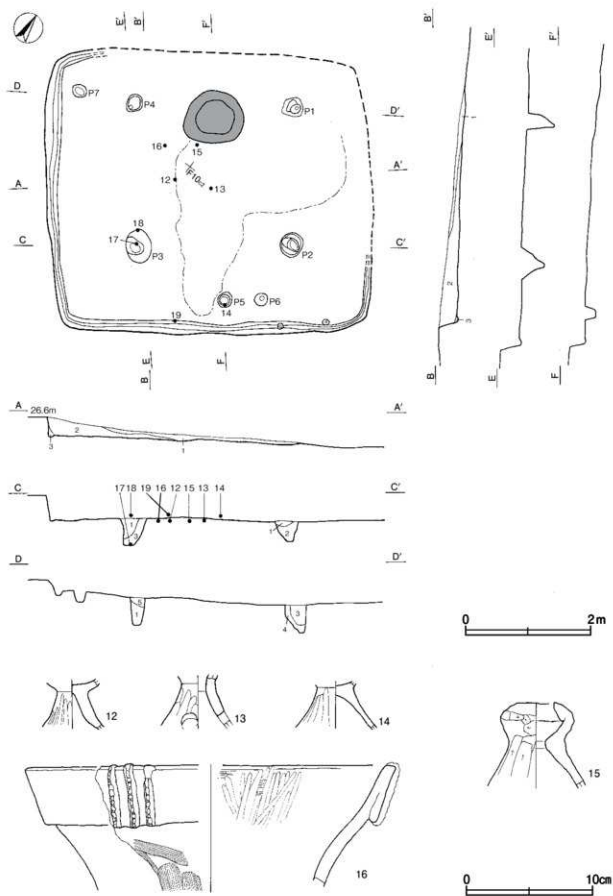
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

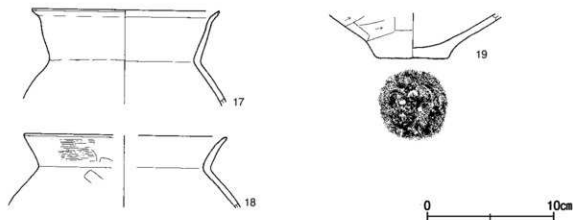
- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片247点(埴1、器台6、堿類240)が出土している。12・13・15・16・18はいずれもほぼ中央部の床面、14はP5の上面、17はP3内、19は南東壁際の床面からそれぞれ出土している。この他、北側の谷部に向かって流れ込んだ縄文土器片130点、礫122点も覆土上層から散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器の様相から古墳時代前期前半と考えられる。



第47图 第13号住居跡・出土遺物実測図



第48図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表 (第47・48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
12	土師器	器台	—	(3.9)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	床部内・外面ナデ 脚部外面へラ磨き 内面ナデ	床面	20%
13	土師器	器台	—	(4.3)	—	長石・雲母・赤色粒子	明赤陶	普通	脚部外面へラ磨き 内面ヘラナデ裏3本磨き	床面	20%
14	土師器	器台	—	(3.9)	—	長石・赤色粒子	橙	普通	脚部外面へラ磨き 内面ヘラナデ	P 5上面	20%
15	土師器	伊器台	3.0	(6.8)	—	長石・石英	明赤陶	普通	底部外面へラ磨り 内面輪痕肌 脚部外面へラ磨り 内面ヘラナデ	床面	70%
16	土師器	甕	[296]	(10.2)	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	折り返し口辺部外面ナデ 3本1組の輪状浮文取り付け 内面ハケ目調整後へラ磨き 体部上位外面ハケ目ナデ 内面ナデ	床面	
17	土師器	甕	15.0	(7.5)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口辺部内・外面ナデ 体部内・外面ナデ	P 3内	15%
18	土師器	甕	[162]	(5.7)	—	長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤陶	普通	口辺部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 体部外面へラナデ後ナデ 内面ナデ	床面	
19	土師器	甕	—	(3.5)	5.6	長石・石英	橙	普通	体部外面へラ磨り 内面ナデ	床面	10%

第16号住居跡 (第49・50図)

位置 調査区北東部のF 9 d9区で、標高27mほど台地上の緩斜面に位置している。

重複関係 第15号住居に、中央部から東部にかけて床面まで掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.54m、短軸4.71mの長方形である。主軸方向は、N-47°-Wである。壁高は6～22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、如からP 3・P 4にかけて硬化面が確認されている。壁溝は確認されなかった。

炉 中央部から北西壁寄りに付設されている。長径81cm、短径50cmほどの楕円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。如床面は火を受けて赤変硬化している。如床面に並ぶように長軸26cm、短軸13cmの粘土塊が深さ8cmほどで付設されていた。如土層中第1層が如床面の土層で、第2層が粘土塊、第3層が火熱を受けた層である。

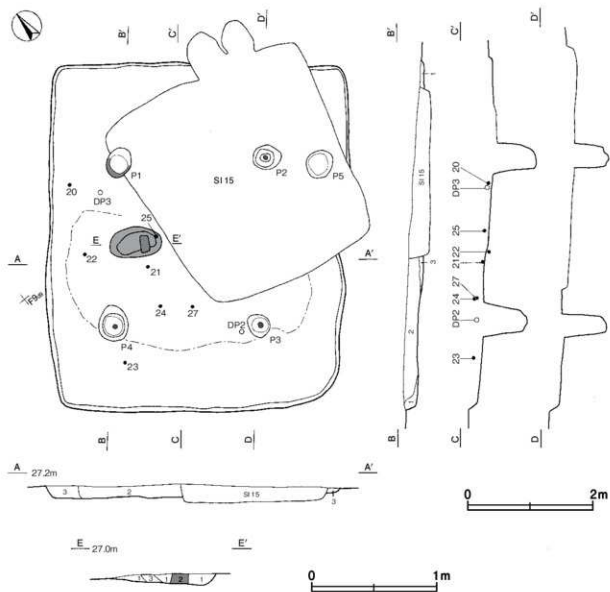
如土層解説

1 赤陶色 焼土ブロック多量

3 黒陶色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量

2 灰褐色 粘土塊

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ56～72cmで、配置と規模から主柱穴と考えられる。P 1には掘り方に粘土を貼り付けて柱を固定したと考えられる形跡。P 2～P 4には柱のあたりが確認されている。P 5は、南東壁際にあることから出入り口施設にかかわるピットか、あるいはP 2に隣接することから補助柱穴の可能性が考えられる。



第49図 第16号住居跡実測図

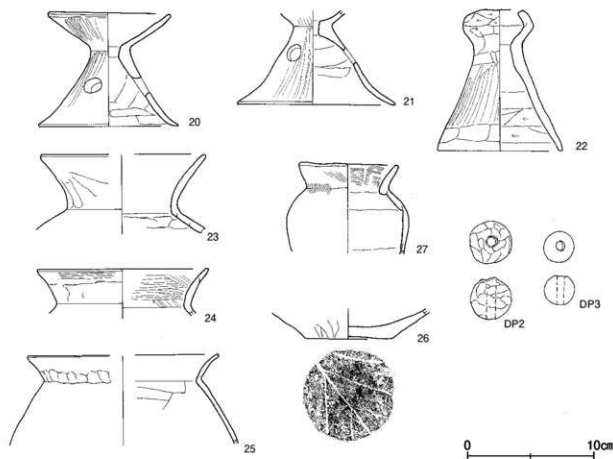
覆土 3層に分層される。ブロック状の堆積がみられる人為堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量 | 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土器器片439点（埴6、器台41、甕類385、ミニチュア土器7）、土製品2点（球状土錘）が出土している。20は土圧でつぶれた状態で正位で北西壁際の床面から出土している。22は西壁際の床面、23は南西部覆土中層からそれぞれ出土している。21・24・25・27はいずれも床面または床面と覆土中・下層から出土した破片が接合したものであり、26は覆土中から出土している。DP 2は南部の床面、DP 3は北西壁際の床面からそれぞれ出土している。この他、流れ込んだ縄文土器片154点、弥生土器片2点、礫37点、陶器片2点も出土している。出土した遺物の9割は覆土中からのもので、その多くは本跡の廃絶時に投棄または埋土に混入したものと考えられる。

所見 炉に粘土塊が併設された住居跡は当遺跡では唯一の事例である。時期は、出土土器から古墳時代前期前半と考えられる。



第50図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

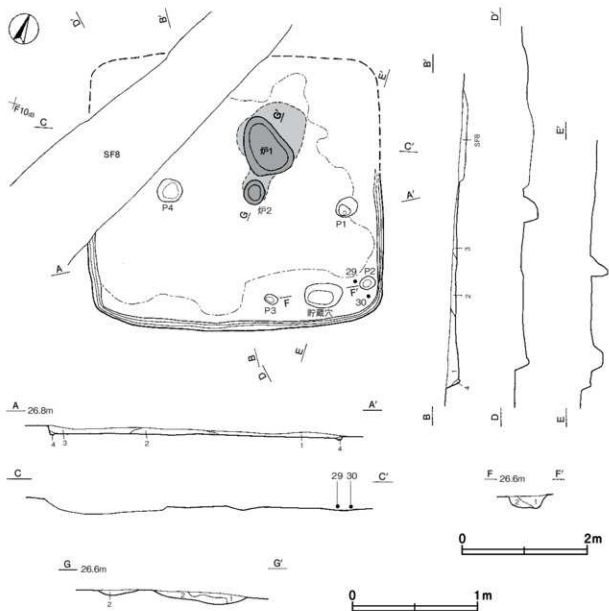
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
20	土師器	器台	9.6	9.2	11.0	長石・雲母	にぶい橙	普通	内面内面へラ磨き 内面厚縁のため調整不可 胴部外面へラ磨き 内面へラナデ 器3本所	床面	90% PLS8
21	土師器	器台	—	(7.6)	12.6	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	胴部外面へラ磨き 一部厚縁 内面へラナデ 器3本所	床面	45%
22	土師器	伊器台	3.6	11.2	10.0	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	胴部外面へラ磨き 内面厚縁 胴部外面へラ磨き ヘラナデ 内面へラ磨き	床面	90% PLS8
23	土師器	壺	[13.0]	(6.4)	—	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	胴部外面へラナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ナデ 内面へラナデ 輪縁部	覆土中層	10%
24	土師器	甕	13.4	(3.8)	—	長石・雲母	明赤陶	普通	口辺部外面ナデ 輪縁部 11特部へラ磨き 11辺部内面ナデ後へラ磨き	覆土中層	15%
25	土師器	甕	[15.2]	(7.1)	—	長石・石英・赤色粘土	暗赤陶	普通	11辺部内・外面ナデ 胴部外面面割付 胴部外面へラナデ 内面へラナデ ナデ	覆土下層	
26	土師器	甕	—	(2.4)	7.1	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部外面へラナデ 内面ナデ 胴部内面ナデ	覆土中	
27	土師器	ヒニキエダ土器	7.8	(7.1)	—	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	11辺部外面ハケ目 ナデ 11辺部内面ハケ目 胴部外面ハケ目 ナデ 胴部内面ナデ 輪縁部	覆土中層	40%

番号	器種	径	孔径	厚S	重座	材質	特徴	出土位置	備考
DP 2	球状土師	3.2	0.7	3.3	31.9	土製	ナデ調整後磨き 一方からの穿孔	床面	100%
DP 3	球状土師	2.4	0.6	2.2	12.3	土製	ナデ調整 一方からの穿孔	床面	100%

第17号住居跡 (第51・52図)

位置 調査区北東部のF10d3区で、標高26mほどの台地縁辺部の緩斜面に位置している。

重複関係 北西部が第8号道路に掘り込まれ、傾斜面に面する北壁側が削平されているため、遺存状況は不良である。



第51図 第17号住居跡実測図

規模と形状 遺存する北東壁と南西壁から長軸4.65m、短軸4.25mの長方形と推測される。主軸方向は、N-12°-Wである。確認された壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、炉を囲むように全体的に踏み固められている。壁溝が確認された壁際を巡っており、規模は幅9～15cm、深さ3～5cmで、断面形はじ字状を呈している。

炉 2か所。炉1は中央部から北壁寄りに付設されている。長径97cm、短径70cmの不定形であり、床面を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は熱により硬化している。炉2は、炉1の南側に付設されている。長径36cmの楕円形であり、床面を4cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は熱により硬化しているが、同時期に使用したのかどうかは不明である。炉1、炉2の覆土は2層に分層される。

炉1・2土層解説（共通）

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、ロームブロック微量

ピット 4か所。P1・P4は深さ27cmと24cmで、位置と規模から主柱穴と考えられる。P2とP3は深さ8cmと17cmである。P3は南壁際のほぼ中央にあり主軸線上にあることから、出入り口施設にかかわるピットの

可能性がある。P2は性格不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部寄りの南壁際、P2とP3の間に位置している。長径61cm、短径38cmの不定形である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は第1・2層とも粘性・締まりが弱い。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量・焼土ブロック・炭化粒子微量 2 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

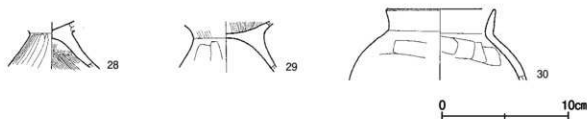
覆土 4層に分層される。ブロック状の堆積状況と遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量・焼土ブロック・炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子中量
2 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 4 黒褐色 ローム粒子少量
子殻量

遺物出土状況 土師器片140点(埴2, 器台4, 甕類134), 弥生土器片2点が出土している。28は貯蔵穴の覆土中、29・30は、ともに南東コーナー部壁際の覆土下層から出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片10点、竊28点が出土している。また、擾乱により混入した鉄製品3点(不明)も出土している。

所見 調査区北端の台地縁辺部に位置し、長方形を呈した住居跡である。時期は、出土土器から古墳時代前期前半と考えられる。



第52図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	土師器	器台	—	(37)	—	石英・雲母・赤色 粒子	赤褐色	普通	脚部外面へラ磨き 内面ハケ目調整	貯蔵穴覆土中	40%
29	土師器	器台	—	(40)	—	長石・赤色粒子	橙	普通	底部内・外面ハケ目調整 外面準減 脚部外面へラナデ 内面ナデ	覆土下層	45%
30	土師器	甕	8.6	(37)	—	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口辺部内・外面準ナデ 底部内・外面へラナデ	覆土下層	25%

第18号住居跡 (第53～55図)

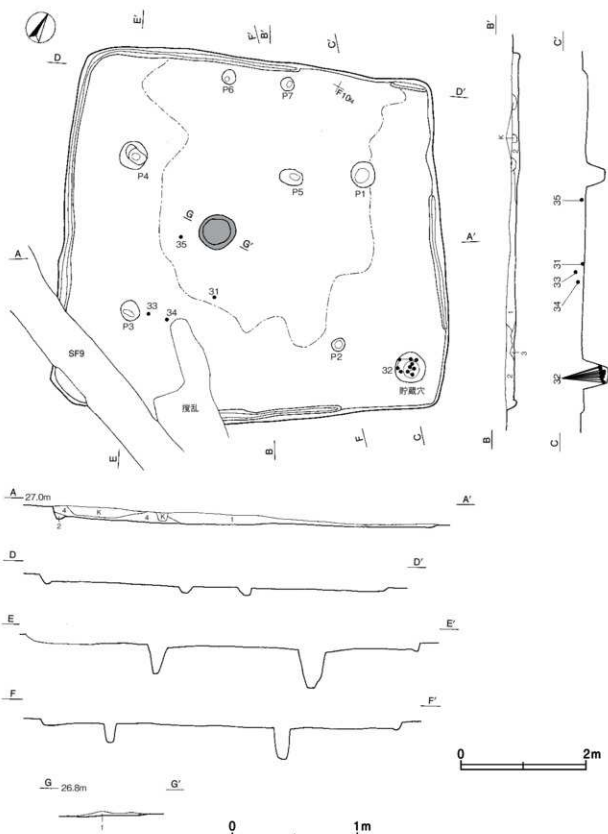
位置 調査区北東部のF10f3区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 南西コーナー部を第9号道路に掘り込まれ、さらに南西部の一部が樹木根により擾乱を受けているため、遺存状況は不良である。

規模と形状 長軸6.18m、短軸5.84mの方形で、主軸方向はN-63°-Eである。壁高は7～11cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部からP6・P7が位置する北壁際にかけて踏み固められている。壁溝が東壁際と北東部壁際、西部壁際、及び擾乱を受けていない南部壁際で確認されている。規模は幅4～5cm、深さ4～5cmで断面形状はU字状である。

炉 ほぼ中央部の西部壁寄りに付設されている。長径59cm、短径54cmの円形である。火床部は床面とほぼ同じ高さの地床炉で、火床面が熱を受けて赤変硬化している。



第53図 第18号住居跡実測図

炉土層解説

1 暗赤褐色 機土ブロック多量、炭化粒子少量

貯蔵穴 南東コーナー部の壁際に付設されている。径48cmの円形である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は締まりが弱い。

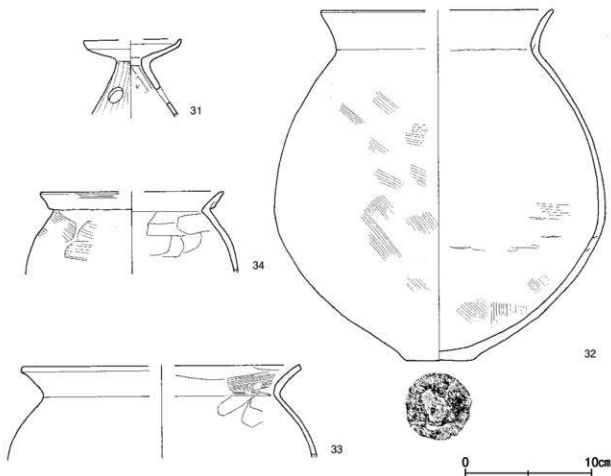
ピット 7か所。P1～P4は深さ30～60cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5はP1に隣接しているが、性格は不明である。P6・P7は出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

覆土 4層に分層される。不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

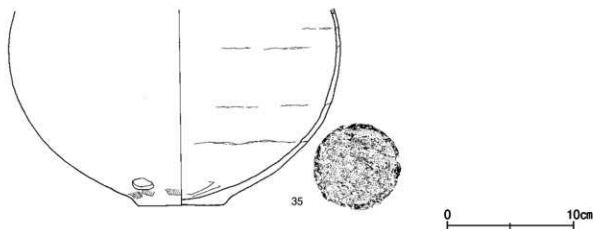
土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化
粒子微量 | 3 黒暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子
微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片498点（高坏1、器台20、甕類477）が覆土上層から床面にかけて出土している。31は中央部の床面から横位で出土し、32は貯蔵穴内からまとまって出土した破片が接合したものである。33・34は南西部、35は中央部の覆土中層及び下層から破片でそれぞれ出土している。床面近くから出土している遺物は本跡廃絶時に廃棄されたものと考えられるが、覆土上層から出土している土師器片は多くが細片であることから、本跡の廃絶後に投棄されたものと考えられる。その他、縄文土器片98点、礫105点も覆土全体から出土している。
所見 時期は、出土土器から古墳前期後半と考えられる。



第54図 第18号住居跡出土遺物実測図(1)



第55図 第18号住居跡出土遺物実測図2)

第18号住居跡出土遺物観察表 (第54・55図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
31	土師器	器台	[78]	(6.3)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	器底内・外面丁取ナナテ 器身外面ヘラ削き 内面ヘラ削り 器立小片	床面	40%
32	土師器	甕	[186]	[280]	5.4	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナテ 体部外面ハケ目ナテ 内面ハケ目 ナテ 輪切痕	貯蔵穴内	40%
33	土師器	甕	[220]	(7.4)	—	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部外面横ナテ 内面ハケ目 ナテ 体部外面ナテ 内面ヘラナテ後ナテ	覆土中層	
34	土師器	甕	[146]	(6.5)	—	長石・雲母	橙	普通	器口裏し口辺部外面ハケ目 ナテ 内面ナテ 体部外面ハケ目一部横 内面ナテ	覆土中層	
35	土師器	甕	—	(15.6)	6.7	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナテ 下縁ハケ目調整痕 穿孔あり 内面輪切痕を残すナテ	覆土下層	

第19号住居跡 (第56図)

位置 調査区北東部のF10e5区で、標高26mほどの台地上の緩斜面に位置している。

規模と形状 耕作による削平のため覆土がほとんどない状況で検出されている。長軸4.13m、短軸は3.79mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は2～8cmで、ほぼ外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から炉周辺にかけて踏み固められている。壁溝が全周し、幅6～16cm、深さ4～14cmで、断面形はU字状である。

炉 中央部から北部壁寄りに付設され、覆土がない状況で検出されている。長径87cm、短径82cmの不定形である。炉床は床面とほぼ同じ高さの地床炉で、炉床面が火を受けて赤変硬化している。

ピット 4か所。P1～P3は配置から主柱穴と考えられ、深さは9～27cmである。北東部の柱穴は調査したが検出できなかった。P4は深さ16cmで、南西コーナー部の壁溝と重複しているが、性格は不明である。

貯蔵穴 南東部の南壁際が付設されている。長径45cm、短径38cmほどの楕円形で、深さは20cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は第1・2層とも粘性・締まりが弱い。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量

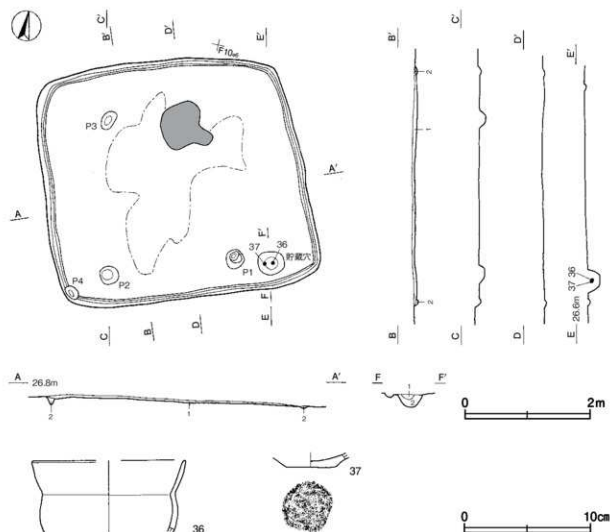
覆土 2層に分層される。厚いところは5cmであるが、堆積状況は判然としない。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片24点(埴2, 甕類22)が出土しているが、ほとんどが細片である。36・37は、共に貯蔵穴から出土したもので、同一個体と思われるが接点がない。炭化材の小片も貯蔵穴から検出されている。その他、混入した縄文土器片8点、礫3点も覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器と住居跡の形態の傾向から古墳時代前期後半から中期初めと考えられる。



第56図 第19号住居跡・出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表(第56図)

番号	種別	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
36	土師器	埴	[122]	(5.8)	—	長石・雲母・赤色 粘土	橙	普通	外面ナデ 一部厚減 内面ナデ	貯蔵穴内	20%
37	土師器	埴	—	(1.1)	3.9	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	外面ヘラナデ 内面ナデ	貯蔵穴内	10%

第20号住居跡(第57・58図)

位置 調査区北東部のF10g5区で、標高26mほどの台地上の緩斜面に位置している。

規模と形状 耕作による削平のため南部の壁及び壁溝は確認されず、遺存する壁と床質から長軸4.35m、短軸4.14mほどの方形である。主軸方向はN-36°-Wである。確認された壁高は高いところで20cmほどで、ほほ外

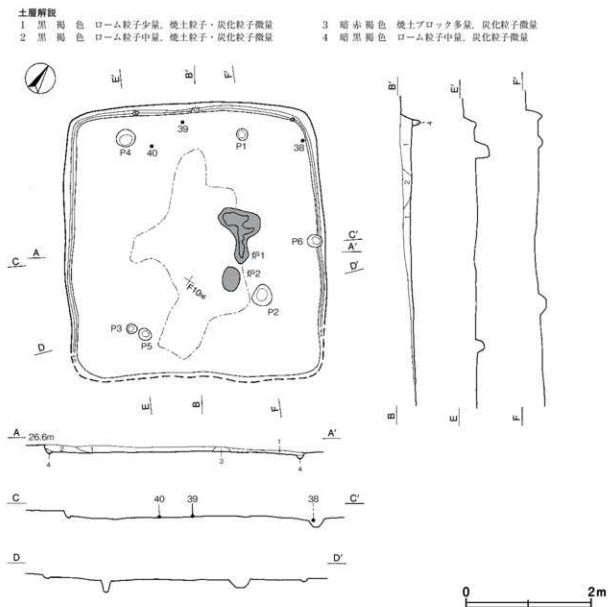
傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から炉にかけて踏み固められている。壁溝は削平されている南東コーナー部から南西コーナー部を除いた壁際に巡っており、幅9～20cm、深さ4～5cmで、断面形U字状である。

炉 中央部の東壁寄りに2か所付設されている。中央部寄りに位置している炉1は長径86cm、短径67cmの不定形である。中央部から東壁よりに位置している炉2は長径38cm、短径27cmの楕円形である。双方とも火床部は床面とはほぼ同じ高さの地床炉で、火床面が火を受けて赤変硬化している。使用痕についての差違は認められず、使用期間は比較的短く同時期に使用されていたものと考えられる。

ピット 9か所。P1～P4は深さ7～20cmで、配置から主柱穴の可能性が考えられる。P5はP3に隣接しているが、深さからP3の補助柱穴と判断した。東壁際の壁溝と重複して位置しているP6と北壁際の壁溝内に位置している小ピットは壁柱穴とも考えられるが、性格は不明である。

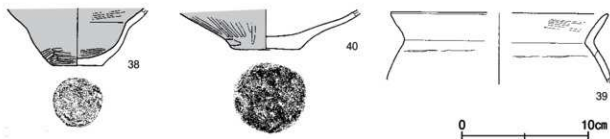
覆土 削平された南部は、炉の焼土が露出した状況であった。4層に分層され、不規則な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。第3層が炉の土層に相当し、第4層は締まりの弱い壁溝の覆土である。



第57図 第20号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片140点(埴4, 器台6, 甕類130)が出土している。38は北東コーナー部壁際の床面から、39・40は北壁寄りの床面からそれぞれ出土した破片である。多くは破片で、北部の覆土中に集中して出土する傾向がみられる。その他、流れ込んだ縄文土器片33点、礫1点も出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代中期前半と考えられる。



第58図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表(第58図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
38	土師器	埴	—	(4.6)	4.0	長石・石英	明赤陶	普通	内・外面ナデ後へラ磨き 一部摩滅	床面	35%
40	土師器	壺	—	(3.2)	5.0	長石・雲母・赤色 粒子	明赤陶	普通	体部外面へラ磨き 下縁へラナデ 内面 ナデ 内外面摩滅	床面	
39	土師器	甕	[17.2]	(5.6)	—	長石・石英	陶	普通	口辺部外面横ナデ 内面ハケ目 ナデ 体部内・外面輪磨きを残すナデ	床面	

第21号住居跡(第59図)

位置 調査区北東部のF10g7区で、標高26mほどの台地上の緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作により東壁から南壁・南西コーナー部にかけて削平されている。遺存する北壁と西壁及び床から長軸は4.35m、短軸は3.75mの長方形と推定した。主軸方向はN-0°である。確認された壁高は高いところで7cmほどで、ほぼ外傾して立ち上がっている。

床 削平されているので判断は難しいが、ほぼ平坦であったと推測できる。炉の周辺を中心に踏み固められている。壁溝が北西コーナー部を巡っており、深さ3cmである。

炉 2か所検出されている。どちらもほぼ中央部、西部壁寄りに付設されている。炉1は長径55cm、短径45cmの楕円形である。炉2は炉1の南に位置し、長径45cm、短径30cmの楕円形である。どちらも炉床部は床面とほぼ同じ高さの地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉床面の状況から、ほぼ同時期に使用されていたものと考えられる。

炉2土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量

ピット 7か所。P1～P7は深さ6～24cmである。配置が規則的でないため主柱穴を判断するのは難しいが、P1・P4は棟持ち柱と考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部寄りの壁際に付設されている。長径78cm、短径55cmの不整楕円形で、深さは37cmである。底面は平坦で、壁は有段状に外傾して立ち上がっている。覆土は粘性・締まりとも弱い。

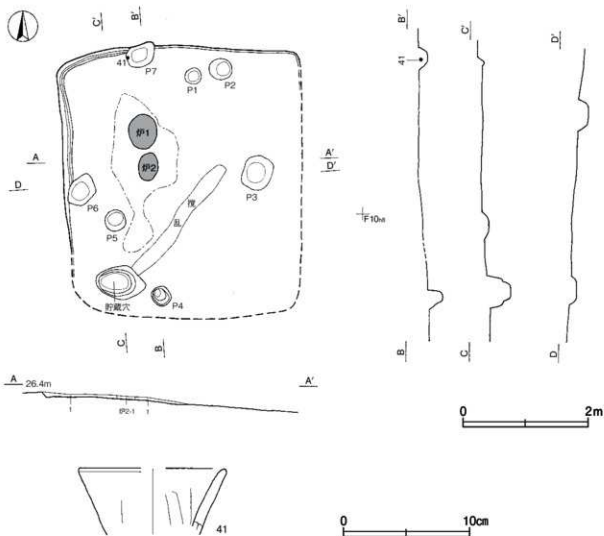
覆土 単一層で層厚が厚いところで7cmと薄く、堆積状況は判然としない。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片45点(埴2, 高坏1, 器台1, 甕類41)が細片で出土している。41は北壁際P7の上面から破片で出土している。出土遺物は覆土が比較的厚く残る北西部からほとんどが出土している。その他、埋没時に混入した縄文土器片11点, 礫12点も出土している。

所見 時期は, 出土土器の傾向から古墳時代前期前半と考えられる。



第59図 第21号住居跡・出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表 (第59図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
41	土師器	甕	[11.8]	(5.3)	—	長石・石英・赤色 磁子	にぶい・黄褐色	普通	口辺部内・外面ヘラナデ後ナデ	P7上面	15%

第23号住居跡 (第60図)

位置 調査区北東部のF10i4区で, 標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 北東部で第42号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東壁から南壁・南西コーナー部にかけて削平されている。遺存する北壁と西壁及び床質から長軸4.0m、短軸3.42mほどの長方形と推定される。主軸方向はN-37°-Wである。確認された壁高は高い部分で4cmほどで、ほぼ外傾して立ち上がっている。

床 遺存する部分から南東部に向かってわずかに傾斜していたと推測され、炉の周辺を中心に踏み固められている。

炉 中央部から覆土がない状況で検出されている。長径50cm、短径37cmの楕円形で、炉床部は床面とほぼ同じ高さである。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

ピット 5か所。P1～P4は配置から主柱穴と考えられ、深さ11～30cmである。P5は深さ26cmであるが、性格は不明である。

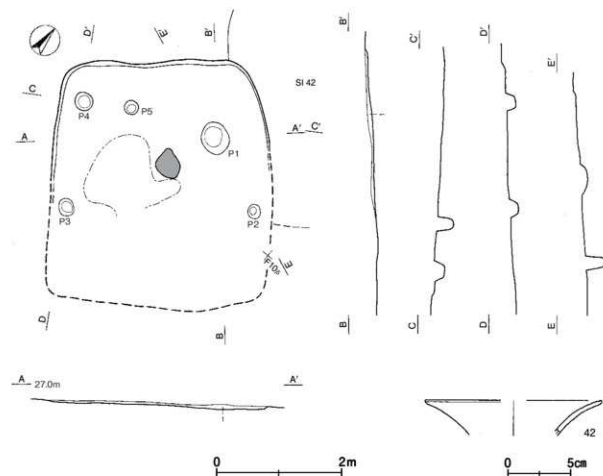
覆土 層厚が薄く、堆積状況を判断するのは難しく判然としない。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片35点（椀3、器台3、高坏1、甕頸28）が出土している。42はP1の覆土中から出土した破片である。土器片には、ハケ目調整痕が見られる甕体部の破片や器台の破片が混じっているが、いずれも小片である。この他、流れ込んだ鏝4点、混入した須恵器細片1点も出土している。

所見 遺存状況が不良のため出土遺物も小片で少ないが、時期は、出土土器と住居跡の形態などから古墳時代前期と考えられる。



第60図 第23号住居跡・出土遺物実測図

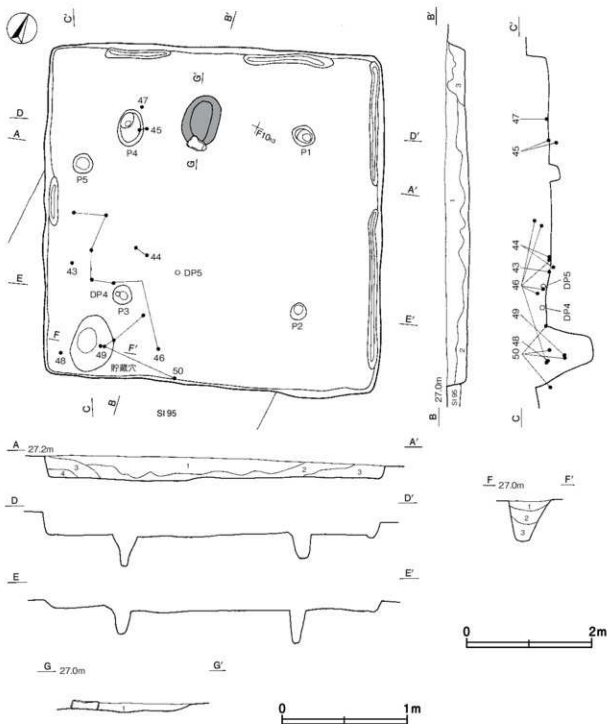
第23号住居跡出土物観察表 (第60回)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
42	土師器	壺	110	29	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面ヘラナデ後ナデ	P1 覆土中	

第24号住居跡 (第61～63回)

位置 調査区北東部のF10h3区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第95住居跡を掘り込んでいる。



第61回 第24号住居跡実測図

規模と形状 長軸5.40mで、短軸5.37mの方形で、主軸方向はN-24°-Wである。壁高は17～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、踏み固められたところや高まりは認められなかった。壁溝が東、北、西の壁際の一部に幅18～22cm、深さ3～4cmほどの断面形U字状で巡っている。

炉 北壁寄りに付設されている。長径85cm、短径55cmの南北に細長い楕円形である。炉の南側に長軸30cm、短軸18cmの不整長方形で、厚さ7cmの雲母片岩が炉石としてほぼ床面の高さで確認されている。炉石部は床面とはほぼ同じ高さの地床炉で、火床面が火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は配置から主柱穴と考えられ、深さ39～53cmである。P5は深さ18cmで、P4に隣接しているが、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部寄りに付設されている。長径93cm、短径65cmの楕円形で、深さ73cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は締まりが弱い。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

4 黒褐色

覆土 4層に分層される。不規則な堆積状況と含有物から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

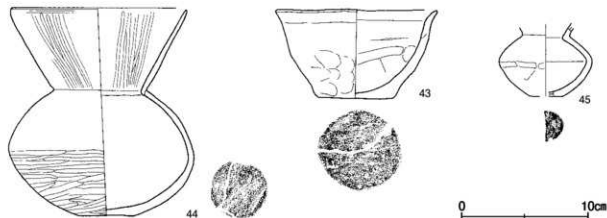
3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

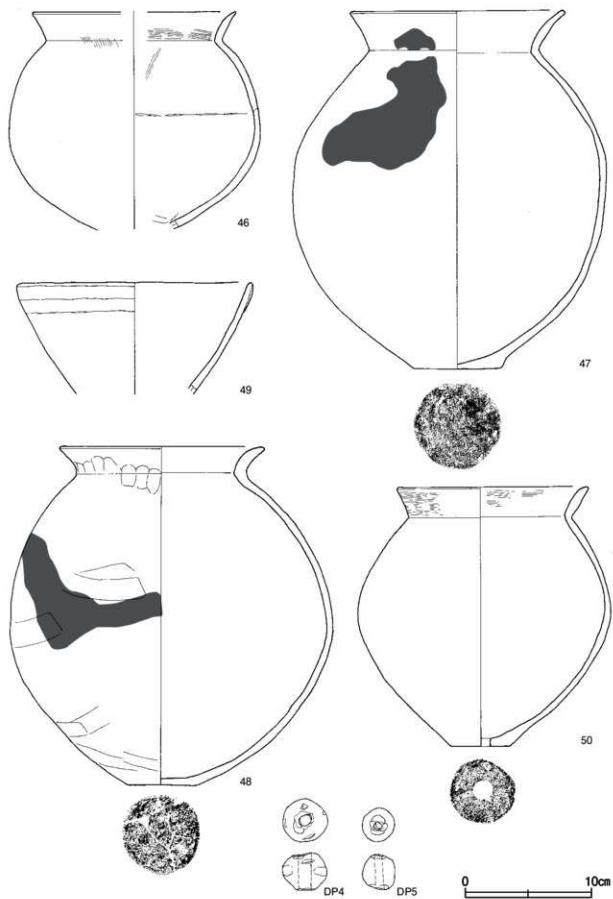
4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片481点（椀2、埴29、器台46、鉢8、甕類353、瓶43）が出土している。南西部と北西部から土器片がまとまって出土している。特に貯蔵穴のある南西部の床面からの出土が顕著である。43・44・48は南西部から南西コーナー部の壁際にかけての床面から出土しており、DP4・DP5も中央部から南西部にかけての覆土下層から出土したものである。45・47は共に北西部P4上面とP4付近の床面、46は西部壁際の覆土上層から床面から破片でそれぞれ出土している。49・50は、貯蔵穴の覆土中と周辺の床面及び覆土から出土した破片が接合したものである。これらの遺物は、出土状況から腐絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片237点、鏝44点も覆土上層を中心に出土している。

所見 炉石は火を受けて赤変して脆く、崩壊したが、当遺跡で炉から炉石が検出された事例は、本跡が唯一である。時期は、出土土器と重複関係から古墳時代前期末葉から中期前葉と考えられる。



第62図 第24号住居跡出土遺物実測図(1)



第63图 第24号住居跡出土遺物実測図2)

第24号住居跡出土遺物観察表 (第62・63図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
43	土師器	碗	128	7.1	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	1) 辺部内・外面横ナデ 体部外面へウナテ後ナデ 2) 底面裏 内面輪痕裏と指痕裏を残すナデ	床面	70% P1.88
44	土師器	用	110	16.5	4.2	長石・雲母	赤褐色	普通	1) 辺部内・外面へウナテ 体部外面土層厚減のため調整不明 2) 底面裏 内面へウナテ 底面厚減のため調整不明	床面	70% P1.99
45	土師器	罎	—	(5.8)	[26]	長石・石英・小礫	明赤褐色	普通	体部外面厚減のため調整不明	P 4 上面・床面	60%
46	土師器	甕	[162]	(17.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	1) 辺部内・外面ハケ目 ナデ 体部外面ナデ 2) 内面ハケ目 ナデ 輪痕裏	覆土層一・床面	40%
47	土師器	甕	168	28.7	6.9	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	1) 辺部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ	床面	90% P1.99 保付者
48	土師器	甕	160	27.1	5.1	長石・石英・雲母・小礫	にぶい橙	普通	1) 辺部内・外面横ナデ 側部指痕比痕 体部外面へウナテ後ナデ 内面ナデ	覆土層一・床面	90% P1.99 保付者
49	土師器	瓶	188	(9.0)	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	覆土層1層 1) 辺部内・外面横ナデ 体部外面へウナテ後ナデ 内面ナデ	貯蔵穴内	60%
50	土師器	瓶	15.1	20.6	4.8	石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	1) 辺部内・外面ハケ目 ナデ 体部外面ナデ 2) 底面厚減 内面ナデ	床面・貯蔵穴内	40% P1.99

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 4	埴状土師	3.6	1.0	3.0	31.0	土製	ナデ調整段階き 1方向からの穿孔	覆土下層	100%
DP 5	埴状土師	2.6	0.7	2.8	16.3	土製	全面ナデ 1方向からの穿孔	覆土下層	100%

第25A号住居跡 (第64・65図)

位置 調査区北東部のF 9 h0区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 北部で第31号住居跡を掘り込んでいる。本跡は第25B号住居跡とはほぼ重なり、第25B号住居跡を建て替えた住居跡である。

規模と形状 長軸7.16m、短軸5.93mの長方形で、主軸方向はN-36°-Eである。壁高は6～23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部の主柱穴と考えられるP1～P4の内側周辺が踏み固められている。壁溝が南壁中央部から西壁を巡って北壁中央部までの壁際を、幅15～26cm、深さ12cmほどで巡っている。P1とP2の東側にベット状の高まりが確認されている。ベット状の部分は床面より5cmほど高く、ローム土で平坦に構築されている。

炉 はほぼ中央部に付設され、長径108cm、短径48cmの不整楕円形である。如床は床面とはほぼ同じ高さで、床面を掘り込んだ形跡はない。如床の土層は炭化粒子を少量含んだ暗赤褐色の焼土ブロックで、如床面は火を受けて赤変硬化している。また、如の周辺に楕円形の焼土の広がりがかが3か所確認されている。

ベット 7か所。P1～P4は配置から主柱穴と考えられ、深さ43～57cmである。各主柱穴の掘り方が第25B号住居跡に伴う柱のあたりと重なることから、第25B号住居跡とはほぼ同じ位置で柱を建てていたものと考えられる。P5は南壁際のほぼ中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるベットと考えられる。P6・P7は、深さがそれぞれ16cmと27cmで性格不明である。P1・P3・P6の覆土はいずれも粘性が弱く、炭化粒子を微量に含むロームブロックが主体である。

貯蔵穴 南東コーナー部寄りの南壁際、P5と南東コーナー部の中間に付設されている。長径71cm、短径67cmの円形で、深さ53cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土第1～3層は粘性・締まりとも弱く、第4・5層は粘性・締まりとも普通である。

貯蔵穴土層解説

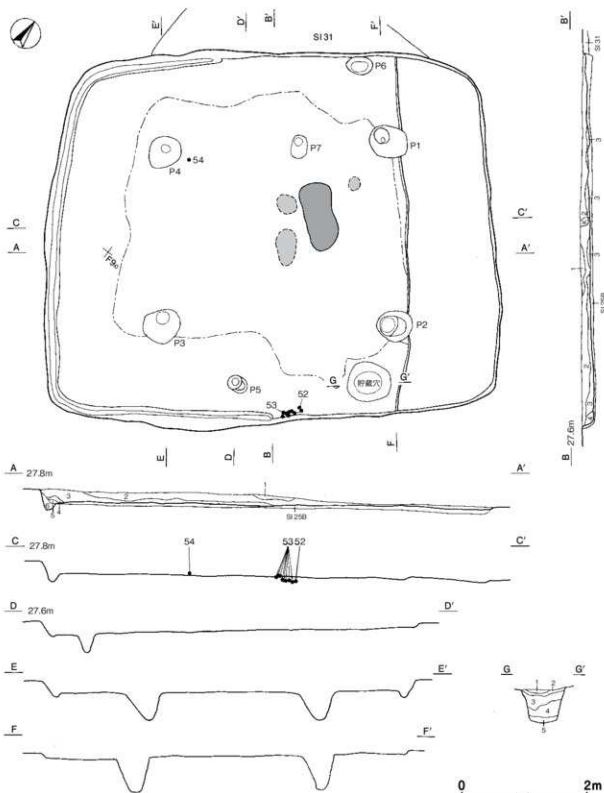
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 4 期 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 期 色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 6層に分層される。壁際から土砂が流れ込み、規則な堆積状況を示しているものの、遺物の出土状況か

ら人為堆積と考えられる。

土層解説

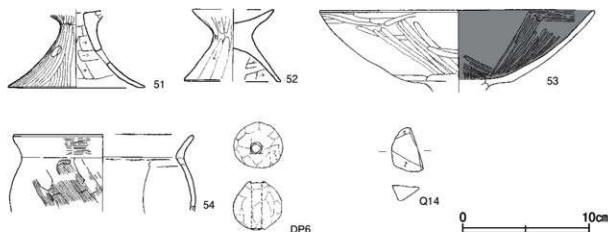
- | | | | |
|--------|---------------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 麻暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |



第64図 第25A号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片688点（埴65、器台25、高坏40、甕類538）、土製品1点（球状土錘）、石器1点（砥石）が出土している。細片及び混入した遺物の多くは、覆土上層の第1・2層から出土している。51は覆土中から、52・53は南壁際中央部の床面から破片で出土している。54は中央部の南西コーナー部寄りの覆土下層、DP 6は貯蔵穴内、Q14は南東部の覆土中から、それぞれ出土している。これらの遺物を含めて、床面付近の遺物は東部と南東部を中心に破片が散在して出土している傾向が見られることから、遺物の多くは本跡の廃絶後間もなく廃棄されたと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片194点、礫225点も覆土上層から床面にかけて出土している。

所見 第25B号住居跡を建て替えた住居跡であり、建て替えた段階で東側にベット状の施設を付設している。当遺跡内でこのようなベット状の施設が確認されたのは本跡だけである。時期は、出土土器から古墳時代前期中頃と考えられる。



第65図 第25A号住居跡出土遺物実測図

第25A号住居跡出土遺物観察表（第65図）

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
51	土師器	器台	—	(6.2)	10.8	石英・雲母	赤褐色	普通	外面へラ磨き 内面へラ磨り 多3ヶ所	覆土中	70%
52	土師器	器台	[6.4]	5.7	[7.6]	長石・石英・赤色 粘土	黄褐色	普通	外面へラ磨り 内部1割部内面ナデ 床面内面へラ磨り残ナデ	床面	75% PL98
53	土師器	高坏	21.8	(6.6)	—	石英・雲母・赤色 粘土	にがい橙	普通	床面内・外面へラ磨き	床面	50%
54	土師器	甕	[14.2]	(6.1)	—	長石・雲母・赤色 粘土	にがい橙	普通	1割部内・外面磨ナデ 外部外面へケ目 調整 内面へラナデ後ナデ 輪取直	貯蔵穴内 覆土上層	

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 6	球状土錘	3.7	0.7	3.7	46.8	土製	ナデ調整後磨き 1方向からの穿孔	貯蔵穴内 覆土上層	100%

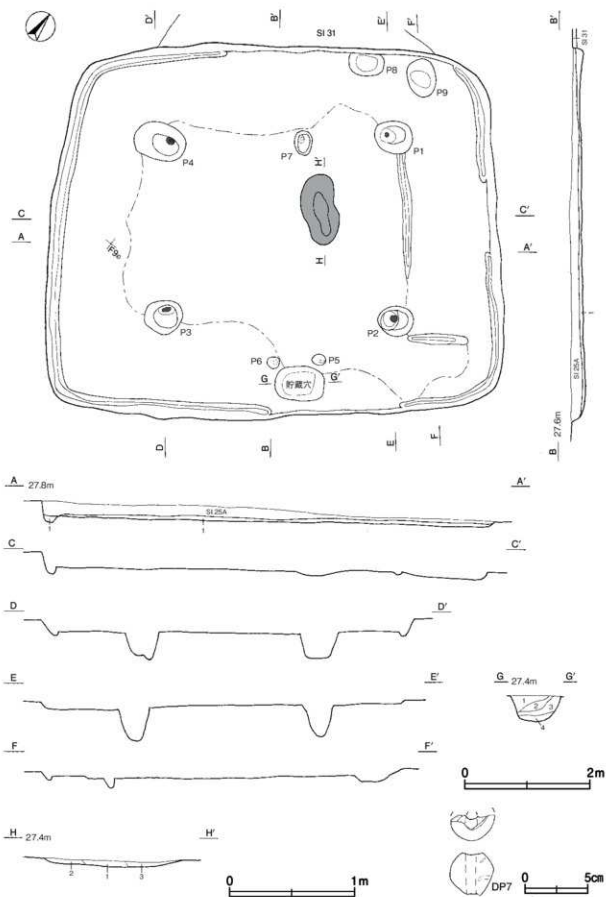
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q14	砥石	3.5	2.3	1.2	10.2	凝灰岩	端部欠損 裏面2面	覆土中	

第25B号住居跡（第66図）

位置 調査区北東部のF 9h0区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

確認状況 第25A号住居跡の調査後、掘り方調査を開始したところ、新たに床面と炉床が確認されたため、建て替える前の第25B号住居跡を確認した。

重複関係 第31号住居跡を北部で掘り込んでいる。第25A号住居は第25B号住居跡を建て替えた住居である。



第66図 第25B号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状 長軸は7.11m、短軸は5.98mの長方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は12～23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。出入り口施設にかかわるP5から、主柱穴と考えられるP1～P4の内側にかけ踏み固められている。第25A号住居で確認されたベット状の施設はなく、間仕切り溝が2条確認されている。P1とP2の間を区切る溝は幅8～16cm、深さ7cmである。一方、P2から東壁に向かう溝は幅12～15cm、深さ15cmである。壁溝は南・東・北壁で一部途切れるが、深さ6～10cmではほぼ巡っている。

炉 はほぼ中央部に付設されている。長径110cm、短径54cmほどの不整形円形である。床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉で、炉床面は火を受けて硬化している部分のみられた。

炉層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 9か所。P1～P4は配置から主柱穴と考えられ、深さ41～52cmである。いずれの底面に柱のあたりが痕が確認できる。P5・P6の深さはともに7cmほどで、南壁際のほぼ中央部に並んで位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第25A号住居跡のピットと重複しているP7・P8とP9は、いずれも性格が不明である。

貯蔵穴 南壁際の中央部、P5・P6と南壁の間に検出されている。長軸76cm、短軸55cmの隅丸長方形で、深さは40cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は第4層の粘性だけが普通で、その他は粘性・締まりも弱い。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 4 黒褐色 ローム粒子・砂粒微量

覆土 第25A号住居跡の床面下から検出されているため、土層は第25A号住居跡の貼床面の土層である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片41点（埴7、器台14、高坏2、甕類18）、土製品1点（球状土錘）、石器1点（砥石細片）が出土している。これらは第25A号住居の床面下及びベット状の構築土、貯蔵穴内から、いずれも細片で出土している。DP7は貯蔵穴内から出土したもので、第25A号住居の貯蔵穴内からも同様の球状土錘が検出されている。その他、流れ込んだ縄文土器片8点、弥生土器片1点も細片で出土している。

所見 間仕切り溝が確認された住居跡は本跡だけである。第25A号住居と比較して出土遺物は少なく、甕類の細片が中心である。出土土器の傾向や炉の使用痕から第25A号住居との時期差はあまりなく、時期は古墳時代前期中頃と考えられる。

第25B号住居跡出土遺物観察表（第66図）

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP7	球状土錘	35	∅8	3.3	(186)	土製	全面ナデ	貯蔵穴内 敷土上	45%

第26号住居跡（第67図）

位置 調査区北東部のP9f9区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第601号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸は4.57mで、短軸は3.38mの隅丸長方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は5～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部に極狭い範囲で硬化面が確認されている。

ピット 4か所。P1・P3は深さ37cmと55cmで棟持ち柱と考えられ、深さ12cmと13cmのP2・P4の性格は不明である。

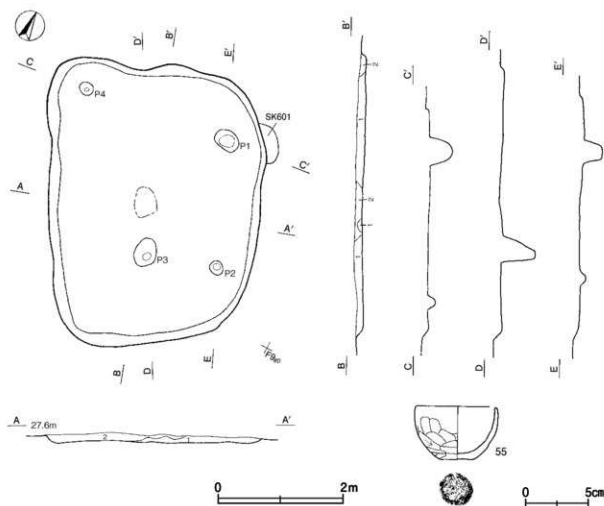
覆土 2層に分層される。不規則な堆積状況と遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土器器片53点（埴1、甕類51、ミニチュア土器1）がほとんど細片で出土している。図示できたのは55だけで、中央部の覆土中から出土している。その他、縄文時代の第601号土坑の覆土を掘り込んでいることから、流れ込んだと考えられる縄文土器片31点も出土している。

所見 出土土器にハケ目調整の變片が多く、古墳時代前期の遺構と推定されるが、何が確認されていないことから、倉庫的な建物跡とも考えられる。



第67図 第26号住居跡・出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表 (第67図)

番号	種類	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
55	土師器	土師器	6.4	4.3	2.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺縁内・外面種ナデ 体部外面へツテ 口縁へツテナデ ナデ 内面ナデ	覆土中	70% PL38

第27号住居跡 (第68・69図)

位置 調査区北東部のF 9 e7区で、標高28mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第9号道路が北東部を掘り込んでいる。

規模と形状 重複と削平により北東コーナー部は確認できなかったが、長軸5.45m、短軸4.83mの長方形で、

主軸方向はN-25°-Wである。確認された壁高は12～19cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、出入り口部と考えられる南壁際の中央部から中央部に向かってよく踏み固められている。壁溝がほぼ全周しており、規模は幅12～21cm、深さは深いところで6cmほどで、断面形はU字状である。

炉 中央部の北壁寄りに2か所付設されている。炉1は長径105cm、短径50cmの不定形で、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉2は長径27cm、短径20cmの楕円形で、炉床部が床面とはほぼ同じ高さの地床炉である。炉1の炉床面は火を受けて赤変硬化しているが、炉2の炉床面は赤変しているがそれほど硬化していない。規模と使用痕から炉2は炉1よりも後から付設され、補助的に使用されていたものと考えられる。

炉1土層解説

1 黒暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ53～83cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は南壁際中央部に位置し、深さは19cmであり、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

ピット土層解説 (共通)

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック微量 6 暗褐色 ロームブロック中量
3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 7 黒暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 8 暗褐色 ロームブロック少量

貯蔵穴 南東コーナー部寄りに付設されている。長径65cm、短径55cmの楕円形である。底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子少量

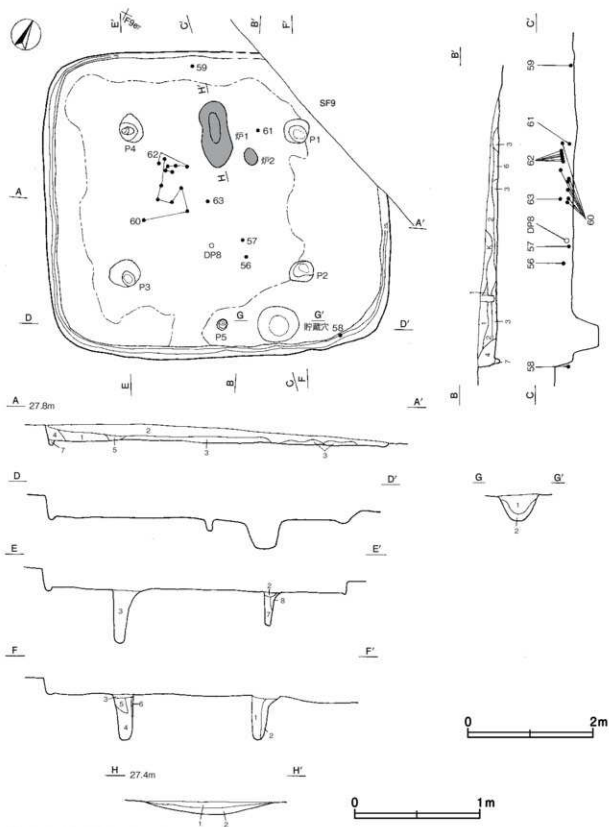
覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況と覆土の上・中層を中心に大きめの土器破片が廃棄された状況で出土していることから、人為堆積と考えられる。各層とも粘性・締まりともが弱い。

土層解説

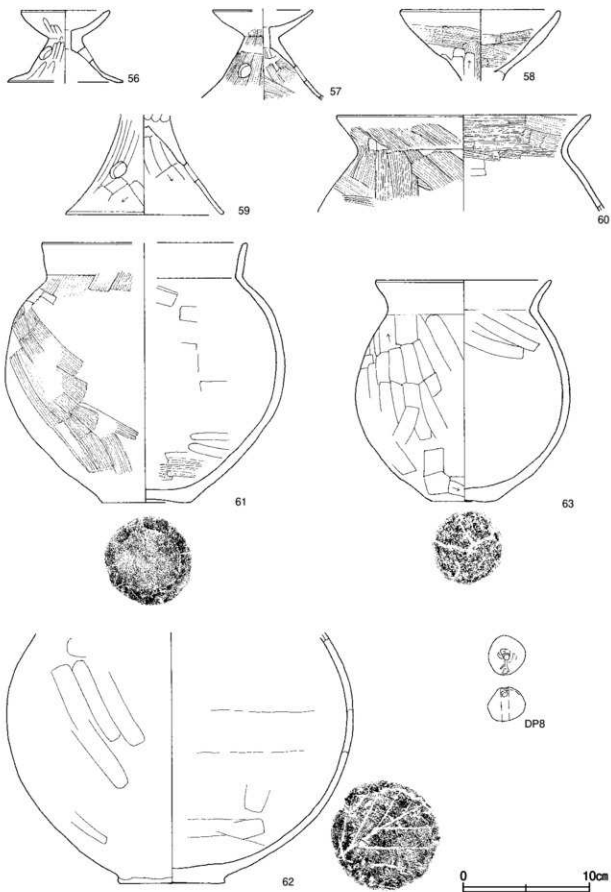
1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 暗褐色 ローム粒子中量
2 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 6 黒暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 (仰の上部覆土)
4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 7 黒褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量 (壁溝の覆土)

遺物出土状況 土師器片1105点 (器台37、甕類1068)、土製品1点 (球状土錘) が出土している。本跡に伴うものと考えられる出土土器は、主に西壁寄りの中央部床面からまとまって出土している。56・57は中央部やや南壁寄りの覆土中・下層、58は南東コーナー部、59は北壁際の床面、61は炉の東側、63・DP 8は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。また、60・62は中央部の西壁寄りの覆土中・下層からまとまって出土した破片が接合したものである。これらの遺物は、廃絶に伴って遺棄または廃棄されたものと考えられる。その他、埋没過程で流れ込んだ縄文土器片104点、礫84点も出土している。流れ込んだ遺物の多くは、台地から谷部に向かう斜面に近い北東部から北西部にかけて多く出土している。

所見 台地上の北縁辺部に位置しているため、流れ込んだ遺物が谷部に向かって流れ込むように出土している。
 また、台付甕の破片が確認されている遺構は、本跡と第96号住居跡で一片ずつだけである。時期は、出土土器
 から古墳時代前期中頃と考えられる。



第68図 第27号住居跡実測図



第69图 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
56	土師器	器台	7.0	5.7	9.2	長石・石英・赤色 粒子	にぶい-褐色	普通	11唇部・底部横ナデ 床部内面ナデ 脚部内面ナデ 2か所	覆土中層	70% P1.98
57	土師器	器台	[8.0]	[7.2]	—	長石・石英・ 赤母・赤色粒子	にぶい-褐色	普通	外部内・外面ナデ 外面へラ磨き 脚部内・外面へラ目調整 磨きか所	覆土下層	65%
58	土師器	器台	12.6	(5.6)	—	長石・石英・ 赤母・赤色粒子	黄褐色	普通	内・外面へラ目調整 11唇部横ナデ 脚部外面へラ磨り	床面	50%
59	土師器	器台	—	(8.0)	12.3	長石・石英・赤母	にぶい-褐色	普通	外部へラ磨き 底部へラナデ 内面へラナデ 磨きか所	床面	40%
60	土師器	甕	[20.0]	(7.8)	—	長石・石英・赤母	褐色	普通	11唇部内・外面ハケ目 11唇部外面横ナデ 外部外面ハケ目調整 外部内面へラナデ 11唇部外面横ナデ 内面ナデ 外部内面ハケ目一部磨減 内面へラナデ ハケ目調整	覆土中・下層	10%
61	土師器	甕	[16.4]	20.8	7.0	長石・石英・赤母	黄褐色	普通	外部外面へラナデ 磨減 内面へラナデ ナデ 外部外面ハケ目調整 底部外面ハケ目調整	覆土中層	55% P1.99
62	土師器	甕	—	(20.0)	8.3	長石・赤母・赤色 粒子	褐色	普通	外部外面へラナデ 輪付後 底部外面ハケ目調整	覆土中層	40%
63	土師器	甕	14.0	17.7	5.2	長石・石英・ 赤母・赤色粒子	にぶい-褐色	普通	11唇部内外面横ナデ 外部外面へラ磨り 横ナデ 一部磨減 内面へラナデ ナデ	覆土中層	70% P1.99

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 8	球状土師	2.9	0.5	2.7	24.3	土製	全面ナデ 一方からの穿孔	覆土中層	45%

第28号住居跡 (第70図)

位置 調査区北東部のF9B4区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

規模と形状 削平により北東コーナー部から東壁にかけては確認できなかったが、長軸6.50m、短軸5.45mの長方形と推測される。主軸方向はN-67°-Eである。確認された壁高は3~8cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。中央部が踏み固められているが、壁際は全体的に軟弱である。楕円形に広がった焼土の塊が3か所が確認されているが、厚さが薄く硬化していないため和床ではないと判断されている。

ピット 7か所。P1~P6は円形または楕円形の形状で、深さ7~20cmである。形状からP1・P4は柱穴の可能性が考えられるものの、規模や配置から判断して、性格は不明である。長径90cm、短径60cmの楕円形で、深さ13cmのP7も性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部の西壁際に付設されている。長径89cm、短径74cmの楕円形で、深さは27cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

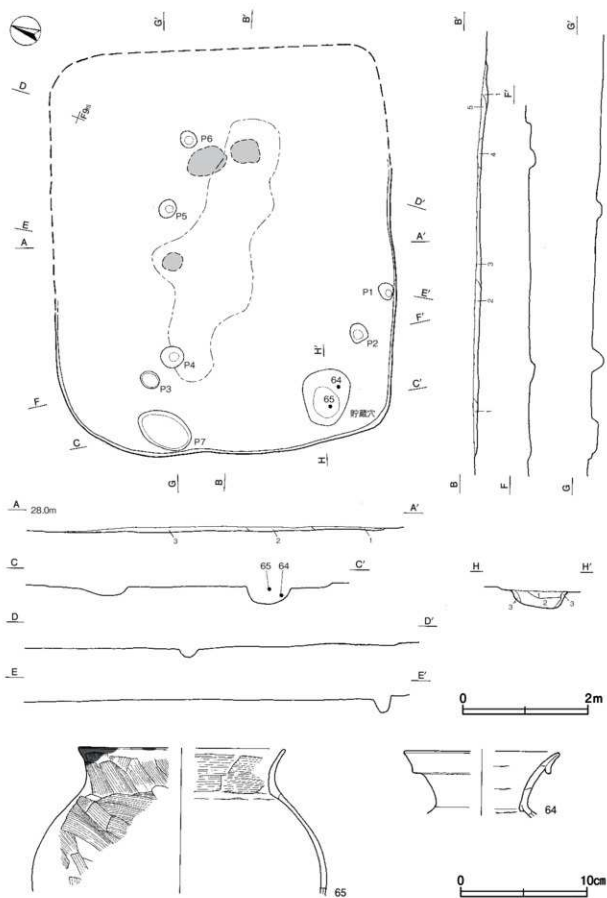
覆土 5層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 赤褐色 焼土ブロック中量
2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 黒褐色 ローム粒子中量、炭化材少量、焼土粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片93点(埴1、器台8、壺1、甕類8)が出土しているが、ほとんどが細片である。64・65は、貯蔵穴内から破片で出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片45点、礫15点、混入した陶器片1点も覆土中から散在した状態で出土している。

所見 床面に焼土の塊が3か所が確認され、覆土に焼土ブロックや炭化材が比較的多く含まれていることから、本跡は焼土住居と考えられる。時期判断を決定する良好な遺物がないが、時期は出土土器の傾向と隣接する住居跡の形態などから、古墳時代前期中頃と考えられる。



第70图 第28号住居跡・出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表 (第70図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
64	土師器	壺	12.4	5.3	—	長石・石英・ 炭粉・赤色粒子	に灰・橙	普通	折り返し口縁部内・外面ナデ	内面輪轆	貯蔵穴内
65	土師器	甕	16.4	11.6	—	長石・石英・ 炭粉・赤色粒子	明赤陶	普通	口縁部内・外面ハケ目 上部一部蓋こぼ れ痕目	内面ナデ 輪轆目	貯蔵穴内 10%

第31号住居跡 (第71図)

位置 調査区北東部のF9g0区で、標高27mほど台地上の平坦部に位置している。

重複関係 北西部を残し、第25A・B号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸3.42m、南北軸2.32mだけが確認され、形状は方形または長方形と推定される。主軸方向は、当遺跡の炉を有する住居跡の傾向から長軸方向はN-3°-Eと考えられる。壁高は3~6cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、踏み固められたところは認められなかった。

炉 遺存部分の形状は径67cmほどの半円形で、床面を6cm掘りこぼめた地床炉である。炉床面は、赤変はしているもののそれほど硬化してはいない。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、砂質粘土粒子少量

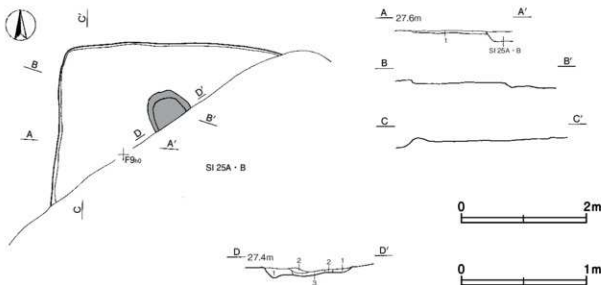
覆土 単一層で薄いため、堆積状況を判断することはできなかった。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片3点(甕)が炉から出土している。その他、流れ込んだ縄文土器細片4点も覆土中から出土している。土師器片は甕体部の細片であるため、図示困難である。

所見 時期は、古墳時代前期中頃と考えられる第25A・B号住居に掘り込まれていることや、当遺跡の住居跡の形態などから古墳時代前期前半と推測される。



第71図 第31号住居跡実測図

第32号住居跡 (第72～74回)

位置 調査区北東部のF 9 h6区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第33号住居跡を西部、第39号住居跡を北部、第74号土坑を東部で掘り込み、南西コーナー部を第104号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.11m、短軸7.08mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。確認された壁高は9～24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、出入り口部と考えられる南壁際中央部から主柱穴にかけての中央部がよく踏み固められている。

炉 中央部の北壁寄りに付設されている。長径86cm、短径55cmの楕円形で、床面を5cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 12か所。P1～P4は深さ77～91cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は南壁際の中央部に位置し、深さ35cmである。主軸線上にあることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。その他のピットの性格は、いずれも不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部際に付設されている。長径126cm、短径105cmの楕円形で、深さ82cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化材微量 4 黒褐色 ローム粒子中量、炭化材・ローム粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化材・焼土粒子微量 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 6 黒褐色 ローム粒子少量

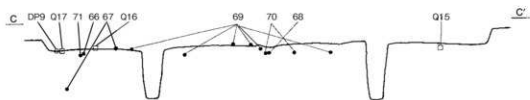
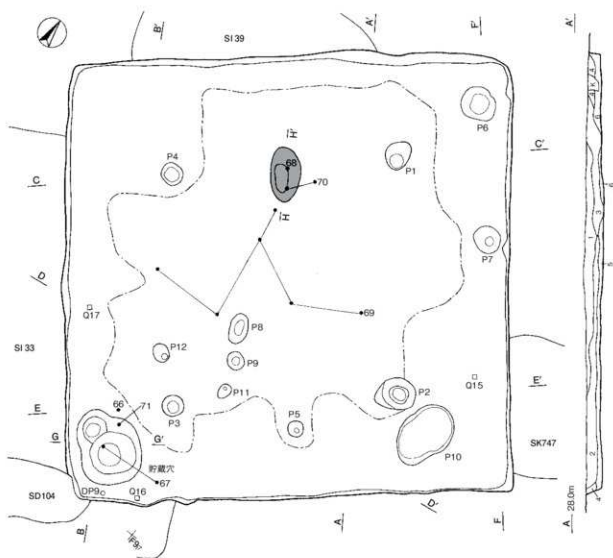
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈し、土器片が覆土上層から中層にかけて数多く検出されており、焼土や炭化粒子を比較的多く含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

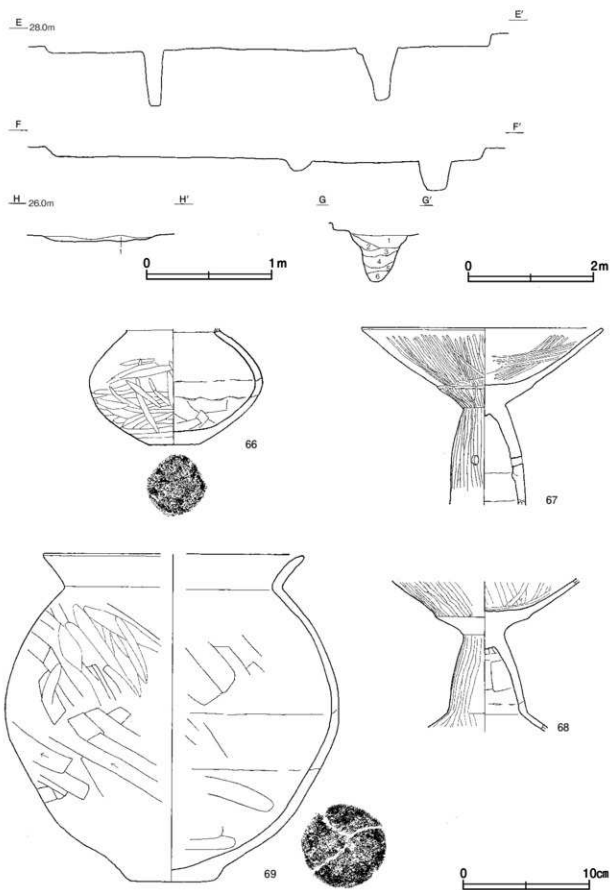
1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
(結まりが極めて弱い) 5 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 6 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1339点(埴2、器台31、高坏30、甕類1234、甗42)、土製品1点(紡錘車)、石器・石製品3点(紡錘車、砥石、有孔円板)が出土している。66は貯蔵穴脇の床面から正位で出土し、67は貯蔵穴脇の床面と貯蔵穴内から出土した破片が接合したものである。68は炉の直上から逆位で出土し、70は炉と炉の周辺の床面から出土した小破片を接合したものである。69は中央部の床面から散在して出土し、71は貯蔵穴の上面から出土している。DP 9・Q16は南西コーナー部の壁際、Q15は南東コーナー部の東壁際、Q17は西壁際の、それぞれ床面から出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片270点、弥生土器片4点、須恵器片1点、礫172点も覆土上層を中心に出土している。

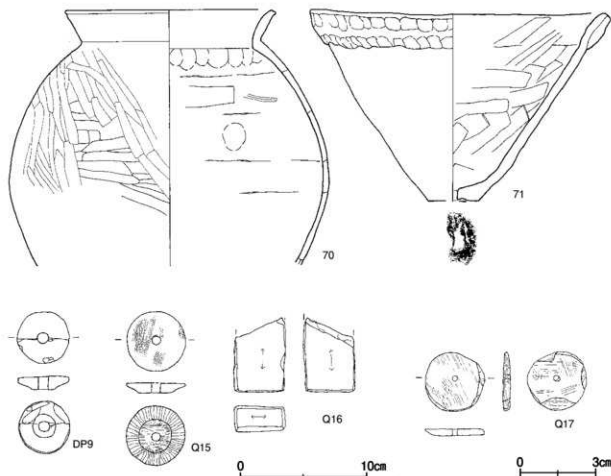
所見 当遺跡の標高が比較的高い所に位置する最大規模の住居跡である。また、石製模造品が確認された唯一の住居跡でもある。高坏が炉の直上から逆位で出土し、炉の周辺部の床面から甍がつぶれた状況で出土していることから、これらは遺棄されたものと考えられる。覆土中に焼土や炭化粒子を比較的多く含んでいることから、焼失住居の可能性が高いが、焼土や木炭は確認されていない。また、遺物の出土量と出土状況から廃絶後にも土器が廃棄された可能性が高く、廃絶時期は床面から出土している土器から、古墳時代中期前葉と考えられる。



第72图 第32号住居跡実測图



第73图 第32号住居跡・出土遺物実測図



第74図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表 (第73・74図)

番号	種類	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
66	土師器	埴	—	(9.3)	3.8	長石・石英・雲母	陶	普通	体部外面ヘラ磨き 上段摩滅 内面ヘラナデ後ナデ 輪轆痕	床面	70% PL98
67	土師器	高杯	19.0	(14.0)	—	長石・石英・雲母	明陶	普通	外面縦段のヘラ磨き 胴部内面ヘラ磨き 口部底ナデ 胴部内面ヘラナデ 底1ヶ所	床面・貯蔵穴内	70% PL98
68	土師器	高杯	—	(12.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤陶	普通	長石内・外面ヘラ磨き 内面一部摩滅 胴部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪轆痕	砂直上	70%
69	土師器	甕	[20.6]	26.4	6.7	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面磨ナデ 胴部外面ヘラ磨き 胴部内面磨ナデ 内面ヘラナデ 磨り痕ヘラ磨き 内面ヘラナデ後ナデ 輪轆痕	床面	60% PL100
70	土師器	甕	16.5	(20.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤陶	普通	口辺部内・外面磨ナデ 胴部外面ヘラナデヘラ磨き 胴部内面磨ナデ 内面ヘラナデ 輪轆痕	床面	50%
71	土師器	瓶	23.3	15.3	[3.9]	長石・石英・雲母・小礫	にぶい赤陶	普通	瓶口1部内面・外面磨ナデ 外面面頸直上 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	床面	90% PL98

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 9	紡錘車	4.1	0.8	1.0	(15.9)	土製	ナデ 一部磨き 一部欠損	床面	45% PL122

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q15	紡錘車	4.7	0.7	0.8	21.6	滑石	表面面研磨 側面磨き	床面	PL121
Q16	硯石	(5.9)	4.1	2.1	(82.3)	砂岩	端部欠損 縦面3面	床面	
Q17	有孔円板	2.3	2.4	0.3	(3.3)	滑石	全面研磨 側面一部研磨	床面	PL121

第33号住居跡 (第75・76図)

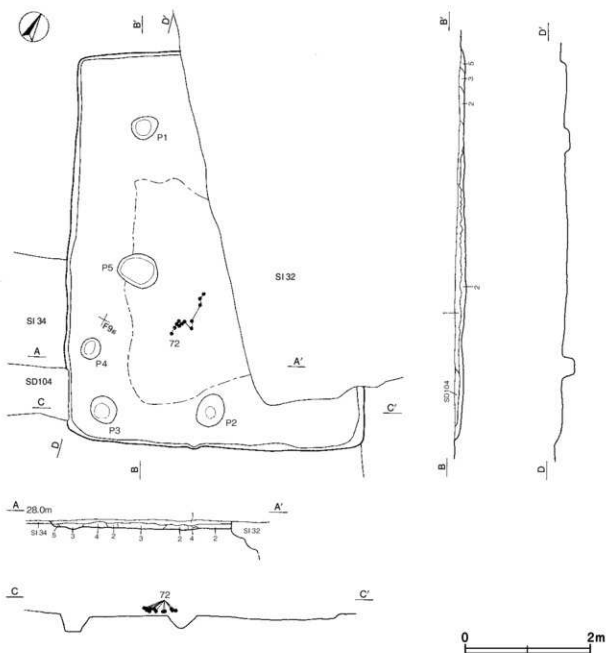
位置 調査区北東部のF 916区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 南部で第34号住居跡を掘り込み、北東部を中心に第32号住居に掘り込まれている。また、南西コーナー部の西壁から南部にかけて第104号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.31m、短軸4.73mの長方形で、主軸方向はN-26°-Wである。確認された壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、出入り口部と考えられる南壁際中央部から主柱穴にかけて踏み固められている。如は第32号住居に掘り込まれているためか確認されていない。

ピット 5か所。柱穴は配置的に明確ではないが、深さが21cmのP2が棟持ち柱の可能性はある。その他のピットは、いずれも性格不明である。



第75図 第33号住居跡実測図

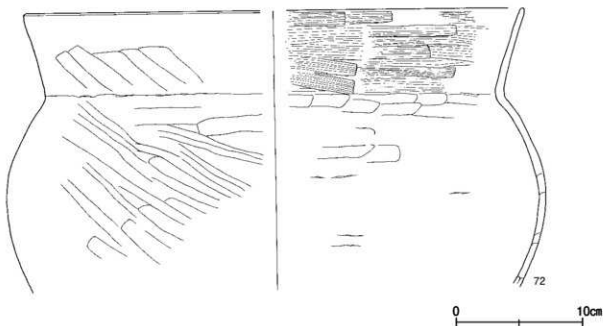
覆土 5層に分層される。第2～5層が不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土器器片194点（高坏1、甕類193）が出土している。ほとんどが細片で、図示できたのは72だけである。72は、南西部の覆土上層から中層にかけてまとまって出土した破片を接合したものである。その他、流れ込んだ縄文土器片81点、礫46点も出土している。

所見 時期は、古墳時代前期中頃に比定される第34号住居跡を掘り込み、古墳時代中期前葉に比定される第32号住居に掘り込まれていることから、古墳時代前期後半から中期前葉にかけての住居跡と考えられる。



第76図 第33号住居跡・出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表（第76図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
72	土師器	甕	(39.6)	(22.3)	—	長石・石英・雲母	に灰・橙	普通	外縁ヘラナデ 1 内縁ヘラナデ 1 足部内面への目録整 体部内縁ヘラナデ後ナデ 輪切痕	覆土中・上層	20% PL100

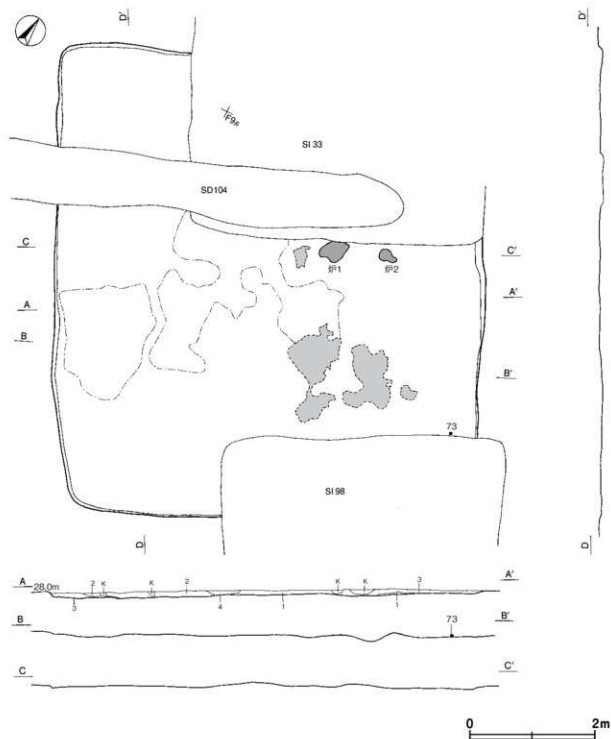
第34号住居跡（第77・78図）

位置 調査区北東部のF9j6区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 北東部を第33号住居、南東部を第98号住居にそれぞれ掘り込まれている。また、北西部から北東部にかけて第104号溝に床面まで掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.43m、短軸6.85mの方形で、主軸方向はN-27°-Wである。確認された壁高は6cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部から西壁にかけて踏み固められている。炉1の西側と南東部に焼土をまき散らしたような箇所が4か所確認されている。いずれも焼土は硬化してなく、灰ではなく焼土の塊と判断されている。



第77図 第34号住居跡実測図

炉 中央部から東壁寄りに2か所確認されている。炉1は長径42cm、短径35cmの不定形で、炉2も長径28cm、短径18cmの不定形である。ともに床面と同じ高さに付設された地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。

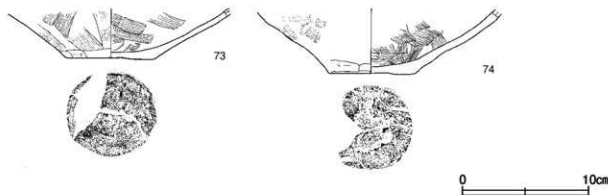
覆土 4層に分層される。第2～4層が不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片276点(埴3, 器台6, 高坏8, 甕類259)が出土している。これらは床面から出土しているものもあるが、ほとんどが小片であり、本跡の廃絶時に廃棄されたものと推察される。73は東壁際の床面からまともに出て出土した破片を接合したものであり、74は覆土中から出土した破片を接合したものである。その他、流れ込んだ縄文土器片77点、弥生土器片8点、礫44点も散在して覆土中から出土している。

所見 床面上に焼土の塊4か所が確認されており、焼失住居の可能性が考えられる。廃絶時期は、古墳時代前期後半から中期前葉にかけての住居跡に掘り込まれていることや、出土土器の傾向から古墳時代前期中頃と考えられる。



第78図 第34号住居跡出土物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表 (第78図)

番号	器別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
73	土師器	甕	—	(4.0)	6.9	長石・石英	明赤陶	普通	内外面ハケ目調整 外面下端へラ削り	床面	10%
74	土師器	甕	—	(5.3)	6.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内外面ハケ目調整 外面下端へラ削り 外面一部摩滅	覆土中	10%

第35号住居跡 (第79図)

位置 調査区北東部のG9a8区で、標高27mほどの台地上の平田部に位置している。

重複関係 南東部で第602号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.68m, 短軸2.52mの方形で、主軸方向はN-2°-Eである。確認された壁高は2~10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、特に踏み固められている箇所は確認されていない。

炉 南東コーナー部に付設されている。長径70cm, 短径47cmの楕円形で、床面から6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は焼土塊が深いU字状に堆積し、火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 赤 褐色 焼土ブロック多量

覆土 2層に分層される。壁際からの土砂が流れ込むように堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

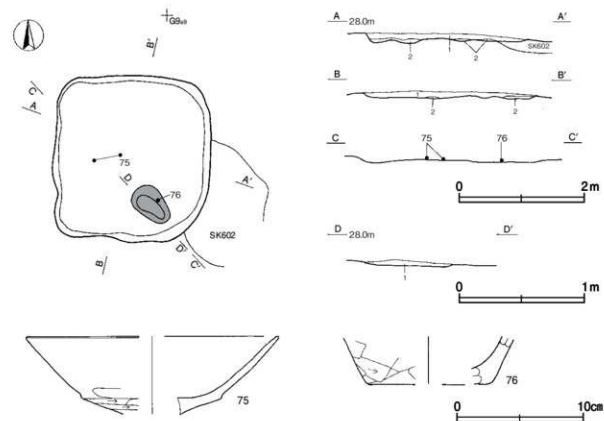
1 黒 褐色 ローム粒子微量

2 暗 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片64点(埴1, 埴1, 器台14, 高坏9, 甕類39)が出土している。75は中央部西壁寄りの床面と覆土中から出土した破片が接合したものであり、76も炉から出土した破片と覆土中から出土した破片

を接合したものである。その他、流れ込んだ縄文土器片14、礫12点も出土している。

所見 住居跡としては小規模であるが、遺物が同時期の住居跡と同様な傾向で出土し、竈を付設していることから住居跡と判断できる。時期は、出土土器の傾向から古墳時代前期後葉から中期前葉にかけての住居跡と考えられる。



第79図 第35号住居跡・出土遺物実測図

第35号住居跡出土遺物観察表（第79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
75	土師器	高坏	〔20.2〕	(6.2)	—	長石・雲母・赤色 粘土	明赤陶	普通	杯部外面下位へラ削り出し のため調色不明	床面	30%
76	土師器	竈	—	(3.9)	(9.6)	長石・石英・雲母	明赤陶	普通	外面下位へラ削り 内面ナゲ	炉内	

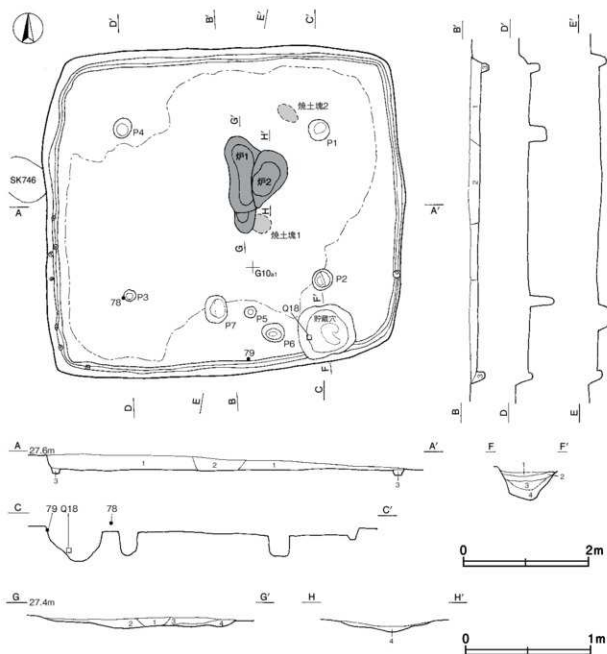
第36号住居跡（第80・81図）

位置 調査区北東部のF 9 j0区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第746号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.75m、短軸5.20mの長方形で、主軸方向はN-3°-Eである。確認された壁高は10～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、南東コーナー部と北西コーナー部を除き、踏み固められている。壁溝が幅9～28cm、深さ8～14cmで、断面形はU字状を呈し、壁際を全周している。また、壁溝内には小ピット8か所が確認されている。竈の北側と南側に薄く焼土2か所塊が確認されている。焼土塊1は焼土の厚さは2.6cmで、焼土塊2は厚さは2cmほどである。



第80図 第36号住居跡実測図

炉 はほぼ中央部に付設されている。炉床面2か所が確認されており、掘り込まれている方を炉1、掘り込んでいない方を炉2とした。炉1は長径152cm、短径56cmの不定形で、深いところで床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉2は長径92cm、短径58cmの楕円形で、深いところで床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉1・炉2とも炉床面は火を受けて赤変している。炉1の覆土はローム粒子・炭化粒子をわずかに含み厚さ7cmほどあり、炉2の覆土は厚さ4cmほどである。炉1を炉2が掘り込んでいることと覆土の堆積状況から、炉2が新しく作り替えた炉である。

炉1・2土層解説（共通）

1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

3 暗赤褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 15か所。P1～P4は深さ29～39cmで、配置から主柱穴と考えられる。P7は南壁際の中央部に位置し、深さは19cmであり、主軸線にあることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。深さ40cmでP5と貯蔵穴の間に位置しているP6は、位置的に出入り口施設にかかわるピットとも考えられるが、明確ではない。その他、径6～9cmほどの小ピットが8か所確認されている。

貯蔵穴 南東コーナー部壁際に付設されている。長径107cm、短径96cmの楕円形で、深さは47cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量（粘性が弱い） 3 黒褐色 ローム粒子微量（締まりが弱い）
2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量（締まりが弱い） 4 黒褐色 ローム粒子少量（締まりが極めて弱い）

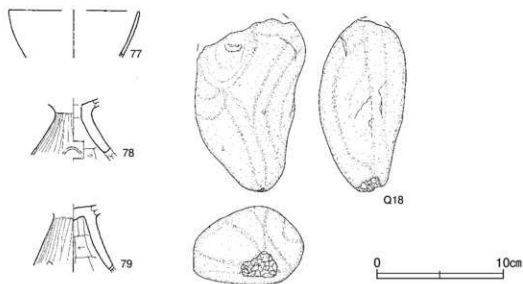
覆土 3層に分層され、不規則な堆積状況を呈していることから人為堆積である。第3層は壁溝の覆土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土器片328点（埴5、器台25、高坏7、甕類291）、石器1点（敲石）が出土している。土器の多くは破片であり、覆土下層から床面にかけて散在して出土していることから、本跡の廃絶後に廃棄されたものと考えられる。77は貯蔵穴の覆土中、78は南西部の覆土下層、79は南壁際の床面からそれぞれ出土している。また、Q18は貯蔵穴の覆土下層から出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片192点、礫128点も覆土上層から中層にかけてして出土している。

所見 竈の周辺で確認されている焼土塊は軟質で粒子状であることから、焼土を掻き出しておいたものと推測できるが、焼土溜めの可能性もあり、詳細は判然としない。時期は、出土土器から古墳時代前期後葉から中期後葉にかけてと考えられる。



第81図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
77	土師器	埴	[10.4]	(3.8)	—	長石・雲母・赤色 粒子	橙	普通	内・外面磨削のため調整不明	貯蔵穴	10%
78	土師器	器台	—	(4.8)	—	長石・石英	橙	普通	外面へう磨き 内面へう磨り 磨きかけ	覆土下層	50%
79	土師器	器台	—	(5.4)	—	長石・雲母・赤色 粒子	にじみ・黄	普通	外面へう磨き 磨きかけ	床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q18	磁石	(137)	8.8	7.0	(925.1)	安山岩	端部欠損 截き面1か所	貯蔵穴内	

第37号住居跡 (第82図)

位置 調査区北東部のG10a2区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 北部で第801号土坑、南西部で第814号土坑を掘り込み、南東部を第38号住居に床面まで掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.37m、短軸5.22mの方形で、主軸方向はN-0°である。確認された壁高は2~33cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部を中心に全体的に踏み固められている。壁溝が確認された壁際を巡り、全周していたものと考えられる。規模は幅8~20cm、深さ5~9cmで、断面形はU字状である。炉の南側に薄く焼土塊が長径32cm、短径28cmの楕円形で、1か所確認されている。

炉 中央部やや北東コーナー部寄りに付設されている。長径85cm、短径63cmの楕円形で、床面を4cmほど掘りくぼめた地床炉で、炉床面は火を受けて硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 8か所。P1~P4は深さ41~60cmで、配置から主柱穴と考えられ、P2・P6~P8は第38号住居跡の床下から確認されている。P6・P7・P8は南壁際の中央部に並んで位置し、深さはそれぞれ27cm・7cm・19cmであり、主軸線上にあることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。深さ18cmのP5は、性格不明である。

貯蔵穴 P2とP3の中間に付設されている。長径85cm、短径52cmの楕円形で、深さ38cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化材少量 4 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物中量

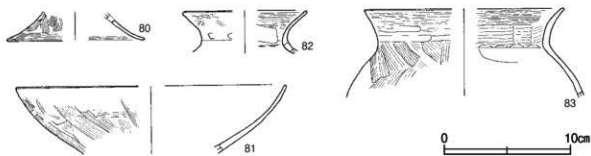
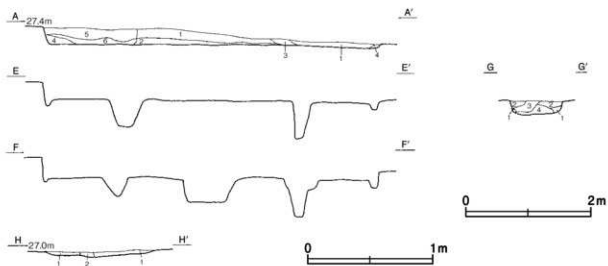
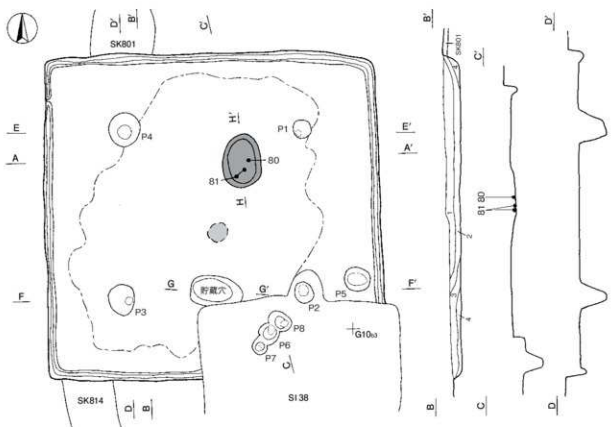
覆土 6層に分層される。不規則な堆積状況を呈しており、ロームブロックを比較的多く含有していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量 5 黒褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量 6 暗褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片151点(埴3、器台13、高坏4、甕類131)、炉石カ1点が出土している。80・81は炉内、82は北部の覆土中、83は南東部の覆土中からそれぞれ破片で出土している。その他、流れ込んだ縄文土器細片153点、礫68点も散在するように覆土上層を中心に出土している。なお、焼土塊の西側には長軸15cm、短軸10cm、厚さ5cmほどの隅丸長方形の赤変した雲母片岩が確認されているが、火を受けてもろく実測困難である。床面上に確認された焼土塊は性格が明確ではないが、雲母片岩は炉石として使用されていたものと推察される。

所見 時期は、出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第82图 第37号住居跡・出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

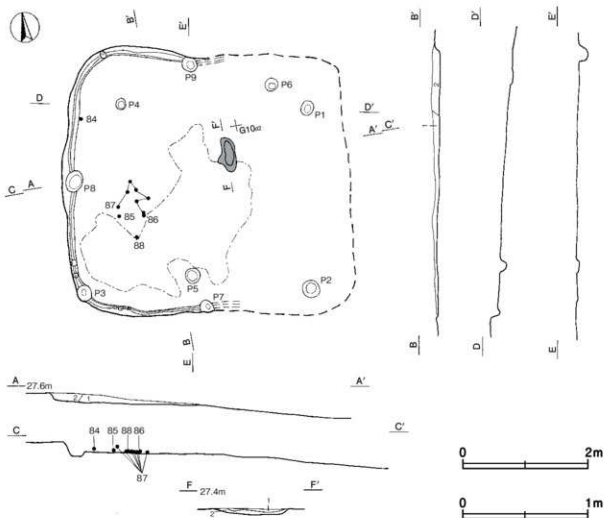
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
80	土師器	器台	—	(2.3)	[11.0]	石灰・雲母	明赤褐色	普通	腹部内・外面ハケ目調整 意あり	如 ¹⁾	
81	土師器	高杯	[21.6]	(5.4)	—	長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	外面ハケ目 口唇部横ナデ 内面1軍交横ナデ	如 ²⁾	
82	土師器	壺	[9.8]	(3.5)	—	長石・石灰・雲母	橙	普通	口唇部内・外面ハケ目 口唇部内・外面横ナデ	覆土中	10%
83	土師器	甕	[15.8]	(7.1)	—	長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	口唇部内・外面ハケ目 唇部外裏 腹部内横ナデ	覆土中	10%

第41号住居跡 (第83・84図)

位置 調査区北東部のG10d1区で、標高27mほどの台地縁辺部の緩斜面に位置している。遺存状況は不良である。

規模と形状 東側が斜面部であるため、如から東側が削平された状態で検出され、遺存する壁から長軸4.50m、短軸4.06mの長方形と推定され、主軸方向はN-21°-Eである。確認された壁高は5~13cmで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存する床面は平坦であり、ほぼ平坦であったと推測でき、南西部コーナー部から如にかけて踏み固められている。壁溝が確認された壁際を巡り、規模は幅8~22cm、深さ3~4cm、断面形はU字状である。壁溝中には、壁柱穴と考えられる小ピットが6か所確認されている。



第83図 第41号住居跡実測図

炉 中央部からやや北壁寄りに付設されている。長径55cm、短径30cmの不定形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は、火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量 2 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量

ピット 15か所。P1～P4は、削平されているため深さ5～17cmであるが、配置から支柱穴の可能性が考えられる。P5は南壁際中央部に位置し、深さは5cmである。主軸線上にあることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。P6～P9は深さ7～23cmで、壁柱穴の可能性があると性格は不明である。その他は壁柱穴と考えられる。

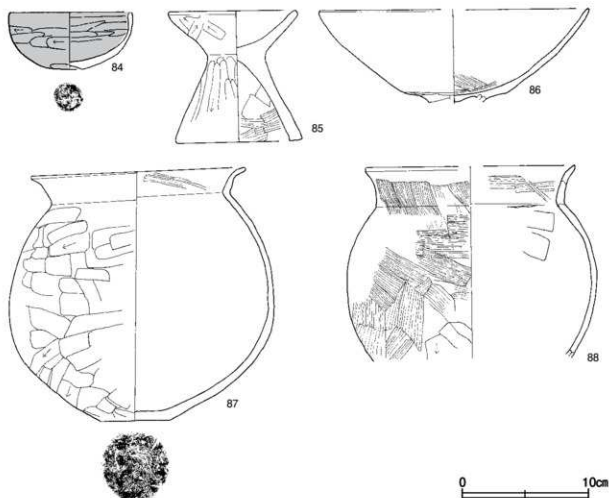
覆土 2層に分層される。削平のため覆土が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 (粘性極めて弱い、締まりは普通) 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 (粘性・締まりとも弱い)

遺物出土状況 土師器片182点(椀2、埴23、器台6、高坏10、甕類141)が覆土が残る西部から出土している。84は北西部壁際の床面から斜位で、85～88は炉とP8の間の床面からつぶれた状態で出土している。これらの土器は、出土状況から本跡の廃絶時に遺棄または廃棄されたものと考えられる。この他、流れ込んだ縄文土器片26点、礫72点も覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代前期後葉から中期前葉にかけてと考えられる。



第84図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表 (第84図)

番号	種類	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
84	土師器	甕	9.8	4.6	2.1	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	1 口辺部内・外面縞ナデ 底部外面へウ張り残ナデ 内面へウナデ残ナデ	床面	90% PL100
85	土師器	器台	10.5	10.4	10.3	長石・石英	橙	普通	1 口部縞ナデ 外面外面へウ張り残ナデ 内面へウナデ残ナデ 底部外面へウ張り残ナデ 内面ハケ目へウナデ	床面	70% PL100
86	土師器	高坏	[21.5]	(7.3)	—	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	1 口部縞ナデ 杯部外面ナデ 内面ハケ目ナデ	床面	40%
87	土師器	甕	17.0	20.1	5.6	長石・石英・雲母	褐色	普通	1 口部外面縞ナデ 内面ハケ目 縞ナデ 底部外面へウ張り へウナデ 内面ナデ	床面	60% PL100
88	土師器	甕	[166]	(15.3)	—	長石・石英・雲母	濃い橙	普通	1 口部内・外面ハケ目 縞ナデ 底部外面ハケ目調整 内面へウナデ残ナデ	床面	10%

第44号住居跡 (第85～87図)

位置 調査区北東部のG9d7区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第47号住居跡、第806号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸320m、短軸281mの長方形で、主軸方向はN-36°-Wである。確認された壁高は13～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部から北壁寄りに付設されている。長径83cm、短径41cmの不定形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変しているもの、締まりは弱い。

坪土層解説

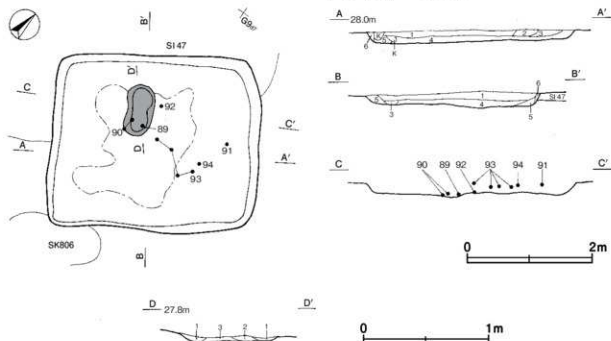
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈しているが、遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

第4～6層が堆積した時期と第1～3層が堆積した時期に差が見られる。

土層解説

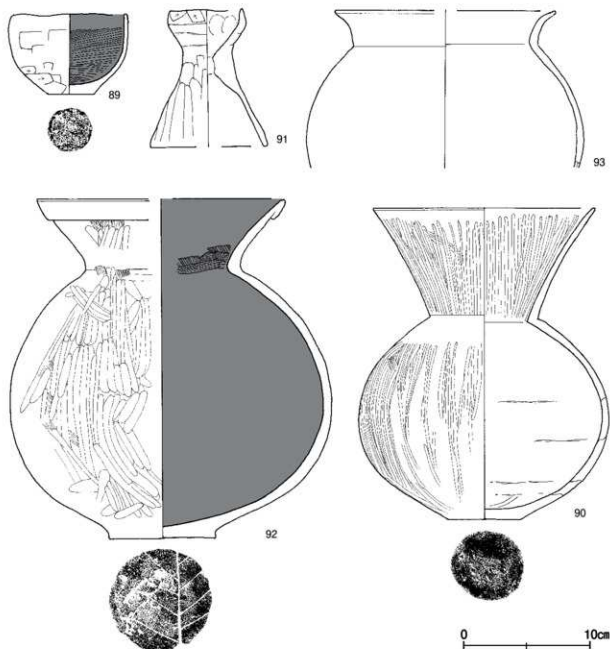
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 明褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 横暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 6 明褐色 ローム粒子少量



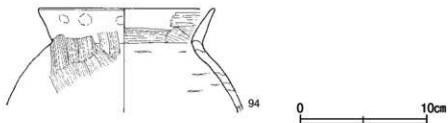
第85図 第44号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片419点（埴53、器台21、高坏3、甕類299、壺38、鉢5）が出土している。89は炉直上から逆位で出土し、90は炉内から横位につぶれた状態で出土している。共に本跡に伴い遺棄されたものと考えられる。92は炉の東側の床面から正位で出土した破片を復元したものであり、91は東部の覆土中層、93は中央部の覆土中・下層、94は東部の覆土中層からそれぞれ破片で出土している。これらは、廃絶時に埋土とともに廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片95点、礫20点が覆土上層の第1～3層から小片と共に散在するように出土している。

所見 覆土の堆積状況と遺物の出土状況から推測すると、廃絶時に人為的に埋められ、その後人為的に埋め戻されたと考えられる。時期は、炉の直上と炉床面から出土している89と90から、古墳時代前期後半と考えられる。



第86図 第44号住居跡出土遺物実測図(1)



第87図 第44号住居跡出土遺物実測図(2)

第44号住居跡出土遺物観察表 (第86・87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
89	土師器	碗	9.2	6.4	3.4	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部内・外面ヘラナデ 体部外面へラ削りナデ ナデ 内面ヘラ磨き	伊直上	95% PL101
90	土師器	用	17.4	24.8	5.8	長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面へラ磨き 体部外面へラ磨き 内面ナデ 輪積肌	伊内	80% PL101
91	土師器	形器台	5.8	11.0	9.4	長石・石英	明赤陶	普通	底部外面へラ削り 内面輪積肌 脚部外面へラ削り 脚部内面ナデ 輪積肌	覆土中層	55% PL100
92	土師器	壺	[200]	27.0	8.4	長石・石英・赤色砂子	橙	普通	口辺部内・外面ヘラナデ 脚部外面へラ削り 内面ナデ ナデ 輪積肌	床面	80% PL101
93	土師器	甕	[176]	[125]	—	長石・石英・白色砂子	橙	普通	口辺部内・外面ヘラナデ 体部外面ナデ	覆土上・中層	20%
94	土師器	甕	14.0	8.3	—	長石・石英・雲母	明赤陶	普通	口辺部外面ヘラナデ 脚部外面 内面ナデ 削り 底部外面ナデ ナデ 内面ナデ 輪積肌	覆土中層	15%

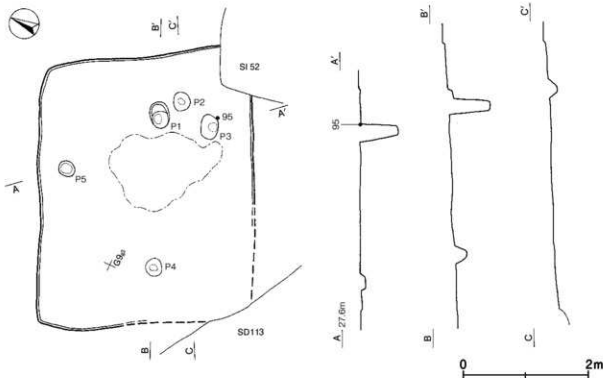
第53号住居跡 (第88・89図)

位置 調査区北東部のG 9区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

確認状況 耕作による削平のため遺存状況は不良で、覆土がほとんどない状況で検出されている。

重複関係 東コーナー部を第52号住居に掘り込まれ、南コーナー部を第113号溝に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する壁から長軸4.30m、短軸3.40mの長方形で、主軸方向はN-64°-Eと推測される。遺存する壁の壁高は2cmほどで、外傾して立ち上がっている。



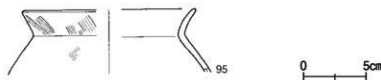
第88図 第53号住居跡実測図

床 はほぼ平坦で、中央部がわずかに踏み固められているが、壁際は軟質である。炉及び壁溝は確認されていない。
ピット 5か所。P1とP3は深さ66cmと63cmで、規模から主柱穴と考えられる。P2・P4・P5は深さ7～21cmで、位置的にも不明確であり、性格は不明である。

覆土 層厚は確認されたところで2cmほどで、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土器器片26点（壺類）が細片で出土している。95は南東部の床面から破片で出土したものである。その他、縄文土器片8点、礫30点も遺構確認面から散在して出土している。

所見 炉が検出されておらず、床質もそれほど硬化していないことから、一時的な短期間の住居、または一時保管用の倉庫の可能性が考えられる。時期は、出土土器の傾向と重複関係から古墳時代前期後半頃と考えられる。



第89図 第53号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡出土遺物観察表（第89図）

番号	種類	器種	目録	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
95	土器	壺	[138]	[5.1]	—	長石・石英	明黄陶	普通	外面ハケ目調整 ナデ 内面ナデ	床面	

第57A号住居跡（第90図）

位置 調査区北東部のH9a9区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第57B号住居跡を建て替えた住居跡である。北部で第672号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.02m、短軸3.85mの方形で、主軸方向はN-60°-Wである。確認された壁高は3～7cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南東壁際の中央部から炉手前にかけて踏み固められている。壁溝が、東部と南東部の一部を除く壁際を巡っており、幅8～13cm、深さ3～6cmで、断面形はU字状である。

炉 中央部から西壁寄りに付設されている。規模は長径124cm、短径52cmの不定形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 棕褐色 焼土ブロック多量 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 棕褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ9～38cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は南東壁際の中央部に位置し、深さ11cmである。主軸線上にあることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

貯蔵穴 南東壁際、P5に隣接して付設されている。長軸82cm、短軸55cmほどの不整形長方形で、深さは35cmである。底面はやや凸凹で、深さ42cmと37cmのピットを有し、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為的な堆積状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

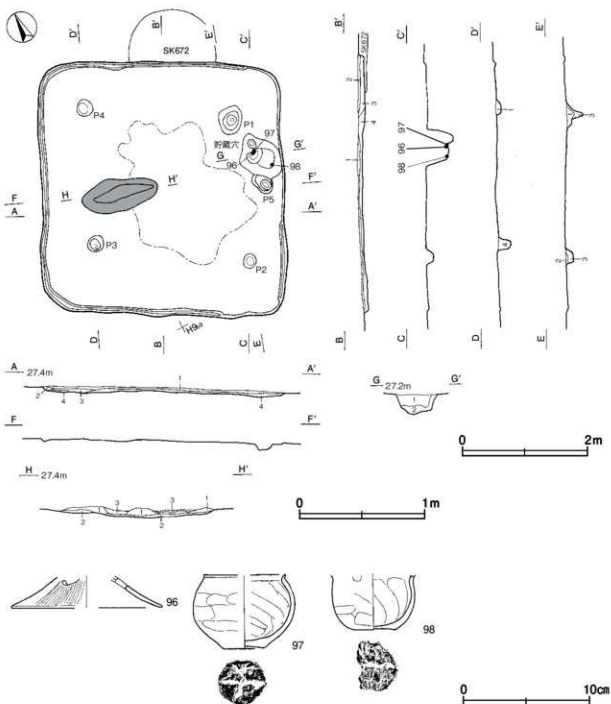
覆土 4層に分層される。不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

- 3 黒暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
 4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片49点（埴7、器台2、高坏7、甕類31、ミニチュア土器2）が出土している。96～98は、いずれも貯藏穴の覆土下層または底面から出土している。その他、混入した縄文土器片32点、弥生土器片6点、礎2点も出土している。また、擾乱により混入した須恵器甕片1点、土師質土器片3点も出土している。所見 時期は、出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第90図 第57A号住居跡・出土遺物実測図

第57 A号住居跡出土遺物観察表 (第90図)

番号	種類	器種	寸法	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
96	土師器	器台	—	(26)	(120)	黄母・赤色粒子	橙	普通	脚部外面へラ磨き 内面ナデ 意あり	貯蔵穴内	
97	土師器	土師器	[5.5]	3.9	3.3	長石・黄母・赤色粒子	橙	普通	口辺部内・外面種ナデ 体部外面へラナデ後ナデ 内面ナデ 底部土著肌	貯蔵穴内	60% PL101
98	土師器	土師器	—	(4.3)	(4.2)	長石・黄母・赤色粒子	にじい橙	普通	外面へラナデ後ナデ 内面ナデ	貯蔵穴内	40%

第57 B号住居跡 (第91図)

位置 調査区北東部のH 9 a9区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

確認状況 第57 A号住居跡の調査後、床下から新たに床面と如床が確認されたため、建て替える前の第57 B号住居跡と確認した。

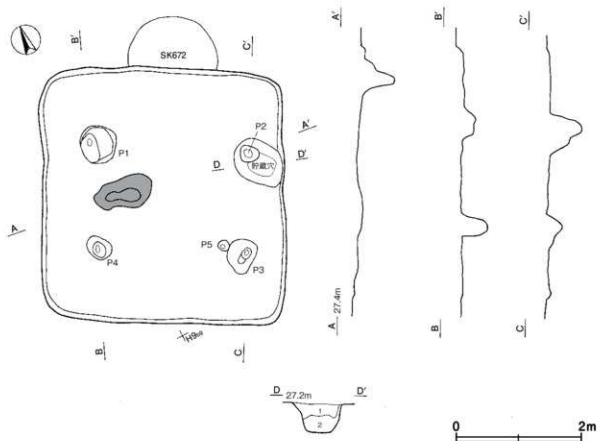
重複関係 第57 A号住居が本路上に構築されている。第672号土坑を北部で掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.38m、短軸は3.12mの方形で、主軸方向はN-60°-Wである。確認された壁高は3~13cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、特に踏み固められたところは確認されていない。

炉 中央部から西壁寄りに付設されている。長径95cm、短径51cmほどの不定形で、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。如床面は火を受けてわずかに硬化している。

ピット 5か所。P1~P4は深さ20~49cmで、配置から主柱穴と考えられる。P3に隣接するP5は深さ8cmで、性格は不明である。



第91図 第57 B号住居跡実測図

貯蔵穴 南東壁際に付設され、長径84cm、短径65cmほどの楕円形で、深さは43cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 第57A号住居跡の床下から検出されているため、第57A号住居跡の貼床の構築土層である。貼床は厚いところでは5cmほどで、炭化粒子をわずかに含んだロームブロックを主体にしたものである。

遺物出土状況 土師器片45点(埴1、埴44)点が出土している。細片のため図示が困難である。甕体部片には、ハケ目調整痕が見られない。

所見 第57A号住居跡と比較して、柱穴がやや中央部寄りに位置し、炉はほぼ同じ位置である。時期は第57A号住居跡とそれほど差がないと考え、古墳時代前期後半と推察される。

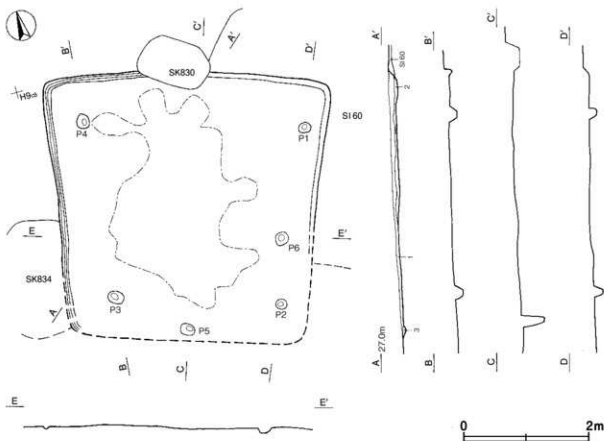
第59号住居跡 (第92図)

位置 調査北区の南部H9e8区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第60号住居跡・第834号土坑を掘り込み、第830号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平のため、遺存しているのは北部の壁と床面だけである。長軸4.34m、短軸4.33mの方形と推定され、主軸方向はN-13°-Eである。確認された壁高は8cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であり、中央部がよく踏み固められている。壁溝は、北部から西部の壁際を巡っており、幅8~13cm、深さ2~5cmで、断面形はU字状である。



第92図 第59号住居跡実測図

ピット 6か所。P1～P4は深さ12～14cmで、位置はややずれるが主柱穴と考えられる。P5は南壁際の中央部に位置し、深さ36cmである。主軸線上にあることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。P6は深さ10cmで、性格不明である。

覆土 3層に分層される。層厚が8cm以下と薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 | | |

所見 出土遺物が確認されていないため時期判断は困難であるが、時期は重複関係と当遺跡の住居跡の形態の傾向から、古墳時代前期から中期と考えられる。

第60号住居跡 (第93図)

位置 調査区北東部のH9c9区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第59号住居、第830号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認されている壁と床面から、長軸4.11m、短軸3.76mの方形と推定され、主軸方向はN-23°-Eである。確認された壁高は8cmほどで、外傾して立ち上がっている。

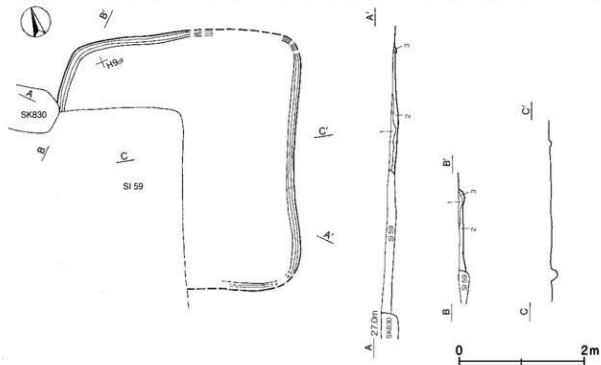
床 平坦で、硬化面は確認されていない。壁溝は確認できた壁際を巡っており、幅11～13cm、深さ2cmほどで、断面形はU字状である。

覆土 3層に分層される。層厚は厚いところで8cmと薄く、堆積状況は判然としにくい。第3層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土器片72点(埴2、高坏1、甕類69)が出土している。土器片は甕の体部細片が大半で、図示困難であり、ハケ目調整痕を残す甕体部片はわずか4点で、器台などの破片は検出されていない。その他、



第93図 第60号住居跡実測図

流れ込んだ縄文土器片27点、弥生土器片5点、礫8点も出土している。また、攪乱により混入した須恵器片3点、土師質土器片3点も出土している。

所見 遺存状況が不良のため、良好な遺物が確認されていないが、出土遺物と重複関係や住居跡の形態などから、時期は古墳時代前期後葉から中期前葉にかけてと考えられる。

第61号住居跡 (第94・95図)

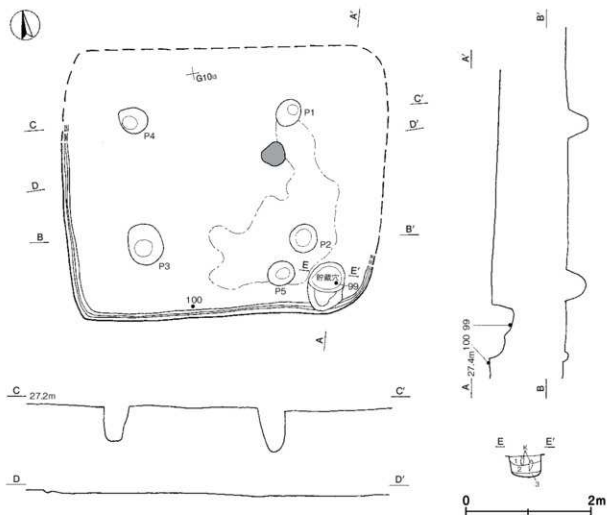
位置 調査区北東部のG103区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

規模と形状 遺存する壁から長軸5.14m、短軸4.30mの長方形と推定され、主軸方向はN-14°-Eである。確認された壁高は12cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存する部分から、ほぼ平坦であったと推察でき、P5付近から炉にかけて踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っており、幅6~18cm、深さ5cmほどで、断面形はU字状である。

炉 中央部からやや東壁寄りに付設されている。径41cmほどの不整形形で、炉床部は床面とほぼ同じ高さであり、火を受けて赤変硬化している。

ピット 5か所。P1~P4は深さ34~68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ37cmで、主軸線上にあることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。



第94図 第61号住居跡実測図

貯蔵穴 南東コーナー部の壁際、P5に隣接して付設されている。長径78cm、短径56cmの楕円形で、底面は段をもち、深さ21cmと35cmである。ともに平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

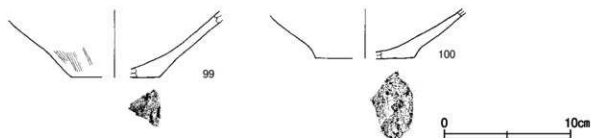
貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック少量

覆土 黒褐色の覆土が薄い。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片60点(埴4、器台1、高坏4、甕類51)が出土している。出土した遺物のほとんどは、貯蔵穴周辺の南東部と南部から出土している小破片であり、99は貯蔵穴の底面、100は南壁際の床面からいずれも破片で出土している。出土した破片は、本跡の廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片6点、礫14点も出土している。

所見 遺存状況が不良のため、出土した遺物の数は少ない。時期は、甕体部片の6割にハケ目調整痕が残ることなどから、古墳時代前期後半から中期前半にかけると考えられる。



第95図 第61号住居跡出土遺物実測図

第61号住居跡出土遺物観察表 (第95図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
99	土師器	甕	—	(5.3)	(7.2)	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄褐色	普通	外面ハケ目を残すナデ 内面ヘラナデ	貯蔵穴底面	
100	土師器	甕	—	(3.0)	(7.6)	長石・石英・雲母	橙	普通	外面ヘラナデ後ナデ 内面ナデ	床面	

第63号住居跡 (第96・97図)

位置 調査区北東部のG10j4区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第101号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.30m、短軸4.14mの方形で、主軸方向はN-55°-Wである。確認された壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

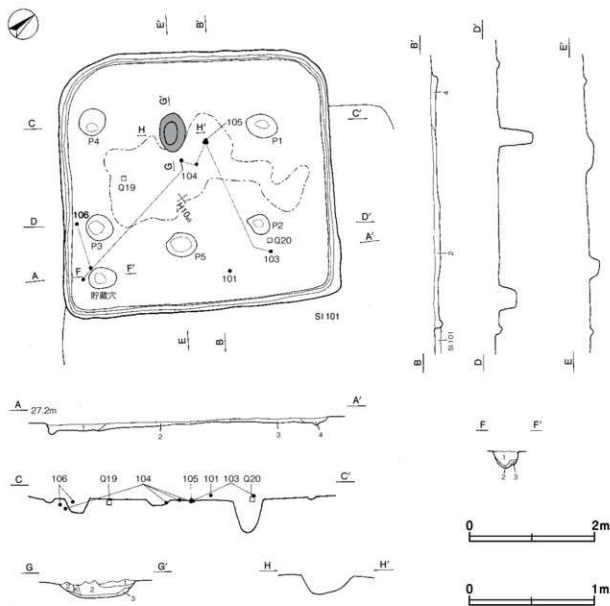
床 平坦で、炉の周辺を中心に中央部が踏み固められている。壁溝が壁際を全周しており、幅12～18cm、深さ5～11cmで、断面形はU字状である。

炉 中央部から北西壁寄りに付設されている。長径61cm、短径42cmの楕円形で、床面を深いところで15cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック多量
2 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量
3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ25～55cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5はP2とP3のほぼ中央に位置し、深さは18cmである。主軸線上にあることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。



第96図 第63号住居跡実測図

貯蔵穴 南コーナー部に付設され、長径42cm、短径33cmの楕円形で、深さは27cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|--------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | |

覆土 4層に分層される。層厚が薄く判断が難しいが、不規則な堆積状況を呈していることから人為堆積と考えられる。

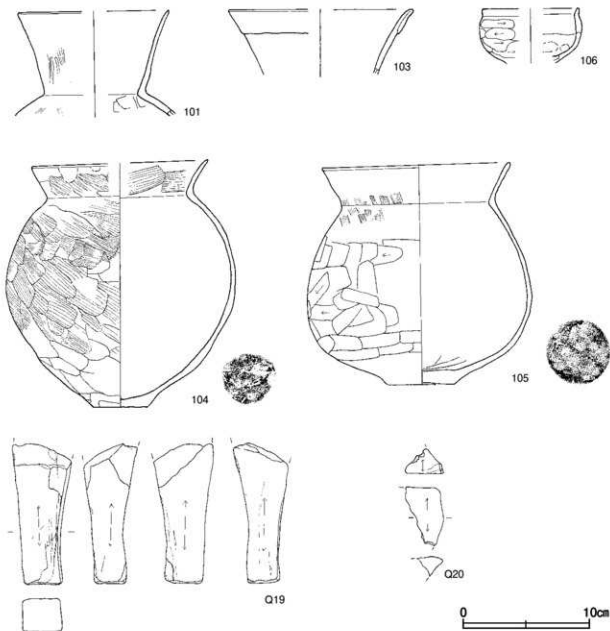
土層解説

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・砂粒微量 | 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片219点（碗2、増15、器台11、甕類191）が、炉の周辺を中心に散在するように出土している。101は南東部の覆土中層、103は炉の東側床面と東部の覆土中層、104は炉の東側床面と貯蔵穴付近、105はつぶれた状態で炉の東側床面、106は南部の壁際床面からそれぞれ破片で出土している。Q19は西部の床面、

Q20は東部の床面からそれぞれ出土している。床面から出土している土器を含め、ほとんどが破片で出土していることから、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器と重複関係から古墳時代前期後半と考えられる。



第97図 第63号住居跡出土土物実測図

第63号住居跡出土土物観察表 (第97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
101	土師器	埴	[120]	(8.4)	—	長石・雲母・赤色 粒子	黄緑	普通	口内面内・外面磨ナデ 口辺部・体部外面 ハケ目を残ナデ 内面ヘラナデ残ナデ	覆土中層	10%
103	土師器	壺	[148]	(5.2)	—	長石・石英・ 雲母・小礫	明赤陶	普通	削り返し口辺部内・外面ナデ	床面・ 覆土中層	10%
104	土師器	壺	[141]	19.7	4.1	長石・石英・雲母	明赤陶	普通	口辺部内・外面磨ナデ目・指節痕 体部外 面ハケ目・十字型衣箱状磨 内面ナデ	床面・ 覆土中層	60% PL101
105	土師器	壺	14.9	17.6	5.1	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい黒	普通	口辺部内・外面磨ナデ 指節痕ハケ目 体部 外面ヘラナデ削り・下位準減 内面ヘラナデ残ナデ 口辺部外面磨ナデ 体部外面ヘラナデ	床面	70% PL101
106	土師器	ヒコチヤフ 土器	[76]	(4.3)	—	長石・雲母	黒陶	普通	内面ナデ 指節痕 輪積痕	床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q19	灰石	(11.1)	4.7	4.3	(229.0)	凝灰岩	端部欠損 砥面4面	床面	
Q20	灰石	(4.6)	(3.0)	(2.0)	(20.1)	凝灰岩	端部欠損 砥面2面	床面	

第64号住居跡 (第98図)

位置 調査区北部のH10b2で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 西部で第842号土坑、東部で第847号土坑をそれぞれ掘り込み、南東部は第10号道路に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平のため遺存状況は不良で、確認できた壁と床面から長軸4.39m、短軸4.06mの方形と推定され、主軸方向はN-23°-Eである。確認された壁高はわずか3cmほどで、立ち上がりは判然としない。

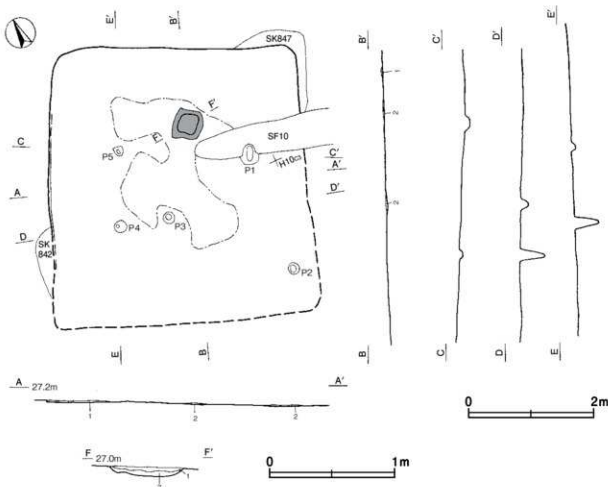
床 遺存する部分からはほぼ平坦であったと考えられ、炉の周辺が踏み固められている。

炉 中央部から北東壁寄りに付設されている。長径48cm、短径46cmの不定形で、床面を8cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 2 褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量

ピット 5か所。深さ6～36cmであり、性格不明である。



第98図 第64号住居跡実測図

覆土 2層に分層される。層厚が薄く、堆積状況の判断は困難である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片4点(高坏1, 甕類3)と、流れ込んだ縄文土器片3点が出土している。ほとんどが細片のため、図示が困難である。

所見 時期は、隣接する住居跡の形態などから古墳時代中期頃と推定される。

第69号住居跡 (第99・100図)

位置 調査区北東部のG10h8区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

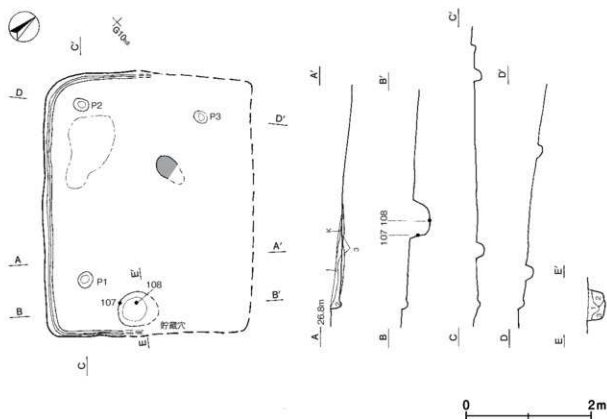
規模と形状 東側が耕作によって削平されているが、遺存する壁から長軸4.18m、短軸3.33mの長方形と推定され、主軸方向はN-46°-Wである。壁高は高いところで8cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存している部分はほぼ平坦で、西部に硬化面が確認されている。壁溝が壁際を巡っており、幅6cm~16cm、深さ2cm~4cmで、断面形はU字状である。

炉 中央部からやや北寄りに付設されている。一部削平を受けているが、長径52cm、短径31cmほどの不整楕円形と推定される。床面とほぼ同じ高さを伊床とし、炉床面は火を受けて赤変硬化している。

ピット 3か所。深さ9~12cmで、配置から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南部の南東壁際に付設されている。長径63cm、短径51cmの楕円形と推定され、深さは28cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。



第99図 第69号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
2 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・炭化粒子微量
3 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

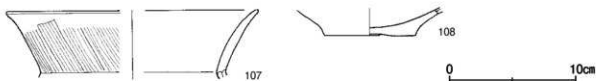
覆土 2層に分層される。壁際から粒子が流れ込むように堆積していることから、自然堆積と考えられる。第3層は貼床の構築土層である。

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
2 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量（跡までは強い）

遺物出土状況 土師器片59点（高坏2、甕類57）が出土している。ほとんどが、西南部及び貯蔵穴内から小破片で出土している。107・108は、貯蔵穴内の覆土中層と底面から出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片8点、竊7点も出土している。出土状況から貯蔵穴から出土した遺物は、廃絶時のものと考えられる。また、視乱により混入した須恵器片1点も出土している。

所見 遺存状況が不良で遺物の出土量が少ないため、時期判断は難しいが、時期は出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第100図 第69号住居跡出土遺物実測図

第69号住居跡出土遺物観察表（第100図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
107	土師器	甕	[200]	(5.5)	—	長石・石英・赤色 粒子	に濃い橙	普通	外面ハケ目調整 内面ナデ	貯蔵穴内	
108	土師器	甕	—	(2.1)	7.2	長石・石英・雲母	明褐色	普通	外面摩滅のため調整不明 内面ナデ	貯蔵穴内	

第70号住居跡（第101・102図）

位置 調査区北東部のG1000区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

確認状況 北東コーナー部は調査区域外へ延び、さらに耕作による削平のため、遺存状況は不良である。

重複関係 南東部を第17号道路に掘り込まれている。

規模と形状 確認された壁と柱穴及び床質から、長軸5.83m、短軸5.72mの方形と推定され、主軸方向はN-65°-Eである。確認された壁高は2cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。

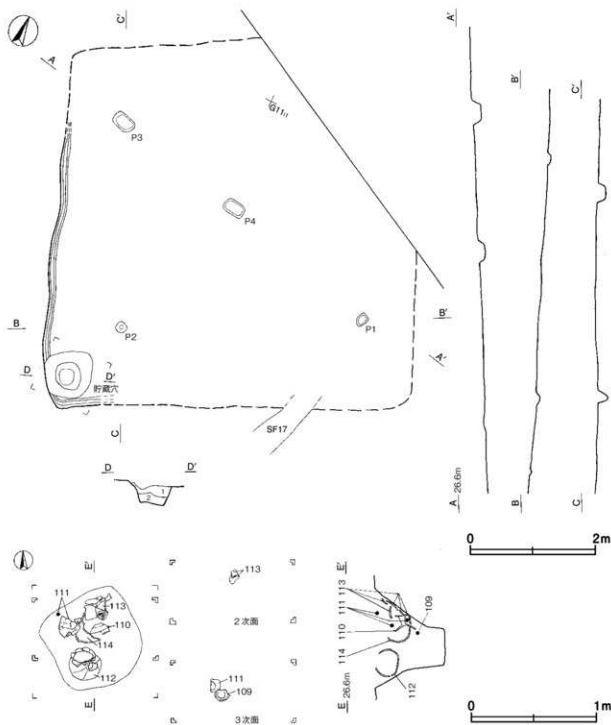
床 遺存している部分はほぼ平坦で、硬化面は確認されていない。壁溝が南西部の壁際を巡り、幅8cm～15cm、深さ1cm～2cmほどで、断面形はU字状である。

ピット 4か所。P1～P3は上面が削平されているため深さ6～17cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4はほぼ中央部に位置し深さ12cmで、性格不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部の壁際に付設されている。長径75cm、短径74cmの不整楕円形で、深さは36cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
2 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

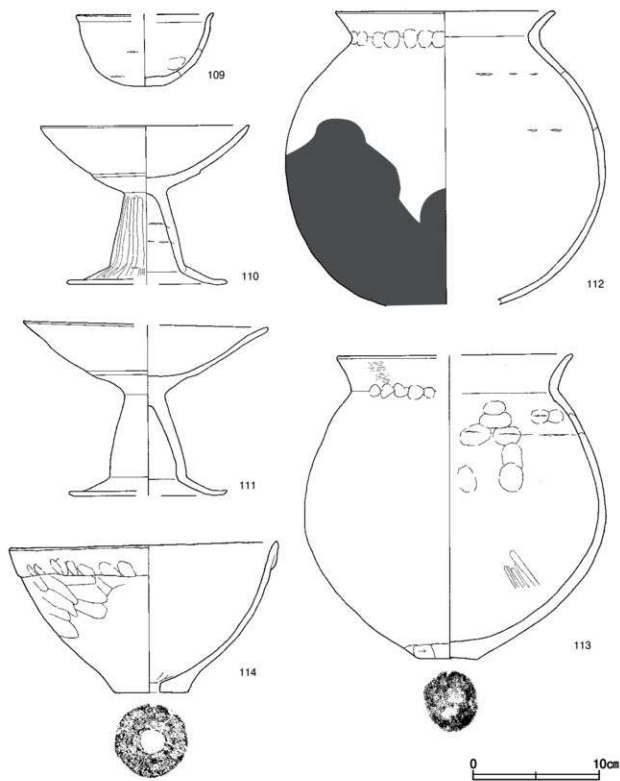


第101図 第70号住居跡実測図

覆土 床面がほとんど露出した状況で検出されているため、堆積状況については不明である。

遺物出土状況 土師器片200点（椀4、埴4、高坏59、甕類133）が出土している。これらのほとんどは、貯蔵穴とその周辺から破片で出土したもので、まとまって出土していることから、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。109～114は、貯蔵穴内から一括出土したものである。この他、流れ込んだ縄文土器片3点、弥生土器片1点、礫2点も出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代中期前半である。



第102図 第70号住居跡出土遺物実測図

第70号住居跡出土遺物観察表（第102図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
109	土師器	碗	10.8	7.3	—	白灰・雲母・赤色 砂子	橙	普通	口辺部内・外面磨ナデ 体部外面ナデ 縁部内 内面ヘウエテナデ	貯蔵穴内	60% PL102
110	土師器	高杯	16.4	12.7	12.7	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口部内・外面ナデ 一部摩滅 口部縁ナデ 口部内・外面ナデ 縁部外面ヘウエテ 内面ナデ 縁部底	貯蔵穴内	80% PL101

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
111	土師器	高坏	[194]	140	[122]	石英・雲母・赤色 粒子	橙	普通	坏部内・外面及び脚部外面等域のための調整不 脚部内面ナデ	貯蔵穴内	65%
112	土師器	甕	174	(235)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	1) 辺部内・外面縁ナデ 胴部外面指頭圧痕 体部内面ナデ 脇指痕	貯蔵穴内	90% PL102 保行倉
113	土師器	甕	[187]	244	45	長石・石英・雲母	赤褐	普通	1) 辺部外面ハケ目 ナデ 胴部指頭圧痕 体部外面ナデ 下部ヘラ削り 体部内面ヘ ラ削り後ナデ 脇指痕	貯蔵穴内	95% PL102
114	土師器	瓶	212	120	56	石英・雲母・赤色 粒子	橙	普通	折り返し1) 辺部内・外面縁ナデ 指頭圧痕 体 部外面ヘラ削り後ヘラナデ 摩滅 内面ナデ	貯蔵穴内	50% PL102

第71号住居跡 (第103・104図)

位置 調査区北東部のH11c3区で、標高26mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 南部で第72号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.35m、短軸6.15mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。確認された壁高は5～27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、硬化面は認められない。貯蔵穴の北側には長径103cm、短径54cm、高さ5cmほどで不整楕円形の硬化した高まりが確認されている。また、北壁部の壁際と南東コーナー部には焼土の広がりや炭化材が確認されており、焼失住居と考えられる。

炉 は中央部の北壁寄りに付設されており、長軸82cm、短軸61cmの不定形である。炉床は床面よりわずかにくぼみ、焼土は、厚さ8cmほどである。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 3 に近い赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗赤褐色 焼土粒子少量、砂粒微量

ピット 7か所。P1～P4は深さ21～31cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5とP7はコーナー部に位置し、深さがそれぞれ50cmと21cmであるが、性格は不明である。P6は中央部の炉寄りに位置し、深さは19cmであるが、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部の壁際に付設されている。長径64cm、短径59cmの楕円形で、深さは63cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子中量、炭化物・焼土粒子少量 3 黒褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量
2 黒褐色 粘土粒子中量、炭化材・焼土粒子少量 4 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子中量

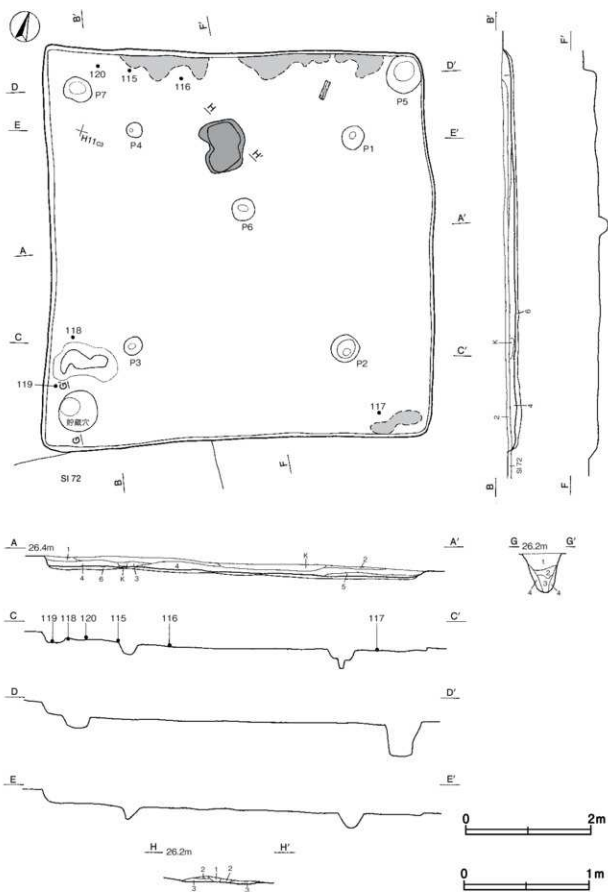
覆土 5層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。第6層は貼床の構築土層である。

土層解説

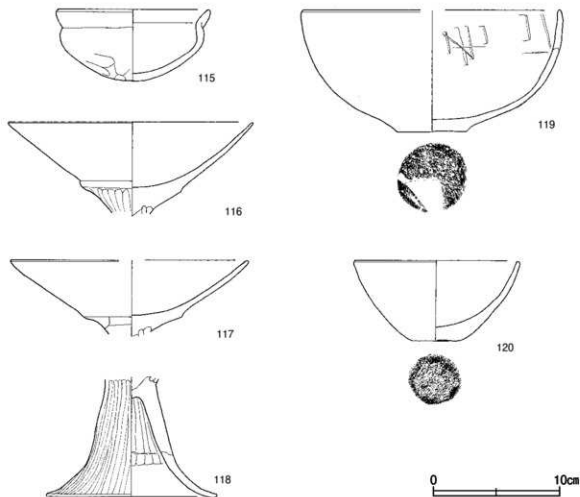
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・砂粒微量 6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子少量、焼土粒子
3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 微量(締まりが強い)
4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片505点(椀21, 増21, 高坏145, 鉢27, 甕類291)が出土している。115・120は北西部の北壁際、116は北部の壁際、117は南東コーナー部の壁際、118・119は南西部の西壁際の、いずれも覆土下層から正位または斜位、あるいはつぶれて出土している。これらを含めて住居の廃絶時に伴うと考えられる土器の多くは、床面から4～6cm上位の覆土下層から出土しており、人為的に焼却されて廃絶した際に遺物も廃棄されたものと想定される。

所見 覆土に焼土粒子や炭化粒子を含み、壁際に焼土塊と炭化材が確認されていることから、焼失住居と考えられる。また、隣接する第69号住居跡及び第70号住居跡と同様な形態と主軸方向を示すことから、同じ集団と考えられる。時期は、出土土器の傾向から古墳時代中期前半と考えられる。



第103图 第71号住居跡实测图



第104図 第71号住居跡出土遺物実測図

第71号住居跡出土遺物観察表 (第104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
115	土師器	碗	12.2	3.7	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面積ナデ 体部外面ヘラナデ後ナデ 内面ナデ	覆土下層	95% PL102
116	土師器	高坏	19.4	(7.3)	—	長石・石英・雲母・小礫	赤褐	普通	体部内・外面厚減のため調整不明 口部部外面積ナデ 體部上部分面ヘラ磨き	覆土下層	40%
117	土師器	高坏	[19.0]	(6.1)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面厚減のため調整不明 内面ナデ	覆土下層	35%
118	土師器	高坏	—	(9.6)	13.6	長石・石英・雲母	赤褐	普通	體部外面ヘラ磨き 内面ヘラ閉り後ナデ輪積成	覆土下層	50%
119	土師器	鉢	[20.5]	9.7	5.6	長石・石英・赤色粘土	明赤褐	普通	体部外面厚減のため調整不明 体部内面ヘラナデ ナデ 輪積成 裏の未用ナ	覆土下層	80% PL102
120	土師器	鉢	13.2	6.5	3.8	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面積ナデ 体部内・外面ナデ	覆土下層	95% 輪* PL102

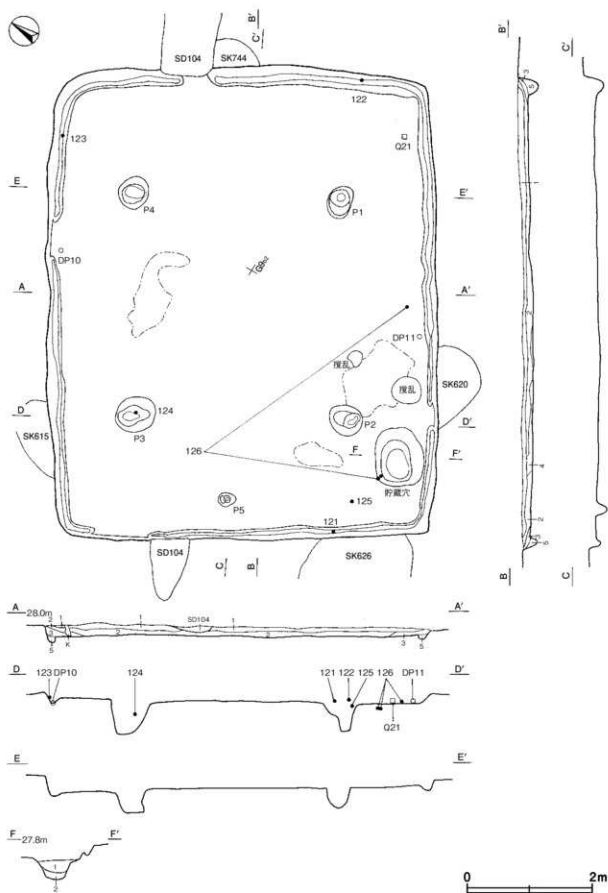
第75号住居跡 (第105～107図)

位置 調査区北東部のG 9 b2区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第615・620・626・744号土坑を掘り込み、第104号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.57m、短軸6.15mの長方形で、主軸方向はN-59°-Eである。確認された壁高は7～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、P 3とP 4の間とP 2の周辺にわずかに硬化面が確認されている。壁溝が、北部と西部の壁際を除いて通っており、幅16～30cm、深さ4～11cmで、断面形はU字状である。



第105图 第75号住居跡実測图

ピット 5か所。P1～P4は深さ30～35cmで、配置から支柱穴と考えられる。南西壁際に位置しているP5は深さ15cmで、主軸線上にあることから出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナー部の壁際に付設されている。長軸95cm、短軸77cmの隅丸長方形で、深さは37cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為的な堆積状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子中量

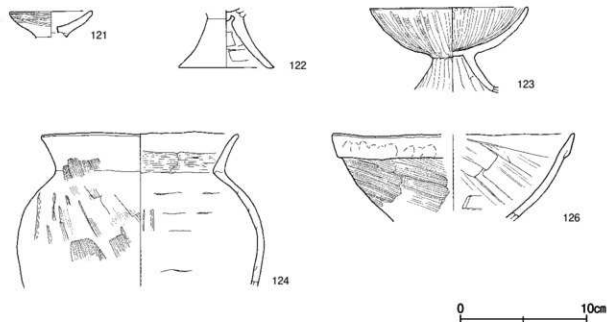
覆土 5層に分層される。遺物の出土状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

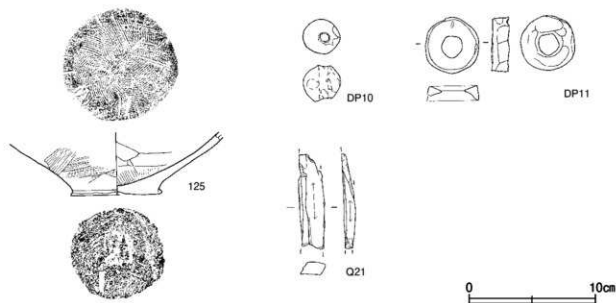
- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック多量
2 暗褐色 ローム粒子多量 5 黒褐色 ローム粒子少量
3 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片548点（埴5、器台2、高坏16、甕類518、甌6、ミニチュア土器1）、土製品2点（球状土錘、不明）、石器1点（砥石）が出土している。121・125は南部の壁際の覆土下層、122は東部の壁際の覆土下層、123は北部の壁際の覆土下層から、それぞれ出土している。124は、P3内から一括で取り上げた破片と覆土中から出土した破片が接合したものであり、126は南部の壁際と貯蔵穴内から出土した破片が接合したものである。DP10は北部の壁際、DP11は南東部の壁際、Q21は東コーナー部からそれぞれ出土している。これらを含めた出土遺物は、住居跡内の壁際を中心に破片で散在して出土しており、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、縄文土器片223点、弥生土器片2点、礫38点も貯蔵穴やピット内及び覆土上層から出土している。ほとんどが細片であることから、埋土とともに混入したものと考えられる。

所見 床面積が当遺跡の中で比較的広いにもかかわらず、硬化面が確認できる範囲は比較的狭く、炉跡も確認されていないことから、短期間使用された住居と推察される。炉がないために主軸線方向が東向きになっているが、第25A・B号住居跡と住居跡の規模・形態が類似している。时期的は、出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第106図 第75号住居跡出土遺物実測図1)



第107図 第75号住居跡出土遺物実測図(2)

第75号住居跡出土遺物観察表 (第106・107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	土師器	器台	6.5	(2.1)	—	石英・雲母・赤色 粒子	橙	普通	外面ヘラ磨きナデ 内面ナデ	覆土下層	50%
122	土師器	器台	—	(4.8)	7.8	長石・石英	にぶい・黄緑	普通	外面ナデ 内面ヘラナデ後ナデ	覆土下層	50%
123	土師器	高坏	12.5	(6.8)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外部外面ハケ目 内・外面ヘラ磨き 外部内ヘラ磨き 内面ヘラナデ	覆土下層	80% PL103
124	土師器	甕	15.8	(12.4)	—	石英・雲母・赤色 粒子	にぶい・橙	普通	口沿部内・外両面ナデ 胴部内・外両面ハケ目 外部内ヘラ目 内面ヘラナデ ナデ 輪切	P3・覆土中	25%
125	土師器	甕	—	(4.8)	7.2	長石・石英	橙	普通	外部外面ハケ目 摩滅 内面ハケ目 ナ 折り返し口辺部外面磨ナデ 指環圧痕	覆土下層	10%
126	土師器	瓶	(19.4)	(7.0)	—	長石・石英	橙	普通	外部外面ハケ目 内面ハケ目 ナ 外部外面ハケ目 内面ヘラナデ	貯蔵穴・床面	20%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP10	球状土師	2.8	0.7	2.7	20.0	土製	ナデ 一部磨き 一方向からの穿孔	摩滅	100%
DP11	不明土製品	4.4	1.7	1.3	(15.1)	土製	ナデ 一部欠損	覆土下層	95%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q21	砥石	(7.6)	1.9	0.9	(17.8)	板板岩	腰部欠損 砥面2面	覆土下層	

第78号住居跡 (第108・109図)

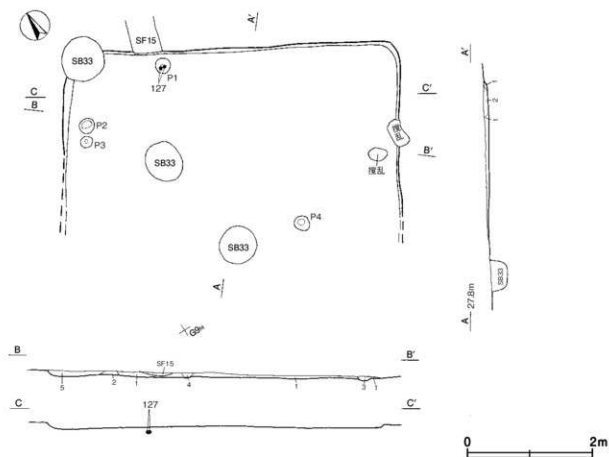
位置 調査区北東部のG9e4区で、標高28mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第33号掘立柱建物、第15号道路に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する壁と床面から確認されたのは、北東軸5.37m、南西軸2.74mの方形または長方形と推定され、主軸方向はN-57°-Wである。壁は高い部分で6cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、それほど踏み固められていないが、壁際は軟質である。

ピット 4か所。深さ13～28cmで配置が不規則なため、性格不明である。



第108図 第78号住居跡実測図

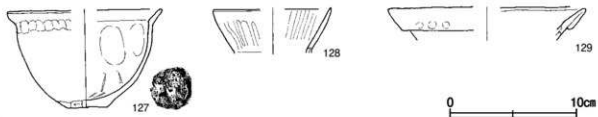
覆土 5層に分層される。層厚が6cmほどと薄く判断が難しいが、不規則な堆積状況から人為堆積と推察される。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片61点（椀3，埴2，高坏2，壺1，甕類53）が出土している。127はP1と覆土中から出土した破片が接合したものであり、128・129は覆土中から出土している。その他、混入した縄文土器片34点、弥生土器片1点、礫2点も細片で出土している。縄文土器片の多くは、第727・738号土坑の覆土を掘り込んだことで混入したものと考えられる。また、攪乱により混入した須恵器片2点も出土している。

所見 南部から西部にかけて耕作による削平を受けているため、遺存状況が不良であり、出土遺物は少ない。時期は、隣接する住居跡の形態と出土土器から古墳時代前期後半から中期にかけてと考えられる。



第109図 第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土物観察表 (第109図)

番号	種類	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
127	土師器	甗	[12.4]	7.7	3.3	長石・雲母	にがい褐色	普通	11辺部内・外面横ナデ 脚部直縁 唇部内面ナデ 口縁へウ磨り 内面へウナデ 底ナデ 当て具痕	P1・覆土中	50%
128	土師器	埴	[9.2]	(3.5)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	外面横ナデ へウ磨り 内面へウ磨り	覆土中	10%
129	土師器	甗	[15.4]	(2.7)	—	長石・石英・雲母	にがい褐色	普通	折り返し口縁 11辺部外面横ナデ 唇部直縁 内面ナデ	覆土中	80%

第95号住居跡 (第110・111図)

位置 調査区北東部のF1012区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 北壁から中央部にかけて、第24号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する壁から東西軸4.85m、南北軸4.5mほどの方形と推定され、主軸方向は住居跡の形態から、 $N-0^\circ$ である。壁高は12～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 は平坦で、踏み固められた部分や高まりは確認されていない。

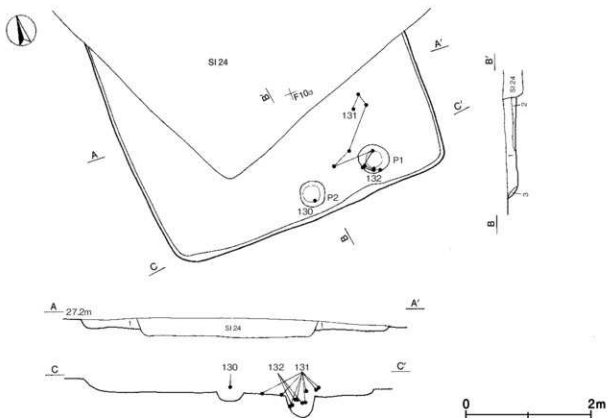
ピット 2か所。P1は深さ34cmで、性格は不明である。P2は深さ22cmで、規模と配置から出入り口施設に伴う柱穴の可能性が考えられる。

覆土 3層に分層される。不規則な堆積状況と含有物から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3層褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

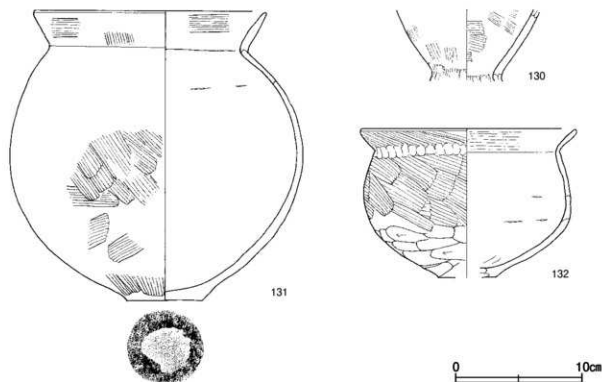
遺物出土状況 土師器片336点(埴2、器台3、高坏5、甗類326)が出土している。130は南壁際のP2の上面、131・132はP1内と南東部の覆土下層を中心にそれぞれ破片で出土している。これらの出土土器は、出土



第110図 第95号住居跡実測図

状況から廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、埋土と共に混入した縄文土器片95点、弥生土器片3点、礫245点も覆土上層と掘り方を中心に出土している。

所見 時期は、重複関係と出土土器の傾向から、古墳時代前期後半と考えられる。



第111図 第95号住居跡出土遺物実測図

第95号住居跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
130	土師器	埴	—	(5.7)	—	長石・雲母	明赤陶	普通	内外面ハケ目 ナデ	P 2 上層	30%
131	土師器	甕	18.6	23.2	6.0	長石・石英	に、い、橙	普通	口辺部内・外面ハケ目 ナデ 体部外面ハケ目 一部掬成 内面ナデ 輪痕痕	P 1 内・ 覆土下層	90% PL103
132	土師器	甕	16.9	12.0	[4.4]	長石・石英・ 雲母・赤色砂子	橙	普通	口辺部内・外面ハケ目 肩部指面圧痕 体部外面ハケ目 ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 輪痕痕	P 1 内	80% PL103

第96号住居跡 (第112・113図)

位置 調査区北東部のG 10b3区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第38号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.96m、短軸3.91mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。確認された壁高は3~17cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、硬化面は認められず、壁際が軟質である。

炉 中央部の北壁寄りに付設されている。長径32cm、短径27cmの楕円形で、床面を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 2層に分層される。壁際から粒子が流れ込むような堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

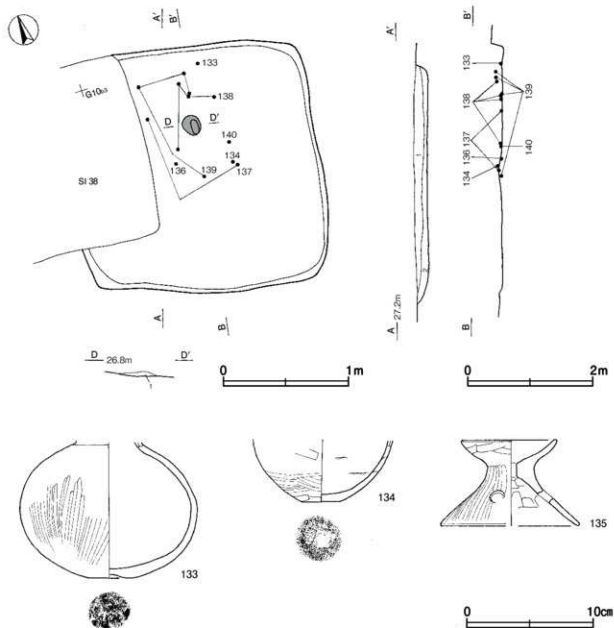
土層解説

1 黒 褐色 ローム粒子多量

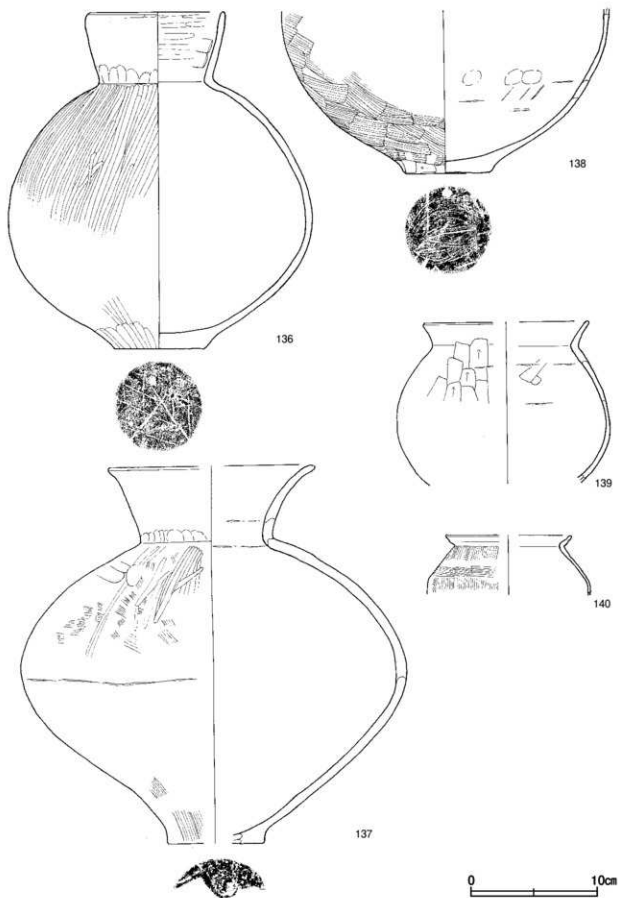
2 黒 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片322点(埴6, 器台5, 壺69, 甕類242)が出土している。133は北壁際の中央部床面, 135は覆土中からそれぞれ破片で出土している。134・136～140は、竈の周辺部の床面や覆土下層からそれぞれ出土している。これらの土器の多くは土圧によりつぶれているが、完形に近い状態で竈の周辺の床面からまとまって出土していることから、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片113点、弥生土器片3点、竊55点も覆土上層と床下の掘り方を中心に出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第112図 第96号住居跡・出土遺物実測図



第113图 第96号住居跡出土遺物実測図

第96号住居跡出土遺物観察表 (第112・113図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
133	土師器	埴	—	(109)	3.6	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	外部外面へう巻き 上段摩滅 内面ナデ	床面	60% PL103
134	土師器	埴	—	(50)	3.0	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	外面へうナデ後ナデ 下位へう削り 内面 ナデ 輪痕あり	床面	30%
135	土師器	器台	7.5	6.9	[11.0]	長石・雲母	明赤陶	普通	外部外面へうナデ ナデ 内面へうナデ 脚部 外面へう巻き 内面へうナデ ナデ	覆土中	60%
136	土師器	甕	10.6	26.9	7.2	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面ナデ へう巻き 内面へうナデ へう巻き 外部外面へう巻き 外部外面へう巻き 下段摩滅 内面ナデ 底部本底あり	床面	85% PL103
137	土師器	甕	[12.4]	30.3	[7.8]	長石・石英・赤色 粒子	黄橙	普通	口辺部内・外面ナデ 内面輪痕あり 頸部筋頸 筋あり 外部外面へうナデ へう巻き ハナ 目 中位摩滅 輪痕あり 内面ナデ	床面・ 覆土下層	85% PL103
138	土師器	甕	—	(13.0)	6.4	長石・石英・赤色 粒子	にぶい赤陶	普通	外部外面ハケ目 摩滅 内面ナデ 指頭痕 輪痕あり	床面・ 覆土下層	30%
139	土師器	甕	[13.2]	(12.9)	—	石英・雲母・赤色 粒子	橙	普通	口辺部内・外面ナデ 外部外面へう削り 摩滅 内面へうナデ ナデ 輪痕あり	床面・ 覆土下層	60%
140	土師器	甕	[10.1]	(4.8)	—	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	S字口辺 外部外面ハケ目 内面ナデ	床面	10%

第98号住居跡 (第114・115図)

位置 調査区北東部のG9a7区で、標高28mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第34号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.50m、短軸3.30mの長方形で、主軸方向はN-27°-Wである。壁高は5～13cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、硬化面は認められず、壁際が軟質である。

炉 中央部の北壁寄りに付設されている。長径79cm、短径48cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りこぼめた床床である。炉床面は火を受けて赤変硬化しており、規模と形状から、長期間使用された痕跡が確認されている。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化粒子 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
微量

貯蔵穴 南西コーナー部の壁際に付設されており、深さは54cmである。底面はほほ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。東側には、床面より4cmほどの高まりが確認されている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

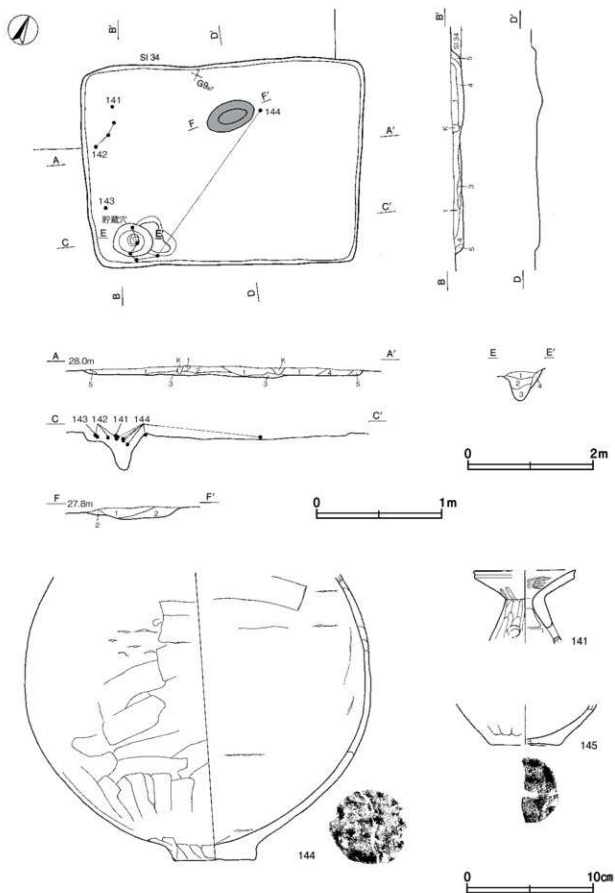
覆土 5層に分層される。壁際から粒子が流れ込むように堆積しているものの、遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

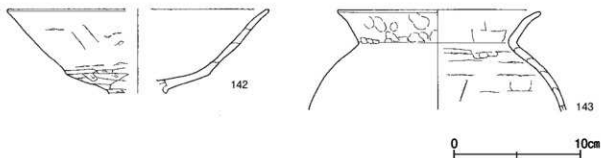
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 5 暗褐色 ローム粒子少量
3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片503点(埴3、器台5、高坏35、甕類460)が出土している。141は西部コーナー寄りの覆土下層、142は西壁際の覆土下層、143は南西部の西壁際の覆土中層、144は炉と貯蔵穴の周辺、145は覆土中からそれぞれ出土している。これらの土器をはじめ、出土した遺物の多くは床面から覆土下層にかけて、破片で散在して出土していることから、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、混入した縄文土器片72点、弥生土器片9点、礫21点も覆土上層から床面にかけて出土している。

所見 時期は、重複関係と出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第114图 第98号住居跡・出土遺物実測図



第115図 第98号住居跡出土遺物実測図

第98号住居跡出土遺物観察表 (第114・115図)

番号	種類	器形	11径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
141	土師器	器台	[80]	[5.8]	—	石英・雲母・赤色 粒子	橙	普通	外面ヘラナデ・ヘラ置き 内面ナデ・ハケ目 器底外面ヘラ置き 内面ヘラナデ 器3分所 外面ヘラナデ後ナデ 輪積痕 下段ヘラ 置き 内面ナデ	覆土下層	70%
142	土師器	高杯	[80]	(4.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	外面ヘラナデ後ナデ 輪積痕 下段ヘラ 置き 内面ナデ	覆土下層	25%
143	土師器	甕	16.2	(8.0)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口沿部外面ナデ 器底面 内面ヘラナデ後ナデ 器底内面ナデ 内面ヘラナデ後ナデ 輪積痕	覆土中層	20%
144	土師器	甕	—	(22.9)	6.3	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口沿部外面ヘラナデ ナデ 内面ヘラナデ 後ナデ 輪積痕	貯蔵穴内・ 体面	50%
145	土師器	甕	—	(3.3)	[5.4]	長石・石英	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後ナデ	覆土中	15%

第101号住居跡 (第116・117図)

位置 調査区の北東部G10J4区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第63号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.82m、短軸5.75mの方形で、主軸方向はN-30°-Eである。確認された壁高は15～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉の周辺を中心に中央部が踏み固められている。壁溝が壁際を全周しており、幅12～22cm、深さ9～18cmで断面形はU字状である。

炉 中央部の北東壁寄りに付設されている。長径94cm、短径54cmの不整形円形で、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

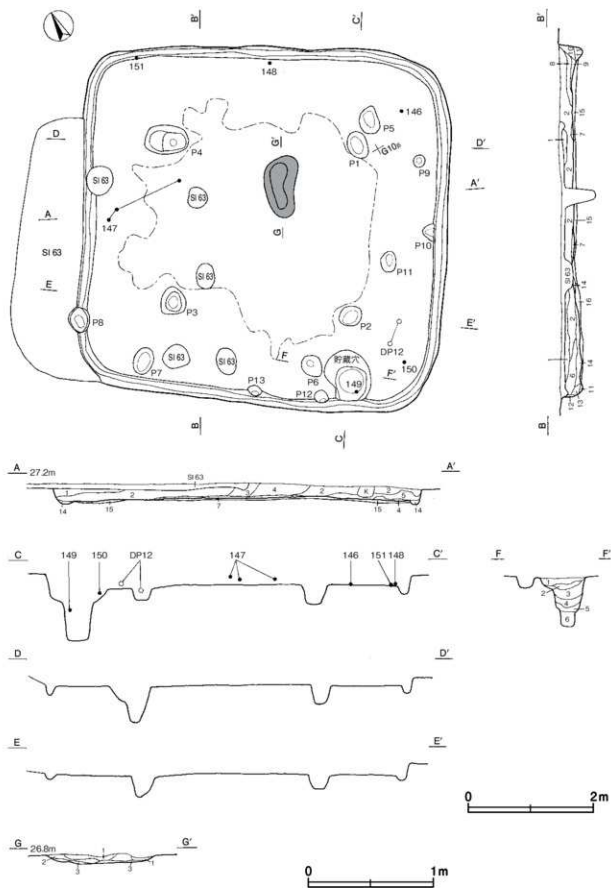
- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物粒子微量
2 赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子微量

ピット 13か所。P1～P4は深さ24～60cmで、配置から支柱穴と考えられる。P1に隣接するP5は深さ15cmで、補助支柱穴と考えられる。主軸線上からやや貯蔵穴寄りに位置しているP6は深さ20cmで、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。壁際または壁溝と重複して位置しているP8・P10・P12・P13は深さ7～37cmで、位置的に壁柱穴の類と考えられるが、明確ではない。

貯蔵穴 南東コーナー部寄りの壁際に付設されている。長径81cm、短径75cmの不整形円形で、深さは83cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。人為堆積の状況を示し、締まりは弱い。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック中量、粘土粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック・炭化物粒子微量 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量 6 黒褐色 ローム粒子中量



第116图 第101号住居跡実測图

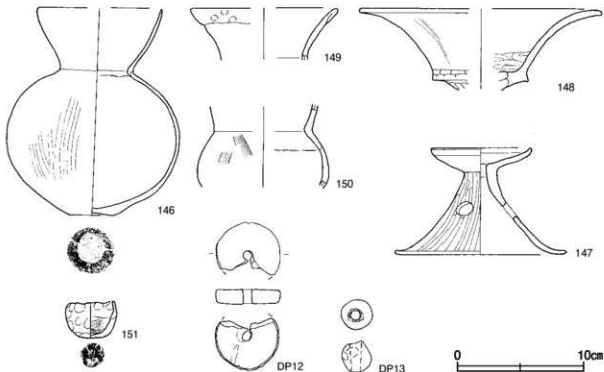
覆土 14層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈しているものの、遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。第15・16層は貼床の構築層である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	9 黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子少量	12 褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
5 黒褐色	炭化粒子少量、焼土粒子微量	13 褐色	ローム粒子中量
6 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック中量
7 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子微量	15 黒褐色	ロームブロック中量・炭化粒子微量
8 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	16 黒褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片655点(埴7, 器台17, 高坏7, 甕類603, ミニチュア土器1)が出土している。146は東コーナー部の床面, 147は西部の覆土中層, 148は北東壁際の床面, 149は貯蔵穴内, 150・DP12は南コーナー部の壁際, 151は北コーナー部の壁際, DP13は覆土中からそれぞれ出土している。151を除いて、ほとんどが破片で出土していることから、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。この他、混入した縄文土器片55点が床下の掘り方を中心に出土し、礎47点が覆土上層から出土している。

所見 時期は、重複関係と出土土器から古墳時代前期中頃から後半にかけてと考えられる。



第117図 第101号住居跡出土遺物実測図

第101号住居跡出土遺物観察表 (第117図)

番号	種別	器種	1径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
146	土師器	埴	[99]	166	36	長石・白色粒子	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ ヘラ置き 内面ナデ 輪痕 内・外側一部穿孔	床面	70% PL101
147	土師器	器台	79	85	135	長石・石英・雲母	橙	普通	口部内・外面ナデ 脚部外面へラ置き 内面ナデ 輪痕に雲子多量	覆土中層	60% PL101
148	土師器	高坏	[192]	66.1	—	長石・赤色粒子	に濃い黄橙	普通	外部内・外面へラ置き ナデ	床面	25%
149	土師器	甕	[116]	42	—	長石・石英	橙	普通	折り返し口縁部外面ナデ 前面痕 内面ナデ	貯蔵穴内	
150	土師器	甕	—	67	—	長石・石英	橙	普通	外部外面ハケ目 ナデ 内面ナデ 輪痕	床面	10%
151	土師器	ミニチュア土器	3.3	3.0	1.5	長石・赤色粒子	に濃い橙	普通	外面ナデ 指痕痕 内面ハケ目 ナデ 指痕痕	床面	100% PL103

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP12	鉄線串	5.1	0.7	1.2	(32.0)	土製	表裏面・側面ナデ	床面・ 覆土上層	70% PL122
DP13	線状土鉢	2.4	0.9	2.3	10.7	土製	全面ナデ 一方方向からの穿孔	覆土中	100%

第103号住居跡 (第118・119図)

位置 調査区西部のG 6 5区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置し、東部は調査区域外に延びている。

重複関係 南部を第218号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する壁と床面から東西軸4.60m、南北軸2.60mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-76°-Eである。確認された壁高は7cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、特に踏み固められているところは確認されていない。

炉 P 1の南東側に付設されている。長径52cm、短径25cmの楕円形で、床面と同じ高さの地床炉である。炉床面には厚さ1cmの焼土が確認されているが、硬化しておらず、長期間の使用は考えられない。

ピット 3か所。深さ12～20cmであるが、性格不明である。

覆土 2層に分層される。壁際から粒子が流れ込むような堆積状況がみられるが、層厚が7cmと薄く堆積状況は不明である。

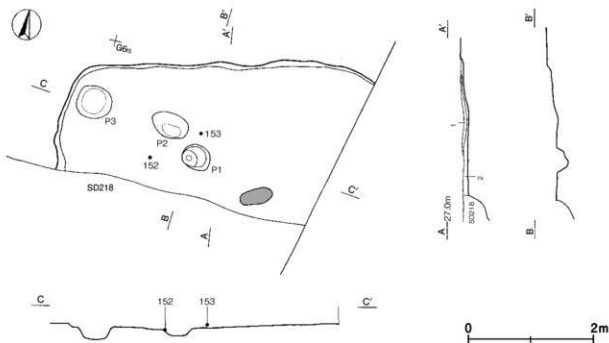
土層解説

1 黒褐色 色 ローム粒子微量

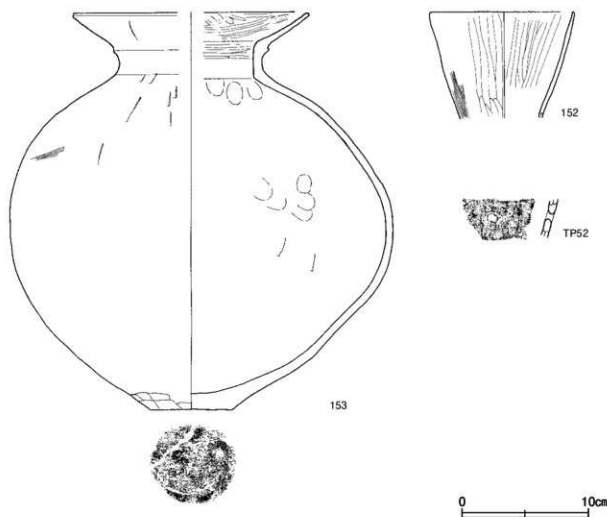
2 黒 色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片268点(埴27, 高坏4, 甕類237)が出土している。152・153は北西部の床面と覆土下層から、つぶれた状態で出土している。TP52は、覆土中から出土した穿孔痕が確認された破片である。出土している土器片はまとめて出土しているが、大部分が小破片であり、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。この他、流れ込んだ縄文土器片67点、礫10点も覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代前期中頃から後半と考えられる。



第118図 第103号住居跡実測図



第119図 第103号住居跡出土遺物実測図

第103号住居跡出土遺物観察表 (第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
152	土師器	用	11.5	(8.5)	—	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	口辺部外面へウタ 増き 内面へウ タ増き	床面	40%
153	土師器	甕	(18.8)	31.9	6.5	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	外縁へウタ増きナ ク 下位普通 口辺部内面へ ウタ増き 縁部内面内面 内面へウタ増き	覆土下層	60% PL101
TP52	土師器	薬*	—	(3.1)	—	長石・雲母	橙	普通	穿孔痕	覆土中	

第105号住居跡 (第120図)

位置 調査区中央部のG 6 g9区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第1021号土坑を掘り込み、南部から中央部にかけて第225号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.06m、短軸4.42mの長方形で、主軸方向はN-9°-Wである。確認された壁高は23cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存する部分は平坦で、特に踏み固められているところは確認されていない。北東部と南東部に焼土塊が2か所確認されている。

ピット 2か所。P 1は深さ40cmで、位置的に出入口施設にかかわるピットの可能性が考えられ、P 2は深さ30cmで、位置的に貯蔵穴の可能性が考えられるが、判然としない。

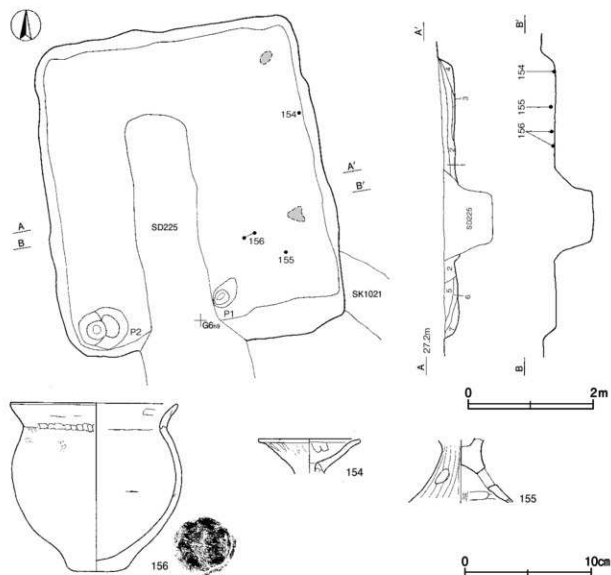
覆土 7層に分層される。壁際から粒子が流れ込むような堆積状況がみられるが、各層にロームブロックと焼土を比較的多く含むことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土ブロック微量 | 6 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 7 灰褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片97点(埴1, 器台4, 甕類92)が出土している。154は北東部の東壁際の床面、155・156は南東部の覆土下層と床面からつぶれて出土している。これらを含めて遺物の多くは、焼土塊の周辺から出土しているものが多く、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、混入した縄文土器片49点、鏝9点も出土している。また、攪乱により混入した須恵器片1点、瓦片7点、鉄製品3点(不明)、土製品1点(不明)も出土している。

所見 床面に焼土塊と覆土の各層に焼土が確認されていることから、焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第120図 第105号住居跡・出土遺物実測図

第105号住居跡出土物観察表（第120図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
154	土師器	器台	8.2	(2.8)	—	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	外面ナデ へら磨き 内面ヘラナデ ナ デ	床面	40%
155	土師器	器台	—	(5.0)	—	長石・石英・雲母	明赤陶	普通	外面へら磨き 内面ヘラナデナデ	履土下層	40%
156	土師器	甕	13.4	13.4	4.6	長石・雲母	明赤陶	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪切裏 原形器面(裏 縁部外縁へらナデ 内面ナデ 輪切裏	床面・履土下層	80% P1,101

第106号住居跡（第121・122図）

位置 調査区中央部のG 6 j0区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

規模と形状 長軸280m、短軸270mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。確認された壁高は13～17cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、南壁際から炉の周辺にかけてが踏み固められている。西部の壁際に炭化材、北部の壁際に焼土塊が確認されている。

炉 中央部の北西コーナー部寄りに付設されている。長径36cm、短径24cmの楕円形で、床面を2cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物・ローム粒子少量

ピット 深さ27cmで、配置と規模から主柱穴の一つと考えられるが、明確ではない。

覆土 5層に分層される。壁際から堆積しているもの、各層に焼土粒子・炭化粒子を含み不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

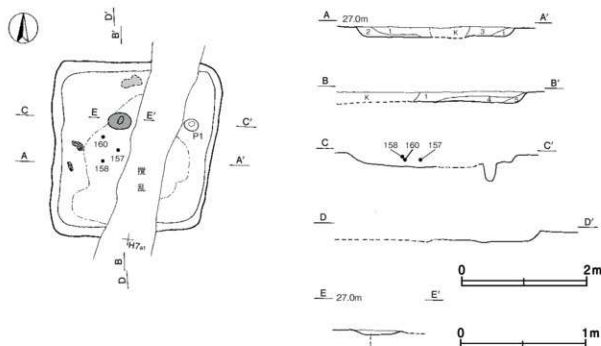
1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量

4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

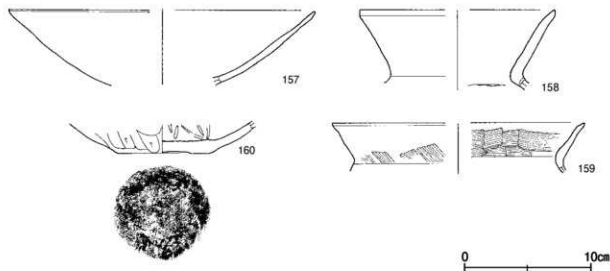
5 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量



第121図 第106号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片31点（高坏1，壺1，甕類29）が出土している。157・158・160は炉の南側の覆土中層，159は床面下からそれぞれ破片で出土している。これらの土器は，炉の南側にまとまって出土していることから，廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他，流れ込んだ縄文土器片20点，礫6点も覆土上層から出土している。

所見 覆土に焼土粒子や炭化粒子を含み，床面に炭化材と焼土塊が確認されていることから，焼失住居と考えられる。耕作による擾乱を受け遺存状況が不良のため，出土遺物は少量である。時期は，出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第122図 第106号住居跡出土遺物実測図

第106号住居跡出土遺物観察表（第122図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
157	土師器	高坏	[24.1]	(6.0)	—	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部内・外面横ナデ 環部内外面薄	覆土中層	15%
158	土師器	壺	[15.1]	(6.3)	—	長石	にぶい黄橙	普通	内・外面ナデ	覆土中層	
159	土師器	甕	[20.1]	(4.0)	—	長石・茶母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内・外面ハケ目 ナデ	床面下	
160	土師器	甕	—	(2.6)	7.6	長石・石英・赤色粒子	明赤陶	普通	ヘラ刮り 内面ヘラナデ残ナデ	覆土中層	

第107号住居跡（第123図）

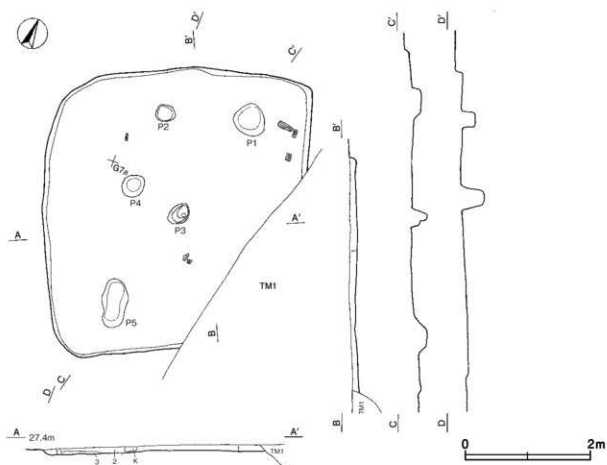
位置 調査区中央部のG7j8区で，標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 南東部を第1号古墳の周溝に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する壁から長軸4.45m，短軸4.22mの方形で，主軸方向はN-19°-Wである。確認された壁高は4～17cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，特に踏み固められているところは確認されていない。北東部と北西部及び中央部の南寄りの3か所で，炭化材が確認されている。

ピット 5か所。P2～P4は深さ21～36cmで，規模と形状から柱穴と考えられる。P1とP5は深さ15cmと18cmで，性格不明である。



第123図 第107号住居跡実測図

覆土 3層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片57点（埴1、器台1、甕類55）が散在するように出土している。ほとんどが破片であるため、図示が困難である。その他、埋土と共に混入した縄文土器片21点、礎9点も覆土上層から床面にかけて出土している。

所見 覆土に焼土粒子と炭化粒子を含み、床面に炭化材が確認されていることから、焼土住居と考えられる。良好な遺物がないため時期判定が困難であるが、時期は隣接する第106・108住居跡の形態と類似すること、甕類の体部片にハケ目調整痕が残る割合が高いことなどから、古墳時代前期と考えられる。

第108号住居跡（第124図）

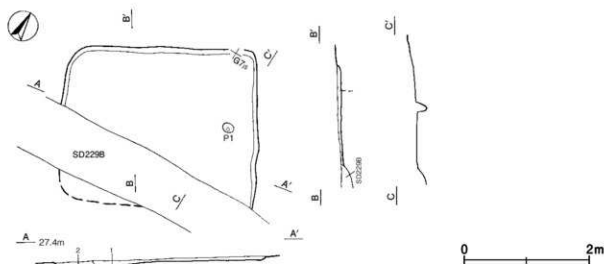
位置 調査区中央部のG7j4区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 南部を第229B号溝に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する壁から東西軸3.28m、南北軸は2.48mの、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-60°-Eである。確認された壁高は5cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、硬化面は確認されていない。

ピット 深さ16cmで、性格不明である。



第124図 第108号住居跡実測図

覆土 2層に分層される。層厚は5cmほどと薄いため、堆積状況は判然としにくい。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子多量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片7点(器台1, 甕類6)が出土している。ほとんどが細片であるため、図示が困難であるが、甕の体部片には、ハケ目調整痕が見られるものがある。その他、流れ込んだ縄文土器片13点、礫1点と、須恵器片2点も出土している。これらの混入した土器片は覆土上層から床面にかけて出土している。

所見 遺存状況が不良のため、出土遺物は極めて少量である。時期は、当遺跡の住居跡形態と出土土器から古墳時代前期と推測される。

第110号住居跡 (第125図)

位置 調査区中央部の日8a2区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

確認状況 北東部は調査区域外に及び、10基の遺構に掘り込まれているため、遺存状況は不良である。

重複関係 東部から南部にかけて第10号方形竪穴遺構、第12号地下式坑、第35～41号墓坑、第161号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁と柱穴及び床面から、長軸6.0m、短軸5.3mほどの長方形と推定され、主軸方向はN-27°-Wである。確認された壁高は、わずか2cmほどである。

床 遺存している部分は平坦で、炉の周辺部から北壁にかけて踏み固められている。

炉 中央部の東壁寄りに付設されている。遺存する炉床部は長辺が80cm、短辺が42cmの三角形で、床面と同じ高さの地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

ピット 3か所。深さ74～86cmで、配置から主柱穴と考えられる。

ピット3土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

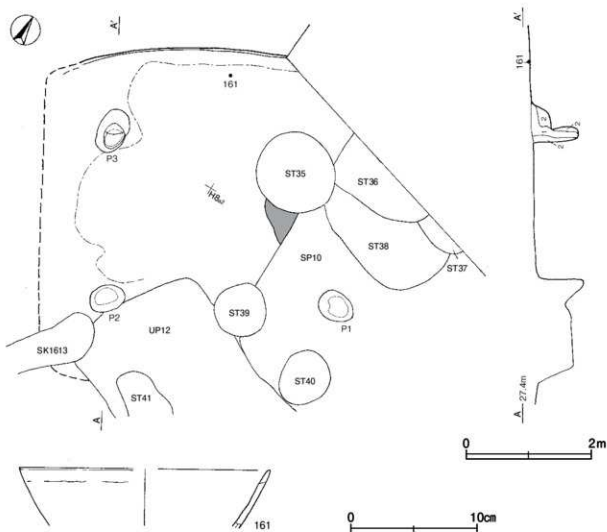
2 褐色 ローム粒子中量

覆土 覆土がほとんどない状況で検出されており、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片25点(埴5, 高坏1, 甕類19)が出土している。いずれも小破片で、形状を復元できるものはなく、161は北部の壁際の床面からまとまって出土した破片の一つである。その他には、ハケ目調整

痕が確認できるものが2点検出されている。その他、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。

所見 遺存状況が不良で出土遺物は少量のため時期判断が困難であるが、時期は出土土器の傾向から、古墳時代前期後半から中期と推測される。



第125図 第110号住居跡・出土遺物実測図

第110号住居跡出土遺物観察表（第125図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
161	土器器	高杯	19.8	4.6	—	石英・雲母	橙	普通	内・外面磨ナデ 輪捺痕	床面	

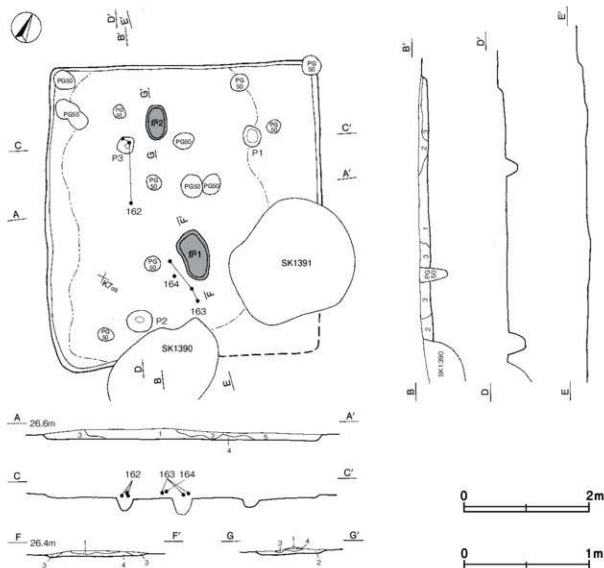
第111号住居跡（第126・127図）

位置 調査区中央部のK7c6区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 南部を第1390号土坑に、南東部を第1391号土坑に、全体的に第50号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.42m、短軸4.39mの方形で、主軸方向はN-31°-Wである。確認された壁高は4～8cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部を中心に全体的に踏み固められている。



第126図 第111号住居跡実測図

炉 2か所。南部寄りに付設されている炉1は長径81cm、短径43cmの不整楕円形で、床面を4cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。北部寄りに付設されている炉2は長径56cm、短径34cmの楕円形で、床面を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。火床面は火を受けて赤変硬化している。炉床部の使用痕から同時期に使用されたものと考えられるが、規模と形状から炉1が主であったと推察される。

炉1・2土層解説（共通）

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量 |

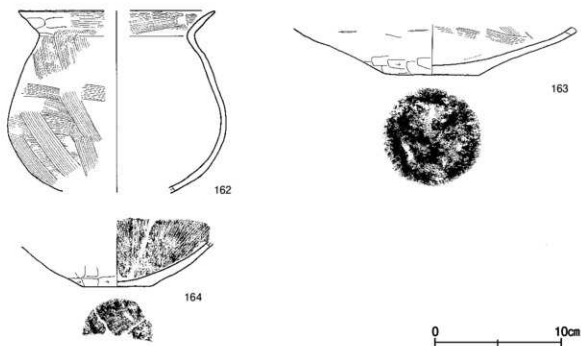
ピット 3か所。深さ11～28cmで、配置から支柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片275点(器台11, 高坏2, 甕類262)が, 中央部を中心に床面から覆土中層にかけて破片で出土している。162は北西部から中央部にかけての床面から覆土下層にかけて, 163・164は中央部の覆土中層から, まとまって出土しており, 出土状況から, 本跡の廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他, 混入した縄文土器63点, 弥生土器片3点, 礫20点も覆土上層から床面にかけて散在するように出土している。
所見 時期は, 出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第127図 第111号住居跡出土遺物実測図

第111号住居跡出土遺物観察表 (第127図)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地肌	手法の特徴	出土位置	備考
162	土師器	甕	(13.6)	(14.4)	—	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口辺部内・外面ハケ目ナデ 内面ナデ	床面・覆土下層	20%
163	土師器	甕	—	(4.0)	7.5	長石・石英・雲母	橙	普通	外面ナデ 輪縁部 下縁ヘラ削り 内面ハケ目・ヘラナデ ナデ	覆土中層	10%
164	土師器	甕	—	(3.5)	5.4	長石・石英	橙	普通	外面ナデ 下縁ヘラ削り 内面ハケ目	覆土中層	

第120号住居跡 (第128・129図)

位置 調査区中央部のH 8 h6区で, 標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第1526号土坑を掘り込み, 南北に第245号溝に掘り込まれている

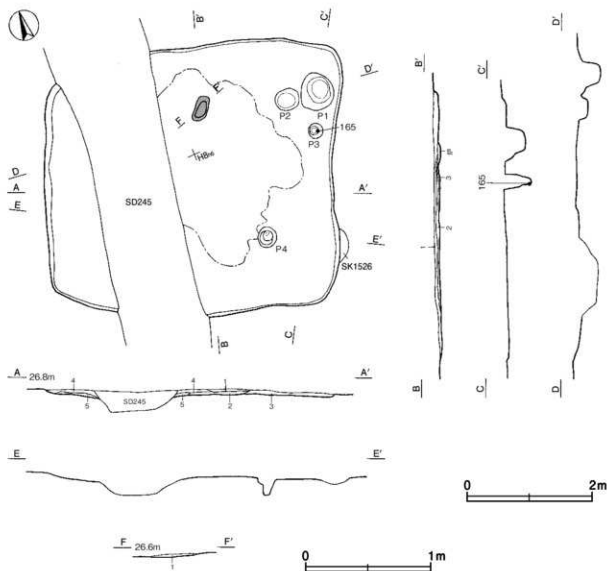
規模と形状 長軸4.62m, 短軸4.35mの方形で, 主軸方向はN-27°-Eである。確認された壁高は4~15cmで, 壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で, 炉の周辺を中心に中央部が踏み固められている。

炉 中央部の北壁寄りに付設されている。長径42cm, 短径21cmの不整楕円形で, 床面を4cmほど掘りくぼめた床炉である。火床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量(締まりが強い)



第128図 第120号住居跡実測図

ピット 4か所。P2・P4は深さ14cm・27cmで、配置と形状から主柱穴と考えられる。P2に隣接しているP1とP3の性格は、不明である。

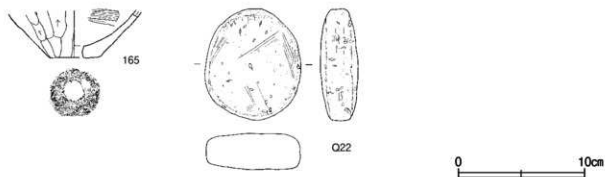
覆土 5層に分層される。ローム粒子が壁際から流れ込むような堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片101点（高坏2、甕類99）、石器1点（磨石）が出土している。これらの遺物の多くは南東部の覆土中から出土したもので、いずれも細片である。165はP3の底面、Q22は覆土中から出土しており、廃絶時に廃棄されたものと推測される。この他、攪乱で混入した須恵器片1点、鉄滓の小片1点、礫2点も出土している。

所見 遺存状況が不良のため、復元できる土器は確認されていない。時期は、住居の形態と出土土器から、古墳時代前期後半から中期初めにかけてと考えられる。



第129図 第120号住居跡出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物観察表（第129図）

番号	種類	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	地味	手法の特徴	出土位置	備考
165	土師器	甕	—	(3.8)	3.8	長石・雲母	明褐色	普通	外部外面へタ削り 内面ハケ目 ナデ	P 3 底面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q22	磨石	8.9	7.7	3.0	301.3	安山岩	横面全体を磨り面として使用	覆土中	100%

第125号住居跡（第130図）

位置 調査区中央部のH 8 c6区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第128号住居跡、第1536号土坑を掘り込み、第1537号土坑、第245号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.97m、短軸4.83mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。確認された壁高は2～5cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉の周辺を中心に中央部が踏み固められている。

炉 中央部の北壁寄りに付設されている。長径147cm、短径77cmの不定形で、床面を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。火床面は火を受けて赤変している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子ブロック多量
- 2 明赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ7～26cmで、配置から主柱穴と考えられる。南壁寄りに位置しているP 5は深さ9cmで、主軸線上に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

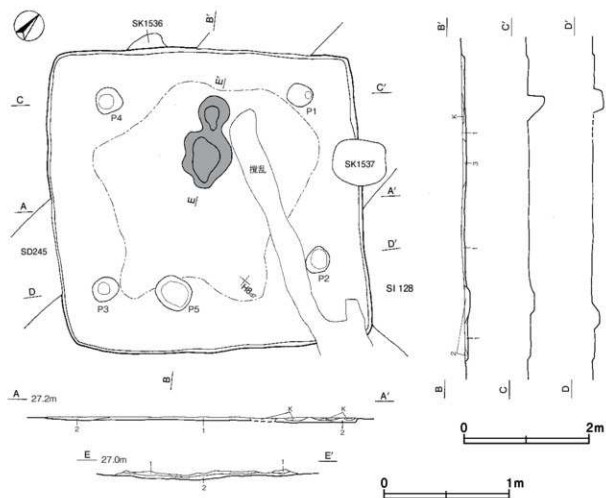
覆土 3層に分層される。層厚が4cmと薄いため、堆積状況は判然としにくい。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量（炉の上面の覆土）

遺物出土状況 土師器片29点（高坏2、甕類27）が出土している。床面及びピット内から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。その他、流れ込んだ縄文土器片19点、礫5点も出土している。

所見 南東に隣接する第126号住居跡に形態と主軸方向が類似し、焼片にハケ目調整痕が見られることなどから、時期は古墳時代前期後半から中期前半と考えられる。



第130図 第125号住居跡実測図

第126号住居跡 (第131・132図)

位置 調査区中央部のH 8 d0区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。南東部が調査区域外に延びている。

重複関係 第124号住居に掘り込まれている。

規模と形状 確認できたのは北西軸4.75m、北東軸は2.85mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-47°-Wである。確認された壁高は14～32cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

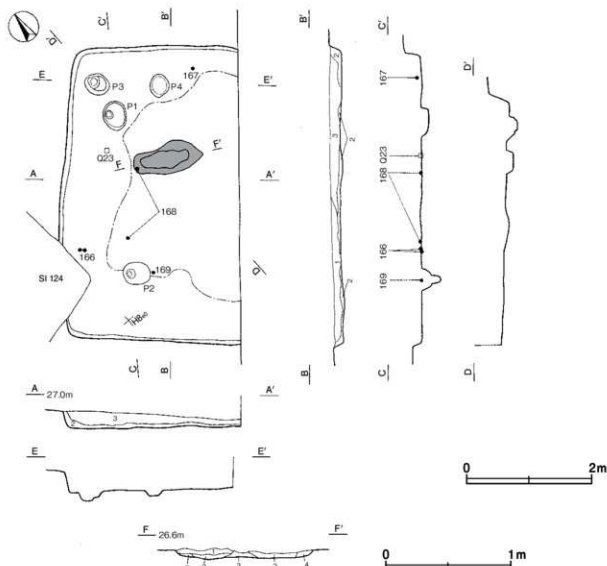
床 ほは平坦で、炉の周辺を中心に中央部が踏み固められている。

炉 中央部の西壁寄りに付設され、長径110cm、短径52cmの不整楕円形である。床面を8cmほど掘りくはめた地床炉で、火床面は火を受けて赤変している。

炉土層解説

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子少量 |

ピット 4か所。P 1・P 2は深さ17cm・30cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 1に隣接しているP 3・P 4は深さ16cm・10cmであるが、性格は不明である。



第131図 第126号住居跡実測図

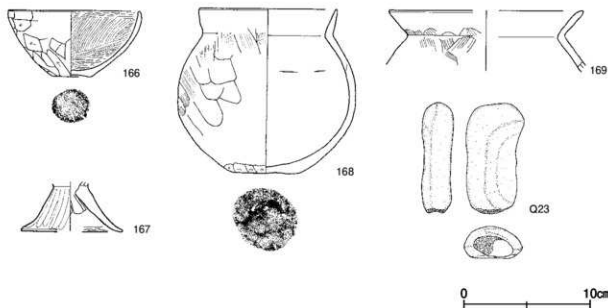
覆土 3層に分層される。各層ともローム粒子が壁際から流れ込むような堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|---------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 | 3 黒 褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 土師器片184点（椀6，埴4，器台5，高坏1，甕類168），石器1点（敲石）が出土している。本跡に伴うものは、覆土下層から床面にかけて出土しているのに対し、混入した遺物はほとんどが遺構確認面から覆土上層にかけて出土している。166は北西部の壁際の床面，167は北東部の壁際の覆土下層，168は如とP2北側の床面，169はP2東側の床面からそれぞれ出土している。これらの土器の多くは破片で出土していることから、住居の廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。Q23はP1南側の床面から出土している。その他、縄文土器片62点，礎5点，須恵器片8点も出土している。

所見 近接する第125号住居跡に形態と主軸方向が類似していることから、同じ集団を形成していたと考えられる。時期は、出土土器から古墳時代前期後半から中期前半と考えられる。



第132図 第126号住居跡出土遺物実測図

第126号住居跡出土遺物観察表 (第132図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
166	土師器	碗	30.4	5.3	3.0	長石・石英・赤色 粘土	にじい橙	普通	口辺部・体部外面へラナデ 内面へラナデ 赤彩痕	床面	55% PL104
167	土師器	器台	—	(4.0)	(8.0)	長石・高母・赤色 粘土	橙	普通	外面へラナデ 内面へラナデ ナデ	覆土下層	40%
168	土師器	甕	30.8	13.2	5.2	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	口辺部内・外面へラナデ 体部外面へラナデ ナデ 上蓋へラナデ 内面ナデ 底面ナデ	炉・床面	60% PL104
169	土師器	甕	[15.2]	(4.9)	—	長石・高母	明赤陶	普通	口辺部内・外面へラナデ 体部・体部外面へ ラナデ 内面ナデ	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q23	磁石	8.8	4.6	2.5	(13.1)	安山岩	磨き面1か所	床面	100%

第132号住居跡 (第133・134図)

位置 調査区中央部のG 877区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第131号住居跡を掘り込み、第44号墓坑、第1601号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.46m、短軸6.34mの方形と推定され、主軸方向はN-42°-Wである。壁高は4～15cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、炉の周辺を中心に中央部が踏み固められている。壁溝が北東部・北部・北西部・西部の壁際の一部に確認され、幅11～22cm、深さ5～7cmで断面形はU字状を呈している。

炉 はほぼ中央部に2か所確認されている。中央部に位置している炉1は長径96cm、短径75cmの楕円形で炉1の北側に位置している炉2は長径46cm、短径36cmの不整楕円形である。どちらも床面とはほぼ同じ高さの地床炉で、炉床面がわずかに赤変している。使用した痕跡から、短期間で、同時期に使用されていたものと推測される。

貯蔵穴 南東コーナー部の壁際に付設されている。長軸69cm、短軸64cmの隅丸方形で、深さは45cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。自然堆積の堆積状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 暗褐色 炭化材中量、ローム粒子少量 | 3 黒褐色 炭化物・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 |

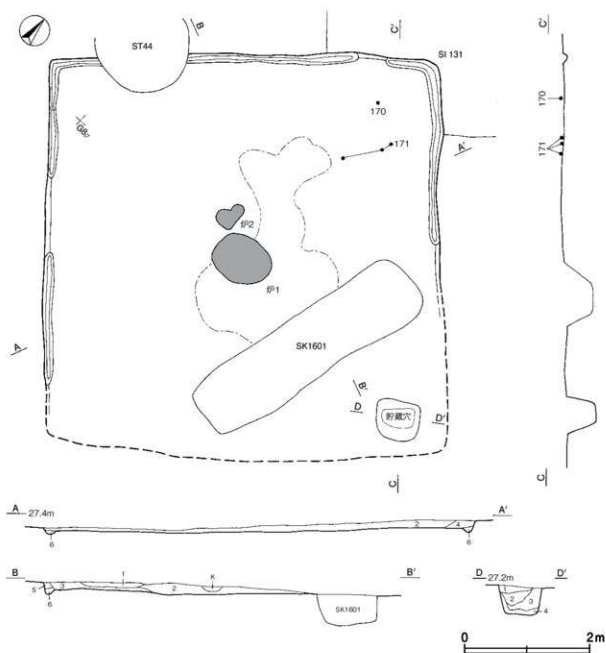
覆土 6層に分層される。ローム・炭化粒子が壁際から流れ込むような堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

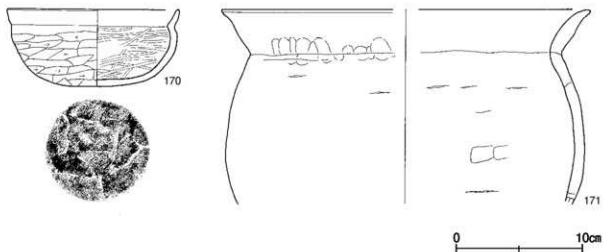
- | | | | |
|--------|--------------------|-------|----------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片125点(椀11, 高坏14, 甕類100)が出土している。170・171は、北東部の覆土下層から床面にかけて散在するように出土しており、本跡の廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、縄文土器片12点、鏝3点、須恵器片1点も出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代中期前半と考えられる。



第133図 第132号住居跡実測図



第134図 第132号住居跡出土遺物実測図

第132号住居跡出土遺物観察表 (第134図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
170	土師器	碗	13.7	6.2	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り、内面へラ削り	覆土下層	80% PL104
171	土師器	壺	29.2	15.6	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 頸部前面直横ナデ 体部内・外面へラナデ 輪痕直	床面・覆土下層	10%

表5 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	底面	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)			
							壁遺	柱穴	土口	土口						
3	K 3-09	N-56°-W	方形	3.40 × 3.28	10~17	平坦	—	4	1	1	—	人土	土師器(壺)			
10	G 9-10	N-14°-E	隅丸長方形	5.15 × 4.32	15~26	凸凹	—	—	4	—	—	人土	赤生土器(壺)、土師器(砂器台、高坏、壺)、土製品(漆器)	SK707→本跡		
12	F 10-6	[N-38°-W]	[長方形]	[5.80] × [4.00]	—	平坦	—	4	—	7	0	—	不明	土師器(壺)		
13	F 10-2	N-41°-W	[長方形]	5.22 × [4.48]	18~32	平坦/浅凹	4	1	4	0	0	—	自然	土師器(埴、器台、壺)		
16	F 9-09	N-47°-W	長方形	5.54 × 4.71	6~22	平坦	—	4	—	1	0	—	人土	土師器(埴、器台、壺、ミナチユア土器)、土製品(埴状土器)	本跡→SI15	
17	F 10-3	N-12°-W	[長方形]	4.65 × [4.25]	20	平坦/浅凹	2	—	2	0	2	0	—	人土	赤生土器(壺)、土師器(埴、器台、壺)	本跡→SF8
18	F 10-13	N-63°-E	方形	6.18 × 5.84	7~11	平坦/浅凹	4	2	1	0	1	—	人土	土師器(高坏、器台、壺)	本跡→SF9	
19	F 10-5	N-21°-W	方形	4.13 × 3.79	2~18	平坦/全凹	3	—	1	0	1	—	不明	土師器(埴、壺)		
20	F 10-5	N-36°-W	方形	[4.35] × 4.14	20	平坦/浅凹	4	—	5	0	2	—	人土	土師器(埴、器台、壺)		
21	F 10-7	N-0°	[方形]	[4.35] × [3.97]	7	浅凹-一部	—	—	7	0	2	1	不明	土師器(埴、高坏、器台、壺)		
23	F 10-14	N-37°-W	長方形	[4.00] × 3.42	4	傾斜	—	4	—	1	0	—	不明	土師器(碗、高坏、器台、壺)	SI42→本跡	
24	F 10-3	N-24°-W	方形	6.18 × 5.84	17~35	平坦-一部	4	—	1	0	1	—	人土	土師器(碗、埴、器台、鉢、壺)	SF95→本跡	
25A	F 9-10	N-36°-W	長方形	2.16 × 3.93	6~23	平坦/手掘	4	1	2	0	1	—	人土	土師器(埴、器台、高坏、壺)、土製品(埴状土器)	SE31-SI25B→本跡	
25B	F 9-10	N-37°-W	長方形	7.11 × 5.98	12~23	平坦/手掘	4	2	3	0	1	—	人土	土師器(埴、器台、高坏、壺)、土製品(埴状土器)	SE31→本跡→SI25A	
26	F 9-19	N-28°-W	隅丸長方形	4.57 × 3.38	5~15	平坦	—	—	4	—	—	—	人土	土師器(埴、壺、ミナチユア土器)	SK601→本跡	
27	F 9-7	N-25°-W	[長方形]	5.45 × 4.83	12~19	平坦/浅凹	4	1	—	0	1	—	人土	土師器(器台、壺)、土製品(埴状土器)	本跡→SF9	
28	F 9-14	N-67°-E	長方形	[6.50] × 5.45	3~8	平坦	—	—	7	—	1	—	人土	土師器(埴、器台、壺)	本跡→SI25A-25B	
31	F 9-09	N-3°-E	[3形-長方形]	[3.42] × [2.32]	3~6	平坦	—	—	—	—	—	—	不明	土師器(壺)		
32	F 9-16	N-40°-W	方形	7.11 × 7.08	9~24	平坦	—	4	1	7	0	1	人土	[埴器] 器台、高坏、壺、土製品(埴器、埴器、埴器、埴器、埴器、埴器)	SE3-20、SK747→本跡→SD104	
33	F 9-16	N-26°-W	[長方形]	6.31 × [4.73]	5	平坦	—	—	5	—	—	—	人土	土師器(高坏、壺)	SE34→本跡→SE32 SD104	
34	F 9-16	N-27°-W	方形	7.43 × 6.85	6	平坦	—	—	—	0	2	—	人土	土師器(埴、器台、高坏、壺)	本跡→SE33-98、SD104	
35	G 9-8	N-2°-E	方形	2.68 × 2.52	2~10	平坦	—	—	—	—	—	—	自然	土師器(碗、埴、器台、高坏、壺)	SK602→本跡	

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	築年	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)		
							階段	柱穴 (直径)	土坑 (径)	土室					
36	F 9 10	N-3°-E	長方形	5.75 × 5.20	10~30	平	全	4	1	10	0	1	土師器(埴、器台、高坏、斐、石彫(龍石))	SK746→本跡	
37	G 10a2	N-0°	方形	5.37 × 5.22	2~30	平	全	4	1	3	0	1	土師器(埴、器台、高坏、斐)	SK801-814→本跡→SE38	
41	G 10d1	N-21°-E	長方形	4.60 × 4.06	5~13	平	全	4	1	9	0	1	土師器(埴、器台、高坏、斐)	不明	
41	G 9 d7	N-36°-W	長方形	3.20 × 2.81	13~20	平	全	1	1	1	0	1	土師器(埴、器台、高坏、鉢、斐、甕、瓶)	SH7, SK806→本跡	
53	G 9 f3	N-64°-E	長方形	4.30 × 3.40	2	平	全	2	1	3	1	1	土師器(斐)	本跡→SD2, SD113	
57A	H 9 a9	N-60°-W	方形	4.02 × 3.85	3~7	平	部	4	1	1	1	1	土師器(埴、器台、高坏、斐、ミニチュア土器)	SK672, S157B→本跡	
57B	H 9 a9	N-60°-W	方形	4.02 × 3.85	3~13	平	全	4	1	1	0	1	土師器(埴、斐)	SK672→本跡→S157A	
59	H 9 c8	N-13°-E	[方形]	4.34 × (4.33)	8	平	部	4	1	1	1	1	不明	S60, SK834→本跡→SK830	
60	H 9 c9	N-23°-E	[方形]	[4.11] × 3.76	8	平	部	1	1	1	1	1	不明	本跡→SD9, SK830	
61	G 10 i3	N-14°-E	[長方形]	[5.14] × [4.30]	12	平	全	4	1	1	1	1	不明	土師器(埴、器台、高坏、斐)	
63	G 10 j4	N-55°-W	方形	4.30 × 4.14	5	平	全	4	1	1	1	1	土師器(埴、器台、斐)	SI101→本跡	
64	H 10b2	N-23°-E	[方形]	[4.30] × 4.06	3	平	全	1	1	1	1	1	不明	土師器(高坏、斐)	
69	G 10b8	N-66°-W	[長方形]	4.18 × (3.33)	8	平	全	3	1	1	1	1	自然	土師器(高坏、斐)	
70	G 10 i0	N-65°-E	[方形]	[3.83] × [3.72]	2	平	部	3	1	1	1	1	不明	土師器(埴、器台、高坏、斐)	本跡→SF17
71	H 11 c3	N-17°-W	方形	6.35 × 6.15	5~27	平	全	4	3	0	1	1	土師器(埴、器台、高坏、鉢、斐)	SK72→本跡	
75	G 9 b2	N-59°-E	長方形	7.57 × 6.15	7~30	平	全	4	1	1	1	1	土師器(埴、器台、高坏、斐、瓶)、土製品(龍状土師器・不明)	SK615-620-626-714→本跡→SD101	
78	G 9 e4	N-57°-W	[長方形]	5.37 × (2.74)	6	平	全	1	1	4	1	1	土師器(埴、器台、高坏、斐)	本跡→SK33, SF15	
95	F 10 i2	N-0°	[方形]	4.85 × (4.50)	12~15	平	全	1	1	1	1	1	土師器(埴、器台、高坏、斐)	本跡→SD1	
96	G 10b3	N-14°-E	方形	3.96 × 3.91	3~17	平	全	1	1	1	1	1	自然	土師器(埴、器台、斐)	本跡→SF8
98	G 9 a7	N-27°-W	長方形	4.50 × 3.30	5~13	平	全	1	1	1	1	1	土師器(埴、器台、高坏、斐)	SD1→本跡	
101	G 10 j4	N-30°-E	方形	5.82 × 5.75	15~20	平	全	4	1	8	0	1	土師器(埴、器台、高坏、斐、ミニチュア土器)	本跡→SH3	
103	G 6 f5	[N-75-E]	[長方形]	(4.60) × (2.60)	7	平	全	1	1	3	1	1	不明	土師器(埴、高坏、斐)	本跡→SD218
105	G 6 g9	N-9°-W	長方形	5.06 × 4.42	23	平	全	1	1	2	1	1	土師器(埴、器台、斐)	SK1021→本跡→SD225	
106	G 6 j0	N-4°-E	方形	2.80 × 2.70	13~17	平	全	1	1	1	1	1	土師器(高坏、斐、壺)	不明	
107	G 7 j8	N-19°-W	方形	4.45 × 4.22	4~17	平	全	1	1	5	1	1	土師器(埴、器台、斐)	本跡→TM1	
108	G 7 j4	N-60°-E	[長方形]	3.28 × (2.40)	5	平	全	1	1	1	1	1	不明	土師器(器台、斐)	本跡→SD229B
110	H 8 a2	N-27°-W	[長方形]	(6.00) × (5.30)	2	平	全	3	1	1	1	1	不明	土師器(埴、高坏、斐)	本跡→SF10, UF12, SF35-41, SK1613
111	K 7 e6	N-31°-W	方形	4.42 × 4.39	4~8	平	全	3	1	1	1	1	土師器(器台、高坏、斐)	本跡→SK1300-1301, PG50	
120	H 8 b6	N-27°-E	方形	4.62 × 4.35	4~15	平	全	2	1	2	0	1	自然	土師器(高坏、斐)、石彫(龍石)	SK1326→本跡→SD245
125	H 8 c6	N-40°-W	方形	4.97 × 4.83	2~5	平	全	4	1	1	1	1	不明	土師器(高坏、斐)	SH28, SK1336→本跡→SK1337, SD245
126	H 8 d0	N-47°-W	[長方形]	4.75 × (2.85)	14~22	平	全	2	1	2	0	1	自然	土師器(埴、器台、高坏、斐)、石彫(龍石)	本跡→SI124
132	G 8 i7	N-42°-W	[方形]	[6.46] × 6.34	4~15	平	部	1	1	1	1	1	自然	土師器(埴、高坏、斐)	SI131→本跡→SF44, SK1601

(2) 掘立柱建物跡

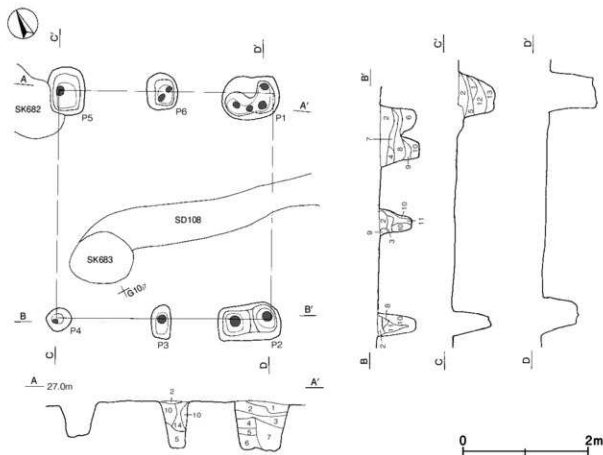
第34号掘立柱建物跡 (第135図)

位置 調査区北部のG107区、標高27mほどのほぼ平坦な台地上に位置している。

重複関係 第682・683号土坑、第108号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行1間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-30°-Eの南北棟である。規模は桁行3.6m、梁行3.4mで、面積は12.24㎡である。柱間寸法は、桁行が3.6m(12尺)で、梁行は1.7m(5尺7寸)である。

柱穴 6か所。深さは56~76cmである。掘り方の平面形は、P4が円形、他は楕円形に近い隅丸方形で、断面形はいずれも逆台形である。土層は、第1・11・14層が柱抜き取り痕に相当し、第2~10・12・13層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土と粘土質の土を、突き固めながら埋めたと考えられ、第3



第135図 第34号堀立建物跡実測図

～7・9・12～14層は特に締まりが強く、版築された層である。柱のあたりは硬化し、暗青灰色に変色しているのが認められ、P1が4か所、P2・P6が2か所ずつ、P3～P5は1か所ずつ、それぞれ確認されている。複数のあたり痕は、床東あるいは支柱のあたり痕の可能性が推測される。底面はP2が凸凹状であるほかは、いずれもほぼ平坦である。

土層解説 (各柱穴共通)

1 黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8 暗 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 黒 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 暗 褐色	ロームブロック中量
3 黒 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	10 黒 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 暗 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	11 黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
5 黒 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	12 黒 褐色	粘土ブロック少量・ローム粒子微量
6 にぶい黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量	13 暗 褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
7 暗 褐色	ロームブロック粘土ブロック中量、炭化粒子微量	14 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片11点(埴1, 甕10)、縄文土器片16点、弥生土器片1点が出土している。その内訳は、P1から土師器片4点(埴1, 甕3)・縄文土器片2点、P2から土師器片3点(甕), P3から土師器片2点(甕)・縄文土器片5点・弥生土器片1点、P4から縄文土器片5点、P5から土師器片1点(甕)・縄文土器片2点、P6から土師器片2点(甕)・縄文土器片2点が、それぞれ出土している。なお、土師器片(甕)の中にはハケ目を確認できるものが4点出土している。

所見 時期は、出土土器と当遺跡の中世の掘立建物跡と比較して柱穴の規模が大きく、埋土が互層に版築されていることや隣接する住居跡の主軸方向と桁行方向との関係から、古墳時代前期に想定される。構造と立地が類似している遺構は、古河市(旧総和町)の羽黒遺跡で確認されている第1・2号掘立建物跡があげられる。

(3) 古墳

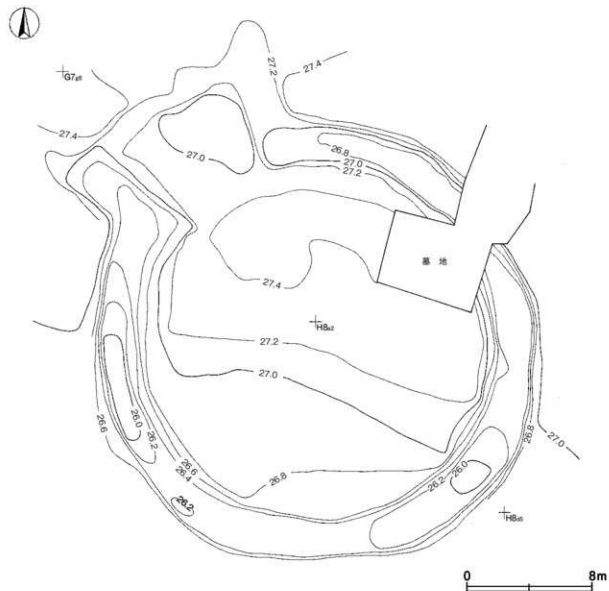
第1号墳 (第136～138図)

位置 調査区中央部のH8a2区を中心に、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

現況と確認状況 現況は畑地と墓地で、墳丘封土は削平されて遺存しておらず、2基の方形竪穴遺構、3基の地下式坑、8基の墓坑、2基の周溝内土壌、14基の土坑、7条の溝に掘り込まれ、さらに耕作による攪乱を受けているため遺存状況は不良である。また、墳丘の一部は墓地のため調査区域外となっている。表土除去後に、周溝部が確認されていたが、溝との重複が激しく規模を明確にはとらえられていなかった。

重複関係 第107・110号住居跡を掘り込み、第8・10号方形竪穴遺構、第12～14号地下式坑、第35～42号墓坑、第1085・1121～1123・1128・1129・1136・1139・1140・1143・1149・1154・1609・1613号土坑、第199A・226B・229A・231・233・245・251号溝跡、第2号不明遺構、周溝内土壌1・2に掘り込まれている。

墳形及び規模 北西に主軸を向けた帆立貝式の前方後円墳で、主軸方向はN-45°-Wである。周溝を含む規模は、主軸線上で約34m、後円部約27mで、墳丘の規模は主軸線上約31.5m、後円部約22.8mである。



第136図 第1号墳現況図

墳丘 耕作による擾乱と削平を受け、さらに地山の部分も北部が削平を多く受けている状況で、盛土は現存していない。

周溝 墳丘を全周しており、上端幅1.76m～4.64m、下端幅0.75m～2.56m、深さ0.4m～1.06mで、断面形は逆台形状を呈している。削平されている部分ほど幅、深さとも計測値が小さくなっているが、前方部に比べて後円部の方が幅・深さとも規模が大きく、また、壁の傾斜は墳丘側が急で外傾している。覆土はロームブロック・ローム粒子が主体となっており、盛土の流入が認められる。なお、周溝を掘り込んでいる周溝内土壌が2基確認されている。

周溝土層解説 (A-A')

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |

周溝土層解説 (B-B')

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・炭化粒子少量、粘土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ローム中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | | |

周溝土層解説 (C-C')

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |

周溝土層解説 (D-D')

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |

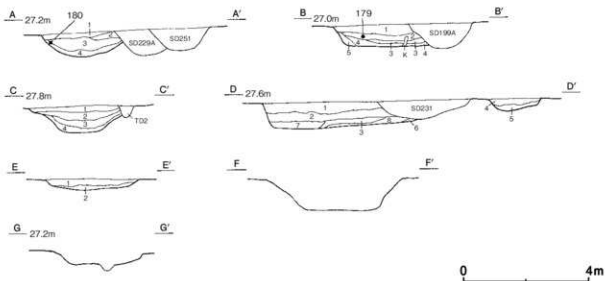
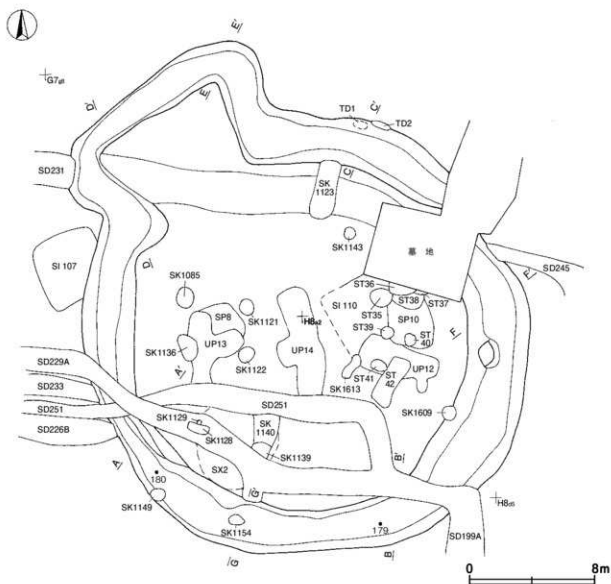
周溝土層解説 (E-E')

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 黒褐色 | ロームブロック中量 |
|-------|---------------------|-------|-----------|

埋葬施設 墳丘を掘り込んでいる土坑のなかで、埋葬施設の可能性があるものを検討したが、埋葬施設と判断できる遺物も検出されていない。第229A・251号溝、第1139・1140号土坑の確認面上で調査されている第2号不明遺構は礎を敷き詰めた土坑状の遺構で、後世の擾乱を受けているため詳細は不明であるが、位置的に埋葬施設の可能性がある。

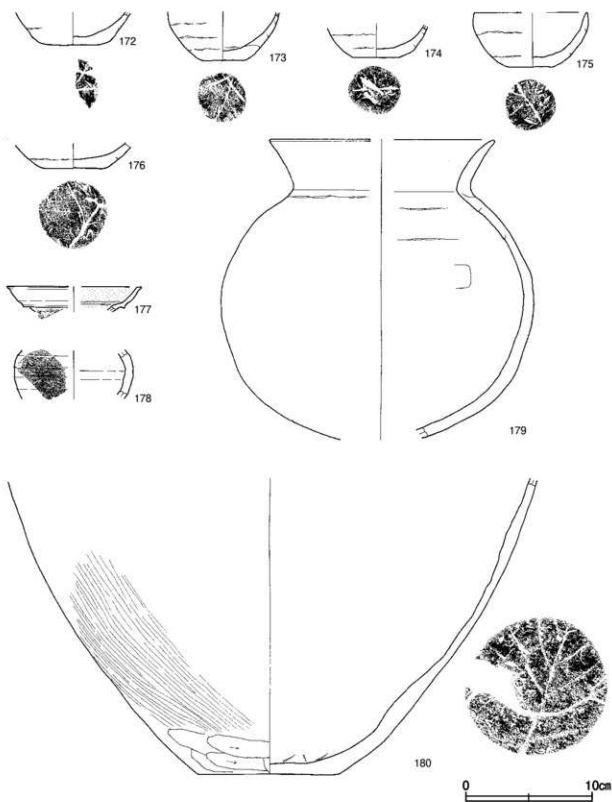
遺物出土状況 土師器片2235点（坏・碗類111、高台付坏3、埴23、器台25、高坏2、鉢3、甕2、甕類2063、瓶3）、須恵器片104点（坏類24、高台付坏2、蓋1、甕4、甕2、甕類71）、縄文土器片469点、弥生土器片54点、土師質土器片33点（皿3、内耳跡28、香炉1、片口鉢1）、灰輪陶器片1点（瓶⁴）、磁器片1点（皿）、瓦片3点（現代）、埴輪片5点（円筒埴輪4、形象埴輪1）、土製品1点（不明）、礫114点が出土している。これらの多量の遺物は、古墳時代前期と中期前半の時期の第107・110号住居跡を掘り込み、さらに中世から近世にかけての遺構に掘り込まれているためであり、土師器片を中心に混在して周溝と削平された墳丘の確認面から出土している。本墳に伴う遺物と考えられる179はB-B'付近、180はA-A'付近の覆土中層からそれぞれ出土している。また、175はF-F'付近の覆土中、172～174・176～178は周溝内の覆土中からそれぞれ出土している。流れ込みと考えられるDP14～DP18とQ24は、周溝のF-F'付近の覆土中から出土している。

所見 周溝内には、周溝内土壌1・2が確認され、周溝内土壌1内には2個体の円筒埴輪を転用した埴輪が確認されている。なお、埴輪や周溝内埋葬施設は群集墳的な古墳群に多く見られる事例で、隣接する上野天神塚古墳を主軸として、本墳と上野定使古墳群、上境作ノ内古墳群などの近隣する古墳群や谷津を挟んで隣接する古墳後期の集落跡である上野陣場遺跡との関連も想定することができる。墳丘を掘り込んでいる土坑群の事例では、かすみがうら市戸崎中山遺跡や土浦市下郷古墳群及び阿見町実穀寺子古墳群などで見られる古墳につくられた中世墓坑群の事例と同類といえる。時期は、埴輪樹立の痕跡が確認できることや重複関係及び出土土

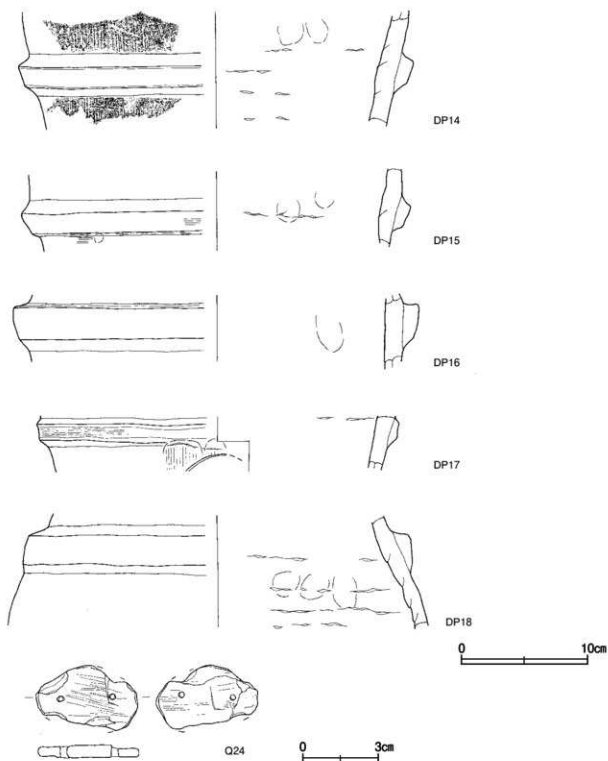


第137图 第1号墳実測図

器から古墳時代後期後半の6世紀後半頃と考えられ、当地域における最終段階の埴輪をもつ前方後円墳と考えられる。



第138図 第1号墳出土遺物実測図1)



第139図 第1号墳出土遺物実測図(2)

第1号墳出土遺物観察表 (第138・139図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
172	土師器	碗	—	(27)	42	長石・雲母	橙	普通	外面輪褶痕を残すナデ 内面丁冴なナデ 底部分雲母	周溝内覆土中	15%
173	土師器	碗	—	(40)	36	長石・雲母	橙	普通	外面輪褶痕を残すナデ 内面丁冴なナデ 底部分雲母	周溝内覆土中	30%
174	土師器	碗	—	(27)	36	長石・雲母	橙	普通	外面輪褶痕を残すナデ 内面丁冴なナデ 底部分雲母	周溝内覆土中	40%

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
175	土師器	椀	[9.0]	4.3	3.5	長石・雲母	橙	普通	外面輪筋痕を残すナテ 内面1帯ナテ 底面ホヤ型	段溝内覆土中	30%
176	土師器	椀	—	(2.1)	4.8	長石・雲母	橙	普通	外面輪筋痕を残すナテ 内面1帯ナテ 底面ホヤ型	段溝内覆土中	10%
177	須恵器	甗	[10.8]	(2.0)	—	砂粒(緻密)	灰	普通	口辺部のみ 外面横ナテ 外面輪面状工具による 底面ホヤ型	段溝内覆土中	
178	須恵器	甗	—	(3.8)	—	砂粒(緻密)	灰	普通	外面に漆木の輪面状工具による底面状 底面ホヤ型	段溝内覆土中	
179	土師器	甗	17.6	23.8	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部のみ 外面横ナテ 外面輪面ハケナテ 外面ホヤ型	段溝内覆土中	80%
180	土師器	甗	—	(23.4)	11.2	長石・石英	にぶい橙	普通	外面輪面ハケナテホヤ型ナテ 外面輪面ハケナテ 外面ホヤ型	段溝内覆土中	10%

番号	器種	径	器高	底径	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
DP14	円筒埴輪	[30.8]	(9.3)	—	1.4	長石・雲母	明赤陶	普通	外面縦ハケ被凸帯貼り付け 内面側面 を残すナテ 輪筋痕 凸帯断面形状	段溝内覆土中	
DP15	円筒埴輪	[29.6]	(6.2)	—	1.2	長石・雲母	明赤陶	普通	外面縦ハケ被凸帯貼り付け後ハケ目 内面側 面を残すナテ 輪筋痕 凸帯断面形状	段溝内覆土中	
DP16	円筒埴輪	[29.2]	(5.2)	—	1.4	長石・雲母	明赤陶	普通	外面縦凸帯貼り付け 内面側面を残す ナテ 凸帯断面形状	段溝内覆土中	
DP17	円筒埴輪	[28.0]	(4.3)	—	1.2	長石・雲母	明赤陶	普通	外面縦ハケ被凸帯貼り付け後ハケ目 内 面ナテ 輪筋痕 凸帯断面形状	段溝内覆土中	
DP18	形埴輪 入替	[33.2]	(9.0)	—	1.3	長石・雲母	明赤陶	普通	外面凸帯貼り付け 凸帯断面三角状 行 部内・外面ナテ 輪筋痕	段溝内覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
Q24	瓦孔門板	(2.6)	4.0	0.5	(6.3)	滑石	表面側面研削	一部剥離・欠損	A-A' 付近 覆土中	70% PL121

(4) 古墳周溝内土壌

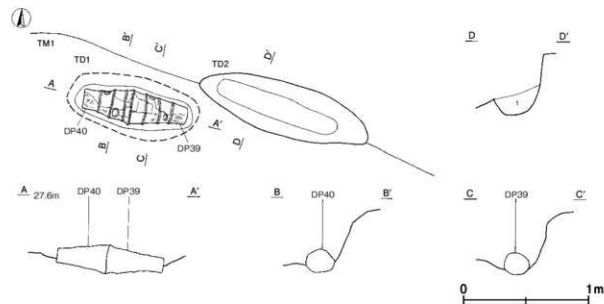
第1号墳周溝内土壌1 (第140・141図)

位置 調査区中央部のG 8 g2区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

確認状況と重複関係 主軸方向は周溝と同じで、第1号墳の周溝に構築されている。

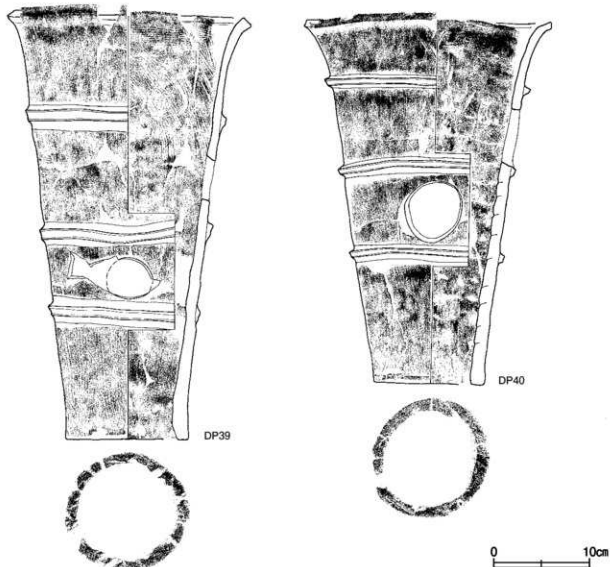
規模と形状 確認できた長径は1.05m、短径は0.49mの長楕円形で、長径方向はN-75°-Wである。深さは周溝の底面から45cmであり、底面は緩やかなU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況 DP39・DP40の2個体の円筒埴輪を利用し、口縁部を合口とした埴輪棺である。



第140図 第1号墳周溝内土壌1・2実測図

所見 周溝の掘り方の軸線と土壁の軸線がほぼ同様であることや、これまでに調査されている埴輪棺の性格から、古墳に埋葬された被葬者と何らかの関係のある人物を追葬した周溝内埋葬施設と考えられる。周溝内埋葬施設の事例は本県では明確ではないが、埴輪棺の事例は県南地区だけでもかすみがうら市大塚古墳群第24号墳（松延古墳群第4号墳）、つくば市北条中台遺跡第61号墳、阿見町実殺寺子古墳群第8号墳内第37号土坑、土浦市高崎山古墳群内の小円墳などで確認されている。時期は、第1号墳が6世紀後半と比定されることから6世紀後半から7世紀初頭と考えられる。



第141図 第1号墳周溝内土壁1出土遺物実測図

第1号墳周溝内土壁1出土遺物観察表（第141図）

番号	器種	径	器高	底径	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
DP39	円筒埴輪	24.3	45.5	13.0	1.3	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	表裏2方向、北厚13cm、内底縁へたひき割付内面を付けた たくり、内面ナメス・たくりナメ割付、凸凹面削いた内底縁	底面	95% PL125
DP40	円筒埴輪	26.0	38.6	11.6	1.6	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	表裏2方向、北厚32cm、内底縁へたひき割付内面を付けた たくり、内面ナメス・たくりナメ割付、凸凹面削いた内底縁	底面	95% PL125

第1号墳周溝内土壁2（第140図）

位置 調査区中央部のG 8 g3区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

確認状況と重複関係 主軸方向は周溝及び第1号周溝内土壌と同じ方向を示し、第1号墳の周溝に構築されている。

規模と形状 長径1.42m、短径0.43mの長楕円形で、長径方向はN-71°-Wである。深さは周溝の底面から48cmで、底面は緩やかなU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層であることと、含有物から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量

所見 周溝の掘り方の軸線と土壌の軸線がほぼ同様であることと、周溝内土壌1と並んで位置していることから、周溝内土壌1の埋葬者同様、古墳被葬者と何らかの関係のある人物を追葬した周溝内埋葬施設と考えられる。時期は、周溝内土壌1と同時期の6世紀後半から7世紀初頭と考えられる。

表6 第1号墳周溝内土壌一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模(m、深さ12cm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
1	G 8 g2	N-75°-W	長楕円形	[1.00]×[0.69]	45	外傾	面状	人為	円筒葺輪2個体(葺輪用)	TMI→本跡
2	G 8 g3	N-71°-W	長楕円形	1.42×0.43	48	外傾	U字状	人為	—	TMI→本跡

(5) 土坑

第622号土坑 (第142図)

位置 調査区北東部のF 9 e3区で、標高26mほどの台地上の緩斜面に位置している。

規模と形状 長径0.76m、短径0.62mの楕円形で、主軸方向はN-36°-Wである。深さは72cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。不規則な堆積状況と含有物から、人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量

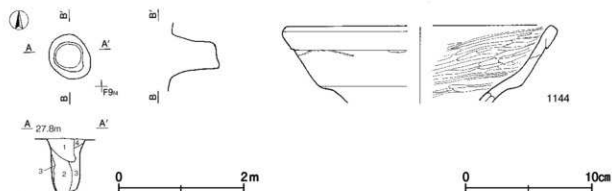
2 暗褐色 ロームブロック多量

3 黒褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片3点(壺1、甕2)が出土している。1144は、覆土中から出土している。

所見 形状と覆土から、柱穴痕または貯蔵穴痕と推測されるが明確ではない。時期は、出土土器から古墳時代中期と考えられる。



第142図 第622号土坑・出土遺物実測図

第622号土坑出土遺物観察表（第142図）

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1144	土師器	壺	(21.0)	(6.1)	—	長石・石英・赤色 炭粉・緑	橙	普通	折り返し1目 1目内部内面ナテ後へつ筋あり 外部輪模痕を残すナテ	覆土中	10%

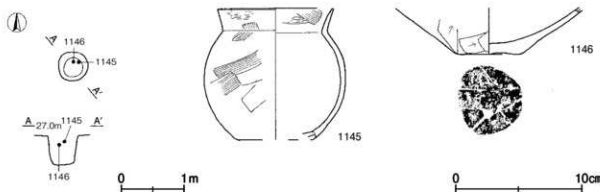
第845号土坑（第143図）

位置 調査区北東部のH10c3区で、標高27mほどの台地上の緩斜面に位置している。

規模と形状 長径0.49m、短径0.48mの円形で、主軸方向はN-0°である。深さは46cm、底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

遺物出土状況 土師器片72点（埴1、甕類71）、縄文土器片1点が出土している。1145・1146は、覆土上層から出土している。

所見 形状と覆土から、貯蔵穴痕と推測される。時期は、出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。



第143図 第845号土坑・出土遺物実測図

第845号土坑出土遺物観察表（第143図）

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1145	土師器	甕	9.1	10.5	(6.2)	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	1目内部内面ハケ目 外面ハケ目と横ナテ 外部内面ナテ 外面ハケ目一筋直線	覆土上層	
1146	土師器	甕	—	(3.7)	5.2	長石・石英・赤色 粒子	靑	普通	底部破片 内面ナテ 外面へつ筋あり	覆土上層	

表7 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径(軸) 方向	平面形	規模(m、深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
622	F 9c3	N-36-W	楕円形	0.76×0.62	72	垂直	平坦	人為	土師器(高杯、甕)	
845	H10c3	N-0°	円形	0.49×0.48	46	垂直	窟状	自然	土師器(埴、甕)	

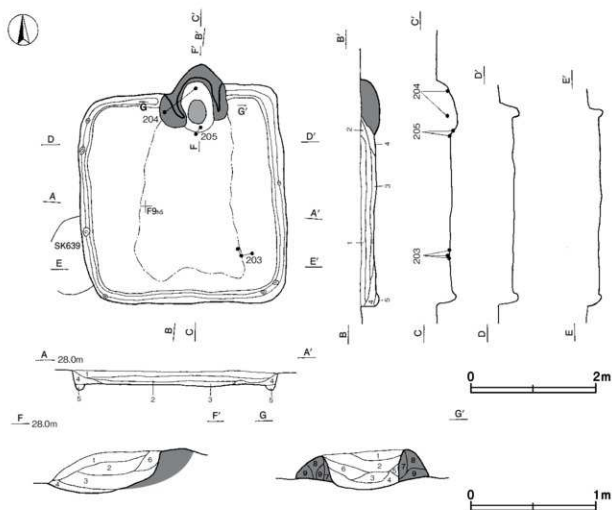
5 奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構は、堅穴住居跡7軒が確認されている。

堅穴住居跡

第29号住居跡（第144・145図）

位置 調査区北東部のF 9g5区で、標高28mほどの台地の緩斜面に位置する。



第144図 第29号住居跡実測図

重複関係 第639号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.48m, 短軸3.27mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。確認された壁高は13~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が壁際を周回し、幅15~22cm, 深さ4~10cmで、断面形はU字状を呈している。壁溝内には、壁柱穴と考えられる長径8~12cmの楕円形の小ピット7か所が確認されている。

竈 北壁中央部に付設されており、天井部は崩落している。焚口部から煙出部まで109cm, 袖部幅は107cmであり、袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を12cmほど楕円形に掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に41cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第2・3・6層が天井部の崩落土層であり、第7~9層が袖部の土層である。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------------------|----------|-----------------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量・炭化粒子微量 | 5 におい赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子中量, ローム粒子微量 |
| 2 暗 赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 黒 褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 3 暗 赤褐色 | 焼土ブロック多量, 砂質粘土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 暗 赤褐色 | 焼土ブロック多量, 砂質粘土ブロック中量 |
| 4 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 暗 赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂質粘土ブロック少量, ローム粒子微量 |
| | | 9 灰 褐色 | 砂質粘土ブロック多量 |

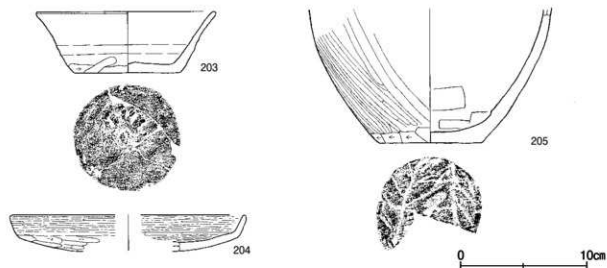
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。第1～4層は粘性が普通の締まりが弱い層である。第5層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|--------|------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子多量 | 4 暗 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | ロームブロック多量、炭化物少量 | 5 黒 色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片101点（坏類2、甕類99）、須恵器片7点（坏類5、蓋2）が出土している。203は南東部の床面、204は竈袖部と室内からそれぞれ出土している。また205は、焚口付近から出土している。これらを含めた出土土器はほとんどが破片であり、住居の廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片72点、礫57点も出土している。

所見 時期は、本跡に伴うと考えられる203・205から、8世紀中葉から後半と考えられる。



第145図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土観察表（第145図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
203	須恵器	坏	141	49	8.0	石英・雲母	灰黄	良好	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り 体部手摺子付北ヘラ削り	床面	65% PL105
204	土師器	甕	[184]	(28)	—	長石・雲母・赤色 粒子	にぶい赤褐色	普通	口沿外面ヘラ削き 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ削き	竈袖部・室内	40%
205	土師器	甕	—	(108)	8.0	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい黒	普通	口沿ヘラ削き 内面ヘラ削り ナデ 体 部手摺子付削り 底部木製敷	焚口付近	30%

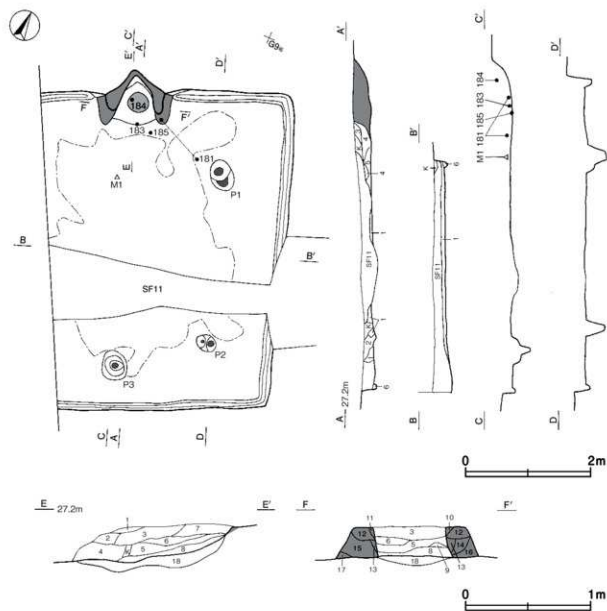
第55号住居跡（第146・147図）

位置 調査区北東部のG9区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。西側は調査区域外に延びている。

重複関係 第11号道路跡に中央部を東西に掘り込まれている。

規模と形状 遺存状況が不良のため、確認できたのは南北軸5.1m、東西軸は3.7mであり、方形と推定され、主方向はN-20°-Wである。確認された壁高は14～29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が壁際を周回し、全周していたものと推測でき、幅9～17cm、深さ7～11cmで、断面形はU字状を呈している。



第146図 第55号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されて、天井部は崩落している。規模は焚口から煙出部まで88cmで、袖幅は118cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を6～9cm掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に35cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中第3・5～7層が天井部の崩落土層、第10～17層が袖部の土層、第18層が掘り方の土層である。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|----------|--------------------------|
| 1 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 10 極暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 褐色 | 砂質粘土ブロック多量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量 | 12 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 13 極暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 | 14 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量 | 15 暗赤褐色 | 炭化物・焼土粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子少量 | 16 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 17 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 |
| 9 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 18 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量 |

ビット 3か所。P1・P2の深さは35cm・37cmで、配置から主柱穴と考えられる。共に掘り方に柱のあたり痕が2か所ずつ確認され、柱の立て替えが行われたと考えられる。P3は深さ35cmで南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるビットと考えられる。

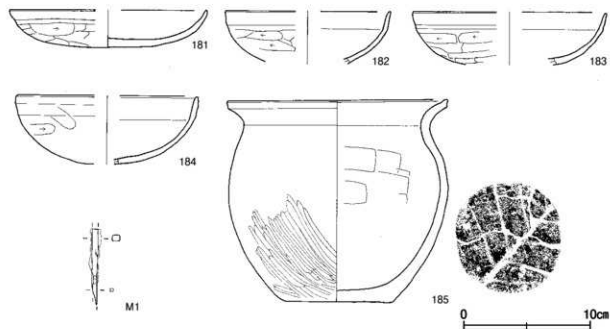
覆土 6層に分層される。不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	5 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片407点（坏類87、甕類320）、須恵器片8点（坏類4、甕類4）、鉄製品1点（紡錘車軸カ）が出土している。181は北東部の床面と袖部を中心に出土した破片が接合したものである。182は覆土中、183は焚口と覆土中、184は竈中層と覆土中から出土した破片がそれぞれ接合したものであり、185は竈の焚口を中心に出土した破片が接合したものである。M1は焚口付近の覆土下層から出土している。多くが破片であることから、住居の廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片66点、弥生土器片4点、攪乱で混入した瓦片1点、陶器片3点、鉄片3点、鏝22点も出土している。

所見 攪乱により混入した遺物は、近世以降も機能していた第11号道路に掘り込まれているためと考えられ、流れ込んだ縄文土器片は床下の掘り方からも4点ほど確認されている。時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。



第147図 第55号住居跡出土遺物実測図

第55号住居跡出土遺物観察表（第147図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
181	土師器	坏	[15.8]	3.0	—	長石・石英・赤色 粘土・白色粒子	にぶい澄	普通	口辺部内・外面横ナデ 内面ナデ	体部外面へラ削り	床面・袖部	20% 二次焼成
182	土師器	坏	[13.1]	(3.3)	—	長石・石英・赤色 粘土	黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 内面ナデ	体部外面へラ削り	覆土中	20%
183	土師器	坏	[15.1]	(4.2)	—	長石・雲母・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 内面ナデ	体部外面へラ削り	焚口・覆土中	20%

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
184	土師器	杯	[14.4]	(5.4)	—	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口辺部内・外面積ナデ 外部外面ヘラ削り 内面ナデ	壺中層・覆土中	20%
185	土師器	壺	17.6	16.2	8.8	長石・石英・赤色 高砂・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面積ナデ 内部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 底部本葉削	壺1	90% PL105

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	朝鮮半島*	(6.1)	(0.6)	0.5	(7.1)	鉄	両端部欠損 断面長方形	覆土下層	

第112号住居跡（第148図）

位置 調査区南東部のK7f7区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.52m、短軸4.07mの長方形で、主軸方向はN-15°-Wである。確認された壁高は9～29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南壁から北壁に向かって踏み固められている。壁溝が全周し、幅10～24cm、深さ5～7cmで断面形はU字状を呈している。床面上には、焼土の広がり6か所が確認されている。

竈 北壁中央部に付設され、天井部は土圧でつぶれるように崩落している。規模は焚口部から煙出部まで130cm、袖部幅は146cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面とはほぼ同じ高さで、火床面は火熱により赤変硬化している。焚口部の周辺には灰・炭化物の広がり火床面にはわずかながら炭化材が確認されている。煙道部は壁外に10cm掘り込み、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第1・2層が天井部の崩落土層であり、第7～11層が袖部の土層である。

竈土層解説

1 黒 褐色 焼土粒子・砂質粘土中量	8 暗 褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量	9 にぶい黄褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量
3 黒 褐色 焼土中量、炭化粒子少量	10 暗 褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
4 黒 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量	11 砂質粘土中量、炭化粒子微量
5 黒 褐色 焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量	11 にぶい黄褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量
6 暗 褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	12 暗 赤 褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量
7 暗 赤 褐色 焼土ブロック多量、砂質粘土粒子少量	13 暗 褐色 ロームブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量

ピット 7か所。P1～P4は深さ21～47cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ13cmで、南壁際の中央部に位置し、配置から出入り口施設にかかわるピットと考えられる。竈の焚口部に位置しているP6は深さ8cmで、覆土に多量の炭化物を含んでいることから、灰溜めの可能性が考えられる。P1に隣接しているP7は深さ6cmで、性格は不明である。

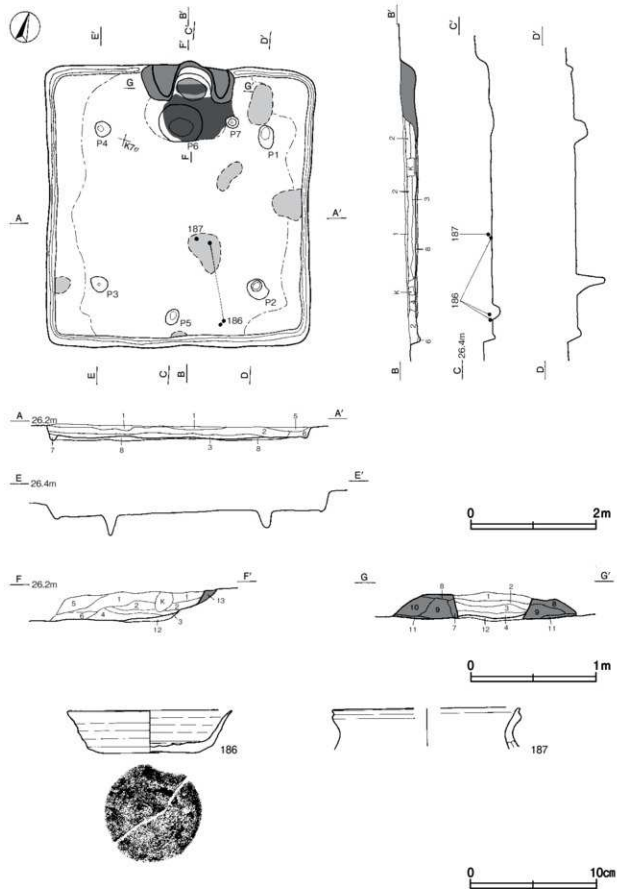
覆土 7層に分層される。粘土ブロックを含み不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。第8層は貼床の構築層である。

土層解説

1 黒 褐色 ローム粒子少量	6 暗 褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック微量
2 褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量	7 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 暗 褐色 ローム粒子少量、粘土粒子微量	8 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
4 暗 褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子微量	
5 黒 褐色 ローム粒子少量	

遺物出土状況 土師器片75点（坏類22、甕類53）、須恵器片3点（坏）が、覆土下層から床面にかけて散在するように出土している。186は南壁際の覆土下層と中央部の床面から出土した破片で接合したものであり、187は中央部の覆土下層から出土している。出土状況から、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。また、床面には6か所焼土の広がり確認されおり、床面が焼けていないが、焼失住居と想定される。その他、流れ込んだ縄文土器片30点、弥生土器片2点、礫22点も細片で出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。



第148图 第112号住居跡・出土遺物実測図

第112号住居跡出土遺物観察表 (第148図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
186	須臾器	環	13.2	3.4	7.8	長石・石英	靑灰	普通	底部回転へう切り旋多方向のへう削り	覆土下層・床面	70%
187	土師器	甕	[150]	(3.1)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面ナデ	覆土下層	

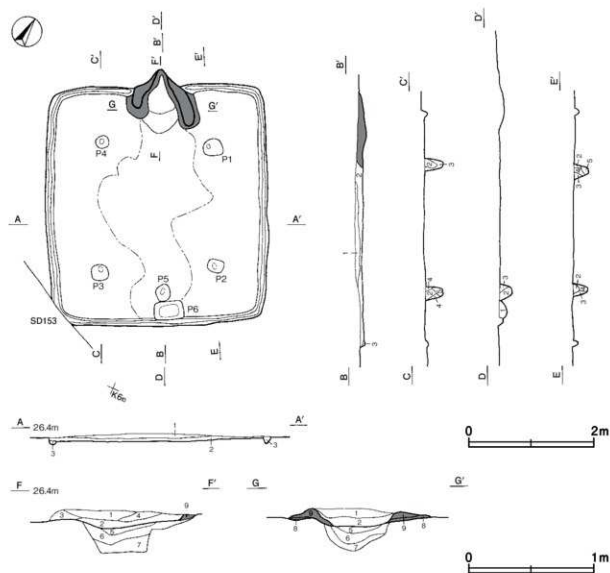
第115号住居跡 (第149図)

位置 調査区東部のK 6 e9区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第153号溝に南部を掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.84m、短軸3.54mの方形で、主軸方向はN-24°-Wである。壁高は1~6cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南東壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が全周し、幅10~15cm、深さ3~9cmで断面形はU字状を呈している。



第149図 第115号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設され、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで102cmで、袖部幅は118cmである。袖部は床面とほぼ同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を8cm掘りくぼめ、火床面はあまり赤変していない。煙道部は壁外に28cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。竈土層中の第1・2層が天井部の崩落土層であり、第8・9層が袖部の土層である。第3層は竈が流出した層であり、第5～7層が火床部の掘り方の土層である。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック多量	6 暗褐色	ロームブロック少量、砂質粘土粒子微量
2 黒褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量	7 黒褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック中量、砂質粘土粒子少量	8 暗褐色	砂質粘土粒子微量
4 灰褐色	砂質粘土ブロック多量	9 暗褐色	ロームブロック中量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 極暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量		

ピット 6か所。P1～P4は深さ25～31cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ24cmで南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。P5と南壁の間に位置しているP6は、長方形で深さ11cmである。貯蔵穴の可能性も考えられるが、性格不明である。

ピット土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量		

覆土 3層に分層される。層厚が5～12cmではあるが、レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。第3層は壁溝の覆土である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片5点（堯類）が竈内及び床面から出土しているが、細片のため図示困難である。その他、流れ込んだ縄文土器片2点、礫9点と、確認面から土師質土器片1点が出土している。

所見 確認された土器は極めて少量で、竈も火床面・燃焼部の焼土もほとんどないことから、短期間しか使用されなかった住居と考えられ、近接する第116号住居跡と同様な状況である。時期は、出土土器と住居跡の形態から8世紀後半と考えられる。

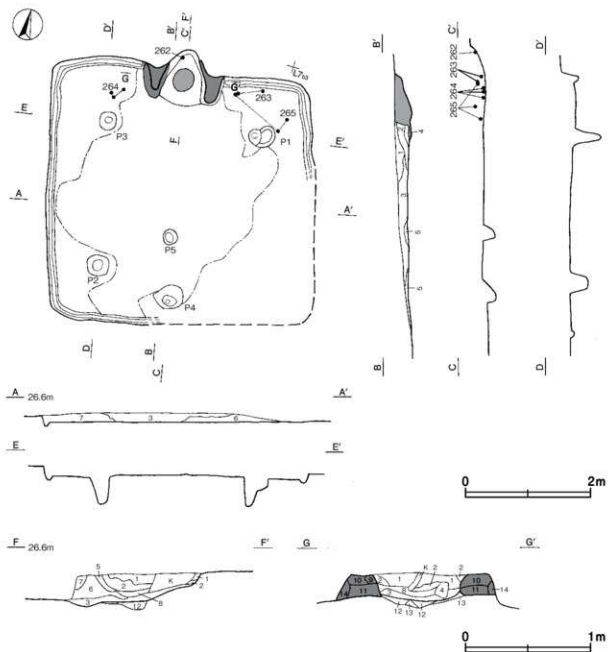
第116号住居跡（第150・151図）

位置 調査区南東部のL7b2区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 南東部が耕作による削平を受けているが、長軸4.25m、短軸4.20mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は2～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が、全周していたと考えられ、規模は幅12～18cm、深さ4～7cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設され、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで90cmで、袖部幅は126cmである。袖部は地山であるローム土を凸状に掘り残して基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を5cmに掘りくぼめ、火床面は火を受けてわずかに赤変している。煙道部は壁外に35cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。竈土層中の第1・2層が天井部の崩落土層であり、第9～11・14層が袖部の土層である。第12・13層は火床部の掘り方の土層である。



第150図 第116号住居跡実測図

甌土層解説

1 暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	炭化物少量、焼土粒子・粘土粒子微量
2 褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量	9 黒褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量
3 黒褐色	炭化物中量、焼土ブロック少量	10 暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量
4 暗褐色	粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11 にいり黄褐色	粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	粘土粒子・炭化粒子微量	12 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、粘土粒子微量
6 暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	13 にいり黄褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
7 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	14 黒褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック微量

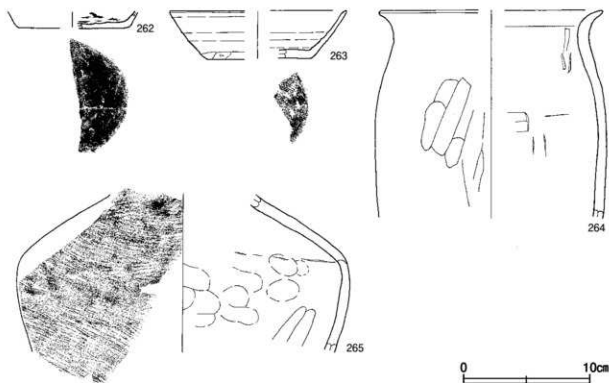
ピット 5か所。P1～P3は深さ30～48cmで、配置から主柱穴と考えられる。P1は下部端に別の底面が確認でき、補助柱穴の可能性が推測される。配置的に南東部に主柱穴があったと考えられるが、削平が深いため確認されていない。P4は深さ18cmで南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。P5は深さ20cmで中央部の南寄りに位置しているが、性格不明である。

覆土 7層に分層される。不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・砂粒少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子中量、砂粒微量
2 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒暗褐色	ローム粒子少量	7 暗褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片44点（環類2、甕類42）、須恵器片28点（環類19、甕類9）が出土している。262は竈煙道部付近、264は北西部の床面からそれぞれ破片で出土している。263・265は北東部から北壁際にかけての覆土中層から破片で出土しており、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片11点、弥生土器片2点、礫10点のほか、攪乱によって混入した土師質土器片1点、陶器片3点も出土している。
所見 近接する第115号住居跡と同時期で、同じ集団を形成していたものと推測される。時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第151図 第116号住居跡出土遺物実測図

第116号住居跡出土遺物観察表（第151図）

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
262	須恵器	環	—	(1.3)	(8.8)	長石・雲母・赤色粒子	にぶい・濁	普通	裏面回転へり切り後一方のへり面内面ナデ	煙道部付近	15% 内面厚付き
263	須恵器	環	(13.9)	3.8	(8.0)	長石・石英・雲母	灰白	普通	裏面回転へり切り後一方のへり面外縁下端手持ちへり面ナデ	覆土中層	20%
264	土師器	甕	(17.3)	(16.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい・赤濁	普通	口辺部内外面ナデ 体部外面へりナデ 内面へりナデ ナデ	床面	20%
265	須恵器	甕	—	(12.6)	—	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部外面縁位の平行叩きナデ 器底面 輪指痕	内面当て具痕	15%

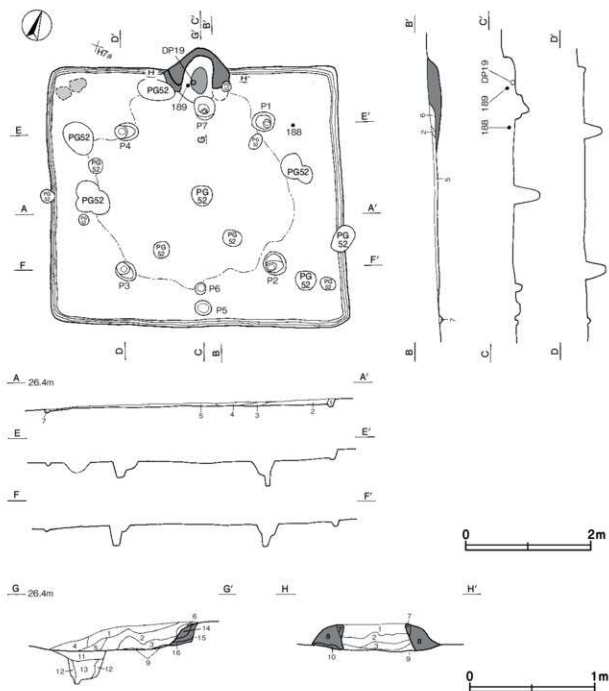
第118号住居跡 (第152～154図)

位置 調査区中央部のH7J8区で、標高26mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第52号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.67m、短軸4.07mの長方形で、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は高い部分は14cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、中央部を中心に踏み固められている。北西コーナー部の壁際には、薄い焼土の広がりが見られ、2か所確認されているが、その理由については不明である。壁溝は、幅5～12cm、深さ4～5cmで、断面形はU字状を呈している。



第152図 第118号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設され、天井部は崩落している。規模は焚き口から煙出部まで89cmで、袖部幅は117cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に32cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第1・2層が天井部の崩落土層で、第7・8・10層が袖部の土層である。第4・5層は竈の流出層であり、第11・12・14～16層は掘り方の土層である。第13層は掻き出した灰が堆積した層と考えられる。

竈土層解説

1 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量	9 黒褐色	炭化物・炭化粒子中量、焼土粒子少量
2 暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量	10 にぶい黄褐色	ローム粒子微量
3 麻暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子少量	11 黒褐色	焼土ブロック少量
4 暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	12 黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	13 黒褐色	灰中量、ローム粒子・焼土ブロック微量
6 暗赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量	14 明赤褐色	焼土ブロック多量
7 褐色	焼土ブロック多量	15 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
8 暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	16 黒褐色	焼土粒子多量、炭化物中量、ローム粒子少量

ピット 7か所。P1～P4は深さ27～39cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5・P6は深さ9cm・12cmで、南壁際の中央部に隣接して位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。P7は深さ26cmで、竈焚き口部の床面下に確認されている。覆土から灰溜めと考えられる。

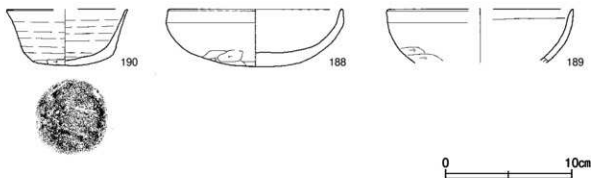
覆土 7層に分層される。上面が削平され、層厚が4cm以下と薄いため、堆積状況の判断は困難であるが、ローム粒子が傾斜する南に向かって流れ込むように堆積していることから、自然堆積と考えられる。第6層は竈の流出土層で、第7層が壁溝の覆土である。

土層解説

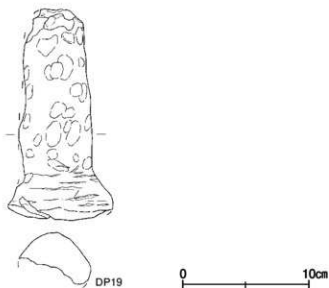
1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
3 暗褐色	ローム粒子中量	7 暗褐色	ローム粒子少量
4 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土器器片150点（坏類117、甕類33）、須恵器片2点（坏、甕）、土製品3点（支脚）、粘土塊1点。竈の覆土中及び床面を中心に散在するように出土している。188は北東部の覆土下層、189は竈内、190は南東部の覆土中からそれぞれで出土している。DP19は火床面上の横位で出土した破片と覆土中から出土した小片が接合したものである。これらは出土状況から、廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片5点、礫4点も出土している。

所見 近接する第55号住居跡と主軸方向及び住居跡の形態が類似し、時期もほぼ同時期であることから、同じ集団を形成していたものと考えられる。時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第153図 第118号住居跡出土遺物実測図(1)



第154図 第118号住居跡出土遺物実測図2)

第118号住居跡出土遺物観察表 (第153・154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
188	土師器	坏	14.0	4.6	—	長石・雲母・赤色 粘土	灰陶	普通	口辺部内・外面横ナデ リナデ 内面ナデ	覆土下層	95% PL105
189	土師器	坏	[14.8]	(4.2)	—	長石・雲母・赤色 粘土	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ リナデ 内面ナデ	壺内	20%
190	須恵器	坏	[9.8]	4.5	5.5	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部回転へら切り後回転へら削り 体部下端ナデへら削り	覆土中	75% PL105

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP19	支脚	116.9	8.2	(4.0)	305.0	土製	表面ナデ 節頭痕 下部一部欠損 3個体の破片で復元	火床面	60%

第121号住居跡 (第155・156図)

位置 調査区中央部のH 8 h7区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。南東部は調査区域外に延びている。

規模と形状 長軸3.59m、短軸3.27mの方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は6～16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、P 5から竈に向かって中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設され、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで74cmで、袖部幅は105cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を4cm楕円形に掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外に15cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。竈土層中の第2～4層が天井部の崩落土層であり、第6～8層が袖部の土層である。第1層は竈の流出層である。

竈土層解説

1 黒 褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黒 褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	6 褐色	砂質粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量	7 黒 褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8 暗 褐色	ローム粒子中量、砂質粘土粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ9～33cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ16cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

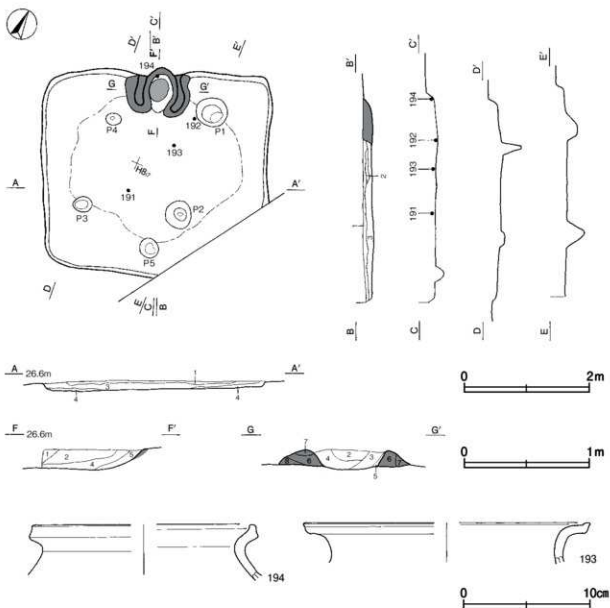
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片74点（坏類15、莞類59）、須恵器片5点（坏類4、莞類1）が出土している。191は中央部の覆土下層から破片で、192は北東部の竈寄りの床面、193は中央部の竈寄りの覆土下層、194は竈内の煙出部付近からそれぞれ出土している。これらは、廃絶時に194は遺棄、そのほかは廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片10点、弥生土器片1点、礫2点も出土している。

所見 近接している第29号住居跡と同じ集団と推測され、時期は出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第155図 第121号住居跡・出土遺物実測図

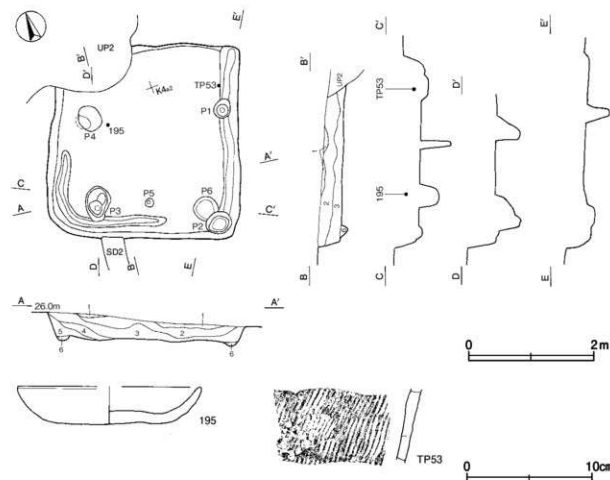
ピット 6か所。P1～P4は深さ40～62cmで、配置的に主柱穴と考えられる。P3は下端34cmの掘り方も確認されており、立て替えの可能性が考えられる。南西壁寄りの中央に位置しているP5は深さ50cmで、配置から出入りに施設伴うピットと考えられる。P2に隣接して位置するP6は深さ10cmで、性格は不明である。
覆土 6層に分層される。上層の第1・2層はレンズ状の堆積状況を呈しているが、遺物を多く含み、締まりも強いことから人為堆積と考えられる。第3層以下は壁際から土砂が流れ込むように堆積していることから、自然堆積と考えられる。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 層 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 層 褐色 炭化粒子微量 |
| 2 層 褐色 ロームブロック少量 | 5 層 褐色 ローム粒子少量 |
| 3 層 褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 6 層 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片37点（坏類4、皿1、甕類32）、須恵器4点（坏1、甕類3）が覆土中層から下層にかけて出土している。195・TP53は、覆土中層から出土したものである。この他、流れ込んだ縄文土器片25点や、擾乱により混入した土師質土器片5点（内耳鍋）、鏝2点も覆土上層を中心に小片で出土している。

所見 覆土上層の人為堆積の層から出土している遺物は、中世の遺構と比定される第2号地下式坑や第2号溝に掘り込まれた際に混入したものと考えられる。竈や炉の痕跡が確認できなかったことから中世の竪穴遺構の可能性が考えられるが、床面から土師器の甕体部片が2点出土していることや出土土器と重複関係から推察して、平安時代後半の住居と考えられる。



第158図 第4号住居跡・出土遺物実測図

第4号住居跡出土物観察表 (第158図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
195	土師器	皿	[141]	3.0	9.0	赤色顆子	橙	普通	内・外面ナデ 底部へつ切り後ナデ	覆土中層	25%
TP53	須恵器	甕	—	6.6	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	体部外面斜位の平行叩き 内面ナデ 紐痕、内・外面一部手成	覆土中層	

第15号住居跡 (第159～161図)

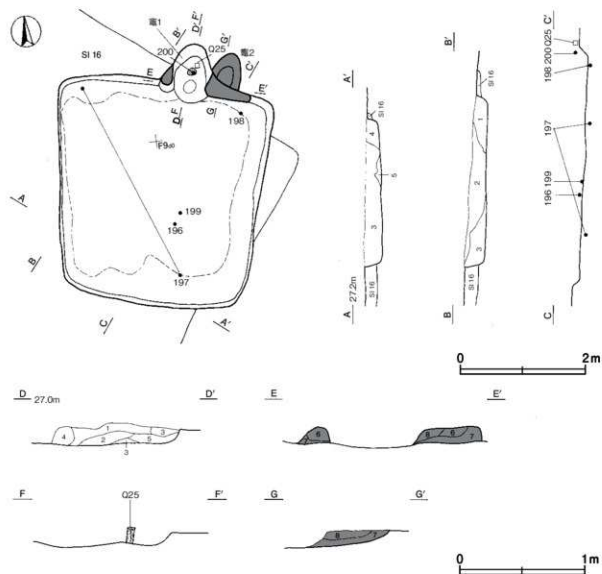
位置 調査区北東部のF9d0I区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第16号住居跡の南東部を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.55m、短軸3.23mの方形で、主軸方向はN-15°-Eである。確認された壁高は10～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦ではあるが、やや北に向かって緩斜し、壁際を除いて踏み固められている。

竈 2か所。竈1は北壁中央部のやや北東コーナー部寄りに付設されており、天井部は崩落している。焚口部



第159図 第15号住居跡実測図

から煙出部まで94cmで、袖部幅は95cmである。袖部は煙道部を壁外に深く掘り込み、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を浅く掘りくぼめ、火床面にはわずかに焼土が確認される。煙道部は壁外に60cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈2は竈1の右袖部の掘り方の調査時に検出され、壁外に55cm掘り込んでいる。掘り方の埋土だけが確認され、竈の作り替えが行われたと考えられる。竈土層中の第4層が竈1の崩落した天井部の一部と考えられ、第7・8層が竈2の掘り方の埋土である。

竈1・2土層解説 (共通)

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・砂粒少量 | 5 にがい赤褐色 砂粒中量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック多量、砂粒中量 | 6 灰褐色 砂質粘土ブロック中量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物・砂粒少量 | 7 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 灰褐色 粘土ブロック・砂粒多量 | 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |

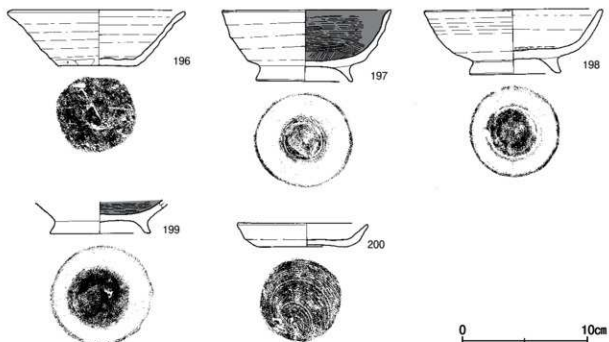
覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況と遺物の出土状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

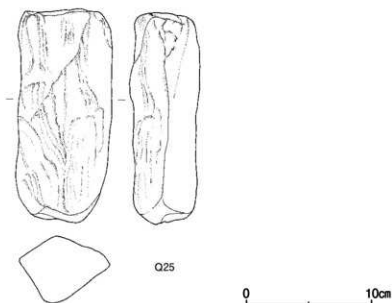
- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片218点（坏類12、高台付坏19、皿4、甕類183）、須恵器片4点（坏）、石製品1点（支脚）のほか、縄文土器片60点、礫22点も出土している。このうち、土師器片89点、縄文土器43点、礫22点はいずれも覆土上層を中心とした覆土中から出土している。196は、中央部の覆土下層から出土している。197は北壁際と南部床面から出土した破片を中心に接合したものであり、198は北壁際の床面と覆土中から出土した破片を接合したものである。199は中央部の床面から出土し、200は竈内からほぼ正位の状態でも出土している。Q25は、火床面上に立位で出土している。これらは、住居の廃絶に伴って遺棄または廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。



第160図 第15号住居跡出土遺物実測図(1)



第161図 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

第15号住居跡出土遺物観察表 (第160・161図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
196	須恵器	坏	14.0	4.5	6.2	長石・石英・雲母	にぶい澄	普通	底部回転ヘラ廻り後一方のヘラ廻り 体部下端手持ちヘラ廻り	覆土下層	80% PL105
197	土師器	高台付杯	13.5	5.7	7.8	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい澄	普通	底部回転ヘラ廻り後高台廻り付け ヘラ	床面	90% PL105
198	土師器	高台付杯	14.1	5.1	7.2	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘラ廻り後高台廻り付け 内面ナゲ	床面	60% PL105
199	土師器	高台付杯	—	(2.7)	8.0	長石・石英・雲母	にぶい靑	普通	底部回転ヘラ廻り後高台廻り付け ヘラ	床面	15%
200	土師器	皿	10.4	1.9	6.9	長石・石英・雲母	にぶい澄	普通	底部糸切り 内・外面ナゲ	窠内	65% PL105

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	支脚	16.9	7.6	5.6	966.6	雲母片岩	焼熱により一部赤変 剥離痕	火床面	

第22号住居跡 (第162図)

位置 調査区北東部のF10j6区で、標高26mほど台地の緩斜面に位置している。

確認状況 東側が斜面のため、東側半分が削平されている状況であり、遺存する壁溝や床面及びピットの配列から住居跡と認定した。

規模と形状 遺存する壁や窠の痕跡から、長軸3.62m、短軸3.34mの方形と推定され、主軸方向はN-91°-Eである。確認された壁は6cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存する部分はやや東に緩斜していたものと推測され、中央部の西壁寄りに硬化面が確認されている。壁溝は確認された壁際を巡っており、幅11~18cm、深さ3cmで断面形はU字状を呈している。

窠 東壁の中央部に構築材と考えられる砂粒と火床部の焼土が確認されている。全体の規模については不明である。

ピット 4か所。P1~P3は深さ11~15cmで、配置から支柱穴と考えられる。P4は深さ13cmで、西壁際に位置し主軸線上にあることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

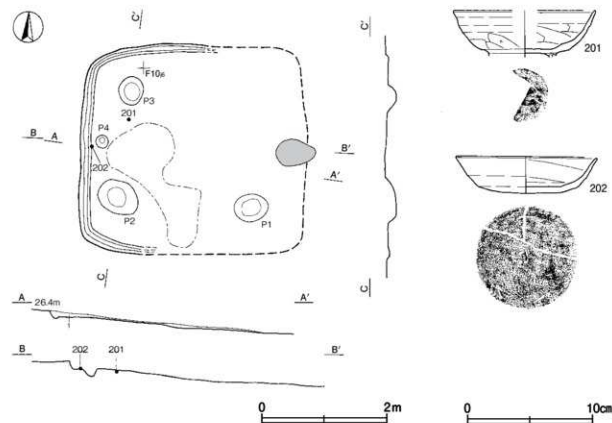
覆土 単一層である。層厚が薄く、床面が一部露出した状況で検出されたため、堆積状況は判然としない。

土層解説

1 層 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片31点（坏類2、高台付坏3、皿3、甕類23）、須恵器片1点（甕）が出土している。201は西部の床面、202は西壁際の床面からそれぞれ破片で出土しており、住居の廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器細片26点、礫27点も出土している。

所見 当遺跡では、東遷を有する住居が出現する時期は9世紀後葉以降であり、出土土器などから、時期は10世紀中葉と考えられる。



第162図 第22号住居跡・出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表（第162図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
201	土師器	高台付坏	11.1A	13.7	—	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転へつ切り縁高台輪り付け 外部下縁へつ割り、内縁へラナデ	体部 床面	40%
202	土師器	甕	11.1A	2.9	7.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転へつ切り縁、方向のへつ割り 内面ナデ	床面	90% PL105

第38号住居跡（第163～165図）

位置 調査区北東部のG10b2区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 北部で第37号住居跡、東部で第96号住居跡を掘り込んでいる。

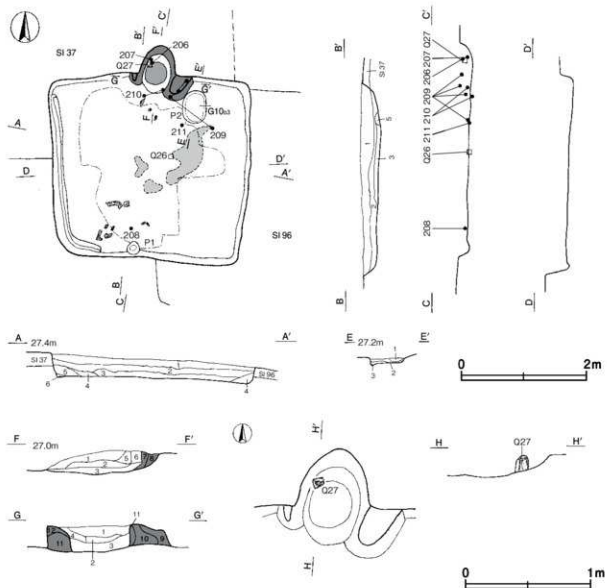
規模と形状 長軸3.15m、短軸2.95mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。確認された壁高は13～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が西壁際に確認され、幅15～20cm、深さ5cmで断面形はU字状を呈している。中央部の床面に焼土の広がり、竈前に散在する炭化材が確認されている。

竈 北壁中央部に付設されており、天井部は崩落している。焚き口から煙出部まで76cm、袖部幅は103cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を楕円形に12cm掘りくぼめ、火床部は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に43cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第1・2・6層が天井部の崩落土層、第9～12層が袖部の土層で、火床面直上から、石製支脚が立位の状態でも出土している。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子多量、ロームブロック中量 | 7 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子中量、炭化物少量 |
| 2 暗赤褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子多量、焼土ブロック中量、炭化物少量 | 8 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子中量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化物少量 | 9 暗赤褐色 砂質粘土粒子多量、焼土粒子中量 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子多量 | 10 灰褐色 砂質粘土粒子多量 |
| 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量、砂粒微量 | 11 暗赤褐色 焼土粒子多量、ロームブロック・砂質粘土粒子少量 |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物・砂粒少量 | 12 褐色 ロームブロック多量 |



第163図 第38号住居跡実測図

ピット 2か所。P1は深さ8cmで、主軸線上に位置することから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。P2は、長径53cm、短径40cm、深さ10cmで、竈東側に位置して覆土に灰や焼土が含まれて締まりがないことから、灰溜めピットと考えられる。

ピット2土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|-------|------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量 | 3 暗褐色 | 灰少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化材・焼土粒子微量 | | |

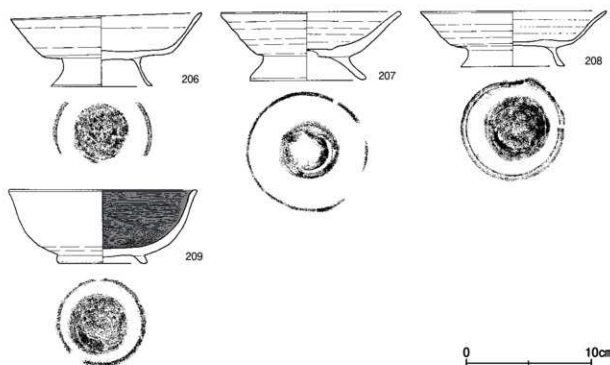
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈しているが、含有物から人為堆積と考えられる。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

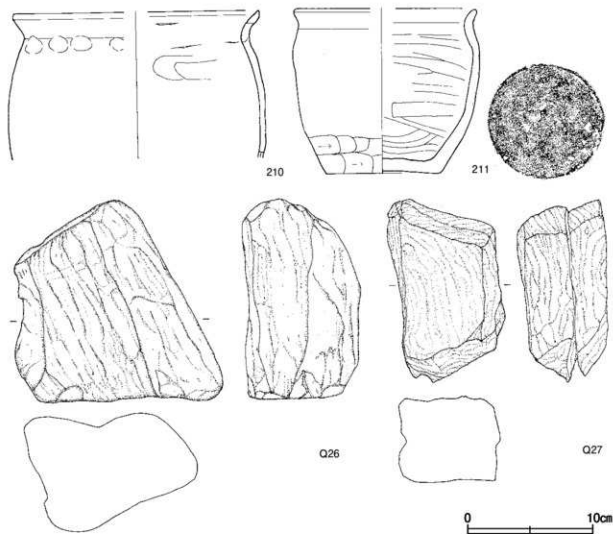
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化物少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物中量 | 5 暗褐色 | 炭化物多量、ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片132点（坏3、高台付坏10、高台付椀2、甕類117）、石製品2点（台石、支脚）が出土している。206・207は、207の上に206が重なった状態の逆位で火床面から出土している。209は竈内から出土した破片を中心に接合したものであり、210は竈前の床面と焚き口から出土した破片を接合したものである。また、208は南壁際の覆土下層、211はP2付近の床面からそれぞれ出土している。Q26は中央部の床面から焼けて出土し、Q27は竈支脚で、火床面に立位で出土している。これらの遺物は、竈内または竈手前を中心に出土していることから、遺棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片49点、土師器片4点（器台2、高坏2）、礫20点も出土している。

所見 覆土中に焼土・炭化物を多量に含み、床面上には焼土塊や散在する炭化材が確認されていることから、焼失住居と考えられる。また、竈内から高台付坏が逆位で重なって出土し、竈が故意につぶされている状況から、竈祭祀の可能性も推察される。住居の廃絶後間もなく焼失したものと推測され、時期は出土土器から10世紀中葉と考えられる。



第164図 第38号住居跡出土遺物実測図(1)



第165図 第38号住居跡出土遺物実測図(2)

第38号住居跡出土遺物観察表 (第164・165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
206	土師器	高台付杯	15.1	5.8	8.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘウ切り後高台貼り付け	火床面	80% PL106
207	土師器	高台付杯	14.4	5.5	9.3	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘウ切り後高台貼り付け	火床面	80% PL106
208	土師器	高台付杯	14.8	4.4	8.2	長石・石英・雲母・赤褐色	橙	普通	底部回転ヘウ切り後高台貼り付け	覆土下層	60% PL106
209	土師器	高台付杯	15.0	5.8	7.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘウ切り後高台貼り付け 内面ヘウ巻き	室内	60% PL106
210	土師器	甕	[19.5]	(11.7)	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口部内・外面縞ナデ 面部面頭圧着 体部外縞ナデ 内面ヘラナデ等ナデ 輪割痕	床面・突11部	10%
211	土師器	甕	[14.4]	13.1	9.2	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい橙	普通	口部内・外面縞ナデ 体部外縞ナデ 口部ヘウ張り 内面ヘラナデ ナデ	床面	75% PL106

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q26	台石	16.0	16.6	9.4	2998.1	雲母片岩	焼熱により赤変 剥離痕	床面	
Q27	支脚	14.5	9.4	7.2	1316.9	雲母片岩	焼熱により一部赤変 2分割に分離 表面剥離痕	火床面	

第45号住居跡 (第166～168図)

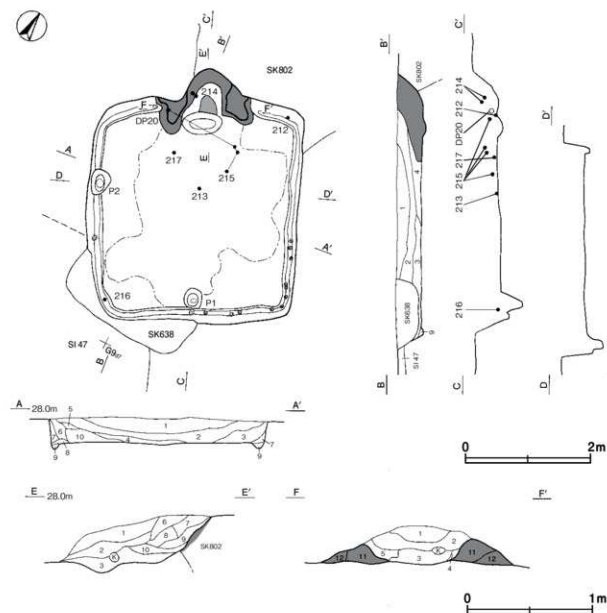
位置 調査区北東部のG9c7区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 南部で第47号住居跡、北部で第802号土坑を掘り込み、南部で第638号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.63m、短軸3.38mの方形で、主軸方向はN-22°-Wである。確認された壁高は30～40cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 は平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が壁際を周回し、幅17～24cm、深さ10cmで断面形はU字状を呈している。壁溝内には、壁柱穴と考えられる長径4～8cmの楕円形の小ピットが13か所が確認されている。

竈 北壁中央部に付設されて、天井部は土圧でつぶれて崩落している。焚口部から煙出部まで107cm、袖部幅は150cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を3cm掘りくぼめており、火床面はそれほど赤変していない。火床面手前に長径65cm、短径36cm、深さ10cmのピットが確認されており、ローム粒子と灰・焼土・炭化粒子が混入した覆土が検出されて、灰を掻き出したものが、火床部を作り替えたものか不明である。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第1・2・7・8層が天井部の崩落土層であり、第11・12層が袖部の土層である。



第166図 第45号住居跡実測図

覆土層解説

1 黒 褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒 褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 にぶい褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8 にぶい褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	9 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 暗 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	10 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 暗 褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11 暗 褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
6 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	12 暗 褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 2か所。P1は深さ33cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設にかかわるピットと考えられる。P2は深さ26cmで、性格不明である。

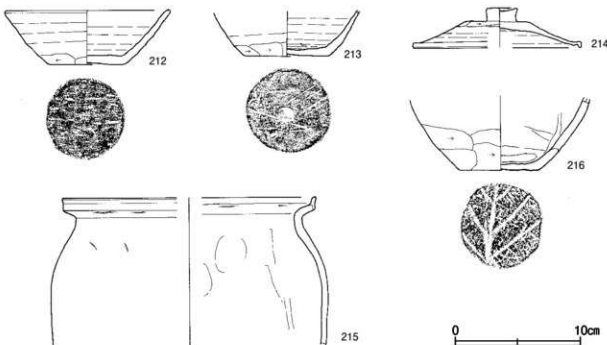
覆土 10層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈しているが、遺物の堆積状況から人為堆積と考えられる。第4層は竈材の流出した層で、第9層は壁溝の覆土である。

土層解説

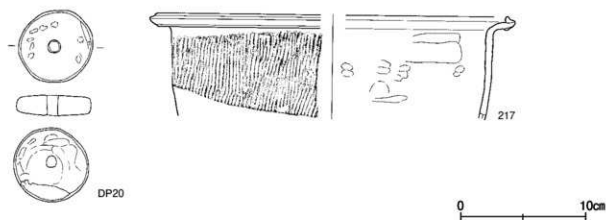
1 黒 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒 暗褐色	ローム粒子少量（縞まりは普通）
2 黒 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗 褐色	ローム粒子中量
3 黒 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	8 褐色	ロームブロック少量
4 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	9 黒 暗褐色	ローム粒子少量（縞まりは弱い）
5 暗 褐色	ロームブロック少量	10 黒 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片332点（坏類9、甕類323）、須恵器片137点（坏類65、蓋8、甕類59、甕5）が出土している。212は北東コーナー部壁際の床面、213は中央部の床面からそれぞれ出土している。214は竈内、215は竈と北東部にかけての覆土中・下層、216は南コーナー部壁際の床面、217は中央部の竈寄りの覆土下層からそれぞれ破片で出土し、DP20は竈の西側の壁際の覆土下層から出土している。これらは、床面や覆土下層から出土し、ほとんどが破片であることから、住居の廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片156点、弥生土器片5点、礎6点も出土している。

所見 廃絶時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第167図 第45号住居跡出土遺物実測図(1)



第168図 第45号住居跡出土遺物実測図(2)

第45号住居跡出土遺物観察表 (第167・168図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
212	須恵器	坏	13.2	4.4	6.2	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転へう切り縦一方のへう割り 体部下縁手持ちへう割り	床面	95% PL106
213	須恵器	坏	—	(3.6)	6.8	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転へう切り縦多方向のへう割り 体部下縁手持ちへう割り	床面	60%
214	須恵器	蓋	[13.4]	3.2	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部左回りのへう割り	壺内	40%
215	土師器	甕	[30.2]	(11.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部輪絞痕 体部外面ナデ 体部内面 へうナデ ナデ 指造痕	覆土中・下層	15%
216	土師器	甕	—	(5.8)	6.3	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	体部外面へう割り 内面へうナデ ナデ 輪絞痕 底部分木炭痕	床面	15%
217	須恵器	甕	[28.2]	(8.2)	—	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	体部外面縦位の平行叩き 内面ナデ 指 造痕	覆土下層	

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP20	紡錘車	5.9	0.9	1.6	62.3	土製	全面ナデ 一部欠損	覆土下層	PL122

第50号住居跡 (第169図)

位置 調査区北東部のG 9 f5区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第51号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.85m、短軸2.53mの長方形で、主軸方向はN-10°-Wである。確認された壁高は12~23cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が確認された壁際を巡り、幅12~22cm、深さ4cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設されている。第51号住居に掘り込まれていたため、火床部・焚口部と袖部構築材の砂質粘土が確認されただけである。確認できた規模は焚口部から煙出部まで66cmで、袖部幅は85cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築していたと考えられ、床面を火床部とし、火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外に37cm掘り込まれている。確認された竈土層は、含有物の構成を観察すると第51号住居の構築時に複乱を受けた可能性も考えられる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、砂粒微量

ピット 深さ21cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

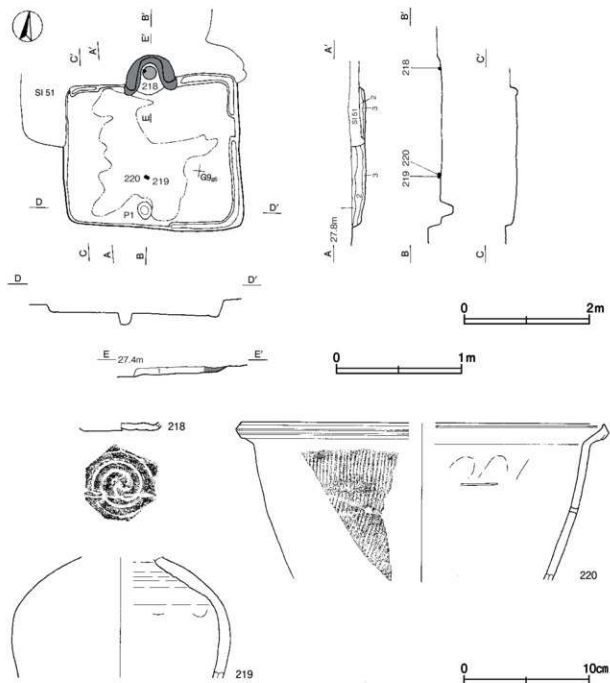
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片252点(甕類, 須恵器片36点(坏類17, 蓋4, 瓶1, 甕類14)が出土している。218は甕の火床面, 219・220は中央部の床面からそれぞれ破片で出土している。その他, 流れ込んだ縄文土器の細片66点, 土師器片2点(高坏, 器台), 礫14点も覆土上層から出土している。

所見 甕を含めたほぼ半分が第51号住居跡の床下から確認され, 出土した土器もほとんどが細片である。時期は, 出土土器から9世紀後半と考えられる。



第169図 第50号住居跡・出土遺物実測図

第50号住居跡出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
218	須恵器	環	—	(0.6)	[60]	長石・石英	灰青	普通	底部回転へう切り後多方向のへう削り	火床面	
219	須恵器	長頸瓶	—	(9.6)	—	長石	灰	良好	外面自然釉	床面	10%
220	須恵器	壺	[280]	(32.4)	—	長石・石英・雲母	灰黒	良好	体部外面位の平行印き 土が滑らか	西面子方 箱蓋	床面

第51号住居跡 (第170・171図)

位置 調査区北東部のG 9 15区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第50号住居跡を南部で掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.05m、短軸3.00mの方形で、主軸方向はN-82°-Eである。確認された壁高は7~21cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、西壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が壁際を周回し、幅12~22cm、深さ5cmほどで断面形はU字状を呈している。西壁際の溝内には、壁柱穴と考えられる長径10~22cmで楕円形のピット4か所が確認されている。

竈 2か所。ともに東壁中央部に付設されている。作り替えた竈1は天井部が崩落しており、焚口部から煙出部まで102cm、袖部幅は95cmである。右袖部は作り替え前の竈2の掘り方に焼土混じりの砂質粘土を埋め込んで基部を構築し、その上に砂質粘土を重ねて構築している。一方左袖部は、ローム土を袖部の基部として砂質粘土を重ねて構築している。火床部は床面を20cm掘りくぼめ、埋土(竈土層中の第10・11層)して構築している。火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外に62cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第3・4層が天井部の崩落土層であり、第12~14層が袖部の土層である。竈2は、竈1の左袖部の構築材を外したところ、煙道部の掘り方が確認され、規模は焚口部から煙出部まで95cmで、袖部幅は100cmほどと推定される。竈土層中第15~17層が掘り方の埋土と考えられる。火床面は確認されないが、煙道部は壁外に65cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈1土層解説

1 黒 暗 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒 黒 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	8 黒 暗 褐色	炭化粒子少量、焼土粒子微量
3 暗 褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	9 黒 黒 色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
4 黒暗赤褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	10 黒暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量	11 暗 黒 色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
6 暗 赤 褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量		

竈2土層解説

12 黒 褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量	15 黒暗赤褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
13 暗 赤 褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	16 暗 黒 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
14 灰 褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子微量	17 黒 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 8か所。P1~P4は深さ7~24cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5~P8は深さ5~10cmで、西壁際の溝内に位置していることから、壁柱穴と考えられる。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

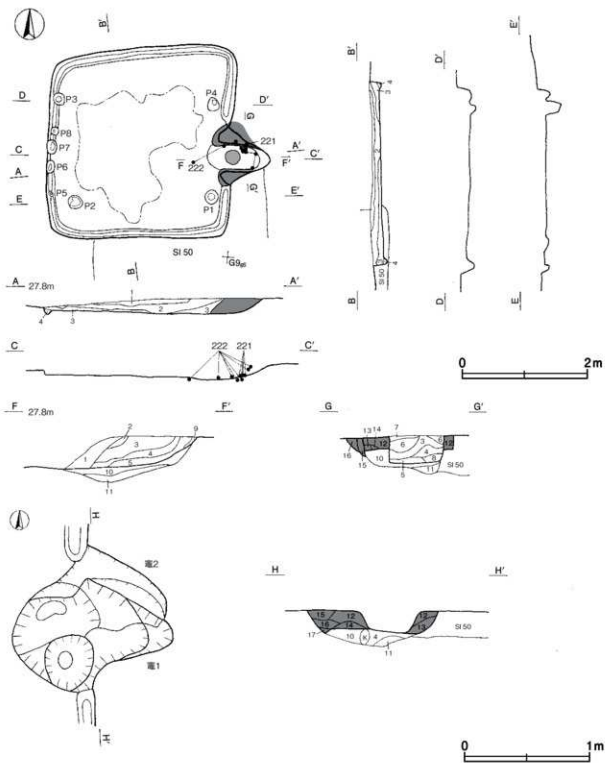
土層解説

1 黒 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量	3 暗 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量
2 暗 褐色	ローム粒子中量、炭化物微量	4 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

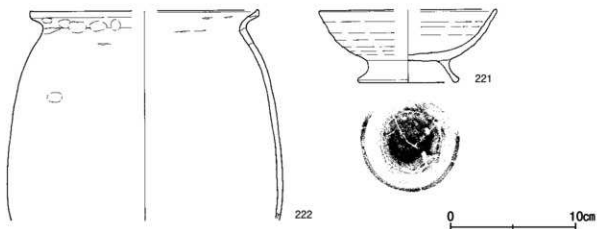
遺物出土状況 土師器片602点(環頸27, 甕頸575)、須恵器片42点(環頸35, 甕頸7)が出土している。出土した土器片の多くは復元できるものがほとんどなく、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。221・222は、竈

内及び竈手前の床面から出土した破片を接合したものである。その他、流れ込んだ縄文土器片131点、礫31点も出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉考えられる。



第170図 第51号住居跡実測図



第171図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表（第171図）

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
221	土師器	高台付鉢	[14.1]	5.8	7.5	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り機高台貼り付け	竈内	45%
222	土師器	壺	[18.2]	16.7	—	長石・石英・雲母	におい地	普通	頸部外面指頭圧痕 体底外面ナデ 指頭 体底内面ナデ 輪指痕	竈内・床面	10%

第52号住居跡（第172・173図）

位置 調査区北東部のG 9 g4区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第53号住居跡を北西部で掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.50m、短軸3.45mの方形で、主軸方向はN-9°-Wである。確認された壁高は3～15cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が壁際を全周しており、幅12～19cm、深さ4～9cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設され、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで117cmで、袖部幅は102cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を楕円形に12cm掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に55cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第2・3・8～10層が天井部の崩落土層であり、第12～17層が袖部の土層である。

竈土層解説

1 暗赤褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	12 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量
3 極暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	13 極暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子微量	14 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
5 極暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	15 暗赤褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	16 暗褐色	砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量
7 黒褐色	炭化粒子少量、焼土粒子微量	17 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
8 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量		
9 極暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量		
10 暗赤褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ17～22cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ17cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

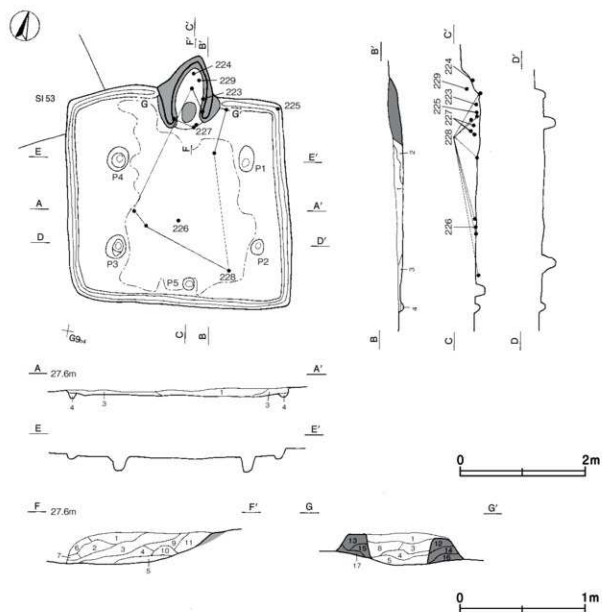
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。第2層は竈材の流出層である。

土層解説

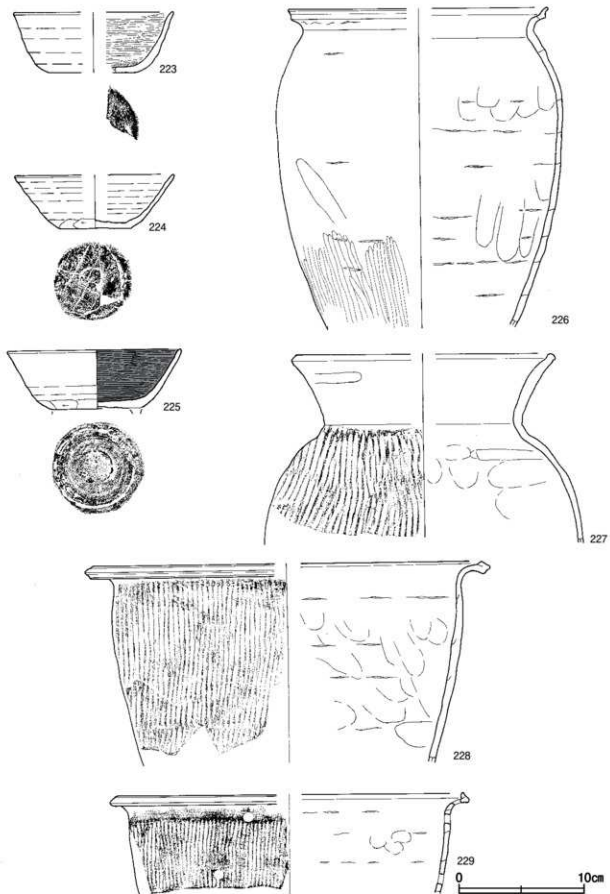
- | | | | |
|-------|---------------------|------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片297点(坏類53、高台付坏12、甕類232)、須恵器片114点(坏類13、甕類64、瓶37)が出土している。223・224・229は、竈内から出土している。225は北東コーナー部壁際の覆土下層、226は中央部床面から出土している。227は焚口部、228は竈内及び竈周辺と中央部の床面からそれぞれ破片で出土している。これらは床面や竈内から出土しているがほとんどが破片であり、住居の廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片45点、礫55点も覆土上層を中心に出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第172図 第52号住居跡実測図



第173图 第52号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡出土遺物観察表 (第173図)

番号	種類	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
223	土師器	坏	[12.8]	4.8	[7.2]	長石・石英・雲母	に灰・褐	普通	底部回転へう切り後一方のへう切り 内面へう磨き	竈内	25%
224	須恵器	坏	[12.8]	4.3	5.8	長石・石英・雲母	灰褐	普通	底部回転へう切り後一方のへう切り 修部 へう磨き付ちのみ削り	竈内	45%
225	土師器	高台付坏	13.8	(4.7)	—	長石・雲母・赤色 粒子	に灰・橙	普通	底部回転へう切り後高台磨り付け 高台部欠 損 色部で磨り跡へう磨り 内面へう磨き	覆土下層	95% PL106
226	土師器	甕	(20.8)	(25.5)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内面編み目ナメ 底部磨き付ナメナ 付へう磨き 内面へう磨きナメ 片外面編み 目ナメ	床面	35%
227	須恵器	甕	[20.1]	(15.4)	—	長石・石英・雲母	灰黄	普通	外部外面編みの平行印キ 内面ヘラナゲ ナメ 指痕痕	甕1部	30%
228	須恵器	甕	[32.4]	(16.0)	—	長石・石英・雲母	灰白	普通	外部外面編みの平行印キ 内面ナメ 指 痕痕 輪紋痕	竈内・床面	30%
229	須恵器	甕	[27.8]	(8.0)	—	長石・石英・雲母	暗褐	普通	外部外面編みの平行印キ 内面ナメ 指 痕痕 輪紋痕 土中噴孔	竈内	PL106

第54号住居跡 (第174図)

位置 調査区北東部のG9h6区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第650号土坑を北部で掘り込み、第31号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.83m、短軸2.67mの方形で、主軸方向はN-86°-Eである。確認された壁高は12～23cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、西壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が壁際を周回し、幅14～22cm、深さ5cmで断面形はU字状を呈している。

竈 東壁中央部に付設されており、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで84cm、袖部幅は105cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし、ローム土と砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面とはほぼ同じ高さで、火床部は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に35cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第3・4層が天井部の崩落土層であり、第7・8層が袖部の土層である。

竈土層解説

1	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗赤褐色	ローム粒子中量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量	8	暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
4	暗赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量			
5	黒暗赤褐色	炭化粒子少量、焼土粒子微量			

ピット 2か所。南壁際の中央部に位置しているP1・P2は深さ16cm・11cmで、主軸線上にはないが、規模的に出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

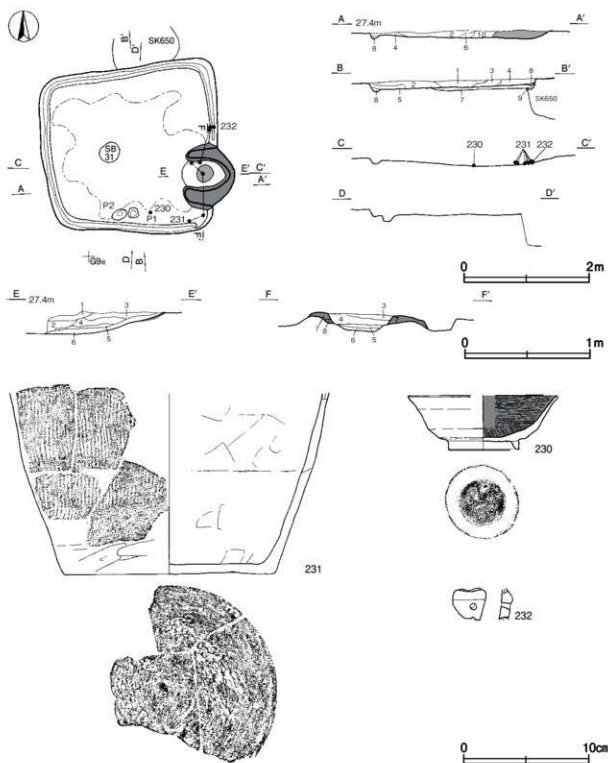
覆土 10層に分層される。不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。第7層は貼床の構築層である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子少量
4	暗褐色	ロームブロック中量	9	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子少量	10	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量

遺物出土状況 土師器片72点(坏類7、高台付坏3、甕類62)、須恵器片44点(坏類9、甕類35)が出土している。230は南壁際の床面から出土し、231は竈内と竈周辺の覆土下層から出土した破片が接合したものである。232は、東壁際の床面から出土した焼成後の穿孔痕が確認された破片である。これらを含め、ほとんどが破片で散在するように出土し、腐蝕に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、遺構確認面から覆土上層にかけて流れ込んだ縄文土器細片67点、礫6点も出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。



第174図 第54号住居跡・出土遺物実測図

第54号住居跡出土遺物観察表 (第174図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
230	土師器	高台付杯	[11.9]	4.4	5.5	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り縁高石張り付け 内面ヘラ磨き	覆上下層	60% PL106
231	須恵器	葉	—	(14.4)	16.8	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面縦筋の平行明込 下位ヘラ磨り 内面ヘラナデ ナデ 輪磨肌	覆上下層	20%
232	土師器	穿孔土器片	—	(2.6)	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	葉体部片 ø 孔径0.5cm	床面	

第56号住居跡 (第175・176図)

位置 調査区北東部のG9h4区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。遺構の大半は調査区域外に延びている。

規模と形状 確認できたのは南北軸は2.15m、東西軸は2.75mで、ほぼ方形と推定され、主軸方向はN-4°-Wである。確認された壁高は3~8cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 確認できた部分は平坦で、P1の周辺にわずかに硬化面が確認されている。壁溝が北東コーナー部を除いて確認された壁際を巡っており、幅18~32cm、深さ6~12cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設されたものと推定される。上面は既に削平された状態で、右袖部から焚口部までは調査区域外に延びている。確認できた部分から推定すると、焚口部から煙出部まで130cm、袖幅は160cmほどである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部を15cm掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。竈土層中の第2・5層が天井部の崩落土層であり、第4層が袖部の土層である。

竈土層解説

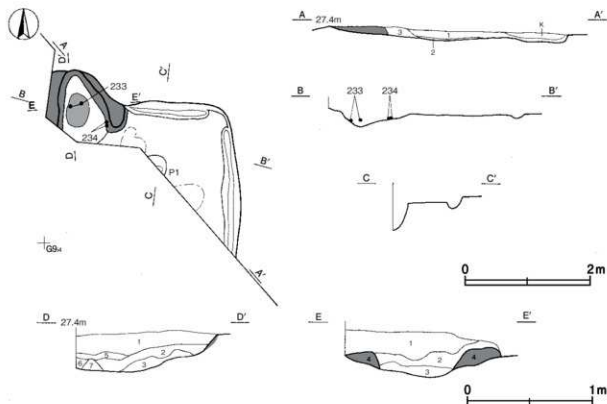
- | | | | |
|--------|--|--------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量(結まりは強い、区域外の部分の硬化面) | 4 暗褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| | | 7 暗赤褐色 | 砂質粘土少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット P1は深さ44cmで、配置と規模から主柱穴の1つと考えられる。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

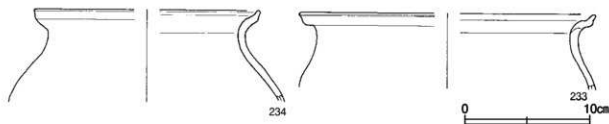
- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | | |



第175図 第56号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片122点（坏類2，変類120），須恵器片34点（坏類16，蓋6，変類12）が，竈の周辺を中心に出土している。233・234ともに竈内から出土し，これらは住居の廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他，流れ込んだ縄文土器片4点，弥生土器片1点，礫3点も出土している。

所見 遺構の大半が調査区域外に延びているため，調査できたのは竈を含む北東部だけである。時期は，当遺跡の住居跡の形態と出土土器から9世紀後半と考えられる。



第176図 第56号住居跡出土遺物実測図

第56号住居跡出土遺物観察表（第175・176図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
233	土師器	変	[26]	(60)	—	長石・石英・赤色 粘土	明赤陶	普通	口辺部内・外面積ナデ 輪襷痕	竈内	
234	土師器	変	[180]	(73)	—	長石・石英・雲母	明赤陶	普通	口辺部内・外面積ナデ 縁部内・外面ナデ	竈内	

第58A号住居跡（第177・178図）

位置 調査区北東部のH 9 b7区で，標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

重複関係 第58B号住居を拡張した住居である。

規模と形状 南部にかけて削平されている。遺存する壁から長軸4.30m，短軸4.20mの方形で，主軸方向はN-3°-Eである。確認された壁高は3～5cmで，外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で，削平されてはいるが，中央部から竈にかけて硬化面が確認されている。壁溝が確認された壁際を周回し，全周していたと推測される。規模は幅10～17cm，深さ4～6cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部の北西コーナー部寄りに付設されており，天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで133cmで，袖部幅は130cmである。袖部は床面を火床部の掘り方と同じく掘り込み，砂質粘土で構築している。火床部は床面を14cm掘りくぼめ，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道は壁外に75cm掘り込まれ，火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第1～3層が天井部の崩落土層で，第7～9層が掘り方の土層，第10～15層が袖部の土層である。

竈土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量	7	極暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	8	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
3	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量	9	暗褐色	ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
4	極暗赤褐色	焼土ブロック中量，炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量	10	極暗褐色	砂質粘土粒子中量，ロームブロック微量
5	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11	黒褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子微量
6	暗赤褐色	焼土ブロック中量，炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量	12	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
			13	暗褐色	ロームブロック中量，砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
			14	極暗赤褐色	焼土ブロック中量，ローム粒子少量，砂質粘土粒子微量
			15	黒褐色	砂質粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

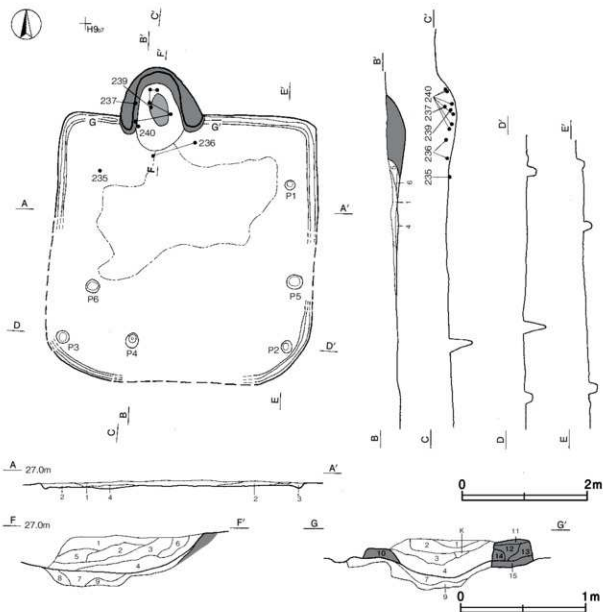
ビット 6か所。P1～P3は深さ12～16cmで、配置から支柱穴と考えられる。P4は深さ36cmで南壁際のはは中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるビットと考えられる。P5とP6はともに深さ8cmで、位置と規模的に補助柱穴の可能性が考えられる。

覆土 6層に分層される。層厚が薄く判断が困難であるが、壁際から土砂が流れ込むように堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 麻褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |

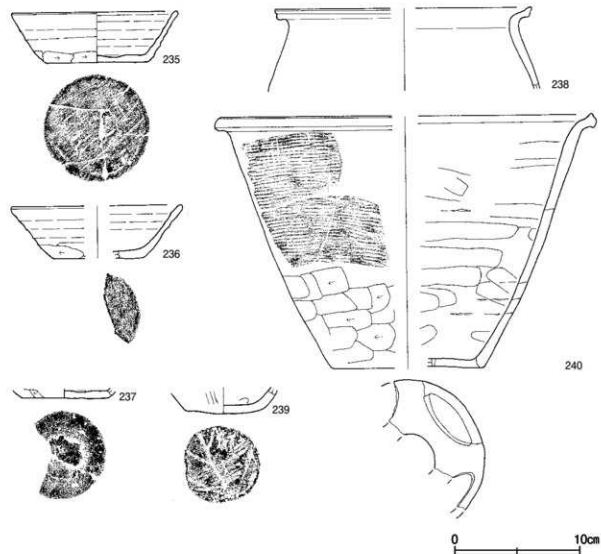
遺物出土状況 土師器片148点（坏類11、甕類137）、須恵器片93点（坏類47、甕類29、瓶17）が出土している。235は、北西部の床面直上から正位で出土している。236は竈前の覆土下層、237は竈の左袖部内、238は竈内からそれぞれ出土している。239・240は竈火床面から出土した破片が接合したものである。これらは出土状況から



第177図 第58A号住居跡実測図

ら、廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片46点、弥生土器片2点、礫19点も遺構確認面から覆土中層を中心に出土している。

所見 床面の精査中に、新たに拡張前の住居の壁溝が確認されたことから、拡張後の住居と確認した。時期差については、比較する遺物が出土していないため詳細は不明であるが、竈と北西コーナー部の壁を共有していることから、あまりないと想定される。時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第178図 第58A号住居跡出土遺物実測図

第58A号住居跡出土遺物観察表(第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
235	須恵器	平	[31]	4.1	8.0	長石・石英・雲母	灰黄陶	普通	底部回転へう切り後一方のへう割り	床面	90% PL106	
236	須恵器	平	[134]	4.2	[7.0]	長石・石英・雲母・地鉄	灰黄陶	普通	底部回転へう切り後多方向のへう割り 体部下端を持ちへう割り	覆土下層	60%	
237	須恵器	平	—	(0.9)	6.8	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転へう切り後一方のへう割り 体部下端を持ちへう割り	竈袖部	10%	
238	土師器	変	[204]	(6.5)	—	石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ	竈内		
239	土師器	変	—	(2.0)	6.0	長石・石英・雲母	橙	普通	内面ナデ 外面薄減	底部木製板	火床面	
240	須恵器	平	[295]	20.1	[12.0]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面縦筋の平行印き 内面へうナデ ナデ	下位へう割り 輪縁部	火床面	30%

第58B号住居跡 (第179図)

位置 調査区北東部のH9b7区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

確認状況 第58A号住居の床面の精査中に新たに壁溝と柱穴が確認されたため、住居を拡張する前の住居と認定し、第58B号住居跡とした。

規模と形状 長軸3.08m、短軸2.85mの方形で、主軸方向はN-1°-Eである。壁高は2~5cmで、外傾して立ち上がっている。

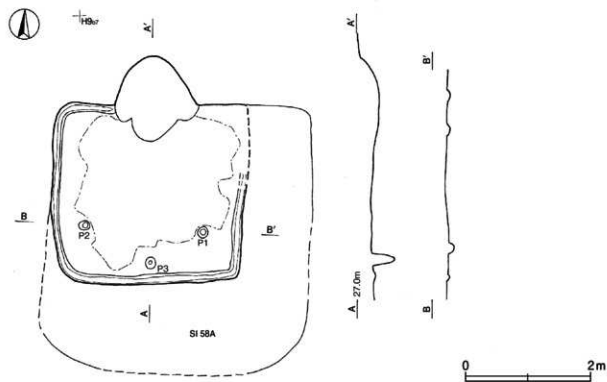
床 ほほ平坦で、全体的に踏み固められている。壁溝は削平のため北東部の一部で確認されていないが、全周していたと推測される。規模は幅12~18cm、深さ4~6cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設されている。第58A号住居の竈と同一とらえられ、規模と構築状況は同じである。

ピット 3か所。P1・P2は深さ7cm・12cmで、配置から柱穴と考えられる。P3は深さ36cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。

覆土 第58A号住居の床面の硬化面を精査中に検出されているため、覆土は確認されていない。

所見 第58A号住居跡との時期差は、遺物が出土していないため断定はできないが、竈と北西コーナー部の壁を共有していることから、あまり差はないと考えられる。時期は、重複関係から第58A号住居以前の9世紀前半と考えられる。



第179図 第58B号住居跡実測図

第62号住居跡 (第180・181図)

位置 調査区北東部のG10j3区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

規模と形状 長軸3.0m、短軸2.1mの長方形で、主軸方向はN-87°-Eである。壁高は4~7cmで、緩斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、出入り口の付近がよく踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されており、天井部及び袖部の大部分は上面から攪乱を受けている。焚口部から煙出口まで86cmで、袖部幅は133cmである。袖部は地山を台形状に残し基部とし、砂質粘土を用いて構築したと推定される。火床部は床面と同じ高さとし、火床面は火を受けてわずかに赤変している。煙道部は壁外に56cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 2 暗 赤 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 深さ11cmで、主軸線上の西壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

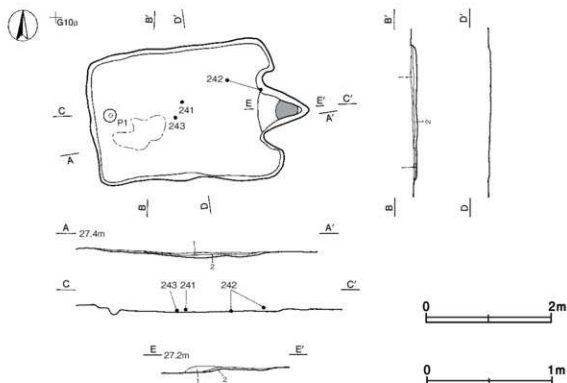
覆土 2層に分層される。層厚が厚い部分で8cmと薄いため、堆積状況の判断は困難である。

土層解説

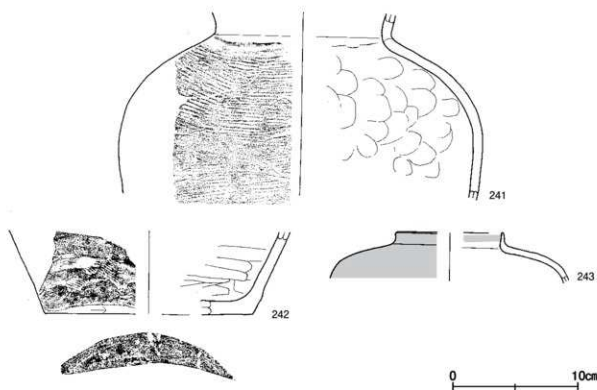
- 1 暗 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・砂粒微量 2 暗 褐色 ローム粒子中量、砂粒微量

遺物出土状況 土師器片25点(堯類)、須恵器片6点(坏3、甕3)、灰輪陶器片1点(短頸壺)が出土している。241・243は中央部の覆土下層と床面、242は左袖部と北東部の床面からそれぞれ出土している。遺存状況が不良のため出土した土器はすべて破片であり、これらが遺棄または廃棄されたものかは判然としない。その他、流れ込んだ縄文土器片7点、礫5点も出土している。

所見 出土遺物が少量で、床面と火床部もそれほど使い込んだ痕跡がないことから、短期間しか使用されなかった住居と想定される。時期は、出土土器と住居跡の形態から9世紀後葉と考えられる。



第180図 第62号住居跡実測図



第181図 第62号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡出土遺物観察表（第181図）

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
241	須恵器	甕	—	(14.7)	—	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面横位の平行印き 内面当て具取 縁埋肌	礎土下層	15%
242	須恵器	甕	—	(6.7)	(16.8)	長石・石英	灰	普通	体部外面下位へラ削り 内面ナデ	床面	
243	灰輪陶器	短頸壺	(8.6)	(3.9)	—	石英・赤色粒子・ 灰粒	灰黄	普通	口辺部内・外面と体部外面にオリブ黄 の釉薬	床面	

第65号住居跡（第182図）

位置 調査区北東部のH10d4区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.30m、短軸3.78mの長方形で、主軸方向はN-109°-Eである。確認された壁高は2cmで、立ち上がりは判然としない。

床 平坦で、出入り口部と考えられるP5周辺から、中央部にかけて踏み固められている。壁溝が壁際を周回し、幅8～14cm、深さ3cmで断面形はU字状を呈している。

竈 東壁中央部に付設されており、天井部及び袖部の大部分は削平されている。確認されたのは、火床部に残る2か所の焼土の塊だけで、規模については不明である。

ピット 5か所。P1～P4は深さ7～10cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ11cmで主軸線上に位置していないが、南壁際のはほぼ中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

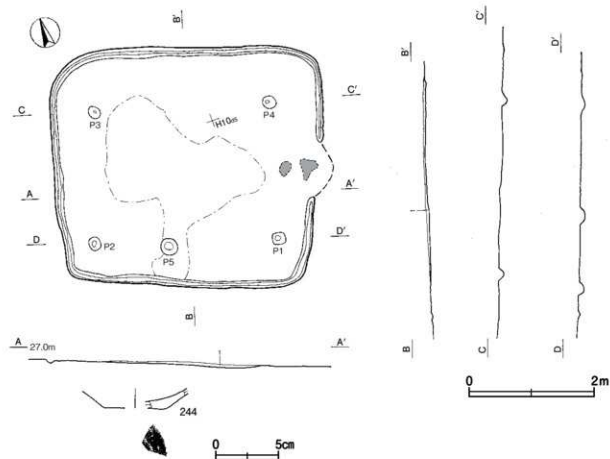
覆土 単一層で層厚が厚い部分で4cmと薄いため、堆積状況は判然としない。

土層解説

1 暗 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片3点（坏1、甕2）が細片で出土している。244は竈の火床面から出土している。

所見 覆土が薄く遺存状況が不良のため、確認された出土遺物は極めて少量である。当遺跡では、東壁に竈を有する住居跡の形態は、9世紀後葉から10世紀代にみられる。さらに、東壁に竈を有し南壁際の中央部に出入り口施設を設けている住居跡としては、第54号住居跡があげられる。それらの例から考えると、時期は出土土器と住居跡の形態から9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。



第182図 第65号住居跡・出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物観察表 (第182図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
244	土陶器	杯	—	(1.7)	(5.0)	長石・石英	にぶい褐	普通	内面ナデ 外面摩滅	穴床面内覆土中	

第66号住居跡 (第183～185図)

位置 調査区北東部のH10c6区で、標高27mほどの台地の緩斜面に位置している。

確認状況 南西コーナー部から緩斜面部を下るように6.3mほど南に伸び第69号土坑につながっている第112号溝は、遺物と覆土から本跡と関連した遺構の可能性が想定される。

重複関係 第112号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.05m、短軸4.00mの方形で、主軸方向はN-1°-Eである。確認された壁高は5～12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が全周しており、幅14～27cm、深さ7～

12cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設されており、天井部は土圧により崩落している。規模は焚口部から煙出部まで120cm、袖部幅は118cmである。袖部は地山のローム土を台形状に掘り残して基部とし、砂質粘土とローム土を混ぜた構築材を貼り付けて構築している。火床部は深さ10cmほど掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外に70cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。竈土層中、第3・4層が天井部の崩落土層で、第14～17層が袖部の土層である。第9～13層は掘り方の構築土層であり、第9層は炭化粒子・灰を比較的多めに含み、灰などを掻き出したものを溜めたものと考えられる。

竈土層解説

1 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	9 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子・灰少量
2 極暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量（締まりは強い）	10 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量（締まりは弱い）
3 暗赤褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量（締まりは強い）	11 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量	12 黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量
5 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量（締まりは弱い）	13 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	14 暗赤褐色	ロームブロック中量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量（締まりは強い）
7 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	15 極暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
8 赤褐色	焼土ブロック多量	16 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
		17 黒褐色	ローム粒子多量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量（締まりは強い）

棚状施設 竈の左袖部に地山を掘り残して付設されており、東西軸150cm、南北軸68cmである。北壁の壁高から5cmほど低く、床面からは4～11cmの高さで、床面に向かって緩やかに傾斜している。

ピット 6か所。P1～P4は深さ13～22cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。棚状施設の手前に位置するP6は深さ23cmで、棚状施設にかかわるピットの可能性が考えられるが、性格は不明である。

貯蔵穴 竈の右袖側の棚状施設と対になる位置に付設されている。長径101cm、短径60cmの楕円形で、深さ22cmである。底面は北側に向かって緩やかにくぼみ、壁は外傾して立ち上がっている。覆土に焼土・炭化粒子を含み、上層が比較的締まりが弱い。

貯蔵穴土層解説

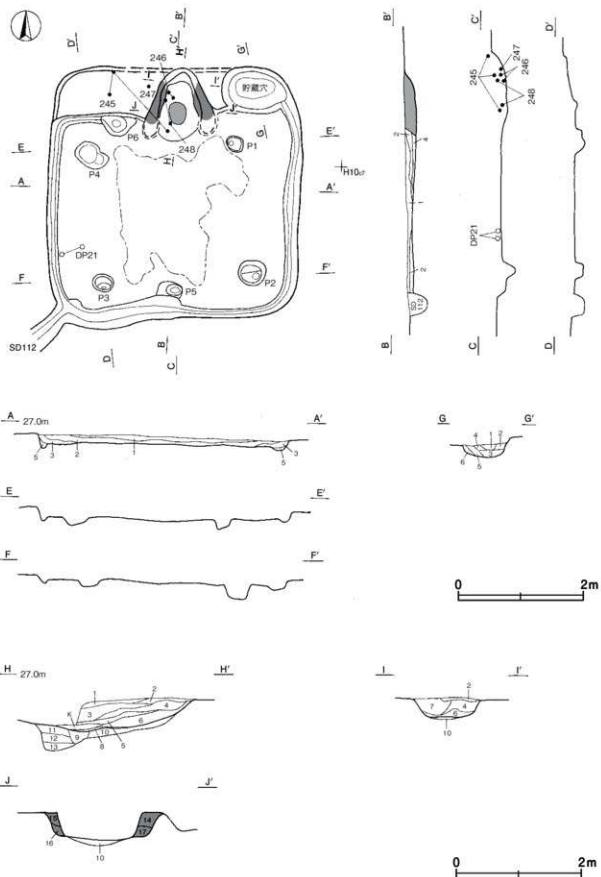
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量（締まりは弱い）	4 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量（締まりは弱い）
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	5 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。第6層が貼床の構築土であり、第7層以下は掘り方の埋土である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土ブロック微量	5 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 極暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量		
掘り方土層解説			
6 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
7 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	10 黒褐色	砂質粘土粒子少量
8 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

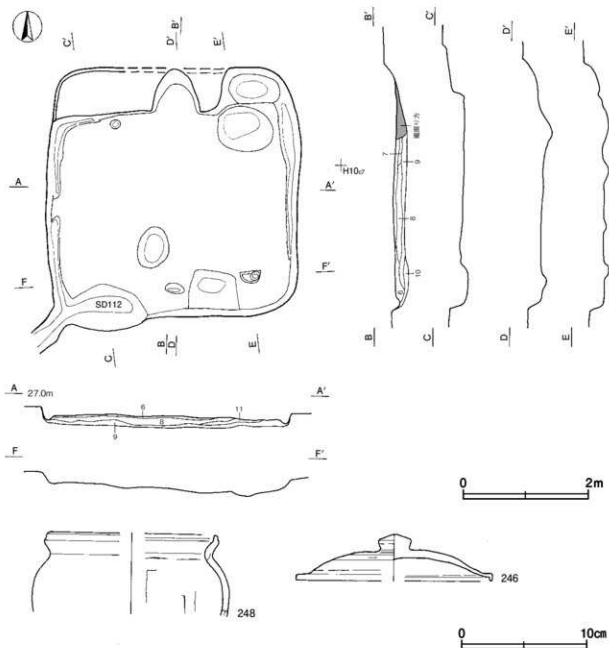
遺物出土状況 土器器片304点（坏類26、堯類278）、須恵器片39点（坏類9、盤4、蓋14、堯類12）、土製品1点（紡錘車）が出土している。245は棚状施設と焚口部、246・248は竈内と焚口部からそれぞれ出土した破片を接合したものであり、247は棚状施設を中心に出土した破片を接合したものである。DP21は南西部の西壁寄りの覆土下層から出土している。ほとんどが破片で床面から覆土下層にかけて多く出土していることから、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片66点、弥生土器片12点、礎20点も出土



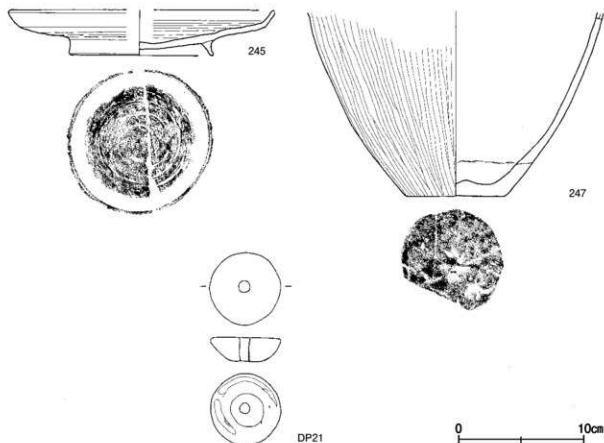
第183图 第66号住居跡実測图

している。

所見 当遺跡で棚を有する住居跡は本跡だけの確認にとどまったが、同時期の住居跡で竈の煙道部が壁外に長く掘り込まれている住居跡は棚を有していた可能性が考えられる。南西コーナー部で重複する第112号溝は、重複する土層断面の観察からは本跡の壁溝と同じ土質であり、第112号溝から出土している土器片は同時期のものである。このことから、第112号溝は本跡と関連した遺構の可能性が想定される。本跡が立地する場所はローム土の地山の層が薄く、ローム土の下の地山はシルト質の粘土層で水の浸透が悪く、そのために、第112号溝は住居の湿気抜き、あるいは排水のための施設ではないかと考えられる。第112号溝は緩斜面部を下るように6.3mほど南に伸び第698号土坑につながっている。第698号土坑は掘り方が浅く、覆土は湿気を多く含んだ黒褐色土である。推測すれば、第698号土坑は排水を溜める、あるいは排水を浸透させるための施設ではないかと考えられる。時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第184図 第66号住居跡掘り方・出土遺物実測図



第185図 第66号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡出土遺物観察表 (第184・185図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
245	須恵器	甕	[28.1]	3.7	11.4	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	底部回転へら切り後回転へら削り 高打削り付け	竈状施設・ 竈口部	50%
246	須恵器	蓋	[15.6]	3.7	—	石英・雲母	暗灰色	普通	大舟部左回りのへら削り	竈内・樊1区	40%
247	土師器	甕	—	(14.8)	8.0	長石・石英・ 黄鉄・赤化鉄子	赤褐色	普通	体部外面下位へら磨き 内面ナデ 輪轆	竈状施設	30%
248	土師器	甕	[13.2]	(6.4)	—	長石・石英・雲母	褐色	普通	口辺部内・外面種ナデ 体部外面ナデ 内面へらナデ ナデ 輪轆肌	竈内・樊1区	10%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP21	紡錘車	5.6	0.8	1.9	51.9	土製	全面ナデ	竈土下層	PL122

第73号住居跡 (第186図)

位置 調査区北東部のH10h9区で、標高26mほどの台地の緩斜面に位置し、南西部は調査区域外に延びている。

重複関係 第74号住居跡を南部で掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.85m、短軸2.41mの長方形で、主軸方向はN-3°-Eである。確認された壁高は12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、踏み固められた部分は認められず、壁際は軟質である。壁溝が巡っており、全周していたと考えられ、幅8～23cm、深さ2cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁のほぼ中央部に付設され、天井部は崩落し、さらに上部は削平されている。規模は竈口部から煙出部まで76cmで、袖部幅は92cmである。袖部は地山のローム土を凸状に掘り残して基部とし、砂質粘土とローム土

を混ぜた構架材を貼り付けて構築している。火床部はわずかにくぼみ、火床面は火を受けてわずかに赤変している。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。竈土層中、第1層が天井部の崩落土層の一部で、第3層が火床部の土層と考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 4 濃い赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

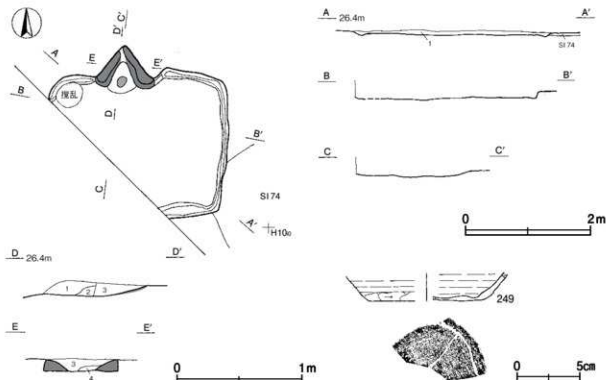
覆土 単一層で、層厚が厚い部分で7cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片17点(環1, 甕類16), 須恵器片4点(環類1, 盤1, 甕類2), 鉄製品1点(不明)が出土している。249は南部の覆土中から出土している。出土土器はほとんどが破片であり、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片4点、礫2点も出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第186図 第73号住居跡・出土遺物実測図

第73号住居跡出土遺物観察表(第186図)

番号	種別	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
219	須恵器	環	—	(22)	(90)	長石・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り長多方向のヘラ面り 縁部下端手持ちヘラ面り	覆土中	20%

第76号住居跡(第187～189図)

位置 調査区北東部のG9d2区で、標高28mほどの台地上の平坦部に位置している。

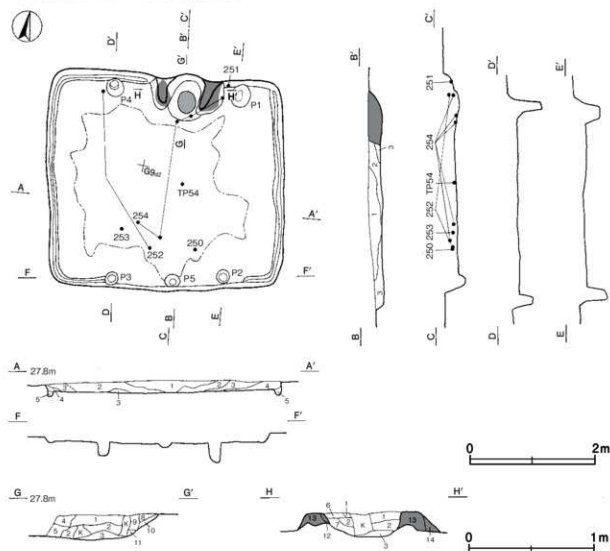
規模と形状 長軸3.80m、短軸3.45mの長方形で、主軸方向はN-9°-Wである。壁高は5～21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南壁際から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が南壁部を除いて確認されており、幅10～20cm、深さ3～5cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設され、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで75cmで、袖部幅は113cmである。袖部は地山であるローム土を基部として掘り残し、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面を楕円形に6cm掘りくぼめ、火床面は火を受けてわずかに赤変している。煙道部は壁外に10cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。竈土層中の第2・3・6・7層が天井部の崩落土層、第12～14層が袖部の土層であり、第4・5層は竈の流出した層である。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|----------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 8 極暗赤褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 極暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 10 極暗赤褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 12 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 13 暗灰色 | 砂質粘土粒子多量 |
| 7 極暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子少量 | 14 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |



第187図 第76号住居跡実測図

ピット 5か所。P1～P4は深さ23～36cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ12cmで南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。

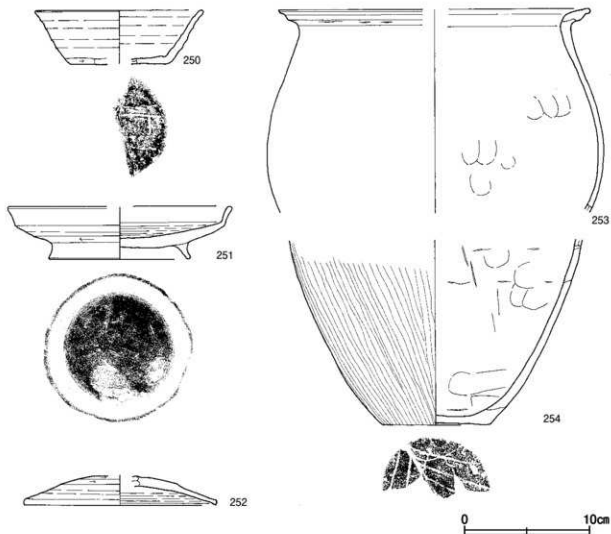
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。第5層は締まりの弱い壁溝の覆土である。

土層解説

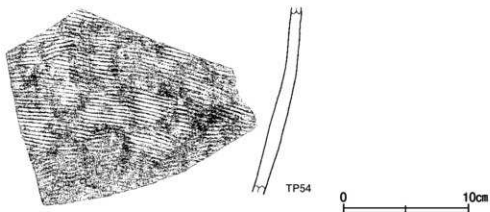
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片125点(甕類)、須恵器片24点(坏類15、盤6、蓋2、甕1)が出土している。250は南東部の覆土下層、251は北東部の北壁際の覆土下層、252は北西部と南部の覆土下層、253は南西部の覆土下層、254は南部の覆土下層と竈周辺からそれぞれ出土している。TP54は中央部の床面から出土している。これらは、全域の床面付近から散在するように出土していることから、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片64点、弥生土器片1点、礫5点も出土している。

所見 煙道部の掘り込みが極端に短いことと、支柱穴の位置が壁際に位置することが特徴的である。時期は、出土土器から9世紀前半と考えられる。



第188図 第76号住居跡出土遺物実測図(1)



第189図 第76号住居跡出土遺物実測図(2)

第76号住居跡出土遺物観察表 (第188・189図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
250	須恵器	坏	13.6	4.3	[7.6]	長石・石英・雲母	灰	良好	底部回転へつ切り後一方のへつ削り 体盛り・端手持ちへつ削り	覆土下層	45%
251	須恵器	甕	[17.6]	4.2	11.2	長石・雲母	灰黄陶	普通	底部回転へつ削り後回転へつ削り 高台 削り付け	覆土下層	70% PL107
252	須恵器	蓋	15.3	(2.4)	—	長石・石英・小礫	灰	普通	天井部左回りのへつ削り	覆土下層	60%
253	土師器	甕	[28.8]	[16.2]	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	11辺部内・外面横ナデ 外面輪痕直 体 部外面ナデ 内面ナデ 側面直	覆土下層	15%
254	土師器	甕	—	[14.8]	8.4	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下唇へつ削り ナデ 側面直 輪痕直	覆土下層 黒炭層	40%
TP54	須恵器	甕	—	(14.9)	—	長石	灰	普通	体部外面斜位の平行円凸	床面	

第113号住居跡 (第190・191図)

位置 調査区南東部のK7f5区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.77m、短軸2.75mの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は7～23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。壁溝が全周し、幅11～13cm、深さ3～6cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部やや東寄りに付設されており、天井部は崩落している。焚口部から煙出部まで89cmで、袖部幅は102cmである。袖部は床面を火床部の掘り方と同じく掘り込んで、砂質粘土とローム土を混ぜた構築材を用いて構築している。火床部は床面をごくわずかに掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に32cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第1～3層が天井部の崩落土層であり、第5～7層が袖部の土層である。また、火床面下の第9層は、掘り方の土層である。

竈土層解説

1	暗 褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	6	暗 赤 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
2	黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	7	暗 褐色	ローム粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
3	黒暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	8	暗 赤 褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量
4	暗 赤 褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	9	暗 褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
5	にぶい黄褐色	ローム粒子中量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量			

ピット 深さ14cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

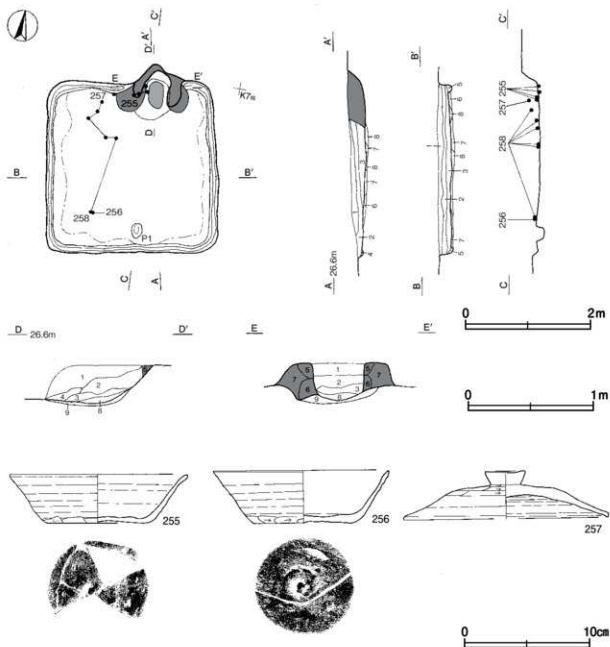
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示しているが、第2・3層にロームブロックを比較的多く含有していることや遺物の出土状況から、人為堆積と考えられる。第6～8層は貼床の構築土層である。

土層解説

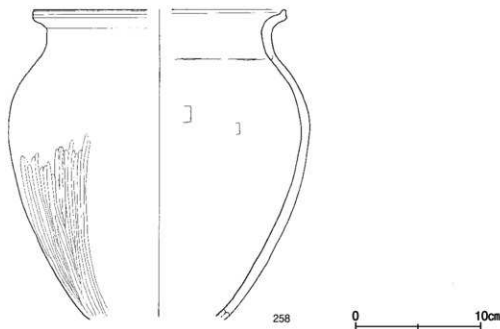
1 麻褐色	ローム粒子中量	5 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	7 黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量
4 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片33点(甕)、須恵器片33点(坏類31、蓋2)が出土している。255は竈内、256は南西部の床面、257は竈左袖付近の覆土中層、258は北西部から南西部にかけての床面と覆土下層からそれぞれ破片で出土している。これらの出土状況が示すように、いずれも砕かれたような破片で出土していることから、廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片3点、礫1点も出土している。

所見 隣接する第114～116号住居跡と時期がほぼ同時期と想定され、住居跡の形態も類似していることから同じ集団と考えられる。時期は、出土土器から8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。



第190図 第113号住居跡・出土遺物実測図



第191図 第113号住居跡出土遺物実測図

第113号住居跡出土遺物観察表 (第190・191図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
255	須恵器	坏	14.2	3.9	8.2	長石・雲母	灰白	普通	底部回転へう切り後多方向のへう削り 体部下端を持ちへう削り	壺内	75% PL107
256	須恵器	坏	14.1	4.2	8.0	長石・石英・雲母	灰黄陶	普通	底部回転へう切り後多方向のへう削り 体部下端を持ちへう削り	床面	65% PL107
257	須恵器	甕	[162]	3.8	—	長石・雲母	灰黄陶	普通	天舟部左回りのへう削り	覆土中層	40%
258	土師器	甕	[302]	[247]	—	長石・石英	赤陶	普通	口沿部内・外面磨ナデ 体部外面上位ナデ 下段へう削り 内面へう削りナデ 輪磨面	覆土下層・ 床面	30%

第114号住居跡 (第192図)

位置 調査区南東部のK 7 e2区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第1440・1439号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.15m、短軸4.05mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は4～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、南壁際から竈に向かって踏み固められている。攪乱を受け掘り込まれている部分を除いて、壁溝が確認されており、幅8～18cm、深さ4～6cmで、断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部を中心に、大きく土坑状に攪乱があり、竈は確認されていない。隣接する同時期の住居跡と同様に、北壁中央部に付設されていたものと推定される。

ピット 7か所。P1～P4は深さは24～31cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5とP6は共に深さ18cmで、主軸線上に位置していることから出入り口施設にかかわるピットと考えられる。P1に隣接しているP7は、深さ27cmで上端をP1に掘り込まれていることから、P1の立て替え前の柱穴と考えられる。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

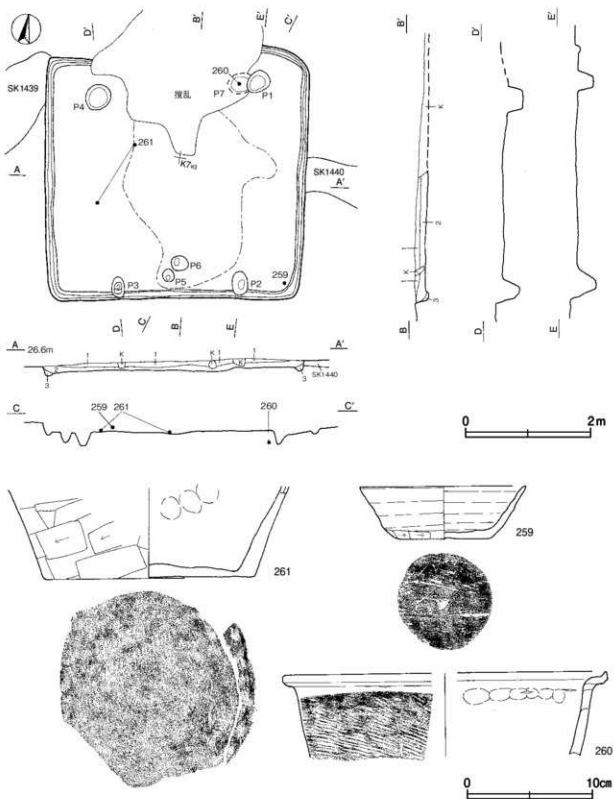
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
3 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片13点(甕類)、須恵器片6点(坏2、甕4)が出土している。259は南東コーナー部

壁際の覆土下層, 260はP7, 261はほぼ中央部の床面から破片で散在して出土している。これらは、廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片9点、弥生土器片1点、土師器片1点(高坏)、罌4点、攪乱により混入した土師質土器1点(内耳鍋)も出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後半から9世紀前半と考えられる。



第192図 第114号住居跡・出土遺物実測図

第114号住居跡出土遺物観察表 (第192図)

番号	種類	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
259	須恵器	環	13.2	4.2	7.6	長石・石英	黄灰	普通	底面回転へう切り籠一方向のへう削り 体部下端手持ちへう削り	覆土下層	95% PL107
260	須恵器	甕	[25.6]	(6.7)	—	長石・雲母・黒色 灰石	灰	普通	口辺部内・外面横すずり 平削り・内高すずり 側部圧痕・輪痕	P 7 内	10%
261	須恵器	甕	—	(7.3)	17.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部外面下位へう削り 内面当て具痕	床面	15%

第117号住居跡 (第193図)

位置 調査区東部の K 7 f8区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。大部分が調査区域外に延びている。

規模と形状 確認できた部分は南北軸3.10m、東西軸は0.61mで、方形または長方形と推定され、主軸方向は N-23°E である。壁高は18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、確認できた部分は比較的硬質である。壁溝は、幅14～18cm、深さ2～6cmで、断面形はU字状を呈している。

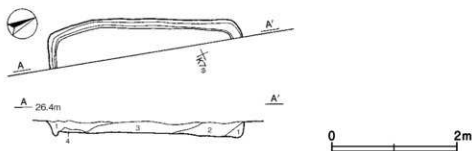
覆土 4層に分層される。不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 3 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土器器片2点(亮)が、覆土中から細片で出土している。

所見 調査できたのは西部の一部だけで、図示可能な遺物は確認されていない。時期は、隣接する住居跡と土土器から平安時代後半と推察される。



第193図 第117号住居跡実測図

第119号住居跡 (第194図)

位置 調査区南東部の K 7 d8区で、標高26mほどの台地上の平坦部に位置している。東部は調査区域外に延びている。

規模と形状 確認できたのは南北軸2.90m、東西軸は2.66mで、長方形と推定され、主軸方向は N-0° である。

壁高は2cmで、立ち上がりは判然としない。

床 ほほ平坦で、コーナー部を除いて踏み固められている。壁溝が確認できた壁際を巡っており、幅6～12cm、深さ2～4cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設されている。耕作による削平のため遺存状況は不良であり、火床部の掘り込みと火床面の焼土及び袖部材の砂質粘土だけが確認された。遺存する部分から、規模は焚口部から煙出部まで85cmで、袖

部幅は98cmと推定される。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築されたと考えられる。火床部は床面を6cm掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がっていたものと考えられる。

甍土層解説

1 黒 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 2か所。南壁際に取り軸線上に位置しているP1は、深さ5cmで、配置から出入り口施設にかかわるピットと考えられる。北西部の壁際にあるP2は、深さ14cmで、性格不明である。

覆土 4層に分層される。上層が削平されているため層厚が2～3cmと薄く、堆積状況は判然としない。

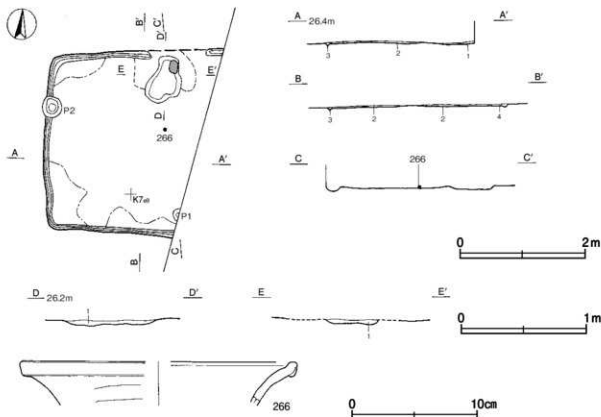
土層解説

1 暗 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 暗 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

3 暗 褐色 ロームブロック少量
4 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 266の須恵器片1点(欠)が、竈前の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器と住居跡の傾向から8世紀から9世紀にかけてと推察される。



第194図 第119号住居跡・出土遺物実測図

第119号住居跡出土遺物観察表 (第194図)

番号	種別	器種	1径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
266	須恵器	甕	[21.8]	(3.5)	—	長石・石英・雲母	にじみ黄緑	普通	口辺部内・外面縦ナデ	床面	30%

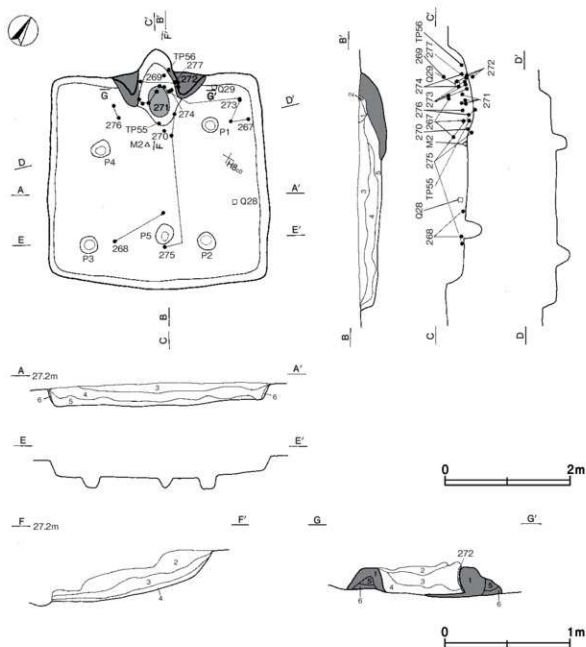
第123号住居跡 (第195～198図)

位置 調査区中央部のH 8 c9区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.45m、短軸3.44mの方形で、主軸方向はN-31°-Wである。確認された壁高は19～25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 は平坦で、明確な硬化面は認められない。

竈 北壁中央部に付設されており、天井部は故意につぶされた状態で崩落している。規模は竈口部から煙出部まで121cm、袖部幅は113cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。両袖部の内側には、須恵器甕の破片を逆位の状態で埋め込んで補強材としている。火床部は床面を楕円形に8cm掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に33cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第2・3層が天井部の崩落土層であり、第1・5・6層が袖部の土層である。



第195図 第123号住居跡実測図

覆土層解説

- | | |
|------------------------------------|------------------------------|
| 1 にぶい褐色 砂質粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 明褐色 ローム粒子少量、ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 褐色 ローム粒子中量、砂質粘土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ17～23cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ29cmで南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

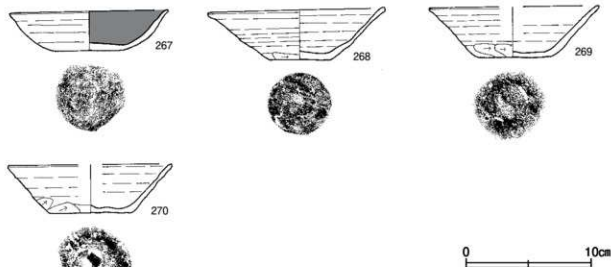
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈しているが、遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

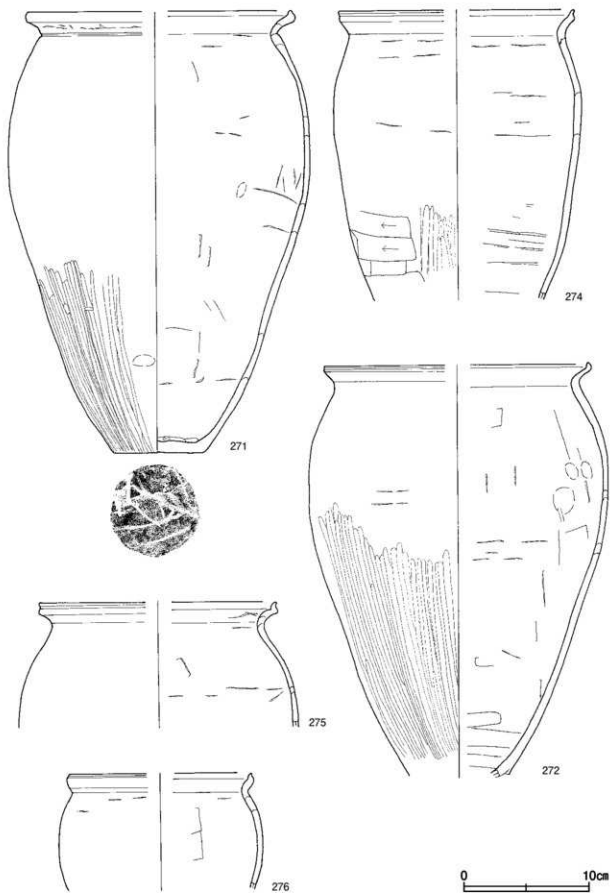
- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片666点（坏類40、高台付坏2、甕類623、瓶1）、須恵器片104点（坏類32、蓋1、甕類70、瓶1）、石器2点（砥石）、鉄製品1点（刀子）が出土している。これらの遺物は、竈内のほか住居全体から散在するように出土していることから、廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。267は北東部東壁際の覆土中・下層と北東コーナー部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。268は中央部南寄りの覆土下層と南西部の覆土下層から出土した破片を接合したものである。269は竈内、270は竈前の床面、271は焚口部からそれぞれ出土している。272は竈の両袖部内側に補強材として貼り付けてあった土器。273は火床面・焚口部と北東コーナー部から出土した破片を接合したものである。274は竈内と焚口部、275は南部と竈前の床面、276は北西部の床面と覆土下層、277は竈右袖部からそれぞれ出土している。TP55は焚口部、TP56は竈内から出土しており、Q28は南東部、Q29は北東部北壁際のそれぞれ覆土下層から出土している。M2は中央部東寄りの床面から出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片61点、弥生土器片6点、土師器片3点（高坏2、手捏土器1）、鉄製品2点（不明）、礫11点のほか、攪乱によって混入した土師質土器片25点（内耳鍋類）も出土している。

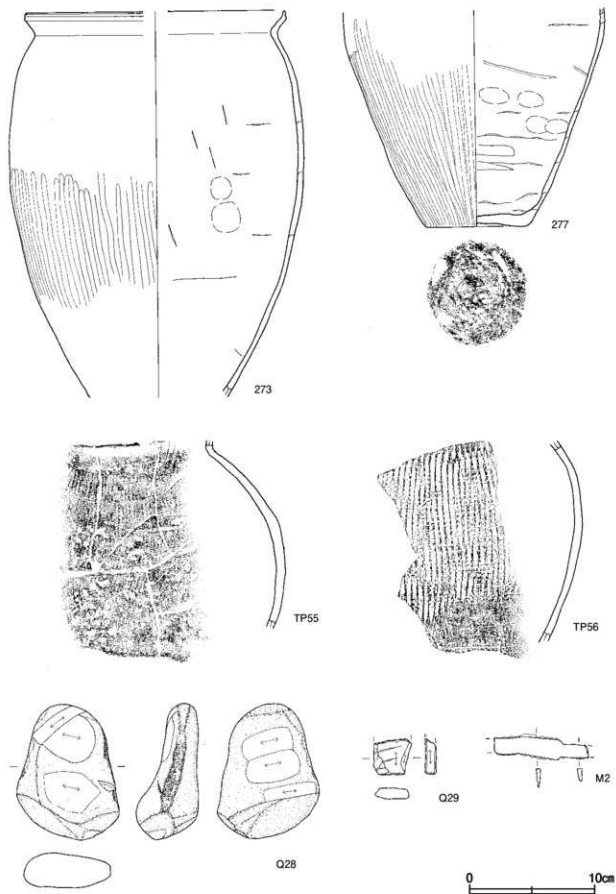
所見 竈が故意につぶされ、竈内から焚口部にかけて土師器甕を中心とした土器がつぶれた状態で出土している。また、当遺跡の同時期の住居跡と比べて規模は一般的ではあるが、廃棄遺物の出土数が突出しており、廃棄されながら埋没したと想定される。時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第196図 第123号住居跡出土遺物実測図(1)



第197图 第123号住居跡出土遺物実測図2)



第198図 第123号住居跡出土遺物実測図(3)

第123号住居跡出土遺物観察表 (第196～198図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
267	土師器	坏	12.6	3.1	5.8	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後一方方向のヘラ削り 内面一部磨減	覆土上・ 中下層	60% PL107
268	須恵器	坏	11.0	4.2	4.9	長石・雲母・赤色 粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後一方方向のヘラ削り 体部下端回転ヘラ削り二次焼成	覆土下層	100% PL107
269	須恵器	坏	[13.5]	4.1	6.0	長石・石英・雲母	にぶい・褐	普通	底部回転ヘラ切り後一方方向のヘラ削り 体部下端回転ヘラ削り	壺内	60%
270	須恵器	坏	[13.0]	3.9	6.4	長石・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後一方方向のヘラ削り 体部下端回転ヘラ削り	床面	30%
271	土師器	甕	[20.2]	35.3	7.3	長石・石英・雲母	明赤・褐	普通	口辺部内・外面削りナデ 体部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 磨頭肌 輪切肌	焚口部	40% PL107
272	土師器	甕	[20.2]	(33.0)	—	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口辺部内・外面削りナデ 体部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 磨頭肌 輪切肌	壺口部	60%
273	土師器	甕	[20.8]	(30.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面削りナデ 体部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 磨頭肌 輪切肌	大床面・ 焚口部	30%
274	土師器	甕	[18.8]	(23.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐	普通	口辺部内・外面削りナデ 体部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 磨頭肌 輪切肌	壺内・ 焚口部	20%
275	土師器	甕	[19.0]	(16.0)	—	石英・雲母	にぶい・赤褐	普通	口辺部内・外面削りナデ 体部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 磨頭肌 輪切肌	床面	10%
276	土師器	甕	[14.4]	(9.3)	—	長石・石英・ 雲母・赤色 粒子	にぶい・橙	普通	口辺部内・外面削りナデ 体部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 磨頭肌 輪切肌	床面・ 覆土上層	15%
277	土師器	甕	—	(17.3)	8.1	長石・石英・雲母	にぶい・橙	良好	体部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ ナデ 磨頭肌 輪切肌	壺口部	30%
TP55	須恵器	甕	—	(15.7)	—	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外面縦位の平行叩き 下位磨減	焚口部	
TP56	須恵器	甕	—	(16.0)	—	長石・石英	黄灰	普通	体部外面縦位の叩き 下位ヘラ削り	壺内	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q-28	磨石	10.8	8.1	4.8	296.8	安山岩	焼熱により非変 磨面は砥面状 調磨痕	覆土下層	砥石転用*
Q-29	砥石	(2.9)	(3.1)	0.9	(10.6)	凝灰岩	砥面破片 砥面3面	覆土下層	
M-2	刀子	(7.6)	1.8	0.4	(33.0)	鉄	刃部欠損 基部先端欠損	床面	

第124号住居跡 (第199・200図)

位置 調査区中央部のH 8 d9区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第126号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.41m、短軸3.26mの方形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は8～39cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が東壁際から西壁際までの南下半部で確認されている。

規模は幅8～18cm、深さ4～6cmで断面形はU字状を呈している。

竈 北壁中央部に付設され、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで125cmで、袖部幅は152cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土とローム土を混ぜた構築材で構築している。火床部は床面とはほぼ同じ高さで、火床面は火を受けてわずかに赤変している。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第1・4層は竈の流出層である。竈土層中、第2・3層が天井部の崩落土層、第6・8～14層が袖部の土層である。第15層は掘り方の土層であり、焚口部の掘り方で確認されているピットの覆土と同様に炭化粒子・灰を含んでいる。

竈土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	9	黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	10	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量で粘性は普通
3	赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量	11	褐色	ロームブロック多量、砂質粘土粒子少量
4	棕褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量	12	褐色	ロームブロック多量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
5	棕褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量	13	暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・砂質粘土粒子少量
6	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	14	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
7	棕暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量	15	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・灰少量
8	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量(粘性は弱い)			

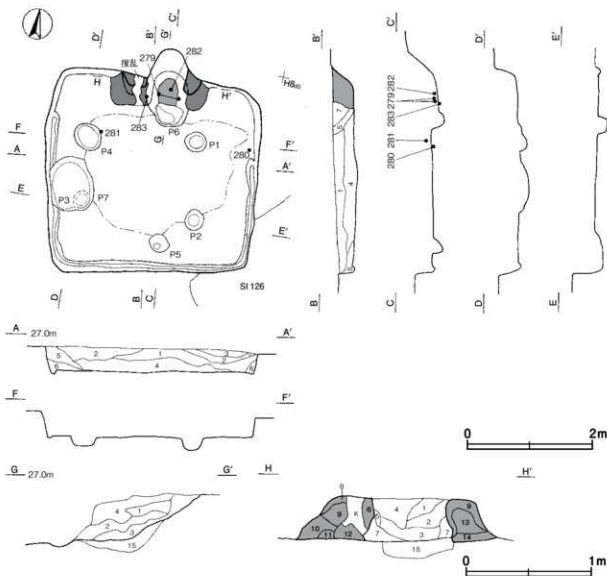
ピット 7か所。P1～P4は深さ11～22cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ19cmで南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設にかかわるピットと考えられる。P6は深さ17cmの不定形で、竈の掘り方と考えられる。P3を掘り込んでいるP7は深さ17cmで、性格は不明である。

覆土 7層に分層される。不規則な堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

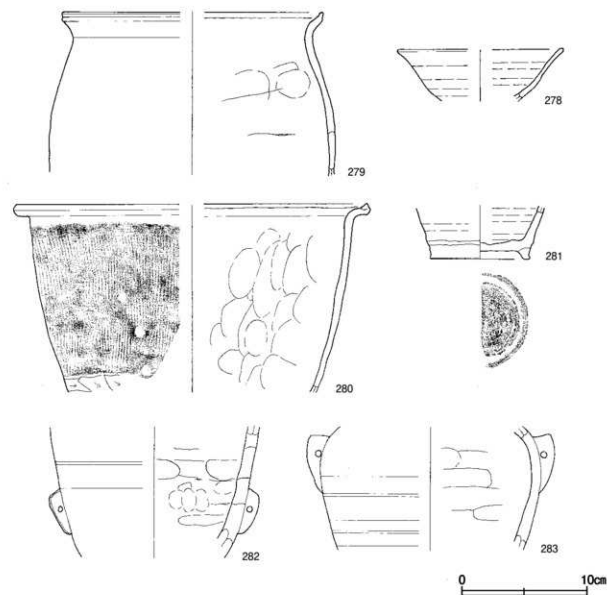
1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	7 暗褐色	焼土粒子・砂粒微量
4 暗褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片190点(坏類11, 甕類179), 須恵器片63点(坏類50, 蓋1, 甕類6, 瓶3, 壺3), 土製品1点(支脚)が出土している。278・279・282・283は、いずれも竈内から多くの破片とともに出土している。280は北東部東壁際の床面, 281は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。住居に伴うと考えられる遺物の多くは、竈と床面を中心に、破片で散在しており、廃絶時に廃棄したものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片30点, 弥生土器片1点, 礫10点も出土している。



第199図 第124号住居跡実測図

所見 竈から出土している土器は、復元できるものがほとんどなく、また二次焼成を受けているものは土師器堯類に限られている。これらは竈を故意に廃絶した折に竈内に投棄したものと推測される。時期は、出土土器の傾向から9世紀後半と考えられる。



第200図 第124号住居跡出土遺物実測図

第124号住居跡出土遺物観察表 (第200図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
278	須恵器	坏	[132]	(42)	—	長石・雲母	靑灰	普通	ロクロ成形 底部欠損	竈内覆土中	10%
279	土師器	甕	[308]	(13.0)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	11辺底内・外面種ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ ナデ 指頭直 輪轆痕	竈内	10%
280	須恵器	瓶	[277]	(15.0)	—	長石・石英・雲母	灰白	良好	11辺底内・外面種ナデ 体部外面種ナデ 指頭による圧痕3×所 内面当て具痕 ナデ	床面	10%
281	須恵器	長頸瓶*	—	(4.3)	7.8	石英・雲母	灰	普通	底部回転糸切り後高台貼り付け	覆土下層	
282	須恵器	有耳壺	—	(10.5)	—	長石・黒色吹出	オリーブ黒	良好	ロクロ成形 外面に一筋文 自然輪 内面指頭痕 輪轆痕	火床面	
283	須恵器	有耳壺	—	(9.8)	—	長石・黒色吹出	灰	良好	ロクロ成形 外面に二筋文 自然輪	竈内	

第127号住居跡（第201・202図）

位置 調査区中央部のH8e6区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第1539号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.35m、短軸2.10mの長方形で、主軸方向はN-74°-Eである。壁高は13～18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、軟質ではないものの、硬化面は確認されていない。

竈 南東コーナー部に付設され、天井部は崩落している。規模は焚口部から煙出部まで62cmで、袖部幅は93cmである。袖部は床面を基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は床面と同じ高さで、火床面はほとんど赤変していない。煙道部はコーナー部を利用し、火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第2～4層が天井部の崩落土層であり、第5・6層が袖部の土層である。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|--------|----------------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 黒 褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量 | 6 暗 褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 黒 褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量 | | |
| 4 暗 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

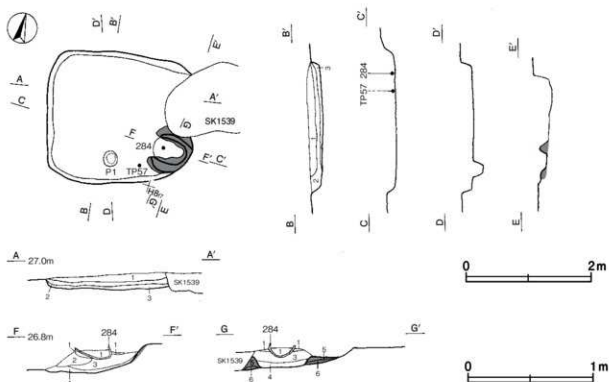
ピット 南壁際の中央部に位置し、深さは19cmである。配置から出入り口施設にかかわるピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。壁際から流れ込むようなレンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|---------|
| 1 黒 褐色 | 砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 3 暗 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

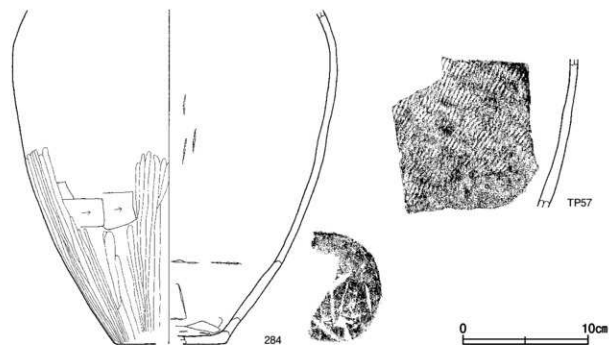
遺物出土状況 土師器片75点（坏類9、甕類66）、須恵器片21点（坏類6、甕類15）が出土している。住居に伴う土器の約半分は竈内から破片で出土している。284は竈天井部の崩落土中から割れて出土し、遺棄された



第201図 第127号住居跡実測図

ものと考えられる。また、TP57は竈前の南壁寄りの覆土下層から出土している。覆土中から出土した土器の多くは小破片であり、廃絶に伴って廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片11点、土師器片4点(埴)のほか、擾乱により混入した土師質土器1点(内耳鍋)、陶器1点(甕)も出土している。

所見 コーナー部に竈が付設されている住居跡は本跡だけである。床面と竈の使用痕の状況から、比較的短期間しか使用しなかった住居と考えられる。時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第202図 第127号住居跡出土遺物実測図

第127号住居跡出土遺物観察表 (第202図)

番号	種類	器種	口縁	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
281	土師器	甕	—	(26.7)	[8.8]	長石・石英・雲母	明陶	普通	体部外面下位へラ指り縁へラ指り内面へラナデ ナデ 輪飾痕 底部木置痕	竈天井部	40%
TP57	須恵器	甕	—	(11.9)	—	長石・雲母	上ぶい黄	普通	体部外面斜位の平行印き	覆土下層	

第129号住居跡 (第203・204図)

位置 調査区中央部のH 8 4区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 竈と東壁の一部だけを残し、第1187号土坑・第199A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する東壁の一部と重複状況から、長軸3.5m、短軸3.1mほどの長方形と推定され、主軸方向はN-92°-Eである。壁高は22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 遺存状況は極めて不良で、わずかに遺存する部分はほぼ平坦で、軟質である。

竈 東壁中央部に付設されていたと推察される。天井部は崩落し、右袖部も擾乱を受けている。規模は焚口部から煙出部まで110cmで、袖部幅は134cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を用いて構築している。火床部は支脚に向かって緩やかに立ち上がり、火床面は火を受けてわずかに赤変している。煙道部は壁外に35cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。竈土層中の第2層が天井部の崩落土層である。

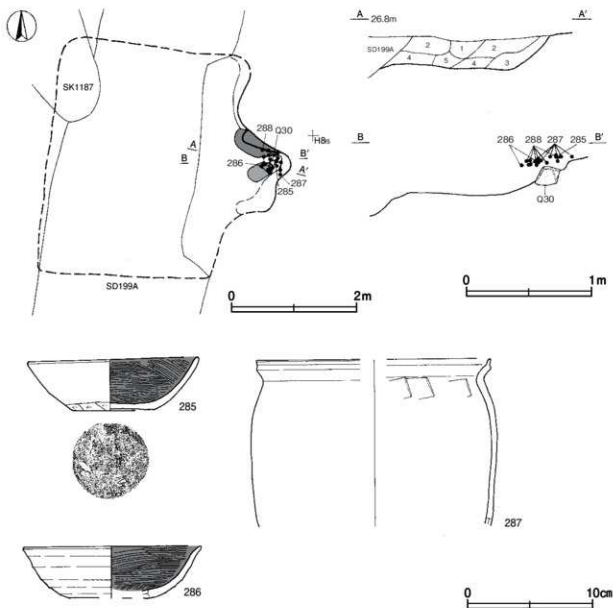
覆土层解説

- | | | | |
|----------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・砂質粘土粒子少量 | 4 黒 褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 黒 灰色 | 砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量 | 5 黒 褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量 |
| 3 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック多量、砂質粘土ブロック少量 | | |

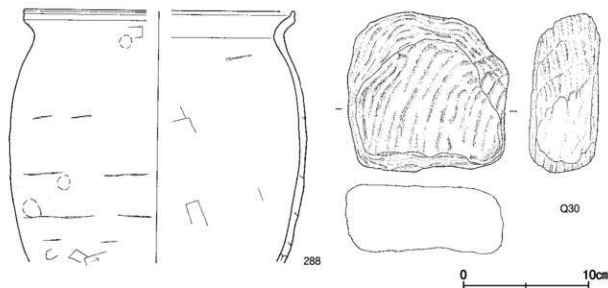
覆土 覆土層の部分しか確認できず、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片70点（坏類15、甕類55）、須恵器片3点（坏）、石製品1点（支脚）が竈内と竈周辺から出土している。285は竈の煙出部付近、286～288は竈内から出土している。Q30は火床面上に立位で出土した竈支脚である。これらは、廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。

所見 遺存状況が不良で、調査は竈と竈周辺に限られたが、竈は故意につぶされた状況で、285が逆位で出土していることから、転倒した状態で遺棄されたものと考えられる。また、東竈の住居跡は他に第22・51・54・62・65号住居跡があり、時的には9世紀後葉から10世紀代に比定される。時期は出土土器から、第62号住居と同時期の9世紀後葉から10世紀初頭と考えられる。



第203図 第129号住居跡・出土遺物実測図



第204図 第129号住居跡出土遺物実測図

第129号住居跡出土遺物観察表 (第203・204図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
285	土師器	坏	13.4	4.2	6.0	長石・雲母	橙	普通	底部回転へつ切り輪 一方のへつ切り 体部下端手持ちへつ切り 内面へつ磨き	壁外部付近	100% PL107
286	土師器	坏	14.0	4.1	[6.6]	長石・雲母	明赤陶	普通	底部回転へつ切り輪 一方のへつ切り 内面へつ磨き	壺内	50%
287	土師器	甕	[18.6]	[13.2]	—	長石・石英・雲母	明赤陶	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ ナデ	壺内	20%
288	土師器	甕	[21.6]	[20.1]	—	長石・石英・雲母	にぶい赤陶	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 下位へ つ磨き 内面横ナデ 輪縁部 内面ヘラナデ ナデ	壺内	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q30	支脚	12.7	13.0	5.5	1476.8	雲母片岩	焼熱により一部赤変 表面剥離痕	火床面	

第130住居跡 (第205図)

位置 調査区中央部のH 8 h4区で、標高27mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 北西部と南西部が第199A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する壁から確認できたのは東西軸は2.59m、南北軸2.49mで、方形または長方形と推定される。

主軸方向はN-11°-Wである。壁高は5~7cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、踏み固められたところは認められず、壁際は軟質である。

ピット 南壁際に位置しており深さ21cmで、位置的に出入り口施設にかかわるピットの可能性が考えられる。

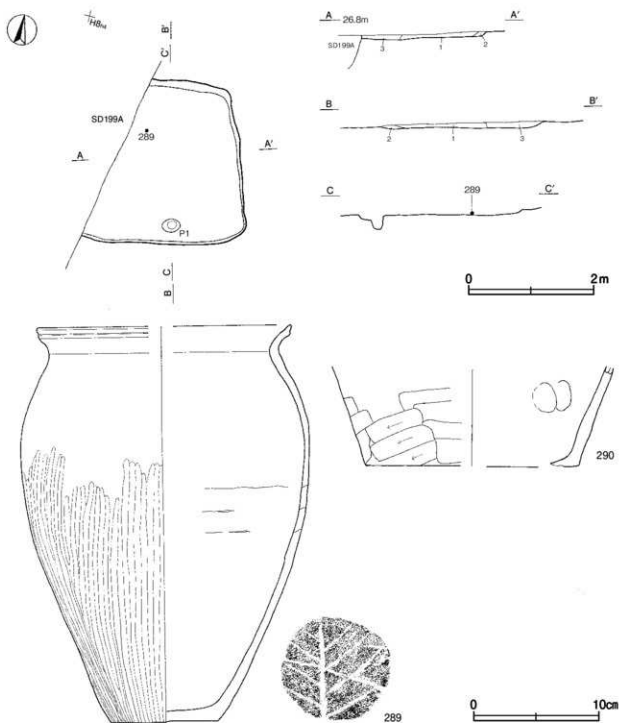
覆土 3層に分層される。層厚が7cmほどと薄いため、堆積状況は判然としにくい。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片73点(甕)、須恵器片6点(坏3、甕2、瓶1)が出土している。289は中央部の北壁寄りの床面からつぶれた状態で出土し、290は覆土中から出土している。これらは、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。その他、流れ込んだ縄文土器片10点、繰5点のほか、焼瓦により混入した土師質土器片3点が出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第205図 第130号住居跡・出土遺物実測図

第130号住居跡出土遺物観察表 (第205図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
289	土師器	甕	[20.3]	31.5	8.5	長石・石英・雲母	にがい橙	普通	口辺部内外面横ナデ 体部外面下位へラ磨き 内面へラナデ ナデ 輪割痕 底部木炭痕	床面	50% PL107
290	須恵器	甕	—	(7.9)	(17.0)	長石・雲母	靑灰	良好	体部外面下位へラ磨り 内面当て具痕	覆土中	

表9 平安時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面 構造	内 部 装 設				土質	主要出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)	
							土間	土間	土間	土間				
1	L 3.86	N-38°-W	[方形]	[2]72] × 2.48	8	平土	全周	—	—	23	竪	須恵器(坏)		
4	K 4.1	N-25°-E	正方形	3.10 × 3.08	7~42	平土	一部	4	1	1	—	自然 土師器(坏、甕、甗)、須恵器(坏、甕、甗)	本跡→UP2、SD2	
15	P 9.40	N-15°-E	方形	3.35 × 3.23	10~30	平土	—	—	—	—	—	土師器(坏、高台付坏、甕、甗)、須恵器(坏、高台付坏、甕、甗)	SI16→本跡	
22	P 10.16	N-91°-E	[方形]	[3]62] × [3]34]	6	平土	平周	3	1	—	—	不明 土師器(坏、高台付坏、甕、甗)		
38	G 10.62	N-4°-E	方形	3.15 × 2.95	13~35	平土	一部	—	1	1	竪	土師器(坏、高台付坏、高台白碗、甕)、須恵器(坏、高台白碗、甕)	SE37→96→本跡	
45	G 9.e7	N-22°-W	方形	3.63 × 3.38	30~40	平土	全周	—	1	14	竪	土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕、甗)	SH7-SK802→本跡→SK638	
50	G 9.15	N-10°-W	長方形	2.85 × 2.53	12~23	平土	平周	—	1	—	—	自然 土師器(坏、甕)	本跡→SI51	
51	G 9.15	N-82°-E	方形	3.05 × 3.00	7~21	平土	全周	4	—	4	竪	—	自然 土師器(坏、甕)	SE50→本跡
52	G 9.e1	N-9°-W	方形	3.50 × 3.45	3~15	平土	全周	4	1	—	—	自然 土師器(坏、高台付坏、甕)、須恵器(坏、甕、甗)	SE53→本跡	
54	G 9.16	N-86°-E	方形	2.83 × 2.67	12~23	平土	全周	—	2	—	—	土師器(坏、高台付坏、甕)、須恵器(坏、甕)	SK650→本跡→SI31	
56	G 9.b1	N-4°-W	[方形]	[2]75] × [2]15]	3~8	平土	全周	1	—	—	—	自然 土師器(坏、甕)		
58A	H 9.16	N-3°-E	方形	4.30 × 4.20	3~5	平土	全周	3	1	2	竪	自然 土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕、甗)	SE58B→本跡	
58B	H 9.17	N-1°-E	方形	3.08 × 2.85	2~5	平土	全周	2	1	—	—	—	本跡→SI58A	
62	G 10.13	N-87°-E	長方形	3.00 × 2.10	4~7	平土	—	—	1	—	—	不明 土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕、甗)		
65	H 10.41	N-109°-E	長方形	4.30 × 3.78	2	平土	全周	4	1	—	—	不明 土師器(坏、甕)		
66	H 10.6c	N-1°-E	方形	4.05 × 4.00	5~12	平土	全周	4	1	1	竪	1 自然 土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕、甗)、土製品(砂押草)	本跡→SD112	
73	H 10.69	N-3°-E	長方形	2.85 × 2.41	12	平土	全周	—	—	—	—	不明 土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕、甗)、土製品(石押)	SI74→本跡	
76	G 9.42	N-9°-W	長方形	3.80 × 3.45	5~21	平土	一部	4	1	—	—	自然 土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕、甗)		
113	K 7.15	N-11°-W	方形	2.77 × 2.75	7~23	平土	全周	—	1	—	—	土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕)		
114	K 7.e2	N-5°-W	方形	4.15 × 4.05	4~15	平土	全周	4	2	1	竪	—	自然 土師器(坏、甕)	SK1140-1430→本跡
117	K 7.18	[N-25°-E]	[方形]	[3]10] × [3]61]	18	平土	全周	—	—	—	—	土師器(甕)		
119	K 7.48	N-0°	[長方形]	[2]90] × [2]66]	2	平土	全周	—	1	1	竪	—	不明 須恵器(甕)	
123	H 8.e9	N-31°-W	方形	3.45 × 3.44	19~25	平土	平周	4	1	—	—	土師器、須恵器、石器(砥石)、鉄器(刀、斧)		
124	H 8.49	N-8°-W	方形	3.41 × 3.26	8~39	平土	—	4	1	2	竪	土師器、須恵器、土製品(支脚)	SI126→本跡	
127	H 8.e6	N-74°-E	[長方形]	[2]35] × [2]10]	13~18	平土	—	—	1	—	—	土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕)	本跡→SK1339	
129	H 8.14	N-92°-E	長方形	3.50 × 3.10	22	平土	—	—	—	—	—	不明 土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕)	本跡→SK1187、SD199A	
130	H 8.b1	N-11°-W	[方形]	[2]9] × [2]49]	5~7	平土	—	—	1	—	—	不明 土師器(甕)、須恵器(坏、甕)	本跡→SD190A	

(2) 掘立柱建物跡

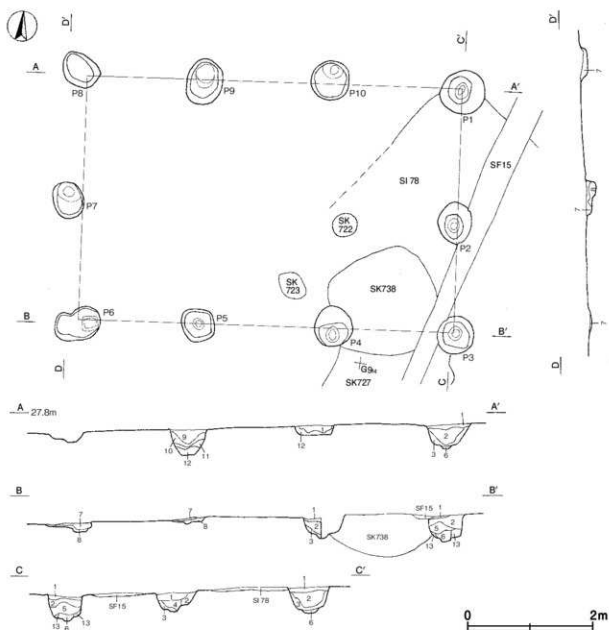
第33号掘立柱建物跡 (第206図)

位置 調査区北部のG 9 e3区、標高27mほどの台地上に位置している。

重複関係 第78号住居跡、第727・738号土坑を掘り込み、第722・723号土坑、第15号道路に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-83°-Eである。規模は桁行6.0m、梁行3.9mで、面積は23.4㎡である。柱間寸法は、桁行が西間が1.8m(6尺)で、残りの2間は2.1m(7尺)で、梁行は1.8m(6尺)、2.1m(7尺)である。

柱穴 10か所。耕作による削平のため深さは、8~42cmと浅く、不揃いである。土層は、第4・6層が柱抜き取り痕に相当し、第1~3・5・7~13層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、底面は皿状または平坦である。



第206図 第33号掘立柱建物跡実測図

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|--------|---------------------------|---------|----------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 8 暗 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗 褐色 | ロームブロック中量 | 9 暗 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 黒 褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 10 暗 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 黒 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 11 暗 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 6 黒 | 炭化粒子中量, ローム粒子微量 | 12 暗 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| | | 13 黒 褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片65点(碗1, 増1, 高坏2, 甕類61), 須恵器片3点(坏), 縄文土器片16点, 石器1点(磨石), 剥片1点, 石英質礫1点が各柱穴から出土している。いずれも細片で, 多くは重複する遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 時期は, 柱間寸法が桁行・梁行とも統一されたものではないが, 柱穴の掘り方が中世のものとは比べ大きいことや, 重複関係と出土土器から平安時代と考えられる。規模と形態から納屋あるいは彌桶を保管していた倉と推測されるが, 当遺跡で確認されている遺構の類例は少なく, 性格は不明確である。

第35号掘立柱建物跡 (第207図)

位置 調査区北部のH10d3区、標高27mほどの台地上に位置している。

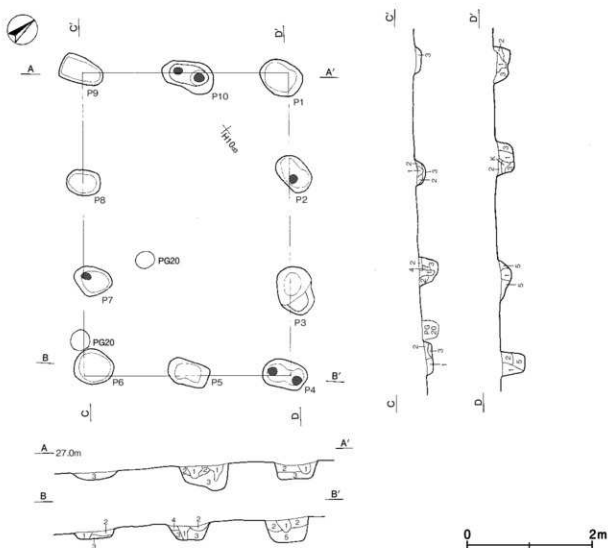
重複関係 第20号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-54°-Wである。規模は桁行4.8m、梁行3.3mで、面積は15.84㎡である。柱間寸法は、桁行が東間1.5m（5尺）と1.8m（6尺）で、梁行も両妻部が1.5m（5尺）で中央間は1.8m（6尺）である。

柱穴 10か所。耕作による削平のため深さは、12～39cmと浅く、不揃いである。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2～5層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりはP2で1か所、P4で2か所、P7で1か所、P10で2か所、それぞれ確認されている。柱のあたりが不揃いに確認されており、柱の立て替えまたは支柱痕と推測される。底面は皿状または平坦である。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | |



第207図 第35号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片17点(甕)、須恵器片5点(坏2、蓋3)、縄文土器片13点、弥生土器片5点、土師質土器片2点(皿)が各柱穴から出土している。いずれも細片で、多くは近接する遺構からの流れ込みや混入したものと考えられる。

所見 時期は、柱間が均等ではないが、柱穴の掘り方が中世の建物跡と比べ大きいことや、出土土器の様相から平安時代と考えられる。規模と形態から納屋か穀桶を保管していた倉と推測されるが、当遺跡で確認されている遺構の類例は少なく、性格は不明確である。

表10 平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁 (間)	規模 桁×梁(m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴			主な出土遺物	備考(時期)
								構造	柱穴数	深さ(cm)		
33	G 9-c3	N-83°-E	3×2	6.00×3.90	23.40	1.80~2.10	1.80~2.10	掘柱	10	円形・楕円形 12~39	土師器、須恵器	SK78-SK727・728→本跡→SK722・723・SF15
35	H 10d3	N-51°-W	3×2	4.80×3.30	15.84	1.50~1.80	1.50~1.80	掘柱	10	楕円形・不規則形 12~39	土師器、須恵器	本跡→PG20

(3) 溝跡

第112号溝跡(第208・209図)

位置 調査区北部のH10c6～H10e5区で、標高26mほどの台地上の緩斜面部に位置している。

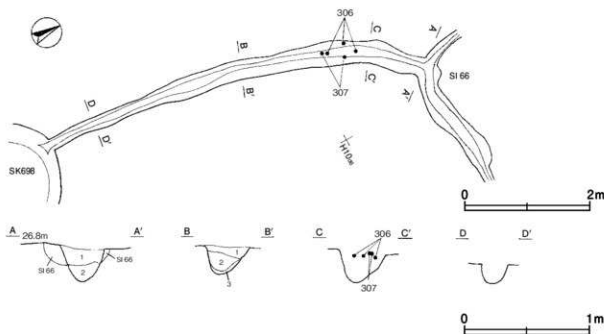
重複関係 第66号住居跡と第698号土坑を掘り込んで連結している。

規模と形状 H10c5区から、南方向(N-163°-W)へ緩い曲線状にH10e5区まで延び、第698号土坑に連結している。長さは8.2mで、上幅0.18～0.4m、下幅0.07～0.17m、深さ15～25cmのU字状の断面形を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況と含有物から、自然堆積と考えられる。

土層解説

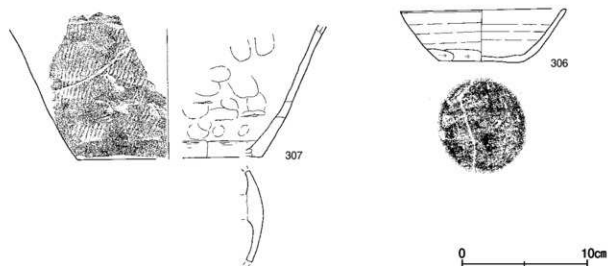
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量



第208図 第112号溝跡実測図

遺物出土状況 土師器片28点(坏4, 甕24), 須恵器片5点(坏3, 甕2)と, 流れ込んだ縄文土器片3点, 土師器片5点(器台), 礫3点が出土している。306・307は, その他の破片とまとまって覆土上層から出土している。

所見 覆土と掘り方の形状から第66号住居跡に付随する施設で, 湿気抜きまたは排水溝として機能していたと推測される。時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第209図 第112号溝出土遺物実測図

第112号溝跡出土遺物観察表(第209図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
306	須恵器	坏	13.0	4.3	6.7	長石・石英・雲母	浅黄	普通	底部回転ヘラ切り縁一方のヘラ削り 体部下端子持ちヘラ削り	覆土上層	80%
307	須恵器	甕	—	(10.4)	(14.8)	長石・石英・雲母	暗黄	普通	体部前面削台の平行削き 内面当て具削 と削感取 下部地位のナゲ 脇縁表	覆土上層	

第155号溝跡(第210図・付図)

位置 調査区南東部のK7e6～K7h8区で, 標高26mほどの台地の緩斜面に位置している。

規模と形状 K7e6区から南東方向(N-38°-E)に曲線状に延び, K7h8区で調査区域外へ延びている。確認できた長さは13.3mで, 上幅0.12～0.38m, 下幅0.06～0.24m, 深さ7～15cmの緩やかなU字状の断面形を呈し, 壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層で堆積状況の判断は困難であるが, 含有物から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片4点(甕), 須恵器片4点(坏)と, 流れ込んだ礫2点が出土している。土器片は破片のため図示困難である。

所見 雨水を排水していた溝と推測される。時期は, 出土土器と隣接する第113～116号住居跡との関係から9世紀代と考えられる。



第210図 第155号溝跡実測図

表11 平安時代溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係など)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
112	H10e~H10e5	N-17°-E N-30°-E	駒の手状	8.2	0.18~0.40	0.07~0.17	15~25	外積	U字形	自然	土師器、須恵器	SI66-SK698 →土師
155	K7e6~K7b8	N-10°-E N-38°-W	緩曲線状	(13.3)	0.12~0.38	0.06~0.24	7~15	緩斜	U字形	自然	土師器、須恵器	

(4) 土坑

第698号土坑 (第211図)

位置 調査区北東部のH10e5区で、標高26mほどの台地上の緩斜面に位置している。

重複関係 第112号溝に掘り込まれているが、同時期に機能していたと考えられる。

規模と形状 長径2.66m、短径2.17mの不整楕円形で、長径方向はN-18°-Eである。深さは19cm。底面は平坦で、壁は緩斜して立ち上がっている。

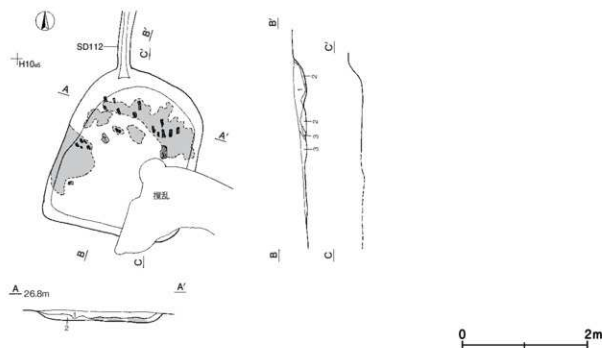
覆土 3層に分層される。不規則な堆積状況と含有物から、人為堆積である。いずれの層も湿気を含んだ締まりの弱い層である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土ブロック微量 3 黒褐色 炭化材・炭化物・焼土ブロック・ロームブロック少量
2 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量、炭化材微量

遺物出土状況 土師器片13点(壺1、甕類12)、須恵器片1点(坏)、縄文土器片1点が出土している。いずれも細片で、図示困難である。

所見 第112号溝跡により第66号住居跡と連結していることと、覆土に焼土や炭化物が含まれて湿気があることから、湿気抜きと灰捨て場を兼ねた土坑と想定される。時期は、出土土器と重複関係から9世紀中葉と考えられる。



第211図 第698号土坑実測図

第822号土坑（第212図）

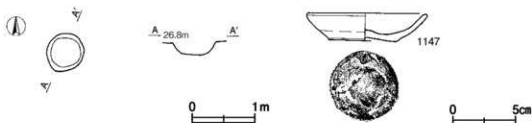
位置 調査区北東部のH10d1区で、標高27mほどの台地上の緩斜面に位置している。

規模と形状 長径0.65m、短径0.56mの楕円形で、長径方向はN-33°-Eである。深さは18cm、底面は平坦で、壁は緩斜して立ち上がっている。

覆土 ロームブロックと炭化粒子を少量含む暗褐色土で、含有物から人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器片10点（皿1、甕類9）、須恵器片1点（甕）が出土している。1147は、覆土中から出土している。

所見 ほぼ同時期と考えられる第35号掘立柱建物跡に近接していることから、何らかの関連があったものと推測され、時期は出土土器から10世紀後半と考えられる。



第212図 第822号土坑・出土遺物実測図

第822号土坑出土遺物観察表（第212図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1147	土師器	甕	9.4	2.2	5.4	長径・短径・底径・胎土に炭化粒子	明赤陶	普通	條部小・内面ロクロナデ後ナデ	底部へ	覆土中 70%

表12 上野古屋敷遺跡 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模(m、深さ12cm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 遺構番号・ 新旧関係(古→新)
				長径×短径	深さ					
698	H10c5	N-18°-E	不整形楕円形	2.66×2.17	19	編斜	平坦	人為	土師器、須恵器	本跡-SD112
822	H10d1	N-33°-E	楕円形	0.65×0.56	18	編斜	平坦	人為	土師器、須恵器	本跡→PC20

7 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物跡44棟、欄跡3列、ビット群48か所、溝跡200条、道路跡11条、井戸跡47基、水溜遺構21基、廃棄土坑1基、方形竪穴遺構12基、地下式坑15基、墓坑27基、火葬土坑6基、土坑110基、土坑群2か所が確認されている。

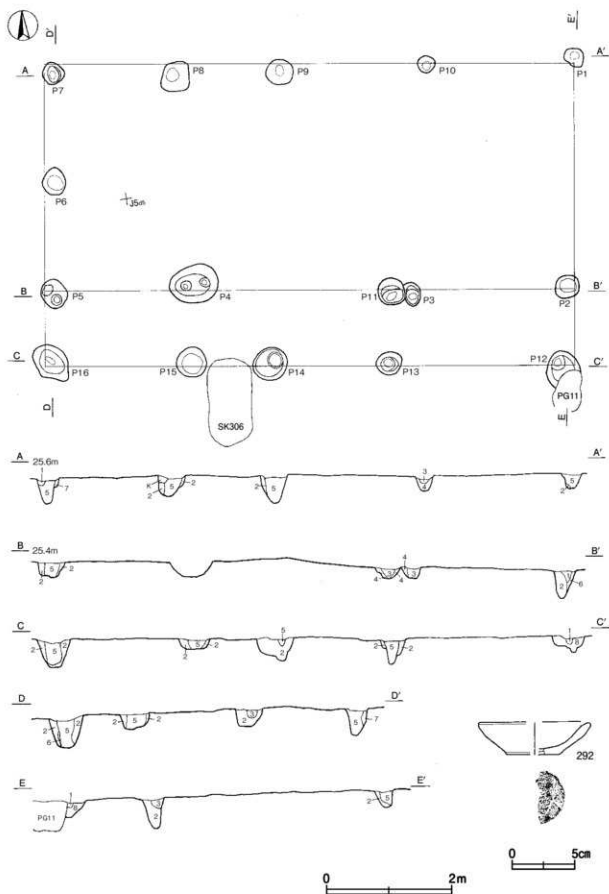
(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第213図）

位置 調査区南部のJ5d5区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第306号土坑を掘り込み、第11号ビット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行2間、南側一面に4間の底を有する側柱建物跡で、桁行方向がN-83°-Wの東西棟である。身舎の規模は桁行8.4m、梁行3.6mで、面積は30.24㎡で、庇は長さ8.4m、幅1.2mである。柱間寸



第213图 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

法は、南桁行が東間から3.0m (10尺)、3.0m (10尺)、2.4m (8尺)、北桁行は東間から2.4m (8尺)、2.4m (8尺)、2.4m (8尺)、1.8m (6尺)、1.8m (6尺)である。西梁行は1.8m (6尺)を基調とし、東梁間は3.6m (12尺)である。

柱穴 16か所。P1～P11は身舎の柱穴で、深さは22～47cmである。P1・P2・P5・P7の四角の掘り方が他に比べて深めである。庇の柱穴であるP12～P16の深さは、20～49cmである。土層は、第1・3・5層が柱抜き取り痕に相当し、他の層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げたローム土と粘土を、突き固めながら埋めたと考えられる。

土層解説 (各柱穴共通)

1 黒褐色 炭化物・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	5 黒褐色 粘土粒子少量、炭化物微量
2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	6 灰黄褐色 粘土ブロック多量、ローム粒子微量
3 黒褐色 炭化物・粘土粒子微量	7 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 暗褐色 粘土ブロック中量	8 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片5点 (皿4、内耳鍋1)、陶器片1点 (灰釉皿) が各柱穴から出土している。その他、確認面上で土師質土器片31点 (皿22、内耳鍋9)、土師器片2点 (坏)、縄文土器片1点、弥生土器片1点が確認されている。292は、P3の抜き取り痕から出土している。

所見 第11号ピット群の柱穴と重複していることで判然としない部分はあるが、本建物は規模と配置から居宅としての機能が想定される。また、付属する施設は、北側4mの地点に位置している第2A・B号掘立柱建物が副屋または納屋などの倉庫的な機能をもっていた建物と考えられる。さらに、南東方16mほどの地点に位置している第3・4号掘立柱建物と主軸方向を同じくしていることから、同時に機能していたと推測される。時期は、構造や出土土器から16世紀代と考えられる。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第213図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
292	土師質土器	皿	[8.8]	2.6	[4.4]	赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロケロナテナテ 底部回転糸切り後ナテ	P3内	49%

第2A号掘立柱建物跡 (第214図)

位置 調査区南部のJ5b5区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第2B号掘立柱建物と同時期と考えられ、第11号ピット群に掘り込まれている。

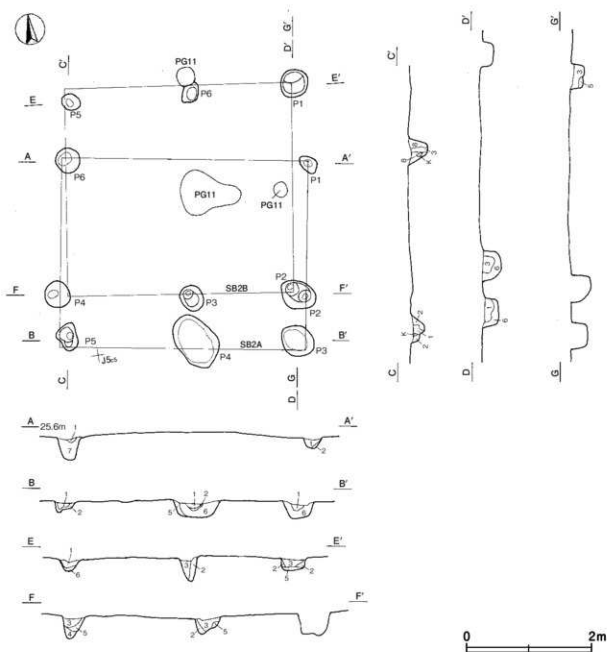
規模と構造 桁行2間、梁行1間と2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-80°-Wの東西棟である。規模は桁行3.9m、梁行3.0mで、面積は、11.70㎡である。柱間寸法は、南桁行が西から2.1m (7尺)と1.8m (6尺)で、北桁行が3.9m (13尺)であり、東梁行が北から2.1m (7尺)と0.9m (3尺)で、西梁行は3.0m (10尺)である。

柱穴 6か所。深さは27～43cmで、掘り方の断面形はU字状を呈しているが、大きさはやや不揃いである。土層は、第1・3層が柱抜き取り痕に相当し、第2・4～8層は埋土である。埋土は地山が粘土質であることから、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。

土層解説 (SB2A・B各柱穴共通)

1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子微量	5 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量	6 暗褐色 粘土ブロック少量
3 黒褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	7 暗褐色 粘土ブロック中量
4 暗褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック微量	8 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片2点 (内耳鍋)、須恵器片1点 (坏) が出土している。土師質土器片はP1とP3の抜き取り痕、須恵器片は確認面からそれぞれ確認されている。



第214図 第2A・2B号掘立柱建物跡実測図

所見 第11号ピット群と重複しているため、判然としないところはあるが、本建物は居宅としての機能が想定される第1号掘立柱建物に付属する施設と推測され、第2B号掘立柱建物と共に副屋か納屋の倉庫的な機能をもっていた建物と考えられる。時期は、構造と出土土器から16世紀代と考えられる。

第2B号掘立柱建物跡 (第214図)

位置 調査区南部のJ5b5区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第2A号掘立柱建物と同時期と考えられ、第11号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間、梁行1間の柵柱建物跡で、桁行方向がN-81°-Wの東西棟である。規模は桁行3.6m、梁行3.3mで、面積は11.88㎡である。柱間寸法は、桁行が1.8m (6尺)で、梁行は3.3m (11尺)である。

柱穴 6か所。深さは21～54cmで、掘り方の断面形はU字状を呈しているが、大きさはやや不揃いである。土層（S B 2 A土層解説を参照）は、第3層が柱抜き取り痕に相当し、第2・5層は埋土である。埋土は地山が粘土質であることから、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。

遺物出土状況 土師質土器片7点（皿5、内耳鍋1、甕1）、縄文土器片1点、弥生土器片1点が出土している。内訳はP1から縄文土器片1点、P4から土師質土器片1点（皿）、P6から土師質土器片6点（皿5、内耳鍋1）が、それぞれ埋土と抜き取り痕から出土しており、確認面からは土師質土器片1点（甕）、弥生土器片1点が確認されている。

所見 第11号ピット群と重複しているため判然としないが、本建物は居宅としての機能が想定される第1号掘立柱建物に付属する施設と推測される。第2A号掘立柱建物跡の建て替えの可能性が考えられ、副屋か納屋の倉庫的な機能をもっていた建物と考えられる。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第215図）

位置 調査区南部のJ5J7区、標高25mほどの台地上に位置している。

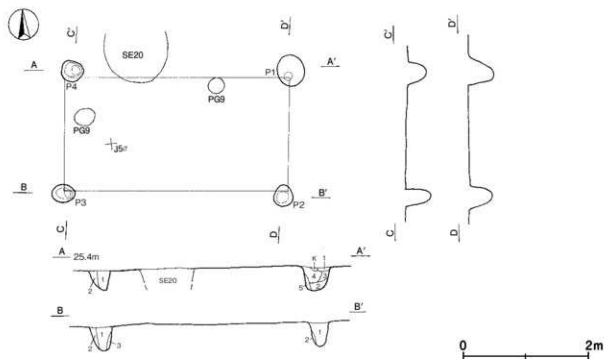
重複関係 第20号井戸と同時期で、第9号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-85°-Wの東西棟である。規模は桁行3.6m、梁行1.8mで、面積は6.48㎡である。柱間寸法は、桁行が3.6m（12尺）で、梁行は1.8m（6尺）である。

柱穴 4か所。深さは34～42cmで、断面形はU字状を呈しており平面形は楕円形である。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2～4層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、P1～P4のいずれの底面も皿状を呈している。

土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 灰黄褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量 | |



第215図 第3号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片6点(皿3、内耳鍋3)、陶器片1点(常滑系甕)、縄文土器片4点が出土している。いずれも、P4の抜き取り痕と埋土からの出土である。

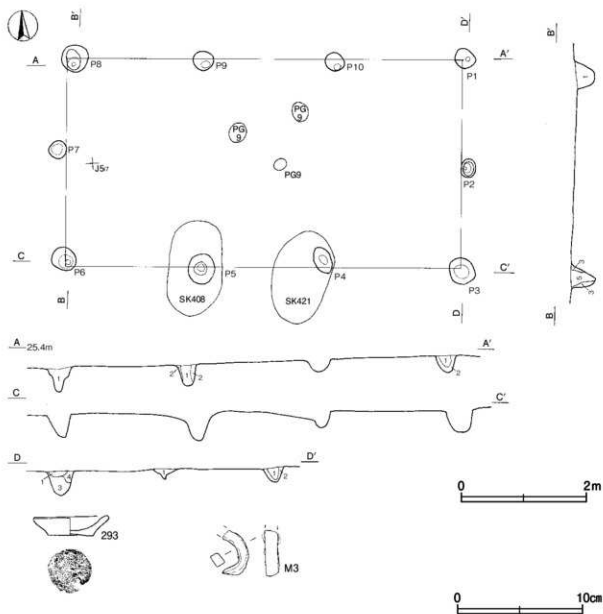
所見 規模と配置から、居宅としての機能が想定される第4号掘立柱建物に付属する施設として、副屋または作業場の類の建物と考えられる。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第4号掘立柱建物跡 (第216図)

位置 調査区南部のJ57区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第408・421号土坑を掘り込み、第9号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の桐柱建物跡で、桁行方向がN-85°-Wの東西棟である。規模は桁行6.3m、梁行3.3mで、面積は20.79㎡である。柱間寸法は、桁行が2.1m(7尺)で、梁行は北間が1.5m(5尺)で、南間は1.8m(6尺)である。



第216図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

柱穴 10か所。深さは、桁行のP1・P3～P6・P8～P10が22～50cm、梁行中央でやや浅く、P2・P7が15cmである。土層は、第1・5層が柱抜き取り痕に相当し、第2～4層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、P2を除いて、いずれの底面も皿状の掘り方である。

土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・褐色酸化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・褐色酸化粒子微量	4 褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・褐色酸化粒子微量
		5 暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量

遺物出土状況 P3から土師質土器片3点(皿)、P9から鉄製品1点(不明)が出土している。293はP3、M3はP9の抜き取り痕からそれぞれ出土している。

所見 居宅としての機能が想定され、北側2mの地点に位置している第21号掘立柱建物(納屋)の類の倉庫的な機能をもっていた付属施設と考えられる。また、南方18mの地点に位置する第3号掘立柱建物と主軸方向を同じくしていることから、同時期に機能していた可能性が高い。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第216図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
293	土師質土器	皿	6.1	1.6	3.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外周にクロナゲ痕ナデ 底部に粘土切り痕ナデ	P3内	100%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M3	不明	(3.6)	2.1	1.0	(8.7)	鉄	筒状に曲がった先端部の破片			P9内	PL123

第5号掘立柱建物跡(第217図)

位置 調査区南部のK4F9区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第335・336・371号土坑を掘り込み、第1号ピット群と同時期と考えられる。

規模と構造 桁行3間、梁行1間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-56°-Eの南北棟である。規模は桁行7.2m、梁行3.6mで、面積は25.92㎡である。柱間寸法は、桁行の両妻側が2.1m(7尺)で、中央間が2.7m(9尺)で、梁行は3.6m(12尺)である。

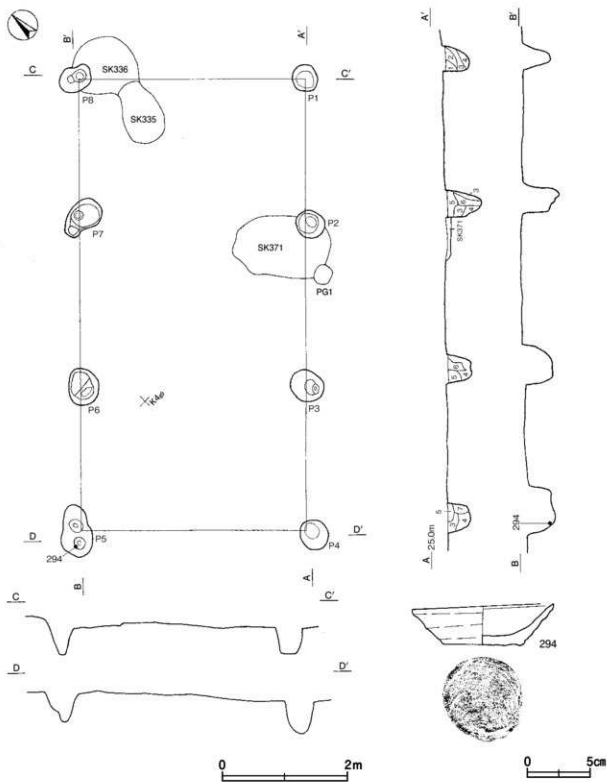
柱穴 8か所。深さは、38～58cmである。土層は、第2・6層が柱抜き取り痕に相当し、第1・3～5・7層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは各柱穴とも不明瞭である。P1・P3・P6は底面が皿状である。

土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子多量、砂粒少量
2 暗褐色	ローム粒子少量	6 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	7 褐色	ロームブロック多量
4 褐色	ローム粒子多量		

遺物出土状況 土師質土器片4点(皿)と、流れ込みと考えられる縄文土器片1点、須恵器片1点がP4とP5から出土している。294は、P5の抜き取り痕から出土している。

所見 規模と配置から居宅としての機能が想定され、時期は、出土土器と隣接する遺構との関係から16世紀代と考えられる。



第217図 第5号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第217図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
294	土師質土器	皿	11.2	3.1	6.2	灰白・石灰・ 質身・黒色粒状	橙	普通	体部内・外周口テロ子後テテ 底面凹 底面切刃残テテ	P 5内	95% PL111

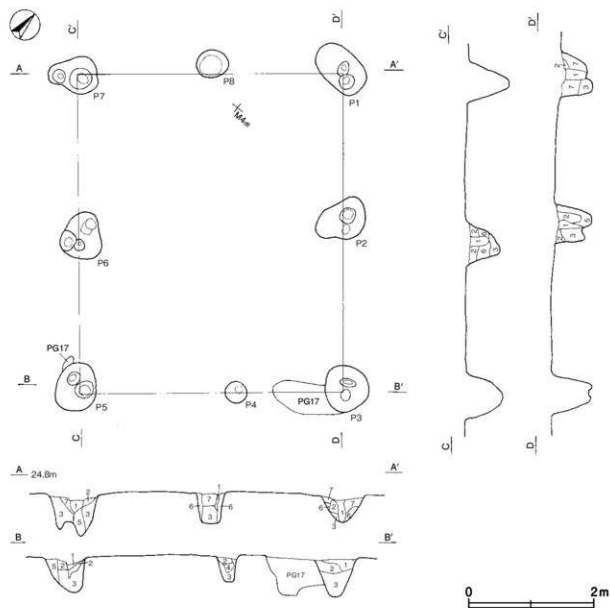
第6号掘立柱建物跡 (第218・219図)

位置 調査区南部のM4 d8区、標高24mほどの台地上に位置している。

重複関係 第17号ピット群を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行2間、梁行2の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-40°-Wの南北棟である。規模は桁行5.1m、梁行4.2mで、面積は21.42㎡である。柱間寸法は、桁行の北間が2.4m(8尺)、南間が2.7m(9尺)で、梁行は北妻が2.1m(7尺)、南妻は東間が1.8m(6尺)、西間が2.4m(8尺)と間尺が異なる。

柱穴 8か所。深さは、桁行のP1~P3・P5~P7が41~67cmで、梁行中央の掘り方がやや小さく、P4が45cm、P8が53cmである。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2~7層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げたローム土と粘土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、P4・P8は底面が皿状または平坦であるが、P1~P3・P5~P7の底面には、くぼみがいずれも2か所以上確認されている。



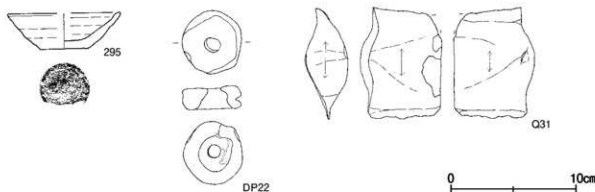
第218図 第6号掘立柱建物跡実測図

土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子微量	5 褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック中量	6 褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
3 灰褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック中量	7 灰褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック中量、炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量		

遺物出土状況 土師質土器片24点（皿21、内耳鍋3）、土製品1点（紡錘車^カ）、石器1点（砥石）と、流れ込んだ縄文土器片1点、須恵器片1点が各柱穴から出土している。295はP3内、DP22はP4内、Q31はP5の確認面からそれぞれ出土している。

所見 居宅としての機能が想定される第20号掘立柱建物に付属する施設として、納屋の類の倉庫的な機能をもっていた建物と推測される。また、本建物のほぼ北側の範囲に位置している第6号ピット群も建物跡と想定され、本跡を含め第20号掘立柱建物を中心とした居住域の一部であったと想定される。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。



第219図 第6号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第219図）

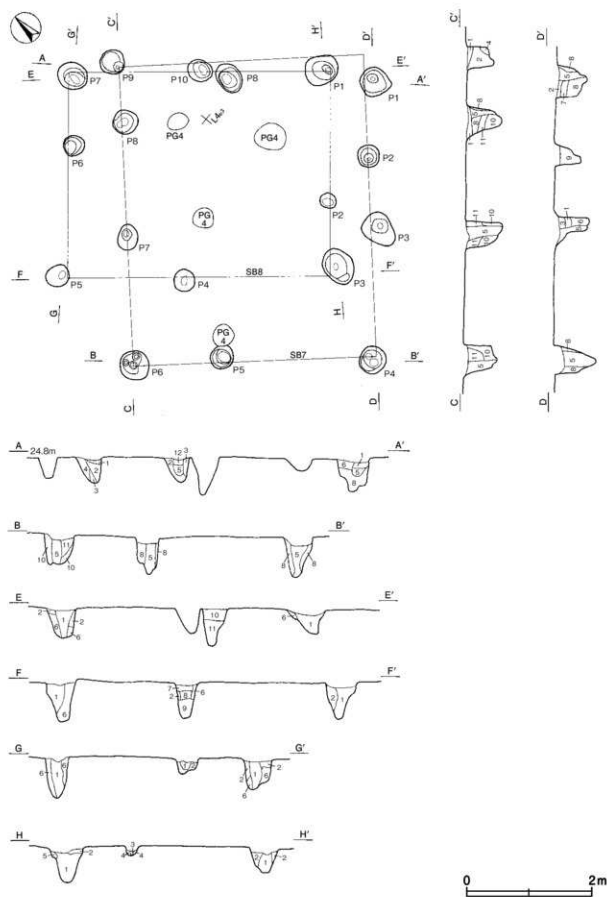
番号	種類	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
295	土師質土器	皿	〔8.8〕	2.8	4.0	灰白・石灰・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面ラテラナテ 分接ナテ 底面刷毛切	P3内	45%
番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
DP22	紡錘車 ^カ	5.0	4.7	1.8	44.0	土製	全面ナテ	一部欠面・摩滅	P4内		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q31	砥石	8.9	6.5	3.4	167.9	凝灰岩	砥面3面		P5確認面		

第7号掘立柱建物跡（第220図）

位置 調査区南部のL4e2区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第8号掘立柱建物と同時期と考えられ、第4号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-49°-Eである。規模は桁行4.8m、梁行3.9mで、面積は18.72㎡である。柱間寸法は、南桁行が東間から1.5m（5尺）、1.2m（4尺）、2.1m（7尺）、北桁行が東間から0.9m（3尺）、1.8m（6尺）、1.8m（6尺）と幅があり、東梁行と西梁桁はどちらも北間から1.5m（5尺）、2.4m（7尺）で、P1の位置がずれている。



第220图 第7·8号掘立柱建物跡実測図

柱穴 10か所。深さは40～66cmで、土層は第1・5層が柱抜き取り痕に相当し、第2～4・6～12層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた粘土ブロックと運び込んだと考えられる砂質ローム土を、突き固めながら埋めたと考えられ、抜き取り痕には粘土質の土を埋め込んでいる。柱のあたりは不明瞭であるが、掘り方の底面はP4がくぼみ面が2か所、P6はくぼみ面が3か所認められ、その他の柱穴の底面は皿状である。

土層解説 (A-A'-D-D' 各柱穴共通)

1 褐 色	砂質粘土ブロック中量	7	にぶい黄色	白色粘土ブロック多量	褐色酸化粒子微量
2 黒 褐色	炭化粒子少量	8	灰 色	白色粘土ブロック多量	
3 黄 褐色	砂質ロームブロック多量	9	暗 褐色	ロームブロック多量	
4 褐 色	砂質ロームブロック中量	10	暗 褐色	砂質ロームブロック少量	
5 暗 褐色	白色粘土ブロック少量	11	褐 色	砂質粘土ブロック多量	
6 灰オリーブ色	白色粘土ブロック中量	12	黒 褐色	炭化粒子微量	

遺物出土状況 土師質土器片8点(皿1、内耳鍋7)と、礫1点が出土している。出土した土器片はいずれも細片で、土師質土器片4点(皿1、内耳鍋3)は確認面、土師質土器片4点(内耳鍋)はP4、礫1点はP6からそれぞれ出土している。

所見 規模と配置から副屋または倉庫として機能していたものと想定され、配置から第8号掘立柱建物建て替えた建物と推測される。本建物が付随する施設として、南東側4mに位置している第10号掘立柱建物が居宅と想定される。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第8号掘立柱建物跡 (第220図)

位置 調査区南部のL4e2区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第7号掘立柱建物と同時期と考えられ、第4号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-41°-Wである。規模は桁行4.2m、梁行3.3mで、面積は13.86㎡である。柱間寸法は、西桁行は北間から1.8m(6尺)、2.4m(8尺)と幅があり、梁行も東妻が東から2.1m(7尺)、0.9m(3尺)と幅がある。

柱穴 8か所。深さは、桁行のP1・P3～P5・P7・P8が38～68cm、梁行中央でやや浅く、P2が48cm、P6が26cmである。土層は、第1・7層が柱抜き取り痕に相当し、第2～6・8～11層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土と砂質粘土ブロックを、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭であり、いずれの柱穴も掘り方の断面形はU字形で、底面は皿状である。

土層解説 (E-E'-H-H' 各柱穴共通)

1 黒 褐色	砂質ロームブロック少量	炭化粒子微量	7 褐 色	ロームブロック・炭化物少量
2 褐 色	砂質粘土ブロック中量		8 暗 褐色	砂質粘土ブロック少量
3 暗 褐色	ロームブロック少量		9 暗 褐色	砂質粘土ブロック多量
4 褐 色	ロームブロック中量		10 暗 褐色	白色粘土ブロック中量、ロームブロック少量
5 黄 褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック微量		11 暗 褐色	ロームブロック中量、白色粘土ブロック少量
6 黄 褐色	砂質ロームブロック中量			

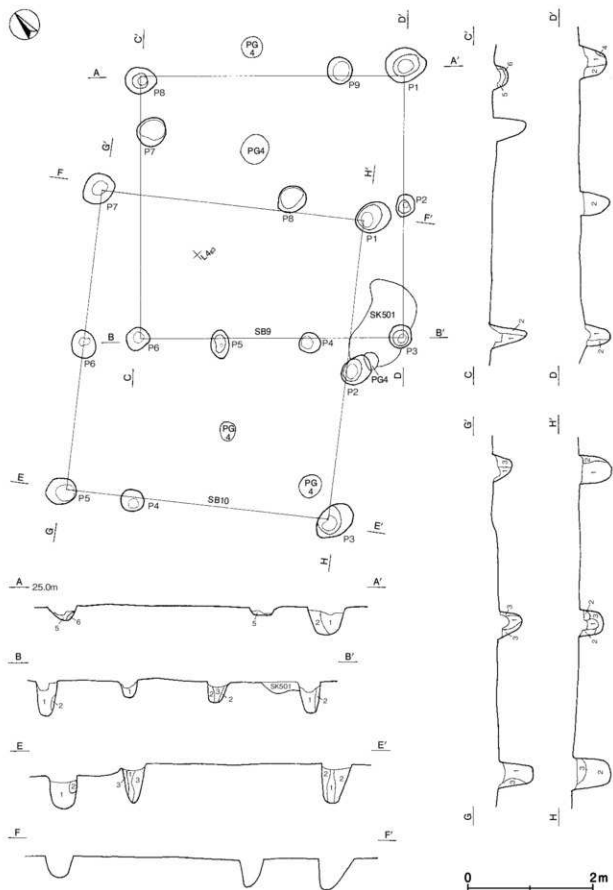
遺物出土状況 土師質土器片2点(皿、内耳鍋)が出土している。出土した土器片はいずれも細片で、皿片はP5、内耳鍋片はP1から出土している。

所見 規模と配置から倉庫的な機能をもっていたと考えられ、南東側4mの地点の居宅として機能していたと想定される第9号掘立柱建物に付随する建物と考えられる。また、配置から第7号掘立柱建物は本建物を建て替えた建物と推測される。時期は、当遺跡の建物跡と出土土器から16世紀代と考えられる。

第9号掘立柱建物跡 (第221図)

位置 調査区南部のL4g3区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第501号土坑を掘り込み、第10号掘立柱建物と第4号ピット群に掘り込まれている。



第221图 第9·10号掘立柱建物实测图

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-43°-Wである。規模は桁行4.2m、梁行4.2mの方形で、面積は17.64㎡である。柱間寸法は、東桁行が北より3.3m（11尺）、0.9m（3尺）、西桁行は北より1.2m（4尺）、1.5m（5尺）、1.5m（5尺）と幅があり、梁行も北梁では東から0.9m（3尺）、3.3m（11尺）、南梁行は2.1m（7尺）である。

柱穴 9か所。深さは、12～54cmである。土層は、第1・3層が柱抜き取り痕に相当し、第2・4～6層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた粘土質の土とローム土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭であり、掘り方の断面形はU字形を呈し、底面は皿状である。

土層解説（A-A'-D-D' 各柱穴共通）

1 黒褐色 白色粘土ブロック微量	4 褐色 砂質ロームブロック多量、白色粘土ブロック中量
2 黒褐色 白色粘土ブロック中量、ロームブロック少量	5 褐色 砂質ロームブロック中量
3 暗褐色 白色粘土ブロック少量	6 褐色 白色粘土ブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片5点（皿1、内耳鍋4）が出土している。いずれも細片で、P5から出土している。
所見 規模と配置から倉庫としての機能をもっていたと考えられる。また本建物は、配置から第10号掘立柱建物に建て替えられる前の建物と推測される。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第10号掘立柱建物跡（第221図）

位置 調査区南部のL4g2区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第501号土坑、第9号掘立柱建物跡を掘り込み、第4号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-48°-Eである。規模は桁行4.8m、梁行4.2mで、面積は20.16㎡である。柱間寸法は、桁行が2.4m（8尺）で、梁行は東梁行は北より3.0m（10尺）、1.2m（4尺）、西梁行は北より1.2m（4尺）、3.0m（10尺）である。

柱穴 8か所。深さは、33～64cmである。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2～4層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭であり、掘り方の断面形はU字形で、底面は皿状である。

土層解説（E-E'、G-G'、H-H' 各柱穴共通）

1 麻暗褐色 ロームブロック微量	3 暗褐色 ロームブロック中量、白色粘土ブロック少量
2 暗褐色 白色粘土ブロック中量、ロームブロック少量	

遺物出土状況 土師質土器片1点（内耳鍋）が、P6から細片で出土している。

所見 本建物は、配置と桁行方向から第9号掘立柱建物跡を建て替えた建物と推測される。規模と配置から、北西側4mに位置している第7号掘立柱建物と同時期に機能していたと考えられ、出土土器と周囲の遺構との関係から16世紀代と考えられる。

第12号掘立柱建物跡（第222図）

位置 調査区南部のK5h4区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第19A・27号溝跡、第469号土坑を掘り込み、第12号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-61°-Wである。規模は桁行7.8m、梁行3.0mで、面積は23.4㎡である。柱間寸法は桁行が西から2.1m（7尺）、2.1m（7尺）、3.6m（12尺）で、梁行は3.0m（10尺）である。

柱穴 8か所。深さは、22～50cmと幅があり、掘り方の断面形はU字形である。土層は第1・3層が柱抜き取り痕に相当し、第2・4～8層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら

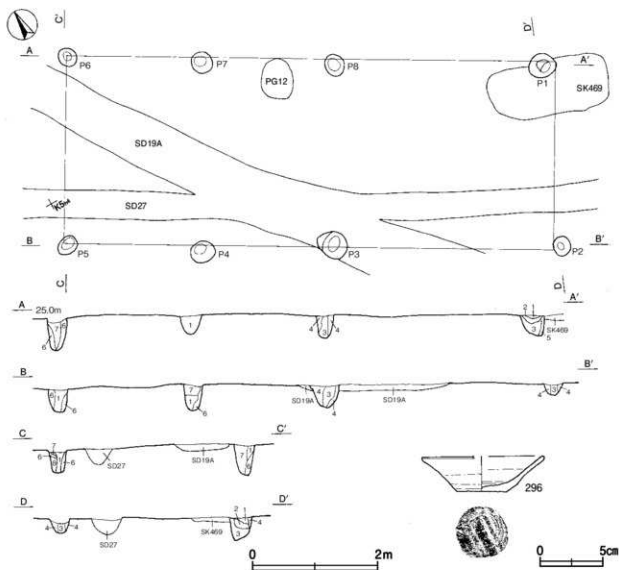
埋め立てたと考えられる。柱のあたりは不明瞭であり、底面はいずれの柱穴も皿状にくぼんでいる。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量、粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 黒褐色 | 白色粘土ブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | 黄褐色粘土ブロック中量 |

遺物出土状況 土師質土器片 2点 (皿) がP 6 から出土している。296は、その資料である。

所見 規模と構造的に居宅としての機能が想定され、付属する施設は、重複する第12号ピット群域に倉庫的な機能をもつ建物があったものと想定されるが、明確ではない。時期は、当遺跡の建物跡と出土土器から16世紀代と考えられる。



第222図 第12号掘立柱建物跡・出土土器実測図

第12号掘立柱建物跡出土土器観察表 (第222図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
296	土師質土器	皿	[98]	2.8	4.0	長石・褐色粒子・白色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 与儀ナデ・スノコ板ナデ	P 6内	60%

第13号掘立柱建物跡 (第223図)

位置 調査区南部のK5g4区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第19A号溝跡を掘り込み、第12号ピット群と同時期と考えられる。

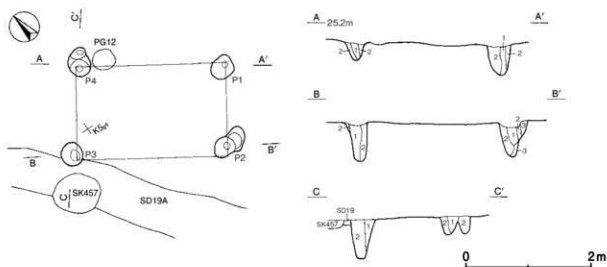
規模と構造 桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-56°-Wである。規模は桁行2.4m、梁行1.5mで、面積は3.6㎡である。柱間寸法は、桁行は2.4m(8尺)であり、梁行は1.5m(5尺)である。

柱穴 4か所。深さは28～62cmで、掘り方の断面形はU字形である。土層は第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2・3層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは明瞭ではないが、いずれの柱穴も底面は皿状である。P4は東側からの別の掘り込みが確認されており、柱の建て替えあるいは補強がなされたと推測される。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 粘土粒子少量 | 3 暗褐色 ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量 | |

所見 本建物は、規模と構造的に小規模な倉庫としての機能が想定される。付属する施設は、重複する第12号ピット群域に居宅の機能をもつ建物があったと推測されるが、明確ではない。時期は、構造と他の建物跡との関係から16世紀代と考えられる。



第223図 第13号掘立柱建物跡実測図

第14号掘立柱建物跡 (第224図)

位置 調査区南部のK5i4区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第44号土坑、第15号掘立柱建物跡を掘り込み、第12号ピット群とは同時期と考えられる。

規模と構造 桁行2間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-26°-Eである。規模は桁行3.3m、梁行2.7mで、面積は8.91㎡である。柱間寸法は、桁行が南より1.5m(5尺)、1.8m(6尺)で、梁行は2.7m(9尺)である。

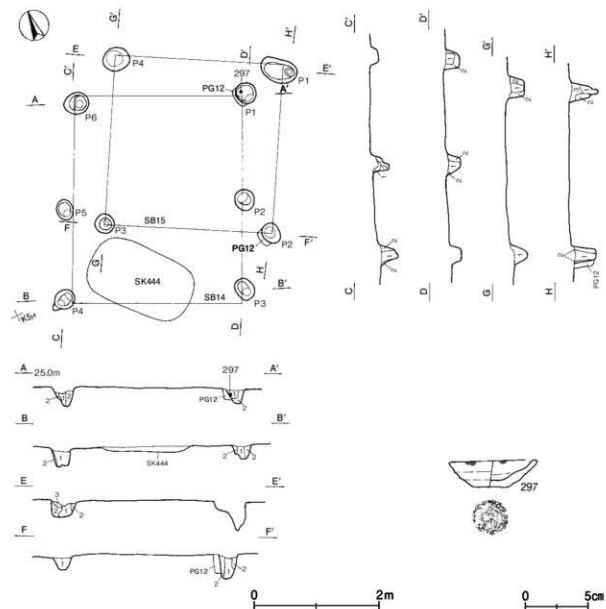
柱穴 6か所。深さは22～33cmで、掘り方の断面形はいずれもU字形である。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説 (A-A'-D-D' 各柱穴共通)

- | | |
|----------------|------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック少量 | 2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量 |
|----------------|------------------------|

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)が、P1から出土している。297は、その資料である。

所見 配置的に第15号掘立柱建物跡を建て替えた建物と考えられ、機能的に倉庫と想定される。付属する施設は、重複する第12号ピット群域に居宅の機能をもっていた建物があったものと推測されるが、明確ではない。時期は、出土土器と周囲の遺構との関係から16世紀代と考えられる。



第224図 第14・15号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第14号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第224図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
297	土師質土器	皿	7.0	2.2	2.8	長石・石英・炭屑・赤色鉄子	橙	普通	体部内・外周口クロナデ 底部回転車切 与後ナデ	P1内	100%1形部保 行着

第15号掘立柱建物跡(第224図)

位置 調査区南部のK514区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第14号掘立柱建物、第12号ピット群に掘り込まれているが、時期差はあまりないと考えられる。

規模と構造 桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行がN-29°-Eである。規模は桁行27m、梁行27mで、面積は7.29㎡である。柱間寸法は、桁行・梁行ともに2.7m（9尺）である。

柱穴 4か所。深さは22～47cmと不揃いで、掘り方の断面形はP1が漏斗状にくぼみ、P2～P4はU字形である。土層は第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2・3層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた粘土質の土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、P1の底面がくぼみほかは、いずれの底面も皿状である。

土層解説（E-E'～H-H' 各柱穴共通）

- | | |
|------------------------|----------------|
| 1 黒褐色 粘土粒子少量 | 3 黒褐色 粘土ブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 | |

所見 第14号掘立柱建物と同様に規模と構造的に倉庫としての機能が想定される。付属する施設は、重複する第12号ピット群域に居宅の機能をもつ建物があったと推測されるが、明確ではない。時期は、構造と他の建物跡との関係から16世紀代と考えられる。

第16号掘立柱建物跡（第225図）

位置 調査区南部のK5g6区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第12号ピット群、第377号土坑とはほぼ同時期と考えられる。

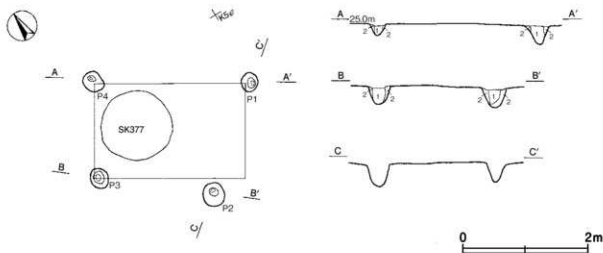
規模と構造 桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-59°-Wである。規模は桁行2.4m、梁行1.5mで、面積は3.6㎡である。柱間寸法はP2の位置が不規則であるが、桁行が2.4m（8尺）で、梁行は1.5m（5尺）である。

柱穴 4か所。深さは24～37cmで、掘り方の断面形はU字形である。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 2 黒褐色 ロームブロック多量 |
|-----------------|-----------------|

所見 西側6mの地点に位置している第13号掘立柱建物跡と同規模で、倉庫としての機能が想定される。また、深さ91cmの第377号土坑を便槽と考えれば、それに付随する上屋の施設と想定される。時期は、当遺跡の建物跡の傾向と隣接する遺構との関係から16世紀代と考えられる。



第225図 第16号掘立柱建物跡実測図

第17号掘立柱建物跡 (第226図)

位置 調査区南部のK5 e4区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第12号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-62°-Wである。規模は桁行3.6m、梁行2.4mで、面積は8.64㎡である。柱間寸法は、桁行が3.6m(12尺)で、梁行は2.4m(7尺)である。

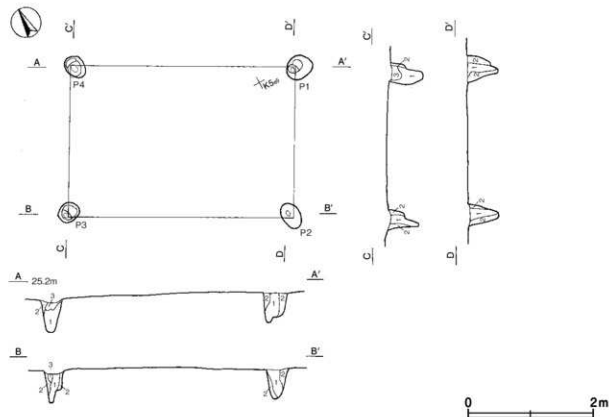
柱穴 4か所。深さは48～52cmで、掘り方の断面形はU字形または漏斗形である。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2・3層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状または碗状にくぼんでいる。

土層解説 (各柱穴共通)

- 1 黒褐色 粘土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量

- 3 暗褐色 ロームブロック多量

所見 規模的に副屋または倉庫としての機能が想定される。本建物が付属する施設は、重複する第12号ピット群域にあったと推測されるが、明確ではない。時期は、当遺跡の建物跡の傾向と周囲の遺構との関係から、16世紀代と考えられる。



第226図 第17号掘立柱建物跡実測図

第18号掘立柱建物跡 (第227図)

位置 調査区南部のL4 d0区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第58号溝跡を掘り込み、第19号掘立柱建物、第13号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

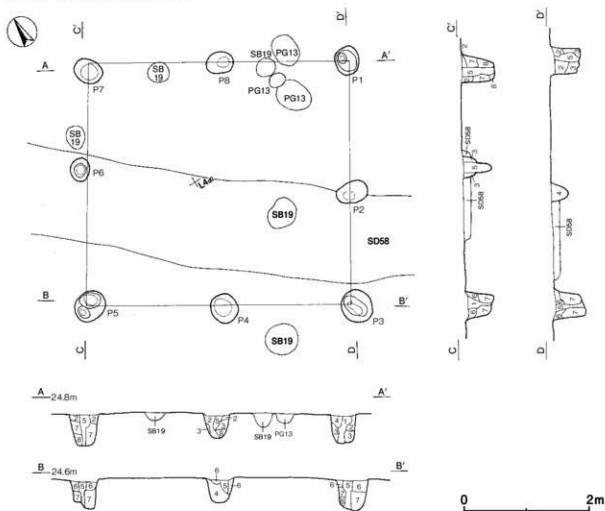
規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-59°-Wである。規模は桁行4.2m、梁行3.9mで、面積は16.38㎡である。柱間寸法は、桁行が2.1m(7尺)で、梁行は両妻が1.8m(6尺)と2.1m(7尺)と間尺が異なる。

柱穴 8か所。深さは26～53cmでやや不揃いであるが、四方のP1・P3・P5・P7の掘り方は桁行・梁行中央のP2・P4・P6・P8と比較して規模がやや大きい。土層は、第1・5層が柱抜き取り痕に相当し、第2～4・6～8層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土と粘土ブロックを、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|--------|-----------------------|----------|-------------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量 | 6 黒 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 7 灰 黄 褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 暗 褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック少量 | 8 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック少量 |
| 4 暗 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量 | | |
| 5 黒 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | | |

所見 規模と配置から倉庫として機能していたと想定され、配置から第19号掘立柱建物は本建物の後に建て替えた建物と推測され、関連する施設は、第13号ピット群域に存在が推測されるが、明確ではない。時期は、重複関係から16世紀代と考えられる。



第227図 第18号掘立柱建物跡実測図

第19号掘立柱建物跡 (第228図)

位置 調査区南部のL4 d9区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第58号溝跡を掘り込み、第18号掘立柱建物、第13号ピット群とほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行3間、梁行1間と2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-30°-Eである。規模は桁行6.3m、

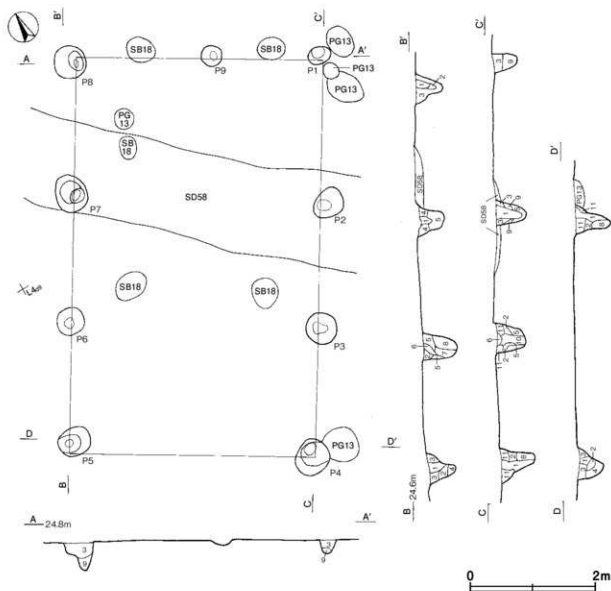
梁行3.9mで、面積は2457㎡である。柱間寸法は、桁行が2.1m（7尺）であり、梁行は南妻が3.9m（13尺）で、北妻は東から1.8m（6尺）、2.1m（7尺）である。

柱穴 9か所。P1～P8は深さ39～61cmで掘り方の規模が大きく、梁行の北妻中央のP9は深さ12cmで掘り方が浅めである。土層は、第1・6・10層が柱抜き取り痕に相当し、第2～5・7～11層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土と粘土ブロックを、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|----------------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | 粘土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 5 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 | 10 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| | | 11 暗褐色 | ローム粒子多量、粘土ブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点（皿、内耳鍋）が、P8から細片で出土している。

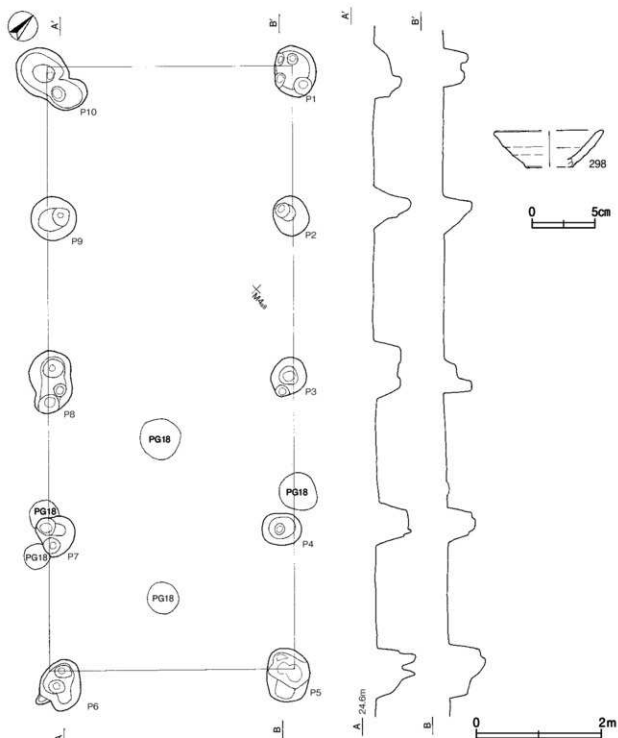


第228図 第19号掘立柱建物跡実測図

所見 規模と配置から居宅として機能していたものと想定され、関連する施設は、第13号ピット群域に納屋などの倉庫的な機能をもっていた建物があったと推測されるが、明確ではない。時期は、他の建物跡と出土土器から、16世紀代と考えられる。

第20号掘立柱建物跡 (第229図)

位置 調査区南部のM4a7区、標高24mほどの台地上に位置している。



第229図 第20号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

重複関係 第18号ピット群を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行4間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-48°-Wである。規模は桁行96m、梁行39mで、面積は3744㎡である。柱間寸法は、桁行が2.4m（8尺）で、梁行は3.9m（13尺）である。

柱穴 10か所。深さは40～65cmで、いずれの掘り方も他の同時期の掘立柱建物跡に比べ大きめである。P1・P3・P5～P8・P10の底面には凸凹があり、何度か柱の立て替えが行われたものと推測される。

遺物出土状況 土師質土器片10点（皿6、内耳鍋4）、縄文土器片2点が出土している。土器片はいずれも細片で、P3から土師質土器片7点（皿5、内耳鍋2）、P5から土師質土器片2点（内耳鍋）・縄文土器片2点、P10から土師質土器片1点（皿）であり、298はP3から出土している。

所見 規模と配置から居宅として機能していたものと想定される。P7と重複している第18号ピット群の一部は、配置的に本建物の束柱の可能性が考えられるが、明確ではない。関連する施設は、4mほど南の地点に位置している第6号掘立柱建物があげられる。また、重複する第18号ピット群や隣接する第7号ピット群のなかにも関連していた建物があったと推測されるが、明確ではない。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第229図）

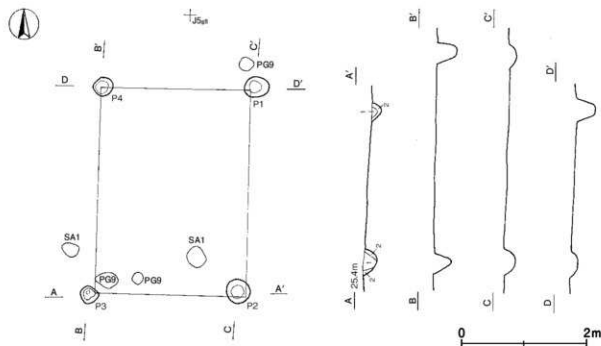
番号	種別	器種	口径	器高	口径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
298	土師質土器	皿	(88)	3.0	(40)	粘土・黄緑・赤色 粒多	橙	普通	体部内・外面口ロナデ	P3内	10%

第21号掘立柱建物跡（第230図）

位置 調査区南部のJ5g7区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第1号欄跡を掘り込み、第9号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Eである。規模は桁行3.3m、梁行2.4mで、面積は7.92㎡である。柱間寸法は、桁行が3.3m（11尺）で、梁行は2.4m（8尺）である。



第230図 第21号掘立柱建物跡実測図

柱穴 4か所。深さは14～35cmで、掘り方の断面形はいずれもU字形である。土層は第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋め立てたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説 (P2・P3共通)

1 麻屑 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

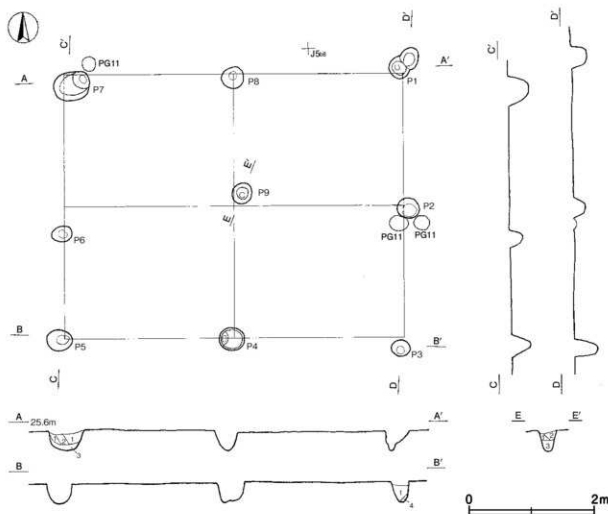
所見 規模的に倉庫としての機能が想定される。関連する施設は特定できず、重複する第9号ピット群域に居住の機能をもつ建物があったと推測されるが、明確ではない。時期は、他の建物跡との構造が同じことから16世紀後半と考えられる。

第22号掘立柱建物跡 (第231図)

位置 調査区南部のJ5b7区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第11号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-86°-Wの東西棟である。規模は桁行5.4m、梁行4.2mで、面積は22.68㎡である。柱間寸法は、桁行が2.7m(9尺)で、梁行は南より1.8m(6尺)と2.4m(8尺)である。



第231図 第22号掘立柱建物跡実測図

柱穴 9か所。深さは梁行中央でやや浅く、P2が20cm、P6が18cmで、その他は30～38cmである。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2～4層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土と粘土ブロックを、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説 (P3・P7・P9共通)

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

所見 第2B号掘立柱建物跡のほぼ東側に隣接し、居宅の機能が想定される第1号掘立柱建物に付属する倉庫的な施設と推測される。時期は、隣接する遺構との関係から16世紀代と考えられる。

第23号掘立柱建物跡 (第232図)

位置 調査区南東部のM5h1区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第1221・1227号土坑を掘り込み、第41号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行1間と2間、梁行1間の竪柱建物跡で、桁行方向がN-52°-Eである。規模は桁行3.6m、梁行2.1mで、面積は7.56㎡である。柱間寸法は、北桁行が西から1.8m (6尺)、1.8m (6尺)、南桁行は3.6m (12尺)で、梁行は2.1m (7尺)である。

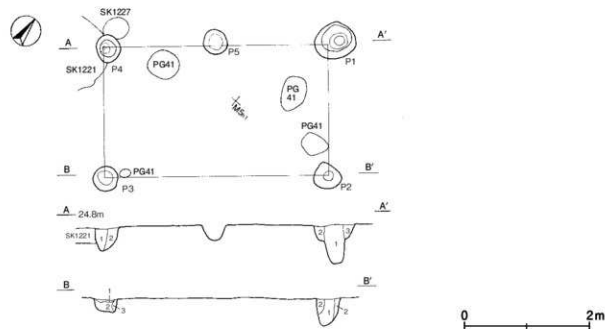
柱穴 5か所。深さは、20～62cmと幅がある。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2～3層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土と粘土ブロックを、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説 (P1～P4共通)

- | | |
|-----------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 土師質土器片15点 (皿2、内耳鍋13) が、細片で出土している。P3から皿片1点と内耳鍋片13点が、P4から皿片1点がそれぞれ出土している。

所見 第41号ピット群と重複しているために判然としないが、規模と配置から副屋として機能していたものと



第232図 第23号掘立柱建物跡実測図

想定される。関連する施設は、隣接する第24号掘立柱建物が居宅と推測される。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第24号掘立柱建物跡 (第233図)

位置 調査区南東部のM5h1区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第987～989・1208・1211～1214号土坑を掘り込み、第41号ピット群に掘り込まれている。

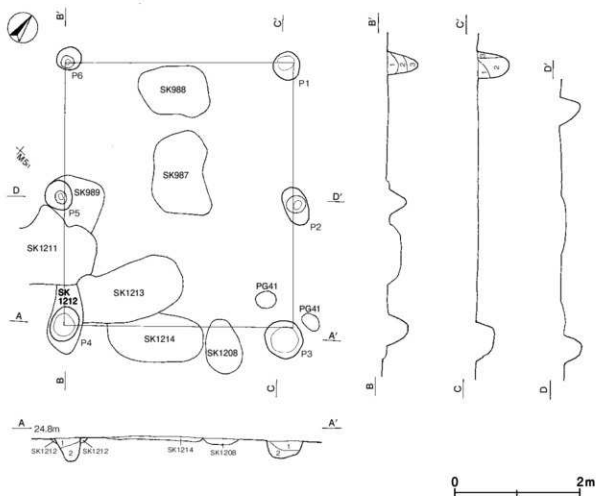
規模と構造 桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-41°-Wである。規模は桁行4.2m、梁行3.6mで、面積は15.12㎡である。柱間寸法は、桁行が2.1m(7尺)で、梁行は3.6m(12尺)である。

柱穴 6か所。深さは、28～58cmと幅がある。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2・3層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土と粘土ブロックを、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説 (P1・P3・P4・P6共通)

- | | | | |
|-------|----------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

所見 第41号ピット群と重複しているために判然としませんが、規模と配置から居宅として機能していたものと想定される。隣接している第23号掘立柱建物が、規模と配置から副屋と推測される。時期は、当遺跡の建物跡の傾向から16世紀代と考えられる。



第233図 第24号掘立柱建物跡実測図

第31号掘立柱建物跡 (第234図)

位置 調査区北東部のG 9 h6区、標高27mほどの台地上に位置している。

重複関係 第54号住居跡と第650号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-24°-Wである。規模は桁行4.5m、梁行3.0mで、面積は13.5㎡である。柱間寸法は、桁行が南より2.1m(7尺)、2.4m(8尺)で、梁行は1.5m(5尺)である。

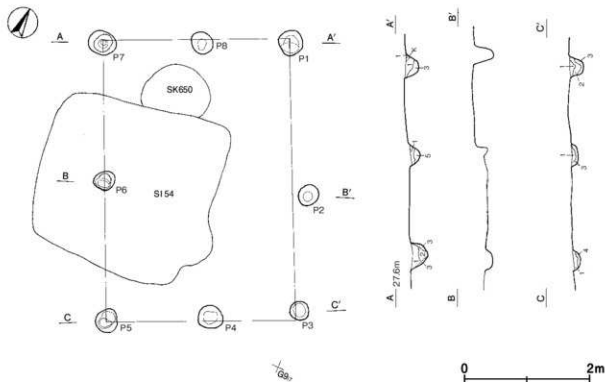
柱穴 8か所。耕作による削平のために、深さは12~33cmと浅く不揃いである。土層は、第1・2・5層が柱抜き取り痕に相当し、第3・4層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げたローム土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは不明瞭で、いずれの底面も皿状である。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 5 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿、内耳鍋)、土師器片17点(坏類10、甕類7)、須恵器片4点(甕類)、縄文土器片2点が各柱穴から出土しているが、土師器・須恵器片の多くは重複した住居跡からの混入である。細片ではあるが、土師質土器片が本跡に伴う遺物と考えられる。

所見 規模と配置から副屋あるいは倉庫として機能していたものと想定される。関連する施設は、不明である。時期は、重複関係と出土土器から16世紀代と考えられる。



第234図 第31号掘立柱建物跡実測図

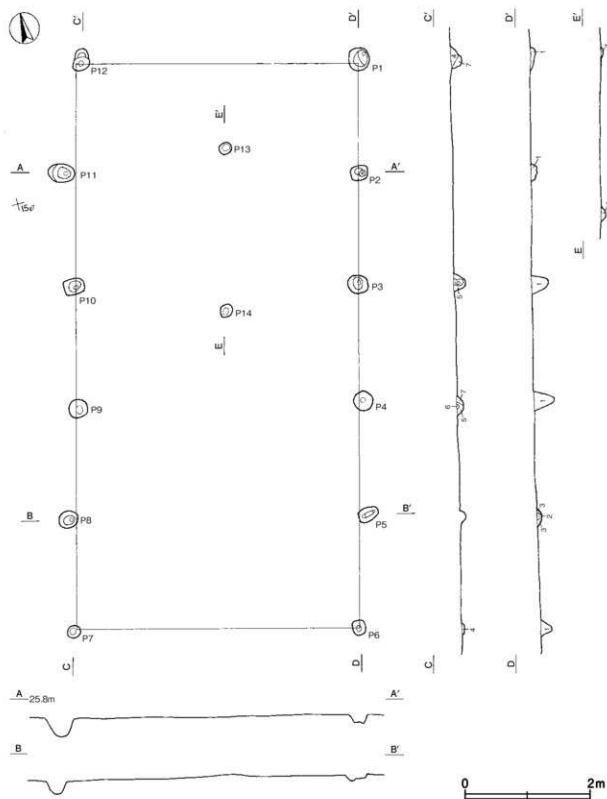
第32号掘立柱建物跡 (第235図)

位置 調査区北部のG10j0区、標高27mほどの台地上に位置している。

重複関係 第108号溝に掘り込まれている。

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿)が、P10から細片で出土している。

所見 規模と形態から居宅として機能していたものと想定される。関連する施設としては、隣接する第24号ピット群域に存在したと推測される。時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。



第236図 第36号掘立柱建物跡実測図

第51号掘立柱建物跡 (第237図)

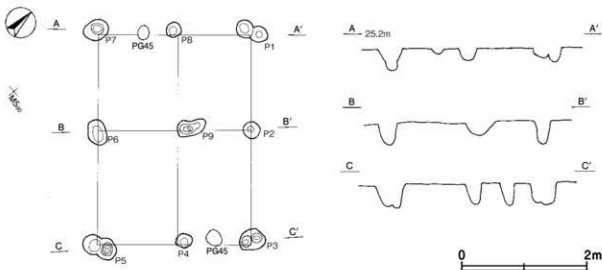
位置 調査区南東部のM5c0区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第45号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-52°-Wである。規模は桁行3.3m、梁行2.4mで、面積は7.92㎡である。柱間寸法は、桁行が北より1.5m(5尺)、1.8m(6尺)で、梁行は1.2m(4尺)である。

柱穴 9か所。深さは19～42cmで、掘り方の断面形はU字形である。柱のあたりは不明瞭で、P1・P3・P5は底面が凸凹であることから、柱の立て替えの可能性も推測される。

所見 規模と配置から倉庫として機能していたものと想定される。関連する施設は、北東方向4mほどの地点に位置している第52・53号掘立柱建物跡で、規模的に副屋と推測される。時期は、重複関係と近接する建物との関連から、16世紀代と考えられる。



第237図 第51号掘立柱建物跡実測図

第52号掘立柱建物跡 (第238図)

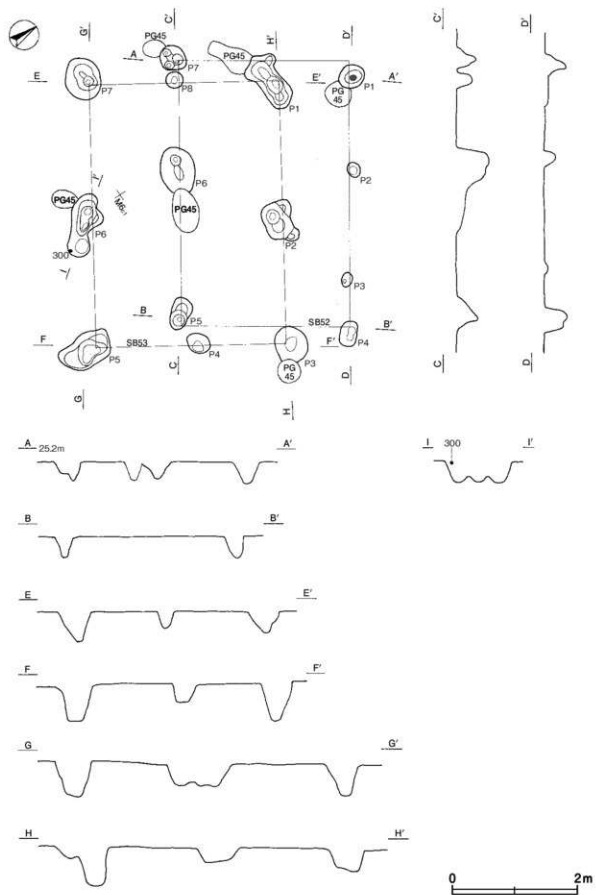
位置 調査区南東部のM6b1区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第53号掘立柱建物跡、第45号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行2間と3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-56°-Wである。規模は桁行4.2m、梁行2.7mで、面積は11.34㎡である。柱間寸法は、東桁行が南から0.9m(3尺)、1.5m(5尺)、1.8m(6尺)で、西桁行は南から2.7m(9尺)、1.5m(5尺)である。梁行は2.7m(9尺)である。

柱穴 7か所。深さは15～51cmと不揃いであるが、角のP1・P4・P5・P7は30～37cmと掘り方は規則的である。柱のあたりはP1の底面で確認されたが、他は不明瞭である。P4・P5・P7は底面が凸凹であることから、柱の立て替えの可能性が推測される。

所見 第45号ピット群と重複し判然としませんが、規模と配置から副屋として機能していたものと想定される。関連する施設は、規模と構造的に北側に隣接する第54号掘立柱建物跡が居宅であり、南西方向4mの地点に位置している第51号掘立柱建物跡が倉庫と推測される。時期は、重複関係と近接する建物跡との関連から、16世紀代と考えられる。



第238图 第52·53号掘立柱建物跡实测图

第53号掘立柱建物跡 (第238・239図)

位置 調査区南東部のM6b1区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第52号掘立柱建物、第45号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

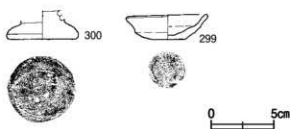
規模と構造 桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-57°-Wである。規模は桁行4.2m、梁行3.0mで、面積は12.6㎡である。柱間寸法は、桁行が2.1m(7尺)で、梁行は1.5m(5尺)である。

柱穴 8か所。深さは、角のP1・P3・P5・P7は31~64cmで、掘り方の規模も大きい。桁・梁行間のP2・P4・P6・P8は27~36cmで、掘り方も小さめである。柱のあたりは不明瞭で、P1・P2・P5~P7は底面が凸凹であることから、柱の立て替えの可能性が推測される。

遺物出土状況 299と300の土師質土器片2点(皿)

が、P6の覆土中と覆土上層から出土している。

所見 規模と配置から副屋として機能していたものと想定され、規模的に第52号掘立柱建物跡を建て替えた建物と推測される。関連する施設は、規模と構造から北側に隣接している第54号掘立柱建物が居宅、南西方向4mの地点に位置している第51号掘立柱建物が倉庫と推測される。時期は、重複関係を隣接する建物跡との関連から、16世紀代と考えられる。



第239図 第53号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第53号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第239図)

番号	種類	器種	1径	器高	底径	胎土	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
299	土師質土器	皿	6.4	2.1	2.8	長石・石英・赤色 粘土	橙	体部内・外面ロクロナデ 台縁ナデ	底部回転糸切	P6内	100%
300	土師質土器	拍翼高台皿	—	(2.3)	5.6	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	外面ロクロナデ 底部回転 糸切	P6覆土上層	80%

第54号掘立柱建物跡 (第240図)

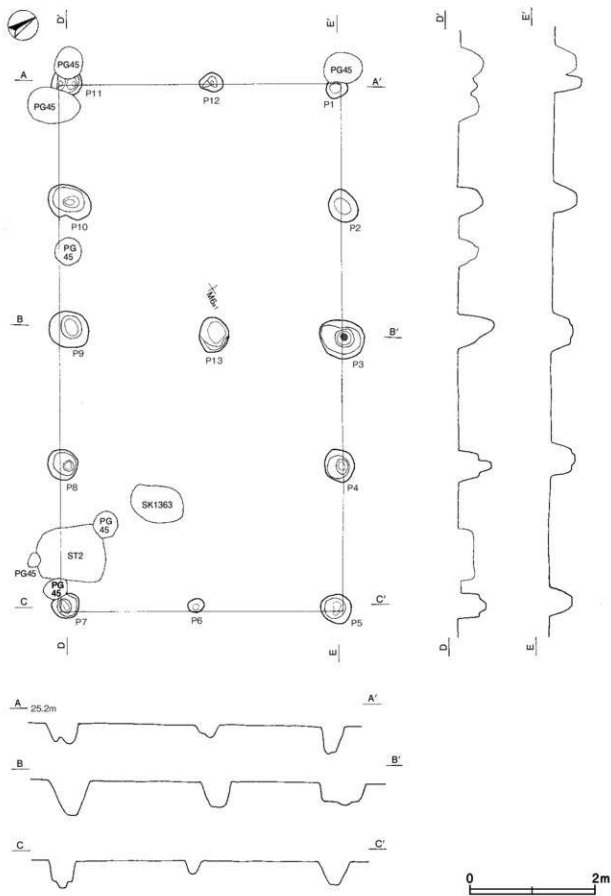
位置 調査区南東部のM6a1区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第2号墓坑、第1363号土坑を掘り込み、第45号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-58°-Wである。規模は桁行8.4m、梁行4.5mで、面積は37.8㎡である。柱間寸法は、桁行が西から1.8m(6尺)、2.1m(7尺)、2.1m(7尺)、2.4m(8尺)で、梁行は2.1m(7尺)と2.4m(8尺)である。

柱穴 13か所。深さは、梁行間のP6とP12がともに20cmで、P1~P5・P7~P11・P13は31~56cmである。柱のあたりはP3に確認できるが、他は不明瞭である。P11の底面は凸凹であることから、柱の立て替えの可能性が推測される。P13は、配置的に東柱の類と考えられる。

所見 第45号ピット群と重複し判然としないが、規模と配置から居宅として機能していたものと想定される。関連する施設として、規模と構造的に南側に隣接している第52・53号掘立柱建物を副屋とし、南西方向6mの地点に位置している第51号掘立柱建物が倉庫と推測される。時期は、重複関係を隣接する建物跡との関連から、16世紀代と考えられる。



第240图 第54号掘立柱建物跡実測図

第55号掘立柱建物跡 (第241図)

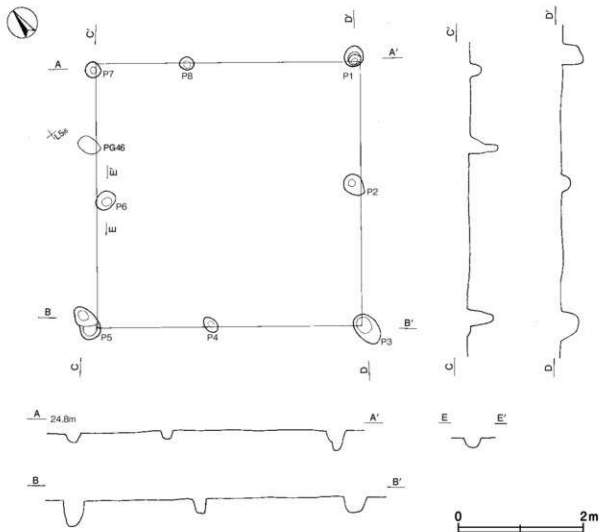
位置 調査区南東部のL5 j6区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第46号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-36°-Eである。規模は桁行4.2m、梁行4.2mで、面積は17.64㎡である。柱間寸法は、桁行が2.1m(7尺)、梁行は北妻で東から2.7m(9尺)、1.5m(5尺)、南妻が東から2.4m(8尺)、1.8m(6尺)である。

柱穴 8か所。北西側が耕作による削平を受けているため、深さは14~43cmと不揃いである。柱のあたりは不明瞭で、底面はいずれも皿状である。

所見 規模と配置から倉庫または副屋として機能していたものと想定される。関連する施設は、北東方向4mの地点に位置している第56号掘立柱建物跡が居宅と推測される。時期は、当遺跡の建物跡の傾向から、16世紀代と考えられる。



第241図 第55号掘立柱建物跡実測図

第56号掘立柱建物跡 (第242図)

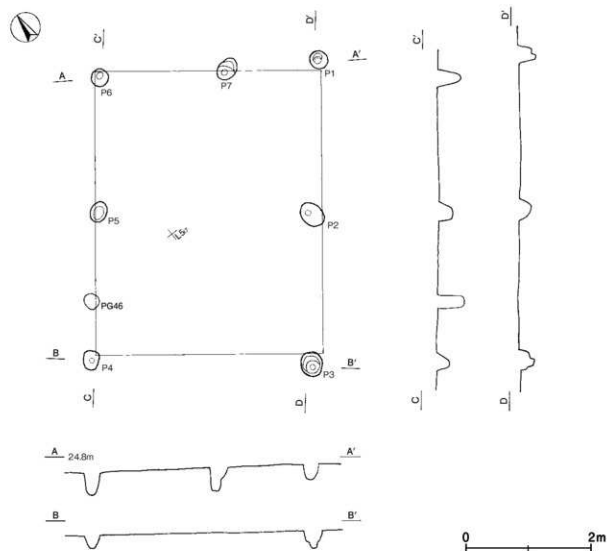
位置 調査区南東部のL5 h7区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第46号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行2間、梁行1間と2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-40°-Eである。規模は桁行4.5m、梁行3.6mで、面積は16.2㎡である。柱間寸法は、桁行が北から2.1m（7尺）、2.4m（8尺）で、梁行は東梁行が南から1.5m（5尺）、2.1m（7尺）、西梁行が3.6m（12尺）である。

柱穴 7か所。南西側が耕作による削平を受けているため、深さは21～44cmと不揃いである。あたりは不明瞭で、掘り方の断面形はいずれもU字形または漏斗形を呈しており、底面は皿状である。

所見 規模と配置から居宅として機能していたものと推測される。関連する施設は、南西方向4mの地点に位置している第55号掘立柱建物跡が倉庫と推測される。第55・56号掘立柱建物跡とも、桁行・梁行が不規則なところが特徴的である。時期は、重複関係と隣接する建物跡との関係から、16世紀代と考えられる。



第242図 第56号掘立柱建物跡実測図

第57号掘立柱建物跡（第243図）

位置 調査区南東部のL5g9区、標高25mほどの台地上に位置している。

重複関係 第171号溝を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-50°-Wである。規模は桁行4.5m、梁行3.3mで、面積は14.85㎡である。柱間寸法は、桁行が西から2.1m（7尺）と2.4m（8尺）で、梁行は3.3m（11尺）である。

柱穴 6か所。深さは、梁行中央のP6が44cmとやや浅いものの、P1～P5は53～72cmである。P6の土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた粘土質の土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは、P1とP5に確認できたほかは不明瞭で、いずれの柱穴の底面も皿状で円形の硬化範囲が見られる。

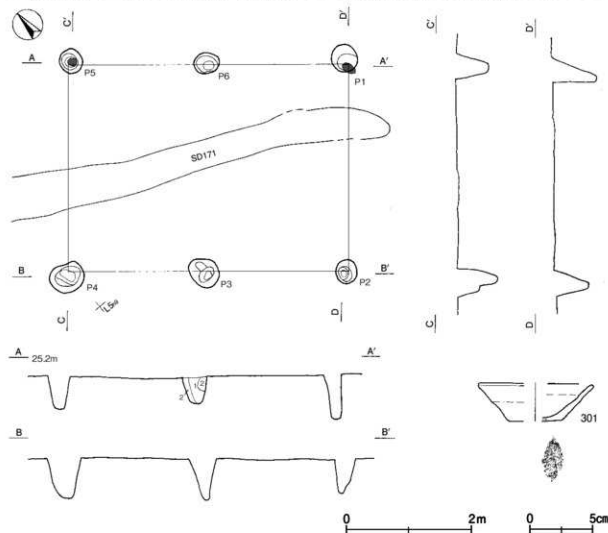
土層解説 (P6)

1 黒 褐色 粘土粒子・炭化粒子少量

2 灰黄褐色 粘土ブロック多量

遺物出土状況 土師質土器片16点 (皿2、内耳鍋14)、土師器片2点、炭化材1点、礫3点が出土している。P1から土師質土器片2点 (内耳鍋)、P4から礫1点 (根石カ)、P5から土師質土器片14点 (皿2、内耳鍋12)、土師器片2点、炭化材1点、礫2点である。301は、P5の抜き取り痕から出土している。

所見 規模的に倉庫あるいは副屋として機能していたものと想定される。関連する施設は、南西方向6～12mの地点に位置している第55・56号掘立柱建物と推測される。時期は、出土土器から16世紀代後半と考えられる。



第243図 第57号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第57号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第243図)

番号	類別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
301	土師質土器	皿	[9.3]	3.0	[4.2]	灰白・石灰・黒母・赤色粒子	緑灰	普通	内面内・外面口テラナテ後ナテ 底面同 転系切り後ナテ	P5内	10%

第66号掘立柱建物跡 (第244図)

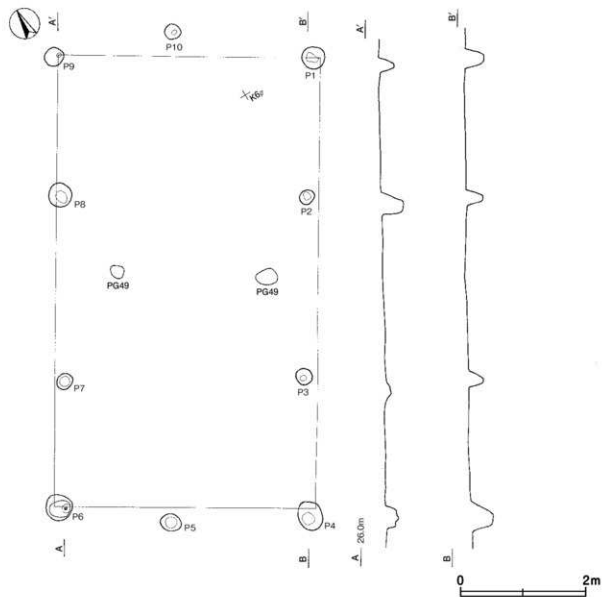
位置 調査区南東部のK6J6区、標高26mほどの台地上に位置している。

重複関係 第49号ピット群と同時期と考えられる。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-33°-Eである。規模は桁行7.2m、梁行4.2mで、面積は30.24㎡である。柱間寸法は、桁行の両妻側が2.1m(7尺)、中央間が3.0m(10尺)で、梁行は東から2.4m(8尺)、1.8m(6尺)である。

柱穴 10か所。梁行間中央のP5とP10は、やや外側にはずれた棟持柱穴と考えられる。深さは、耕作による削平を受けているためか8~34cmと不揃いで、上屋を考慮すると掘り方の規模が小さい。柱のあたりは、P6の底面に確認できるほかは、不明瞭である。

所見 規模と形態から居宅として機能していたと想定される。北東側に隣接して第70号掘立柱建物跡が確認されているが、規模的に本建物が建て替えられる前の建物と推測される。時期は、当遺跡の建物跡の傾向から16世紀代と考えられる。



第244図 第66号掘立柱建物跡実測図

第67号掘立柱建物跡 (第245図)

位置 調査区南東部のK7II区、標高26mほどの台地上に位置している。

重複関係 第49号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-59°-Wである。規模は桁行4.2m、梁行3.9mで、面積は16.38㎡である。柱間寸法は、桁行が2.1m(7尺)で、梁行は東梁行が南から2.4m(8尺)、1.5m(5尺)、西梁行が南から1.8m(6尺)、2.1m(7尺)である。

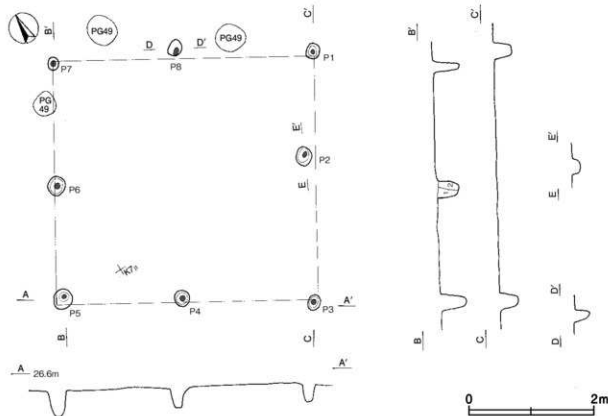
柱穴 8か所。深さは、梁行中央のP2がやや浅い13cmで、P1・P3~P8は23~43cmである。P6の土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた粘土質の土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりはすべての底面で確認でき、円形の硬化範囲が認められる。

土層解説 (P6)

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 2 黒褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片1点が、P5の埋土から出土している。

所見 規模と形態から倉庫として機能していたものと想定される。関連する施設は、東側に隣接して第68号掘立柱建物跡が確認されている。時期は、当遺跡の建物跡の傾向から16世紀代と考えられる。



第245図 第67号掘立柱建物跡実測図

第68号掘立柱建物跡 (第246図)

位置 調査区南東部のK7III区、標高26mほどの台地上に位置している。

重複関係 第49号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行1間と2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-79°-Eである。規模は桁行5.4m、梁行3.6mで、面積は19.44㎡である。柱間寸法は、桁行は北桁行が1.8m(6尺)で、南桁行は東から1.8m(6尺)、

1.5m (5尺), 2.1m (7尺)である。梁行は西妻が1.8m (6尺), 東妻は3.6m (12尺)である。

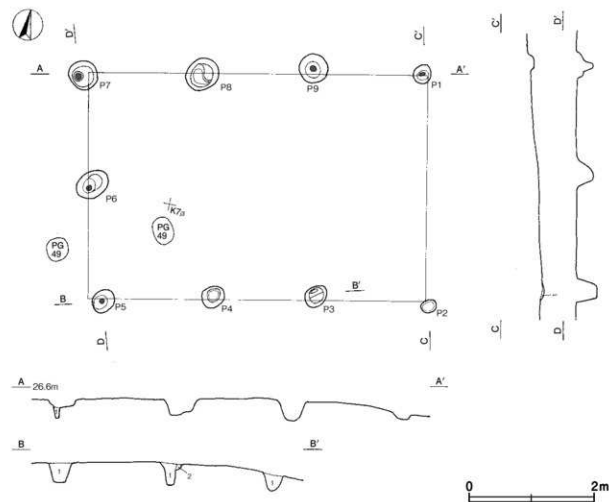
柱穴 9か所。東側が耕作による削平を受けているために、P1とP2の深さは、5～9cmで浅く、梁行中央に柱穴は確認されていない。P3～P9の深さは、26～36cmである。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは、P1・P5～P7・P9の底面に円形の硬化範囲が確認できるが、他は不明瞭である。

土層解説 (P2～5・P7共通)

1 柿崎褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック中量

所見 規模と形態から居宅として機能していたものと想定される。関連する施設は、西側に隣接して第67号掘立柱建物で確認されている。時期は、当遺跡の建物跡の傾向から16世紀代と考えられる。



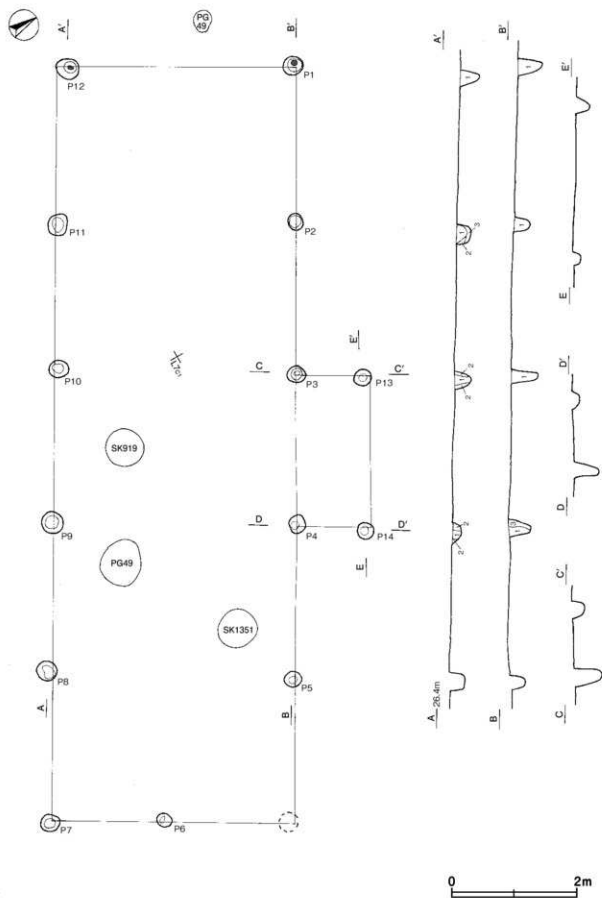
第246図 第68号掘立柱建物跡実測図

第69号掘立柱建物跡 (第247図)

位置 調査区南東部のL7c1区、標高26mほどの台地上に位置している。

重複関係 第919・1351号土坑を掘り込み、第49号ゼット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行5間、梁行1間と2間の個柱建物跡で、桁行方向がN-60°-Wである。規模は桁行12.0m、梁行3.9mで、面積は46.8㎡である。柱間寸法は、桁行が2.4m (8尺)で、梁行は西妻が3.9m (13尺)で、東妻は南から1.8m (6尺), 2.1m (7尺)である。北桁行の西から2間に91.2m (4尺)1間の張り出しがある。



第247图 第69号掘立柱建物跡实测图

柱穴 14か所。東コーナー部に1か所柱穴があったと想定されるが、耕作による削平を受けているため確認されていない。上面が削平されているP5～P7の深さは11～25cmで、P1～P4・P8～P12の深さは16～44cmである。張り出し部のP13とP14の深さは、18cmと11cmで、玄関部の可能性がある。土層は、第1層が柱抜き取り痕に相当し、第2・3層は埋土である。埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土を、突き固めながら埋めたと考えられる。柱のあたりは、P1・P12の底面に円形の硬化範囲が認められるものの、他は皿状の底面であるが不明瞭である。

土層解説 (各柱穴共通)

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック中量

所見 当道跡内で確認された掘立柱建物跡の中で最も広い面積を有しており、規模と形態から居宅として機能していたものと想定され、張り出し部は玄関部と考えられる。関連する施設としては、近隣に該当する建物跡が不明瞭であるが、第49号ピット群域または削平された東側の調査区に存在したと推測される。時期は、当道跡の建物跡の傾向から16世紀代と考えられる。

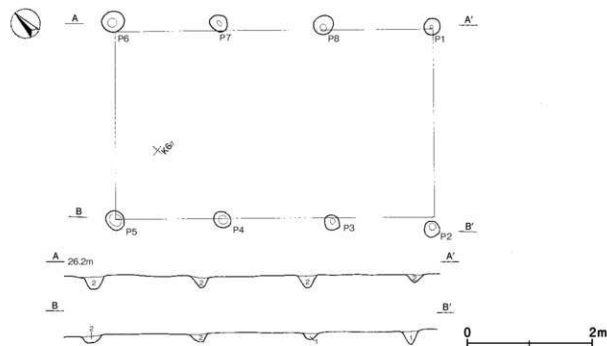
第70号掘立柱建物跡 (第248図)

位置 調査区南東部のK6i7区、標高26mほどの台地上に位置している。

重複関係 第49号ピット群とは同時期と考えられる。

規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-38°-Wである。規模は桁行5.1m、梁行3.0mで、面積は15.3㎡である。柱間寸法は、桁行の両妻側が1.8m (6尺)、中央間が1.5m (5尺)で、梁行は3.0m (10尺)である。

柱穴 8か所。深さは、耕作による削平を受けているため9～21cmと浅く、掘り方の断面形も緩やかなU字形である。土層も、掘り方が浅いために柱抜き取り痕と埋土の判別が困難であるが、含有物から第1層が柱抜き取り痕、第2層が埋土と考えられる。柱のあたりは不明瞭で、底面は皿状である。



第248図 第70号掘立柱建物跡実測図

土層解説 (各柱穴共通)

1 黒 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

2 黒 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

所見 規模と形態から居宅と想定される。規模と配置などから、南西側に隣接する第66号掘立柱建物が、本建物の建て替えと推測される。時期は、当遺跡の建物跡の傾向から16世紀代と考えられる。

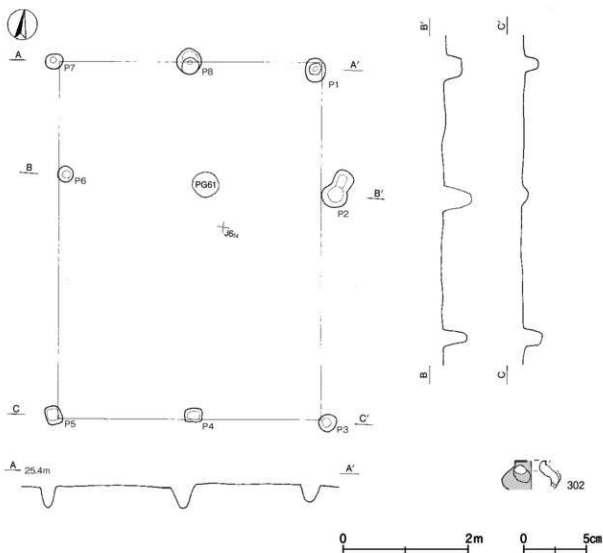
第71号掘立柱建物跡 (第249図)

位置 調査区中央部のJ6f4区、標高25mほどの台地上の緩斜面に位置している。

重複関係 第61号ピット群とはほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-8°-Wである。規模は桁行5.7m、梁行4.2mで、面積は23.94㎡である。柱間寸法は、東桁行が北から2.1m(7尺)と3.6m(12尺)、西桁行が北から1.8m(6尺)、3.9m(13尺)で、梁行は2.1m(7尺)である。

柱穴 8か所。深さは、梁行中央のP4が浅く10cmで、P1~P3・P5~P8は23~45cmである。柱のあたりは不明瞭で、底面は皿状にくぼんでいる。



第249図 第71号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 P8から、土師質土器片1点（内耳鍋）、陶器片1点（水滴）、縄文土器片1点が出土している。302は、P8内から出土している。

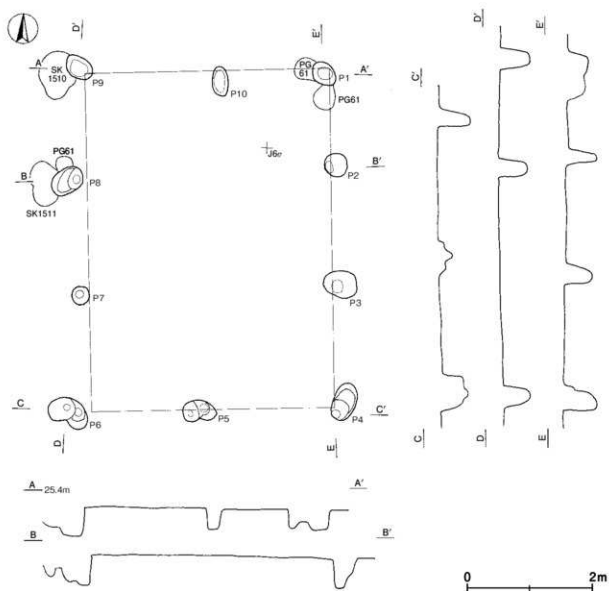
所見 規模と形態から居宅として機能していたものと想定される。関連する施設としては、東側に隣接する第75号掘立柱建物か副屋あるいは倉庫的な建物と推測される。時期は、当遺跡の建物跡の傾向と出土土器から16世紀代と考えられる。

第71号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第249図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
302	陶器	水滴*	[2.4]	[2.3]	—	精良 長石・灰釉	灰白・黄橙	普通	体部上段の破片 把手欠損 外面に施釉	P8内	35%

第72号掘立柱建物跡（第250図）

位置 調査区中央部のJ6f6区、標高25mほどの台地上の緩斜面に位置している。



第250図 第72号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第1510・1511号土坑を掘り込み、第61号ピット群とほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-8°-Wである。規模は桁行5.4m、梁行3.9mで、面積は21.06㎡である。柱間寸法は、桁行が北から1.5m（5尺）、1.8m（6尺）2.1m（7尺）で、梁行は1.8m（6尺）、2.1m（7尺）である。

柱穴 10か所。深さは、23～53cmと不揃いである。柱のあたりは不明瞭で、底面には凸凹が見られるが、おおむね皿状である。

遺物出土状況 土師質土器片9点（皿2、内耳鍋7）が、いずれも細片で出土している。P13からは土師質土器片6点（皿1、内耳鍋5）、P15からは土師質土器片3点（皿1、内耳鍋2）である。

所見 第61号ピット群と重複しているため判然としないが、規模と形態から居宅として機能していたと想定される。関連する施設は、北側と北東側に隣接している第73・74号掘立柱建物とあげられる。時期は、出土土器の傾向から16世紀代と考えられる。

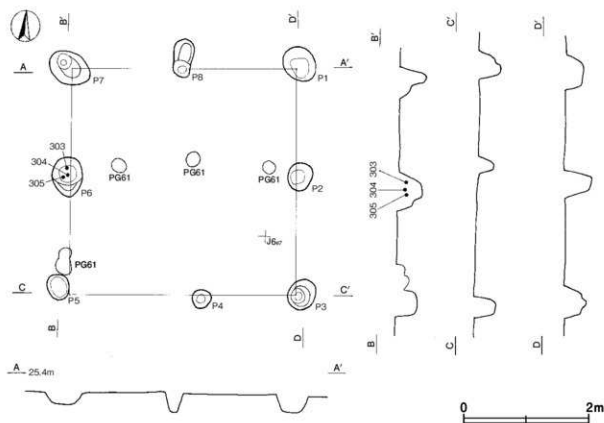
第73号掘立柱建物跡（第251・252図）

位置 調査区中央部のJ6 d6区、標高25mほどの台地上の緩斜面に位置している。

重複関係 第61号ピット群とほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Wである。規模は桁行3.6m、梁行3.6mで、面積は12.96㎡である。柱間寸法は、桁行・梁行とも1.8m（6尺）である。

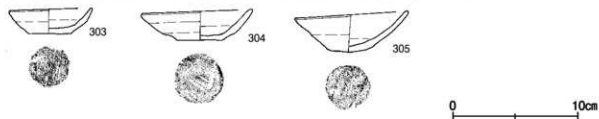
柱穴 8か所。深さは、18～45cmと不揃いである。柱のあたりは不明瞭であるが、底面はおおむね皿状である。



第251図 第73号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片19点(皿)が出土している。P1から1点、P4から2点、P6から8点、P8から8点である。303～305は、いずれもP6の覆土中層から出土している。

所見 第61号ピット群と重複しているため判然としないが、規模と形態から副屋あるいは倉庫として機能していたものと想定される。関連する施設としては、南側に位置している第72号掘立柱建物と東側に隣接している第74号掘立柱建物とあげられる。時期は、出土土器の傾向から16世紀代と考えられる。



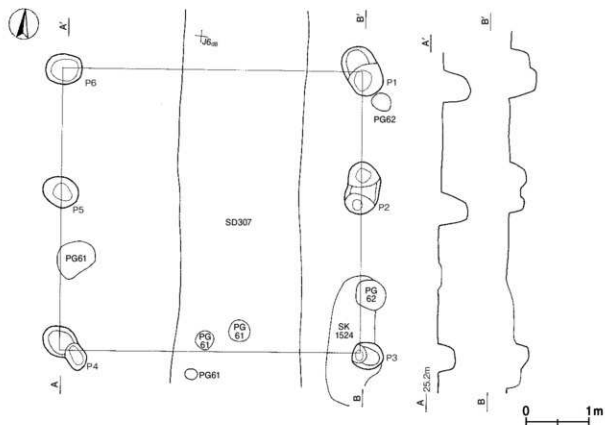
第252図 第73号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第73号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第252図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
303	土師質土器	皿	6.7	2.1	3.4	長石・石英・ 黄砂・赤色砂子	褐色	普通	体部内・外面ロクロナデ 与後ナデ	底部回転糸切 覆土中層	P 8 100%
304	土師質土器	皿	8.9	2.5	3.8	長石・石英・ 黄砂・赤色砂子	褐色	普通	体部内・外面ロクロナデ 与後ナデ	底部回転糸切 覆土中層	P 8 90%成程にゆ がみ P1,111
305	土師質土器	皿	8.9	3.3	3.4	長石・石英・赤色 砂子	褐色	普通	体部内・外面ロクロナデ 与後ナデ	底部回 転糸切り後ナデ	P 8 80%成程にゆ がみ

第74号掘立柱建物跡 (第253図)

位置 調査区中央部のJ6 d8区。標高25mほどの台地上の緩斜面に位置している。



第253図 第74号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第1524号土坑を掘り込み、第61・62号ピット群、第307号溝と同時期と考えられる。

規模と構造 桁行1間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-84°-Eである。規模は桁行4.8m、梁行4.5mで、面積は21.6㎡である。柱間寸法は、桁行が4.8m（16尺）で、梁行は北から1.8m（6尺）、2.7m（9尺）である。

柱穴 6か所。深さは、23～45cmと不揃いである。柱のあたりは不明瞭で、底面は柱穴の重複で凸凹があるもの、おおむね皿状である。

遺物出土状況 土師質土器片3点（皿2、内耳鍋1）が、細片で出土している。内訳はP4から2点（皿、内耳鍋）P6から1点（皿）である。

所見 第61・62号ピット群と重複しているため判然としないが、規模と配置的に隣接している第73号掘立柱建物とともに、第72号掘立柱建物に付随する施設と推測される。時期は、当遺跡の建物跡の傾向と出土土器から16世紀代と考えられる。

第75号掘立柱建物跡（第254図）

位置 調査区中央部のJ6f5区、標高25mほどの台地上の緩斜面に位置している。

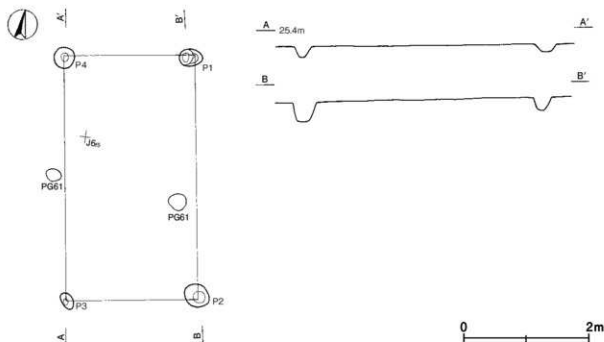
重複関係 第61号ピット群とほぼ同時期と考えられる。

規模と構造 桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-9°-Wである。規模は桁行3.9m、梁行2.1mで、面積は8.19㎡である。柱間寸法は、桁行が3.9m（13尺）で、梁行は2.1m（7尺）である。

柱穴 4か所。深さは11～30cmと不揃いである。柱のあたりは不明瞭で、底面は皿状にくぼんでいる。

遺物出土状況 P2から、流れ込みの土師器片2点が出土している。

所見 第61号ピット群と重複しているためにやや判然としないが、規模と形態から厨房または倉庫として機能していたと想定される。関連する施設としては、西側に隣接している第71号掘立柱建物が居宅と推測される。時期は、当遺跡の建物跡などから16世紀代と考えられる。



第254図 第75号掘立柱建物跡実測図

表13 中世獨立柱建物跡一覽表

番号	位置	桁行方向	柱間數 桁×梁 (間)	規 模 桁×梁 (m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴(cm)				主女の土遺物	備 考 (基礎関係)
								構造	柱式数	平面形	深さ		
1	J 5 45	N-83°-W	4 × 1-2	8.4 × 3.6 規8.4 × 3.6	30.24	2.40-3.00 1.90-2.40	1.80 3.60	竪柱 一圓形	16	円形・楕 円形	20-49 18-59	土師質土器、 陶器	SK306 → 本跡→PG11
2	A J 5 85	N-80°-W	1-2 × 1-2	3.9 × 3.0	11.70	1.80-3.90	0.90-3.00	竪柱	6	楕円形	27-43	土師質土器、 瓦葺品	本跡→SB23→PG11
2	B J 5 85	N-81°-W	2 × 1	3.6 × 3.3	11.88	1.80	3.30	竪柱	6	円形・楕 円形	21-54	土師質土器	本跡→SB24→PG11
3	J 5 7 J	N-85°-W	1 × 1	3.6 × 1.8	6.48	3.60	1.80	竪柱	4	楕円形・不 整形楕円形	34-42	土師質土器、 陶器	本跡→SE20→PG9
4	J 5 7 J	N-85°-W	3 × 2	6.3 × 3.3	20.79	2.10	1.50-1.80	竪柱	10	円形・楕 円形	15-50	土師質土器	SK 408-421 → 本跡→PG9
5	K 4 19	N-56°-E	3 × 1	7.2 × 3.6	25.92	2.10-2.70	3.60	竪柱	8	円形・不 整形楕円形	38-58	土師質土器	本跡→SB2 → 本跡→ PG1
6	M 4 88	N-40°-W	2 × 2	5.1 × 4.2	21.42	2.40-2.70	1.80-2.40	竪柱	8	円形・楕 円形・不 整形楕円形	41-67	土師質土器、 土葺品	PG17 → 本跡
7	L 4 e2	N-49°-E	3 × 2	4.8 × 3.9	18.72	1.20-2.10 0.90-1.80	1.50-2.40	竪柱	10	円形・楕 円形	40-66	土師質土器、 土葺品	本跡→SB8 → PG4
8	L 4 e2	N-41°-W	2 × 2	4.2 × 3.3	13.86	1.80-2.40	0.90-2.10	竪柱	8	不整形楕 円形	18-68	土師質土器	本跡→SB7 → PG4
9	L 4 a0	N-43°-W	2-3 × 2	4.2 × 4.2	17.64	0.90-3.30	0.90-3.30	竪柱	9	法円形	12-54	土師質土器	SK301 → 本跡→SB10-PG4
10	L 4 a2	N-48°-E	2 × 2	4.8 × 4.2	20.16	2.0	1.20-3.00	竪柱	8	法円形	33-64	土師質土器	SK301-SB9 → 本跡→PG4
12	K 5 b4	N-61°-W	3 × 1	7.8 × 3.0	23.40	2.10-3.60	3.00	竪柱	8	円形	22-50	土師質土器	SD19A-27、SK 669 → 本跡→ PG12
13	K 5 a4	N-56°-W	1 × 1	2.4 × 1.5	3.60	2.0	1.50	竪柱	4	法円形	28-62	—	SD19A → 本跡→PG12
14	K 5 14	N-26°-E	2 × 1	3.3 × 2.7	8.91	1.50-1.80	2.70	竪柱	6	法円形	22-33	土師質土器	SK444-SB15 → 本跡→PG12
15	K 5 14	N-29°-E	1 × 1	2.7 × 2.7	7.29	2.70	2.70	竪柱	4	法円形	22-47	—	本跡→SB14-PG12
16	K 5 a6	N-59°-W	1 × 1	2.4 × 1.5	3.60	2.0	1.50	竪柱	4	楕円形・不 整形楕円形	21-37	—	本跡→SK377-PG12
17	K 5 4 1	N-62°-W	1 × 1	3.6 × 2.4	8.64	3.60	2.40	竪柱	4	楕円形	48-52	—	本跡→PG12
18	L 4 4 0	N-59°-W	2 × 2	4.2 × 3.9	16.38	2.10	1.80-2.10	竪柱	8	楕円形	26-53	—	SD58 → 本跡→SB19-PG13
19	L 4 4 9	N-30°-E	3 × 1-2	6.3 × 3.9	24.57	2.10	1.80-3.90	竪柱	9	楕円形	39-61	土師質土器	SD58 → 本跡→SB18-PG13
20	M 4 4 7	N-48°-W	4 × 1	9.6 × 3.9	37.44	2.0	3.90	竪柱	10	楕円形	40-65	土師質土器	PG18 → 本跡
21	J 5 6 7	N-2°-E	1 × 1	3.3 × 2.4	7.92	3.30	2.40	竪柱	4	円形・楕 円形	14-35	—	SA1 → 本跡→PG9
22	J 5 6 7	N-86°-W	2 × 2	5.4 × 4.2	22.68	2.70	1.80-2.40	竪柱 (柱上)	9	円形・楕 円形	18-38	—	本跡→PG11
23	M 5 b1	N-52°-E	1-2 × 1	3.6 × 2.1	7.56	1.80 3.60	2.10	竪柱	5	円形・楕 円形	20-62	土師質土器	SK1211-1227 → 本跡→PG11
24	M 5 b1	N-41°-W	2 × 1	4.2 × 3.6	15.12	2.10	3.60	竪柱	6	円形・楕 円形	28-58	—	SK987 → 989-1208-1211- 1214 → 本跡→PG41
31	G 9 b6	N-24°-W	2 × 2	4.5 × 3.0	13.50	2.10-2.40	1.50	竪柱	8	法円形	12-33	土師質土器	S154、SK 600 → 本跡
32	G 10 j0	N-28°-W	1 × 1	2.7 × 2.4	6.48	2.70	2.40	竪柱	4	法円形	16-21	土師器	本跡→SD108
36	I 5 e7	N-14°-E	5 × 1	9.0 × 4.5	40.50	1.80	4.50	竪柱	14	法円形・楕 円形	4-32	土師質土器	—
51	M 5 e0	N-52°-W	2 × 2	3.3 × 2.4	7.92	1.90-1.80	1.20	竪柱	9	法円形・ 不整形楕 円形	19-42	—	本跡→PG45
52	M 6 b1	N-56°-W	2-3 × 1	4.2 × 2.7	11.34	0.90-2.70	2.70	竪柱	7	楕円形・不 整形楕円形	15-51	—	本跡→SB33-PG45
53	M 6 b1	N-57°-W	2 × 2	4.2 × 3.0	12.60	2.10	1.50	竪柱	8	楕円形・不 整形楕円形	31-64	土師質土器	本跡→SB32-PG45
54	M 6 a1	N-58°-W	4 × 2	8.4 × 4.5	37.80	1.80-2.40 2.10-2.40	2.40 3.60	竪柱 (柱上)	13	円形・楕 円形・不 整形楕円形	20-56	—	SK 1363-ST22 → 本跡→ PG45
55	L 5 j6	N-36°-E	2 × 2	4.2 × 4.2	17.64	2.10	1.50-2.70 1.80-2.40	竪柱	8	円形・楕 円形・不 整形楕円形	14-43	—	本跡→PG46
56	L 5 6 7	N-40°-E	2-1 × 2	4.5 × 3.6	16.20	2.10-2.40	1.50-2.10 3.60	竪柱	7	円形・楕 円形・不 整形楕円形	21-44	—	本跡→PG46
57	L 5 6 9	N-50°-W	2 × 1	4.5 × 3.3	14.85	2.10-2.40	3.30	竪柱	6	円形・楕 円形	44-72	土師質土器、灰 瓦葺、土葺	SD171 → 本跡
66	K 6 j6	N-33°-E	3 × 2	7.2 × 4.2	30.24	2.10-3.00	1.80-2.10	竪柱	10	法円形	8-34	—	本跡→PG49
67	K 7 11	N-59°-W	2 × 2	4.2 × 3.9	16.38	2.10	1.50-2.40 1.80-2.10	竪柱	8	円形・楕 円形	13-43	—	本跡→PG49
68	K 7 13	N-79°-E	3 × 1-2	5.4 × 3.6	19.44	0.90 1.80 1.90-2.10	3.60	竪柱	9	法円形	5-36	—	本跡→PG49
69	L 7 c1	N-60°-W	5 × 1-2	12.0 × 3.9 2.4 × 1.2	46.8 (288)	2.0	1.80-3.90 1.20	竪柱	14	法円形	11-44	—	SK919-1351 → 本跡→PG49
70	K 6 14	N-38°-W	3 × 1	5.1 × 3.0	15.30	1.90-1.80	3.00	竪柱	8	法円形	9-21	—	本跡→PG49
71	J 6 4 1	N-8°-W	2 × 2	5.7 × 4.2	23.94	2.10-3.60 1.80-3.90	2.10	竪柱	8	円形・楕 円形	10-45	土師質土器、 陶器	本跡→PG61
72	J 6 16	N-8°-W	3 × 2	5.4 × 3.9	21.06	1.90-2.10	1.80-2.10	竪柱	10	円形・楕 円形・不 整形楕円形	23-53	土師質土器	本跡→PG61
73	J 6 6 8	N-3°-W	2 × 2	3.6 × 3.6	12.96	1.80	1.80	竪柱	8	楕円形	18-45	土師質土器	SK1510-1511 → 本跡→PG61
74	J 6 6 8	N-84°-E	1 × 1	4.8 × 4.5	21.60	4.80	1.80-2.70	竪柱	6	円形・楕 円形・不 整形楕円形	23-45	土師質土器	SK1524 → 本跡→SD007- PG61-62
75	J 6 15	N-9°-W	1 × 1	3.9 × 2.1	8.19	3.90	2.10	竪柱	4	円形・楕 円形	11-30	—	本跡→PG61

(2) 欄跡

3列の欄跡が、ピット群の中に確認されている。

第1号欄跡 (第255図)

位置 調査区南部のJ5g3～J5g8区で、標高25mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第21号掘立柱建物に掘り込まれ、第9号ピット群域から確認されておりほぼ同時期と考えられる。

規模と形状 確認された長さは19.8mで、方向はN-89°-W、柱間寸法が1.0～2.2mである。

柱穴 10か所。確認できたのは10か所であるが、11か所あったものと推測される。平面形は長径21～42cm、短径20～34cmの円形または楕円形である。断面形はU字状を呈し、深さは13～48cmである。覆土は第1層が抜き取り痕に相当し、第2層が埋土と考えられる。

土層解説

1 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

2 暗 褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師質土器片3点(皿1、内耳鍋2)と、流れ込んだ縄文土器片1点が出土している。1148はP2、内耳鍋の体部片2点はP7、縄文土器片はP8からそれぞれ出土している。

所見 第9号ピット群と重複をしているため判然としないが、居宅と考えられる第4号掘立柱建物の北側に並列してほぼ東西方向に延びているため、建物の北側を遮蔽する機能をもっていたものと推測される。時期は、出土土器から16世紀後半と考えられる。

第2号欄跡 (第255図)

位置 調査区南部のJ6c5～J6e5区で、標高25mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第61号ピット群域から確認され、ほぼ同時期と考えられる。

規模と形状 確認された長さは8.4mで、方向はN-0°、柱間寸法が0.9～2.1mである。

柱穴 6か所。長径23～50cm、短径23～42cmの円形または楕円形である。断面形はU字状を呈し、深さは28～58cmである。覆土の埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土のローム土と粘土ブロックを用いている。

遺物出土状況 1149の土師質土器片1点(皿)が、P3の覆土中から出土している。

所見 第61号ピット群と重複をしているため判然としないが、第72・73号掘立柱建物の西側に並列して南北方向に延びているため、建物の西側を遮蔽する機能をもっていたものと推測される。時期は、出土土器と周辺の遺構との関係から16世紀後半と考えられる。

第3号欄跡 (第255図)

位置 調査区南部のJ6g3～J6g5区で、標高25mほどの台地上の平坦部に位置している。

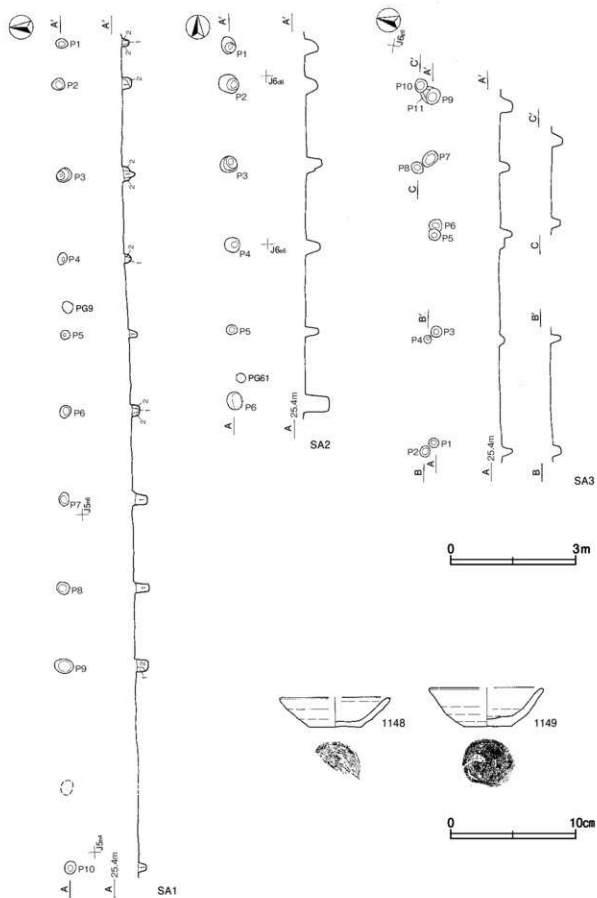
重複関係 第61号ピット群域から確認され、ほぼ同時期と考えられる。

規模と形状 確認された長さは8.1mで、方向はN-81°-E、柱間寸法が1.5～2.7mである。

柱穴 10か所。長径22～41cm、短径18～30cmの円形または楕円形である。断面形はU字状を呈し、深さは12～30cmである。覆土の埋土は、掘り方掘削の際に掘り上げた土のローム土と粘土ブロックを用いている。

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋の底部片)が、P7から出土している。

所見 第61号ピット群と重複をしているため判然としないが、第71・75号掘立柱建物の南側に並列して東西方向に延びているため、建物の南側を遮蔽する機能をもっていたものと推測される。時期は、出土土器と周辺の遺構との関係から16世紀後半と考えられる。



第255图 第1~3号棚迹, 第1·2号棚迹出土物类图

第1号橋跡出土遺物観察表(第255図)

番号	種類	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1148	土師質土器	皿	(8.8)	2.4	(4.2)	長石・石英・炭粉・赤色粒子	浅黄橙	普通	手法的特徴 体部内・内面口テラナデ 底部回転糸切 号孩子子	P 2 覆土中	30%

第2号橋跡出土遺物観察表(第255図)

番号	種類	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1149	土師質土器	皿	(9.0)	3.1	3.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	手法的特徴 体部内・内面口テラナデ 底部回転糸切 号孩子子	P 3 覆土中	70%

表14 中世橋跡一覧表

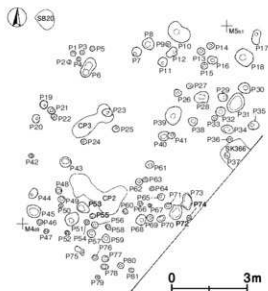
番号	位置	主軸方向	長さ(m)	柱間(m)	柱穴				主な出土遺物	備考 (重要関係)	
					柱穴数	平面形	長径(cm)	短径(cm)			深さ(cm)
1	J 5 g ₅ -J 5 g ₆	N-89°-W	19.8	1.0-2.2	[11]	円形・楕円形	21-42	20-34	13-48	土師質土器	本跡・N99-55521
2	J 6 g ₅ -J 6 g ₆	N-0°	8.4	0.9-2.1	6	円形・楕円形	23-50	23-42	28-58	土師質土器	PG61城
3	J 6 g ₅ -J 6 g ₆	N-81°-E	8.1	1.5-2.7	10	円形・楕円形	22-41	18-30	12-30	土師質土器	PG61城

(3) ビット群

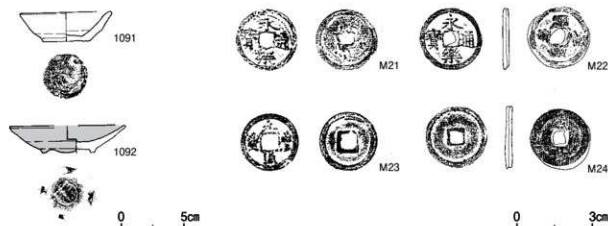
今回の調査で本調査区全域にわたって48か所のビット群が検出されている。区画溝の様相や、居宅及び倉庫・副屋と想定される掘立柱建物跡と井戸跡などで形成される屋敷域の付近に位置しているなど、中世の遺構と重なる区域が多い傾向がある。屋敷域の遺構と同時代の土師質土器皿などがビット内や周辺から出土していることから、ビット群の時期は中世の可能性が高い。検出されたビットは何らかの建造物を想定させるが、詳細な配列や構造は明確ではない。ここでは、ビット群域で建て替えが行われていたと想定される6遺構を実測図と一覧表でその他の遺構については一覧表で記載する。また、図示した遺物については、出土遺物観察表で記載する。

第6号ビット群(第256・257図)

調査区南西部のM 4 b9～M 5 d1区から81か所のビットが検出された。標高24mほどの台地上に位置し、平面形は長径14～93cmの円形・楕円形または不定形、長軸72cmの隅丸長方形で、深さは8～75cmである。1091はP 32・33付近、1092とM 21・24は覆土中から出土している。いずれも混入の可能性が高いが、廃棄されたものと思われる。第6号掘立柱建物跡から北東へ5mの付近に位置しており、同時期の建物が発見されていた可能性がある。



第256図 第6号ビット群実測図



第257図 第6号ピット群出土遺物実測図

第6号ピット群出土遺物観察表(第257図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1091	土製瓦土器	皿	7.4	2.4	3.8	長白(白灰・炭)・赤色粒土	橙	普通	器底内・外周口ワロワテ 瓦器同軸表裏両面ナデ 内面ノミのナデ 外周内面と外周ノミ	覆土中	100% PL111
1092	陶器	丸皿	[9.3]	2.2	4.2	精良 長石・灰釉	灰白・淡黄	普通	口ワロワテ形 周リ込み高台 全面灰釉による施釉	覆土中	60%

番号	器種	径	孔径	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M21	永楽通寶	2.5	0.5	3.1	1408	銅	明銭 無背	覆土中	
M22A	永楽通寶	2.4	0.5	4.5	1408	銅	明銭	覆土中	
M22B	阜成通寶	2.3	0.6	1038	銅	北宋銭 篆書 無背	覆土中		
M23	元豊通寶	2.3	0.6	3.7	1078	銅	北宋銭 行書 無背	覆土中	
M24A	判読不明	2.5	0.5	6.8	不明	銅	鋳による損傷が激しいため判読不能	覆土中	
M24B	判読不明	2.5	0.6		不明	銅	鋳による損傷が激しいため判読不能	覆土中	

表15 第6号ピット群ピット一覧表

ピット番号	位置	形状	規模(cm)		ピット番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ				長径(軸)×短径(軸)	深さ
1	M 4 b9	円形	18×18	24	15	M 4 b0	円形	24×24	13
2	M 4 b9	円形	18×18	15	16	M 4 b0	楕円形	40×31	30
3	M 4 b9	円形	20×18	26	17	M 5 b1	不定形	58×30	32
4	M 4 b9	楕円形	22×18	14	18	M 5 b1	円形	20×20	68
5	M 4 b9	円形	22×20	25	19	M 4 b9	円形	34×32	33
6	M 4 b9	楕円形	80×42	30-62	20	M 4 b9	円形	32×32	27
7	M 4 b0	楕円形	44×36	34	21	M 4 b9	円形	30×28	24
8	M 4 b0	楕円形	50×44	38	22	M 4 b9	円形	24×22	25
9	M 4 b0	楕円形	24×20	28	23	M 4 b9	楕円形	39×30	33
10	M 4 b0	不定形	93×62	23	24	M 4 c9	円形	22×24	30
11	M 4 b0	楕円形	42×37	39	25	M 4 c9	円形	23×24	20
12	M 4 b0	不定形	50×28	58	26	M 4 b0	円形	29×26	56
13	M 4 b0	円形	30×29	32	27	M 4 b0	楕円形	22×17	42
14	M 4 b0	円形	17×17	20	28	M 4 b0	楕円形	57×48	75

ピット 番号	位置	形状	縦 横(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
29	M 4 b0	円形	36×34	38
30	M 5 b1	楕円形	52×42	40
31	M 5 b1	楕円形	83×56	21
32	M 4 b0	楕円形	38×29	50
33	M 4 b0	円形	21×19	35
34	M 5 c1	楕円形	50×34	23
35	M 5 b1	楕円形	42×34	17
36	M 5 c1	円形	22×22	32
37	M 5 c1	楕円形	25×20	51
38	M 4 b0	円形	24×23	47
39	M 4 b0	隅丸長方形	72×53	46
40	M 4 e0	[楕円形]	(37)×32	65
41	M 4 e0	楕円形	30×26	61
42	M 4 e9	円形	17×15	14
43	M 4 e9	円形	43×40	29
44	M 4 e9	楕円形	44×30	34
45	M 4 e9	楕円形	56×46	22
46	M 4 d9	円形	21×21	14
47	M 4 d9	円形	20×19	9
48	M 4 e9	円形	27×25	24
49	M 4 e9	円形	26×25	34
50	M 4 e9	楕円形	19×16	22
51	M 4 e9	不定形	56×50	58-65
52	M 4 d9	円形	21×21	24
53	M 4 e9	楕円形	52×42	43
54	M 4 e9	円形	22×22	12
55	M 4 e9	円形	20×19	12

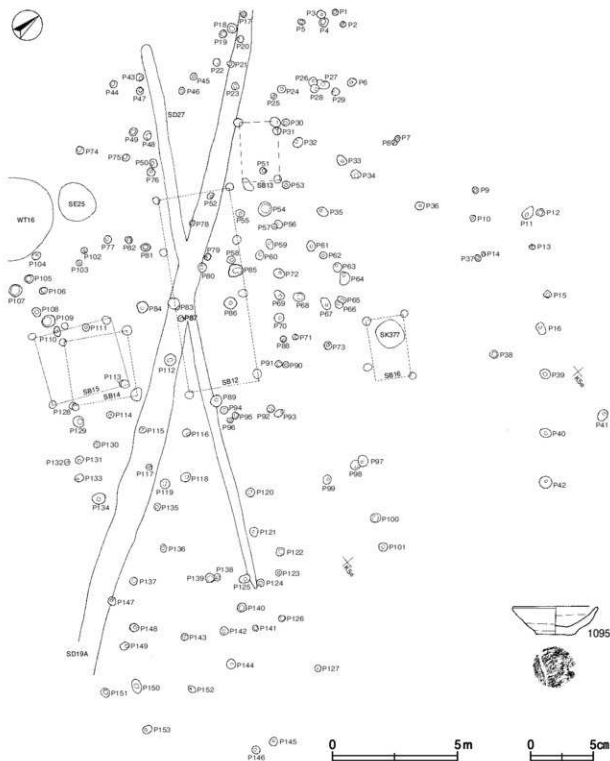
ピット 番号	位置	形状	縦 横(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
56	M 4 d9	円形	23×22	20
57	M 4 d9	楕円形	31×26	25
58	M 4 d9	楕円形	28×18	20
59	M 4 d9	楕円形	31×30	17
60	M 4 e0	楕円形	22×17	12
61	M 4 e0	[円形]	26×(24)	—
62	M 4 e0	楕円形	28×22	—
63	M 4 e0	円形	14×14	—
64	M 4 e0	円形	19×17	17
65	M 4 e0	楕円形	30×27	39
66	M 4 e0	円形	18×16	8
67	M 4 e0	円形	17×17	34
68	M 4 e0	楕円形	46×42	47
69	M 4 e0	円形	21×23	32
70	M 4 e0	楕円形	36×26	30
71	M 4 e0	円形	22×21	25
72	M 4 e0	不定形	60×66	28
73	M 4 e0	不定形	67×32	24
74	M 4 e0	円形	20×20	26
75	M 4 d9	不定形	46×14	10-15
76	M 4 d9	楕円形	21×18	10
77	M 4 d9	円形	36×26	21
78	M 4 d9	楕円形	34×24	16
79	M 4 d9	楕円形	20×16	38
80	M 4 d9	楕円形	26×22	15-18
81	M 4 d0	円形	20×20	19

第12号ピット群 (第258図)

調査区南部のK5 e2～L5 a8区から153か所のピットが検出された。標高25mほどの台地上に位置し、平面形は長径18～62cmの円形・楕円形または不定形、長軸44cmの隅丸長方形で、深さは11～63cmである。1095はP139の覆土中から出土し、混入の可能性は高いが、廃棄されたものと思われる。ピット群域には、居宅と想定される第12号掘立柱建物跡や倉庫的な機能をもつ建物と想定される第13～17号掘立柱建物跡が位置していることから、それらの建物群と関連した屋敷域の一部として機能していたと考えられる。

第13号ピット群 (第259図)

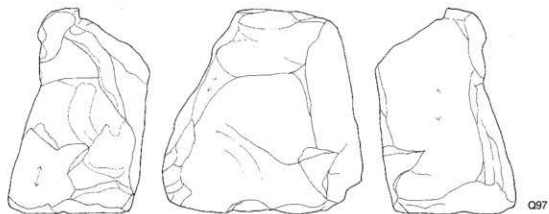
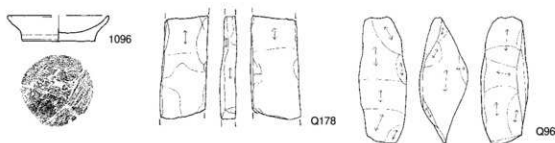
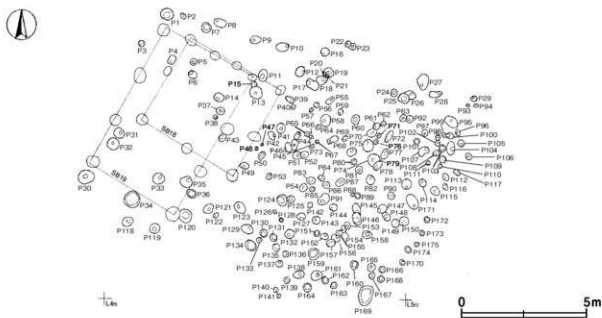
調査区南部のL4 c8～L5 f2区から175か所のピットが検出された。標高25mほどの台地上に位置し、平面形は長径10～76cmの円形・楕円形または不定形、長軸26～56cmの隅丸長方形・隅丸長方形で、深さは6～66cmである。1096はP21の覆土中、Q95～97は覆土中から出土している。いずれも混入の可能性は高いが、廃棄されたものと思われる。ピット群域には、居宅と想定される第19号掘立柱建物跡や倉庫的な機能を持つ建物と想定される第18号掘立柱建物跡が位置していることから、それらの建物群と関連した屋敷域の一部として機能していたと考えられる。



第258図 第12号ピット群・出土遺物実測図

第12号ピット群出土遺物観察表 (第258図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1095	土製土器	甕	6.9	2.3	3.0	長石・石英・雲母・赤色粒点	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ、底部回転車切らぬケア、内底ケア、体部と内底との境目に凹み	P139 覆土中	90%



0 10cm

第259図 第13号ピット群・出土遺物実測図

第13号ピット群出土遺物観察表 (第259図)

番号	種別	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1096	土師質土器	皿	[80]	2.1	5.8	灰白・石灰・赤色 砂子	橙	普通	体部内・外面ロコナテ 底面刷毛赤司 首縁ヘラナテ 内底ナテ	P21層土中	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q178	磁石	(8.2)	4.3	1.4	(60.7)	凝灰岩	磁面3面	覆土中	
Q96	磁石	10.2	3.9	3.9	68.6	凝灰岩	磁面3面 磁断面特殊形	覆土中	
Q97	台石*	16.3	16.0	11.4	3438.8	雲母片岩	台形状 磁石転用 磁面3小所	覆土中	

表16 第12号ピット群ピット一覧表

ピット番号	位置	形状	規模(cm)		ピット番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ				長径(軸)×短径(軸)	深さ
1	K 5c3	円形	24×24	25	39	K 5 f7	円形	42×41	38
2	K 5c3	円形	24×23	27	40	K 5 f8	楕円形	44×37	34
3	K 5c3	楕円形	38×30	33	41	K 5 f8	楕円形	48×38	31
4	K 5c3	円形	38×38	43	42	K 5 f8	円形	46×44	38
5	K 5c3	楕円形	36×28	32	43	K 5 g2	円形	30×30	26
6	K 5e4	円形	36×34	46	44	K 5 g2	円形	30×28	20
7	K 5c5	[楕円形]	(22)×20	12	45	K 5 g3	楕円形	32×28	18
8	K 5c5	円形	20×20	24	46	K 5 g3	楕円形	26×22	14
9	K 5e5	円形	24×24	21	47	K 5 g3	円形	24×24	12
10	K 5e6	円形	26×26	20	48	K 5 g3	楕円形	46×34	31
11	K 5e6	楕円形	58×34	41	49	K 5 g3	円形	33×32	14
12	K 5e6	円形	30×30	26	50	K 5 g3	楕円形	37×30	19
13	K 5e6	楕円形	24×18	28	51	K 5 g1	円形	26×25	28
14	K 5e6	円形	18×18	21	52	K 5 g1	楕円形	30×24	12
15	K 5e7	円形	36×34	46	53	K 5 g1	楕円形	32×28	33
16	K 5e7	楕円形	58×36	48	54	K 5 g1	楕円形	60×53	26
17	K 5 f3	円形	21×20	8	55	K 5 g1	楕円形	34×28	40
18	K 5 f3	円形	40×40	43	56	K 5 g1	[円形]	32×(24)	26
19	K 5 f3	円形	29×28	22	57	K 5 g1	楕円形	30×26	27
20	K 5 f3	[楕円形]	30×(22)	31	58	K 5 g1	円形	35×34	25
21	K 5 f3	円形	28×26	41	59	K 5 g5	楕円形	38×29	29
22	K 5 f3	円形	34×32	39	60	K 5 g5	楕円形	35×28	35
23	K 5 f3	円形	28×28	11	61	K 5 g5	楕円形	43×38	27
24	K 5 f3	楕円形	37×31	39	62	K 5 g5	円形	28×28	33
25	K 5 f3	楕円形	25×20	26	63	K 5 g5	楕円形	42×37	31
26	K 5 f4	円形	36×34	36	64	K 5 g5	楕円形	52×44	30
27	K 5 f4	[楕円形]	(50)×32	35	65	K 5 g5	楕円形	34×24	17
28	K 5 f4	円形	38×36	37	66	K 5 g5	楕円形	34×23	23
29	K 5 f4	円形	30×29	29	67	K 5 g5	楕円形	56×34	37
30	K 5 f4	円形	30×30	36	68	K 5 g5	楕円形	45×34	34
31	K 5 f4	円形	36×34	44	69	K 5 g5	隅丸長方形	44×25	28
32	K 5 f4	円形	40×39	46	70	K 5 g5	円形	42×40	32
33	K 5 f4	楕円形	44×33	29	71	K 5 g5	楕円形	28×25	36
34	K 5 f5	楕円形	39×34	32	72	K 5 g5	楕円形	50×42	33
35	K 5 f5	楕円形	45×33	22	73	K 5 g6	楕円形	34×30	49
36	K 5 f5	楕円形	40×34	14	74	K 5 h3	円形	35×34	17
37	K 5 f6	楕円形	28×20	15	75	K 5 h3	円形	28×26	12
38	K 5 f7	円形	30×28	33	76	K 5 h3	円形	38×36	26

ビット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
77	K 5 h4	円形	31×32	35
78	K 5 h4	楕円形	24×18	27
79	K 5 h4	円形	28×26	12
80	K 5 h4	円形	40×38	38
81	K 5 h4	隅丸方形	40×30	33
82	K 5 h4	円形	30×30	12
83	K 5 h4	楕円形	38×33	38
84	K 5 h4	円形	46×46	28
85	K 5 h5	楕円形	62×50	53
86	K 5 h5	円形	48×48	63
87	K 5 h5	楕円形	28×24	28
88	K 5 h5	楕円形	32×28	27
89	K 5 h5	楕円形	49×42	36
90	K 5 h6	円形	27×27	30
91	K 5 h6	円形	30×28	22
92	K 5 h6	楕円形	32×28	24
93	K 5 h6	楕円形	40×28	33
94	K 5 h6	楕円形	31×27	35
95	K 5 h6	円形	30×29	23
96	K 5 h6	円形	23×22	29
97	K 5 h7	楕円形	45×40	24
98	K 5 h7	楕円形	42×32	30
99	K 5 h7	楕円形	38×24	31
100	K 5 h7	楕円形	40×38	32
101	K 5 h8	円形	35×35	28
102	K 5 i3	楕円形	28×24	19
103	K 5 i3	円形	25×25	17
104	K 5 i3	円形	35×35	35
105	K 5 i3	楕円形	38×32	12
106	K 5 i3	円形	32×30	14
107	K 5 i3	円形	53×52	13
108	K 5 i4	円形	37×34	13
109	K 5 i4	楕円形	52×48	11
110	K 5 i4	楕円形	50×34	33
111	K 5 i4	円形	27×26	38
112	K 5 i5	円形	48×46	16
113	K 5 i5	楕円形	34×30	25
114	K 5 i5	楕円形	32×29	23
115	K 5 i5	楕円形	29×24	33

ビット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
116	K 5 i5	円形	28×33	29
117	K 5 i5	円形	23×23	16
118	K 5 i6	円形	42×39	44
119	K 5 i6	円形	38×37	28
120	K 5 i6	円形	38×35	37
121	K 5 i7	楕円形	40×33	38
122	K 5 i7	楕円形	38×33	37
123	K 5 i7	円形	27×26	27
124	K 5 i7	円形	28×27	31
125	K 5 i7	不定形	46×43	46
126	K 5 i8	円形	25×25	22
127	K 5 i8	円形	29×28	20
128	K 5 j5	楕円形	30×28	18
129	K 5 j5	楕円形	49×39	39
130	K 5 j5	円形	26×25	26
131	K 5 j5	円形	33×32	20
132	K 5 j5	楕円形	28×24	18
133	K 5 j5	楕円形	43×34	16-20
134	K 5 j5	楕円形	60×47	53
135	K 5 j6	円形	35×32	45
136	K 5 j6	円形	34×32	48
137	K 5 j6	円形	30×30	36
138	K 5 j7	円形	29×27	17
139	K 5 j7	円形	38×36	31
140	K 5 j7	楕円形	38×34	21
141	K 5 j7	円形	24×24	17
142	K 5 j7	円形	32×32	49
143	K 5 j7	円形	30×29	27
144	K 5 j8	円形	29×38	25
145	K 5 j8	楕円形	38×30	37
146	K 5 j8	円形	33×32	35
147	L 5 a6	楕円形	36×28	20
148	L 5 a7	楕円形	35×30	35
149	L 5 a7	楕円形	37×32	21
150	L 5 a7	楕円形	37×38	39
151	L 5 a7	楕円形	40×32	16
152	L 5 a7	楕円形	35×24	26
153	L 5 a8	楕円形	41×30	29

表17 第13号ビット群ビット一覧表

ビット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
1	L 4 c9	楕円形	54×51	10
2	L 4 c9	円形	22×21	18

ビット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
3	L 4 c9	楕円形	36×24	22
4	L 4 c9	楕円形	36×30	38

ビット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
5	L 4c9	楕円形	26×24	30
6	L 4c9	楕円形	36×34	36
7	L 4c0	楕円形	46×39	28
8	L 4c0	楕円形	54×34	24-34
9	L 4c0	楕円形	45×33	43
10	L 4c0	楕円形	50×40	40-50
11	L 4c0	楕円形	50×38	40
12	L 4c0	楕円形	44×36	20
13	L 4c0	楕円形	64×48	38
14	L 4c0	楕円形	46×38	35
15	L 4c0	楕円形	28×26	32
16	L 5c1	楕円形	36×32	40
17	L 5c1	不定形	54×36	44-40
18	L 5c1	楕円形	50×34	34-30
19	L 5c1	楕円形	46×36	29
20	L 5c1	楕円形	14×10	36
21	L 5c1	楕円形	12×10	36
22	L 5c1	[楕円形]	28×(26)	39
23	L 5c1	円形	26×26	25
24	L 5c1	楕円形	34×28	18
25	L 5c1	[楕円形]	50×(36)	65
26	L 5c2	[楕円形]	44×(26)	18
27	L 5c2	楕円形	68×46	42-49
28	L 5c2	不定形	50×28	24-26
29	L 5c2	楕円形	28×20	47
30	L 4d8	楕円形	68×62	23
31	L 4d9	楕円形	48×40	25
32	L 4d9	円形	51×50	32
33	L 4d9	楕円形	48×46	25
34	L 4d9	楕円形	70×60	19
35	L 4d9	不定形	46×43	41
36	L 4d9	楕円形	42×38	13
37	L 4d0	楕円形	38×28	42
38	L 4d0	楕円形	24×20	21
39	L 4d0	楕円形	40×34	22
40	L 4d0	楕円形	18×16	28
41	L 4d0	楕円形	44×38	44
42	L 4d0	楕円形	34×22	34
43	L 4d0	楕円形	36×30	30
44	L 4d0	楕円形	36×22	30
45	L 4d0	楕円形	46×30	53
46	L 4d0	[楕円形]	44×(30)	38
47	L 4d0	円形	10×10	10
48	L 4d0	楕円形	20×16	23
49	L 4d0	楕円形	42×36	30
50	L 4d0	楕円形	43×22	14-18

ビット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
51	L 4d0	[楕円形]	(36)×26	44
52	L 4d0	[楕円形]	(34)×28	33
53	L 4d0	円形	24×24	26
54	L 4d0	楕円形	36×30	26
55	L 5d1	楕円形	44×16	13-17
56	L 5d1	円形	26×26	14
57	L 5d1	円形	20×19	6
58	L 5d1	楕円形	44×38	38
59	L 5d1	不定形	28×24	23-24
60	L 5d1	楕円形	34×32	33
61	L 5d1	楕円形	28×22	15
62	L 5d1	方形	24×22	20
63	L 5d1	[円形]	30×(30)	25
64	L 5d1	楕円形	22×20	19
65	L 5d1	楕円形	22×14	14
66	L 5d1	円形	16×16	9
67	L 5d1	楕円形	20×14	9
68	L 5d1	楕円形	46×24	29
69	L 5d1	楕円形	26×18	30
70	L 5d1	隅丸長方形	34×28	44
71	L 5d1	円形	23×22	23
72	L 5d1	隅丸長方形	56×24	20
73	L 5d1	楕円形	20×16	16
74	L 5d1	隅丸長方形	39×32	47
75	L 5d1	楕円形	50×43	28
76	L 5d1	楕円形	22×16	23
77	L 5d1	楕円形	40×24	48
78	L 5d1	楕円形	42×23	56
79	L 5d1	[楕円形]	46×(44)	34
80	L 5d1	円形	24×24	12
81	L 5d1	楕円形	35×28	28
82	L 5d1	楕円形	36×34	46
83	L 5d1	楕円形	33×28	18
84	L 5d1	円形	24×24	12
85	L 5d1	円形	20×19	10
86	L 5d1	円形	28×28	18
87	L 5d1	隅丸長方形	36×25	28
88	L 5d1	円形	12×12	22
89	L 5d1	楕円形	24×18	22
90	L 5d1	楕円形	30×26	30
91	L 5d1	不定形	50×34	34
92	L 5d2	[円形]	30×(30)	45
93	L 5d2	楕円形	14×10	58
94	L 5d2	楕円形	22×14	49
95	L 5d2	楕円形	64×38	56-61
96	L 5d2	楕円形	21×16	14

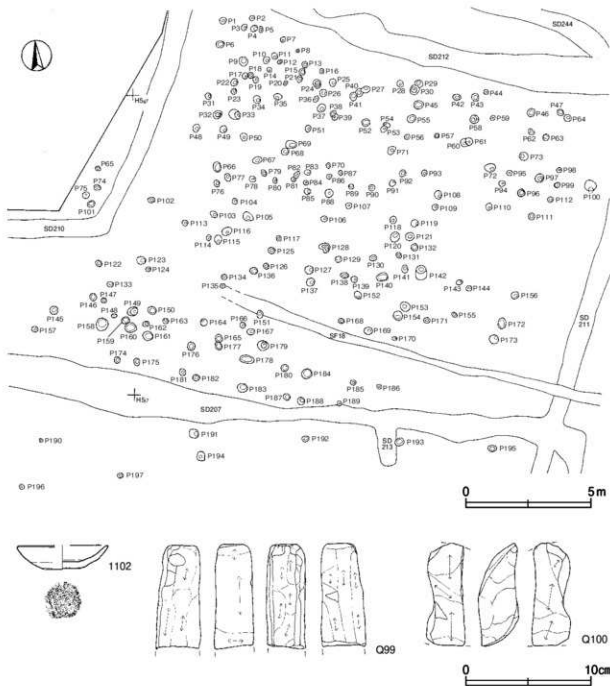
ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
97	L 5 d2	楕円形	21×20	20
98	L 5 d2	楕円形	22×20	21
99	L 5 d2	隅丸長方形	26×18	33
100	L 5 d2	隅丸長方形	28×18	39
101	L 5 d2	円形	24×23	15
102	L 5 d2	円形	24×23	24
103	L 5 d2	円形	28×28	11
104	L 5 d2	楕円形	50×30	53
105	L 5 d2	楕円形	32×22	15
106	L 5 d2	楕円形	26×22	15
107	L 5 d2	不定形	54×30	21<30
108	L 5 d2	楕円形	27×22	20
109	L 5 d2	円形	28×28	20
110	L 5 d2	楕円形	20×16	24
111	L 5 d2	円形	14×14	13
112	L 5 d2	楕円形	34×24	25
113	L 5 d2	円形	38×38	35
114	L 5 d2	楕円形	34×27	34
115	L 5 d2	楕円形	38×34	45<66
116	L 5 d2	楕円形	29×20	14
117	L 5 d2	楕円形	29×19	24
118	L 4 e9	楕円形	50×36	24
119	L 4 e9	円形	33×32	34
120	L 4 e9	[楕円形]	56×(50)	18
121	L 4 e0	楕円形	38×36	40
122	L 4 e0	円形	23×22	41
123	L 4 e0	楕円形	51×40	66
124	L 4 e0	不定形	40×40	12
125	L 4 e0	楕円形	33×24	20
126	L 4 e0	楕円形	18×14	16
127	L 4 e0	楕円形	40×32	26
128	L 4 e0	楕円形	18×16	18
129	L 4 e0	楕円形	54×36	36
130	L 4 e0	楕円形	34×28	20
131	L 4 e0	円形	28×27	16
132	L 4 e0	楕円形	46×35	63
133	L 4 e0	楕円形	24×22	16
134	L 4 e0	円形	45×44	30
135	L 4 e0	隅丸長方形	34×28	28
136	L 4 e0	楕円形	30×24	27

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
137	L 4 e0	隅丸長方形	29×28	23
138	L 4 e0	楕円形	46×29	19
139	L 4 e0	楕円形	28×26	28
140	L 4 e0	楕円形	20×20	12
141	L 4 e0	楕円形	20×16	12
142	L 5 e1	楕円形	26×24	18
143	L 5 e1	方形	30×29	22
144	L 5 e1	方形	30×29	20
145	L 5 e1	楕円形	32×29	38<40
146	L 5 e1	楕円形	40×34	22
147	L 5 e1	方形	44×31	20<26
148	L 5 e1	楕円形	40×26	32
149	L 5 e1	円形	35×34	28
150	L 5 e1	円形	37×36	26
151	L 5 e1	円形	26×25	15
152	L 5 e1	楕円形	34×28	22
153	L 5 e1	不定形	34×(22)	28
154	L 5 e1	楕円形	30×28	27
155	L 5 e1	円形	38×27	27
156	L 5 e1	不定形	38×(16)	18
157	L 5 e1	楕円形	43×36	10
158	L 5 e1	楕円形	38×25	28
159	L 5 e1	隅丸長方形	43×42	36
160	L 5 e1	楕円形	48×34	24
161	L 5 e1	楕円形	46×40	36
162	L 5 e1	楕円形	30×26	16
163	L 5 e1	楕円形	26×24	15
164	L 5 e1	楕円形	36×34	10
165	L 5 e1	楕円形	38×30	30
166	L 5 e1	円形	24×24	16
167	L 5 e1	楕円形	26×24	37
168	L 5 e1	円形	28×28	38
169	L 5 e1	楕円形	76×54	24
170	L 5 e1	楕円形	23×16	21
171	L 5 e2	楕円形	65×40	33<45
172	L 5 e2	楕円形	26×22	14
173	L 5 e2	円形	22×22	19
174	L 5 e2	楕円形	28×26	16
175	L 5 e2	楕円形	22×16	24

第22号ピット群 (第260図)

調査区北西部のH 6 f5～H 6 j1区から197か所のピットが検出された。標高26mほどの台地上に位置し、平面形は長径12～60cmの円形・楕円形また不定形、長軸28～48cmの隅丸方形または長方形などで、深さは7～69cmである。1102はP 57、Q 99はP 49、Q 100はP 17の覆土中からそれぞれ出土している。いずれも混入の可

性能は高いが、廃棄されたものと思われる。



第260図 第22号ピット群・出土遺物実測図

第22号ピット群出土遺物観察表(第260図)

番号	器種	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1102	土師質土器	皿	[7.3]	1.9	3.0	長石・石英・ 高岭土・赤色粘土	橙	普通	体部内・外面ロケロナナ 底面刷毛高切 後1家ナメテ 内底磨ナメ	P57覆土中	50%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q99	磁石	8.3	3.2	3.6	[111.5]	凝灰岩	磁面5面	断面角柱状		P68覆土中	
Q100	磁石	8.2	[3.0]	3.2	[87.3]	凝灰岩	磁面5面			P17覆土中	

表18 第22号ビット群ビット一覧表

ビット 番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
1	H 5 f7	楕円形	28×25	31
2	H 5 f8	円形	25×23	—
3	H 5 f8	円形	26×24	24
4	H 5 f8	楕円形	30×27	31
5	H 5 f8	円形	25×24	14
6	H 5 f7	楕円形	30×24	9
7	H 5 f8	楕円形	21×19	20
8	H 5 f8	円形	14×14	16
9	H 5 g8	楕円形	39×33	24
10	H 5 f8	円形	30×28	26
11	H 5 f8	円形	23×22	30
12	H 5 f8	円形	18×18	12
13	H 5 f8	円形	23×22	7
14	H 5 f8	楕円形	20×16	15
15	H 5 f8	楕円形	28×23	14
16	H 5 f8	楕円形	18×16	19
17	H 5 g8	[円形]	23×(23)	21
18	H 5 g8	円形	25×23	21
19	H 5 g8	楕円形	23×18	12
20	H 5 f8	楕円形	15×12	10
21	H 5 f8	楕円形	28×19	23
22	H 5 g8	円形	31×29	58
23	H 5 g8	楕円形	21×19	21
24	H 5 f8	円形	35×32	19
25	H 5 g9	楕円形	27×23	10
26	H 5 f8	楕円形	30×27	26
27	H 5 g9	楕円形	36×29	45
28	H 5 f9	円形	26×24	24
29	H 5 f9	不定形	34×30	17
30	H 5 f9	楕円形	38×36	28
31	H 5 g7	楕円形	25×20	26
32	H 5 g7	楕円形	33×29	27
33	H 5 g8	楕円形	47×39	41
34	H 5 g8	円形	30×28	32
35	H 5 g8	楕円形	33×27	41
36	H 5 g8	楕円形	22×18	11
37	H 5 g8	隅丸方形	35×32	56
38	H 5 g9	楕円形	24×15	29
39	H 5 g9	不定形	27×(17)	17
40	H 5 g9	不定形	(28)×26	15
41	H 5 g9	円形	29×28	28
42	H 5 g9	円形	26×24	13
43	H 5 g9	楕円形	33×27	18
44	H 5 g9	楕円形	21×17	18
45	H 5 g9	楕円形	37×31	21

ビット 番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
46	H 6 g1	円形	32×31	13
47	H 6 g1	楕円形	28×25	11
48	H 5 g7	楕円形	29×24	30
49	H 5 g7	楕円形	26×23	32
50	H 5 g8	楕円形	35×26	34
51	H 5 g8	楕円形	25×19	24
52	H 5 g9	円形	30×28	26
53	H 5 g9	楕円形	27×23	24
54	H 5 g9	楕円形	25×19	23
55	H 5 g9	楕円形	36×28	30
56	H 5 g9	円形	24×23	14
57	H 5 g9	楕円形	18×16	17
58	H 5 g9	円形	35×34	25
59	H 5 g9	楕円形	22×19	21
60	H 5 g9	長方形	28×22	9
61	H 5 g9	楕円形	29×25	33
62	H 6 g1	円形	23×19	8
63	H 6 g1	円形	26×24	22
64	H 6 g1	楕円形	29×26	58
65	H 5 g6	楕円形	22×20	16
66	H 5 g7	楕円形	29×29	40
67	H 5 g8	楕円形	36×27	25
68	H 5 g8	楕円形	32×27	27
69	H 5 g8	楕円形	47×34	22
70	H 5 g8	楕円形	19×16	12
71	H 5 g9	不定形	34×30	38
72	H 5 g9	楕円形	43×37	51
73	H 5 g9	楕円形	38×32	22
74	H 5 g6	楕円形	27×23	33
75	H 5 g6	楕円形	23×21	18
76	H 5 g7	楕円形	26×19	13
77	H 5 g7	楕円形	29×24	41
78	H 5 g8	楕円形	27×21	43
79	H 5 g8	楕円形	30×25	21
80	H 5 g8	楕円形	20×19	30
81	H 5 g8	[隅丸方形]	(17)×20	27
82	H 5 g8	隅丸方形	30×19	18
83	H 5 g8	楕円形	27×21	20
84	H 5 g8	円形	18×18	28
85	H 5 g8	楕円形	25×21	55
86	H 5 g8	楕円形	23×16	16
87	H 5 g9	円形	17×16	13
88	H 5 g8	楕円形	33×29	43
89	H 5 g9	円形	25×23	38
90	H 5 g9	楕円形	26×23	30

ピット 番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
91	H 5g9	円形	25×23	42
92	H 5g9	楕円形	29×25	18
93	H 5g9	楕円形	22×19	38
94	H 5g9	円形	23×22	27
95	H 5g9	楕円形	26×21	48
96	H 5g9	楕円形	29×26	18
97	H 6g1	円形	38×35	37
98	H 6g1	楕円形	20×18	23
99	H 6g1	楕円形	24×20	20
100	H 6g1	円形	50×48	60
101	H 5b6	円形	26×25	12
102	H 5b7	楕円形	26×24	25
103	H 5b7	円形	26×26	32
104	H 5b7	円形	25×23	40
105	H 5b8	楕円形	40×30	25
106	H 5b8	円形	25×24	26
107	H 5b9	円形	23×23	50
108	H 5b9	楕円形	31×27	35
109	H 5g9	楕円形	22×20	20
110	H 5b9	円形	26×25	50
111	H 6b1	円形	25×23	45
112	H 6g1	楕円形	24×21	22
113	H 5b7	楕円形	24×20	24
114	H 5b7	円形	17×17	9
115	H 5b7	楕円形	32×25	20
116	H 5b7	楕円形	39×31	38
117	H 5b8	円形	22×21	33
118	H 5b9	楕円形	27×24	33
119	H 5b9	楕円形	29×26	57
120	H 5b9	楕円形	43×34	26
121	H 5b9	楕円形	32×28	35
122	H 5b6	楕円形	26×23	28
123	H 5b7	円形	37×3	39
124	H 5b7	楕円形	20×18	17
125	H 5b8	楕円形	29×23	20
126	H 5b8	円形	23×21	20
127	H 5b8	円形	32×30	52
128	H 5b8	不定形	48×38	52
129	H 5b9	円形	25×24	27
130	H 5b9	楕円形	27×17	14
131	H 5b9	円形	24×22	15
132	H 5b9	円形	28×27	24
133	H 5b6	楕円形	27×19	12
134	H 5b7	円形	25×24	29
135	H 5b7	楕円形	21×19	11
136	H 5b8	円形	29×27	50

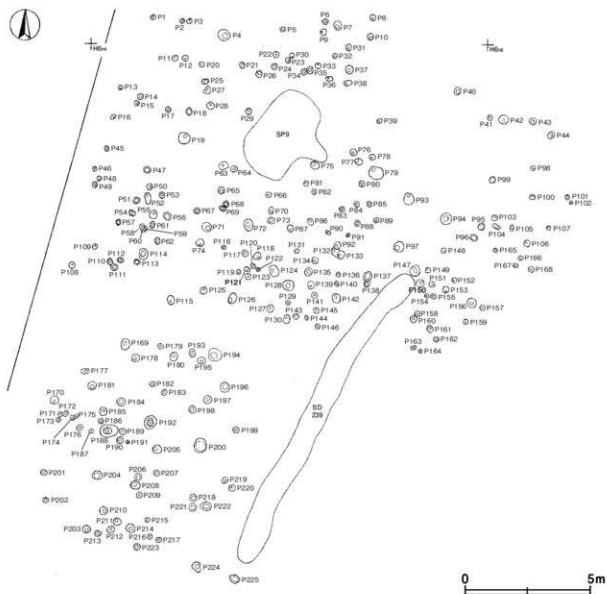
ピット 番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
137	H 5b8	円形	32×30	63
138	H 5b9	楕円形	26×18	17
139	H 5b9	楕円形	23×20	38
140	H 5b9	楕円形	44×34	14
141	H 5b9	楕円形	31×22	34
142	H 5b9	楕円形	60×47	69
143	H 5b9	楕円形	24×21	45
144	H 5b9	楕円形	23×19	25
145	H 5b6	楕円形	35×31	20
146	H 5b6	楕円形	27×24	18
147	H 5b6	円形	23×21	21
148	H 5b6	楕円形	20×16	10
149	H 5b6	楕円形	43×37	54
150	H 5b7	楕円形	32×29	27
151	H 5b8	楕円形	33×24	22
152	H 5b9	楕円形	32×28	42
153	H 5b9	楕円形	44×40	53
154	H 5b9	不定形	(38)×35	42
155	H 5b9	円形	21×21	25
156	H 5b9	楕円形	31×28	40
157	H 5b5	円形	22×22	23
158	H 5b6	楕円形	51×43	42
159	H 5b6	楕円形	34×27	44
160	H 5b6	楕円形	42×37	17
161	H 5b7	楕円形	41×32	28
162	H 5b7	楕円形	23×19	12
163	H 5b7	楕円形	21×19	12
164	H 5b7	円形	27×26	16
165	H 5b7	円形	32×30	18
166	H 5b8	円形	20×20	8
167	H 5b8	楕円形	30×24	17
168	H 5b9	円形	23×20	13
169	H 5b9	楕円形	29×26	40
170	H 5b9	楕円形	21×19	27
171	H 5b9	円形	21×20	14
172	H 5b9	楕円形	42×32	23
173	H 5b9	楕円形	38×34	65
174	H 5b6	楕円形	25×21	19
175	H 5b7	円形	26×24	14
176	H 5b7	楕円形	31×27	25
177	H 5b7	円形	27×25	19
178	H 5b8	隅丸長方形	48×32	46
179	H 5b8	円形	43×41	63
180	H 5b8	楕円形	33×30	44
181	H 5b7	円形	25×24	21
182	H 5b7	円形	25×23	11

ピット番号	位置	形状	風 機 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
183	H 5 18	楕円形	40×34	35
184	H 5 18	楕円形	44×40	42
185	H 5 19	楕円形	23×19	30
186	H 5 19	楕円形	18×16	20
187	H 5 18	円形	28×26	47
188	H 5 18	円形	29×28	60
189	H 5 19	楕円形	20×18	30
190	H 5 16	楕円形	18×15	12

ピット番号	位置	形状	風 機 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
191	H 5 17	楕円形	20×37	50
192	H 5 18	円形	21×22	15
193	H 5 19	円形	33×31	24
194	H 5 17	円形	35×27	47
195	H 5 10	楕円形	33×25	24
196	H 5 15	円形	24×22	18
197	H 5 16	楕円形	24×20	10

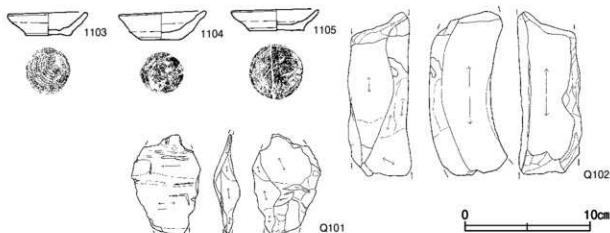
第23号ピット群 (第261・262図)

調査区中央部のH 6 g3～I 6 c8区から225か所のピットが検出された。標高26mほどの台地上に位置し、平面形は長径15～71cmの円形・楕円形または不定形、長軸32～52cmの隅丸方形・隅丸長方形で深さは7～62cm



第261図 第23号ピット群実測図

である。1103はP17の覆土上層、1104はP9、1105はP11の覆土中からそれぞれ出土している。いずれも混入の可能性が高いが、廃棄されたものと思われる。



第262図 第23号ピット群出土遺物実測図

第23号ピット群出土遺物観察表 (第262図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1103	土加貫土器	甕	6.2	1.9	3.6	長石・石英・赤色 粘土	黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り 後ナデ 内底ナデ 中央部突出	P17覆土上層	100%
1104	土加貫土器	甕	6.8	2.3	3.2	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り 後ナデ 内底ナデ 中央部突出	P9覆土中	90%
1105	土加貫土器	甕	6.9	1.7	4.3	長石・石英・ 赤色粘土	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り 後ナデ 内底ナデ	P11覆土中	95%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q101	磁石	(8.1)	5.5	2.1	(68.6)	凝灰質	磁面3面 磁面の一部に磨痕有り	P3覆土中	
Q102	磁石	(13.0)	6.1	3.0	(47.1)	砂岩	磁面3面 磁面の内1面断面弧状になっている	P11覆土中	

表19 第23号ピット群ピット一覧表

ピット 番号	位置	形状	規模(cm)		ピット 番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ				長径(軸)×短径(軸)	深さ
1	H 6 g1	円形	20×18	13	16	H 6 b4	楕円形	23×18	9
2	H 6 g1	円形	18×17	23	17	H 6 b4	楕円形	23×20	12
3	H 6 g1	円形	21×19	16	18	H 6 b5	楕円形	25×22	22
4	H 6 g5	楕円形	53×42	38	19	H 6 b4	円形	46×45	33
5	H 6 g5	円形	21×20	15	20	H 6 b5	円形	22×21	12
6	H 6 g5	楕円形	24×19	10	21	H 6 b5	楕円形	27×23	18
7	H 6 g5	楕円形	38×33	12	22	H 6 b5	楕円形	27×24	15
8	H 6 g5	円形	26×24	30	23	H 6 b5	円形	24×22	20
9	H 6 g5	楕円形	28×24	32	24	H 6 b5	楕円形	25×23	21
10	H 6 g5	円形	27×26	22	25	H 6 b5	楕円形	29×20	28
11	H 6 b4	楕円形	25×22	11	26	H 6 b5	円形	26×24	30
12	H 6 b4	円形	26×24	14	27	H 6 b5	不定形	33×21	20
13	H 6 b4	楕円形	20×18	14	28	H 6 b5	楕円形	30×28	12
14	H 6 b4	楕円形	28×23	9	29	H 6 b5	楕円形	26×22	42
15	H 6 b4	楕円形	22×19	12	30	H 6 b6	円形	23×22	18

ピット 番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
31	H 6 66	楕円形	28×23	25
32	H 6 66	円形	20×19	25
33	H 6 65	楕円形	26×23	34
34	H 6 66	楕円形	26×22	35
35	H 6 66	楕円形	28×25	44
36	H 6 66	長方形	27×17	31
37	H 6 65	楕円形	36×33	36
38	H 6 66	不定形	31×21	20
39	H 6 66	楕円形	22×19	32
40	H 6 67	楕円形	32×28	23
41	H 6 68	円形	22×22	13
42	H 6 68	楕円形	42×34	25
43	H 6 68	円形	31×28	30
44	H 6 68	楕円形	33×25	10
45	H 6 14	円形	18×17	15
46	H 6 14	円形	19×17	18
47	H 6 14	円形	31×29	12
48	H 6 14	円形	21×19	14
49	H 6 14	円形	25×23	16
50	H 6 14	楕円形	27×24	19
51	H 6 14	円形	27×26	20
52	H 6 14	楕丸長方形	48×27	34
53	H 6 14	楕円形	26×21	23
54	H 6 14	楕円形	28×24	14
55	H 6 14	不定形	32×30	28
56	H 6 14	楕円形	34×28	28
57	H 6 14	円形	22×21	10
58	H 6 14	不定形	34×29	17
59	H 6 14	不定形	19×16	11
60	H 6 14	不定形	20×16	12
61	H 6 14	楕円形	29×19	36
62	H 6 14	楕円形	25×22	22
63	H 6 15	円形	39×29	37
64	H 6 15	円形	29×28	11
65	H 6 15	円形	27×27	13
66	H 6 15	円形	22×22	24
67	H 6 15	円形	24×24	41
68	H 6 15	方形	25×23	24
69	H 6 15	楕円形	28×20	14
70	H 6 15	楕円形	32×24	49
71	H 6 15	楕円形	40×37	50
72	H 6 15	楕円形	47×36	21
73	H 6 15	楕円形	30×24	36
74	H 6 15	円形	33×32	30
75	H 6 16	楕円形	42×32	35
76	H 6 16	円形	30×29	13

ピット 番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
77	H 6 16	楕円形	32×28	24
78	H 6 16	円形	29×27	36
79	H 6 16	楕円形	60×50	62
80	H 6 16	円形	28×26	25
81	H 6 16	円形	25×24	16
82	H 6 16	楕円形	22×18	26
83	H 6 16	楕円形	26×23	21
84	H 6 16	楕円形	26×23	21
85	H 6 16	楕円形	24×18	10
86	H 6 16	楕円形	31×22	19
87	H 6 16	楕円形	31×23	24
88	H 6 16	楕円形	25×21	15
89	H 6 16	円形	22×19	16
90	H 6 16	楕円形	19×14	31
91	H 6 16	円形	17×16	26
92	H 6 10	楕円形	30×24	34
93	H 6 17	楕円形	52×42	17
94	H 6 17	円形	50×47	21
95	H 6 17	円形	23×21	18
96	H 6 17	楕円形	32×26	15
97	H 6 17	円形	41×41	20
98	H 6 18	楕円形	23×20	20
99	H 6 18	楕円形	27×22	7
100	H 6 18	楕円形	26×20	20
101	H 6 18	円形	22×22	25
102	H 6 18	楕円形	15×17	17
103	H 6 18	円形	24×24	16
104	H 6 18	楕丸長方形	32×17	12
105	H 6 18	楕円形	19×40	40
106	H 6 18	円形	26×24	38
107	H 6 18	円形	19×19	25
108	H 6 13	楕円形	36×36	14
109	H 6 14	楕円形	22×9	9
110	H 6 14	楕円形	24×22	21
111	H 6 14	楕円形	28×24	18
112	H 6 14	楕円形	24×19	23
113	H 6 14	楕円形	24×22	24
114	H 6 14	楕丸長方形	42×35	43
115	H 6 14	楕円形	35×29	36
116	H 6 15	楕円形	19×17	15
117	H 6 15	楕円形	26×24	28
118	H 6 15	楕円形	34×31	28
119	H 6 15	円形	19×18	36
120	H 6 15	楕円形	22×20	18
121	H 6 15	楕円形	23×20	21
122	H 6 15	楕円形	16×14	20

ピット 番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
123	H 6 15	円形	27×26	34
124	H 6 15	楕円形	46×35	35
125	H 6 15	円形	28×27	30
126	H 6 15	楕円形	44×38	30
127	H 6 15	楕円形	34×27	31
128	H 6 16	楕円形	48×43	34
129	H 6 15	楕円形	20×18	14
130	H 6 15	楕円形	39×26	31
131	H 6 16	円形	20×18	23
132	H 6 16	不定形	(31)×32	30
133	H 6 16	楕円形	37×30	38
134	H 6 16	楕円形	31×25	45
135	H 6 16	円形	33×32	31
136	H 6 16	楕円形	20×17	26
137	H 6 16	楕円形	34×32	50
138	H 6 16	[円形]	17×(16)	35
139	H 6 16	楕円形	32×29	38
140	H 6 16	楕円形	23×19	25
141	H 6 16	楕円形	39×24	34
142	H 6 16	楕円形	38×32	57
143	H 6 16	楕円形	22×19	33
144	H 6 16	楕円形	20×13	20
145	H 6 16	楕円形	24×22	31
146	H 6 16	楕円形	20×19	42
147	H 6 17	楕円形	47×42	28
148	H 6 17	楕円形	27×23	17
149	H 6 17	円形	23×22	24
150	H 6 17	楕円形	33×29	32
151	H 6 17	円形	24×22	25
152	H 6 17	円形	20×18	19
153	H 6 17	楕円形	31×26	14
154	H 6 17	円形	18×18	14
155	H 6 17	円形	24×22	12
156	H 6 17	円形	38×37	34
157	H 6 17	円形	18×17	20
158	H 6 17	楕円形	24×20	16
159	H 6 16	楕円形	22×16	33
160	H 6 17	楕円形	28×25	12
161	H 6 17	楕円形	28×24	15
162	H 6 17	円形	22×20	24
163	I 6a7	円形	23×19	40
164	I 6a7	楕円形	15×15	42
165	H 6 18	楕円形	22×28	28
166	H 6 18	楕円形	19×17	7
167	H 6 18	円形	22×20	10
168	H 6 18	楕円形	28×23	24

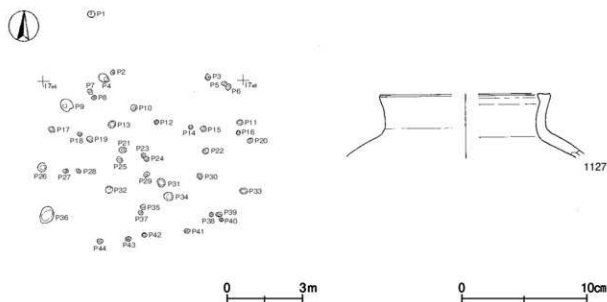
ピット 番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
169	I 6 14	楕円形	50×37	30
170	I 6 a3	円形	35×35	32
171	I 6 a3	楕円形	21×18	18
172	I 6 a3	楕円形	28×22	12
173	I 6 a3	楕円形	20×17	12
174	I 6 a3	楕円形	22×17	14
175	I 6 a4	楕円形	18×15	10
176	I 6 a3	円形	24×24	17
177	I 6 a3	楕円形	23×20	14
178	I 6 a4	円形	32×31	19
179	I 6 a4	円形	22×19	33
180	I 6 a4	楕円形	38×31	38
181	I 6 a4	円形	32×29	27
182	I 6 a4	楕円形	26×22	25
183	I 6 a4	楕円形	26×22	29
184	I 6 a4	円形	34×33	25
185	I 6 a4	円形	33×31	40
186	I 6 a4	楕円形	26×22	13
187	I 6 a4	円形	21×21	12
188	I 6 a4	楕円形	71×50	50
189	I 6 a4	円形	27×25	37
190	I 6 a4	楕円形	31×27	29
191	I 6 a4	円形	17×15	17
192	I 6 a4	楕円形	54×47	30
193	I 6 a5	楕円形	33×23	21
194	I 6 a5	隅丸方形	52×48	40
195	I 6 a5	楕円形	28×26	33
196	I 6 a5	楕円形	41×38	18
197	I 6 a5	円形	33×33	23
198	I 6 a5	楕円形	30×28	17
199	I 6 a5	円形	27×26	24
200	I 6 a5	楕円形	58×50	37
201	I 6 b3	楕円形	26×22	20
202	I 6 b3	楕円形	24×21	18
203	I 6 b3	楕円形	32×30	27
204	I 6 b4	楕円形	40×34	30
205	I 6 b4	楕円形	37×33	21
206	I 6 b4	楕円形	32×30	23
207	I 6 b4	円形	25×24	30
208	I 6 b4	楕円形	41×34	26
209	I 6 b4	楕円形	23×22	25
210	I 6 b4	円形	33×32	25
211	I 6 b4	円形	30×30	15
212	I 6 b4	楕円形	33×30	29
213	I 6 b4	円形	27×27	20
214	I 6 b4	楕円形	41×37	22

ピット番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
215	1 6 b4	円形	21×20	11
216	1 6 b4	楕円形	22×19	9
217	1 6 b4	楕円形	23×22	16
218	1 6 b5	楕円形	32×27	22
219	1 6 b5	楕円形	29×23	16
220	1 6 b4	楕円形	29×27	30

ピット番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
221	1 6 b5	楕円形	32×32	29
222	1 6 b5	楕円形	41×35	25
223	1 6 b4	楕円形	28×27	25
224	1 6 c5	楕円形	43×35	14
225	1 6 c5	楕円形	43×34	37

第53号ピット群 (第263図)

調査区中央部の1 7 d5～1 7 f8区から44か所のピットが検出された。標高25mほどの台地上に位置し、平面形は長径10～66cmの円形・楕円形または不定形、長軸21cmの長方形で、深さは4～43cmである。1127はP13の覆土中から出土し、混入の可能性が高いが、廃棄されたものと思われる。



第263図 第53号ピット群・出土遺物実測図

第53号ピット群出土遺物観察表 (第263図)

番号	種類	器種	1径	器高	残存	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1127	土師器土器	壺	[136]	(5.1)	—	灰白・石灰・紫母・赤色胎土	に濃い赤陶	普通	内・外面丁寧な磨きアリ 1口部底部で輪孔 内・外面につまみ出されている	覆土中	

表20 第53号ピット群ピット一覧表

ピット番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
1	1 7 d6	円形	28×28	31
2	1 7 d6	楕円形	20×18	8
3	1 7 d7	円形	24×22	5
4	1 7 d6	楕円形	46×31	39
5	1 7 e7	長方形	21×13	12

ピット番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
6	1 7 e7	楕円形	23×20	12
7	1 7 e6	楕円形	23×17	12
8	1 7 e6	楕円形	19×16	27
9	1 7 e6	不定形	55×43	4
10	1 7 e6	楕円形	29×25	15

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
11	1 7 e7	円形	21×21	8
12	1 7 e7	円形	17×17	—
13	1 7 e6	楕円形	30×26	40
14	1 7 e7	円形	18×18	16
15	1 7 e7	円形	23×23	18
16	1 7 e7	楕円形	21×19	12
17	1 7 e6	楕円形	26×22	22
18	1 7 e6	楕円形	21×18	20
19	1 7 e6	円形	26×25	14
20	1 7 e8	円形	10×10	11
21	1 7 e6	楕円形	24×19	10
22	1 7 e7	楕円形	21×17	10
23	1 7 e7	楕円形	21×19	15
24	1 7 e7	楕円形	21×19	43
25	1 7 e6	楕円形	29×20	22
26	1 7 e5	円形	36×33	31
27	1 7 d6	楕円形	19×15	13

ピット番号	位置	形状	規 模 (cm)	
			長径(軸)×短径(軸)	深さ
28	1 7 d6	楕円形	20×13	31
29	1 7 e7	楕円形	26×17	24
30	1 7 e7	楕円形	21×19	12
31	1 7 f7	楕円形	32×29	23
32	1 7 f6	楕円形	30×27	37
33	1 7 f8	楕円形	29×24	15
34	1 7 f7	円形	35×33	33
35	1 7 f7	楕円形	22×19	15
36	1 7 f6	楕円形	66×52	4
37	1 7 f6	円形	19×18	29
38	1 7 f7	円形	16×16	10
39	1 7 f7	楕円形	28×17	9
40	1 7 f7	楕円形	16×12	11
41	1 7 f7	楕円形	24×17	24
42	1 7 f7	円形	16×16	4
43	1 7 f6	楕円形	23×18	16
44	1 7 f6	円形	19×19	19

以下、その他のピット群から出土した遺物を記載する。

第4号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1088	土加瓦土器	皿	6.9	2.1	3.2	長石・白英・ 炭母・赤色粒土	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底面回転系切り 横ナデ 内底ナデ 中央部突出	覆土中	100%
1089	土加瓦土器	皿	12.2	3.2	8.0	長石・白英・ 炭母・赤色粒土	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底面回転系切り 横ナデ 内底ナデ 中央部突出	覆土中	65%

第5号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

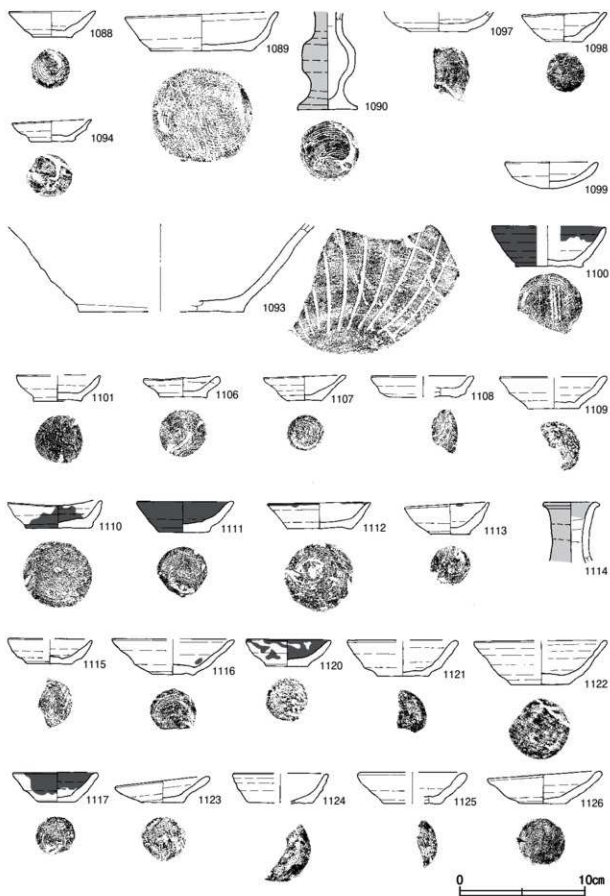
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1090	陶器	花瓶	—	(7.7)	4.8	緑黄 長石・明礬 灰白・赤褐	普通	普通	口クロ成形 底面系切り 外面に筒輪を 施す	底面	80%

第10号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

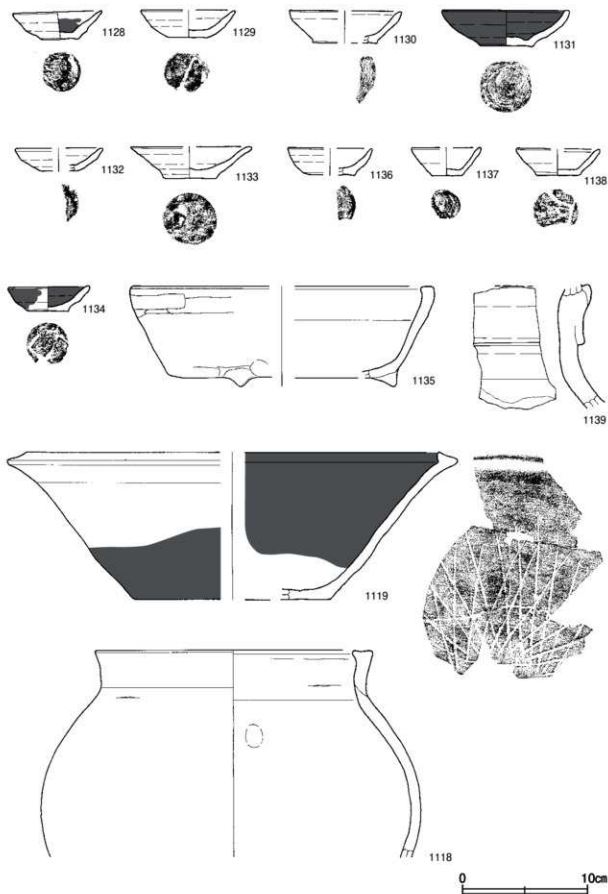
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1093	土加瓦土器	楕鉢	—	(7.0)	[13.2]	長石・白英・ 炭母・赤色粒土	橙	普通	体部内・外面ナデ 体部下端ヘラナデ 横 と110度	覆土中	10%

第11号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

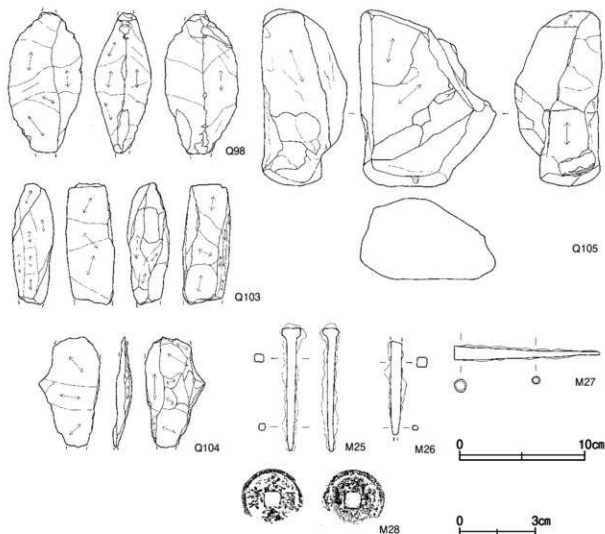
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1094	土加瓦土器	皿	6.2	1.8	3.4	長石・白英・赤色 粒土	浅黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底面回転系切 り横ナデ	覆土中	100%



第264図 その他のビット群出土遺物実測図(1)



第265図 その他のビット群出土遺物実測図(2)



第266図 その他のピット群出土遺物実測図(3)

第14号ピット群出土遺物観察表 (第264・266図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1097	土師質土器	皿	—	(1.7)	(4.8)	長石・石英・ 炭母・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面クロロナデ 底面回転糸切り 残ナデ 内底ナデ 偏った位置に強い 凹み	覆土中	40%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M25	針	9.8	1.6	0.6	25.4	鉄	さび釘々 断面方形		覆土中		

第17号ピット群出土遺物観察表 (第264・266図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1098	土師質土器	皿	6.8	2.3	3.0	長石・石英・ 炭母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面クロロナデ 底面回転糸切り 残ナデナデ 内底残ナデ	覆土下層	100%
1099	土師質土器	皿	7.4	2.1	—	長石・石英・ 炭母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面クロロナデ 底面丁寧ナデ	覆土上層	100%
1100	土師質土器	皿	(9.1)	3.3	5.3	長石・石英・ 炭母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面クロロナデ 底面回転糸切り 残ナデ スノコ状圧痕 内底2本の平 行な残ナデ	覆土下層	40% 全ての外 面部分と内面口沿 部まで油煙付着
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q98	灰石	(11.2)	5.9	4.6	(234.1)	凝灰岩	底面4面 縦断面輪縁形		覆土上層		

第21号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1101	土加貫土器	甕	[6.7]	2.1	3.8	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ 内底種ナデ	甕土中層	50%

第24号ピット群出土遺物観察表 (第264・266図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1106	土加貫土器	甕	5.8	1.7	3.8	長石・石英・雲母・赤色砂子	明陶	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ 内底種ナデ 輪襷張	甕土中	90%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
Q303	砥石	(9.7)	3.8	3.3	(147.3)	凝灰岩	砥面4面		甕土中	

第25号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1107	土加貫土器	甕	6.6	2.0	2.6	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ 内底種ナデ 中央部若く突出	甕土中	80%

第26号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1108	土加貫土器	甕	[8.0]	1.7	(5.8)	長石・石英・雲母・赤色砂子	黒	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ 内底種ナデ	甕土中	40%変色

第29号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1109	土加貫土器	甕	[8.1]	2.6	[4.2]	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ 内底種ナデ	甕土中	40%

第41号ピット群出土遺物観察表 (第266図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
M26	釘	(7.5)	0.9	0.8	(16.5)	鉄	端部(頭部)欠損	断面長方形	甕土中	

第42号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1110	土加貫土器	甕	7.6	2.2	5.2	長石・雲母	靑灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ 内底種ナデ 中央部凹み	甕土中	95% 流弊付着
1111	土加貫土器	甕	7.8	2.5	4.0	長石・石英・雲母・赤色砂子	靑灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ 内底種ナデ	甕土中	100% 内・外流弊付着
1112	土加貫土器	甕	8.0	2.1	5.2	長石・石英・赤色砂子	浅黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ	甕土中	100% 11号流弊付着 同一目

第43号ピット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1113	土加貫土器	甕	6.7	2.5	3.1	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後ノ家々ナデ 内底種ナデ 中央部凹み	甕土中	95% 11号流弊付着

第44号ビット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1114	陶器	高脚田型*	4.0	(4.8)	—	精良 灰釉	灰白・浅黄	普通	口テロ成形 外周全面・内面若干灰釉を施す	確認面	10% 断面・裏面

第45号ビット群出土遺物観察表 (第264・266図)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1115	土師器土器	皿	(6.6)	2.0	(3.6)	長石・石英・赤色砂子	にぶい・黄橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土中	50%
1116	土師器土器	皿	(9.6)	2.8	3.3	長石・石英・赤母・赤色砂子	黄橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土中	30% 内面 滑り着
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q104	灰石	(8.8)	(4.6)	1.2	(47.4)	凝灰岩	断面3面			覆土中	

第47号ビット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1117	土師器土器	皿	6.8	2.4	3.0	長石	浅黄橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土中	100% 体部内・外面に滑り着

第48号ビット群出土遺物観察表 (第265図)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1118	土師器土器	皿	22	(16.5)	—	長石・石英・赤母・赤色砂子	橙	普通	口唇部体部は縮込 外・内側に後 体部内・外面ノリ家々ナデ 体部内面指部痕 輪郭筋	底面	10%
1119	土師器土器	磁鉢	(33.0)	11.7	(15.8)	長石・石英・赤母	にぶい・橙	普通	口唇部内側につまみ出し 断面丁字状ノリ家々ノリを施す	覆土下層	30% 内・外面 滑り着

第51号ビット群出土遺物観察表 (第264・266図)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1120	土師器土器	皿	6.7	2.2	3.4	長石・石英・赤母・赤色砂子	浅黄橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土上層	100% 内・外面に滑り着
1121	土師器土器	皿	(8.8)	2.9	(4.0)	長石・石英・赤母・赤色砂子	橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土中	20%
1122	土師器土器	皿	(10.6)	3.5	4.6	長石・石英・赤母・赤色砂子	橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土中	40%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M27	磁管	11.7	1.0	—	20.8	灰胎	喉い口 口付部は筋により閉口			覆土中	PL123
番号	器種	径	孔幅	重量	初跡年	材質	特徴			出土位置	備考
M28	水車通貫	2.4	0.6	(2.0)	1008	鋼	明鏡 無背			覆土下層	

第52号ビット群出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1123	土師器土器	皿	7.2	2.1	3.4	長石・石英・赤母・赤色砂子	黄橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土中	100%
1124	土師器土器	皿	(7.4)	2.4	(3.2)	長石・石英・赤色砂子	黄橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ 中央部筋・凹込	覆土中	45%
1125	土師器土器	皿	(8.4)	2.5	(4.6)	長石・石英・赤色砂子	黄橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土中	30%
1126	土師器土器	皿	9.2	2.6	3.7	長石・石英・赤母・赤色砂子	橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部回転糸切り痕ノリ家々ナデ 内底ナデ	覆土中	95% PL111

第61号ピット群出土遺物観察表 (第265図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1128	土師質土器	甕	7.0	2.3	3.0	長石・石英・赤色 炭屑・赤色粒	黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ	覆土中層	80% 内面 残存
1129	土師質土器	甕	[7.6]	2.2	3.0	長石・石英・ 炭屑・赤色粒	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ	覆土中	45%

第62号ピット群出土遺物観察表 (第265図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1130	土師質土器	甕	[9.0]	2.6	[5.2]	長石・石英・ 炭屑・赤色粒	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ	覆土中	30%
1131	土師質土器	甕	10.2	2.9	4.2	長石・石英・ 炭屑・赤色粒	に、い、橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ 中央部突出	覆土上層	95% 内・外面 残存

第63号ピット群出土遺物観察表 (第265・266図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1132	土師質土器	甕	[7.0]	1.8	[2.8]	長石・炭屑・赤色 粒	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ	覆土中	20%
1133	土師質土器	甕	[9.6]	2.6	4.2	長石・石英・ 炭屑・赤色粒	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ 中央部突出	覆土中	45%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q105	白石	14.0	11.0	6.4	1157.2	白濁母石薄片質	板状の破片 断面直	磁石転用 裏面3か所 一部欠損を受け赤炭	覆土中

第64号ピット群出土遺物観察表 (第265図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1134	土師質土器	甕	6.5	2.0	3.2	長石・石英・ 炭屑・赤色粒	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ	覆土中	80% 内・外 面残存
1135	土師質土器	焙烙	24.3	8.0	[18.0]	長石・石英・ 炭屑・赤色粒	橙	普通	体部内外面ナデ、縁ナデ 裏面粘り付け後 ナデ 上部底部縮込 内側につまみ出し	覆土上層	

第65号ピット群出土遺物観察表 (第265図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1136	土師質土器	甕	[6.7]	2.2	[3.5]	長石・炭屑	灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ	覆土中	30%

第67号ピット群出土遺物観察表 (第265図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1137	土師質土器	甕	[3.6]	2.3	2.4	石英・赤色粒	浅黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ	覆土中	30%
1138	土師質土器	甕	[6.6]	2.1	3.6	長石・石英・ 炭屑・赤色粒	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ナデ 内底ナデ 内底全体の平直ナデ	覆土中	30%
1139	陶器	甕	—	(9.9)	—	長石・石英	灰	良好	縁部が頸部に接着 無胎輪	覆土中	

表21 中世その他のピット群一覧表

番号	位置	柱穴(長さの単位はすべてcm)				主な遺物	備考	
		柱穴	平面形	長径(輪)	短径(輪)			
1	K 4 f9~K 5 g1	13	円形・楕円形	25~65	22~57	16~40	土師質土器	
2	M 4 e5~M 4 g6	30	円形・楕円形	19~46	18~24	6~51		
3	M 4 e6~M 4 g8	39	円形・楕円形・不定形	17~63	17~30	16~55	土師質土器	
4	L 4 a1~L 4 i6	118	円形・楕円形・不定形	19~93	19~44	9~75	土師質土器、陶器	

番号	位置	柱穴(長さの単位はすべてcm)					主な遺物	備考
		柱穴	平面形	長径(軸)	短径(軸)	深さ		
5	L 4 a1~L 4 c6	29	円形・楕円形・隅丸方形	23~37	19~30	13~23	土師質土器、陶器	
7	M 4 a5~M 4 c7	37	円形・楕円形	19~78	17~71	9~66		
9	J 5 e2~J 5 j0	152	円形・楕円形・不定形	18~73	17~59	10~39		
10	K 4 d0~K 5 k3	29	円形・楕円形	16~56	16~32	12~48	土師質土器	
11	J 5 a3~J 5 e0	379	円形・楕円形	14~56	14~52	11~70	土師質土器	
14	L 5 d2~L 5 h6	200	円形・楕円形・隅丸長方形	16~68	14~48	—	土師質土器、釘	
17	M 4 c6~M 4 e9	103	円形・楕円形・不定形	18~84	16~54	10~60	土師質土器、砥石	
18	L 4 i6~M 4 b9	66	円形・楕円形・不定形	20~70	16~58	8~53		
20	H 9 a7~H 10 e4	100	円形・楕円形・隅丸方形	22~81	22~66	9~86		
21	H 5 a8~H 6 f2	82	円形・楕円形	22~88	20~80	9~47	土師質土器	
24	I 5 a2~I 5 g8	129	円形・楕円形・不定形	20~60	16~48	9~45	土師質土器、砥石	
25	I 4 g8~I 4 i0	30	円形・楕円形	38~112	10~24	9~44	土師質土器	
26	H 6 b9~H 7 f3	150	円形・楕円形・不定形	16~70	14~58	8~29	土師質土器、陶器	
27	H 7 h3~H 7 g6	110	円形・楕円形・不定形	14~96	14~56	7~30	土師質土器、古銭	
28	H 7 e6~H 7 g8	70	円形・楕円形	20~44	16~32	10~48		
29	H 7 h1~I 7 b6	58	円形・楕円形	16~54	14~42	2~40	土師質土器	
30	G 9 e2~G 9 d3	8	円形・楕円形	20~35	19~31	18~27		
41	M 4 f9~N 3 a4	49	円形・楕円形	17~56	17~49	18~65	釘	
42	M 4 f0~N 5 a6	105	円形・楕円形・不定形	18~128	16~60	7~57	土師質土器	
43	M 5 c3~M 5 e6	83	円形・楕円形・不定形	16~72	14~55	5~66	土師質土器	
44	M 6 b1~M 6 d3	46	円形・楕円形・不定形	22~32	19~46	10~64	土師質土器、陶器	
45	L 5 i7~M 6 d3	271	円形・楕円形・不定形	20~85	19~59	5~56	土師質土器、砥石	
46	L 5 g5~M 5 a0	104	円形・楕円形・不定形	16~65	16~46	6~54		
47	L 5 f8~L 5 h0	20	円形・楕円形	14~84	12~62	6~42	土師質土器	
48	L 6 f1~M 6 a4	31	円形・楕円形・不定形	21~64	21~44	9~30	土師質土器	
49	K 6 f4~L 7 f3	103	円形・楕円形	19~80	17~63	2~63		
50	K 6 b8~K 7 h8	138	円形・楕円形・不定形	18~95	15~65	5~53	土師質土器	
51	H 7 g9~I 8 c3	169	円形・楕円形・不定形	18~80	18~58	7~60	土師質土器、標管、古銭	
52	H 7 f6~I 7 b0	130	円形・楕円形・不定形	14~114	13~74	7~67	土師質土器、陶器	
54	I 7 d8~I 8 g1	20	円形・楕円形	18~32	14~28	5~60		
55	M 5 e5~M 5 g8	103	円形・楕円形・隅丸長方形・不定形	16~68	16~62	5~59		
61	J 6 b3~J 6 b8	243	円形・楕円形・不定形	15~78	14~55	8~65	土師質土器、陶器	
62	J 6 a8~J 7 e2	224	円形・楕円形・隅丸長方形・不定形	10~80	16~64	7~61	土師質土器、陶器、木製品	
63	I 6 e1~I 6 i6	104	円形・楕円形・隅丸長方形・隅丸長方形	10~72	8~40	7~53	土師質土器、陶器、台石	
64	I 6 c3~I 6 f9	36	円形・楕円形・不定形	14~120	12~48	14~60	土師質土器、陶器、石器	
65	I 7 d3~I 7 e5	65	円形・楕円形	16~50	12~42	8~81	土師質土器	
66	I 7 f1~I 7 h3	49	円形・楕円形・不定形	14~72	8~52	4~52	土師質土器	
67	H 7 g1~I 7 d1	76	円形・楕円形・不定形	16~92	14~52	13~61	土師質土器、陶器、鉄片	

(4) 井戸跡

第1号井戸跡 (第267図)

位置 調査区中央部のH 7 a3区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第229 A号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径3.02m, 短径2.80mの円形である。確認面から漏斗状に1.20～1.40m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さ2.90mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

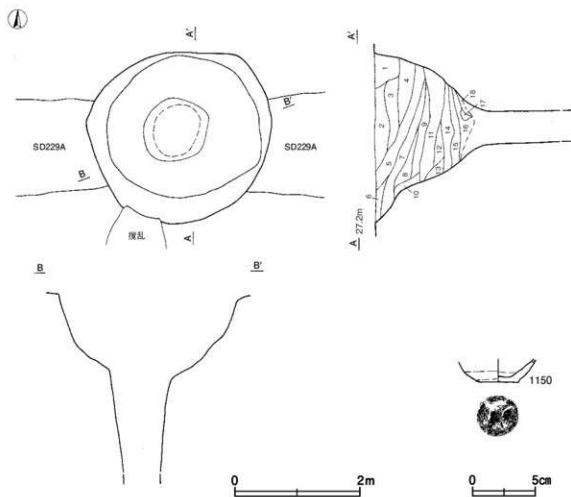
覆土 18層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9	黒褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量
2	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	黒褐色	砂粒少量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量
4	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	12	黒褐色	砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子微量
5	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	13	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6	灰黄褐色	砂粒中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	14	黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子・砂粒微量
7	黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	15	灰黄褐色	砂粒中量、ロームブロック・炭化物微量
8	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	16	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
			17	灰黄褐色	粘土ブロック多量
			18	にぶい黄褐色	ローム粒子中量、砂粒少量、炭化物微量

遺物出土状況 土師質土器片3点(皿)、陶器片1点(常滑系甕)のほか、流れ込んだ縄文土器片2点も出土している。1150は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は、重複関係や出土土器から、16世紀末と考えられる。



第267図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表 (第267図)

番号	種類	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1150	土師質土器	皿	—	(1.9)	3.2	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	係器内・外面ロウナマ 背後土壁ナマデ 内底中央部突出	覆土中	80%

第2号井戸跡 (第268図)

位置 調査区中央部のH7d9区。標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径2.10m、短径1.84mの楕円形である。確認面から碗状に1.00～1.10m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さ1.30mほどで湧水のため、下部の調査を断念した。

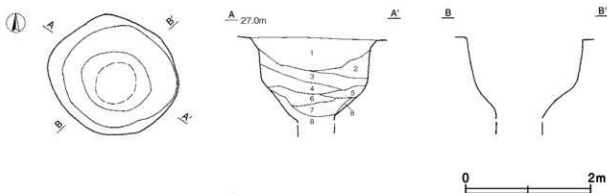
覆土 8層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 灰褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量 | | |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片10点(皿4、内耳鍋4、香炉2)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点、土師器片3点、須恵器片3点も出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は、内耳鍋が出土していることから中世後半には廃絶していたと考えられる。



第268図 第2号井戸跡実測図

第3号井戸跡 (第269図)

位置 調査区中央部のH6g5区。標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

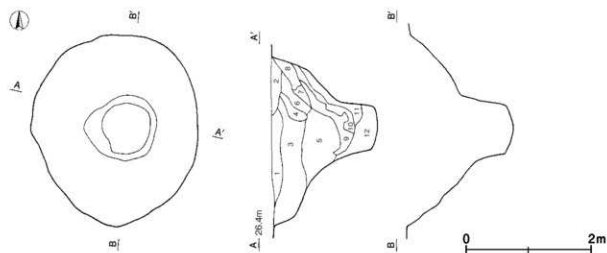
規模と形状 長径3.04m、短径2.66mの楕円形である。確認面から漏斗状に70～90cm掘りくぼめた後、下部を円筒状に掘り下げている。深さは1.70mで、底面は皿状である。

覆土 12層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|----------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量、粘土ブロック・炭化物少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物中量、粘土ブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物少量 | 8 褐色 | 粘土ブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・粘土粒子中量 | 9 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック中量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量 | 10 黒褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量 |
| | | 11 褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック中量 |
| | | 12 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師質土器片13点(皿2点, 内耳鍋10, 播鉢1)のほか, 流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。細片のため図示できないが, ロクロ成形で胎土が赤く, 口辺部がやや内摺した皿が出土している。
所見 素掘りの構造である。時期は, 出土土器から16世紀代と考えられる。



第269図 第3号井戸跡実測図

第4号井戸跡 (第270・271図)

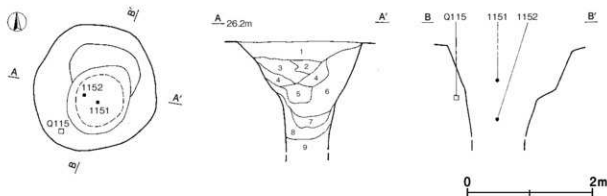
位置 調査区中央部のH 67区, 標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径2.08m, 短径1.95mの円形である。確認面から北部中央は段状に深さ70cmほど掘りくぼめ, それ以外は漏斗状に70cm掘りくぼめた後, 下部を円筒状に掘り下げている。深さ1.50mほどで崩落のおそれがあることから, 下部の調査を断念した。

覆土 9層に分層される。粘土を多く含んだ土で一気に埋めている。

土層解説

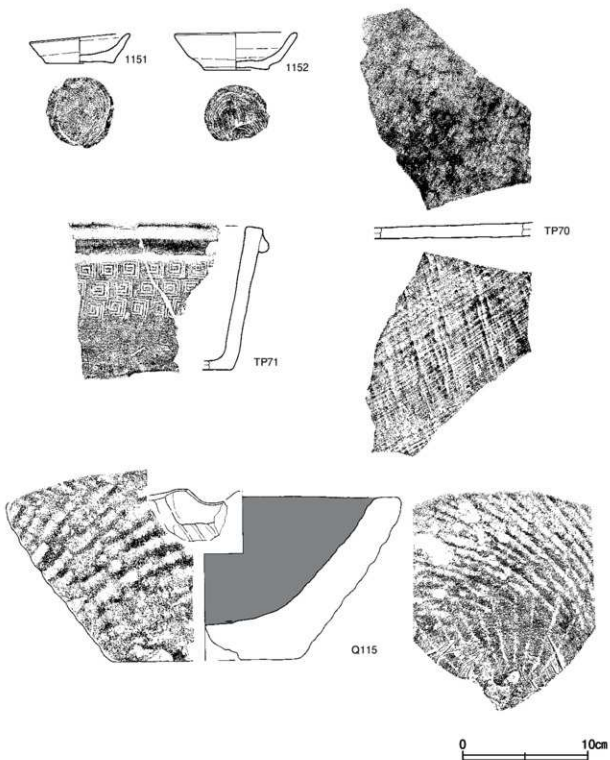
- | | | | |
|--------|----------------------|----------|-------------------|
| 1 灰 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 | 6 灰 褐色 | 粘土ブロック中量, ローム粒子微量 |
| 2 灰 褐色 | ロームブロック多量, 炭化物中量 | 7 灰 褐色 | 粘土ブロック多量, 炭化物中量 |
| 3 暗 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量 | 8 に近い黄褐色 | 粘土ブロック多量 |
| 4 黒 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物中量 | 9 黒 褐色 | 粘土ブロック多量 |
| 5 黒 褐色 | 粘土ブロック中量 | | |



第270図 第4号井戸跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片184点（皿7，内耳鍋175，火舎2），陶器片1点（常滑系甕），石器1点（石鍋）が出土している。1151は中央部の覆土中層から，1152は覆土下層から，Q115は南西部の覆土中層から出土している。いずれも，廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 素掘りの構造である。時期は，出土土器から16世紀前半と考えられる。



第271図 第4号井戸跡出土遺物実測図

第4号井戸跡出土土物観察表 (第271図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1151	土加貫土器	甕	8.0	2.4	5.4	長石・石英・ 雲母・赤色粒石	浅黄褐色	普通	体部内・外面ロクロナデ 底面外面糸切 り後上取ナデ 内底中央部凹み	覆土中層	90%
1152	土加貫土器	甕	9.6	3.0	5.2	長石・石英・ 雲母・赤色粒石	にぶ黄褐色	普通	体部内・外面ロクロナデ 底面外面糸切 り後ナデ 内底中央部より陥ったナデ	覆土下層	50%
1170	土加貫土器	鍋形	—	(1.2)	—	長石・石英・ 雲母・赤色粒石	黒褐色	普通	底面外面縦目状に痕 内底へラナデ	覆土中	
1171	土加貫土器	火舎	—	11.4	—	長石・石英・ 雲母・赤色粒石	橙	普通	口唇部端部で幅広 体部上位に尖管状の 口付ナデ ナデ部3割内スタンプ文 体 部下端ナデ 体部内面・底面ナデ	覆土中	

番号	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q115	石函	[31.6]	13.7	[15.2]	[3831.2]	安山岩	内面縦り目 外面調整痕 内面炭化物付着	覆土中層	S1229(1) 土蔵片 と整合 西116

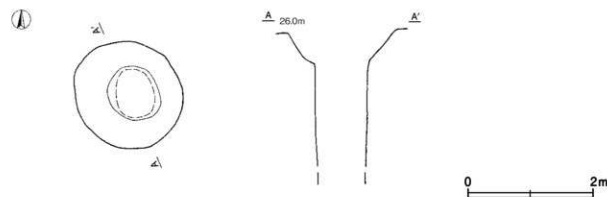
第5号井戸跡 (第272図)

位置 調査区中央部のH 6 g9区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.78m、短径1.68mの円形である。確認面から漏斗状に50cmほど掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さ2.20mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

遺物出土状況 土師質土器片4点(内耳鍋)、石器1点(砥石)のほか、流れ込んだ須恵器片1点も出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は、16世紀代に比定される第238・258号溝の交差付近に位置し、内耳鍋が出土していることから中世後半と考えられる。



第272図 第5号井戸跡実測図

第6号井戸跡 (第273図)

位置 調査区中央部のH 7 ii区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第241・257号溝跡の交差点を掘り込んでいる。

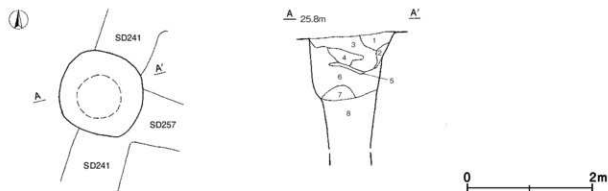
規模と形状 長径1.48m、短径1.35mの円形である。円筒状に掘り下げている。深さ1.80mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 8層に分層される。各層に多量の粘土を含み、不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 1 灰褐色 粘土ブロック多量 | 5 黒褐色 粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック中量 | 6 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量 | 7 黒褐色 粘土ブロック・砂粒中量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量 | 8 灰黄褐色 粘土ブロック多量 |

所見 素掘りの構造である。時期は、16世紀代に比定される溝との重複関係から中世末頃から近世初頭と考えられる。



第273図 第6号井戸跡実測図

第7号井戸跡 (第274・275図)

位置 調査区西部の1511区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

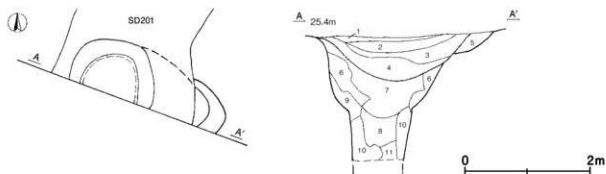
重複関係 第201号溝に掘り込まれ、南側は調査区域外のため不明である。

規模と形状 南北径0.94m、東西径2.57mが確認され、平面形は楕円形と考えられる。確認面から東側は30cmほど浅く掘り込んだ後、65cmほどなだらかに傾斜させながら掘り込んでいる。また、東側を除く部分では1.20mほどを段状に掘り込んでいる。全体的には1.25mほど掘りくぼめられた後、円筒状に掘り下げられている。深さ2.00mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 11層に分層される。井戸枠の抜き取り後、矢板と地山との間にある埋土(第6・9・10層)が崩落する前に、ローム土や粘土でつき固めながら埋められた(第7・8・11層)と考えられる。また、第1～4層は、本井戸が廃棄された後に、第201号溝に掘り込まれ、再び埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| 1 黒 褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 6 黒 褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒 褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 黒 褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 黒 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量 | 8 黒 褐色 粘土ブロック、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 9 暗 褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 暗 褐色 砂粒中量、粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 10 黒 褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 |
| | 11 黒 褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量 |



第274図 第7号井戸跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片12点(皿2, 内耳鍋7, 播鉢3), 陶器片1点(甕)のほか, 流れ込んだ土師器3点も出土している。1153は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。廃絶時期は, 重複関係や出土土器から16世紀前半と考えられる。



第275図 第7号井戸跡出土遺物実測図

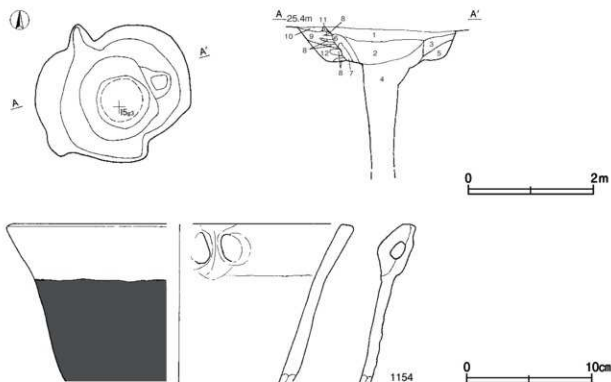
第7号井戸跡出土遺物観察表 (第275図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1153	土師質土器	皿	[90]	22	[5.0]	長石・石英・炭粉・赤色粒子	におい橙	普通	体部内・外面口ケロナデ 与後ノ裏ナナデ 内底軋ったナデ	覆土中	45%

第8号井戸跡 (第276図)

位置 調査区西部の153区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸2.56m, 短軸2.38mの不定形である。確認面から南北の壁際はなだらかに1.10～1.20m掘りくぼめている。東西の壁際は50cmほど掘り下げた後, なだらかに40cmほど掘りくぼめている。それぞれ掘りくぼめた最下部から, さらに円筒状に掘り下げている。深さ2.25mほどに達した時点で崩落のおそれがあることから, 下部の調査を断念した。



第276図 第8号井戸跡・出土遺物実測図

覆土 12層に分層される。井戸枠を抜いた後、人為的に埋められたと考えられる。また、西壁際部分の浅く掘り込んである部分には、版築された層（第8～10・12層）が確認されている。

土層解説

1 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒 褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量	8 黒 褐色	炭化物・ローム粒子微量
3 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量	9 黒 褐色	粘土ブロック少量・ローム粒子・炭化粒子微量
4 黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	10 暗 褐色	ローム粒子少量・炭化粒子・粘土粒子微量
5 黒 褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	11 黒 褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
6 黒 褐色	粘土ブロック少量・ロームブロック・炭化粒子微量	12 暗 褐色	ローム粒子少量・炭化物・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片4点（内耳鍋）が出土している。1154は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は、出土土器から中世後半と考えられる。

第8号井戸跡出土物観察表（第276図）

番号	種別	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
1154	土師質土器	内耳鍋	[26.3]	[12.7]	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	橙	普通	11号部端部で幅広掘り付け後ナデ	体部内面上段・耳部体部の外面ナデ	覆土中	45% 外面付着

第9号井戸跡（第277・278図）

位置 調査区中央部のI6e3区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第342号溝と連結している。

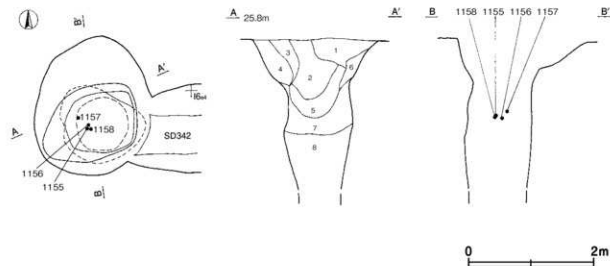
規模と形状 長径2.24m、短径1.86mの楕円形である。壁面は凸凹で、確認面から円筒状に掘り下げている。

深さ2.40mほどに達した時点で崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 8層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

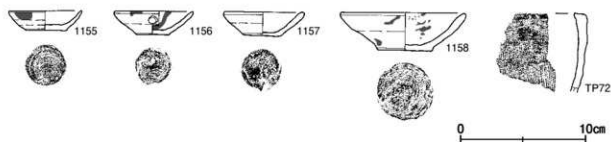
1 黒 褐色	粘土ブロック少量、炭化物微量	5 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量
2 にぶい黄褐色	粘土ブロック中量	6 黒 褐色	粘土ブロック少量
3 暗 褐色	粘土ブロック少量、炭化物微量	7 黒 褐色	粘土ブロック中量
4 黒 褐色	粘土ブロック少量、粘土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	8 黒 褐色	粘土ブロック微量



第277図 第9号井戸跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片124点(皿16,内耳鍋82,甕1,播鉢25),石器2点(砥石,石臼),鉄滓1点が出土している。1155・1157は中央部の覆土中層から正位でほぼ完形の状態で出土し,他の遺物が破砕されている状況を考えると,投棄されたものではなく,埋め戻し段階で遺棄されたものと推測される。

所見 素掘りの構造である。時期は,出土土器や重複関係から16世代と考えられる。連結している第342号溝とは,出土遺物からはほぼ同時期と考えられ,井戸で汲み上げた水を第342号溝に排水していたと推測される。



第278図 第9号井戸跡出土遺物実測図

第9号井戸跡出土遺物観察表(第278図)

番号	種類	器種	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1155	土師質土器	皿	5.9	1.7	3.2	長石・石英・雲母・赤色鉄粉	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部外面糸切り後丁寧ナデ 内底中央部のみ	覆土中層	90% 11号部 遺物埋着
1156	土師質土器	皿	6.3	1.9	2.8	長石・石英・雲母・赤色鉄粉	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部外面糸切り後丁寧ナデ 外面から内面にかけての穿孔,内底中央部やや突出	覆土中層	50% 11号部から底部内面にかけて清潔な層
1157	土師質土器	皿	6.3	2.1	3.0	長石・石英・雲母	黒期	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部外面糸切り後丁寧ナデ 内底中央部のみ突出	覆土中層	100%
1158	土師質土器	皿	10.0	3.1	4.4	長石・石英・雲母・赤色鉄粉	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部外面糸切り後丁寧ナデ 内底中央部のみ突出	覆土中層	50% 体部内外面遺物埋着
TP72	土師質土器	内耳鍋	—	(6.3)	—	長石・石英・雲母・赤色鉄粉	灰濁	普通	1号部溝部で掘込,内面につまみあげ 体部外面のみ仕上げによるナデ,内面ナデ	覆土中	

第10号井戸跡(第279図)

位置 調査区中央部の16f3区,標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 地表面部を第300号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.00m,短径0.78mが確認され,平面形は楕円形と考えられる。下部は円筒状に掘り下げられている。確認面からの深さは2.80mで,底面は平坦である。

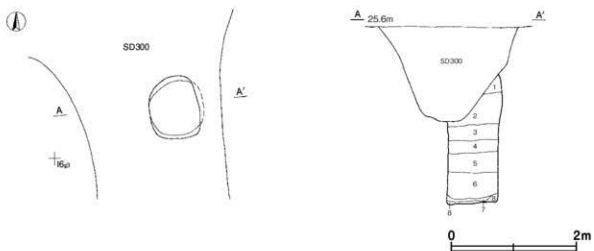
覆土 8層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	黒	濁	色	粘土ブロック中量	5	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量		
2	黒	濁	色	粘土ブロック中量	6	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量,ローム粒子・砂粒少量		
3	暗	濁	色	粘土ブロック多量	7	黒	濁	色	粘土ブロック中量,ローム粒子・砂粒少量
4	黒	濁	色	粘土ブロック少量	8	濁	色	粘土ブロック・ローム粒子中量,砂粒少量	

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋)が出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は,重複関係から15世紀後半と考えられる。

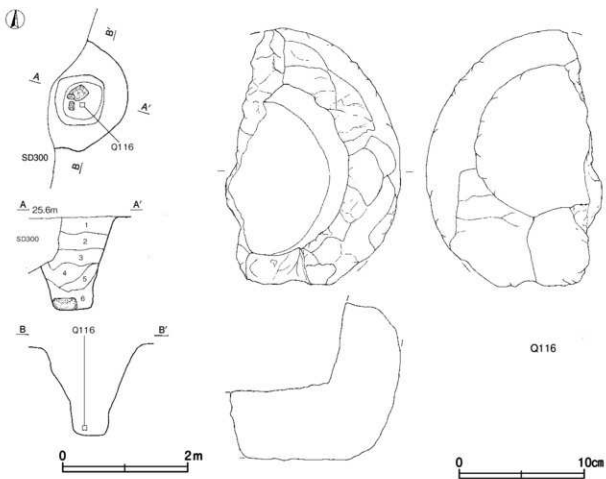


第279図 第10号井戸跡実測図

第11号井戸跡 (第280図)

位置 調査区中央部の16h3区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第300号溝に西壁上部を掘り込まれている。



第280図 第11号井戸跡・出土遺物実測図

規模と形状 長径1.76m, 短径1.24mが確認され, 平面形は楕円形と考えられる。南側は確認面から段状に80cm掘りくぼめ, それ以外では漏斗状に1.00m掘り込んだ後, 下部を円筒状に掘り下げている。深さは1.40mで, 底面はほぼ平坦である。

覆土 6層に分層される。溝に掘り込まれている部分から下層の第4～6層はレンズ状に堆積し, 上層にあたる第1～3層は締まりの固いブロック状に堆積している。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|----------|------------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 極 暗 褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 3 黒 色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐 灰色 | ローム粒子中量, 砂粒少量 |

遺物出土状況 石器1点(石鍋)が中央部の覆土下層, 長さ10～30cmの石が3点南西部壁際の底面から出土しており, 廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

所見 素掘りの構造である。時期は, 重複関係から16世紀代には廃絶していたと考えられる。

第11号井戸跡出土遺物観察表 (第280図)

番号	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q116	石鍋	—	(12.4)	(15.0)	(16237)	安山岩	中央部凹み部 体部・底部内外面研磨	覆土下層	

第12号井戸跡 (第281図)

位置 調査区中央部の17g1区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

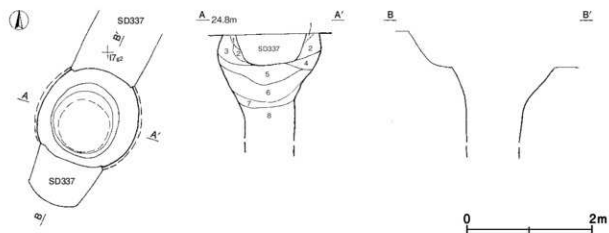
重複関係 第337号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.68m, 短径1.56mの円形である。確認面から漏斗状に1.00～1.30m掘り込んだ後, 下部を円筒状に掘り下けている。地表面から深さ1.80mほどで湧水のため, 下部の調査を断念した。

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|----------|----------|
| 1 暗 褐色 | 粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 灰 黄 褐色 | 粘土ブロック少量 |
| 2 暗 褐色 | 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 褐 灰色 | 粘土ブロック微量 |
| 3 暗 褐色 | 粘土ブロック微量 | 7 黒 褐色 | 粘土粒子微量 |
| 4 暗 褐色 | 粘土ブロック少量 | 8 褐 灰色 | 粘土ブロック少量 |



第281図 第12号井戸跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片29点（皿4、内耳鍋17、甕6、片口鉢1、搦鉢1）が出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は、重複関係やロクロ成形の皿が出土していることから15世紀後半と考えられる。

第13号井戸跡（第282図）

位置 調査区中央部の17f5区、標高25mほどの緩斜面に位置している。

規模と形状 長径3.80m、短径2.96mの楕円形である。確認面から漏斗状に1.90m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さ2.10mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

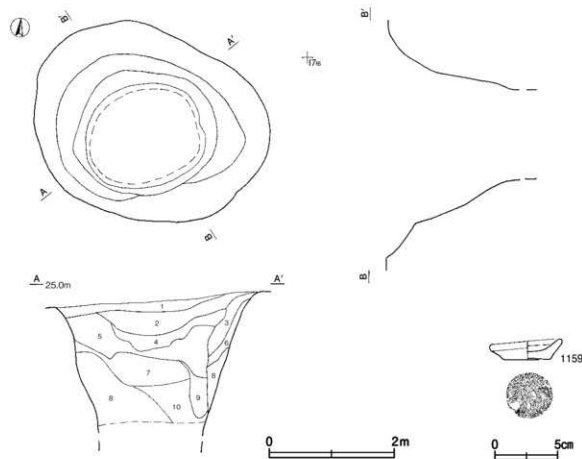
覆土 10層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・礫・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 にぶい黄褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・砂粒微量	7 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子・砂粒微量	8 黒灰色	粘土粒子中量、炭化物・ローム粒子微量
		9 暗褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
		10 灰オリーブ色	粘土粒子中量、砂粒少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片37点（皿4、内耳鍋33）、陶器片1点（常滑系甕）のほか、流れ込んだ須恵器片1点も出土している。1159は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は、出土土器から16世紀後半と考えられる。



第282図 第13号井戸跡・出土遺物実測図

第13号井戸跡出土遺物観察表 (第282図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
1159	土加蓋土器	蓋	5.6	1.6	3.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	明褐色	普通	確認内・外面ロクロナデ 裏面ナデ	底部外面糸切	覆土中	70%

第14号井戸跡 (第283図)

位置 調査区中央部の17h6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第327号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.12m、短軸1.02mの円形である。確認面から漏斗状に40cm掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さは1.42mで、底面はほぼ平坦である。

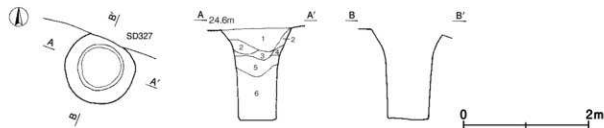
覆土 6層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・炭化粒子・砂粒微量	4	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	5	黒褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
3	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	6	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片6点(皿2、内耳鍋4)のほか、流れ込んだ須恵器片1点も出土している。

所見 素掘りの構造である。重複関係やロクロ成形の土師質土器片の皿が出土していることから15世紀後半には廃絶したと考えられる。廃絶後、重複している16世紀代と考えられる第327号溝の排水施設として利用されていたと考えられる。



第283図 第14号井戸跡実測図

第15号井戸跡 (第284図)

位置 調査区中央部の17h6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第188号溝と連結し、189・327号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.86m、短軸1.46mの隅丸長方形である。確認面から漏斗状に70cm掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。確認面からの深さ2.20mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 8層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

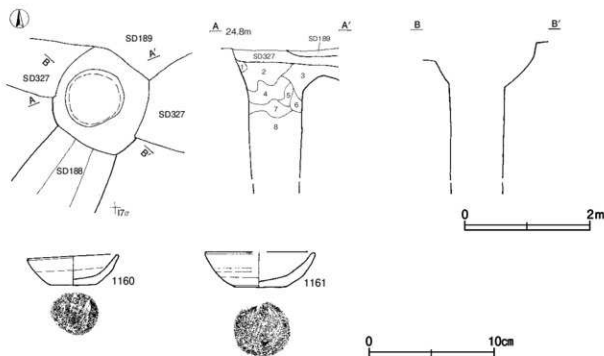
土層解説

1	黒褐色	粘土ブロック中量	5	暗褐色	粘土ブロック中量
2	灰褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量	6	灰褐色	粘土粒子・砂粒多量
3	暗灰黄色	粘土ブロック多量、炭化物少量	7	灰褐色	粘土粒子・砂粒中量
4	灰褐色	粘土ブロック多量、炭化物微量	8	黒褐色	粘土粒子・砂粒少量

遺物出土状況 土師質土器片30点(皿6、内耳鍋21、甕3)のほか、流れ込んだ土師器片3点も出土している。

1160・1161は覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 素掘りの構造である。時期は、重複関係や出土土器から15世紀後半と考えられる。連結している第188号溝とは、出土遺物からはほぼ同時期と考えられ、井戸で汲み上げた水を第188号溝に排水していたと推測される。



第284図 第15号井戸跡・出土遺物実測図

第15号井戸跡出土遺物観察表（第284図）

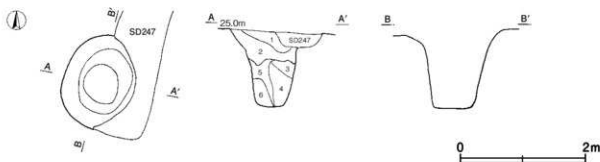
番号	種類	器形	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1160	土師質土器	皿	7.3	2.5	3.4	長石・石英・ 葉母・赤色粒子	にじい黄緑	普通	体部内・外面口テロナデ 底部外面糸切 台痕ナデ 内底ニ方向のナデ	覆土下層	70%
1161	土師質土器	皿	[8.3]	2.8	4.1	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部内面糸切 台痕ナデ 内底中央部凹み	覆土下層	80%

第16号井戸跡（第285図）

位置 調査区中央部の17g7区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第247号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.52m、短軸1.06mが確認され、平面形は楕円形と考えられる。確認面から漏斗状に20cm掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さは1.22mで、底面は平坦である。



第285図 第16号井戸跡実測図

覆土 6層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|----------|-----------------------|
| 1 黒 褐色 | 炭化粒子中量、ローム粒子少量 | 4 におい黄褐色 | 炭化粒子・粘土粒子中量、ロームブロック少量 |
| 2 灰 黄色 | 粘土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 5 におい黄褐色 | 炭化粒子・粘土粒子中量、ローム粒子少量 |
| 3 黒 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量 | 6 灰 褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師質土器片14点(皿4, 内耳鍋6, 甕1, 擂鉢3), 陶器片1点(瀬戸・美濃系皿), 石1点が出土している。細片のため図示できないが、覆土上層からロク口成形の土師質土器片の皿が出土している。

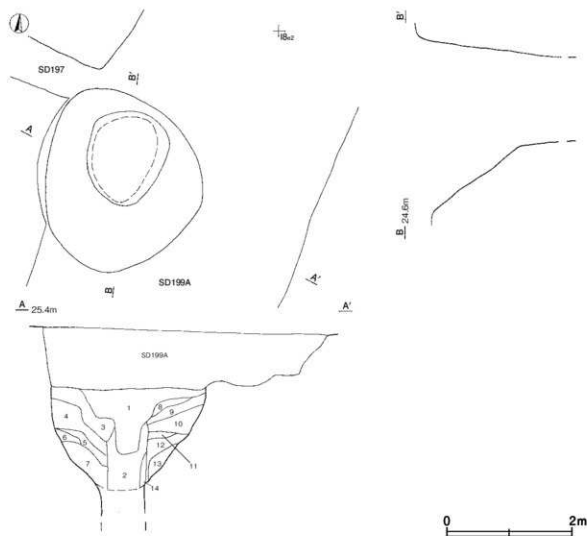
所見 素掘りの構造である。時期は、重複関係や出土土器から15世紀後半と考えられる。

第17号井戸跡 (第286図)

位置 調査区中央部の18el区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 地表面部を第197・199A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.90m、短径2.58mの楕円形である。確認面から漏斗状に250m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。確認面からの深さ3.00mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。



第286図 第17号井戸跡実測図

覆土 14層に分層される。第1・2・14層は井戸枠を抜いた後に埋め戻したと考えられる。また、第3～13層は井戸構築時の版築土と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量	8 暗褐色	ローム粒子少量
2 褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量	9 暗褐色	粘土ブロック・砂粒少量、ロームブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	10 暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子・砂粒少量
4 麻暗褐色	ロームブロック微量	11 暗褐色	ロームブロック微量
5 褐色	粘土ブロック多量	12 暗褐色	ロームブロック少量
6 麻暗褐色	ロームブロック少量	13 灰褐色	ローム粒子微量
7 褐色	粘土ブロック・砂粒少量、ロームブロック微量	14 暗褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師質土器片14点（内耳鍋9、搦鉢1、甕4）、石器1点（石臼）のほか、流れ込んだ縄文土器片1点、須恵器片2点も出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は、重複関係や出土土器から15世紀後半と考えられる。

第18号井戸跡（第287図）

位置 調査区南部のJ5e4区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.00m、短径0.88mの楕円形である。確認面から漏斗状に40cm掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さ1.20mほどで湧水のため、下部の調査を断念した。

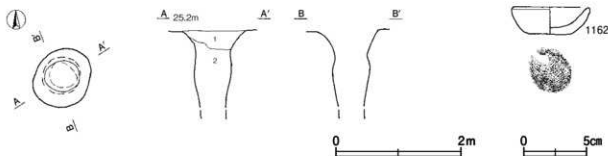
覆土 2層に分層される。固く締められたブロック状の堆積状況から、廃絶時に埋められたと考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	2 黒褐色	粘土ブロック・炭化粒子微量
-------	------------------------------	-------	---------------

遺物出土状況 土師質土器片1点（皿）、陶器片1点（瀬戸・美濃系皿）のほか、流れ込んだ縄文土器片1点、須恵器片1点も出土している。1162は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。居宅と想定される第1号掘立柱建物が北側4mに位置し、その周辺に倉庫的な機能をもつ第2～4号掘立柱建物が位置していることから、屋敷域内で機能していたと考えられる。廃絶時期は、出土土器や屋敷域との関連から16世紀後半と考えられる。



第287図 第18号井戸跡・出土遺物実測図

第18号井戸跡出土遺物観察表（第287図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1162	土師質土器	皿	6.0	2.2	3.4	長石・石英・炭粉・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部内・外周ラテロナデ 底部外面未切削 口縁上帯をナデ 内底中央部やや突出	覆土中	80%

第19号井戸跡 (第288図)

位置 調査区南部のJ5J3区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

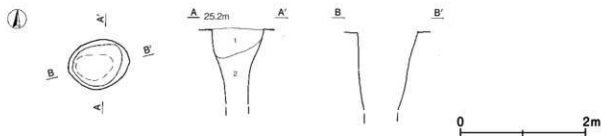
規模と形状 長径0.98m、短径0.76mの楕円形である。確認面から漏斗状に1.20m掘り込んだ後、円筒状に掘り下げたと考えられる。湧水のため漏斗状の最下部に達した時点で下部の調査を断念した。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 灰黄褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子微量 2 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

所見 素掘りの構造である。西から東にかけて、排水と区画の性格をもつ第22-65号溝が位置していることや、同区画内に屋敷城が形成されたと想定されることから、屋敷城内で機能していたと考えられる。時期は、屋敷城との関連から16世紀代と考えられる。



第288図 第19号井戸跡実測図

第20号井戸跡 (第289図)

位置 調査区南部のJ5J7区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3号掘立柱建物と同時期である。

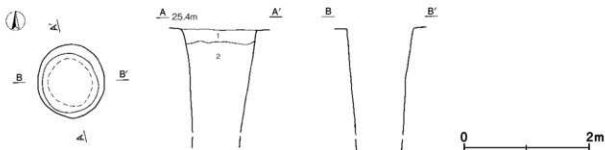
規模と形状 長径1.20m、短径1.05mの楕円形である。確認面から円筒状に掘り下げ、深さ1.70mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 2層に分層される。固く締められたブロック状の堆積状況から、廃絶時に埋められたと考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

所見 素掘りの構造である。作業場として想定される第3号掘立柱建物の柱間に、北側1.8mに倉庫的な性格をもつ第4号掘立柱建物が位置していることから、屋敷城内で機能していたと考えられる。時期は、屋敷城との関連から16世紀代と考えられる。



第289図 第20号井戸跡実測図

第21号井戸跡 (第290図)

位置 調査区南部のJ5j0区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第20号溝と連結している。

規模と形状 長径3.29m、短径3.22mの円形である。確認面から漏斗状に1.50～1.70m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。確認面から深さ2.30mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

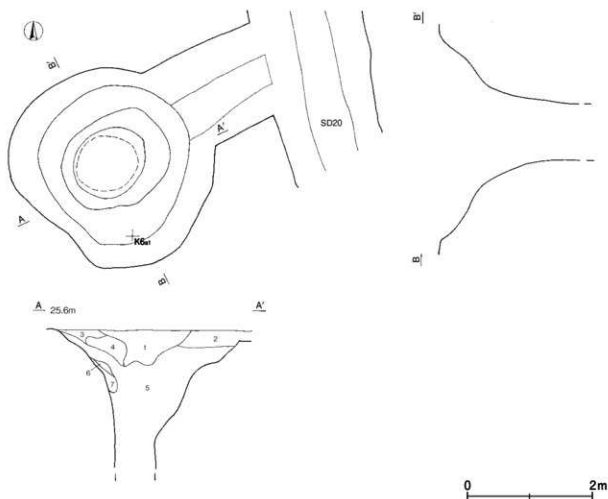
北東側に本井戸と第20号溝とを連結させる長さ約1.9m、幅約1.5mの溝状施設が確認されている。

覆土 7層に分層される。不自然な堆積状況を呈した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 灰黄褐色 粘土ブロック・礫・砂粒微量 | 5 にぶい黄褐色 粘土ブロック・礫少量、砂粒微量 |
| 2 灰黄褐色 粘土ブロック少量、礫・砂粒微量 | 6 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量、礫微量 |
| 3 灰黄褐色 粘土ブロック・礫少量、砂粒微量 | 7 にぶい黄褐色 粘土ブロック・礫・砂粒微量 |
| 4 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量、礫・砂粒微量 | |

所見 素掘りの構造である。排水と区画の性格をもつ第20号溝が東に位置し、区画内に屋敷域が形成されたと想定されることから、本井戸はその屋敷域内で機能していたと考えられる。また、連結している溝状施設は、第20号溝へ排水するために使用されたと考えられる。時期は、屋敷域との関連から16世紀代と考えられる。



第290図 第21号井戸跡実測図

第22号井戸跡 (第291・292図)

位置 調査区中央部のJ68区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第307号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.70m、短径3.46mの円形である。東から南側は漏斗状、西から北側は段階的に掘りくぼめられており、さらに200mまで掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。確認面からの深さ280mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

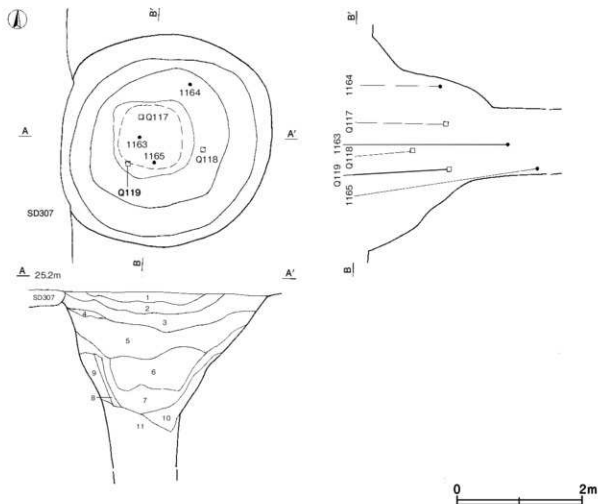
覆土 11層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

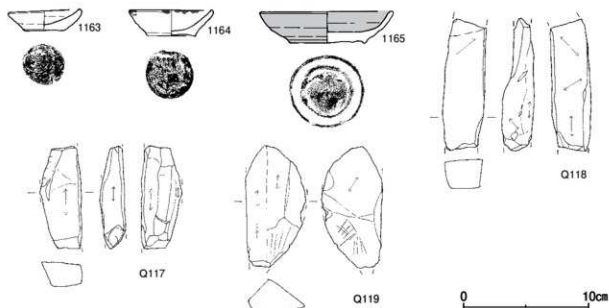
1 暗褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・焼土粒子微量	7 黒褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック中量、炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	9 明褐色	ローム粒子・粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	炭化粒子微量	10 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
5 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	11 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
6 暗褐色	焼土粒子多量、ローム粒子少量、砂粒微量		

遺物出土状況 土師質土器115点(皿11,内耳鍋73,搦鉢19,火舎12),陶器片1点(瀬戸・美濃系皿),石器3点(砥石),鉄滓1点のほか、流れ込んだ土師器1点も出土している。1163・1165が中央部の覆土下層,1164とQ117～Q119は覆土中層からそれぞれ出土している。いずれも土を埋める際に廃棄したと考えられる。

所見 素掘りの構造である。時期は、重複関係や出土土器から15世紀中葉と考えられる。



第291図 第22号井戸跡実測図



第292図 第22号井戸跡出土遺物実測図

第22号井戸跡出土遺物観察表 (第292図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1163	土師質土器	皿	5.7	1.7	3.3	長石・石英・ 炭粉・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底面外面糸切 有底ナデ 内底ナデ	覆土下層	90%
1164	土師質土器	皿	6.6	2.1	3.6	長石・石英・ 炭粉・赤色粒子	にじみ・橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底面外面糸切 有底ナデナデ 内底ナデ	覆土中層	100%、11辺部 磨耗有り
1165	陶器	皿	10.6	2.6	6.0	長石 灰釉	明褐色	顕密	体部内・外面ロクロナデ 底面外面中央部やや突出 底面中央部以西に磨耗有	覆土下層	80% 磨耗・美 濃色

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q117	瓶石	(8.2)	3.2	2.1	(66.3)	凝灰岩	瓶面4面	覆土中層	
Q118	瓶石	(10.5)	3.3	2.6	(117.0)	凝灰岩	瓶面4面	覆土中層	
Q119	瓶石	(9.7)	4.9	2.4	(94.5)	凝灰岩	瓶面3面 内1面は1条の磨痕あり	覆土中層	

第23号井戸跡 (第293図)

位置 調査区中央部のJ6 f0区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径2.48m、短径2.22mの楕円形である。確認面の東から南側は幅1.40mほど掘りくぼめられ、他をほぼ垂直に掘り込んだ後に、さらに下部を円筒状に掘り下げている。深さ2.60mほどに達した時点で崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

ピット 本井戸周辺に、15か所のピットが同心円状に確認されており、上屋の存在が想定されるが明確ではない。深さは10cm～45cmで、P8・P9は跳鈞版の支柱の可能性も考えられる。

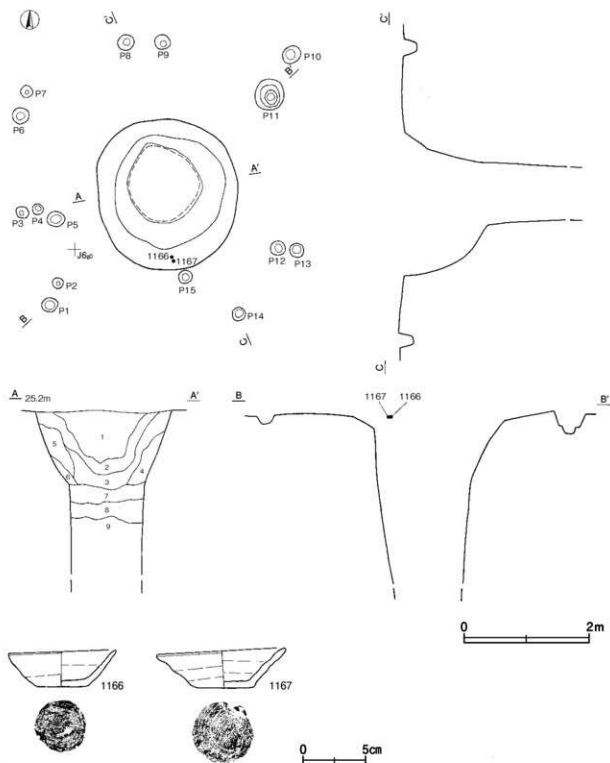
覆土 9層に分層される。第7～9層は碗状に掘りくぼめた最下部まで埋め戻した層で、その後土坑状の穴に自然堆積したものと考えられる。

土層解説

1	黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐 灰色	粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗 褐色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3	極暗 褐色	粘土粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量	8	褐 灰色	砂粒多量、ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量	9	褐 灰色	砂粒多量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	褐 灰色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師質土器43点(皿19, 内耳鍋5, 甕19)が出土している。1166・1167は南部の覆土土層から出土しており、廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 素掘りの構造である。廃絶時期は、出土土器から16世紀後半と考えられる。同心円状に位置しているピットから、井屋が建てられていた可能性があり、跳鈞瓶の存在も想定されるが詳細は不明である。



第293図 第23号井戸跡・出土遺物実測図

第23号井戸跡出土遺物観察表（第293図）

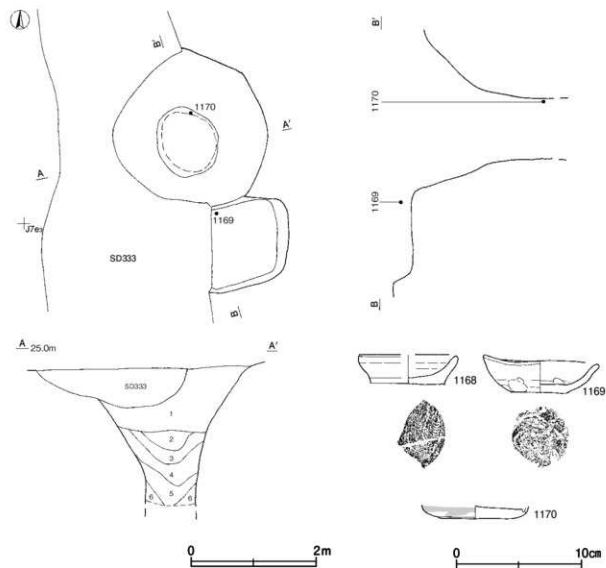
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1166	土師質土器	皿	8.5	3.0	4.0	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部外面糸切 台縁上縁ナナデ 内底中央部凹み	覆土上層	70%
1167	土師質土器	皿	10.2	3.3	4.6	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面口テロナデ 底部外面糸切 台縁上縁ナナデ 内底渦巻き状のみこみ 凹凸ナ	覆土上層	70%

第24号井戸跡（第294図）

位置 調査区中央部のJ7d3区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 西側半分を第333号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.56m、短径2.46mが確認され、平面形は不整形と考えられる。確認面から漏斗状に1.50m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。確認面からの深さ2.20mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。本井戸の南側には、長軸約1.4m、短軸約1.3mの方形の土坑があり、深さは30cmで、底面は平坦である。この土坑は、井戸を構築する際の足場の可能性がある。



第294図 第24号井戸跡・出土遺物実測図

覆土 6層に分層される。自然堆積である程度埋まり(第2～6層),さらに人為的に土で埋めたと考えられる。

土層解説

1	オリーブ黒色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	灰	色	粘土粒子少量、砂粒微量
2	オリーブ黒色	ロームブロック少量、砂粒微量	5	灰	色	粘土ブロック・砂粒中量
3	灰	色	6	蜀	色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒多量

遺物出土状況 土師質土器51点(皿3、内耳鍋42、甕3、摺鉢3)、陶器片1点(瀬戸・美濃系皿)のほか、流れ込んだ縄文土器11点、須恵器3点も出土している。1169は足場と想定される土坑の覆土上層、1170は中央部北寄りの覆土下層からそれぞれ出土しており、廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 素掘りの構造である。廃絶時期は、重複関係や出土土器から15世紀後半と考えられる。

第24号井戸跡出土遺物観察表 (第294図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1168	土師質土器	皿	[78]	2.3	[60]	長石・赤色粒子	橙	普通	体部内・外周口ナデ、底部外面糸切り後ノコナデ、内底中央部強い傾ナデ	覆土中	40%
1169	土師質土器	皿	9.2	3.0	4.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内・外周口ナデ、体部下端強い傾ナデ、内底ナデ、底部外面糸切り後ノコナデ、内底ナデ	覆土上層	90% 成形にゆがみ
1170	陶器	皿	—	[10]	5.6	長石・灰釉	淡黄	緻密	底部回転糸切り、体部下端・内底施釉	覆土下層	10% 瀬戸・美濃系

第25号井戸跡 (第295図)

位置 調査区南部のK 5h3区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

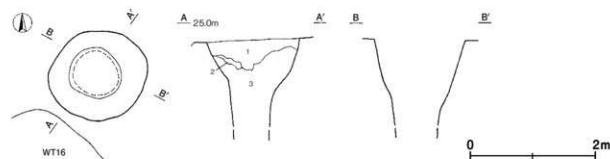
規模と形状 長径1.60m、短径1.44mの楕円形である。確認面から漏斗状に0.90～1.10m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さ1.40mほどで湧水のため、下部の調査を断念した。

覆土 3層に分層される。含有物がほぼ同一のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	3	黒褐色	色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック中量				

所見 素掘りの構造である。居宅と想定される第12号掘立柱建物が北東側4mに位置し、倉庫的な機能を持つ第13～15号掘立柱建物が東側4mに位置していることから、屋敷域内で機能していたと考えられる。近接している第16号水溜遺構は、本井戸から汲み上げた水を一時的に溜めて使用していたと考えられる。時期は、屋敷域との関連から16世紀代と考えられる。



第295図 第25号井戸跡実測図

第26号井戸跡 (第296図)

位置 調査区南部のK6地区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第16・28A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.04m、短径2.46mの楕円形である。確認面から漏斗状に90cm掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さ2.30mほどで、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

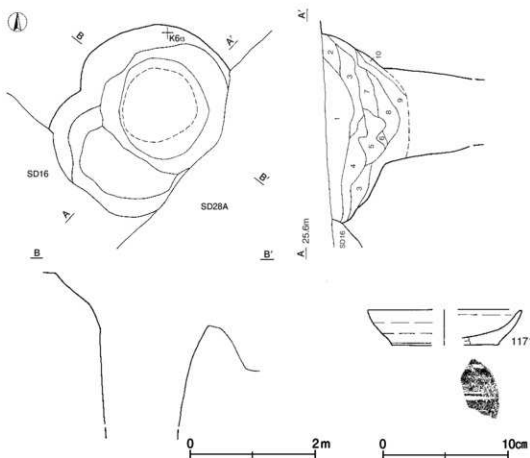
覆土 10層に分層される。ロームや粘土を含んだ土で埋められた後(第9・10層)、さらに人為的に土で埋めたと考えられる(第1～8層)。

土層解説

1 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック多量、炭化物少量	6 黒 褐色	ローム粒子多量
2 暗 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量	7 暗 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック・炭化物中量
3 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック多量	8 黒 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック中量
4 暗 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック・炭化物少量	9 黒 褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量
5 暗 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック微量	10 暗 褐色	粘土ブロック多量

遺物出土状況 土師質土器片42点(小皿4、内耳鍋37、播鉢1)、陶器片1点(常滑系甕)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点、土師器片3点、須恵器片1点も出土している。1171は覆土中から出土している。また、細片のため固化できないが、体部外面を砥石として利用した須恵器の甕片が出土している。

所見 素掘りの構造である。出土土器や重複関係から、15世紀後半には廃絶していたと考えられる。



第296図 第26号井戸跡・出土遺物実測図

第26号井戸跡出土遺物観察表 (第296図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1171	土加蓋土器	蓋	[12.3]	2.9	[8.5]	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	体部内・外面ロケロナデ ら後ナデ スノコ状圧痕 内底後ナデ	覆土中	10%

第27号井戸跡 (第297図)

位置 調査区南東部のK6e6区、標高26mほどの緩斜面に位置している。

重複関係 第154号溝と連結し、南西部分は未調査区のため不明である。

規模と形状 長径2.42m、短径1.08mが確認され、平面形は楕円形と考えられる。確認面から漏斗状に1.00～1.50m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げていると考えられる。漏斗状に掘り込んだ最下部まで確認したところ、湧水のため下部の調査を断念した。

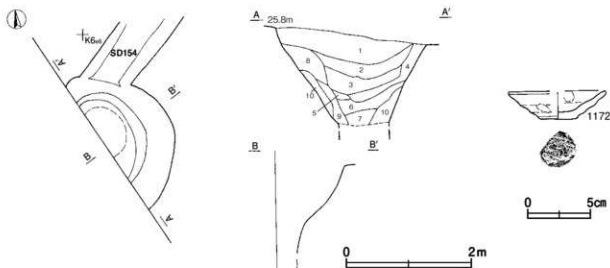
覆土 10層に分層される。第4～7層は、井戸枠を抜き、ある程度埋め戻した層で、その後自然堆積したと考えられる。また、第8～10層は、井戸構築時の版築土が崩落したものと考えられる。

土層解説

1	黒	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6	暗	褐色	粘土粒子少量
2	黒	褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	7	暗	褐色	粘土粒子微量
3	黒	褐色	粘土粒子微量	8	暗	褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
4	黄	灰色	粘土ブロック中量	9	暗	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
5	黒	褐色	ローム粒子・粘土粒子微量	10	暗	褐色	粘土ブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片43点(小皿4、内耳鍋29、甕10)のほか、流れ込んだ須恵器片1点も出土している。1172は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。出土土器や重複関係から、15世紀後半には廃絶して、16世紀代には第154号溝からの水を集水するための施設として利用されていた可能性がある。



第297図 第27号井戸跡・出土遺物実測図

第27号井戸跡出土遺物観察表 (第297図)

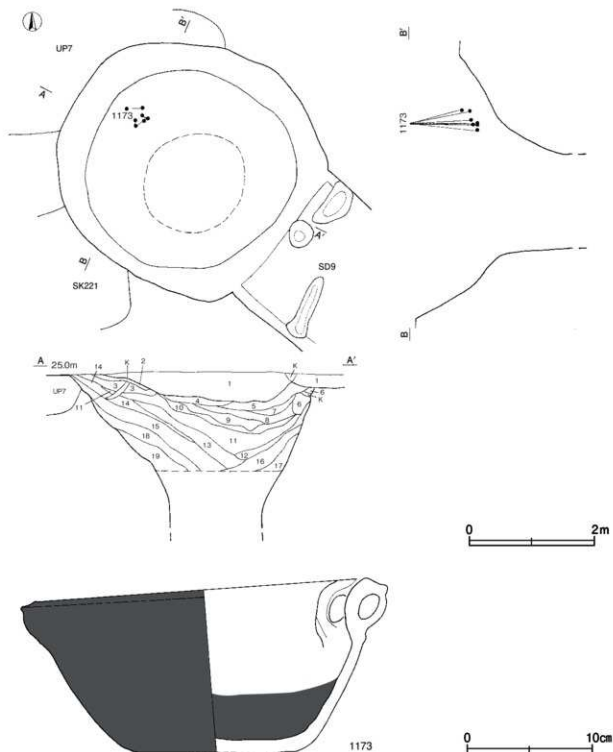
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1172	土加蓋土器	蓋	[7.6]	2.2	3.0	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	体部内・外面ロケロナデ 外周全面掘り戻しナデ 内底中央部突出	覆土中	10%

第28号井戸跡 (第298図)

位置 調査区南部のL3d7区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第7号地下式坑・第221号土坑を掘り込み、第9号溝と連結している。

規模と形状 長径4.31m、短径4.14mの円形である。確認面から漏斗状に1.50～2.20m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げている。深さ2.50mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。



第298図 第28号井戸跡・出土遺物実測図

覆土 19層に分層される。確認面近くまで北西側から埋め戻し、最後に粘土を含む土で第9号溝とともに一気に埋めたと考えられる。

土層解説

1	暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック微量	11	暗褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック微量
2	暗褐色	ロームブロック微量	12	黒褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	13	黒褐色	ロームブロック、粘土ブロック微量
4	暗褐色	粘土ブロック微量	14	黒褐色	炭化粒子少量
5	暗褐色	ローム粒子微量	15	暗褐色	ロームブロック、粘土粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック、粘土ブロック少量	16	暗褐色	炭化粒子微量
7	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	17	暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量
8	暗褐色	ロームブロック微量	18	暗褐色	粘土ブロック微量
9	暗褐色	ロームブロック少量	19	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
10	暗褐色	ローム粒子多量			

遺物出土状況 土師質土器片61点(小皿3, 内耳鍋58), 陶器片4点(瀬戸・美濃系皿1, 常滑系甕3), 石器1点(砥石)のほか、流れ込んだ縄文土器片15点, 土師器片23点, 須恵器片7点, 礫1点も出土している。1173は北西部の覆土上層から破砕された状態で出土し、埋没間近で廃棄されたと考えられる。

所見 素掘りの構造である。廃絶時期は、重複関係や出土土器から15世紀後半と考えられる。

第28号井戸跡出土物観察表 (第298図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1173	土師質土器	内耳鍋	29.3	13.8	14.0	兵石・雲母	黒褐色	普通	1) 付部端部で細点、内側につまみ出し、 体部内面土倉に耳部張り付け痕ナデ、 口部3分所、体部内・外面ナデ、 体部下縁ナデ	覆土上層	90% 体部外面・内面下位塗 付着

第29号井戸跡 (第299・300図)

位置 調査区南部のL4a6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第14号溝と連結し、第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長径4.40m、短径4.20mが確認され、平面形は円形であると考えられる。確認面から漏斗状に1.70m掘りくはめた後、円筒状に掘り下げていたと考えられる。漏斗状の最下部に達した時点で崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

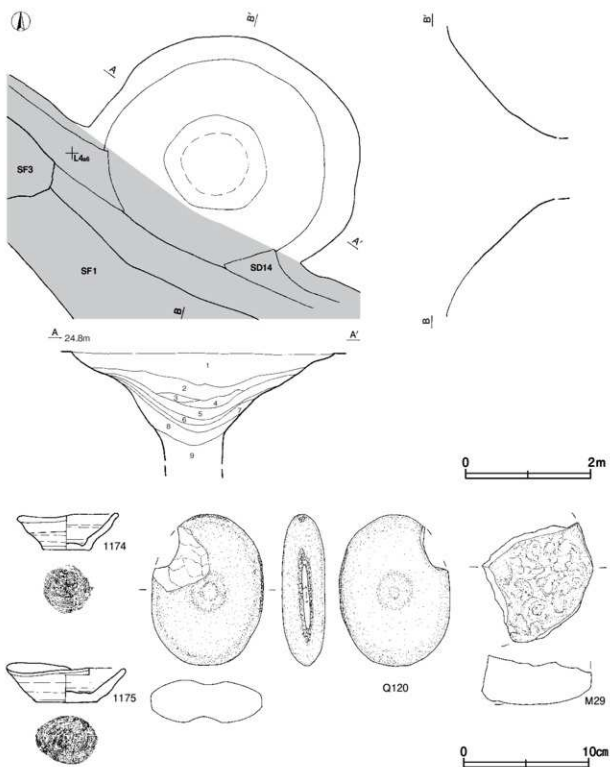
1	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・炭化物・砂粒	5	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
		微量	6	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・炭化物微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子少量	9	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片80点(皿12, 内耳鍋60, 甕6, 播鉢2), 石器2点(凹石, 石臼), 椀状洋1点のほか、流れ込んだ須恵器片1点も出土している。1174・1175は覆土上層, Q121は覆土下層からそれぞれ出土している。いずれも埋没過程で廃棄されたものと考えられる。

所見 素掘りの構造である。重複関係や覆土上層から出土している皿から、16世紀前半には廃絶されたと考えられる。

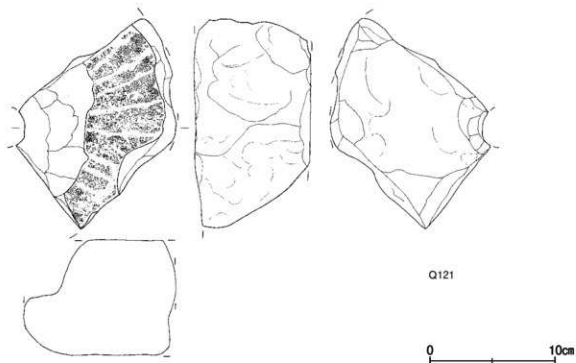
第29号井戸跡出土物観察表 (第299・300図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1174	土師質土器	皿	7.7	3.0	3.8	雲母・赤色粒子・ 白色粒子	暗褐色	普通	体部内・外面ロウナデ、 底面外面糸切り 後ナデ、体部内面と内 面の境目を挟るナ デ、内底中央部削 削ナデ	覆土上層	80% 成形にゆがみ
1175	土師質土器	皿	9.5	3.1	4.8	兵石・雲母・赤色 粒子・白色粒子	暗褐色	普通	体部内・外面ロウナ デ、底面外面糸切 り後、穿るナデ、 内底面も糸切のみ を呈す	覆土上層	95% 成形にゆがみ



第299図 第29号井戸跡・出土遺物実測図

番号	器種	長さ・径	幅・孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q120	円石	12.1	8.9	3.5	(436.7)	安山岩	中央部両面に凹み 縁辺部両面 転用砥石 ^a	覆土中	
Q121	石臼	[28.8]	[3.0]	9.3	(150.8)	安山岩	軸受け一部残存 8本の摺り目あり	覆土下層	
番号	器種	長さ・径	幅・孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M29	鉄片	(9.6)	(8.8)	3.9	(588.7)	鉄	板状片 外面2mmほどの砂利の膜で覆われている 磁力は弱い	覆土中	



第300図 第29号井戸跡出土遺物実測図

第30号井戸跡 (第301図)

位置 調査区南部のL4j5区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

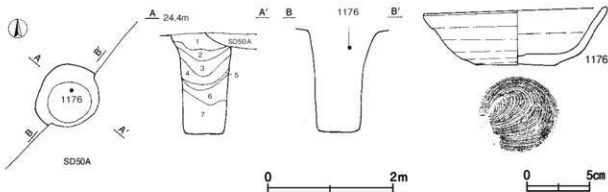
重複関係 第50号A溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.08m、短径0.96mの楕円形である。確認面から円筒状に1.60m掘り下げており、底面は平坦である。

覆土 7層に分層される。自然流入した堆積層(第3～7層)の上位に、ロームと粘土を含んだ第2層で固めながら埋め戻したと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------------|--------|---------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒 褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | 5 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒 褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| | | 7 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |



第301図 第30号井戸跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片9点(皿6,内耳鍋3),鉄滓1点のほか,流れ込んだ土師器片7点も出土している。1176は中央部の覆土上層(第2層)から出土している。

所見 素掘りの構造である。重複関係や出土土器から16世紀前半には廃絶したと考えられる。

第30号井戸跡出土遺物観察表(第301図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法的特徴	出土位置	備考
1176	土師質土器	皿	14.1	4.7	6.0	灰白・赤黄・茶母・赤色粒子	明陶	普通	体部内・外面ロケナダ 底部外面糸切 号後ナダ 内底中央部凹み	覆土上層	80%

第31号井戸跡(第302・303図)

位置 調査区南部のL4d8区,標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

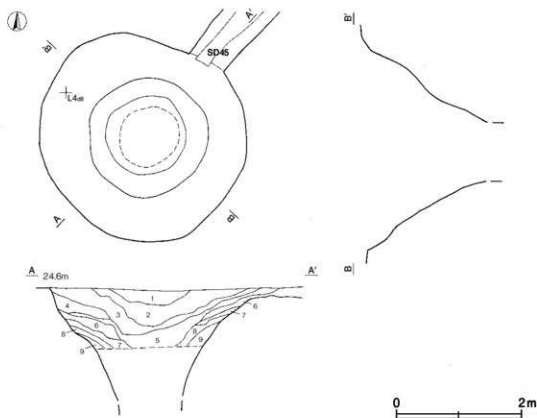
重複関係 第45号溝と連結している。

規模と形状 長径3.34m,短径3.22mの円形である。確認面から漏斗状に1.80m掘りくぼめた後,円筒状に掘り下げている。深さ1.90mほどで崩落のおそれがあることから,下部の調査を断念した。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

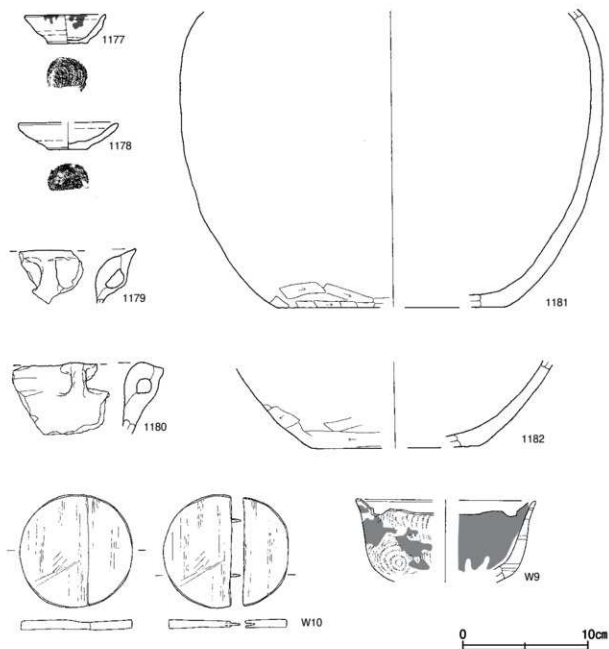
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量,焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量 | 9 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 5 褐色 | ローム粒子多量 | | |



第302図 第31号井戸跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片39点(皿4, 内耳鍋33, 甕2), 陶器片3点(片口鉢), 木製品2点(漆器, 蓋)のほか, 流れ込んだ縄文土器片1点, 須恵器片1点も出土している。図化した遺物は, すべて覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。居宅と想定される第19号掘立柱建物が東側6mに位置していることから, 屋敷城内で機能していたと考えられる。連結している第45号溝は, 本井戸から生活用水の排水をしていた可能性がある。また, 本井戸の東側8mに第32号井戸と10mに第33号井戸が位置している。時期は屋敷城と同時期の16世紀代で, 出土土器から16世紀後半には廃絶していたと考えられる。



第303図 第31号井戸跡出土遺物実測図

第31号井戸跡出土遺物観察表 (第303図)

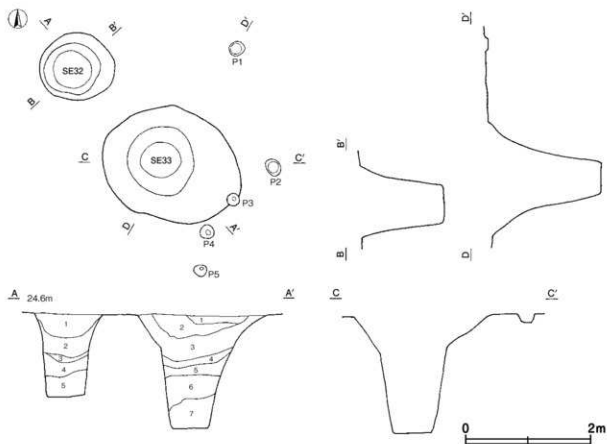
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1177	土師質土器	皿	6.4	2.4	3.2	長石・石英・赤色 粘土	浅黄橙	普通	体部内・外面口テラナナ 底面外面糸切 口後上葉ナナナ 内底中央部凹み	覆土中	10% 口辺部 油懸付着
1178	土師質土器	皿	[7.8]	2.2	3.2	長石・石英・赤色 粘土	浅黄橙	普通	体部内・外面口テラナナ 底面外面糸切 口後上葉ナナナ 内底中央部凹み	覆土中	25%
1179	土師質土器	内耳罎	—	(4.3)	—	長石・石英・ 雲母・礫	褐	普通	体部からそのまま口唇部に引き平ら面を 持ちシヤープ 体部内・外面ナナナ 耳部 入る所 口唇部上端から体部上位に陥り 付く	覆土中	
1180	土師質土器	内耳罎	—	(5.7)	—	長石・石英・ 雲母・赤色粘土・ 礫	灰黄褐	普通	口唇部端部は縮込 外側に絞 体部内・ 外面ナナナ 耳部入る所 口唇部上端から 体部上位に陥り付く	覆土中	
1181	土師質土器	甕	—	(23.6)	(18.2)	長石・石英・ 雲母・赤色粘土	橙	普通	体部外面ナナナ 下縁右方向のヘラ削り 内面ヘラナナ 底面外面ナナナ	覆土中	
1182	陶器	甕	—	(6.9)	(13.4)	長石・礫	灰黄	細密	体部下縁左方向の削り 内面風面化 底 面削り	覆土中	常盤系

番号	器種	口径・長さ	器高・幅	底径・厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W9	漆器	[14.2]	(6.5)	—	(54.8)	ブナ	横木取り 経目 暗赤褐色の漆塗り 朱塗り	覆土中	
W10	蓋	9.0	9.0	0.8	4.0	漆	横面丁寧な削り ほめ込み式の竹釘2本	覆土中	PL124

第32号井戸跡 (第304図)

位置 調査区南部のL4e9区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.18m、短径1.08mの円形である。確認面から漏斗状に30～40cm掘りくぼめた後、円筒状に掘り下げている。深さは1.30mほどで、底面は平坦である。



第304図 第32・33号井戸跡実測図

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子・炭	3 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量
	炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量

所見 素掘りの構造である。居宅と想定される第19号掘立柱建物が北西側6mに位置していることから、屋敷域内で機能していたと考えられる。また、第31号井戸が西側に8m、第33号井戸が東側に2mに位置している。時期は、屋敷域と同時期の16世紀代と考えられる。

第33号井戸跡 (第304図)

位置 調査区南部のL4e9区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径2.28m、短径1.74mの楕円形である。確認面から0.80～1.00mを漏斗状に掘りくぼめた後、円筒状に掘り下げている。深さは1.80mほどで、底面は平坦である。

ピット 本井戸周辺に5か所のピットが確認されているが、性格は不明である。

覆土 7層に分層される。第2・6層が固く締められていることと、他層がレンズ状に堆積していることから、自然堆積と人為的な埋め戻しが交互に行われていると考えられる。

土層解説

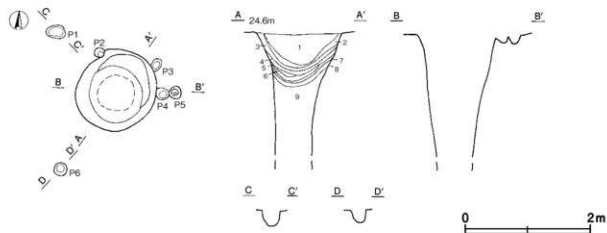
1 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
2 灰黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子少量、珪砂微量	6 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量	7 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
4 黒褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量		

遺物出土状況 土師質土器片1点(火鉢)が出土している。

所見 素掘りの構造である。居宅と想定される第19号掘立柱建物が北西側8mに位置していることから、屋敷域内で機能していたと考えられる。また、本井戸の西側2mに第32号井戸跡と10mの地点に第31号井戸跡が位置している。時期は屋敷域と同時期の16世紀代と考えられ、本井戸西側に位置している2基の井戸跡との時期差は不明である。

第34号井戸跡 (第305図)

位置 調査区南部のL5g1区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。



第305図 第34号井戸跡実測図

規模と形状 長径1.35m、短径1.20mの楕円形である。確認面から円筒状に2.00mほど掘り下げたが、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

ピット 本井戸周辺に深さ10～25cmの6か所のピットが確認されているが、性格は不明である。

覆土 9層に分層される。第9層は埋め戻した層で、その後土坑状の穴に自然堆積したものと考えられる。

土層解説

1 黒 褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、 粘土ブロック・砂粒微量	6 黒 褐色	ローム粒子微量
2 暗 褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	7 黒 褐色	ローム粒子少量
3 暗 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	8 黒 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 暗 褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子微量	9 にぶい黄褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
5 暗 褐色	ローム粒子中量		

所見 素掘りの構造である。時期は周囲に同じ構造をした井戸が確認されており、中世と考えられる。

第35号井戸跡 (第306図)

位置 調査区南部のL5 g4区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径2.15m、短径1.98mの方形である。ほぼ垂直に掘り下げ、深さは2.30mで、底面は平坦である。

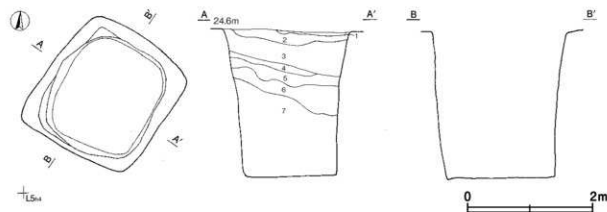
覆土 7層に分層される。一方向から土が投げ込まれた堆積状況を示した人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗 褐色	ローム粒子・砂粒少量、粘土粒子微量	5 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、砂粒微量
2 にぶい黄褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量	6 黒 褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック微量
3 灰 黄 褐色	粘土ブロック・ローム粒子・砂粒少量	7 黒 褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック微量
4 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子・礫少量		

遺物出土状況 土師質土器片2点（内耳鍋）が出土している。

所見 素掘りの構造である。南東側12～16mに、居住と想定される第56号掘立柱建物と倉庫的な機能をもつ第55号掘立柱建物が位置し、周囲に第36・37号井戸が位置していることなどから、屋敷域内で機能していたと考えられる。時期は、屋敷域との関連から16世紀代と考えられる。



第306図 第35号井戸跡実測図

第36号井戸跡 (第307図)

位置 調査区南部のL5 h4区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径2.54m、短径2.30mの円形である。確認面から漏斗状に0.80m掘りくぼめた後、円筒状に掘り下げている。深さ2.20mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

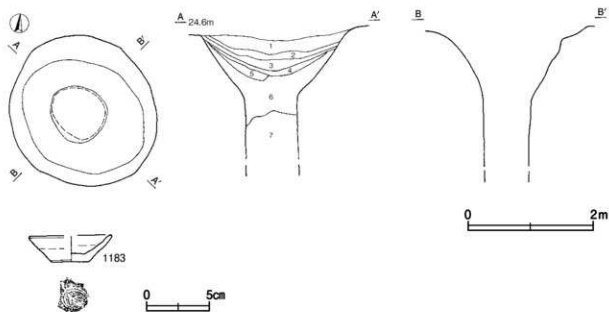
覆土 7層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子微量	6 褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量、炭化物微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	7 黒褐色	粘土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師質土器片35点(皿9、内耳銅2)、陶器片2点(瀬戸・美濃系皿、常滑系甕)、炭化材のほか、流れ込んだ縄文土器片2点、須恵器片1点も出土している。1183は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。南東側8mに、居宅と想定される第56号掘立柱建物と倉庫的な機能をもつ第55号掘立柱建物が位置し、北東側3mに第29号井戸が位置していることなどから、屋敷域内で機能していたと考えられる。出土土器や屋敷域との関連から16世紀後半には廃絶していたと考えられる。



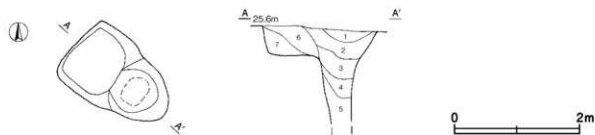
第307図 第36号井戸跡・出土遺物実測図

第36号井戸跡出土遺物観察表(第307図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1183	土師質土器	甕	[6.5]	2.1	2.9	長石・石英・赤色粘土	にがい黄緑	普通	腰部内・外面ロケリナデ 底部外面糸切 与後ナデ 内底ナデ	覆土中	20%

第37号井戸跡(第308図)

位置 調査区南部のL5h5区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第308図 第37号井戸跡実測図

規模と形状 長径0.94m、短径0.92mの円形であり、確認面から円筒状に掘り下げている。深さ1.50mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。本井戸の北西側には、長軸約1.2m、短軸約1.1mの方形の土坑がある。深さ50cmで、底面は平坦である。井戸を構築する際の足場の可能性がある。

覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。足場と想定される上面が硬化していることから、本井戸の構築後、その面まで埋め戻したと考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	5 灰	粘土粒子中量、ローム粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土粒子微量
		7 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片9点（内耳鍋）が出土している。

所見 素掘りの構造である。時期は、居宅と想定される第56号掘立柱建物を中心とした屋敷域があることから、16世紀代と考えられる。

第38号井戸跡（第309図）

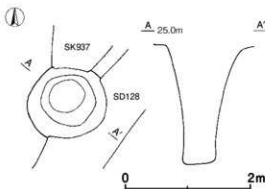
位置 調査区南東部のL5 j8区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第128号溝と第937号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.28m、短径1.22mの円形である。確認面から1.00mほど漏斗状に掘りくぼめた後、円筒状に掘り下げている。深さは1.88mほどで、底面は平坦である。

遺物出土状況 土師質土器片9点（内耳鍋）が出土している。

所見 素掘りの構造である。重複関係や出土土器から15世紀後半には廃絶していたと考えられる。



第309図 第38号井戸跡実測図

第39号井戸跡（第310図）

位置 調査区南東部のL6 h1区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第19B号溝と連結している。

規模と形状 長径3.90m、短径2.98mが確認され、平面形は楕円形であると考えられる。確認面から漏斗状に1.30～1.50m掘りくぼめた後、円筒状に掘り下げている。深さ2.90mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

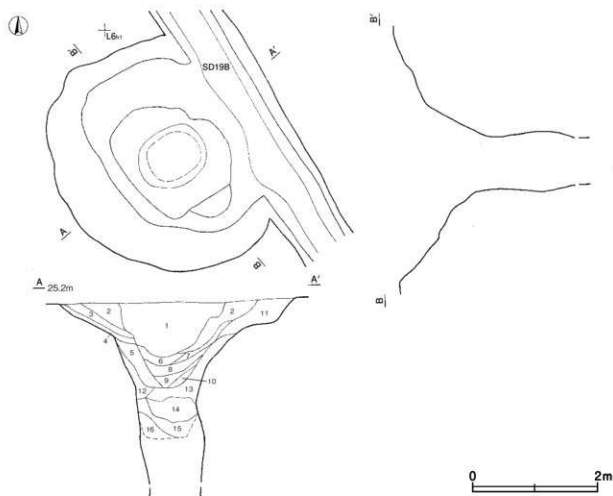
覆土 16層に分層される。第5～10・12～16層で漏斗状の最下部まで埋め戻し、その上部には第19B号溝や地表面から第2～4・11層が流れ込み、さらに多様な含有物を含む第1層で一気に埋めている。

土層解説

1 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	10 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	11 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	12 暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	13 暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6 黒褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	15 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量、粘土粒子微量
7 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	16 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
8 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量		
9 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子微量		

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿、内耳鍋)、陶器片1点(常滑系甕)のほか、流れ込んだ土師器片1点、須恵器片1点も出土している。

所見 素掘りの構造である。時期はロクロ成形のかわらけや重複関係から、15世紀後半～16世紀前半と考えられる。



第310図 第39号井戸跡実測図

第40号井戸跡 (第311図)

位置 調査区南部のM3 a8区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第43号溝と連結している。

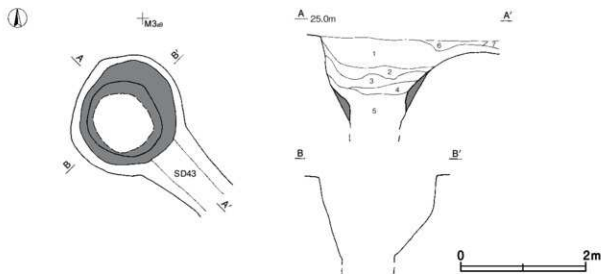
規模と形状 長径1.90m、短径1.68mの楕円形である。確認面から1.20～1.30mを輪状に掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げたと考えられ、掘り込みの最下部に達したところで湧水のため、下部の調査を断念した。

覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状態で、第43号溝と同時に埋められている(第1・6・7層)。また、第4・5層の両壁際に粘土が貼り付けられており、構築の際に貼られたものと考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 6 褐色 ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量 | 7 灰褐色 ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 | |

所見 素掘りの構造である。時期は、重複関係から16世紀代と考えられる。連結している第43号溝は、本井戸からの生活用水の排水機能を有していた可能性がある。



第311図 第40号井戸跡実測図

第41号井戸跡 (第312・313図)

位置 調査区南部のM4d2区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第31・32・50B号溝と同時期で、第5号道路に掘り込まれている。

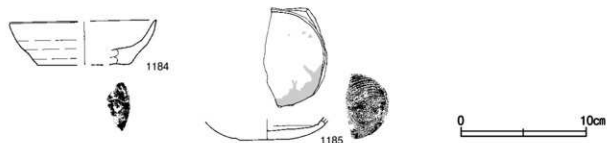
規模と形状 長径7.92m、短径6.54mの楕円形である。確認面から1.10mほど漏斗状に掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げたと考えられ、深さ1.20mほどで湧水のため、下部の調査を断念した。

覆土 9層に分層される。地表面から流れ込んだ褐色土が薄く堆積していることから、漏斗状の掘り込み最下部まで埋め戻し、重複している溝が廃絶する同時期に埋め戻されたと考えられる。

土層解説

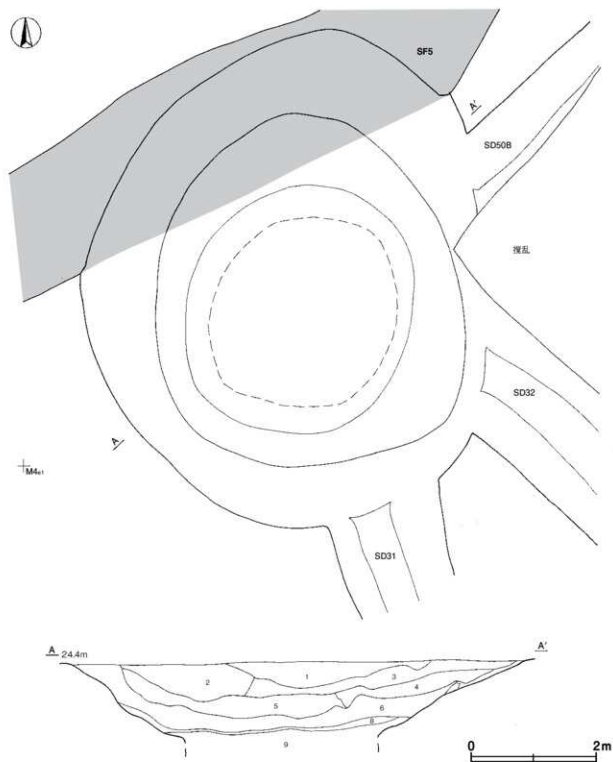
1 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量	7 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・粘土粒子微量	8 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
	9 黒褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片24点(皿14、内耳鍋10)、陶器片4点(瀬戸・美濃系丸碗1、瀬戸・美濃系皿1、常滑系甕2)、木片1点のほか、流れ込んだ縄文土器2点、須恵器片2点も出土している。1184は北部の覆土上層から出土している。細片のため図化できないが、15世紀代後半と想定される古瀬戸の丸碗片が南東部の覆土中層から、須恵器甕片と常滑系甕片を砥石に転用した遺物が覆土中から確認されている。



第312図 第41号井戸跡出土遺物実測図

所見 素掘りの構造である。重複関係や出土土器から15世紀後半には廃絶していたと考えられる。



第313図 第41号井戸跡実測図

第41号井戸跡出土土器観察表 (第312図)

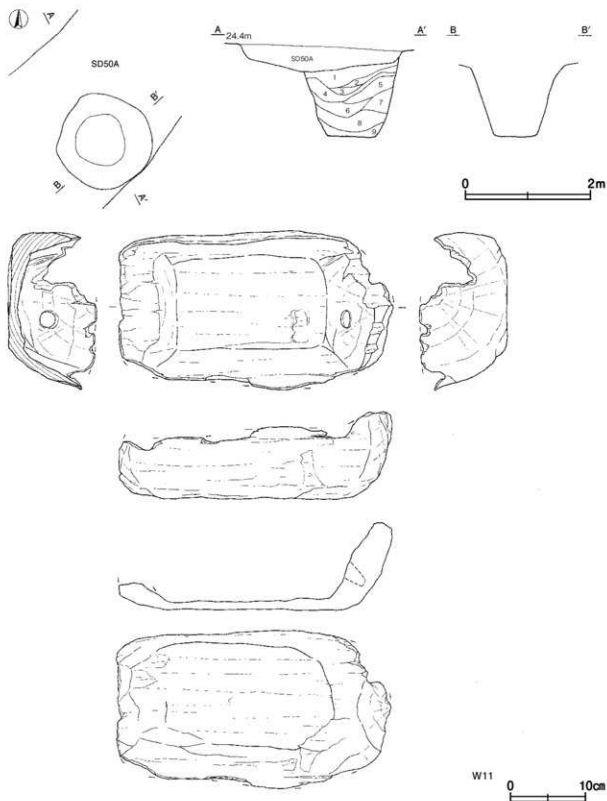
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1184	土加蓋土器	皿	[11.6]	3.5	[7.2]	長石・石英・ 赤鉄・赤色砂子	黄橙	普通	体部内・外面ロケロナデ 与残ナデ 内底ナデ	覆土上層	20%
1185	陶器	縁輪皿	—	[1.7]	4.6	雑 灰輪	浅黄	緻密	体部内外面灰輪付着 底部未切り痕	覆土中	20% 瀬戸・美濃系

第42号井戸跡 (第314図)

位置 調査区南部のM 4 a5区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第50A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.58m、短径1.52mの円形である。確認面から漏斗状に1.10m掘り込み、底面は平坦である。



第314図 第42号井戸跡・出土遺物実測図

覆土 9層に分層される。全体的に軟弱な土であることや、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	6 黒 褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量
2 黒 褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量	7 黒 褐色	粘土ブロック微量
3 黒 褐色	粘土粒子微量	8 黒 褐色	粘土ブロック微量
4 黒 褐色	粘土ブロック微量	9 黒 褐色	粘土粒子微量
5 黒 褐色	粘土ブロック少量		

遺物出土状況 木製品1点(槽)が、中央部西寄りの覆土下層(第8層)から出土している。廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 素掘りの構造である。時期は、重複関係から中世後半と考えられる。

第42号井戸跡出土遺物観察表(第314図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W11	槽	(36.7)	(23.0)	11.7	(1340)	埴	広葉樹の平頭材を張りめぐり、径2cm、深5.38mほどの円筒の一部欠損	覆土下層	PL124

第43号井戸跡(第315図)

位置 調査区南部のM4g6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第31・32号溝と連結し、南部は調査区域外である。

規模と形状 長径6.46m、短径3.58mが確認され、平面形は楕円形と考えられる。確認面から漏斗状に2.80m掘り込んだ後、下部を円筒状に掘り下げたと考えられる。深さ3.00mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

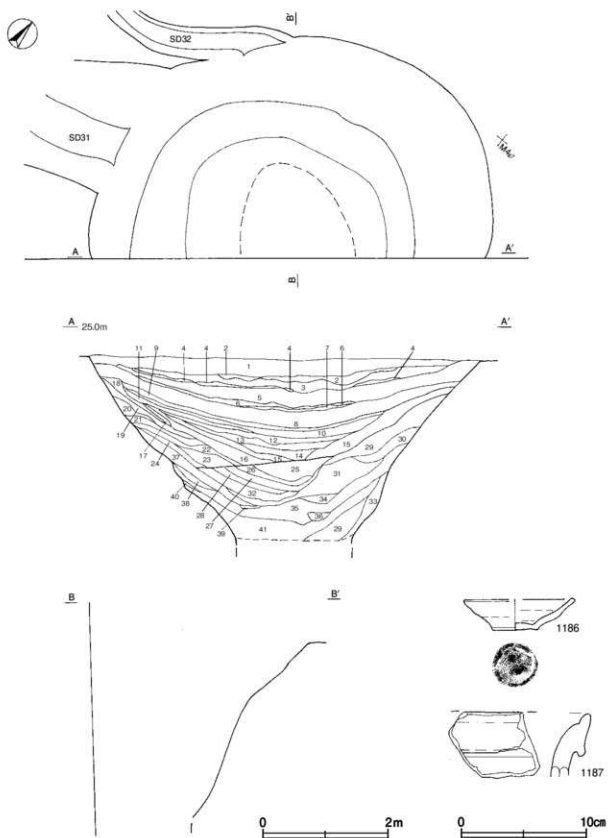
覆土 41層に分層される。第25～28・32層が整地されている状況から、確認面から深さ1.6mほどの高さまで埋め戻したと考えられる。溝の廃絶後、その上に地表面から土が流れ込んだり、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1 陶 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	21 暗 褐色	ローム粒子少量
2 黒 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	22 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量
3 暗 褐色	ローム粒子中量	23 褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック微量
4 褐色	ローム粒子多量	24 暗 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒微量
5 暗 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	25 暗 褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
6 暗 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量	26 黒 褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量
7 黒 褐色	ローム粒子少量、砂粒微量	27 暗 褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・炭化粒子微量
8 暗 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・砂粒微量	28 におい黄褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・炭化物微量
9 暗 褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック微量	29 褐色	粘土粒子多量、ローム粒子少量、砂粒微量
10 褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	30 におい黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量
11 暗 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子微量	31 黒 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
12 暗 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	32 暗 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
13 暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック・砂粒微量	33 におい黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子少量
14 灰 黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	34 黒 褐色	炭化粒子・粘土粒子微量
15 褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量	35 におい黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・砂粒微量
16 褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量	36 灰オリーブ色	粘土粒子多量、ローム粒子微量
17 暗 褐色	ローム粒子多量	37 におい黄褐色	ローム粒子・粘土粒子中量
18 明 褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック微量	38 褐色	ローム粒子多量、粘土粒子少量
19 褐色	ローム粒子少量	39 黒 褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量
20 褐色	ローム粒子中量	40 暗 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量
		41 暗 灰黄色	粘土粒子多量、ローム粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片55点(皿15、内耳鍋40)、陶器片7点(常滑系甕5、常滑系鉢2)、木片1点のほか、流れ込んだ土師器片1点も出土している。1186・1187は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。重複関係から15世紀後半には廃絶したと考えられる。また、1186から本井戸と溝は16世紀代後半には埋め戻されたと考えられる。



第315图 第43号井戸跡・出土遺物実測図

第43号井戸跡出土遺物観察表 (第315図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1186	土加蓋土器	甕	[88]	2.4	3.6	長石・雲母	にぶい・橙	普通	腰部内・外面口クロナデ 底部外面糸切 与後ナデ 内面中央部より縮った横ナデ	覆土中	50%
1187	陶器	甕	—	[32]	—	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	内・外面横ナデ 縁帯幅約3cm	覆土中	常滑系

第44号井戸跡 (第316図)

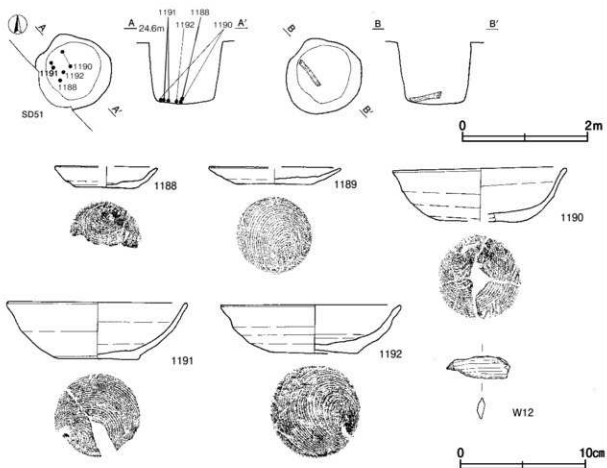
位置 調査区南部のM5 a2区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第51号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.24、短径1.16mの円形である。確認面からほぼ垂直に1.02m掘り込み、底面は平坦である。

遺物出土状況 土師質土器片52点(皿)、木製品2点(井戸杓カ、つけ木)のほか、流れ込んだ須恵器片1点も出土している。1188は中央部の覆土下層、1190～1192は北西部の底面からそれぞれ出土している。いずれも破砕された状態で出土していることから、廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見 素掘りの構造である。時期は、出土土器や重複関係から15世紀後葉と考えられる。



第316図 第44号井戸跡・出土遺物実測図

第44号井戸跡出土遺物観察表 (第316図)

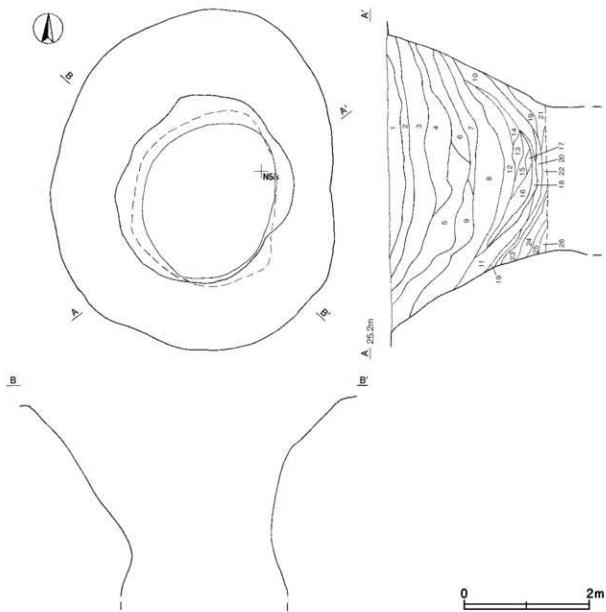
番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1188	土加蓋土器	甕	[80]	2.2	5.0	長石・石英・赤色 粘土	浅黄橙	普通	腰部内・外面口クロナデ 底部外面糸切 与後ナデ 内面中央部凹み	覆土下層	30%

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1189	土師貫土器	甕	[10.4]	1.4	6.0	長石・石英・赤色 粒		普通	体部内・外面口テラナ 有残ナテ 内面中央部凹み	底部外面糸切	覆土中 30%
1190	土師貫土器	甕	13.8	4.4	6.6	長石・石英・ 黒母・赤色粒	浅黄橙	普通	体部内・外面口テラナ 有残ナテ 内面中央部凹み	底部外面糸切	底面 50%
1191	土師貫土器	甕	14.2	4.6	6.6	長石・石英・赤色 粒	浅黄橙	普通	体部内・外面口テラナ 有残ナテ 内面中央部凹み	底部外面糸切	底面 80%
1192	土師貫土器	甕	14.3	3.9	7.0	長石・石英・ 赤母・赤色粒	にぶい黄橙	普通	体部内・外面口テラナ 有残ナテ 内面中央部凹み	底部外面糸切	底面 80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W12	つけ木	(5.0)	(1.8)	(0.7)	(2.7)	木	先端部破状	覆土下層	杉材*

第45号井戸跡 (第317・318図)

位置 調査区南東部のN5c4区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。



第317図 第45号井戸跡実測図

規模と形状 長径5.45m, 短径4.46mの楕円形である。確認面から漏斗状に2.20m掘りくぼめた後, 円筒状に掘り下げている。深さ3.00mほどに達した時点で崩落のおそれがあることから, 下部の調査を断念した。

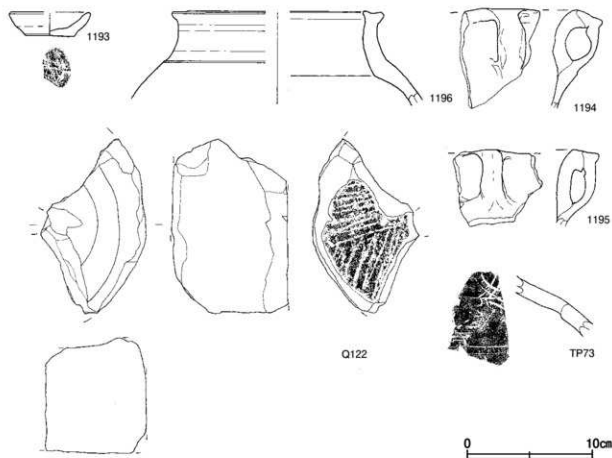
覆土 26層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子多量	15	褐	色	ローム粒子中量, 粘土粒子少量	
2	黒	褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	16	暗	褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子微量	
3	暗	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	17	暗	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	
4	黒	褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子微量	18	暗	褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子少量	
5	黒	褐色	ロームブロック微量	19	暗	褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック少量	
6	褐	色	ローム粒子中量	20	暗	褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子少量	
7	暗	褐色	ローム粒子少量	21	灰	褐色	粘土ブロック・砂粒中量, ロームブロック少量	
8	黒	褐色	ローム粒子微量	22	に	ぶい	黄褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック少量, 砂粒微量
9	暗	褐色	ローム粒子中量	23	褐	色	ローム粒子多量, 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量	
10	暗	褐色	砂粒少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	24	暗	褐色	ローム粒子多量, 粘土ブロック・砂粒少量, 炭化粒子微量	
11	暗	褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	25	暗	褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック・砂粒少量, 炭化粒子微量	
12	暗	褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量	26	暗	褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	
13	黒	褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量					
14	暗	褐色	ロームブロック少量					

遺物出土状況 土師質土器片85点(皿6, 内耳鍋75, 甕1, 播鉢3), 陶器片1点(常滑・渥美系甕), 石器3点(石皿・茶臼・不明)のほか, 流れ込んだ須恵器片2点, 灰軸陶器片1点も出土している。1194～1196・TP73は北部の覆土下層, P1193・Q122は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 素掘りの構造である。出土土器から16世紀代には廃絶していたと考えられる。



第318図 第45号井戸跡出土遺物実測図

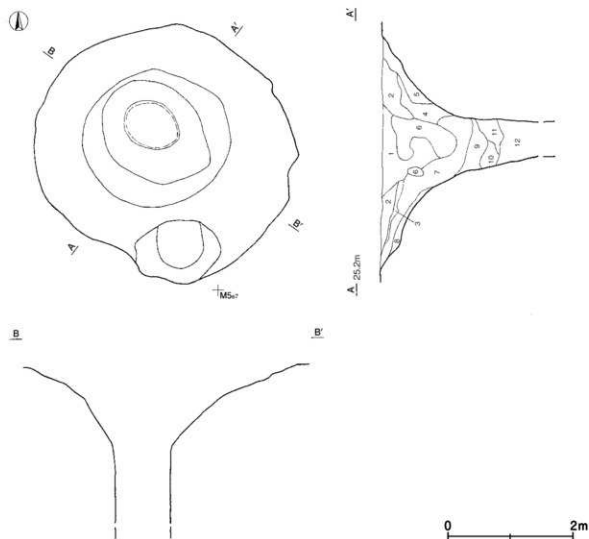
第45号井戸跡出土遺物観察表（第318図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1193	土加貫土器	皿	[6.3]	1.9	[3.8]	長石・雲母・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面口ノコナテ 底部外面全切 り残ナテ スノコ状瓦板 内面中央部凹 み	覆土上層	
1194	土加貫土器	内耳罎	—	(7.9)	—	長石・石英・雲母	明陶	普通	1)唇部端部は輪広、内・外横につまみ出 される。体部内・外面ノコナテ 耳部1か所 1)唇部上端から体部上位に貼り付け	覆土下層	
1195	土加貫土器	内耳罎	—	(6.1)	—	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	明陶	普通	1)唇部端部は輪広、内横につまみ出され る。体部内・外面ノコナテ 耳部1か所 1) 唇部上端から体部上位に貼り付け	覆土下層	
1196	土加貫土器	壺	[17.0]	(7.4)	—	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	1)唇部端部は輪広、内・外横につまみ出 される。1)唇部・体部内・外面ノコナテ 体部内・外面ノコナテ 輪縁あり 体部外面 輪縁 体部外面施釉 内面輪縁着	覆土下層	陶美系。
T173	陶器	壺	—	(3.8)	—	長石	キリーブ陶	良好		覆土下層	陶美系。

番号	器種	径	孔径	器高	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q122	茶臼	[18.6]	[3.4]	9.3	[996.3]	紫山岩	輪受け一部残存 8条1單位の盛り目	覆土上層	

第46号井戸跡（第319・320図）

位置 調査区南東部のM5 d6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。



第319図 第46号井戸跡実測図

規模と形状 長径4.18m、短径3.72mの楕円形である。確認面から1.20mほど漏斗状に掘りくぼめた後、円筒状に掘り下げている。深さ2.50mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。南側に一段掘りくぼめられている部分があり、構築の際の足場の可能性がある。

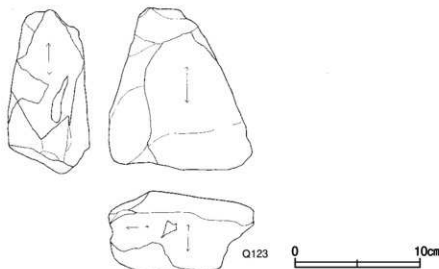
覆土 12層に分層される。不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	8 黒 褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
3 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	9 黒 褐色	炭化粒子多量、ローム粒子少量
4 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
5 黒 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗 褐色	ロームブロック多量
6 灰 褐色	粘土ブロック中量	12 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片37点（皿1、内耳鍋32、掃鉢4）、陶器片1点（瀬戸・美濃系皿）、石器1点（台石）のほか、流れ込んだ弥生土器片1点も出土している。Q123は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。周辺に連結した第22号水溜遺構と第141号溝が位置していることから、本井戸から作業用水が汲まれていた可能性がある。時期は、近接する2遺構との関連性から16世紀代と考えられる。



第320図 第46号井戸跡出土遺物実測図

第46号井戸跡出土遺物観察表（第320図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q123	台石*	13.1	11.5	6.5	14.55.0	雲母片岩	砥石転用 縦面3ヶ所	覆土中	

第47号井戸跡（第321図）

位置 調査区南東部のM6d1区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径3.38m、短径3.24mの円形である。確認面から漏斗状に1.40mほど掘り込んだ後に、円筒状に掘り下げている。深さ2.40mほどで崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

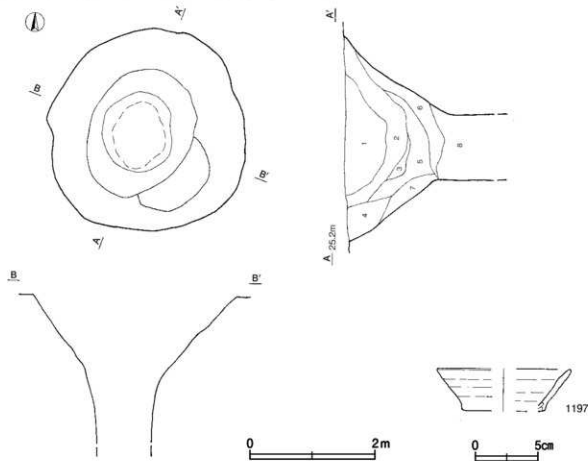
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒 褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量
2 黒 褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量	6 暗 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量
3 黒 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
4 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子微量	8 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師質土器片36点(皿1, 内耳鍋33, 搗鉢2), 陶器片1点(瀬戸・美濃系皿), 鉄滓1点のほか, 流れ込んだ土師器片1点, 須恵器片2点も出土している。1197は覆土中から出土している。

所見 素掘りの構造である。居宅と想定される第54号掘立柱建物が北西側12mに位置し, 倉庫・副屋と想定される第51～53号掘立柱建物がその南側に位置していることから, 屋敷域内で機能していたと考えられる。時期は, 屋敷域の関連性や出土土器から16世紀代と考えられる。



第321図 第47号井戸跡・出土遺物実測図

第47号井戸跡出土遺物観察表(第321図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1197	土師質土器	皿	[10.8]	3.4	[6.6]	長石・雲母	にふい橙	普通	縁部内・外面口テロナデ 唇部ナデ 内底ナデ 底面外面糸切	覆土中	10%

表22 中世井戸跡一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m)		断面	底面覆土	甕土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 旧→新 同時期・同時期)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
1	H 7 a3	N-40°-E	円形	3.02×2.80	(295)	漏斗状	不明	人為	土師質土器, 陶器	SI229A→本跡
2	H 7 c9	N-66°-W	楕円形	2.10×1.84	(134)	碗状	不明	人為	土師質土器	
3	H 6 g5	N-7°-E	楕円形	3.04×2.66	170	漏斗状	塵状	人為	土師質土器	
4	H 6 i7	N-31°-E	円形	2.08×1.95	(148)	漏斗状	不明	人為	土師質土器, 陶器, 石片	
5	H 6 g9	N-27°-W	円形	1.78×1.68	(218)	漏斗状	不明	不明	土師質土器, 磁石	
6	H 7 i1	N-31°-W	円形	1.48×1.35	(182)	垂直	不明	人為	—	SI241-257→本跡

番号	位置	長軸(径) 方向	平面形	規模(m)		層面	底面覆土	覆土	主な出土遺物	(発掘時期・目→発掘時期・回時期)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
7	1 5 11	N-67°-W	楕円形	(273) × (94)	(202)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD201
8	1 5 13	N-58°-E	不定形	2.56 × 2.38	221	漏斗状	不明	人為	土師質土器	
9	1 6 e3	N-11°-E	楕円形	2.24 × 1.86	(236)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、灰石、石臼、鉄片	本跡→SD342
10	1 6 f3	N-0°	楕円形	1.00 × 0.78	208	垂直	平坦	人為	土師質土器	本跡→SD300
11	1 6 h3	N-70°-E (楕円形)	楕円形	1.76 × (1.21)	146	漏斗状	平坦	自然→人為	石函	本跡→SD300
12	1 7 g1	N-34°-E	円形	1.68 × 1.56	(181)	漏斗状	不明	自然	土師質土器	本跡→SD337
13	1 7 f5	N-65°-W	楕円形	3.80 × 2.96	(210)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器	
14	1 7 b6	N-67°-W	円形	1.12 × 1.02	142	垂直・外傾	平坦	人為	土師質土器	本跡→SD327
15	1 7 b6	N-19°-W	楕円長方形	1.86 × 1.46	(218)	漏斗状	不明	人為	土師質土器	本跡→SD188→SD189→SD327
16	1 7 g7	N-16°-E	楕円形	1.52 × (1.06)	122	漏斗状	平坦	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD217
17	1 8 e1	N-18°-E	楕円形	2.90 × 2.58	(300)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、石臼	本跡→SD197-199A
18	J 5 e4	N-56°-E	楕円形	1.00 × 0.88	(118)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器	
19	J 5 j3	N-78°-E	楕円形	0.98 × 0.76	(121)	垂直	不明	人為	—	
20	J 5 j7	N-12°-W	楕円形	1.20 × 1.05	(169)	垂直	不明	人為	—	本跡→SR3
21	J 5 j9	N-83°-E	円形	3.29 × 3.22	(226)	漏斗状	不明	人為	—	本跡→SD20
22	J 6 f8	N-31°-E	円形	3.70 × 3.46	(282)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器、灰石、鉄片	本跡→SD307
23	J 6 f0	N-65°-W	楕円形	2.48 × 2.22	(262)	楕状	不明	人為→自然	土師質土器	
24	J 7 f3	N-13°-W	不整形	2.56 × 2.56	(218)	漏斗状	不明	自然→人為	土師質土器、陶器	本跡→SD333
25	K 5 h3	N-72°-E	楕円形	1.60 × 1.44	(142)	漏斗状	不明	自然	—	本跡→WT16
26	K 6 f2	N-43°-E	楕円形	3.04 × 2.46	231	漏斗状	平坦	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD16-28A
27	K 6 e6	N-32°-W (楕円形)	楕円形	2.42 × (1.68)	(146)	漏斗状	不明	人為→自然	土師質土器	本跡→SD154
28	L 3 d7	N-82°-E	円形	4.31 × 4.14	(249)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器、灰石	UP7→SK221→本跡→SD9
29	L 4 a6	N-76°-W	円形	4.40 × 4.20	(171)	漏斗状	不明	自然	土師質土器、石臼、石臼、鉄片	本跡→SD14→SF1
30	L 4 j5	N-42°-E	楕円形	1.08 × 0.96	162	垂直	平坦	自然→人為	土師質土器、鉄片	本跡→SD50A
31	L 4 d8	N-46°-W	円形	3.34 × 3.22	(194)	漏斗状	不明	自然	土師質土器、陶器、漆器、灰	本跡→SD45
32	L 4 e9	N-62°-W	円形	1.18 × 1.08	132	垂直・外傾	平坦	自然	—	
33	L 4 e9	N-62°-W	楕円形	2.28 × 1.74	180	垂直・縦斜	平坦	自然・人為	土師質土器	
34	L 5 g1	N-45°-E	楕円形	1.35 × 1.20	(195)	垂直	不明	人為→自然	—	
35	L 5 g4	N-37°-E	方形	2.15 × 1.98	232	垂直	平坦	人為	土師質土器	
36	L 5 b4	N-45°-W	楕円形	2.54 × 2.30	(218)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器	
37	L 5 h5	N-54°-W	円形	(0.94) × 0.90	(148)	外傾・垂直	不明	人為	土師質土器	
38	L 5 j8	N-42°-W	円形	1.28 × 1.22	188	外傾	平坦	不明	土師質土器	本跡→SD128-SK307
39	M 6 h1	N-41°-W (円形)	円形	3.90 × (2.98)	(292)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD190
40	M 3 a8	N-45°-E	楕円形	1.90 × 1.68	(131)	楕状	不明	人為	—	本跡→SD43
41	M 4 d2	N-10°-E	楕円形	7.92 × 6.54	(122)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD31-32-50B→SF5
42	M 4 a5	N-20°-W	円形	1.58 × 1.52	114	外傾	平坦	自然	樽	本跡→SD50A
43	M 4 g6	N-42°-E (楕円形)	楕円形	6.46 × (3.58)	(298)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD1-32
44	M 5 a2	N-49°-E	円形	1.24 × 1.16	102	垂直	平坦	不明	土師質土器、ついで木	本跡→SD31-32
45	N 5 e4	N-33°-E	楕円形	5.45 × 4.46	(304)	漏斗状	不明	自然	土師質土器、陶器、石	本跡→SD31-32
46	M 5 b6	N-59°-W	楕円形	4.18 × 3.72	(253)	漏斗状	不明	人為	土師質土器、陶器、石	
47	M 6 d1	N-0°	円形	3.38 × 3.24	(236)	漏斗状	不明	自然	土師質土器、陶器、鉄片	

(5) 水溜遺構

水溜遺構は雨水などを生活用水や作業用水として利用するため一時的に貯水した施設で、屋敷域内で機能していた施設と想定される。今回の調査では、水溜遺構は21基確認されており、それらを大まかに分けると2つ

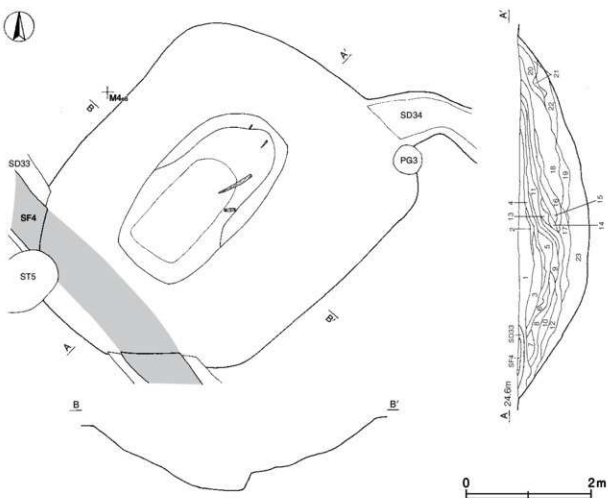
に分類することができる。第1類（第1～15号）は溝と連結するもので、溝から流れ込んだ雨水を利用した洗いの施設と考えられる。第2類（第16～21号）は単独で位置する遺構で、付近に居宅と想定される掘立柱建物が位置していることから、一時的に水を溜めて生活用水として使用したと考えられる施設である。ここでは、2分類したそれぞれの遺構から特徴ある3基について記述し、その他の遺構については、実測図と遺物、一覧表と土層解説で記載する。また、図示した遺物については、出土遺物観察表で記載する。

第14号水溜遺構（第322・323図）

位置 調査区南部のM4c6区、標高24mほどの緩斜面に位置している。

重複関係 第34号溝と連結し、第33号溝、第4号道路、第3号ピット群の一部、第5号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.76m、短軸約4.48mの隅丸長方形である。確認面から漏斗状に70～80cm掘り込んだ後、中央部を長軸約3.13m、短軸1.64m、深さ30cmほど長方形状に掘り込んでいる。底面はやや凸凹があり、壁はなだらかに立ち上がっている。中央部の掘り込みには、2点の木片が底面に刺さった状態で出土しており、木枠の残存部の可能性がある。



第322図 第14号水溜遺構実測図

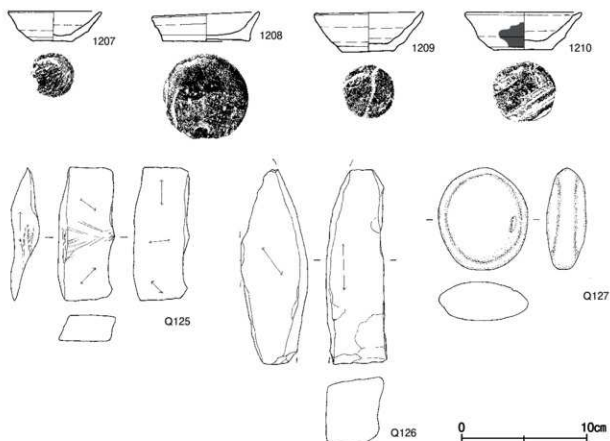
覆土 23層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・糠・砂粒微量	11	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・糠・砂粒微量	12	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3	黒褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	13	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
4	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	14	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・砂粒微量	15	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6	暗褐色	砂粒中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16	黒褐色	粘土ブロック、ローム粒子・炭化粒子微量
7	にぶい黄褐色	ローム粒子中量、砂粒少量	17	暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量
8	黒褐色	粘土ブロック・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量	18	灰黄褐色	砂粒多量、ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
9	黒褐色	ローム粒子少量、炭化物・砂粒微量	19	暗褐色	砂粒多量、ローム粒子少量、粘土ブロック微量
10	黒褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	20	黒褐色	砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
			21	灰黄褐色	砂粒多量、ローム粒子微量
			22	暗褐色	ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子・粘土粒子微量
			23	暗褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片68点(皿13、内耳鍋55)、陶器片2点(常滑系甕)、石器3点(砥石2、磨石1)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。図化した遺物は覆土中から出土しており、明確な出土地点は不明である。

所見 時期は、重複関係や出土土器から16世紀代と考えられる。溝から流れてくる雨水などを長く保水することを考慮すると、底面から確認された木片は、水の浸透などを防ぐための木枠が存在したことを想定できる。



第323図 第14号水溜遺構出土遺物実測図

第14号水溜遺構出土遺物観察表(第323図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
1207	土師質土器	皿	7.3	2.4	3.2	長石・白堊・雲母・赤色粒子	橙	普通	縁部内・外面ロウナデ、裏面回転糸切リ後、掌化ナデ、内底ナデ中央部から内周部にかけて四メ	覆土中	100%

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1208	土師瓦土器	皿	8.5	2.4	7.0	長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後丁寧なナデ 内底丁寧なナデ 中央 部突出	覆土中	90%
1209	土師瓦土器	皿	8.7	3.2	4.2	長石・石英・赤色 粒子	黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後丁寧なナデ 内底ナデ中央部から外 周部にかけて凹み	覆土中	70%
1210	土師瓦土器	皿	9.2	3.0	4.8	長石・石英・ 炭屑・赤色粒子	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部スノコ状 圧痕 内底複数回の櫛ナデ	覆土中	85% 体部 前 後行着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q125	灰石	10.2	4.6	2.4	1106	凝灰岩	紙面3面 他は破断面	覆土中	
Q126	灰石	(15.6)	(4.9)	5.2	(56.5)	凝灰岩	紙面2面 他は破断面	覆土中	
Q127	磨石	8.1	7.2	3.2	269.0	安山岩	縁辺部に磨り目	覆土中	

第16号水溜遺構 (第324図)

位置 調査区南部のK513区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

確認状況 第12号掘立柱建物を中心とした屋敷域内に位置している。

規模と形状 長軸3.20m、短軸3.03mの隅丸方形である。深さは25cmほどで、壁はなだらかに立ち上がっている。底面には厚さ30cmほどの粘土を貼り付けており、中央部北寄りから長軸1.58m、短軸1.04mの長方形の掘り方が確認されている。

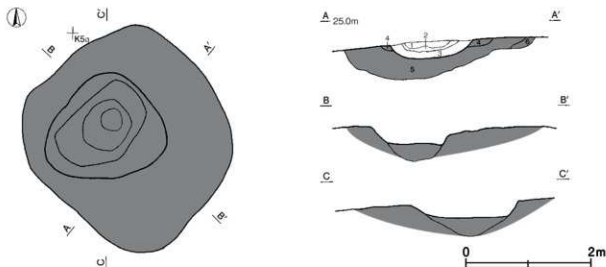
覆土 6層に分層される。第4～6層は粘土貼付層で、第1～3層はレンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 粘土粒子微量 | 4 浅黄橙色 粘土ブロック多量、ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量 | 5 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 硬土ブロック少量、炭化物微量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師質土器片6点(皿)のほか、流れ込んだ土師器片2点、須恵器片1点も出土しており、いずれも明確な出土地点は不明である。

所見 時期は、屋敷域との関連から16世紀代と考えられる。中央部の掘り込み部分の大きさから、近接する第25号井戸から水を汲み上げて本水溜遺構に貯水し、道具や食料品などを洗ったと想定されるが、詳細は不明である。



第324図 第16号水溜遺構実測図

第20号水溜遺構 (第325図)

位置 調査区南東部のL 6 g1区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

確認状況 溝に囲まれ、南に2つの屋敷城が、周辺に6基の水溜遺構が位置している。

規模と形状 長径3.42m、短径2.78mの楕円形である。深さは70～80cmで、底面は東側へ緩やかにくぼみ、壁は外傾して立ち上がっている。底面から覆土下層にかけて確認された木材は組んだような様相をしている。

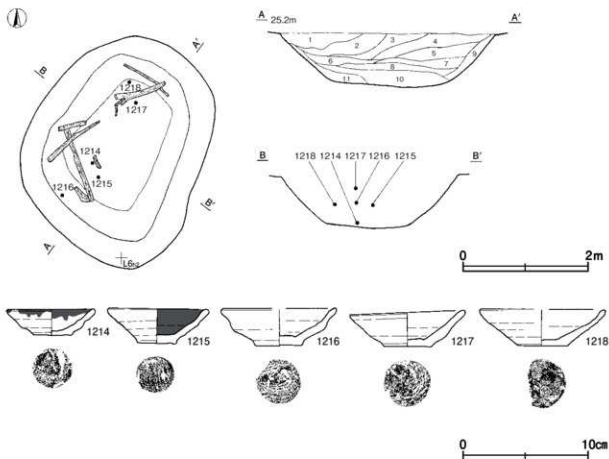
覆土 11層に分层される。廃絶後に北側方向から段階的に埋めたと考えられる。また、第10層に炭化粒子が多く含まれていることから、廃絶後に残っていた木材が炭化したものと考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	5 黒褐色	粘土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量
3 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量
		9 黒褐色	ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
		10 暗褐色	炭化粒子多量、粘土粒子少量、ローム粒子微量
		11 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片20点(皿11, 内耳銅9)のほか、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。図化した遺物は、廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から16世紀後半と考えられる。底面付近から木片が確認されたことは、本水溜遺構の保水性を高めるための木枠が存在したことを想定できる。

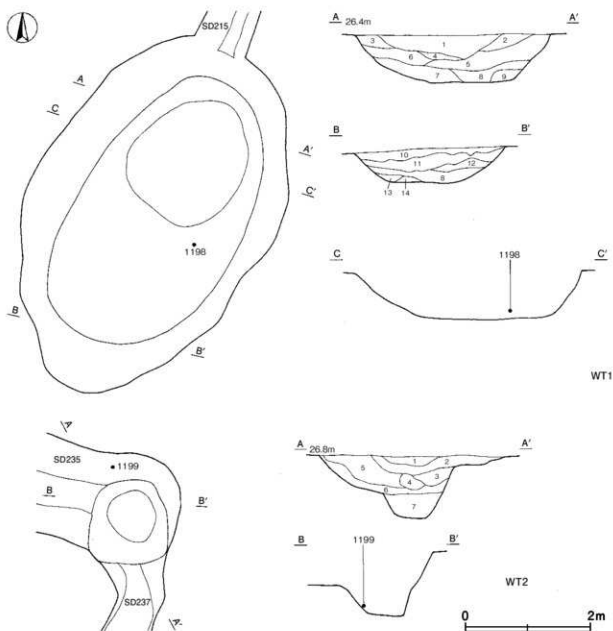


第325図 第20号水溜遺構・出土遺物実測図

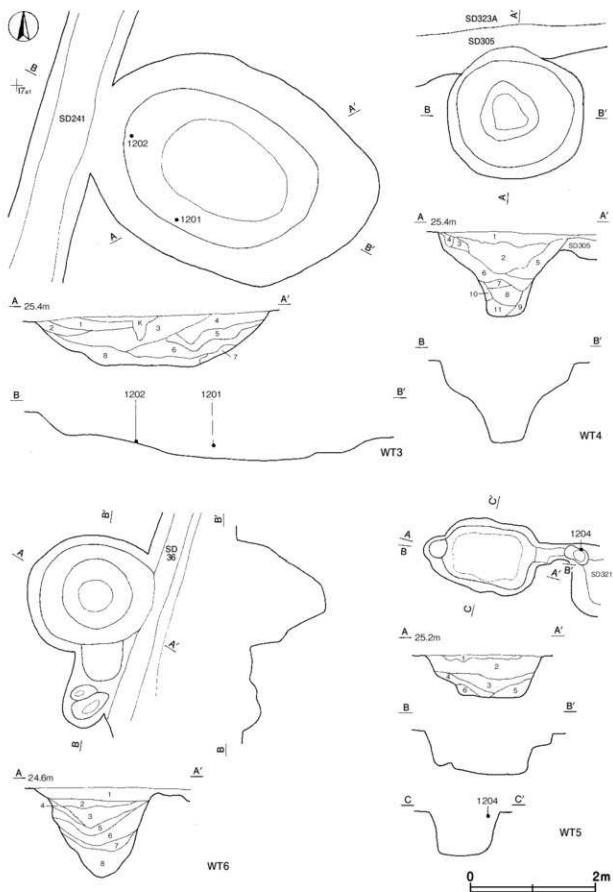
第20号水溜遺構出土遺物観察表 (第325図)

番号	種類	器種	11径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
1214	土胎貫土器	皿	69	2.1	3.0	長石・赤色粒子	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ 底面回転糸切 台後上繋々ナデ 内底横ナデ	底面	100% 11径部 濃層付着
1215	土胎貫土器	皿	82	2.8	3.2	長石・雲母・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底面回転糸切 口後ナデ 内底横ナデ	覆土中層	70% 内面保 付着
1216	土胎貫土器	皿	[90]	3.0	3.8	長石・石英・赤色 粒子	にぶい・黄橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底面回転糸切 口後上繋々ナデ 内底横ナデ 中央部と 外周部に凹み	覆土中層	90%
1217	土胎貫土器	皿	92	3.0	3.8	長石・雲母・赤色 粒子	浅黄橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底面回転糸切 台後上繋々ナデ 内底横ナデ 中央部と 外周部に凹み	覆土上層	95%
1218	土胎貫土器	皿	[100]	3.0	4.0	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	灰白	普通	体部内・外面口クロナデ 底面回転糸切 台後上繋々ナデ 内底横ナデ 中央部に 凹み	覆土中層	50%

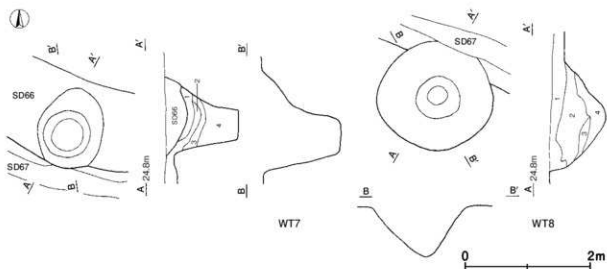
ア 溝跡と連結する水溜遺構 (第326～330図)



第326図 第1・2号水溜遺構実測図



第327图 第3~6号水溜遺構実測図



第328図 第7・8号水溜遺構実測図

第1号水溜遺構土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 4 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量
- 5 にぶい褐色 ローム粒子中量、粘土ブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、微細量
- 7 明褐色 ロームブロック多量
- 8 にぶい褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック微量
- 9 褐色 ロームブロック・粘土粒子中量
- 10 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量
- 11 浅黄色 粘土ブロック中量、ローム粒子微量
- 12 暗褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック微量
- 13 灰褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 14 灰白色 粘土ブロック多量

第2号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 4 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック中量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子微量

第3号水溜遺構土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 粘土粒子多量、ロームブロック微量
- 3 暗褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック微量
- 4 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
- 6 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子微量
- 7 灰褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量

第4号水溜遺構土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 灰白色 ローム粒子・粘土粒子多量、砂粒中量
- 4 灰褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 暗褐色 粘土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量

- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 炭化粒子・粘土粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第5号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック多量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量

第6号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量
- 6 黒褐色 粘土ブロック微量
- 7 黒褐色 ロームブロック微量
- 8 オリーブ黒色 粘土粒子中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量

第7号水溜遺構土層解説

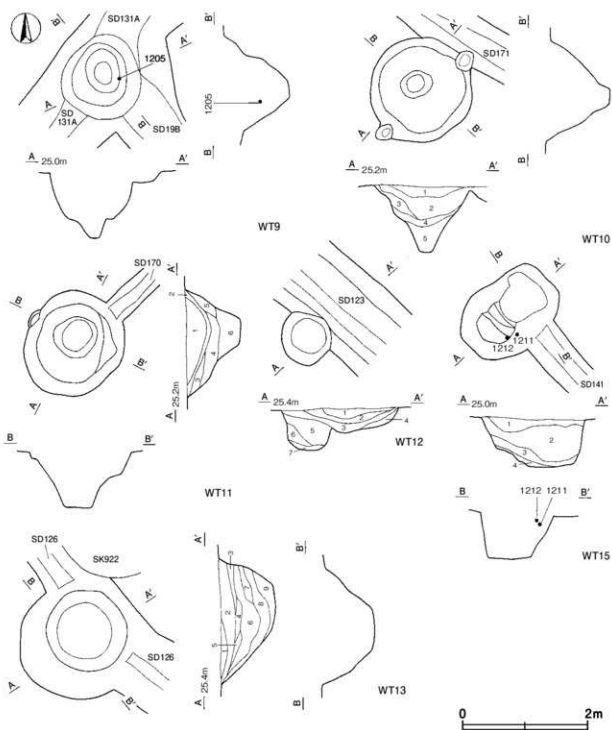
- 1 灰黄褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量

第8号水溜遺構土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
- 2 にぶい褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック微量
- 3 明褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量
- 4 明褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック微量

第10号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量



第329図 第9～13・15号水溜遺構実測図

第11号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

第12号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・砂粒微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子・砂粒少量

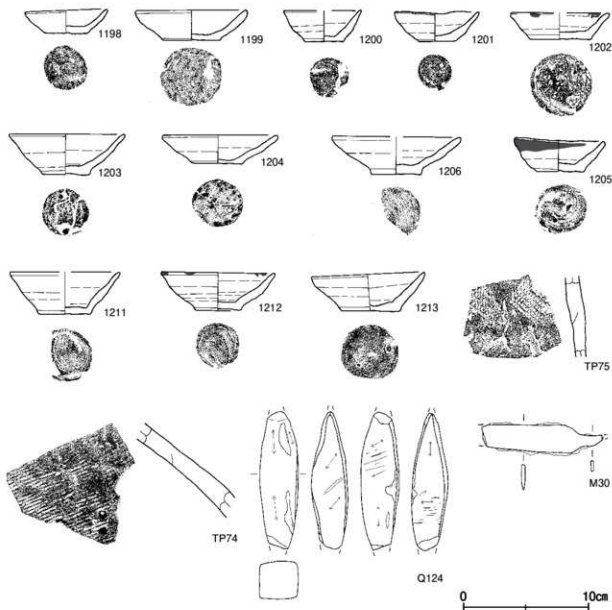
第13号水溜遺構土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量

- 8 暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子・砂粒微量
- 9 黒褐色 炭化物・ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量

第15号水溜遺構土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック微量
- 3 麻褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・砂粒少量



第330図 第1・3・5・8・9・13・15号水溜遺構出土遺物実測図

第1号水溜出土遺物観察表 (第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1198	土師器土器	皿	6.5	2.0	3.2	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面ロラロナダ 底部回転糸切 口縁ナダ 内面中央部凸出	覆土下層	100%
TP74	中世黒漆器	甕	—	(7.2)	—	長石・灰釉	キリーブ黒	良好	体部縁部の平行帯条 外面に灰釉を施す 内面輪襷裏	覆土中	十蔵山産*
TP75	陶器	甕	—	(6.4)	—	長石	にぶい・褐	良好	外部内面ナダ 押印文が不明 内面輪襷 裏	覆土中	常滑系

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
M30	刀子	(9.7)	2.3	0.3	(28.8)	鉄	先端部・基部欠損		覆土中	

第2号水溜遺構出土遺物観察表 (第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1199	土伽藍土器	甕	8.8	2.5	4.6	長石・石英・赤色 鉄屑・赤色鉄子	浅黄緑	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ家ナナデ	底面	80%

第3号水溜遺構出土遺物観察表 (第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1200	土伽藍土器	甕	(6.0)	2.5	3.2	長石・石英・赤色 鉄子	灰黄緑	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ中央部突出	覆土中	50%
1201	土伽藍土器	甕	6.6	2.3	2.9	長石・石英・赤色 鉄子	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ中央部から外周部 にかけて凹み	覆土下層	100%
1202	土伽藍土器	甕	[7.8]	2.2	5.0	長石・石英・赤色 鉄子	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ家ナナデ	底面	70% 11号部 池壁付近
1203	土伽藍土器	甕	9.0	3.3	3.7	長石・雲母・赤色 鉄子	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ家ナナデ	覆土中	50%

第5号水溜遺構出土遺物観察表 (第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1204	土伽藍土器	甕	8.9	2.4	4.0	長石・石英・赤色 鉄子	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ中央部突出	覆土上層	95%

第8号水溜遺構出土遺物観察表 (第330図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
Q124	磁石	(10.9)	3.2	2.9	128.3	磁灰岩	縦面4面 一部破断面		覆土中	

第9号水溜遺構出土遺物観察表 (第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1205	土伽藍土器	甕	7.0	2.7	3.8	長石・雲母・赤色 鉄子	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ中央部突出	覆土中層	90% 11号部 池壁付近

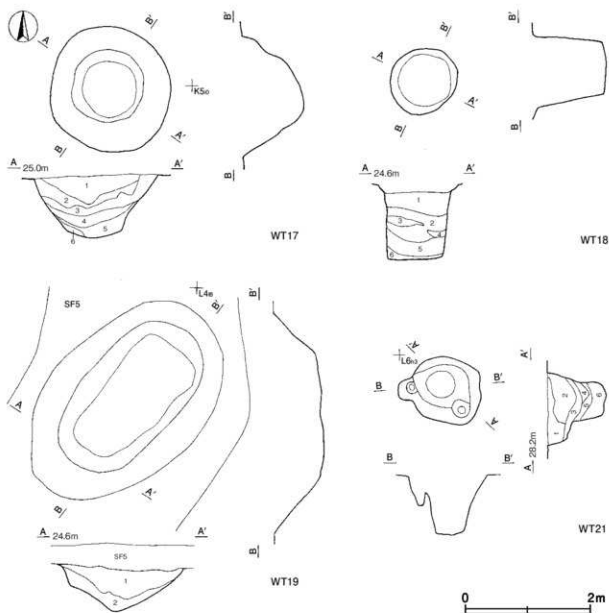
第13号水溜遺構出土遺物観察表 (第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1206	土伽藍土器	甕	[10.0]	3.1	[4.0]	長石・雲母・赤色 鉄子	浅黄	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ家ナナデ外周部凹み	覆土中	50%

第15号水溜遺構出土遺物観察表 (第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1211	土伽藍土器	甕	[8.6]	3.4	4.2	長石・雲母・赤色 鉄子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ外周部に凹み	覆土上層	50%
1212	土伽藍土器	甕	9.0	3.1	3.6	長石・石英・赤色 鉄子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ中央部突出	覆土上層	95% 11号部 池壁付近
1213	土伽藍土器	甕	9.0	3.1	4.5	長石・石英・赤色 鉄子	浅黄緑	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切 り後ノ家ナナデ 内底ノ中央部から外 周部にかけて凹み	覆土中	50%

イ 単独で位置する水溜遺構 (第331図)



第331図 第17～19・21号水溜遺構実測図

第17号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、炭化物微量
- 6 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・砂粒少量

第18号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 灰褐色 焼土ブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 6 暗褐色 焼土ブロック多量、砂粒少量

第19号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量

第21号水溜遺構土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 6 暗褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量

表23 中世水溜遺構一覧表

番号	位置	長軸(併方向)	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係 目→新 同時期・同時期)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)					
1	H 6 e2	N-27°-E	楕円形	5.94×3.78	75	縦斜	凸凹	人為	土師質土器、中葉須恵 土、陶器、刀子	本跡→SD215
2	H 7 c2	N-43°-E	不定形	1.78×1.43	98	縦斜・外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD235・237
3	1 7 a1	N-72°-W	楕円形	4.76×3.30	55	縦斜・外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD241
4	J 6 a4	N-68°-E	円形	2.36×2.12	136	縦斜・外傾	平坦	人為→自然	土師質土器、陶器	本跡→SD305
5	J 6 b6	N-78°-W	楕丸長方形	1.45×1.20	70	外傾	平坦	人為	土師質土器	本跡→SD321
6	L 5 g1	N-88°-E	楕円形	2.16×1.86	142	縦斜	溝状	自然	土師質土器	本跡→SD36
7	L 5 b1	N-22°-E	楕円形	1.29×1.05	132	縦斜・外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器	本跡→SD67→SD66
8	L 5 c2	N-55°-W	円形	1.78×1.75	87	縦斜	溝状	人為	土師質土器、磁石	本跡→SD67
9	L 5 e9	N-27°-W	不整形円形	1.30×1.28	106	縦斜・外傾	平坦	不明	土師質土器	本跡→SD131A-19B
10	L 5 a8	N-42°-W	円形	1.66×1.64	102	縦斜	平坦	自然	土師質土器	本跡→SD171
11	L 5 b0	N-29°-W	楕円形	1.72×1.68	86	縦斜	平坦	自然	土師質土器	本跡→SD170
12	L 6 d4	N-0°	円形	0.84×0.84	64	外傾	溝状	自然	—	本跡→SD123
13	L 6 k3	N-30°-E	円形	2.06×1.86	90	縦斜	平坦	自然	土師質土器	本跡→SD126→SK922
14	M 4 e6	N-44°-W	楕丸長方形	5.76×4.48	112	縦斜	凸凹	自然	土師質土器、陶器、磁 石、磨石	本跡→SD141→SD143・ PG3-SF4-SF5
15	M 5 d7	N-47°-E	楕円形	1.62×1.22	74	縦斜・外傾	平坦	自然	土師質土器	本跡→SD141
16	K 5 i3	N-45°-W	楕丸長方形	3.20×3.03	25	縦斜	平坦	人為→自然	土師質土器	—
17	K 5 i9	N-29°-W	円形	2.10×1.94	98	縦斜	溝状	自然	—	—
18	L 4 i6	N-9°-W	円形	1.12×1.02	112	垂直	平坦	人為	—	—
19	L 4 i7	N-38°-E	楕円形	3.68×2.42	90	縦斜	平坦	自然	土師質土器、陶器	本跡→SF5
20	L 6 g1	N-36°-W	楕円形	3.42×2.78	70-80	外傾	平坦	人為	土師質土器	—
21	L 6 k3	N-36°-W	不整形円形	1.20×1.13	94	外傾	平坦	人為	—	—

(6) 廃棄土坑

第1号廃棄土坑 (第332～336回)

位置 調査区中央部の167区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

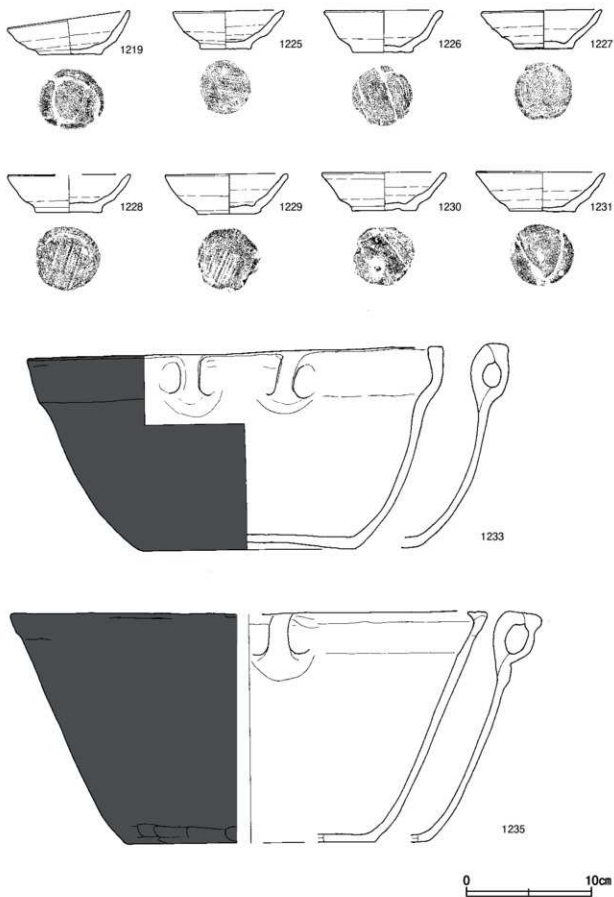
規模と形状 上面は径4.46mの円形である。確認面から漏斗状に30～40cm掘り込んだ後、中央部北寄りを長軸2.84m、短軸2.43m、深さ22～30cmの長方形に掘り込んでいる。底面はほぼ平坦で、壁は急な傾斜後、なだらかに立ち上がっている。

覆土 8層に分層される。1235(土師質土器内耳鍋)が覆土上層から底面にかけて散在して出土していることから、あまり時間を経ずに廃棄された多量の遺物とともに埋められたと考えられる。

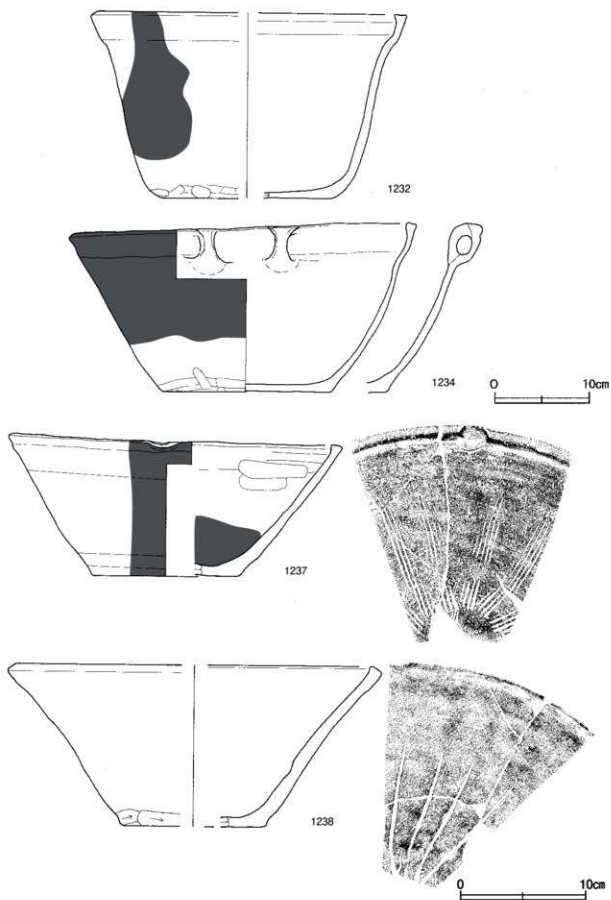
土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 褐色	粘土ブロック多量、焼土粒子微量
2 明黄褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ローム粒子中量
3 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
4 灰黄褐色	粘土粒子中量、焼土粒子微量	8 黄褐色	粘土ブロック多量、炭化物微量

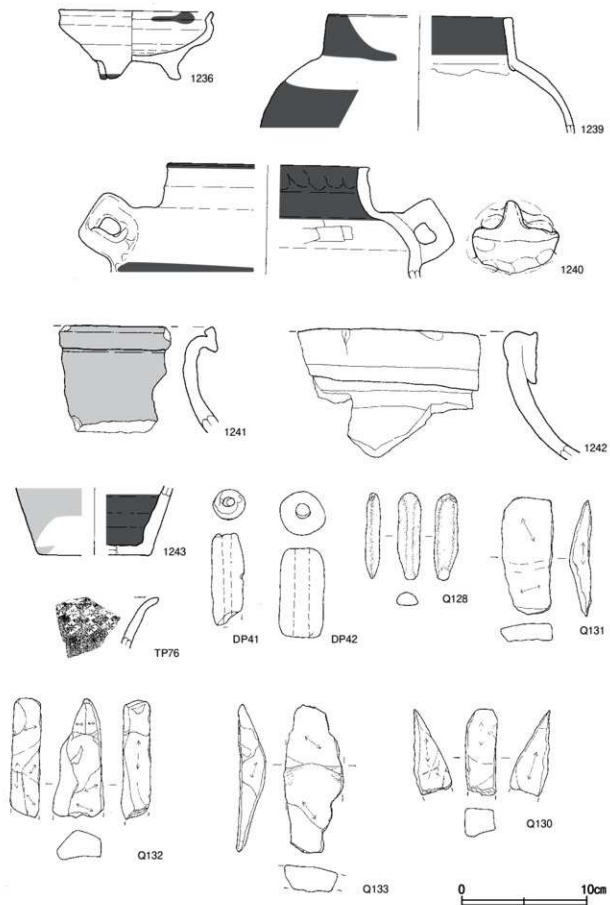
遺物出土状況 土師質土器片1412点(皿101、内耳鍋1262、甕1、播鉢34、香が9、茶釜5)、陶器片12点(瀬戸・美濃系飯類1、常滑系甕11)、土製品2点(管状土鉢)、石器11点(磨石1、茶臼1、石臼2、砥石6、不明1)、骨・骨粉のほか、混入した縄文土器片2点、土師器片3点、須恵器片7点、礫27点、鉄屑1点も出土している。ほとんどの遺物は、覆土上層の北西側に集中して出土していることから、主にこの方向から投棄されたと考えられる。遺物は、ほとんどが北側に集中し、残りは南側から出土している。1220・1230は北西部の覆土中層、



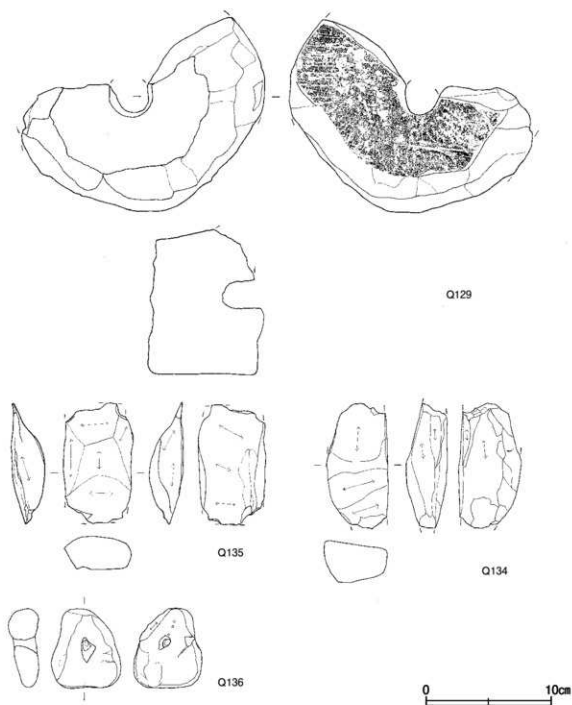
第333图 第1号庵楽土坑出土遺物実測図(1)



第334图 第1号廃棄土坑出土遺物実測图2)



第335图 第1号庵楽土坑出土遺物実測図(3)



第336図 第1号廃棄土坑出土遺物実測図(4)

第1号廃棄出土遺物観察表 (第332～336図)

番号	種別	器種	1径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1219	土製瓦土器	皿	9.6	3.5	5.0	長石・石英・赤色 粒子	灰白	普通	体部内・外面口タロナデ 底部回転糸切 号残ナマナデ 内底ナデ・横ナデ	覆土中層	100%
1220	土製瓦土器	皿	6.7	2.3	3.8	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面口タロナデ 底部回転糸切 号残ナマナデ 内底ナマナデ横ナ デ	覆土中層	95%
1221	土製瓦土器	皿	6.8	2.4	3.8	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい・黄橙	普通	体部内・外面口タロナデ 底部回転糸切 号残ナマナデ 内底ナマナデ横ナ デ	覆土中層	95%

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1222	土質土器	甕	7.0	2.5	3.8	長石・石英・雲母	浅黄	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ 内底・裏面中央部残ナデ	覆土中層	75% 11刃部埋付着
1223	土質土器	甕	7.3	2.4	4.6	長石・石英・赤色絵子	橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ 内底・裏面中央部残ナデ	覆土中層	80%
1224	土質土器	甕	7.4	2.1	4.6	長石・石英・赤色絵子	浅黄橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ 内底・裏面中央部残ナデ	覆土中層	90% 11刃部埋付着
1225	土質土器	甕	8.8	3.1	4.1	長石・石英・赤色絵子	にぶい・橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ スノコ状底面 内底残ナデ	覆土中層	100%
1226	土質土器	甕	9.4	3.4	4.8	長石・石英・赤色絵子	橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ 裏面中央部残ナデ	覆土上層	90%
1227	土質土器	甕	9.5	3.2	4.6	長石・石英・赤色絵子	橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ スノコ状底面 内底残ナデ	覆土中層	90%
1228	土質土器	甕	[96]	3.0	5.2	長石・石英・赤色絵子	橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ スノコ状底面 内底残ナデ	覆土上層	100%
1229	土質土器	甕	9.7	3.3	5.0	長石・雲母・赤色絵子	にぶい・黄橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ スノコ状底面 内底残ナデ 体部と底面との境目に凹み	覆土中層	60%
1230	土質土器	甕	9.8	3.0	5.1	長石・石英・赤色絵子	浅黄橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ 内底残ナデ 体部と底面との境目に凹み	覆土中層	95%
1231	土質土器	甕	10.2	3.1	5.2	長石・雲母・赤色絵子	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ 内底残ナデ 中央部凹み	覆土上層	90%
1232	土質土器	内耳罐	[30.0]	19.7	[18.0]	長石・石英・赤色絵子	橙	普通	体部内・外面ナデ 体部下層ヘラナデ・筒ナデ 底部外面圧痕	覆土上層	30% 外面保付着
1233	土質土器	内耳罐	32.9	16.2	17.1	長石・石英・赤色絵子	暗青	普通	体部内・外面ナデ 3内耳残存	覆土上層	90% 外面保付着
1234	土質土器	内耳罐	34.8	18.1	18.0	長石・石英・赤色絵子	暗青	普通	体部内・外面ナデ 体部下層残ナデ 2内耳残存	覆土上層	35% 外面保付着
1235	土質土器	内耳罐	[40.0]	18.3	[20.0]	長石・雲母・赤色絵子	暗青	普通	体部内・外面ナデ 体部下層ヘラナデ 1内耳残存 輪痕	覆土上層	35% 外面保付着
1236	土質土器	香炉	12.2	5.5	7.6	石英・雲母・赤色絵子	浅黄橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ 高肉貼り付け 内底残巻状のナデ	覆土上層	95%
1237	土質土器	播鉢	25.3	11.2	11.6	長石・石英・雲母・赤色絵子	にぶい・靑	普通	体部外面ナデ 体部下層2周の線ナデ 4条ノ草の線ナデ (口)は内外へつまみ出し後ナデ調整	覆土中層	60% 内・外面保付着
1238	土質土器	播鉢	[28.5]	12.9	[11.6]	長石・石英・赤色絵子	橙	普通	体部外面ナデ 体部下層ヘラナデ・筒ナデ 盛り付の線6条	覆土上層	30%
1239	土質土器	茶釜	[14.5]	(9.1)	—	長石・石英・雲母・赤色絵子	にぶい・橙	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転糸切り後ナデ 高肉貼り付け 内底残巻状のナデ	覆土上層	内・外面保付着
1240	土質土器	茶釜	[16.0]	(8.8)	—	長石・石英・雲母・赤色絵子	にぶい・黄橙	普通	体部外面ナデ後の引き調整 外面のみ輪痕	覆土上層	常滑系
1241	陶器	甕	[24.0]	(8.4)	—	長石・石英・輝・赤色絵子	暗赤陶	普通	11刃の縁部が垂下して底部に接合する 折り変じ部分に子刃の窪みあり 無釉触	覆土上層	常滑系
1242	陶器	甕	[22.0]	(10.2)	—	長石・石英・輝・赤色絵子	暗赤陶	普通	口口口口口口 体部外面に輪痕 底部に無付着	覆土上層	常滑系
1243	陶器	瓶	—	(5.6)	(9.0)	小礫・灰・釉	浅黄	普通	口口口口口口 体部外面に輪痕 底部に無付着	覆土上層	瀬戸・美濃系 内面保付着
TP76	土質土器	香炉	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母・赤色絵子	にぶい・靑	良好	体部内外面ナデ 体部外面2列のスタンピングス	覆土上層	

番号	器種	長さ	口径	幅	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP41	管状土鉢	7.3	0.7~0.8	2.6	(46.8)	土製	外面ナデ	覆土上層	
DP42	管状土鉢	7.1	1.2~1.3	3.7	(65.1)	土製	外面ナデ	覆土中層	

番号	器種	径・長さ	口径・幅	高さ・厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q128	磨石	6.9	1.9	1.1	22.1	凝灰岩	全面研磨	覆土中層	
Q129	磨石(上臼)	[21.4]	3.4	11.6	(302.7)	安山岩	上縁縁部掘り	覆土中層	
Q130	磨石	(6.8)	2.6	3.1	(58.7)	凝灰岩	砥面4面 他は破断面	覆土中層	
Q131	磨石	9.4	4.1	1.2	73.0	安山岩	砥面2面 他は破断面	覆土中	
Q132	磨石	(9.5)	4.1	2.3	(121.6)	安山岩	砥面3面 他は破断面	覆土中層	
Q133	磨石	(11.8)	(4.8)	2.2	(101.0)	凝灰岩	砥面2面 他は破断面	覆土中層	
Q134	磨石	(10.0)	5.0	3.3	(186.3)	安山岩	砥面3面 他は破断面	覆土上層	
Q135	磨石	(9.7)	3.6	2.8	(143.4)	安山岩	砥面4面 他は破断面	覆土中層	
Q136	不明な製品	6.3	3.4	2.6	111.8	安山岩	2方向からの穿孔	覆土中	2.6x3.4x2.6cmの穿孔 2方向から穿孔 1.2cmの穿孔 (P.12)

茨城県教育財団文化財調査報告第285集

上野古屋敷遺跡 1

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ

上 巻

平成19(2007)年3月19日 印刷

平成19(2007)年3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL. 029-225-6587

印刷 富士オフセット印刷株式会社
〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2
TEL. 029-231-4241/0

